

小諸市

KAMATAHARA

鎌田原遺跡

佐久市

CHIKATSU

近津遺跡群

小諸市

WADAHARA

和田原遺跡群

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—小諸市内・佐久市内 1—

2013. 3

国土交通省関東地方整備局  
長野県埋蔵文化財センター



近津遺跡群 7区全景と湧玉川の田切り



近津遺跡群から浅間山を仰ぐ



近津遺跡群



近津遺跡群

# はじめに

中部横断自動車道は、日本列島の中央部を横断し、広域高速道路ネットワークを形成し日本海側と太平洋側を結ぶ高速自動車国道です。既に長野県内でも佐久小諸ジャンクションから佐久南インターチェンジ間が供用され、地域の方々はもとより観光客にも広く利用されています。

本書に掲載する鎌田原遺跡、近津遺跡群、和田原遺跡群は、この供用された区間に所在し、平成13・14、18～21年度に発掘調査が行われました。本書はその発掘調査の成果を報告するものです。

浅間山麓の佐久平北部では、厚く堆積した軽石流により形成された台地を河川が浸食した「田切り地形」と呼ばれるこの地域独特の地形がみられます。こうした台地上には弥生時代から、平安時代にかけて、多くの遺跡が残されています。本書に掲載する3遺跡もこうした遺跡の一つで、湧玉川の田切りに面した台地縁辺に立地する遺跡です。

鎌田原遺跡と近津遺跡群では、古墳時代前期と平安時代後期の集落跡が発見されました。佐久平の古墳時代前期は、弥生時代後期に営まれていた大規模集落が小規模・分散化して、新たな場所に集落を形成していく時期にあたります。両遺跡でも小規模な集落が散在する様子が明らかとなりました。平安時代後期も同様で、周辺の台地上に営まれていた大規模な集落が律令体制の崩壊、社会情勢の変動と共に解体し、周辺に小さなムラが出現していくなかで成立した集落とみてとれます。和田原遺跡群では、検出された遺構は少ないものの、奈良時代における遺跡の一端を把握することができました。

調査内容の詳細につきましては、本書をご覧いただければと思いますが、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘から整理作業、本報告書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局の方々、長野県教育委員会や小諸市・小諸市教育委員会、佐久市・佐久市教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆様、そして発掘作業・整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。



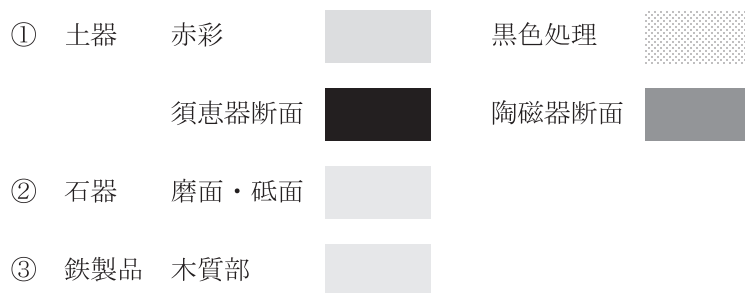
# 凡例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付してある。調査段階で欠番となっているものや整理作業において遺構として認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 実測図の遺物番号は、出土遺構ごとに付してある。遺構外から出土した遺物については、種類別に遺物番号を付した。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
  - (1) 遺構図  
調査区全体図 1 : 1,000 ~ 1 : 2,000 竪穴住居跡・周溝墓 1 : 80 炉・カマド等住居内施設・土坑・焼土跡 1 : 40 溝跡 1 : 100 ~ 1 : 200
  - (2) 遺物図  
土器・陶磁器 1 : 4 土器拓影 1 : 3 石鏃等小型石器 2 : 3 磨石・敲石等 1 : 3 台石等 1 : 6 金属製品 1 : 2 ~ 1 : 3
  - (3) 遺物写真は原則として遺物図と同じである。なお、写真図版では土製品・玉類等種類別にまとめて掲載したものがあある。
- 4 基本層序及び遺構埋土、観察表中の土器胎土の色調は「新版 標準土色帖」による。
- 5 実測図中のスクリーントーンは、下記のとおり使用した。これ以外の場合は該当箇所で説明してある。

## (1) 遺構図



## (2) 遺物図



## (3) 出土土器集計表

器種 種類	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系	その他					カ・ホノ類	カサ・ハチ類				
個体	15	1	3	3	82	1	1	39			13				
重量(g)	149	136		1769	186	504				75				10	紡錘車1(66g)



# 目次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

本文目次

挿図目次

挿表目次

## 第1章 調査に至る経緯

第1節 事業の概要と保護協議	1
1. 中部横断自動車道の事業計画	1
2. 埋蔵文化財の保護協議と調査	1
3. 文化財保護法の手続き	5
第2節 発掘作業と整理作業の体制	5

## 第2章 調査の経過

第1節 発掘作業の経過	6
1. 発掘作業の方法	6
(1) 遺跡名称と遺跡記号 (2) 遺構名称と遺構記号 (3) 調査区(グリッド)の設定と呼称	
(4) 遺構の発掘 (5) 遺跡の公開	
2. 日誌抄	8
第2節 整理作業の経過	9
1. 整理作業の方法	9
(1) 基礎整理作業 (2) 本格整理作業 (3) 資料の収納	
2. 日誌抄	10

## 第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	15

## 第4章 鎌田原遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要	21
1. 遺跡の概観	21
2. 調査の概要	23
3. 基本層序	23
第2節 遺構と遺物	26
1. 竪穴住居跡	26
2. 土坑	44
3. 遺構外出土の遺物	47
第3節 小結	48

第5章 近津遺跡群	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	55
1. 遺跡の概観	55
2. 調査の概要	58
3. 基本層序	59
第2節 遺構と遺物	61
1. 竪穴住居跡・竪穴状遺構	61
2. 円形周溝墓	132
3. 土坑	135
4. 焼土跡	149
5. 溝跡	151
6. 小穴群	153
7. 不明遺構	155
8. 遺構外出土の遺物	156
第3節 小結	160
第6章 和田原遺跡群	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	177
1. 遺跡の概観	177
2. 調査の概要	179
3. 基本層序	179
第2節 遺構と遺物	180
1. 竪穴住居跡	180
2. 土坑	181
3. 溝跡	183
第3節 小結	185
第7章 科学分析	
1. 放射性炭素年代測定	187
(1) 分析目的	
(2) 分析試料・結果概要	
第8章 総括	188

写真図版

抄録



## 挿 図 目 次

第 1 図 中部横断自動車道 路線図と遺跡…………… 3	第 43 図 SB5011 遺物図……………71
第 2 図 グリッドの呼称…………… 7	第 44 図 SB6001 遺構図……………71
第 3 図 中部横断自動車道 遺跡位置図 (佐久小諸 JCT～佐久南 IC 間)……………12	第 45 図 SB6001 遺物図……………72
第 4 図 佐久周辺地質図……………13	第 46 図 SB6002 遺構図・遺物図……………73
第 5 図 田切り・低地……………14	第 47 図 SB6003 遺構図……………74
第 6 図 周辺の遺跡分布図……………17	第 48 図 SB6004 遺構図……………76
第 7 図 鎌田原遺跡 遺跡範囲図と地区設定図……………21	第 49 図 SB6004 遺物図……………77
第 8 図 1・2 区 トレンチ配置図……………22	第 50 図 SB6005 遺構図・遺物図……………78
第 9 図 1 区 全体図・基本層序……………24	第 51 図 SB6006 遺構図・遺物図……………79
第 10 図 3 区 全体図・基本層序……………25	第 52 図 SB6007 遺構図……………80
第 11 図 SB01 遺構図・遺物図……………27	第 53 図 SB6007 遺物図……………81
第 12 図 SB03 遺構図・遺物図……………28	第 54 図 SB7001 遺構図・遺物図……………82
第 13 図 SB05 遺構図……………29	第 55 図 SB7003 遺構図……………83
第 14 図 SB05 遺物図……………30	第 56 図 SB7003 遺物図……………84
第 15 図 SB06 遺構図・遺物図……………31	第 57 図 SB7004 遺構図・遺物図……………86
第 16 図 SB07 遺構図……………32	第 58 図 SB7005 遺構図・遺物図……………87
第 17 図 SB07 遺物図……………33	第 59 図 SB7006 遺構図・遺物図……………88
第 18 図 SB08 遺構図……………34	第 60 図 SB7007 遺構図……………89
第 19 図 SB09 遺構図……………35	第 61 図 SB7007 遺物図……………90
第 20 図 SB09 遺物図……………36	第 62 図 SB7008 遺構図・遺物図……………91
第 21 図 SB10 遺構図・遺物図……………37	第 63 図 SB7009 遺構図……………92
第 22 図 SB02 遺構図……………38	第 64 図 SB7010 遺構図・遺物図……………93
第 23 図 SB04 遺構図・遺物図……………39	第 65 図 SB7011 遺構図・遺物図……………95
第 24 図 SB11 遺構図……………39	第 66 図 SB7012 遺構図……………96
第 25 図 SB11 遺物図……………40	第 67 図 SB7012 遺物図……………97
第 26 図 SB12 遺構図……………41	第 68 図 SB7013 遺構図・遺物図……………98
第 27 図 SB12 遺物図……………42	第 69 図 SB7015 遺構図……………99
第 28 図 SB13 遺構図……………43	第 70 図 SB8004 遺構図・遺物図…………… 100
第 29 図 SK 遺構図……………45	第 71 図 SB8005 遺構図…………… 101
第 30 図 SK・遺構外 遺物図……………48	第 72 図 SB8005 遺物図…………… 102
第 31 図 近津遺跡群 遺跡範囲図と地区設定図……………55	第 73 図 SX5002 遺構図…………… 103
第 32 図 地形図・基本層序……………56	第 74 図 SX5002 遺物図…………… 104
第 33 図 遺構全体図……………60	第 75 図 SB2001 遺構図…………… 105
第 34 図 SB4002 遺構図……………61	第 76 図 SB2001 遺物図…………… 106
第 35 図 SB4002 遺物図……………62	第 77 図 SB3001 遺構図・遺物図…………… 107
第 36 図 SB4003 遺構図・遺物図……………63	第 78 図 SB8001 遺構図…………… 108
第 37 図 SB5003 遺構図・遺物図……………64	第 79 図 SB8001 遺物図…………… 109
第 38 図 SB5004 遺構図・遺物図……………66	第 80 図 SB8003 遺構図・遺物図…………… 111
第 39 図 SB5009 遺構図……………67	第 81 図 SB8002 遺構図…………… 112
第 40 図 SB5009 遺物図……………68	第 82 図 SB8002 遺物図…………… 113
第 41 図 SB5010 遺構図・遺物図……………69	第 83 図 SB1002 遺構図・遺物図…………… 114
第 42 図 SB5011 遺構図……………70	第 84 図 SB4001 遺構図…………… 115
	第 85 図 SB4001 遺物図…………… 116

第 86 図	SB4005	遺構図	117	第 107 図	SK4004・4006・6001～6006・7001・		
第 87 図	SB4005	遺物図	118		7003・7004・8003・8004	遺構図	145
第 88 図	SB4007	遺構図	120	第 108 図	SK1006～1008・4005・4007・5002・		
第 89 図	SB4007	遺物図	121		8001	遺構図	147
第 90 図	SB5001	遺構図	122	第 109 図	SK	遺物図	148
第 91 図	SB5001	遺物図	123	第 110 図	SF	遺構図・遺物図	150
第 92 図	SB5006	遺構図	124	第 111 図	SD	遺構図	152
第 93 図	SB5006	遺物図	125	第 112 図	ST7001	遺構図	154
第 94 図	SB5008	遺構図・遺物図	126	第 113 図	SX4001	遺構図	154
第 95 図	SB5012	遺構図・遺物図	127	第 114 図	SX5001	遺構図・遺物図	155
第 96 図	SB5013	遺構図	128	第 115 図	遺構外	遺物図(1)	157
第 97 図	SB5013	遺物図	129	第 116 図	遺構外	遺物図(2)	158
第 98 図	SB7002	遺構図・遺物図	130	第 117 図	遺構外	遺物図(3)	159
第 99 図	SB1001	遺構図	131	第 118 図	時代別遺構分布図		163
第 100 図	SB5002	遺構図	131	第 119 図	和田原遺跡群	遺跡範囲図	178
第 101 図	SM4001	遺構図	132	第 120 図	トレンチ配置図・基本層序		178
第 102 図	SM4002	遺構図	133	第 121 図	全体図		179
第 103 図	SM4002	遺物図	134	第 122 図	SB01	遺構図	181
第 104 図	SK1003・1004・2001・2003	遺構図	137	第 123 図	SB01	遺物図	182
第 105 図	SK1005・2002・3001・7005・8005	遺構図	139	第 124 図	SK	遺構図	183
第 106 図	SK4001～4003・4008・5001・6007・			第 125 図	SD01～04	遺構図・遺物図	184
	6008・7002	遺構図	141	第 126 図	佐久平の弥生後期・古墳前期の遺跡		191

## 挿 表 目 次

第 1 表	事業と保護協議・調査の経過	2	第 20 表	SB13	出土土器集計表	43	
第 2 表	佐久小諸 JCT～佐久南 IC 間調査経過	4	第 21 表	住居跡一覧	50		
第 3 表	文化財保護法手続き	5	第 22 表	土坑一覧	50		
第 4 表	調査体制	5	第 23 表	土器観察表(1)	51		
第 5 表	周辺遺跡一覧(1)	18	第 24 表	土器観察表(2)	52		
第 6 表	周辺遺跡一覧(2)	19	第 25 表	石器観察表	53		
第 7 表	周辺遺跡一覧(3)	20	第 26 表	SB4002	出土土器集計表	61	
第 8 表	SB01	出土土器集計表	27	第 27 表	SB4003	出土土器集計表	63
第 9 表	SB03	出土土器集計表	28	第 28 表	SB5003	出土土器集計表	64
第 10 表	SB05	出土土器集計表	29	第 29 表	SB5004	出土土器集計表	66
第 11 表	SB06	出土土器集計表	31	第 30 表	SB5009	出土土器集計表	67
第 12 表	SB07	出土土器集計表	32	第 31 表	SB5010	出土土器集計表	69
第 13 表	SB08	出土土器集計表	34	第 32 表	SB5011	出土土器集計表	70
第 14 表	SB09	出土土器集計表	35	第 33 表	SB6001	出土土器集計表	72
第 15 表	SB10	出土土器集計表	37	第 34 表	SB6002	出土土器集計表	73
第 16 表	SB02	出土土器集計表	38	第 35 表	SB6003	出土土器集計表	74
第 17 表	SB04	出土土器集計表	39	第 36 表	SB6004	出土土器集計表	76
第 18 表	SB11	出土土器集計表	39	第 37 表	SB6005	出土土器集計表	78
第 19 表	SB12	出土土器集計表	41	第 38 表	SB6006	出土土器集計表	79

第 39 表	SB6007	出土土器集計表	80	第 67 表	SB5012	出土土器集計表	127
第 40 表	SB7001	出土土器集計表	82	第 68 表	SB5013	出土土器集計表	129
第 41 表	SB7003	出土土器集計表	83	第 69 表	SB7002	出土土器集計表	130
第 42 表	SB7004	出土土器集計表	86	第 70 表	SD	出土土器集計表	153
第 43 表	SB7005	出土土器集計表	87	第 71 表	SX4001	出土土器集計表	154
第 44 表	SB7006	出土土器集計表	88	第 72 表	SX5001	出土土器集計表	155
第 45 表	SB7007	出土土器集計表	89	第 73 表	住居跡一覽		164
第 46 表	SB7008	出土土器集計表	91	第 74 表	土坑一覽		165
第 47 表	SB7009	出土土器集計表	92	第 75 表	土器観察表(1)		166
第 48 表	SB7010	出土土器集計表	93	第 76 表	土器観察表(2)		167
第 49 表	SB7011	出土土器集計表	94	第 77 表	土器観察表(3)		168
第 50 表	SB7012	出土土器集計表	96	第 78 表	土器観察表(4)		169
第 51 表	SB7013	出土土器集計表	98	第 79 表	土器観察表(5)		170
第 52 表	SB7015	出土土器集計表	99	第 80 表	土器観察表(6)		171
第 53 表	SB8004	出土土器集計表	100	第 81 表	土器観察表(7)		172
第 54 表	SB8005	出土土器集計表	101	第 82 表	土器観察表(8)		173
第 55 表	SX5002	出土土器集計表	104	第 83 表	石器観察表(1)		173
第 56 表	SB2001	出土土器集計表	105	第 84 表	石器観察表(2)		174
第 57 表	SB3001	出土土器集計表	107	第 85 表	金属製品観察表(1)		175
第 58 表	SB8001	出土土器集計表	109	第 86 表	金属製品観察表(2)		176
第 59 表	SB8003	出土土器集計表	111	第 87 表	近津遺跡群出土人骨の歯の計測値		176
第 60 表	SB1002	出土土器集計表	114	第 88 表	SB01	出土土器集計表	181
第 61 表	SB4001	出土土器集計表	115	第 89 表	SD04	出土土器集計表	184
第 62 表	SB4005	出土土器集計表	118	第 90 表	住居跡一覽		186
第 63 表	SB4007	出土土器集計表	121	第 91 表	土坑一覽		186
第 64 表	SB5001	出土土器集計表	122	第 92 表	土器観察表		186
第 65 表	SB5006	出土土器集計表	125	第 93 表	石器観察表		186
第 66 表	SB5008	出土土器集計表	126				

## 写 真 図 版

鎌田原遺跡…………… PL1 ～ 8  
 近津遺跡群…………… PL9 ～ 40

和田原遺跡群…………… PL41 ～ 44

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 事業の概要と保護協議

### 1. 中部横断自動車道の事業計画

中部横断自動車道は、日本列島の中央部を横断するように静岡県から山梨県を経て長野県を結ぶ国土開発幹線自動車道である。静岡県静岡市を起点とし、山梨県甲斐市を経由し、中央自動車道と一部重複し、長野県小諸市に至る、延長約132kmが高速自動車国道として整備される。これにより上信越自動車道を介して日本海側地域と太平洋側地域が高速自動車道網で結ばれると共に、上信越自動車道・北関東自動車道と一体となり、東京から放射状に延びる東名・新東名高速道路・中央自動車道・関越自動車道・東北自動車道・常磐自動車道と接続した「関東大環状連携軸」のネットワークが形成される。

中部横断自動車道の長野県内分は約45kmで、小諸市の佐久小諸ジャンクション（以下 JCT）で上信越自動車道と連結する。

中部横断自動車道の事業経緯や埋蔵文化財の保護・調査などについては第1表にまとめた。

本事業は、昭和62年6月に高規格幹線道路網として閣議決定され、同年9月、静岡県清水市（現静岡市）～長野県佐久市の間が国土開発幹線自動車道の新規追加路線として決定された。平成3年12月に長野県八千穂村（現佐久穂町）～佐久市の約23km間が基本計画決定され、平成8年12月、佐久南インターチェンジ（以下 IC）～佐久小諸 JCT の約8km間が上信越自動車道の追加インターとして整備計画決定された。

整備計画の決定を受け、平成10年4月、日本道路公団（当時）に対し同区間の施工命令が出され、事業が本格化した。また、同年12月には同区間を含む八千穂村から佐久市間の整備計画が決定された。

その後、平成15年12月の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、新直轄方式に切り替わる区間の整備計画の変更が審議・議決され、翌16年1月八千穂 IC（仮称）～佐久小諸 JCT 間は新直轄方式での整備計画に変更された。新直轄方式の整備計画では国が4分の3、地方が4分の1の負担により、国土交通省が直轄事業として高速自動車道を整備し、完成後は無料開放される。

この整備計画の変更により日本道路公団への施工命令は撤回され、平成18年度からは国土交通省関東地方整備局の直轄事業として事業は進められている。平成23年3月、中部横断自動車道長野県内分としては初めて佐久南 IC～佐久小諸 JCT 間の供用が開始された。この供用開始に伴い佐久市街地の交通混雑の緩和などの効果が上がっている。尚、八千穂 IC（仮称）～佐久南 IC 間は埋蔵文化財の調査と並行して本体工事も合わせて実施されている。

### 2. 埋蔵文化財の保護協議と調査

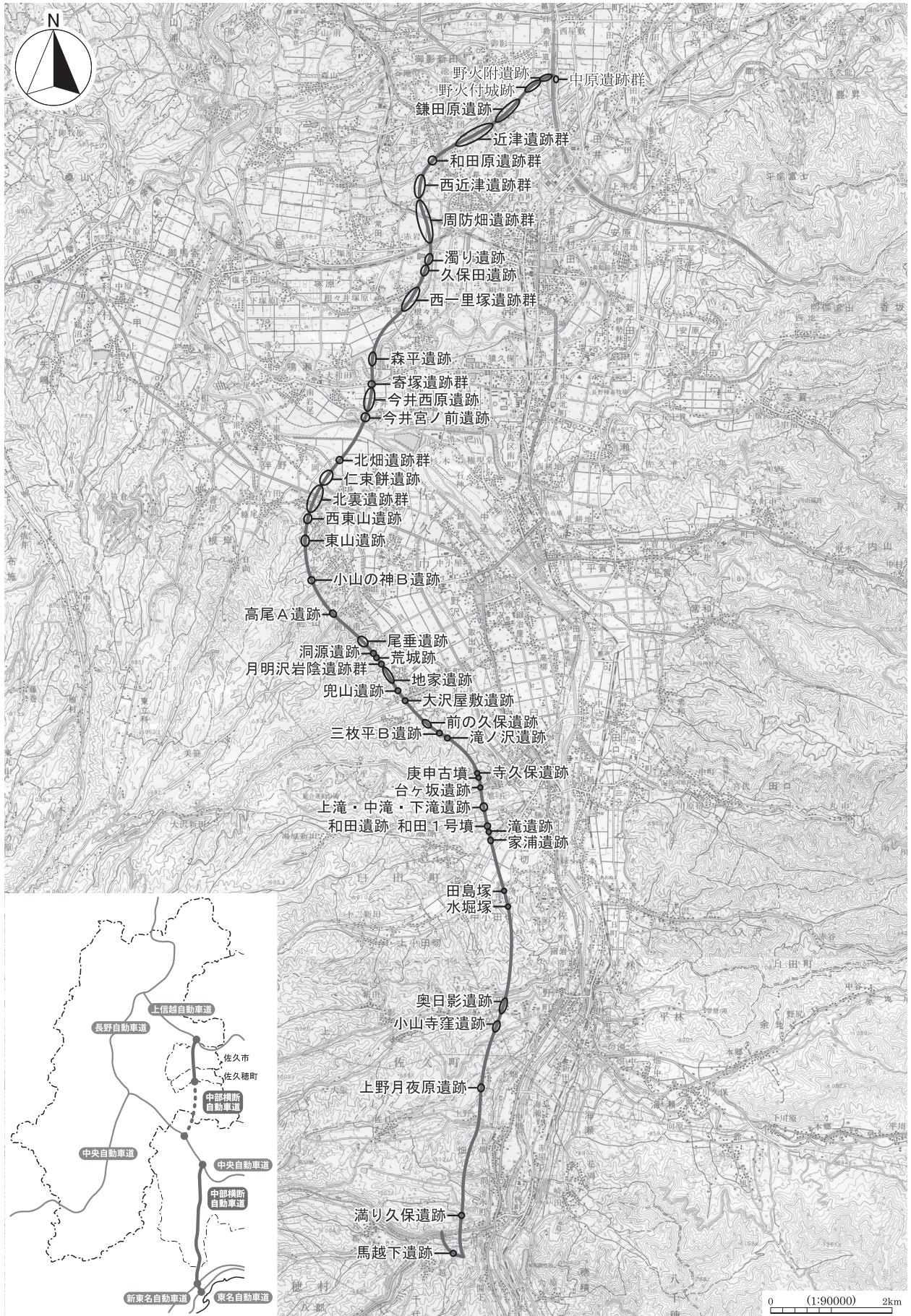
長野県教育委員会（以下 県教委）は平成3年の中部横断自動車道八千穂村～佐久市間の基本計画決定を受け、平成6年度から建設予定地内の埋蔵文化財保護のため、予想されるルート幅1km前後を関係市町村教育委員会（以下 教委）の協力のもと、遺跡の位置確認などの詳細分布調査や遺跡隣接地での試掘調査等を実施した（県教委 1997・2000・2003・2007）。

佐久南 IC～佐久小諸 JCT 間の埋蔵文化財については、平成11年日本道路公団と文化庁、日本道路公

第1章 調査に至る経緯

年	事業	埋文	調査遺跡	整理遺跡	契約先
S62 (1987)	6.30 高規格幹線道路網として閣議決定 9.1 静岡県清水市(現静岡市)～長野県佐久市 L132km 国土開発幹線自動車道の新規追加予定路線として決定				
H3 (1991)	12.20 八千穂村(現佐久穂町)～佐久市 L23km 基本計画決定				
H6 (1994)		県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 (仮)八千穂IC～佐久小諸JCT			
H8 (1996)	12.27 佐久南IC～佐久小諸JCT L8km 整備計画決定<上信越自動車道の追加ICとして>				
H9 (1997)	2.5 山梨県長坂町(現北杜市)～八千穂村 L38km 基本計画決定				
H10 (1998)	4.8 佐久南IC～佐久小諸JCT L8km 施工命令 <日本道路公団へ> 12.25 八千穂村～佐久市 L23km 整備計画決定(佐久南IC～佐久小諸JCT間含む)	県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 (仮)八千穂IC～佐久小諸JCT			
H11 (1999)		佐久南IC～佐久小諸JCT 埋蔵文化財保護協議 (日本道路公団、文化庁、県教委) 日本道路公団:文化財保護法第57条の3通知 (東建用管第462号 12.13) 文化庁:勧告<記録保存の決定>(委保第45の2 H12.2.7)			
H12 (2000)		県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 (仮)八千穂IC～佐久南IC 県教委 試掘調査(野火附遺跡隣接地 遺跡範囲拡大)			
H13 (2001)		県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 山梨県境～(仮)八千穂IC 県教委 試掘調査(野火附遺跡隣接地 遺跡範囲拡大)	鎌田原遺跡		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H14 (2002)		県教委 試掘調査(北畑遺跡群隣接地 遺跡範囲拡大)	野火附遺跡 野火付城跡 鎌田原遺跡		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H15 (2003)	12.25 (第1回国幹会議)新直轄方式に切り替わる区間とする整備計画一部変更議案の審議・議決	県教委 試掘調査(西一里塚遺跡群隣接地 遺跡範囲拡大)	野火附遺跡 北畑遺跡群		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H16 (2004)	1.30 八千穂IC(仮)～佐久小諸JCT L23km 整備計画の変更(新直轄方式へ) <日本道路公団への施工命令撤回>	佐久南IC～佐久小諸JCT埋蔵文化財保護協議 (国土交通省関東地方整備局、日本道路公団東京建設局、県教委) 発掘調査における行政手続きについて確認書締結 <日本道路公団が責を負う> 4.1 日本道路公団、県教委、文化振興事業団(埋蔵文化財センター)で協定書締結 埋文センターと道路公団との契約に変更 県教委 試掘調査(森平遺跡新発見)	中原遺跡群 野火附遺跡 野火付城跡 西一里塚遺跡群 寄塚遺跡群 今井西原遺跡		日本道路公団 東京建設局
H17 (2005)	10.1 日本道路公団民営化 (東日本高速道路株式会社が権利義務を継承)	県教委 試掘調査(濁り遺跡隣接地 久保田遺跡新発見)	西一里塚遺跡群 森平遺跡		日本道路公団 東京建設局 (東日本高速道路株式会社)
H18 (2006)	国土交通省関東地方整備局による直接事業化	国土交通省:文化財保護法第94条の通知<佐久南IC～佐久小諸JCT間含む>(長国調第14号 4.5) 県教委:勧告<記録保存>(18教文第18-33号 6.8) 国土交通省・県教委・文化振興事業団3者協定締結(4.18) H18年度より国土交通省関東地方整備局との契約に変更 県教委(仮)八千穂IC～佐久南IC 現況確認・現地踏査	和田原遺跡群 西近津遺跡群 周防畑遺跡群 濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群 森平遺跡 今井宮の前遺跡		国土交通省 関東地方整備局
H19 (2007)		佐久南IC以南の調査着手	近津遺跡群 西近津遺跡群 周防畑遺跡群 濁り遺跡 今井宮の前遺跡 北畑遺跡群		国土交通省 関東地方整備局
H20 (2008)			近津遺跡群 西近津遺跡群		国土交通省 関東地方整備局
H21 (2009)		佐久南IC～佐久小諸JCT本格整理作業開始	鎌田原遺跡 近津遺跡群 周防畑遺跡群	西近津遺跡群 西一里塚遺跡群他	国土交通省 関東地方整備局
H22 (2010)				近津遺跡群他 西近津遺跡群 西一里塚遺跡群他	国土交通省 関東地方整備局
H23 (2011)	3.26 佐久小諸JCT～佐久南IC間 供用開始			近津遺跡群他 西近津遺跡群 西一里塚遺跡群他	国土交通省 関東地方整備局
H24 (2012)				近津遺跡群他 西近津遺跡群 森平遺跡他	国土交通省 関東地方整備局

第1表 事業と保護協議・調査の経過



第1図 中部横断自動車道 路線図と遺跡

団と県教委との保護協議により、記録保存が決定された。これに伴う発掘調査は県教委が日本道路公団から委託を受け、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター(以下 埋文センター)に再委託して実施することとなり、平成13年度から発掘調査が開始された。

平成16年、整備計画の変更に伴い国土交通省関東地方整備局・日本道路公団・県教委の三者による保護協議がもたれ、発掘調査における行政手続は日本道路公団が責を負うことが確認された。これを受けて、日本道路公団・県教委・埋文センターの三者により、中部横断自動車道(佐久～佐久南)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書が締結され、同年度から日本道路公団と埋文センターが契約を結ぶことに変更された。平成17年10月、日本道路公団の民営化により、権利義務は東日本高速道路株式会社に引き継がれた。

平成18年4月、中部横断自動車道建設事業を国土交通省関東地方整備局が直轄で実施することに伴い、佐久小諸JCT～八千穂IC(仮称)間の埋蔵文化財について文化財保護法第94条の通知が提出され、県教委により記録保存が決定された。合わせて、国土交通省関東地方整備局・県教委・埋文センターとで中部横断自動車道(佐久JCT～八千穂IC)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施に関する協定書が結ばれ、当年度から国土交通省関東地方整備局と埋文センターが契約を結ぶこととなった。

中部横断自動車道佐久小諸JCT～佐久南IC間約8kmでは、16遺跡が調査対象とされた(第1・3図)。調査は平成13年度の鎌田原遺跡から着手され、随時用地取得の終了した遺跡や工事工程が急がれる遺跡から調査が進められた。毎年数遺跡の調査を実施し、同区間の調査は平成21年度に全て終了した。

整理作業は平成21年度から着手し、濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群の3遺跡については平成23年度に報告書を刊行している(第2表)。

なお、佐久小諸JCT～小諸御影料金所間は東日本高速道路株式会社の事業区間とされ、この間に所在する中原遺跡群・野火附遺跡・野火付城跡の3遺跡については同会社事業として整理作業を行い、報告書を刊行している(埋文センター 2009)。

また、佐久南IC～八千穂IC(仮称)間に所在する遺跡については平成19年度から調査を着手している。

遺跡名	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	
中原遺跡群													JCT～小諸御影料金所間、東日本高速道路(株)で報告書刊行済み
野火附遺跡													
野火付城跡													
1 鎌田原遺跡													『中部横断道1』本報告
2 近津遺跡群													
3 和田原遺跡群													
4 西近津遺跡群													
5 周防畑遺跡群													
6 濁り遺跡													『中部横断道4』で刊行済み
7 久保田遺跡													
8 西一里塚遺跡群													
9 森平遺跡													
10 寄塚遺跡群													
11 今井西原遺跡													
12 今井宮の前遺跡													
13 北畑遺跡群													

第2表 佐久小諸JCT～佐久南IC間調査経過

発掘
  整理

### 3. 文化財保護法の手続き

本報告書に掲載した遺跡の文化財保護法に基づく届け出等の手続きは以下の表のとおりである。

	発掘届		県教委指示		発見届		文化財認定	
	文書番号	日付	文書番号	日付	発見届	日付	文書番号	日付
鎌田原遺跡 (H13)	13長埋第51号	H13.12.3	13教文第4-22号	H13.12.4	13長埋第69-1号	H14.3.26	13教文第6-114号	H14.4.5
鎌田原遺跡 (H14)	14長埋第3-1号	H14.4.1	14教文第4-1号	H14.4.11	14長埋第77-1号	H15.2.21	14教文第6-100号	H15.3.18
鎌田原遺跡 (H21)	21長埋第1-6号	H21.9.16	21教文第6-13号	H21.9.25	21長埋第2-9号	H21.11.5	21教文第20-92号	H21.11.17
近津遺跡群 (H19)	19長埋第8-7号	H19.7.26	19教文第4-6号	H19.7.31	19長埋第9-20	H19.12.25	19教文第6-110号	H20.1.8
近津遺跡群 (H20)	19長埋第8-13号	H20.2.29	19教文第4-12号	H20.3.25	20長埋第2-10号	H20.12.24	20教文第26-122号	H21.1.16
近津遺跡群 (H21)	20長埋第1-12号	H21.3.2	20教文第6-17号	H21.3.5	21長埋第2-13号	H21.12.22	21教文第20-112号	H22.1.7
和田原遺跡群 (H18)	18長埋第12-25号	H18.3.22	18教文第4-6号	H18.4.6	18長埋第2-7号	H18.9.22	18教文第6-65号	H18.10.5

第3表 文化財保護法手続き

## 第2節 発掘作業と整理作業の体制

本報告書掲載の3遺跡に関する調査・整理体制は以下の表のとおりである。

	H13	H14	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
所長	深瀬弘夫	深瀬弘夫	仁科松男	仁科松男	仁科松男	仁科松男	窪田久雄	窪田久雄	窪田久雄
副所長	春日光男	原 聖	根岸誠司	根岸誠司	丑山修一	阿部精一	阿部精一	阿部精一	会津敏男
管理部長補佐	田中照幸	田中照幸							佐藤国昭
管理課長								窪田秀樹	窪田秀樹
管理係長			山崎勇治	山崎勇治	窪田秀樹	窪田秀樹	窪田秀樹	西澤宏明	
調査部長	小林秀夫	小林秀夫	市澤英利	平林 彰	平林 彰	平林 彰	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭
担当課長	百瀬長秀	廣瀬昭弘	上田典男	寺内隆夫	寺内隆夫	大竹憲昭	岡村秀雄	岡村秀雄	岡村秀雄
担当調査研究員	川崎 保	宇賀神誠司	柳澤 亮	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘
	白田広之	櫻井秀雄		櫻井秀雄	寺澤政俊	寺澤政俊			曳地隆元
					黒坂禎二	櫻井秀雄			
					清水梨代	清水梨代			
						大澤泰智			

第4表 調査体制



## 第2章 調査の経過

### 第1節 発掘作業の経過

#### 1. 発掘作業の方法

長野県埋蔵文化財センターでは調査に対する共通認識や調査方法の統一を図るため「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査にあたってはこれに準じて実施している。

##### (1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は以下のとおりである。

- |                    |          |
|--------------------|----------|
| ○鎌田原遺跡（かまたはらいせき）   | 遺跡記号：DKT |
| ○近津遺跡群（ちかついせきぐん）   | 遺跡記号：DCT |
| ○和田原遺跡群（わだはらいせきぐん） | 遺跡記号：DWD |

遺跡記号は、調査記録の便宜を図るためアルファベット3文字で表したものである。1文字目の「D」は長野県内を9地区に分割した佐久地区を示し、2文字目・3文字目は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。各種記録類や遺物注記にはこの記号を用いている。

##### (2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、調査記録の便宜を図るため記号を用いた。但し、遺構名称は平面形や遺物分布状況等から検出時に決定するため、遺構の種類や性格と適合しない場合がある。

遺構記号は、時代などに関わらず種類毎、検出順に付した。近津遺跡群では調査区が長く、各地区とも分割調査となったため、混乱を避け、後の整理作業の利便を考慮して地区毎に付した。調査の結果、遺構でないことが判明したものは欠番とした。

今回の調査で用いた遺構記号には以下の種類がある。

SB：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。【**竪穴住居跡、竪穴状遺構**】

ST：SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。【**掘立柱建物跡**】

SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形のもの。【**周溝墓**】

SK：単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBより小さな掘り込み。【**土坑、陥し穴**】

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。【**火床**】

SD：溝状の掘り込み。【**溝跡**】

SX：上記に帰した以外の不明遺構。

##### (3) 調査区（グリッド）の設定と呼称

国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点（X = 0.0000、Y = 0.0000）を基点に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これを元に、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、大々地区、大地区、中地区に区画した（第2図）。

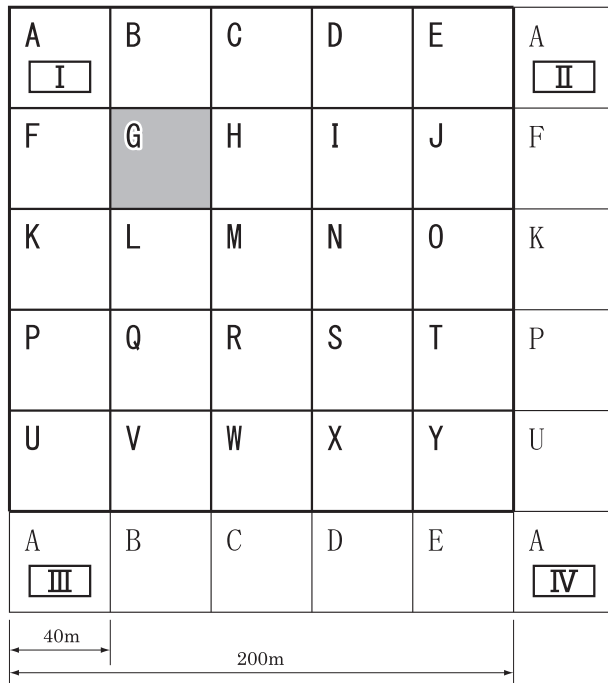
大々地区は、200 × 200 mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ…のローマ数字で表記した。

大地区は、大々地区を40 × 40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベットで表記した。

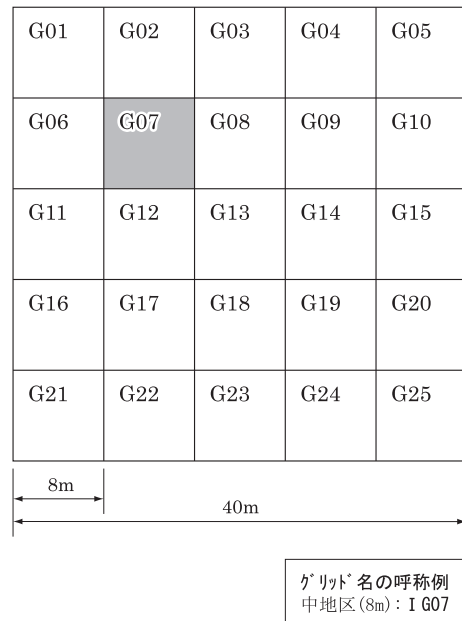
中地区は、大地区を8 × 8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字で表

●大々地区  
200×200mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ……とする。

●大地区(40m<sup>2</sup>グリッド)



●中地区(8m<sup>2</sup>グリッド)



第2図 グリッドの呼称

記した。調査ではこの中地区を遺構測量の基準・単位とした。

調査におけるグリッド設営は測量業者に委託して実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換時期と重なっていて、調査の統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

(4) 遺構の発掘

鎌田原遺跡、和田原遺跡群では、遺跡の状況を把握するため重機によるトレンチ調査を実施し、遺構の確認された範囲について面的に表土剥ぎを行い、遺構の調査を実施した。近津遺跡群では隣接する遺跡群内での調査状況から、散漫な遺構分布が予想されたことから、当初から面的な表土剥ぎを実施した。

遺構の測量は、調査研究員及びその指導のもとに発掘補助員が行い、業者委託の単点測量と空中写真測量も併用した。

調査中の写真撮影は、6×7、35mm一眼レフカメラを併用し、それぞれモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムで撮影した。また、あわせて近津遺跡群ではコンパクトデジタルカメラによる撮影も行った。各遺跡とも調査区の全体写真を業者委託のラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

(5) 遺跡の公開

鎌田原遺跡群では、平成14年7月1・2日の両日、地元小学校の児童145名が遺跡見学を行った。また、同年9月8日、11月5・22・25日の4回、日本道路公団主催の遺跡見学会が実施され、合計240名の見学があった。近津遺跡群では、平成21年8月29日現地説明会を開催し95名の参加があった。和田原遺跡群では平成18年9月14日、地元住民への見学会を開催し、遺跡周辺住民6名の見学があった。

出土遺物については、平成19年度から21年度の長野県埋蔵文化財センター速報展に、写真パネルなどと共に展示し、21年度は関連事業として遺跡調査報告会で調査概要を報告した。

## 2. 日誌抄

### 鎌田原遺跡

(平成13年度)

12月3日 調査開始

12月5日 トレンチ調査開始

12月10日 トレンチの掘削終了、遺構を確認

12月17日 トレンチ埋め戻し

12月21日 調査終了

(平成14年度)

5月23日 調査開始、1区表土剥ぎ開始

6月7日 遺構調査開始

7月1・2日 小諸市美奈ヶ丘小学校6年生見学

7月8日 日本道路公団東京建設局現場視察

7月31日 県遺跡調査指導委員会視察指導

8月22日 2区調査開始、遺構なし

9月3日 空撮

9月8日 日本道路公団主催遺跡見学会(11月5・22・25日も実施)

12月5日 調査終了

(平成21年度)

9月18日 国土交通省、施工業者との現地協議

9月30日 トレンチ調査開始

10月5日 遺構調査開始

10月23日 トレンチ埋め戻し作業を開始

10月29日 遺構調査終了

10月30日 遺構・トレンチ埋め戻し終了。調査終了

### 近津遺跡群

(平成19年度)

8月31日 調査開始

9月3日 1区安全柵設置、表土剥ぎ開始

10月2日 8区調査開始、上物片付け

10月24日 1区空撮、空測

11月16日 8区空撮

11月22日 1区西側表土剥ぎ開始

11月30日 1区西側表土剥ぎ終了、遺構検出

12月3日 3区表土剥ぎ開始、遺構検出

12月7日 4区試掘トレンチ調査

12月20日 4区試掘終了、現地調査終了

平成20年

2月18日 7・8区表土剥ぎ作業開始

3月13日 7・8区表土剥ぎ作業終了

<平成20年度>

5月7日 国土交通省との調査協議

5月22日 調査開始

6月2日 補助員作業開始、1区表土剥ぎ

6月5日 7・8区検出・遺構調査開始

6月17日 1区検出・遺構調査

6月23日 4区検出・遺構調査

7月3日 7・8区空撮・遺構空測

7月17日 6区(西南)検出・遺構調査

8月8日 6区(西南)高所作業車による撮影

8月11日 プレハブ施設移転作業

8月18日 6区(西北)安全柵設置、表土剥ぎ開始

8月22日 2区検出・遺構調査

8月28日 4区空撮

9月4日 5区(工事用道路)表土剥ぎ

9月18日 元東北芸術工科大学教授宮本長二郎氏現地指導(住居構造について)

9月30日 5・6区空撮・遺構空測、高所作業車による撮影

10月6日 6区(東)表土剥ぎ、2区検出・遺構調査

10月16日 3区表土剥ぎ、検出・遺構調査

10月23日 2区空撮

10月30日 7区(市道部)表土剥ぎ

11月6日 3区空撮、6区(市道・ボックス部)表土剥ぎ

11月12日 7区(市道部)高所作業車による撮影、遺構空測

11月21日 佐久市教委富沢一明氏現地指導(出土遺物について)

12月3日 6・7区空撮、高所作業車による撮影

12月22日 仮設工事撤去、調査終了

(平成21年度)

4月6日 調査開始

4月9日 3区表土剥ぎ開始

5月1日 5区(西)表土剥ぎ・抜根作業開始

5月26日 3区空撮、5区(西)遺構検出・遺構調査

6月1日 6・7区表土剥ぎ開始

7月14日 5区(西)空撮、高所作業車による撮影

8月7日 佐久市教委富沢一明氏現地指導

(古墳時代前期の集落について)

8月19日 御代田町役場小山岳夫氏視察・現地指導

(古墳時代前期の遺構・遺物について)

8月24日 5区(東北)表土剥ぎ開始、6・7区遺構空測

8月29日 現地説明会開催(参加者95名)

9月2日 6・7区空撮、高所作業車による撮影

10月14日 5区(東北)空撮・高所作業車による撮影

11月5日 5区(東南)表土剥ぎ開始

12月2日 5区(東南)空撮、高所作業車による撮影

12月21日 調査終了

平成22年

1月22日 借地プレハブ施設用地現状復帰終了

### 和田原遺跡群

(平成18年度)

4月10日 現地確認・東日本高速道路株式会社との現地協議

8月21日 調査開始

8月22日 1区トレンチ調査着手

8月23日 2区面剥ぎ開始、住居跡検出

8月31日 補助員による作業開始

9月6日 1区検出の穴から人骨出土(近代墓の可能性大)

9月13日 1区墓穴について協議、小諸警察署現場確認

9月14日 地元見学会開催、県高速道事務所来跡

9月19日 空撮

9月21日 調査終了

9月26日 東日本高速道路株式会社との引き渡し・墓穴に関わる現地協議

10月10日 施工業者による墓穴掘削立会い

## 第2節 整理作業の経過

### 1. 整理作業の方法

#### (1) 基礎整理作業

発掘作業年度に、記録類や出土遺物の基礎整理作業を実施した。

遺構図面や委託測量図類は記載内容の確認や修正を行い、台帳を作成した。調査時に作成した調査所見については内容の点検を行い、追加記載などを行った。写真類は撮影内容等を点検し、35mmカラーリバーサルはマウントに、それ以外はアルバムに注記し、台帳作成の後アルバムに収納した。

出土遺物の洗浄・注記は基本的に発掘作業期間中に行い、基礎整理作業でその補足と取り上げ単位での台帳を作成した。金属製品については別途台帳を作成し、一部県立歴史館にてレントゲン写真撮影を行った。

#### (2) 本格整理作業

報告書作成に向けた記録類の相互調整や調査所見との統合、出土遺物の検討整理などの本格整理作業を平成22年度8月から平成24年度に実施した。

出土遺物は材質・種類毎に分けて本格整理作業を進めた。土器・土製品については分類・接合・復元補強を行い、報告書掲載遺物を選択抽出して、登録台帳により管理した。土器の観察は遺構単位で行い、全体像を把握したうえで、遺物の組成が把握できるように数量・重量を計測し一覧表を作成した。実測は埋文センターで手実測により、1:1縮尺で行った。縄文土器などは拓本も用いた。実測遺物のトレースも埋文センターで製図ペンを用いて手作業で行った。掲載した土器・土製品については観察表を作成した。

石器・石製品も同様に遺構毎に器種分類し、報告書掲載遺物を選択抽出を行い、登録台帳により管理した。実測・トレースは土器と同様に行い、掲載した石器・石製品については観察表を作成した。

金属製品は保存状態が悪く、現状のままでは実測などの作業が困難であったため、業者委託により保存処理を実施した後、実測作業等を行った。

図面類は、基礎整理作業で行った修正図をもとに、必要に応じて2次原図を作成し、個別遺構図・土層図・遺構配置図などを作成した。図版作成は、原図・2次原図をパソコンに取り込み、デジタルトレースにより作成した。遺物図版もトレース図をパソコンに取り込み版組を行った。

遺物写真は業者委託により実施し、撮影には6×7カメラを使用し、巻頭カラー図版用にカラーリバーサルフィルム、モノクロ写真図版用にはモノクロフィルムを用いた。撮影にあたってはテスト撮影を兼ねて一眼レフデジタルカメラでも撮影を行った。

#### (3) 資料の収納

出土遺物、実測図面、写真などの記録類は、報告書刊行後の保管先変更へ備え、分類収納した。

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物とに分けたうえで、出土遺構・地区別にテンパコに収納するとともに、遺物収納台帳を作成した。

実測図面類は、遺構・測量関係、遺物関係に分け、通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳を作成し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真収納台帳を作成し、アルバムに収納した。

## 2. 日誌抄

(平成22年度)

8月1日 整理作業開始、整理対象遺跡の遺物・記録類の確認、点検  
8月17日 和田原遺跡群図面整理開始  
8月26日 和田原遺跡群遺物整理開始  
9月1日 近津遺跡群人骨クリーニング開始  
9月16日 鎌田原遺跡図面整理開始  
平成23年  
1月5日 近津遺跡群図面整理開始  
1月19日 鎌田原遺跡遺物整理開始、金属製品の点検、仮収納  
3月24日 整理補助員作業終了  
3月31日 22年度整理作業終了

(平成23年度)

4月1日 整理作業開始  
4月5日 整理補助員作業開始、近津遺跡群の遺物整理  
鎌田原遺跡・和田原遺跡群遺構デジタルトレース作業開始  
4月21日 国土交通省長野国道事務所専門官 整理作業視察  
和田原遺跡群土器復元開始  
5月13日 鎌田原遺跡土器復元開始  
6月6日 近津遺跡群土器復元開始  
6月24日 近津遺跡群遺構デジタルトレース作業開始  
10月25日 金属製品の点検、整理カード作成  
10月27日 石器実測開始  
11月7日 土器実測開始  
11月25日 近津遺跡群土器復元終了

11月29日 原山智信州大学教授による石器石材鑑定指導  
12月9日 金属製品保存処理委託遺物搬出  
平成24年  
2月10日 石器実測終了  
3月6日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学  
准教授、櫻井秀雄独協医科大学技術員による出土人骨鑑定・  
指導  
3月16日 金属製品保存処理終了、納品  
3月22日 整理補助員作業終了  
3月30日 23年度整理作業終了

(平成24年度)

4月2日 整理作業開始  
4月9日 整理作業員作業開始、近津遺跡群遺構デジタルトレース、  
表作成  
5月30日 遺物図版作成開始  
7月20日 遺物実測終了  
9月25日 遺物写真撮影開始(～10/3まで)  
11月19日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学  
准教授、櫻井秀雄独協医科大学技術員による出土人骨鑑定・  
指導

平成25年

1月11日 印刷・製本業者決定  
3月22日 報告書刊行

## 第3章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

報告書掲載の3遺跡は千曲川右岸の佐久平北部に位置する（第3図）。佐久平は東に関東山地を構成する荒船山などの佐久山塊が連なり、北には現在も活発な活動をみせる浅間山がそびえ、西を網笠山から蓼科山へ連なる八ヶ岳連峰の峰々に囲まれた高原性の盆地で、その中央部を甲武信岳に源を発する千曲川が周囲の山々から流れ出る濁川や湯川、滑津川、片貝川などの河川を集めながら、南から北へ貫流している。

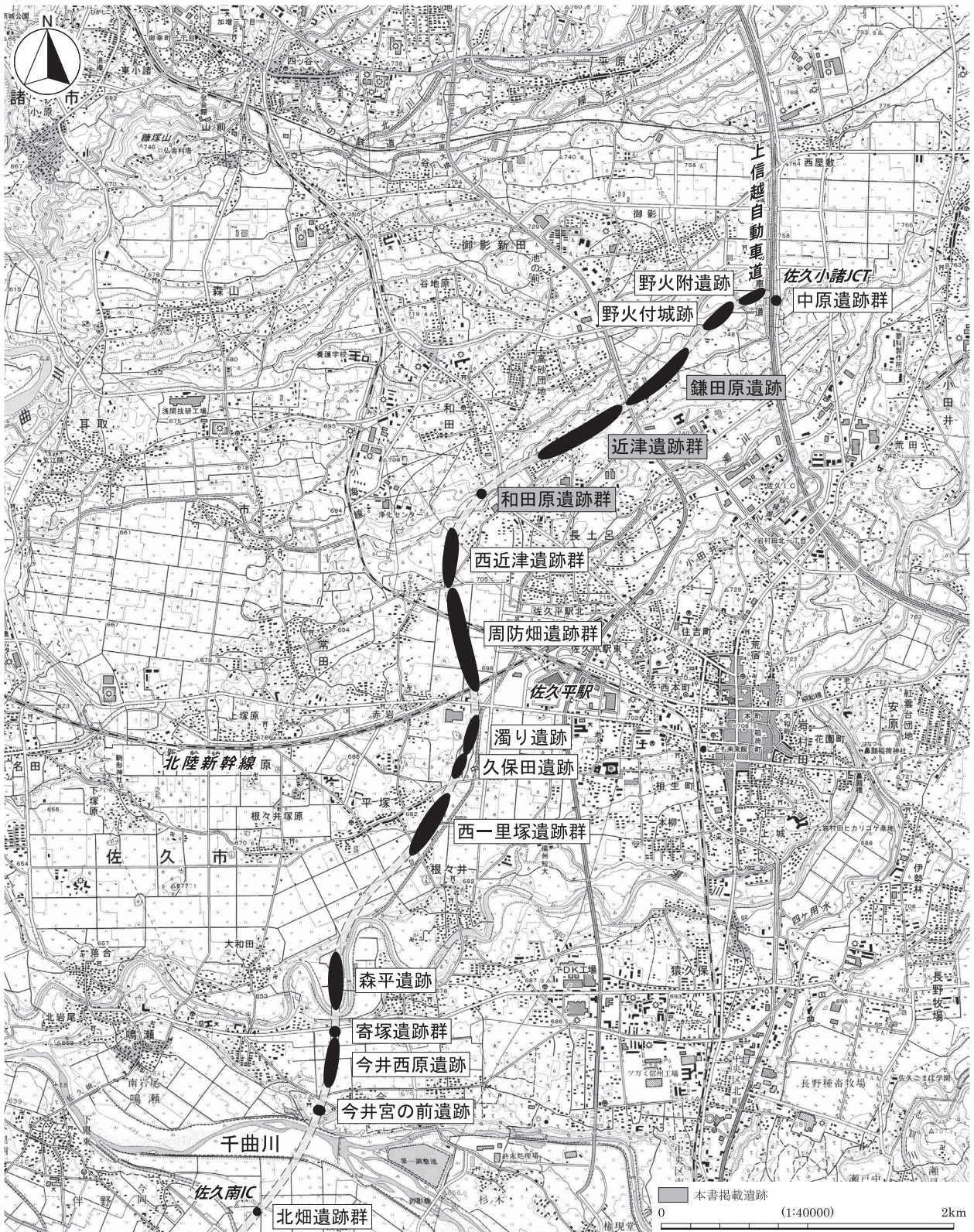
この内、遺跡が位置する千曲川右岸の佐久平北部の地形形成には、北の上信国境にそびえる浅間山の活動が大きくかかわっている。浅間山は黒斑山・仏岩・前掛山の三つの複合火山で、10万年ほど前から活動を開始した。2,800 m以上の富士山型成層火山を形成した黒斑火山は、約23,000年前の大規模な水蒸気爆発により山体の東半分が崩壊し、高速で多大な土石なだれが北麓の群馬県側と南麓の長野県側に流走した。南麓の御代田町から佐久市北部にかけて流下したものは「塚原土石なだれ（塚原泥流）」と呼ばれ、佐久平中央部の低地にはその名残である「流れ山」と呼ばれる小高い塚状の丘が多数残されている。

その後、軽石噴火が頻繁に発生するようになり、二度にわたる大規模な噴火により軽石流と呼ばれる火砕流が佐久平北部の山麓を覆った。最初の約13,000年前に起きた規模の大きい軽石流は、「浅間第一軽石流」と呼ばれ、10 m以上の厚さで堆積して御代田町から小諸市・佐久市にかけて火砕流台地を形成した。次の約11,000年前の爆発による軽石流は「浅間第二軽石流」と呼ばれ、御代田町から小諸市街地を覆っている（第4図）。

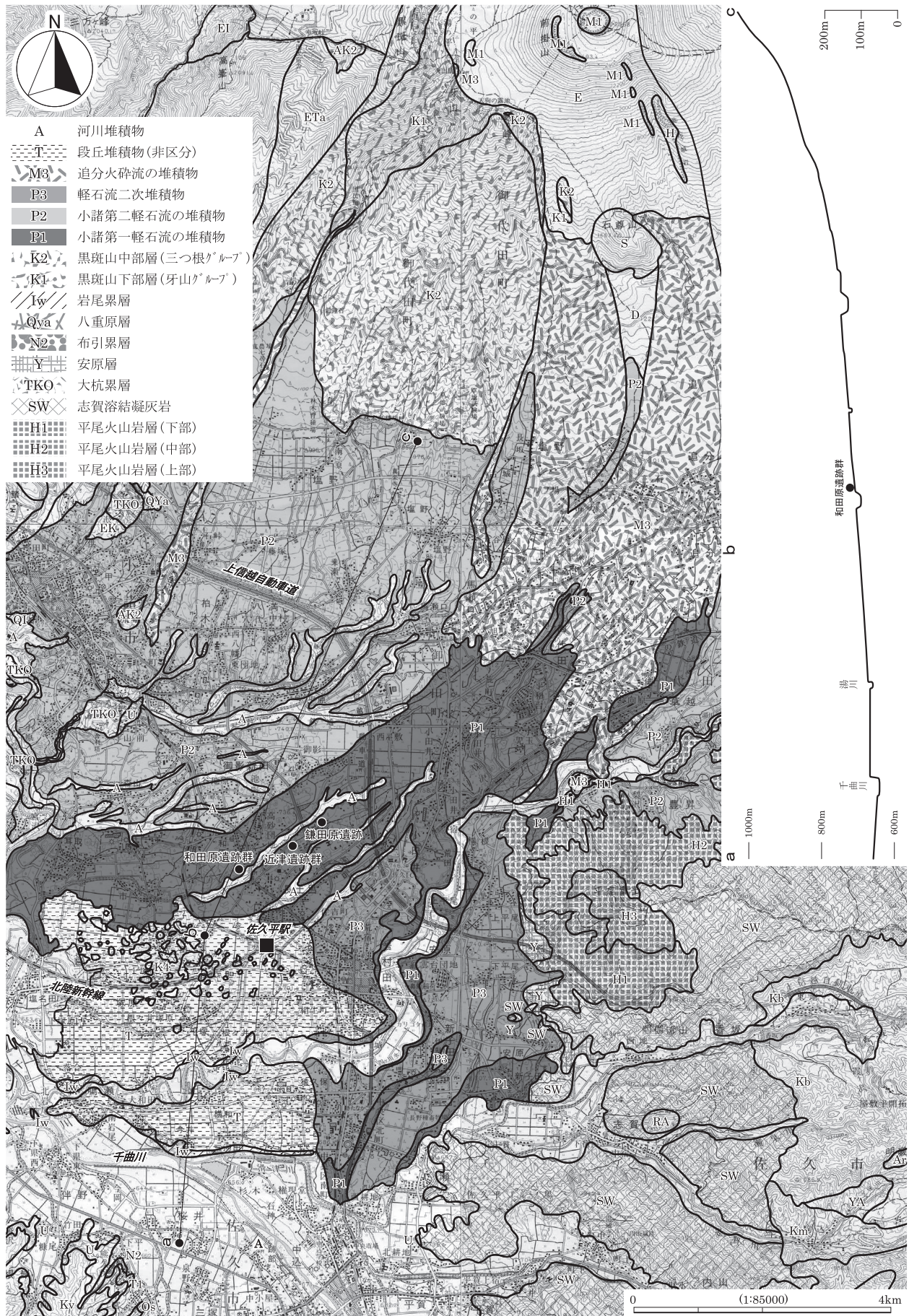
浅間第一軽石流による火砕流台地は比較的平坦で、北東から南西に緩やかに傾斜する高燥な台地である。この火砕流台地は、軽石流堆積物の固結度が弱いため河川の浸食を受けやすく、この地域特有の「田切り地形」と呼ばれる切り立った断崖の谷により区切られる。この田切り地形は台地末端部付近で特に発達し、樹枝状の細長い台地となっている。田切り地形を形成する小河川は浅間山から流れ出て、火砕流台地を北東から南西方向に放射状に延びており、軽石流の流出方向に沿っていると考えられる。

石尊山の東麓に源を持つ濁川は、軽石流が厚く堆積する台地を浸食し、深い田切り地形をつくりながら流下し、火砕流台地末端の佐久市長土呂地区で流路を拡散し、氾濫低地を形成する。氾濫低地は度重なる土砂の流出により扇状地状に広がり、緩やかに傾斜を弱めながら千曲川へ向う。そのため、田切り地形は台地末端の岩村田市街地北東のJR小海線付近でみられなくなり、千曲川までの佐久平中央部には低地部と微高地、流れ山の残丘が組み合わさった地形が広がる。

この田切り地形と遺跡の関係を示したものが第5図である。火砕流台地は図右上の佐久市と御代田町の境付近から末端部にかけて、まさに樹枝状に広がる田切り谷に区切られて、100～500 m程度の幅狭いものとなっている。田切りの谷には湧玉川や濁川のように広く深い谷を形成するものもあれば、浅く狭い谷が台地に消えてしまうものもある。台地の末端は標高710 m付近で、そこから南側には濁川の氾濫による低地部が広がる。この付近では、田切り地形により区切られた台地上に遺跡が広がり、それぞれの台地全てが遺跡となっている。これは弥生時代以降、中央部や田切り谷を生産域とし、その周囲の乾いた台地上を居住域として利用したものといえ、田切り地形と遺跡は密接な関係を持っている。

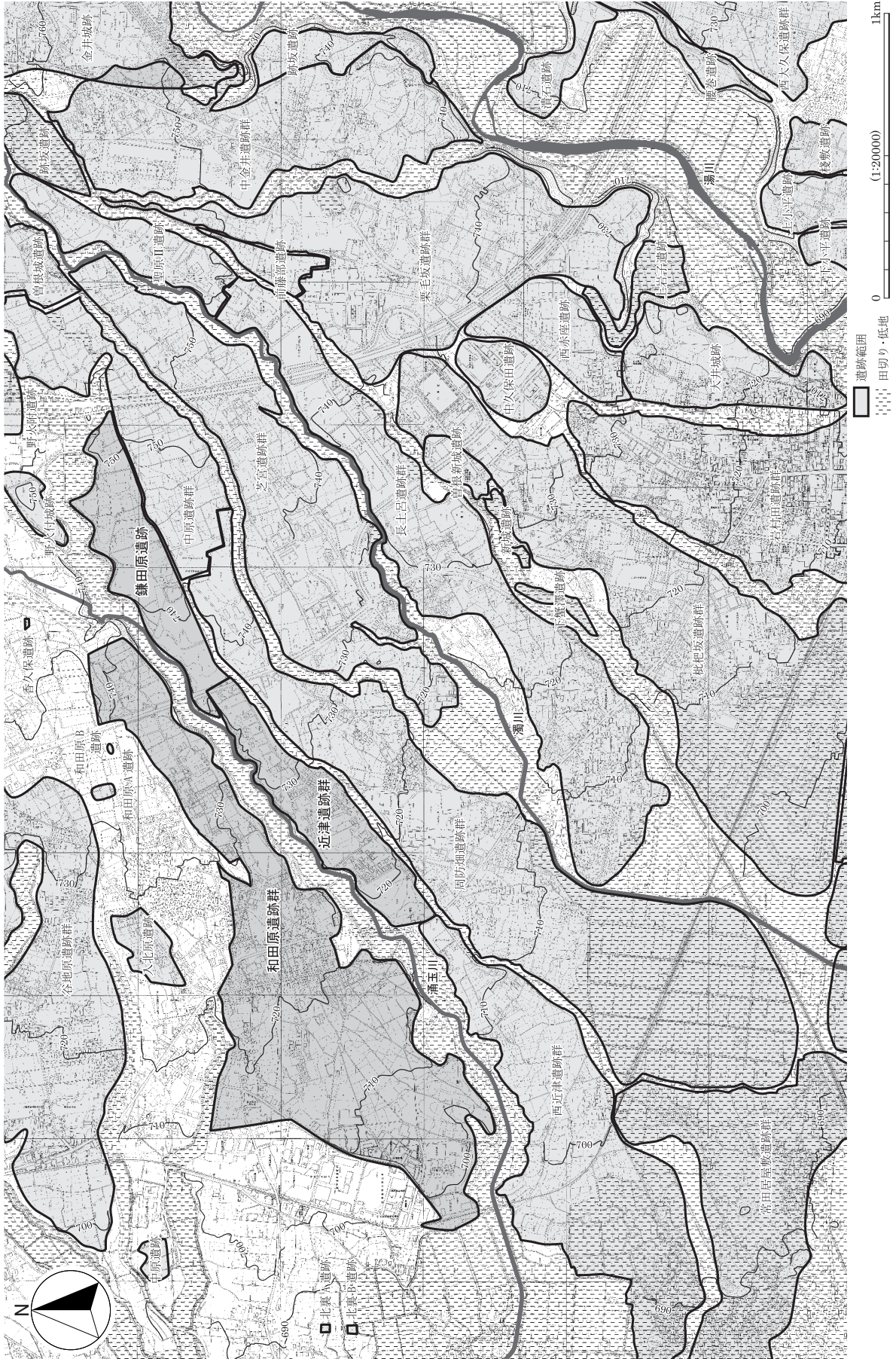


第3図 中部横断自動車道 遺跡位置図 (佐久小諸JCT～佐久南IC間)



第4図 佐久周辺地質図





第5図 田切り・低地

## 第2節 歴史的環境

ここでは、遺跡周辺の佐久平北部の御代田町、小諸市、佐久市を中心に周辺の遺跡を概観していく（第6図、第5～7表）。

旧石器時代の遺跡はこの図中には存在しない。この時期の遺跡は佐久平周縁部の関東山地や千曲川左岸の蓼科山麓で確認されている。群馬県境の八風山中の佐久市八風山Ⅱ遺跡や香坂山遺跡などで始良丹沢火山灰降下以前の層から石器群が出土している。また、同じ山中の下茂内遺跡では、旧石器時代末から縄文時代初頭にかけて、ここで産出されるガラス質黒色安山岩を利用した槍先形尖頭器を集中的に製作している。千曲川左岸の蓼科山麓では、中部横断自動車道関係で調査した佐久市高尾A遺跡でも始良丹沢火山灰より以前の石器群が出土している。同じく佐久穂町満り久保遺跡では槍先形尖頭器が出土している。

縄文時代も佐久平の中央部には遺跡が少なく、周縁部に多い傾向がうかがえる。千曲川右岸では浅間山麓などに、千曲川左岸では蓼科山麓からのびる尾根先などに遺跡が立地する。

草創期の遺跡はわずかで、御代田町東荒神遺跡（2）で微隆起線文土器の出土が知られ、佐久市寺畑遺跡群（281）では爪形文土器が出土している。中部横断自動車道関係でも、西近津遺跡群（220）で寺畑遺跡群と類似した爪形文土器の出土がある。早期の押型文土器の時期になると、小諸市三田原遺跡群（107）など浅間山麓の遺跡だけでなく、佐久平北部の周防畑遺跡群（200）辻の前遺跡や枇杷坂遺跡群（232）下穴虫遺跡など弥生時代や古墳時代の集落遺跡から少量の土器の出土が知られるようになるが、住居跡などの遺構は見つかっていない。前期では御代田町塚田遺跡（34）や下弥堂遺跡（37）で前期初頭の羽状縄文系土器の集落が検出されている。

中期から後期にかけても浅間山麓に大規模遺跡が多く認められる。御代田町川原田遺跡は浅間山の豊富な湧水の側に営まれた中期中葉の集落跡で、出土の焼町式土器は国の重要文化財に指定されている。同じく小諸市郷土遺跡（56）は中期後半を主体とした100軒を超す集落跡である。後期では小諸市三田原遺跡群や岩下遺跡などで敷石住居跡などが検出されている。近年、佐久市西近津遺跡群で中期から後期にかけての集落の一端が発見された。縄文時代の集落遺跡が少ない佐久平における貴重な調査例となろう。関東山地側では佐久市寄山遺跡群（354）に中期の集落跡がある。また、千曲川左岸では蓼科山麓の榛名平遺跡群で前期から中期の集落跡が検出され、この山麓線の尾根上には小規模な縄文集落が点在するようである。晩期は資料が少なく、千曲川左岸の小諸市氷遺跡は縄文晩期後半の氷式の標式遺跡。浅間山麓では小諸市石神遺跡群（62）で後期から晩期にかけての配石遺構や多彩な遺物出土がある。

佐久平の中央部が本格的に人々の生活の場として利用されるようになるのは弥生時代中期になってからである。佐久市北西久保遺跡（275）では100軒ほどからなる弥生時代中期の大規模集落が台地上に広がる。隣接する岩村田遺跡群（243）西一本柳遺跡や鳴澤遺跡群（274）五里田遺跡でも同時期の大規模な集落跡が確認され、濁川の氾濫低地を囲むように高台の台地上に集落が営まれるようになる。また、湯川に面した低位段丘面に立地する森平遺跡でも同時期の集落跡が中部横断自動車道に伴う調査で検出されている。現在のところ明確な弥生時代水田跡は確認されていないが、佐久平中央部に広がる低地部を生産域とした集団による開発が行われたと考えられる。

弥生時代後期も中期同様に低地部を見下ろす火砕流台地上に大規模集落が営まれる。中部横断自動車道関係で調査した西近津遺跡群（220）や周防畑遺跡群（200）などもこうした大規模集落の一つである。西近津遺跡群には一辺18mを超える国内最大級の住居跡の検出もある。これ以外にも枇杷坂遺跡群（232）円正坊遺跡・同清水田遺跡、岩村田遺跡群西一本柳遺跡なども同様な集落遺跡である。こうした弥生時代

後期の集落跡はほとんどが火砕流台地の末端部の標高 720 m 程度までに止まり、そこより高い地域には広がっていない。但し、御代田町細田遺跡 (32) と下荒田遺跡 (33) は標高 820 m の浅間山麓の細い尾根上に立地する遺跡で、この二つの集落は現在でも冷害にあわない優良水田地帯となっている浅間山の伏流水が湧き出る谷地を生産域とした集落と考えられている。

古墳時代に入ると、これまでの台地上の大規模集落は解体し、河川や田切り谷の低位段丘や台地縁辺部に小規模集落が点在するようになる。集落遺跡としては小諸市和田原遺跡群 (175) や野火附遺跡 (193)、久保田遺跡 (161)、大塚原遺跡群 (145)、佐久市栗毛坂遺跡群 (203)、腰巻遺跡 (237)、下小平遺跡 (241)、周防畑遺跡群辻の前遺跡、松の木遺跡 (279)、深堀遺跡群 (353)、浅科村砂原遺跡 (376) や中平・田中島遺跡 (380・381) などここの集落遺跡で、周溝墓なども検出されている。また、浅間山麓にも小諸市石神遺跡、御代田町塚田遺跡などの小規模集落がみられる。

古墳時代中期後半には岩村田遺跡群西一本柳遺跡や北西久保遺跡、長土呂遺跡群 (202) 下聖端遺跡などで集落跡が検出されているが、遺跡数は比較的少ない。後期になると、今まであまり利用されてこなかった火砕流台地上にも大規模集落が登場してくる。佐久市長土呂遺跡群聖原遺跡、芝宮遺跡群 (201)、小諸市中原遺跡群 (181) などがあり、平安時代前半まで続く大規模集落跡となる。

奈良・平安時代、古代佐久郡の郡衙が佐久平北部の台地上に存在した可能性が高いと考えられており、御代田町から小諸市・佐久市にかけて広がる鑄師屋遺跡群の御代田町前田遺跡 (20)、十二遺跡 (21)、根岸遺跡 (22) や佐久市前田遺跡群 (195) などの他、佐久市長土呂遺跡群聖原遺跡、芝宮遺跡群、栗毛坂遺跡群、小諸市中原遺跡群などで 9 世紀代まで続く大規模な集落が火砕流台地状に広がる。小諸市宮ノ反 A 遺跡群 (141) では溝に囲まれた中に大型の掘立柱建物跡が並び、駅に関する倉庫群との見方もある。

中部横断自動車道関係では、現在整理作業中の西近津遺跡群で古墳時代から平安時代にかけての多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡などと共に、銅印や円面硯などの他、刻書・墨書土器などの資料も多く出土している。また、同じく周防畑遺跡群では獣脚風字硯が出土している。

このように繁栄をみせた平安時代の遺跡も、10 世紀以降は集落規模が縮小し、各地に小規模な集落が散在する様相に変わっていく。

中世では、御代田町前藤部遺跡 (28)、佐久市栗毛坂遺跡群 (203) 前藤部遺跡で、鎌倉時代から室町時代にかけての竪穴状遺構や土坑が多数検出され、国産陶器や中国舶載陶磁器などが出土している。大井城 (242) は大井氏の城とされ、同じ台地上の岩村田遺跡群 (243) 北一本柳遺跡の竪穴建物跡や土坑などは漆や鉄製品の生産に関係する集落の可能性が指摘されている。佐久市金井城 (367) は、戦国時代 16 世紀代の城跡で、湯川の断崖上に造られている。調査では堀で画された郭が同心円状に広がり、郭内にはおびただしい竪穴建物跡や掘立柱建物跡・土坑などが検出されている。小諸市和田原遺跡群 (175) 古屋敷遺跡や油久保遺跡でも中世の竪穴建物跡が多数検出されており、近接する東城に関わるものと推測されている。



第6図 周辺の遺跡分布図

第3章 遺跡の位置と環境

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄	弥	古	奈 平	中 世	近 世
1	西荒神	御代田町	1	塩野	○			○		
2	東荒神	御代田町	2	塩野 他	○			○	○	
3	滝沢	御代田町	6	塩野	○					
4	上藤塚	御代田町	12	塩野	○					
5	東二ツ石	御代田町	13	塩野	○					
6	湧玉	御代田町	14	塩野	○					
7	細田塚古墳	御代田町	15	塩野			○			
8	塚田古墳群	御代田町	16	塩野			○			
9	馬場	御代田町	17	塩野	○					
10	めがね塚古墳群	御代田町	18	馬瀬口			○			
11	下原古墳群	御代田町	19	馬瀬口			○			
12	小田井城跡	御代田町	20	御代田					○	
13	児玉	御代田町	28	児玉				○		
14	塩野西原	御代田町	29	塩野	○					
15	上西田	御代田町	30	塩野	○					
16	西畠	御代田町	32	塩野		○				
17	弥堂	御代田町	33	塩野	○					
18	下藤塚	御代田町	37	塩野	○					
19	野火付	御代田町	40	小田井				○	○	
20	前田	御代田町	41	小田井			○	○		
21	十二	御代田町	42	小田井				○		
22	根岸	御代田町	43	小田井				○		
23	根岸古墳	御代田町	44	小田井			○			
24	金井城跡	御代田町	45	小田井					○	
25	中金井	御代田町	46	小田井					○	
26	曾根城跡	御代田町	53	小田井					○	
27	跡坂	御代田町	54	小田井					○	
28	前藤部	御代田町	55	小田井			○	○	○	
29	聖原II	御代田町	56	小田井			○	○	○	
30	西向原	御代田町	57	馬瀬口				○		
31	塩野城跡	御代田町	60	塩野					○	
32	細田	御代田町	61	塩野		○				
33	下荒田	御代田町	62	塩野		○		○		
34	塚田	御代田町	63	塩野	○		○			
35	谷地城跡	御代田町	65	荒町					○	
36	馬瀬口城跡	御代田町	66	馬瀬口					○	
37	下弥堂	御代田町	67	塩野	○					
38	中屋際	御代田町	68	塩野	○			○		
39	関屋	御代田町	69	塩野	○			○		
40	下大宮	御代田町	71	塩野	○			○		
41	下ノ平	御代田町	72	塩野	○					
42	北原	御代田町	73	塩野	○					
43	辰場	御代田町	74	馬瀬口	○					
44	長倉城跡	御代田町	75	小田井					○	
45	戸谷城跡	御代田町	76	小田井					○	
46	鶴巻	御代田町	79	児玉				○		
47	一本木	御代田町	81	児玉				○		
48	腰巻	御代田町	82	児玉				○		
49	下児玉古墳	御代田町	83	児玉			○			
50	藤塚経塚	御代田町	84	御代田					○	
51	小諸城跡	小諸市	78	丁					○	○
52	鹿島古墳	小諸市	79	丁			○			
53	東沢城跡	小諸市	81	甲					○	
54	松井古墳	小諸市	82	甲			○			
55	北霞古墳群	小諸市	83	甲			○			
56	郷土	小諸市	84	甲	○					
57	郷土古墳群	小諸市	85	甲			○			
58	中松井城跡	小諸市	86	甲			○		○	
59	古熊野堂古墳	小諸市	87	甲			○			
60	熊野裏A	小諸市	88	甲	○	○		○		
61	堰下古墳群	小諸市	89	甲			○			
62	石神遺跡群	小諸市	90	八満	○			○		
63	長畝	小諸市	91	八満				○		
64	沼辺	小諸市	92	八満				○		

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄	弥	古	奈 平	中 世	近 世
65	牛冷	小諸市	93	八満					○	
66	牛冷塚古墳	小諸市	94	塩野			○			
67	宮崎城跡	小諸市	95	塩野					○	
68	善仁古墳	小諸市	96	塩野				○		
69	中大宮	小諸市	97	塩野	○					
70	下荒田	小諸市	98	塩野						○
71	七五三掛城跡	小諸市	108	甲						○
72	万才海土古墳	小諸市	109	甲				○		
73	万才海土	小諸市	110	甲					○	
74	北菊田	小諸市	115	丁						○
75	与良平古墳	小諸市	116	甲				○		
76	与良城跡	小諸市	117	甲						○
77	要畑	小諸市	118	甲					○	
78	六道A	小諸市	119	甲					○	
79	六道B	小諸市	120	甲					○	
80	野岸	小諸市	121	甲	○	○		○		
81	熊野裏B	小諸市	122	甲					○	
82	東野岸	小諸市	123	甲					○	
83	袖川原	小諸市	124	加増					○	
84	与良古墳	小諸市	126	甲				○		
85	加増遺跡群	小諸市	127	加増	○			○	○	○
86	加増古墳群	小諸市	128	加増				○		
87	日向	小諸市	129	加増					○	
88	乙女城跡	小諸市	130	加増						○
89	源太谷地5号墳	小諸市	131	加増				○		
90	峯	小諸市	132	加増					○	
91	加増城跡	小諸市	133	加増						○
92	八子屋塚古墳	小諸市	134	加増					○	
93	唐松一里塚	小諸市	135	甲						○
94	大塚遺跡群	小諸市	136	加増	○			○	○	
95	唐松古墳群	小諸市	137	加増					○	
96	古屋敷	小諸市	138	柏木	○				○	○
97	柏木北城跡	小諸市	139	柏木						○
98	柏木南城跡	小諸市	140	柏木						○
99	前原古墳	小諸市	141	柏木					○	
100	柏木原遺跡群	小諸市	142	柏木					○	○
101	坪ノ内	小諸市	143	柏木					○	○
102	糺田A	小諸市	144	柏木					○	○
103	久保田	小諸市	146	平原					○	○
104	久保田古墳群	小諸市	147	平原					○	
105	平原城跡	小諸市	148	平原	○					○
106	北原遺跡群	小諸市	149	平原	○				○	○
107	三田原遺跡群	小諸市	150	平原	○				○	
108	三子塚遺跡群	小諸市	151	平原	○	○			○	○
109	寺裏塚古墳	小諸市	152	平原					○	
110	乗寄古墳	小諸市	153	塩野					○	
111	上三田原城跡	小諸市	154	平原						○
112	十石城跡	小諸市	155	平原						○
113	三子塚1号墳	小諸市	156	平原					○	
114	赤沼	小諸市	158	平原	○				○	
115	中村	小諸市	166	山浦					○	
116	大洞	小諸市	167	甲					○	
117	北原田	小諸市	169	甲					○	
118	西原田	小諸市	170	甲					○	
119	池久保	小諸市	171	甲						○
120	菖蒲沢	小諸市	172	山浦	○					
121	上塩川	小諸市	173	甲					○	
122	塩川城跡	小諸市	174	甲						○
123	下塩川	小諸市	175	甲					○	
124	立原	小諸市	176	甲	○				○	
125	八幡在家古墳	小諸市	177	甲					○	
126	八幡在家	小諸市	178	甲					○	
127	北ノ城跡	小諸市	179	耳取						○
128	九唐松	小諸市	180	甲					○	

第5表 周辺遺跡一覧 (1)

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄	弥	古	奈 平	中 世	近 世
129	前原田	小諸市	181	甲				○		
130	鎌矢川城跡	小諸市	182	甲					○	
131	乙女古墳	小諸市	183	甲			○			
132	上鶴巻	小諸市	184	甲				○		
133	南諸山	小諸市	185	甲						
134	北諸山	小諸市	186	甲				○		
135	上山ノ前	小諸市	187	甲				○		
136	山ノ前	小諸市	188	甲			○	○		
137	関口B	小諸市	189	甲			○	○		
138	関口A	小諸市	190	甲			○	○		
139	釜神	小諸市	191	御影新田			○	○		
140	山神	小諸市	192	森山			○	○		
141	宮ノ反A遺跡群	小諸市	193	御影新田			○	○		
142	舟窪	小諸市	194	御影新田			○	○		
143	宮浦	小諸市	195	森山			○	○		
144	柏原遺跡群	小諸市	196	森山			○	○		
145	大塚原遺跡群	小諸市	197	御影新田			○	○		
146	三弘法山城跡	小諸市	198	平原					○	
147	一ツ谷大塚	小諸市	199	御影新田			○			
148	舟窪館跡	小諸市	200	御影新田					○	
149	谷地原遺跡群	小諸市	201	御影新田	○	○	○	○		
150	長野原	小諸市	202	平原	○		○	○		
151	長野原塚古墳	小諸市	203	平原			○			
152	宮ノ反B	小諸市	204	御影新田			○	○		
153	鑄物師屋	小諸市	205	御影新田			○	○		
154	宮沢道下	小諸市	208	山浦				○		
155	裕城跡	小諸市	209	耳取					○	
156	大林	小諸市	210	耳取			○	○		
157	長林	小諸市	211	耳取				○		
158	耳取城跡	小諸市	212	耳取	○		○	○	○	
159	玄江院館跡	小諸市	213	耳取					○	
160	宮ノ北	小諸市	214	耳取	○	○	○	○		
161	久保田	小諸市	215	耳取	○	○	○	○		
162	西城跡	小諸市	216	森山					○	
163	森山城跡	小諸市	217	森山					○	
164	天神前	小諸市	219	森山				○		
165	萩久保	小諸市	220	森山				○		
166	中原	小諸市	221	耳取				○		
167	牛原	小諸市	222	耳取				○		
168	十字塚古墳群	小諸市	223	耳取			○			
169	五ヶ城	小諸市	224	市		○	○	○	○	
170	芝宮	小諸市	225	市				○		
171	北裏A	小諸市	226	市				○		
172	北裏B	小諸市	227	市					○	
173	耳取大塚古墳	小諸市	228	耳取			○			
174	北市古墳	小諸市	229	市			○			
175	和田原遺跡群	小諸市	230	和田	○	○	○	○		
176	入北原	小諸市	231	和田			○	○		
177	和田原A	小諸市	232	和田				○		
178	和田原B	小諸市	233	和田				○		
179	香久保	小諸市	234	和田					○	
180	鎌田原	小諸市	235	御影新田			○	○		
181	中原遺跡群	小諸市	236	御影新田			○	○		
182	野火付城跡	小諸市	237	御影新田					○	
183	野火付古墳	小諸市	238	御影新田			○			
184	宮下古墳	小諸市	239	耳取			○			
185	宮ノ前	小諸市	240	耳取				○		
186	宮ノ前古墳	小諸市	241	耳取			○			
187	五領A	小諸市	242	耳取					○	
188	五領B	小諸市	243	耳取	○	○	○			
189	五領C	小諸市	244	耳取					○	
190	秋葉山古墳群	小諸市	245	市			○			
191	藤塚古墳	小諸市	246	市			○			
192	東城跡	小諸市	247	和田					○	

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄	弥	古	奈 平	中 世	近 世
193	野火附	小諸市	252	御影新田			○	○		
194	下前田原遺跡群	佐久市	1	小田井	○			○		
195	前田遺跡群	佐久市	2	小田井		○	○	○		
196	銚師屋遺跡群	佐久市	3	小田井		○	○	○		
197	曾根城	佐久市	4	小田井	○	○	○	○		
198	下前田原古墳群	佐久市	5	小田井			○			
199	近津遺跡群	佐久市	6	長土呂		○	○	○		
200	周防畑遺跡群	佐久市	7	長土呂	○	○	○	○		
201	芝宮遺跡群	佐久市	8	長土呂	○	○	○	○		
202	長土呂遺跡群	佐久市	9	長土呂	○	○	○	○	○	
203	栗毛坂遺跡群	佐久市	10	小田井		○	○	○		
204	跡坂	佐久市	11	小田井		○	○	○		
205	中金井遺跡群	佐久市	12	小田井		○	○	○		
206	皎月古墳	佐久市	13	小田井			○			
207	島原古墳	佐久市	14	小田井			○			
208	からむし古墳	佐久市	15	横根			○			
209	芋の原遺跡群	佐久市	17	横根	○	○	○	○		
210	上の原遺跡群	佐久市	18	横根	○	○	○	○		
211	上長坂遺跡群	佐久市	20	横根	○	○	○	○		
212	唄坂	佐久市	21	小田井	○	○	○	○		
213	横根古墳群	佐久市	22	横根			○			
214	矢口古墳群	佐久市	23	横根			○			
215	平古墳群	佐久市	24	横根			○			
216	塩名田幅	佐久市	25	常田		○	○	○		
217	藤塚	佐久市	26	塚原		○	○	○		
218	前田遺跡群	佐久市	27	塚原		○	○	○		
219	常田居屋敷遺跡群	佐久市	28	常田		○	○	○		
220	西近津遺跡群	佐久市	29	長土呂	○	○	○	○		
221	鷺林城址	佐久市	30	常田					○	
222	藤塚古墳群	佐久市	31	塚原			○			
223	姫小石古墳群	佐久市	32	塚原			○			
224	家地頭古墳群	佐久市	33	常田			○			
225	大豆塚古墳群	佐久市	34	塚原			○			
226	下大豆塚古墳群	佐久市	35	長土呂			○			
227	東池下古墳群	佐久市	36	常田			○			
228	鷺林古墳群	佐久市	37	長土呂			○			
229	下蟹澤	佐久市	38	長土呂		○	○	○		
230	濁り	佐久市	39	塚原						
231	長土呂館跡	佐久市	40	長土呂					○	
232	枇杷坂遺跡群	佐久市	41	岩村田		○	○	○		
233	中久保田	佐久市	42	岩村田		○	○	○		
234	西赤座	佐久市	43	岩村田		○	○	○		
235	上岩子	佐久市	44	岩村田				○		
236	新城	佐久市	45	岩村田		○	○	○		
237	腰巻	佐久市	46	上平尾		○	○	○		
238	西大久保遺跡群	佐久市	47	上平尾	○	○	○	○		
239	棧敷	佐久市	48	安原				○		
240	上小平	佐久市	49	岩村田				○		
241	下小平	佐久市	50	岩村田		○	○	○		
242	大井城跡	佐久市	51	岩村田		○	○	○	○	
243	岩村田遺跡群	佐久市	52	岩村田		○	○	○	○	
244	潰石	佐久市	53	上平尾	○	○	○	○		
245	潰石古墳	佐久市	54	上平尾			○			
246	棧敷古墳	佐久市	55	安原			○			
247	東大久保遺跡群	佐久市	56	上平尾	○	○	○	○		
248	十二前	佐久市	57	上平尾				○		
249	矢澤	佐久市	58	上平尾				○		
250	宮の前	佐久市	59	下平尾				○		
251	北山寺	佐久市	60	下平尾				○		
252	木田橋	佐久市	62	下平尾				○		
253	白岩城跡(里古城)	佐久市	67	上平尾					○	
254	塚畑古墳	佐久市	71	上平尾			○			
255	宿古墳	佐久市	72	上平尾			○			
256	宮の西古墳	佐久市	73	下平尾			○			

第6表 周辺遺跡一覧 (2)

第3章 遺跡の位置と環境

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時代					
					縄	弥	古	奈平	中世	近世
257	猫田遺跡群	佐久市	75	鳴瀬	○	○	○			
258	熊の堂	佐久市	78	鳴瀬	○	○	○			
259	尼塚遺跡群	佐久市	79	鳴瀬	○	○	○			
260	新城	佐久市	80	塚原	○	○	○			
261	宮の前田	佐久市	82	塚原		○	○	○		
262	中溝	佐久市	83	塚原		○	○	○		
263	堰添	佐久市	85	常田		○				
264	宮の前	佐久市	86	塚原				○		
265	道添	佐久市	87	塚原				○		
266	塚原屋敷添	佐久市	88	塚原				○		
267	宮の塚古墳	佐久市	89	塚原				○		
268	狐塚古墳	佐久市	90	塚原			○			
269	籠子田	佐久市	91	塚原				○		
270	西一里塚遺跡群	佐久市	92	岩村田		○	○	○		
271	日向屋敷	佐久市	93	根々井		○	○	○		
272	根々井居屋敷	佐久市	94	根々井		○	○	○		
273	根々井氏館跡	佐久市	95	根々井					○	
274	鳴瀬遺跡群	佐久市	96	根々井	○	○	○	○		
275	北西久保	佐久市	98	岩村田		○	○	○		
276	中西の久保遺跡群	佐久市	99	岩村田		○	○	○		
277	中鳴瀬遺跡群	佐久市	100	岩村田		○	○	○		
278	上砂田	佐久市	101	岩村田		○	○	○		
279	松の木	佐久市	102	岩村田		○	○	○	○	
280	諏訪分遺跡群	佐久市	106	根々井		○	○	○		
281	寺畑遺跡群	佐久市	107	根々井		○	○	○		
282	根々井東原館跡	佐久市	108	根々井					○	
283	根々井大塚古墳	佐久市	109	根々井			○			
284	姫宮塚古墳	佐久市	110	根々井			○			
285	上鳴瀬古墳群	佐久市	111	根々井			○			
286	喜平治山古墳	佐久市	112	岩村田			○			
287	国蔵山古墳	佐久市	114	岩村田			○			
288	東一本柳古墳	佐久市	115	岩村田			○			
289	北西の久保古墳群	佐久市	116	岩村田			○			
290	下信濃石	佐久市	118	岩村田				○		
291	蛇塚遺跡群	佐久市	119	新子田				○		
292	東内池	佐久市	121	新子田				○		
293	野馬窪遺跡群	佐久市	122	猿久保		○	○	○		
294	猿久保屋敷添	佐久市	123	猿久保		○	○	○		
295	岩井堂	佐久市	124	岩村田		○	○	○		
296	野馬窪古墳	佐久市	125	猿久保			○			
297	蛇塚古墳群	佐久市	126	安原						
298	戸屋敷遺跡群	佐久市	127	安原				○		
299	猫久保遺跡群	佐久市	128	安原				○		
300	高師町遺跡群	佐久市	129	新子田		○	○	○		
301	筒畑遺跡群	佐久市	130	安原	○					
302	東村遺跡群	佐久市	131	下平尾	○	○	○	○		
303	筏室遺跡群	佐久市	132	安原字			○	○		
304	宿上屋敷	佐久市	133	安原字				○		
305	大角	佐久市	136	下平尾		○	○	○		
306	燕城址	佐久市	139	安原					○	
307	安原大塚古墳	佐久市	141	安原			○			
308	粕田	佐久市	202	鳴瀬				○		
309	曇畑	佐久市	203	鳴瀬		○	○			
310	落合居屋敷	佐久市	204	鳴瀬		○	○	○		
311	鳴瀬宮の前	佐久市	205	鳴瀬		○	○	○		
312	岩尾城跡	佐久市	206	鳴瀬					○	
313	下北古屋	佐久市	207	鳴瀬				○	○	
314	倉瀬	佐久市	209	伴野	○					
315	合浜田	佐久市	217	根岸				○		
316	唐松坂	佐久市	218	伴野				○		
317	休石	佐久市	219	伴野		○	○	○		
318	舞台場	佐久市	220	伴野		○	○	○		
319	下県屋敷遺跡群	佐久市	221	伴野	○	○	○	○		
320	東窪井戸	佐久市	222	伴野		○	○	○		

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時代					
					縄	弥	古	奈平	中世	近世
321	火の雨塚古墳	佐久市	223	伴野			○			
322	鳴瀬神明	佐久市	224	鳴瀬		○	○	○	○	
323	北道見	佐久市	225	鳴瀬		○	○	○	○	
324	大和田屋敷遺跡群	佐久市	226	鳴瀬		○	○			
325	大和田遺跡群	佐久市	227	鳴瀬	○	○				
326	上平遺跡群	佐久市	228	鳴瀬		○	○	○		
327	鳴瀬中屋敷遺跡群	佐久市	229	鳴瀬		○		○	○	
328	白山遺跡群	佐久市	230	鳴瀬	○	○	○	○		
329	寄塚遺跡群	佐久市	231	横和		○	○	○	○	
330	鍛冶田	佐久市	232	横和		○	○	○	○	
331	北久保	佐久市	233	横和			○	○	○	
332	今井西原	佐久市	234	今井			○	○	○	
333	今井宮の前	佐久市	235	今井				○	○	
334	今井城跡	佐久市	236	今井					○	
335	落合神明館跡	佐久市	237	鳴瀬					○	
336	道見塚古墳	佐久市	238	鳴瀬			○			
337	寄塚古墳	佐久市	239	横和			○			
338	宮の上遺跡群	佐久市	240	横和	○	○	○	○		
339	中原遺跡群	佐久市	241	今井	○	○	○	○	○	
340	赤石河原	佐久市	242	根々井		○		○		
341	土堂古墳	佐久市	243	三河田			○			
342	三河田大塚古墳	佐久市	244	三河田			○			
343	蟹ヶ沢古墳	佐久市	245	中込			○			
344	富士塚古墳	佐久市	246	猿久保			○			
345	西妻神	佐久市	247	中込		○		○		
346	番屋前遺跡群	佐久市	248	猿久保		○		○		
347	大塚遺跡群	佐久市	249	中込		○		○		
348	馬瀬口遺跡群	佐久市	250	瀬戸		○		○		
349	梨の木 I	佐久市	251	中込					○	
350	仲田	佐久市	252	猿久保			○	○		
351	和田	佐久市	253	瀬戸	○	○	○	○		
352	鷺の宮	佐久市	254	瀬戸	○					
353	深堀遺跡群	佐久市	255	瀬戸	○	○	○	○	○	
354	寄山遺跡群	佐久市	256	瀬戸	○			○	○	
355	中城峯城跡	佐久市	257	瀬戸					○	
356	中城峯古墳群	佐久市	258	瀬戸			○			
357	御経塚古墳	佐久市	259	猿久保			○			
358	金比羅塚古墳	佐久市	260	猿久保			○			
359	和田上古墳	佐久市	261	瀬戸			○			
360	寄山古墳	佐久市	262	志賀			○			
361	戸坂遺跡群	佐久市	263	新子田		○	○	○	○	
362	家の前	佐久市	267	新子田		○	○	○		
363	清水窪	佐久市	271	志賀				○		
364	鳥坂城跡	佐久市	275	新子田					○	
365	中条峯	佐久市	337	瀬戸	○		○	○		
366	延寿城跡	佐久市	539	横根					○	
367	金井城跡	佐久市	540	小田井					○	
368	曾根新城	佐久市	541	岩村田					○	
369	浅井城跡	佐久市	545	新子田					○	
370	四つ塚古墳	佐久市	552	新子田			○			
371	森平	佐久市	593	横和		○				
372	久保田	佐久市	594	塚原	○	○		○	○	
373	莊山古墳	佐久市	595	塚原			○			
374	洞口古墳	佐久市	811	塩名田			○			
375	五領城跡	佐久市	812	塩名田					○	
376	砂原	佐久市	813	塩名田	○	○	○	○		
377	山王	佐久市	814	塩名田					○	
378	下川原	佐久市	815	塩名田					○	
379	屋敷裏遺跡群	佐久市	816	塩名田					○	
380	中平	佐久市	818	御馬寄				○		
381	田中島	佐久市	819	御馬寄	○	○	○	○		
382	御馬寄城跡	佐久市	820	御馬寄					○	
383	下平	佐久市	821	御馬寄					○	
384	熊野	佐久市	822	御馬寄					○	

第7表 周辺遺跡一覧 (3)

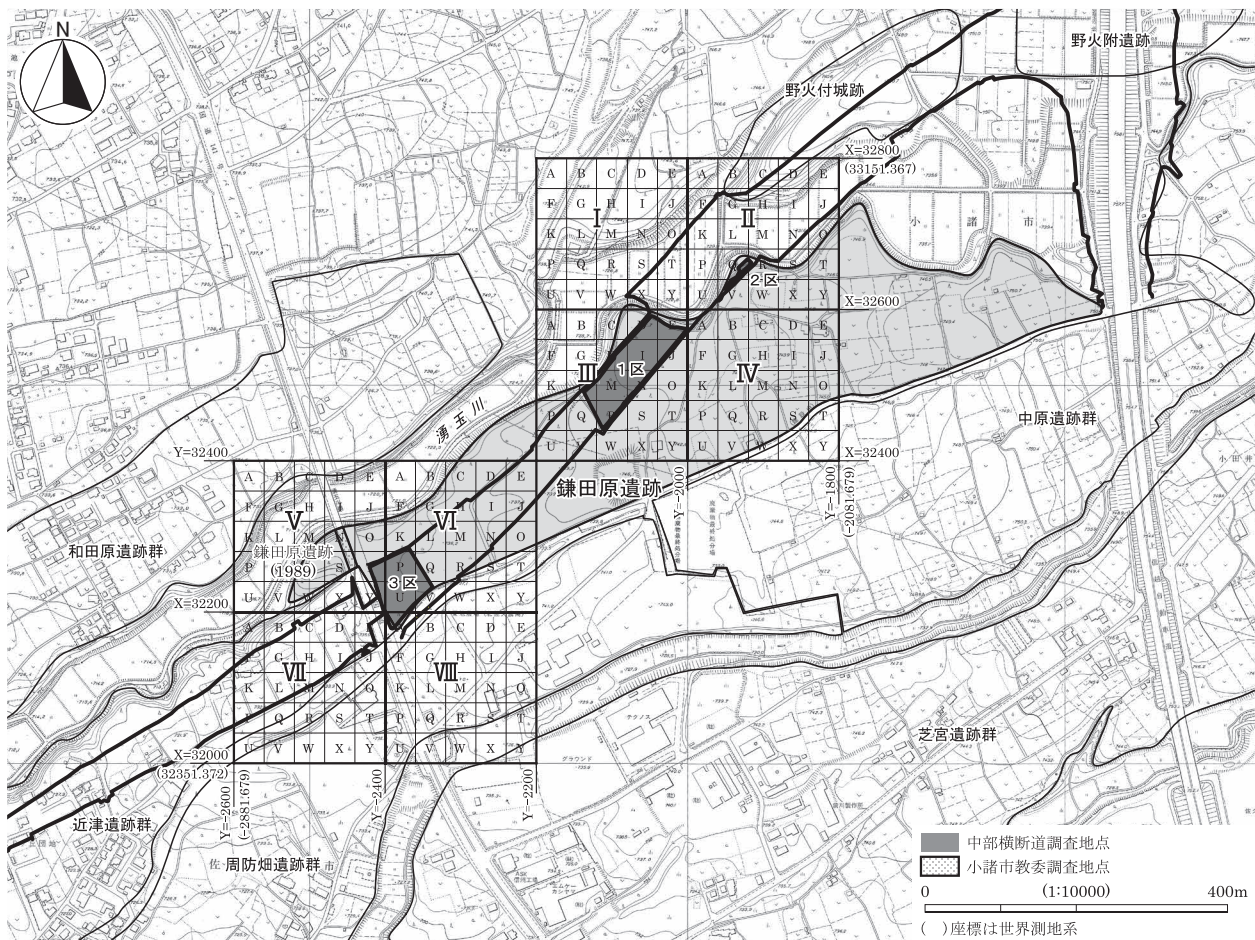
## 第4章 鎌田原遺跡

### 第1節 遺跡の概観と調査の概要

#### 1. 遺跡の概観

鎌田原遺跡は小諸市南東部の佐久市境となる小諸市御影新田地区に所在する。この地域は北に聳える浅間山から噴出した大量の浅間第一軽石流が厚く堆積してできた台地上の末端近くに当たる。台地は軽石流の流出方向に合い北東から南西に緩く傾斜する。浅間第一軽石流は固結度が弱いため浸食作用を受けやすく、この地域特有な「田切り地形」が発達している。特に、浅間第一軽石流の堆積末端付近にあたる佐久市北部から小諸市南東部にかけては幾つかの小河川による田切り地形が樹枝状となり、各所に見られる。

鎌田原遺跡が立地する台地もこうした樹枝状に区切られた台地の一つで、北東から南西に細長く伸び、北側は湧玉川による比高差15m以上の深い田切り谷で区切られている。一方、南側は明瞭な田切り地形とはなっておらず、狭く浅い凹地状となっている。湧玉川は遺跡北東から南西に向かい蛇行しながら流下する。そのため、調査地点付近では比較的直線的な崖線となるが、台地北東部では大きく彎曲した張り出し部を持った崖線となっている。



第7図 鎌田原遺跡 遺跡範囲図と地区設定図



鎌田原遺跡は、この台地一帯が遺跡範囲となっており、同一台地上の西側佐久市域分は近津遺跡群（第5章）となる。中部横断自動車道に伴う調査地点は小諸市御影新田字鎌田原 214・228 ほかで、標高は735～743 mを測る。鎌田原遺跡の中では中央部北側と西端にあたる（第7図）。

鎌田原遺跡における今回の調査以前の調査履歴は少ない。今回の調査地点3区西側で遺跡西端にあたる国道141号バイパス建設に伴う調査では遺構は確認されず、黒曜石製石器1点が出土したのみであった（小諸市教委 1983）。但し、小諸市教委調査地に隣接する佐久市分の近津遺跡群上宮原遺跡では平安時代後期の竪穴住居跡が1軒検出されている。また、今回調査の1区と3区の間では、産業廃棄物処理場建設や事業所建設に伴い平成6年と9年に小諸市教委による試掘調査が実施されたが、いずれも遺構などは確認されなかった。このようなことから鎌田原遺跡では今回の調査着手まで遺跡の内容等については判然としない状況であった。

他方、鎌田原遺跡周辺の遺跡では多くの調査が実施されている。まず、湧玉川の田切り谷を挟んだ対岸に位置する小諸市野火附遺跡では上信越自動車道・中部横断自動車道建設に伴い、古墳時代前期の小規模集落と後期の集落跡が調査され（埋文センター 1999・2009）、同じく北西の対岸に位置する小諸市和田原遺跡群（第6章）でも古墳時代前期の小規模集落や後期の集落跡などが検出されている（小諸市教委 1989・2002）。

一方、小諸市・佐久市境付近の田切り谷によって区切られた台地上では、古墳時代後期以降の活発な集落形成が確認されている。鎌田原遺跡の南側台地上に広がる小諸市中原遺跡群や佐久市芝宮遺跡群では、上信越自動車道建設に伴う調査により古墳時代後期から平安時代前半に及ぶ密集した集落跡が検出され（埋文センター 1999）、さらに南側の長土呂遺跡群聖原遺跡でも同様の密集した集落跡が調査されている（佐久市教委 2005）。また、鎌田原遺跡北東側でも野火附遺跡北方の小諸市・佐久市・御代田町にまたがる台地上の鋳師屋遺跡群では圃場整備に伴う調査により、奈良時代から平安時代にかけての東山道や牧に



第8図 1・2区 トレンチ配置図

関係すると考えられる大規模な集落跡が調査されている（小諸市教委 1988、佐久市教委 1988・1989、御代田町教委 1987・1988・1989等）。

中世では、鎌田原遺跡対岸の小諸市野火付城跡で中世の城跡に伴う土塁や堀跡等が見つまっている（埋文センター 2009）。また、同じく湧玉川田切り谷を挟んだ対岸の小諸市和田原遺跡群古屋敷遺跡や油久保遺跡で竪穴状遺構や土坑等が検出され、近くに築かれた東城や鷺林城との関係が指摘されている（小諸市教委 1995・2002）。

## 2. 調査の概要

鎌田原遺跡の調査は中部横断自動車道関連としては最初の調査として平成13年度に着手された。

平成13年度は用地買収・立木の伐採が終了した1区において遺構や遺物の状況を把握するためにトレンチ掘削による確認調査を実施した（第8図）。その結果、古墳時代前期と想定される竪穴住居跡や土坑等が確認され、遺構の調査は次年度以降の実施となった。

平成14年度は中部横断自動車道関連の調査が本格的に開始され、上信越自動車道から分岐するJCT部分や周辺の野火付遺跡・野火付城跡・鎌田原遺跡の3遺跡が調査対象とされた。鎌田原遺跡は昨年度遺構の確認された1区部分を面的に調査した。調査区内に残された立木の根は重機で除去すると遺構を壊すこととなるため、人力で処理しながら遺構確認を行った。調査の結果、1区では古墳時代前期を中心とした竪穴住居跡10軒と土坑12基を検出した。1区北東で台地が半島状に張り出した2区については、トレンチによる確認調査を実施したが遺構・遺物とも確認できず調査を終了した。

なお、1区から西側は当初小諸市教委による産業廃棄物処理場や事業所建設に伴う試掘調査などの結果から調査不要と考えられていたが、平成19・20年度での西側に隣接する佐久市近津遺跡群で散漫ながら平安時代の竪穴住居跡が存在することが明らかとなり、東側の鎌田原遺跡にも同様な状況が広がることが考えられるようになった。そのため、平成21年度、国土交通省・県教委・埋文センターによる協議がもたれ、鎌田原遺跡西端部分の確認調査を早急に行うこととなった。事業地の収去が終了した後、確認調査範囲全体にトレンチ調査を行ったところ、近津遺跡群と同様な平安時代の竪穴住居跡が3軒確認された。当該地は国道141号を跨ぐ橋脚の工事が迫っていたため、いち早く調査を行う必要があると判断され、隣接する近津遺跡群の調査班で対応して遺構調査を実施し、工事に影響が及ぶことなしに調査を終了させることとなった。

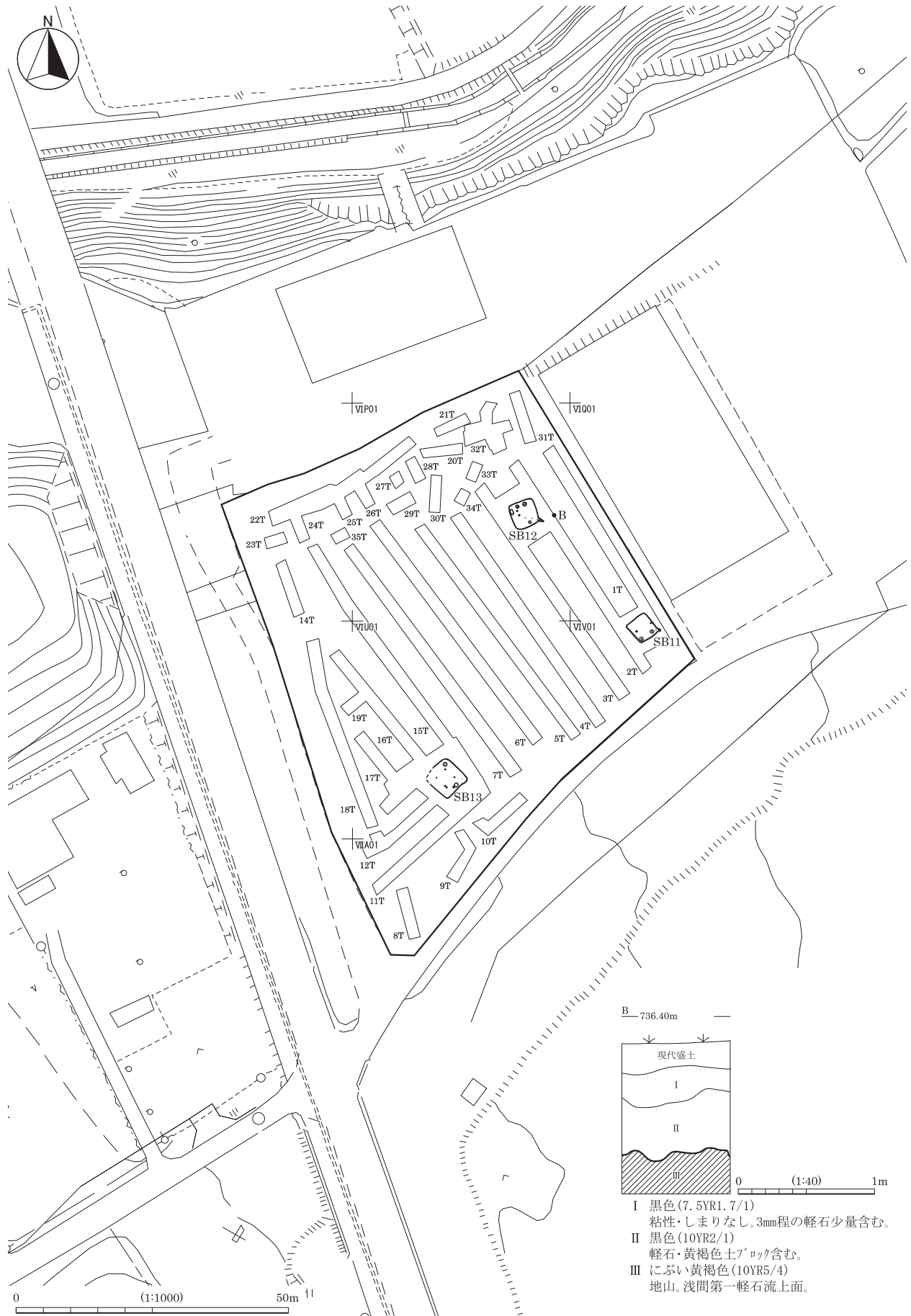
以上、鎌田原遺跡では3カ年にわたる調査で竪穴住居跡13軒、土坑12基が検出された。調査面積は14,910㎡である。

## 3. 基本層序

調査地点での土層堆積は全体として浅く、1区では植林の影響か30cm程の表土層下に薄くⅡ層黒色土が堆積し、地山のⅢ層浅間第一軽石流上面となっている。3区は盛土整地されていたため、旧表土下に黒色土層やや厚く堆積する場所もみられたが全体としては1区と同様な状況であった（第9・10図）。



第9図 1区 全体図・基本層序



第10図 3区 全体図・基本層序

## 第2節 遺構と遺物

鎌田原遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡 13 軒と土坑 12 基である。竪穴住居跡は古墳時代前期 8 軒、カマドを持つ古墳時代後期以降が 2 軒、平安時代後期 3 軒である。土坑については出土遺物がほとんどなく時期や性格を特定できるものは少ない。遺構の分布状況は非常に散漫といえ、竪穴住居跡が重複し合うことはない。また、調査地区により検出遺構の時期が異なり、1 区では古墳時代前期、3 区では平安時代後期が主体となっており、時期により遺構の占地場所が異なっていることが明らかとなった。

### 1. 竪穴住居跡

SB01 [第11図 PL 1・5・8]

位置：1区南東部、ⅢR 08・12・13 グリッド。SB03 が北西 6 m 程に近接する。

検出：地山となる浅間第一軽石流上面のⅢ層上面で黒色土の落ち込みとして検出。

埋土：黒色土の単層。

構造：南北 5.70 m、東西 4.48 m の隅丸長方形を呈する。主軸は N 39° W。壁高は最大で 22cm、平均 15cm 程度である。床面は軟弱で貼床はない。住居中央部が大きく風倒木痕により壊されている。南東隅に周堤を伴う貯蔵穴が掘られている。これ以外にピットは確認されず、柱穴は不明。貯蔵穴は住居南東隅を住居床面より 3～10cm 程高く堅緻に固められた中に直径 50cm 程で穿たれている。底面に赤色顔料のようなブロックが認められた。周溝は全周する。

炉：中央やや北側に位置するが、風倒木痕により大部分を破壊され、北端の一部のみが残存する。浅い掘り込みを持つ地床炉。底面に被熱赤化した焼土が認められた。これとは別に住居中央やや南西側床面に被熱化した焼土塊が見られた。

遺物分布：北西右隅と炉の左側で床面からやや浮いた状態で壺片がややまとまって出土している（9・10）。また、貯蔵穴上面から高坏脚片が出土した（3）。

出土遺物：8 は口縁が「く」の字に外反し、頸部にハケ調整が僅かに見られる。9 は胴上部をハケ調整し、下部は縦ミガキする。10 は胴下半で屈曲する箱清水系の無彩壺。1・2 は赤彩する高坏で、1 は坏部中程で屈曲し段を有して開く。3・4 は柱状の脚片で 3 は柱実、脚部裾で屈折する。5 は小型丸底土器。赤彩され、底部は丸底風となる。胴部下半で括れ、口縁部は直線的に長く開く。器高より口径が大きい。6 は折り返し口縁の鉢又は甑と考えられる。7 は壺のミニチュアか。11 は安山岩製の磨石。拳大円礫の平坦部に磨り面が認められる。

時期：出土遺物から古墳時代前期後半。

SB03 [第12図 PL 2・5]

位置：1区南東部、ⅢR 03・04・08・09 グリッド。SB01 の北西 6 m 程にあたる。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒色土の落ち込みとして検出。

埋土：4層に分層されるが、大きくは上部の黒色土と軽石流を起源とする黄褐色土ブロックを含む下部に分けられる。自然堆積と考えられる。

構造：一辺 4.1 m の隅丸長方形を呈する。主軸方向は N 31° W で、近接する SB01 に類似するが、住居規模はやや小型である。壁高は最大 23cm を測るが 5 cm 前後と浅い部分も多い。ピットは南東隅近くに 1 基のみ検出された。上部には風倒木痕が存在していたため、その影響を受けているが、貯蔵穴と考えられる。



第11図 SB01 遺構図・遺物図

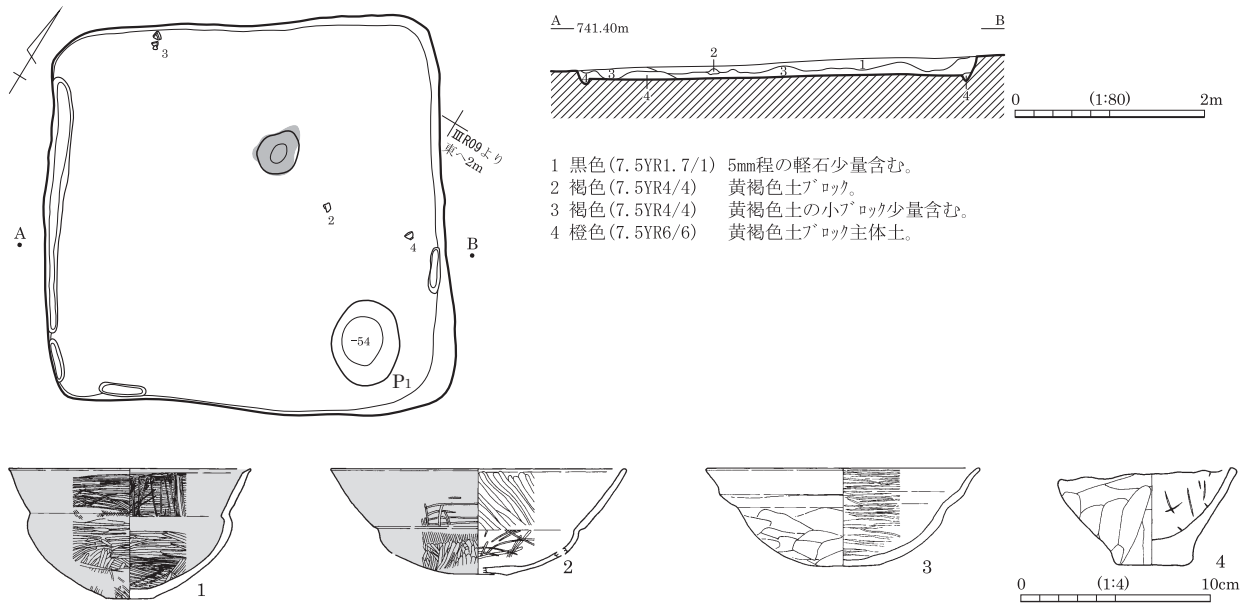
器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他	
	箱清水系	砂甕	その他	箱清水系	その他					カム・フホ類	カタツ・フホ類					
個体	2	2	38	1	6	2	4	3			26	12				
重量(g)	8	665		710	45		417	105			151	33			114	ミチュウ壺1 (26g)

第8表 SB01 出土土器集計表

柱穴は不明。周溝は西壁下ではほぼ廻るが他は南・東辺に一部見られるのみである。

炉：中央やや奥壁寄りにあり、浅い掘り込みをもつ地床炉。

遺物分布：出土遺物は極めて少なく破片資料が多い。



第12図 SB03 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高環	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ甕	その他	箱清水系	その他					カキ・ツボ類	カサネ・ハケ類				
個体			4		1		5				21				
重量(g)		45			80		439			300				18	

第9表 SB03 出土土器集計表

**出土遺物：**甕はハケ甕片が少量、壺は底部片1個体と小片のみで、図示できるものは小型丸底土器・鉢類である。1は赤彩され、丁寧にミガキが施される。底径は小さく、胴上部が括れる。器高より口径が大きい。2も外面が赤彩され、胴部中程で括れ、口縁が大きく開く。口径が大きく浅い。3は胴上部に段を持ち、口縁が開く。4は厚い底部から内彎気味に立ち上がる。外面はヘラケズリ。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期後半。

**SB05** [第13・14図 PL 2・5・8]

**位置：**1区中央部東側、ⅢM 20・25, N 16・21 グリッド。SB06が北東5m程に近接する。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**住居埋土は上下2層に分けられ、上部は黒色土・下部は軽石流起源の黄褐色土ブロックを多く含む褐色土となる。住居北半では2層上面に被熱した部分が認められ、遺物もこの上層から出土している。人為的埋没の可能性もある。

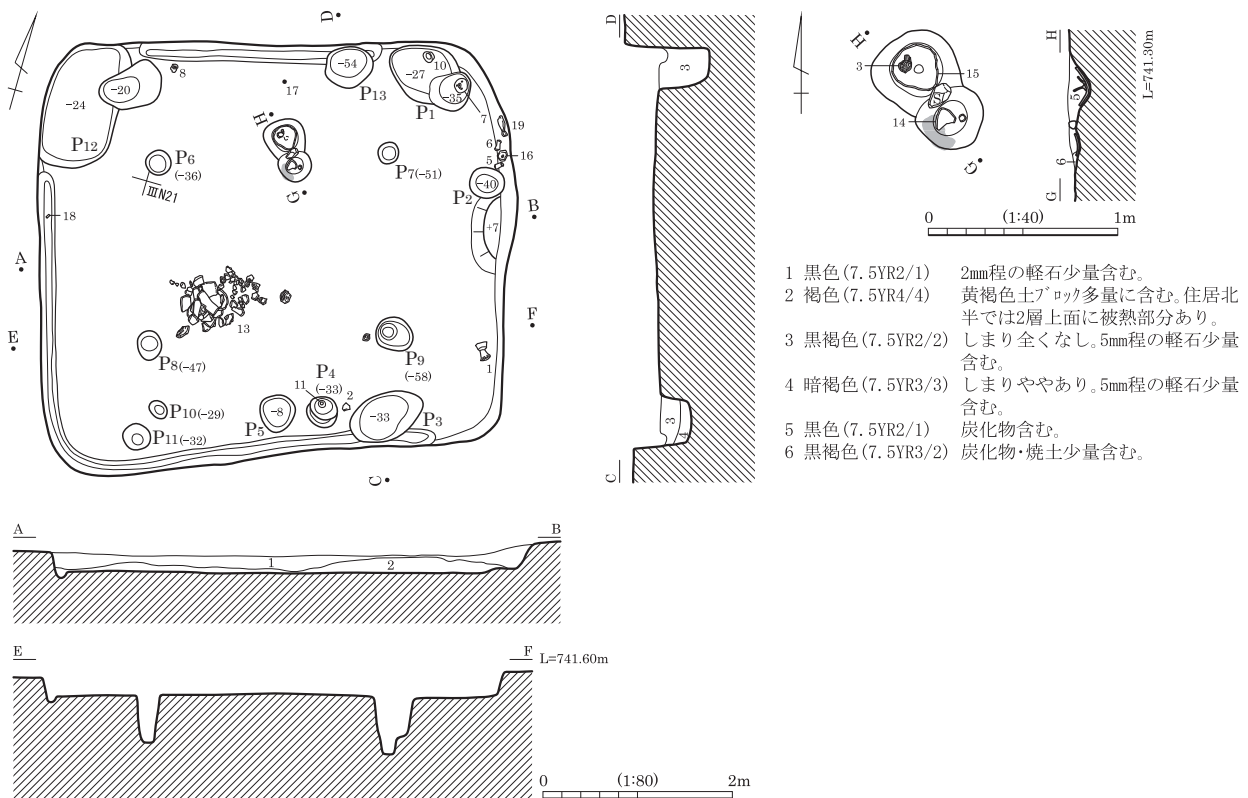
**構造：**南北4.22m、東西4.80mと東西に長い隅丸方形を呈する。主軸方向はN 18° W。壁高は20～32cm程度を測る。ピットは12基検出され、P 6・P 7・P 8・P 9の4本が主柱穴と考えられる。P 4・P 5は出入り口部施設に関係するのかわ。P 12は貯蔵穴の可能性が高い。周溝は東壁を除いて廻る。東壁中央部が80cm程の幅で、床面より7cm程高く掘り残され段状となっている。

**炉：**中央部やや奥壁寄りにあり、土器埋設の地床炉が重複しており、つくり替えがされている。浅い掘り込みの底面に壺胴下半部を敷いている(14・15)。

**遺物分布：**13は2層上面で押しつぶされた状態で出土した。7・10はP 1の底面直上から出土。18の管玉は西側周溝直上、17の白玉は炉北側の床面直上から出土した。

**出土遺物：**出土量が検出遺構の中では最も多く、器種組成も豊富である。13は受口状の口縁部をもつ壺で、胴下半部には稜をもつ。口縁部・頸部下の櫛描波状文、頸部に簾状文を施している。14・15は炉に埋設されていた壺胴下半部で15は胴下半部の稜を消失し球胴状となる。12は二重口縁を持つ壺。1～6は高坏。1は坏身部が深く、直立的に開く。3は開脚する高坏脚部。4～6は柱状の脚部で裾が屈折する。7・8は小型器台。「ハ」の字に開脚し円形透かしを持つ。受部との間は貫通する。10・11は小型丸底土器。10は底部が丸底風となり胴中半で括れて口縁部が外反する。口径が器高より大きい。11は丸みを持った厚手の胴部で、底部はやや上げ底状となる。16は甑で底部中央に単孔が開く。17は珪質砂岩製の白玉。18は緑色凝灰岩製の管玉。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期後半。

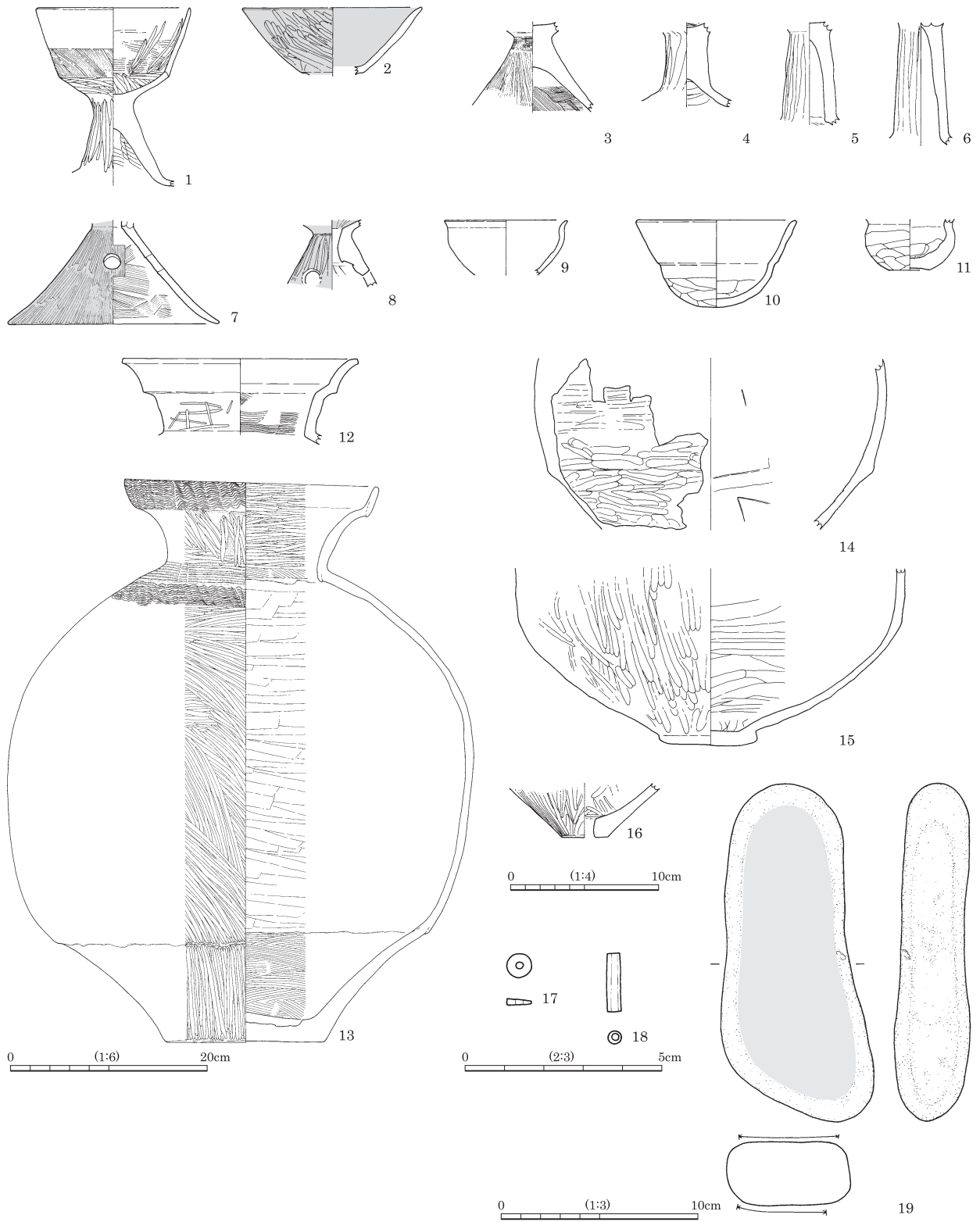


第13図 SB05 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甑	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハ甕	その他	箱清水系	その他					カメ・ツボ類	カサ・付類				
種類	1	5	2	3	5	2	9	5	2	1	1	4	20		
個体 重量(g)	12	52	56	8870	70	826	235	44	79	125	94			83	

第10表 SB05 出土土器集計表





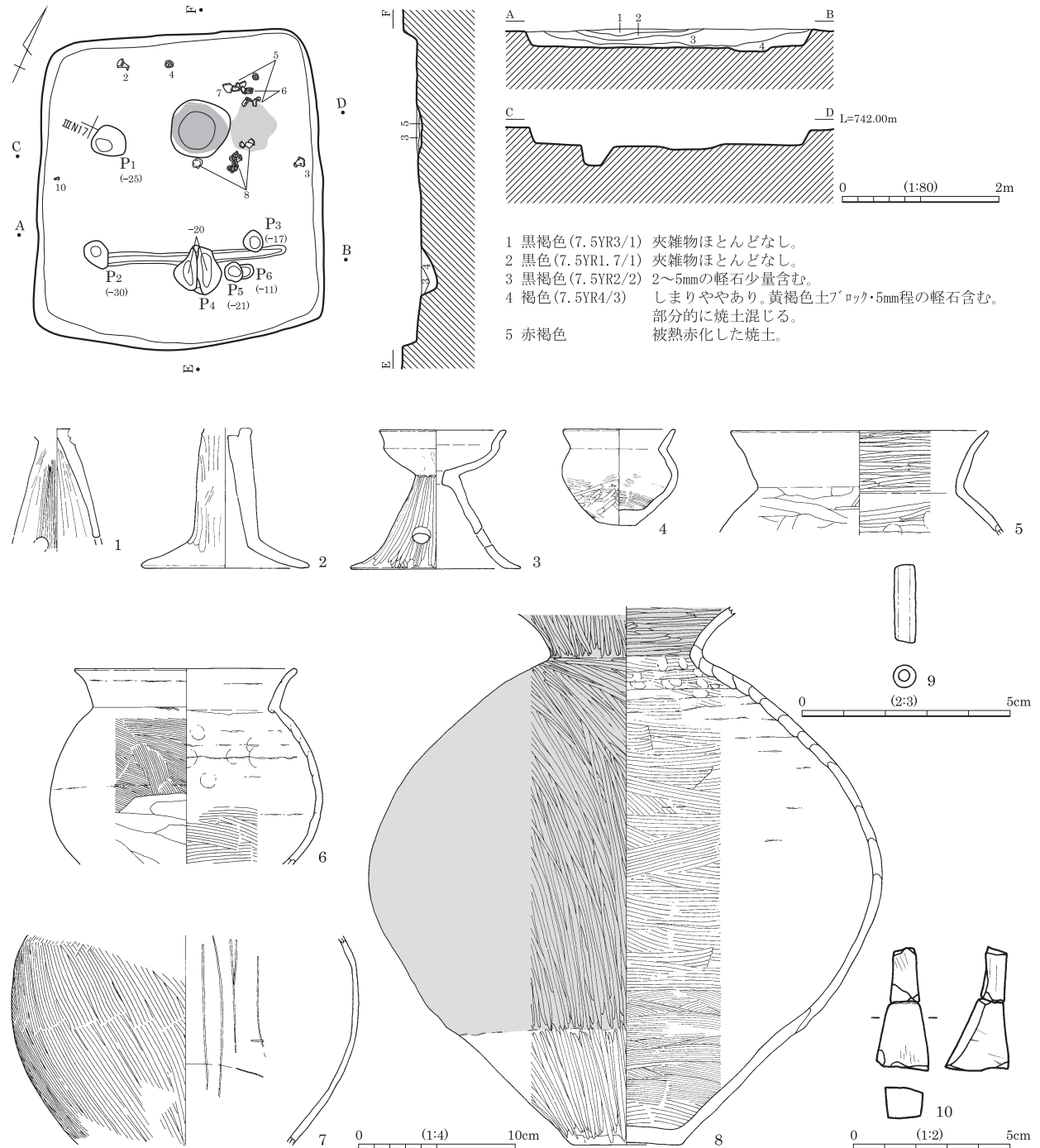
第14図 SB05 遺物図

SB06 [第15図 PL 2・5・6・8]

位置：1区中央部東側、ⅢN 11・12・16・17グリッド。SB05が南西5m程、SB06が北西10m程にある。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

埋土：壁際や床面近くは軽石流起源のブロックを含む褐色土となるが、上部は黒色・黒褐色土となる。



第15図 SB06 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハ甕	その他	箱清水系	その他					カメ・フタ類	残片・片類				
個体	2	51	1	1	61	1	2	1	1	307	7	3			
重量(g)		772	63	1613	228		190	80	140	2529	53	51		480	

第11表 SB06 出土土器集計表

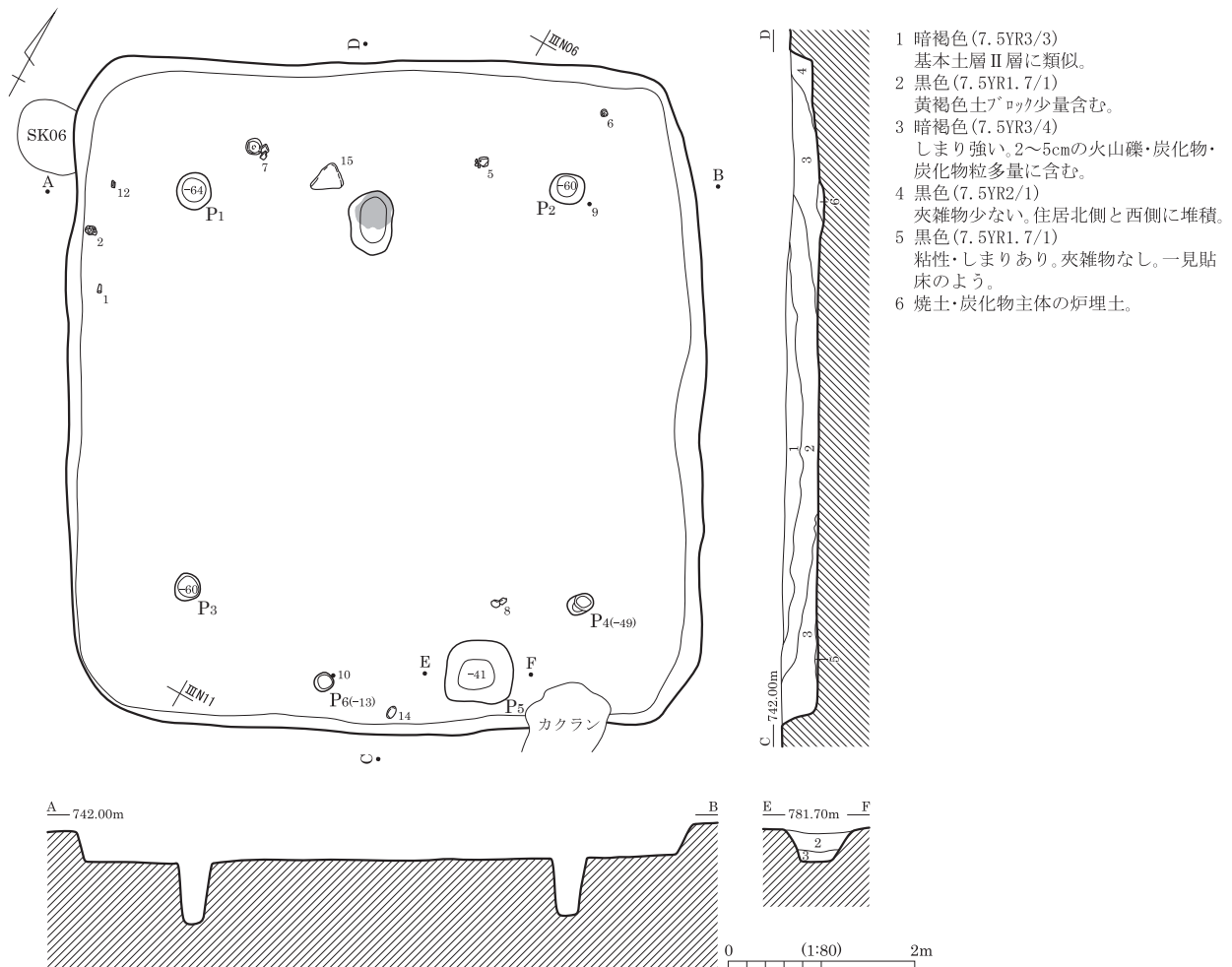
**構造：**南北 3.86 m、東西 3.48 mを測る隅丸方形を呈する。主軸はN 29° W。壁高は最大 27cm、平均では 15cm程度。ピットは6基検出され、P 1・P 2・P 3の3本が支柱穴と考えられる。北東部の柱穴想定部では床面に被熱した部分がみられたが、柱穴は確認できなかった。P 2とP 3を結ぶように浅い溝が直線的にみられ、住居内の間仕切りに関係するものであろうか。

**炉：**中央部やや北側で柱穴間に位置する。地床炉でよく被熱し、焼土が炉内に堆積している。また、炉東側の床面にも被熱した部分が認められた。

**遺物分布：**多くは床面から 15～20cmほど浮いた埋土3層以上からの出土である。

**出土遺物：**6・7はハケ調整の甕で、6は口縁部が「く」の字に外反し、胴部は球胴状となる。8は赤彩された箱清水系の壺で、胴下半部に僅かに稜を残し、球胴状となる。頸部に文様はない。1・2は柱状の高坏脚部。脚部裾で屈折し短く開く。1は円形透かしを持つ。3は小型器台で、受部は有段の塊状となり脚部は開脚し円形透かしを持つ。4は小さな平底で口縁部が短く外反する。9は石英質砂岩製の管玉。10は凝灰岩製の小型砥石。柱状で四面全てを使用していて、湾曲する砥面もある。

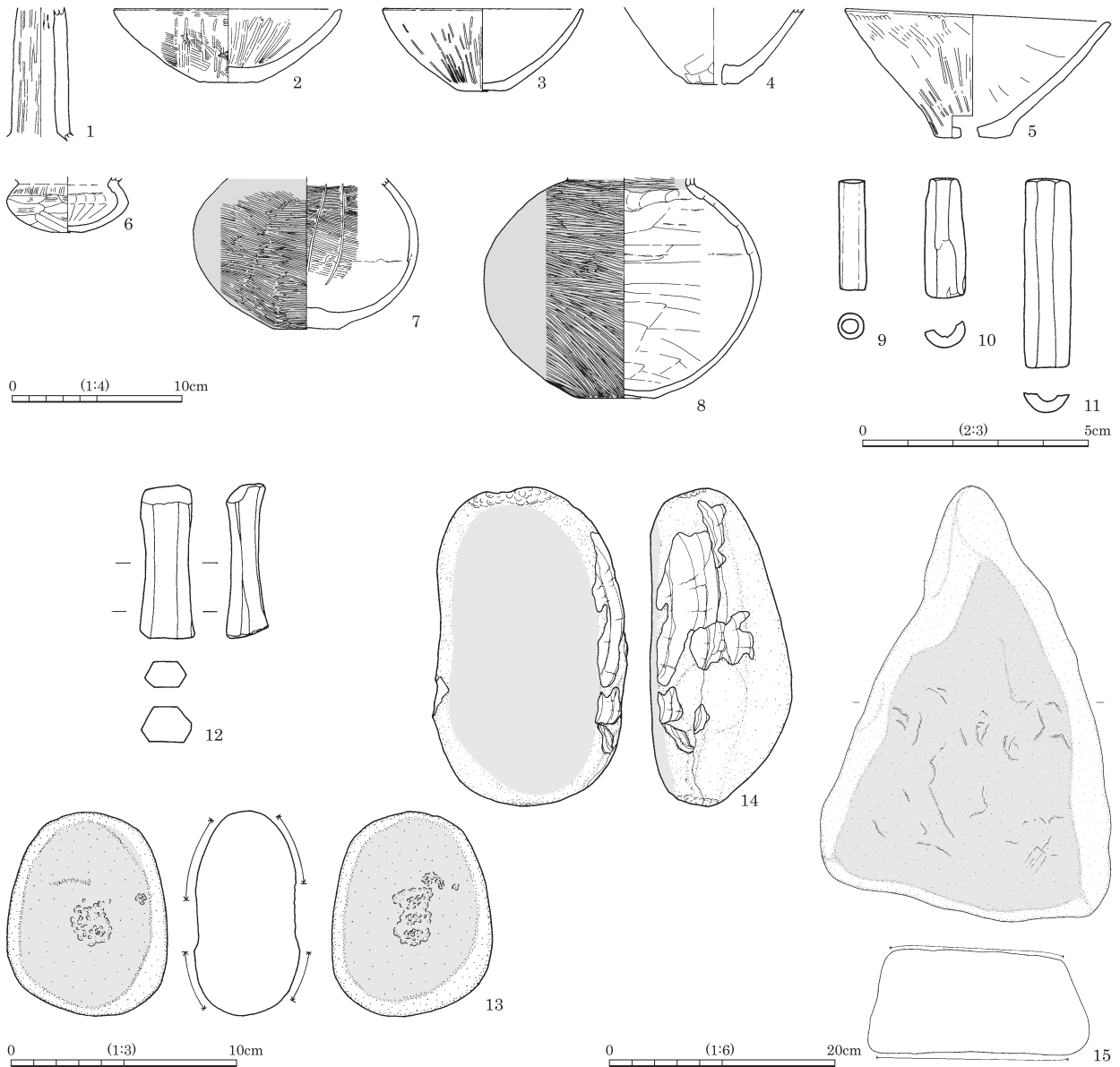
**時期：**出土遺物から古墳時代前期後半。



第16図 SB07 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カマ・埴類	カマ・埴類				
個体	1	14		2		1	4		2	118	49	12			
重量(g)		131		570		88	246		185	881	148	404		108	

第12表 SB07 出土土器集計表



第17図 SB07 遺物図

SB07 [第16・17図 PL 3・6・8]

位置：1区中央部、ⅢM 10・15, N 06・11 グリッド。SB05・06の北西10～13mにあたる。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で暗褐色土の落ち込みとして検出。北西部に重なるSK06を切る。

埋土：北壁下から西側にかけて夾雑物の少ない黒色土が堆積し、中央部は炭化物等を含む暗褐色土や黒色土となる。南壁よりやや内側の床面上に一見貼床状にしまった黒色土が認められた。

構造：南北7.00m、東西6.40mの隅丸方形を呈し、検出住居では最大規模である。主軸方向はN 30°Wで、東側に近接するSB06と類似する。検出面からの掘り込みは深く、壁高は30～40cmを測る。ピットは5基検出され、P1・P2・P3・P4の4本が支柱穴となる。南壁下のP5は一辺70cm程の方形の貯蔵穴で床面からの深さ41cmを測る。周溝は認められない。

炉：中央北側の柱穴間に存在し、浅い掘り込みをもつ地床炉である。炉北西の床面には扁平な台石が置かれていた。

遺物分布：図示した遺物はほとんどが床面および床面直上から出土した。

**出土遺物：**7・8は赤彩された小型壺。底部は小さくやや上げ底状となる。胴部は球状で、丁寧なミガキが加えられている。1は柱状の高坏脚部。2・3は碗状に開く鉢。6は小型丸底土器の扁球状胴部で、屈曲して広がる口縁部は欠損する。4・5は底部に単孔をもつ甑。5は直線的に開く鉢状。9～11は緑色凝灰岩製の管玉で、10・11は長軸方向に半損する。12は凝灰岩製の砥石で、長方体の各面全体を使用しており、砥面は湾曲する。13・14は磨石の類で、13は中央部に敲打による凹みがあり平坦部は磨れて摩耗している。15は炉の近くに設置されていた台石で上下の平坦面が磨れている。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期後半。

**SB08** [第18図 PL 3]

**位置：**1区中央部東側、Ⅲ I 24・25グリッド。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。住居中央部をSK08に切られる。

**埋土：**黒褐色土の単層。

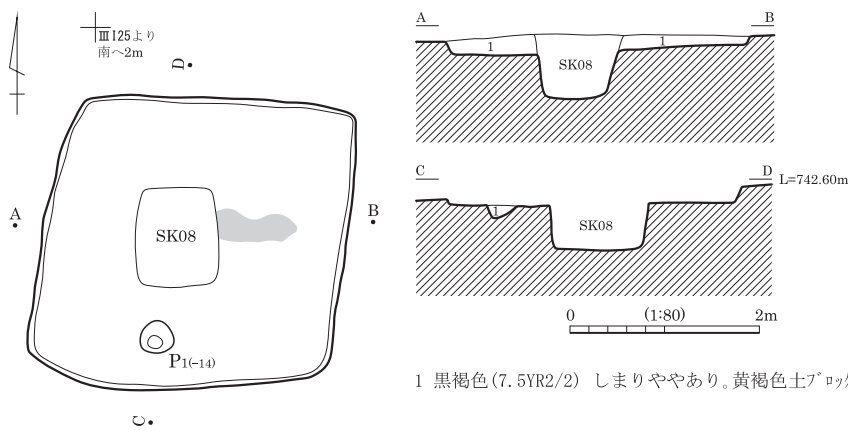
**構造：**一辺3m程の隅丸方形を呈する。主軸方向はN6°E。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は16cm以下が多い。特に北壁は埋土と壁との差が不明瞭となる。ピットは中央部南壁寄りに1基検出されたのみである。配置から柱穴とは考えにくい。周溝は認められない。

**炉：**炉としては認定できなかったが、住居中央部に被熱した床面が見られた。SKに壊された部分に炉が存在した可能性がある。

**遺物分布：**埋土内からわずかに出土したのみ。

**出土遺物：**出土遺物は20点程と非常に少なく、古墳時代前期の甕・壺・高坏等の小片等である。

**時期：**住居形態、わずかな出土遺物から古墳時代前期と想定する。



第18図 SB08 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハコ	その他	箱清水系	その他					カマ・フタ類	カサネ・ハケ類				
個体				2		1				15	3				
重量(g)				15		14				152	10			15	

第13表 SB08 出土土器集計表

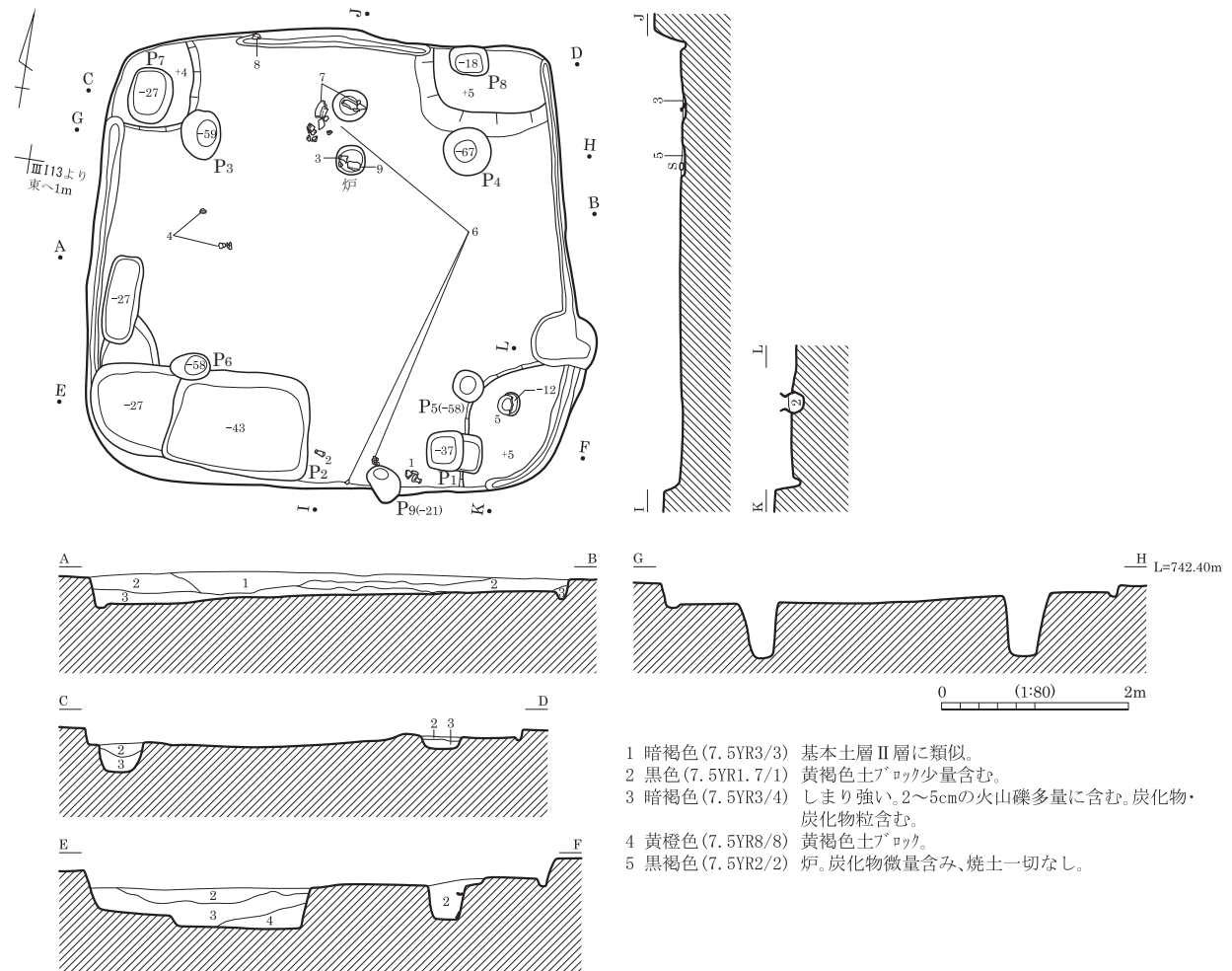
SB09 [第19・20図 PL 3・6・8]

位置：1区中央部北側、Ⅲ I 08・13グリッド。SB08が南東20m程、SB10が西側10m程にある。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で暗褐色土土質の違いにより検出。

埋土：3層に分層され、下部は炭化物等を含む暗褐色土で上部は黒色土や暗褐色土となる。

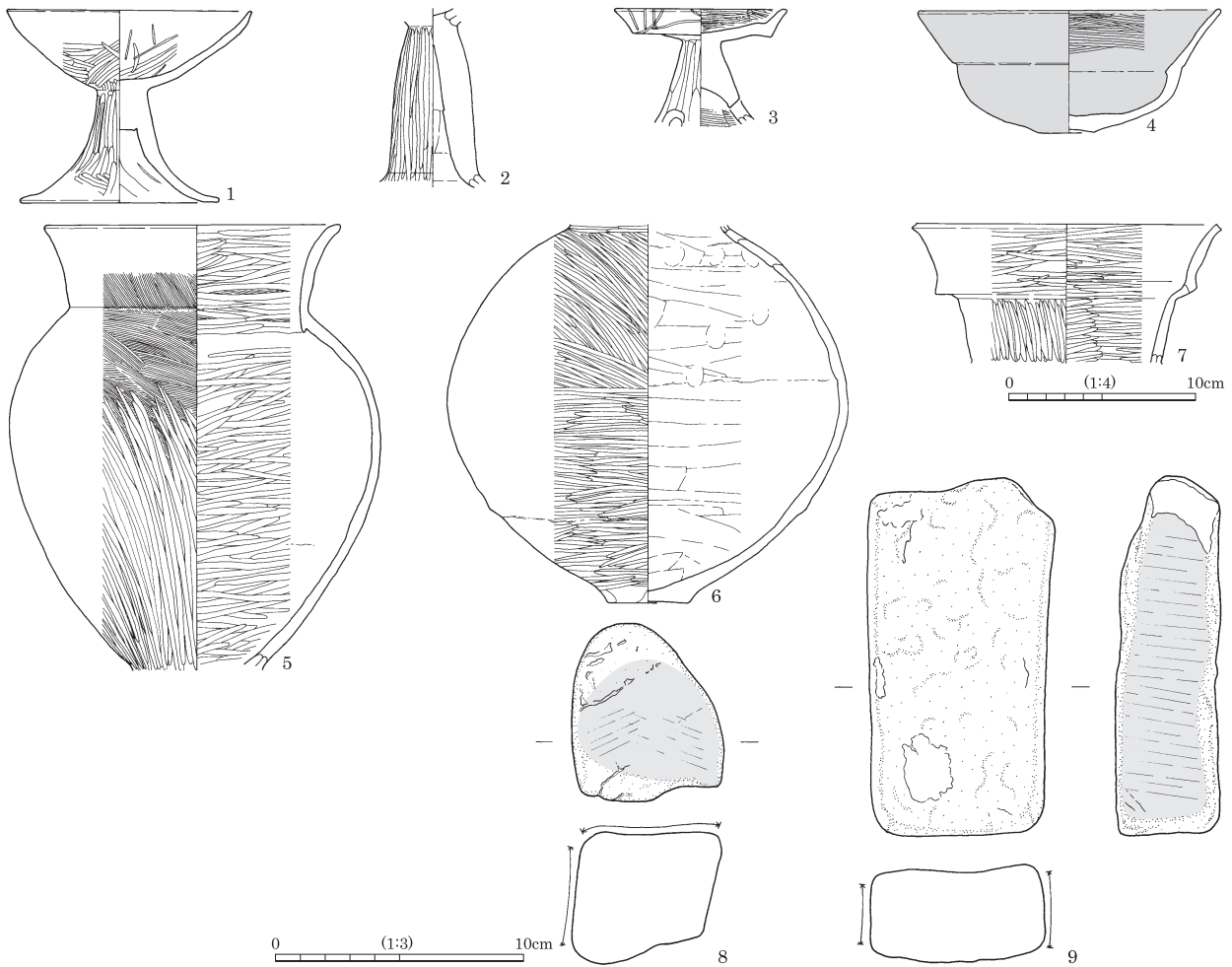
構造：南北4.78m、東西5.04mと東西にやや長い隅丸方形を呈する。主軸方向はN6°Wで、近接するSB10と類似する。検出面からの掘り込みが比較的深く、壁高は最大34cmを測る。南西を除く3ヶ所の隅には周囲の床面より4・5cm高くなるよう掘り残されたベッド状施設を持つ。施設内にピットが掘られ、南東部ではピットを囲むように甕（5）が設置されていた。また、南西部には底面に段差をもつ長方形の大きなピットが掘り込まれている。埋土は壁際に地山の軽石流ブロックを含む以外住居埋土と同じである。性格等は不明。支柱穴はP3・P4・P5・P6の4本と想定され、いずれも床面からの深さが60cm程と深い。南東部のベッド状施設に重なるように貯蔵穴が穿たれている。方形で東側に浅い段を持ち、床面からの深さは37cmを測る。



第19図 SB09 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハ甕	その他	箱清水系	その他					カマ・フタ類	残欠・ハ類				
個体	1	24	1	1	4	1	2	2	1		99	1			
重量(g)	1064	5		538	88		268	189	150		757	6			56

第14表 SB09 出土土器集計表



第20図 SB09 遺物図

**炉：**中央部奥壁寄りの主柱穴間に存在する。小規模な地床炉で、埋土内には炭化物がわずかに含まれるのみで焼土は認められなかった。

**遺物分布：**床面直上および床面から5～10cm浮いた2層からの出土が多い。

**出土遺物：**5の甕は口縁部が直立気味に開き、最大径は胴部上半にある。頸部から胴上部はハケ調整され、下半はミガキ。6は無彩の壺で、胴部は球状となり、胴下半にわずかに稜の名残が見られる。7は二重口縁壺の口縁部。頸部は直立ぎみで段端部は明瞭に屈折し、口縁部は弱く外反する。1は坩状の坏部に裾が開く脚が付く高坏。2は柱状の高坏脚部。3は小型器台で、受部は浅い皿状となり、脚部は開き円形透かしを持つ。4は赤彩された有段口縁鉢。底部は小さく上げ底状となる。胴部は丸みを持ち口縁部は直線的に開く。8は変成岩の礫で礫面の一部が磨られている。9は安山岩の礫を用い、側面が磨れている。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期後半。

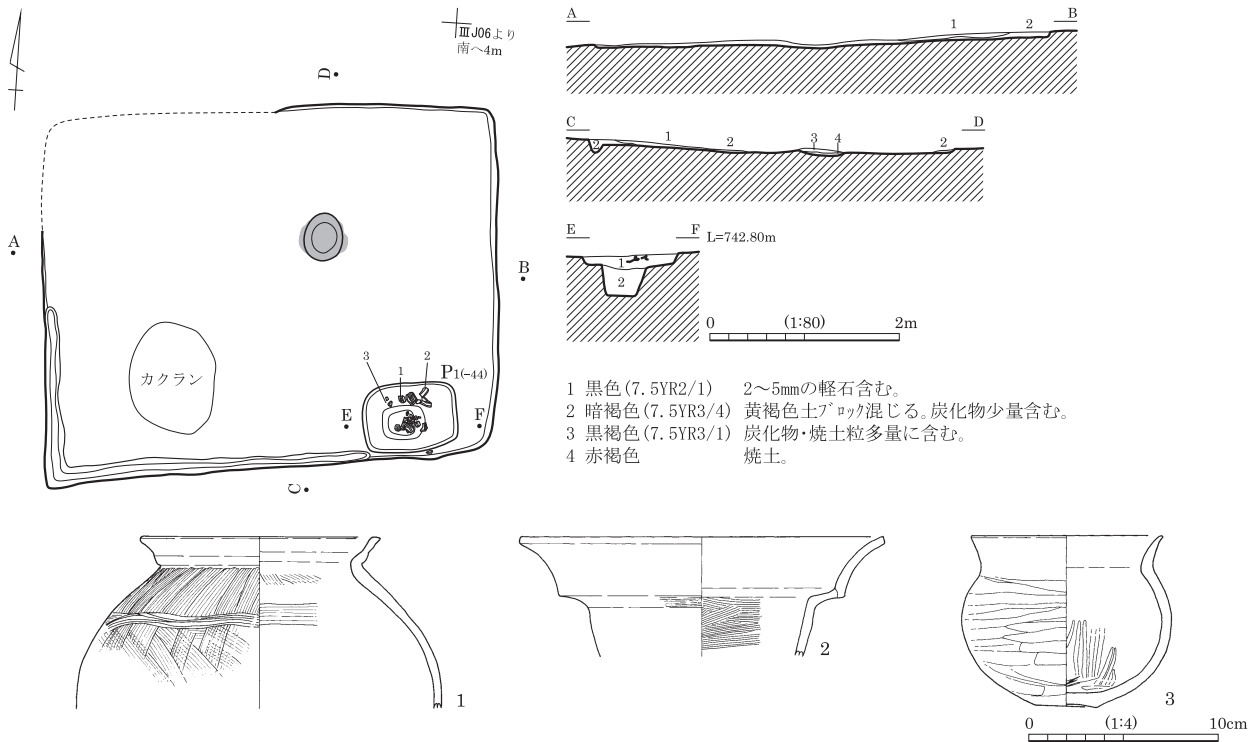
SB10 [第21図 PL 3・6]

**位置：**1区中央部北側、Ⅲ I 10・15, J 06・11 グリッド。SB09が西側10m、SB08が南側15m程にある。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒色土の落ち込みとして検出。北西部は削平されている。

**埋土：**床面近くが浅く残るのみで、軽石や軽石流起源のブロックを含む黒色土・暗褐色土。

**構造：**南北3.76m、東西4.72mと東西に長い長方形を呈する。主軸方向はN7°Wで近接するSB09と類似する。壁高は10cm弱に過ぎず、北西部分では壁は消失している。南西部付近は風倒木痕による攪乱を



第21図 SB10 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢 小型丸底	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カ・ツノ類	カサ・ハケ類				
個体		2	1		1		1			2	3				
重量(g)		55	265		110		185			15	8			9	

第15表 SB10 出土土器集計表

受けている。柱穴は検出されず、南東隅に貯蔵穴が認められた。貯蔵穴は二段構造となり、床面から10cm程の浅い方形の掘り込みの中央部が深さ30cm程方形に穿たれている。

炉：炉は中央部やや東寄りにあり、浅い掘り込み地床炉で底面に焼土層がみられた。

遺物分布：出土遺物は少なく、そのほとんどが貯蔵穴の上部掘り込み部から出土した。

出土遺物：1はS字状口縁甕。口縁部の屈曲は弱く、胴上部は縦方向、胴中程では羽状のハケ調整が施され、胴上半に横線が加えられている。口唇部は面取り状となる。2は二重口縁壺。頸部が開き気味に立ち上がり外に屈折して段を形成し、口縁部は外反する。3は底部がやや上げ底状となり、口縁部が短く外反する。胴中央部に最大径を持ち、口径と器高がほぼ同じ。

時期：出土遺物から古墳時代前期後半。

SB02 [第22図 PL 1]

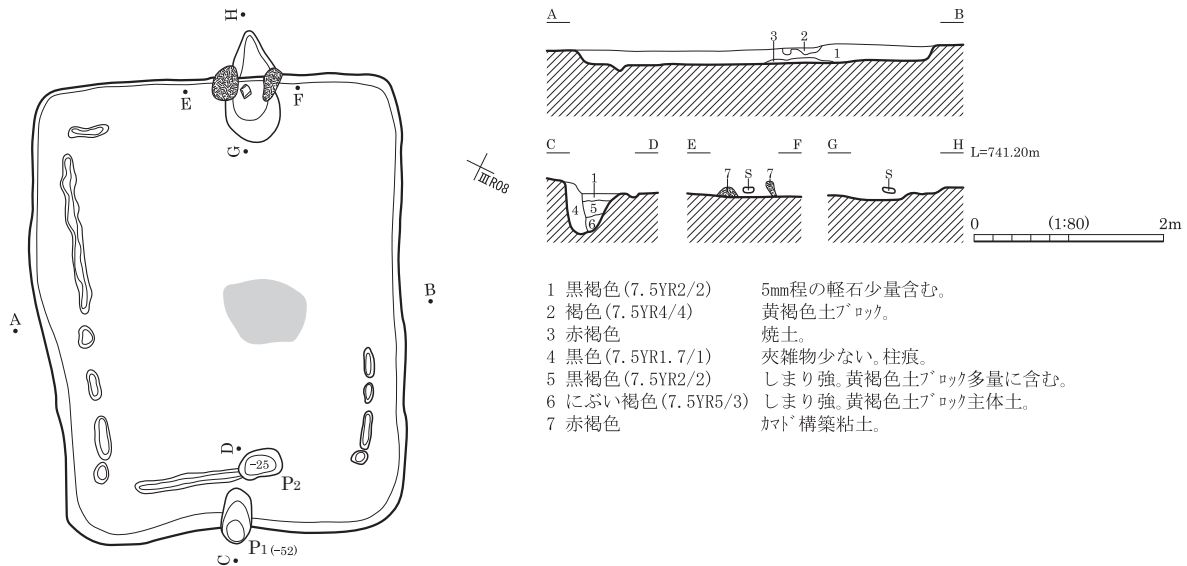
位置：1区南東部、ⅢR 02・07・08グリッド。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

埋土：ほとんどが軽石を少量含む黒褐色土。

構造：南北4.54m、東西3.72mの隅丸長方形を呈する。主軸方向はN 38°Wで、北側の田切り谷に向かう方向となる。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は10～15cm程度。床面は軟弱で、ピットは南壁と重なるものと、南壁からやや内側に入った位置の2基が検出され、P1は入口施設に関するものと想定したい。P2も位置から柱穴とは考えにくい。周溝は住居壁下よりやや内側にあり、北東側を除いてめぐっ





第22図 SB02 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	1														1		
重量(g)															10	53	

第16表 SB02 出土土器集計表

ているが途切れる部分が多い。

**カマド**：北壁中央部やや東側に構築される。赤褐色粘土を貼った袖の一部が遺存するのみである。カマド内の被熱は弱い。カマド以外に住居中央部付近に焼土が認められ、床面が被熱している。

**遺物分布**：極わずかな土器片が出土したのみ。

**出土遺物**：出土土器は無彩の鉢類片1点と詳細不明の土器片4点のみで時期を特定できる遺物はない。

**時期**：出土遺物からは時期決定できないが、カマドを持つことから古墳時代後期以降といえよう。

SB04 [第23図 PL 2・8]

**位置**：1区南東部、ⅢM 25, R 05 グリッド。

**検出**：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒色土の落ち込みとして検出されたが、やや不鮮明。

**埋土**：黒色土の単層。

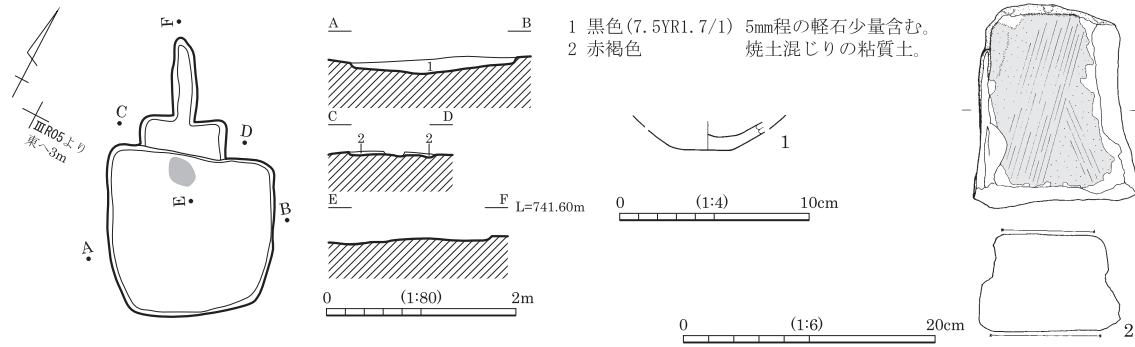
**構造**：一辺約1.7m弱の極めて小さい隅丸方形を呈する。主軸方向はN 28° Wで、同じくカマドを有するSB02と似た方向を示す。検出面からの深さは5cm程度と非常に浅く、壁も不明瞭。ピット等の付属施設は認められず、床面は中央部がやや低くなる。周溝もみられない。

**カマド**：北壁中央に構築される。北壁を大きく掘り込み、そこから長い煙道が延びる。燃烧部は壁下に見られるが、被熱は弱い。壁から張り出した部分には焼土混じりの赤褐色の粘質土が広がっており、カマド構築土の残存部と思われる。

**遺物分布**：土器片がわずかに出土したのみ。

**出土遺物**：1はヘラ削りの長胴甕底部片。他は土師器甕の小片。2は安山岩の台石で上下面が磨れる。

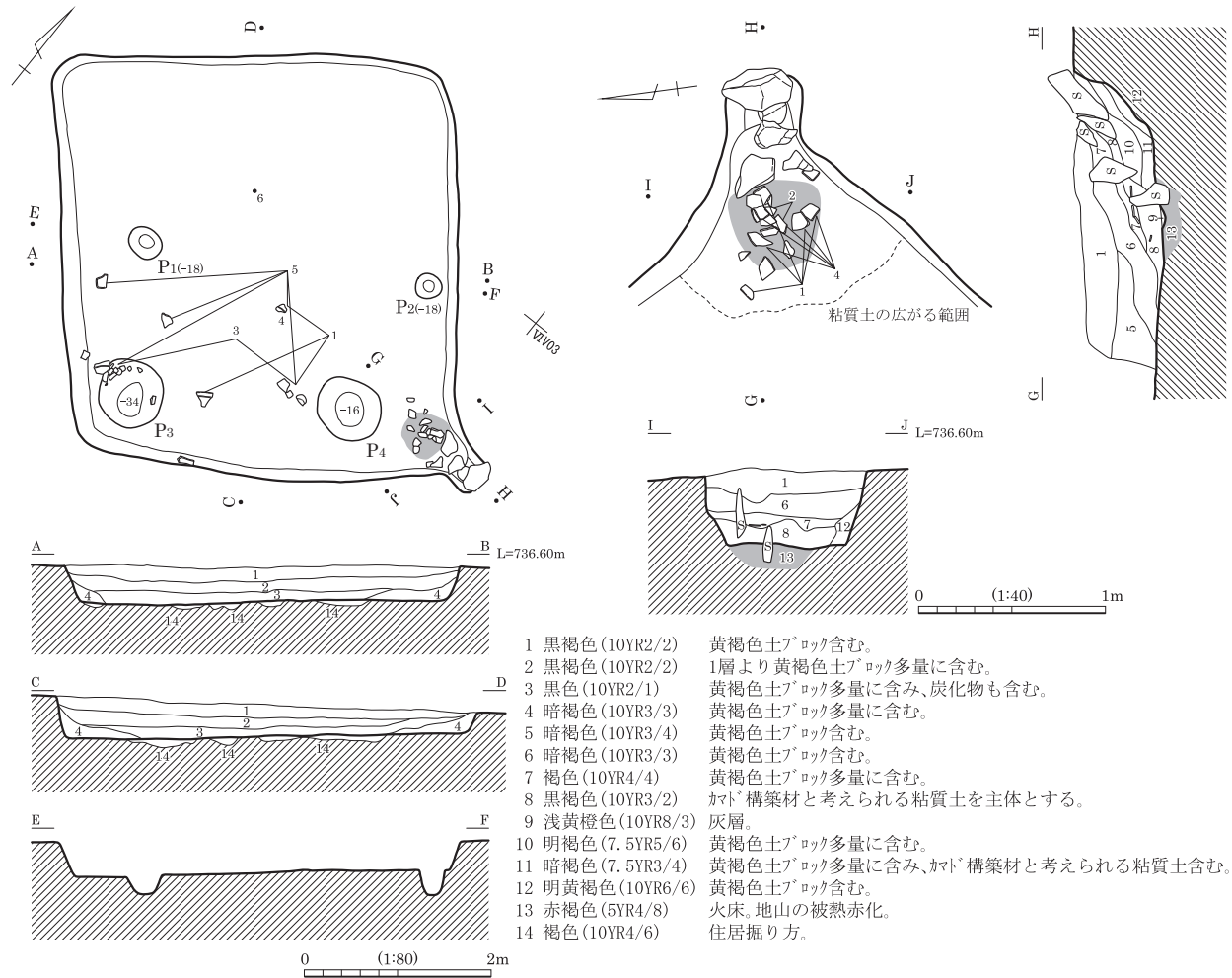
**時期**：カマドの存在や図化した遺物から古墳時代後期以降と考えられる。



第23図 SB04 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
種類									1	3							
個体	点数								45								
重量(g)																7	

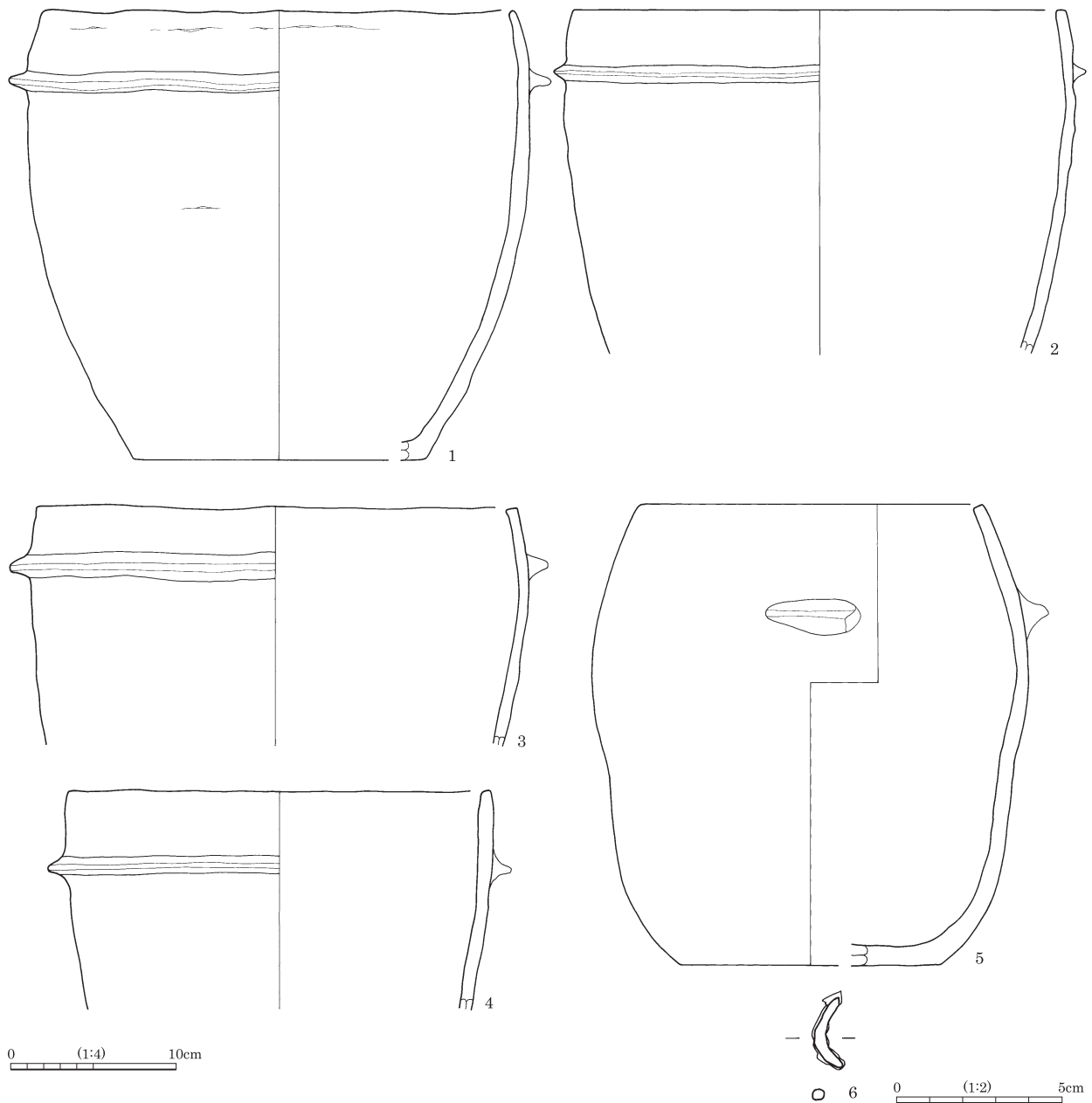
第17表 SB04 出土土器集計表



第24図 SB11 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
種類											6	47					
個体	点数	3								1	6	47					
重量(g)		9								90	7790					5	

第18表 SB11 出土土器集計表



第25図 SB11 遺物図

SB11 [第24・25図 PL 4・7]

位置：3区南東部、VI Q 22, V 02・03 グリッド。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面。トレンチによる確認調査時にカマドの一部を確認。周辺を漸移層上部まで除去して検出。遺構上部は造成や耕作・樹木などにより大きく削平・攪乱を受ける。

埋土：壁際に軽石流起源のブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、遺構中央部などは黒・黒褐色土となる。

構造：南北 4.32 m、東西 3.94 m の隅丸方形を呈する。主軸方向は N 40° W で西側に位置する SB13 と類似する。検出面からの掘り込みは 25 ~ 44cm と比較的深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 4 基検出され、P 1・2 は住居中央の東西両壁際に位置し柱構造に関係するものか。南西隅の P 3 は貯蔵穴と思われる。土器片や炭化物が埋土に含まれる。P 4 はカマド手前にあり性格は不明。

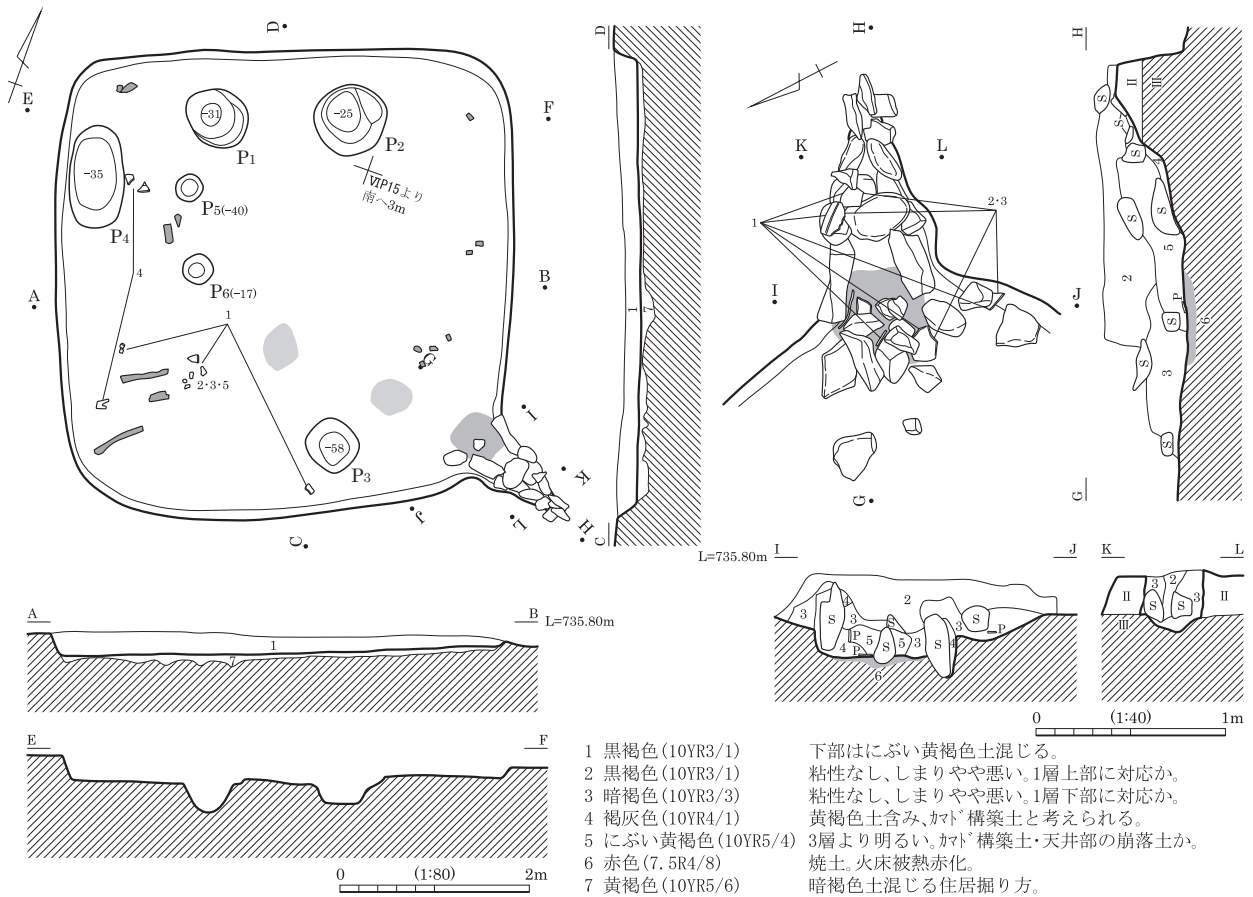
カマド：南東隅に礫と粘土を用いて構築され、カマド内から前面にかけて構築礫や粘質土が広がっている。住居の南東隅を大きく外側に掘り込み、そこに大形の礫を据え粘質土で覆った構造と考えられる。両袖に

構築礫や粘土の一部が遺存している。煙道部にも大形の礫が遺存しており、天井石の可能性はある。煙道部は急角度で立ち上がる。カマド手前には被熱赤化した火床が明瞭に残り、上面には灰層もみられた。支脚も礫を用いて設置している。

**遺物分布：**出土遺物は非常に少なく、ほとんどが羽釜片でカマド周辺やP3の周辺から出土している。他に鉄製品が住居中央部床面から1点出土している。

**出土遺物：**図化できた遺物は羽釜のみである。1～3は厚手で大きな平底から直立気味に立ち上がり、口縁部付近でやや内彎する。輪積み成形。鏝は口縁下を全周する。4は口縁まで直立。5は胴部がやや膨らみ口縁部が内彎する。鏝は把手状に粘土紐を部分的に貼付している。これ以外は土師器坏片と須恵器甕片がわずかに出土したのみである。6は彎曲した鉄製品。

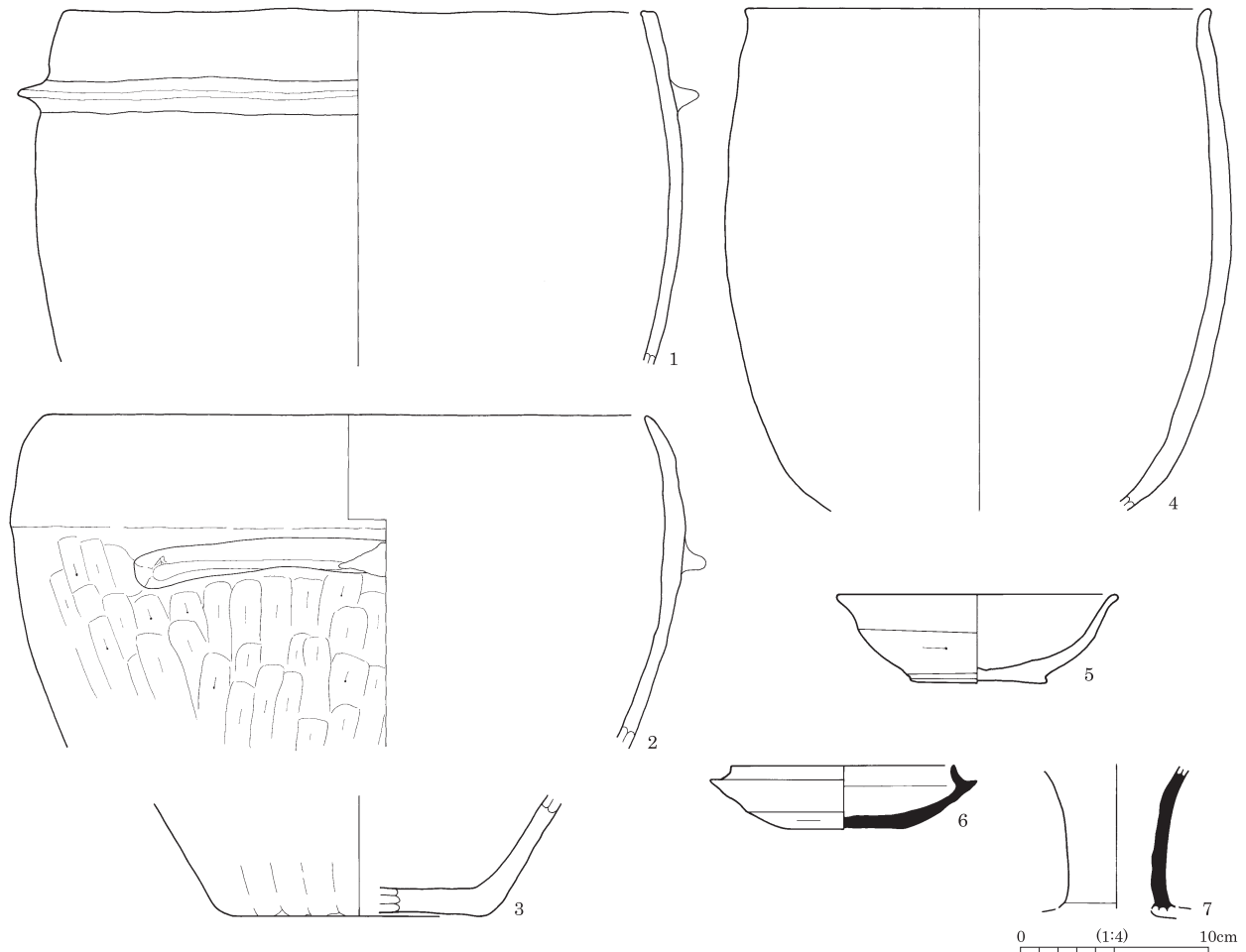
**時期：**出土遺物・住居形態から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。SB12・13も類似した住居形態をもつことから同時存在の可能性はある。



第26図 SB12 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	瓶	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	1	7									3	27			5		
重量(g)	211		60								4435		113		93	183	

第19表 SB12 出土土器集計表



第27図 SB12 遺物図

SB12 [第26・27図 PL 4・7]

位置：3区北東部、VI P 14・15グリッド。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面。トレンチによる確認調査でカマド煙道部と住居東壁部が確認され、周辺を拡張して検出。

埋土：黒褐色土の単層で、床面近くに炭化物を少量含む。カマド部煙道部の検出状況から住居は基本層序Ⅱ層中から掘り込まれていることが確認された。

構造：一辺4.7m程の隅丸方形を呈する。主軸方向はN 23° Wで、3区検出の他の2軒とはやや方向を異にする。壁高は20～30cm程度で、南壁の立ち上がりはやや不明瞭である。床面は浅く貼られるが堅緻ではない。ピットは6基検出され、P 1～P 3が柱穴と考えられる。P 5・P 6は床下で検出。床面には炭化材や炭化物が散在しており、特に住居西側に多く認められた。また、カマド手前と住居中ほどに焼土が検出された。いずれも床面が数cm被熱赤化している。

カマド：南東隅に設置される。大形の礫を用いて構築され、住居外側へ非常に長い煙道部を持つ。天井部などは破壊されているが遺存状態は比較的良好である。カマド袖及び住居外へ1m程伸びる長い煙道部両壁に礫を据え、天井を大形の礫で塞いでいる。燃烧部はよく被熱赤化している。

遺物分布：出土遺物量は少ない。羽釜片がほとんどで、カマド周辺や床面直上から出土している。

出土遺物：1は鏝が全周する羽釜。口縁部はやや内彎し、口唇部は平坦となる。2は鏝が部分的な貼付で、内彎した口縁は先細りとなる。胴部は縦のケズリ。4は羽釜と同質で鏝を持たないもの。深鉢形で口縁下

で僅かに外反する。5は口径15cm弱の大型土師器杯。底部は糸切り。6は強く内傾する短い立ち上がりを持つ須恵器杯。7は須恵器長頸壺の頸部。5～7はいずれも埋土中の出土で、流れ込みか。

時期：出土遺物・住居形態から、平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。

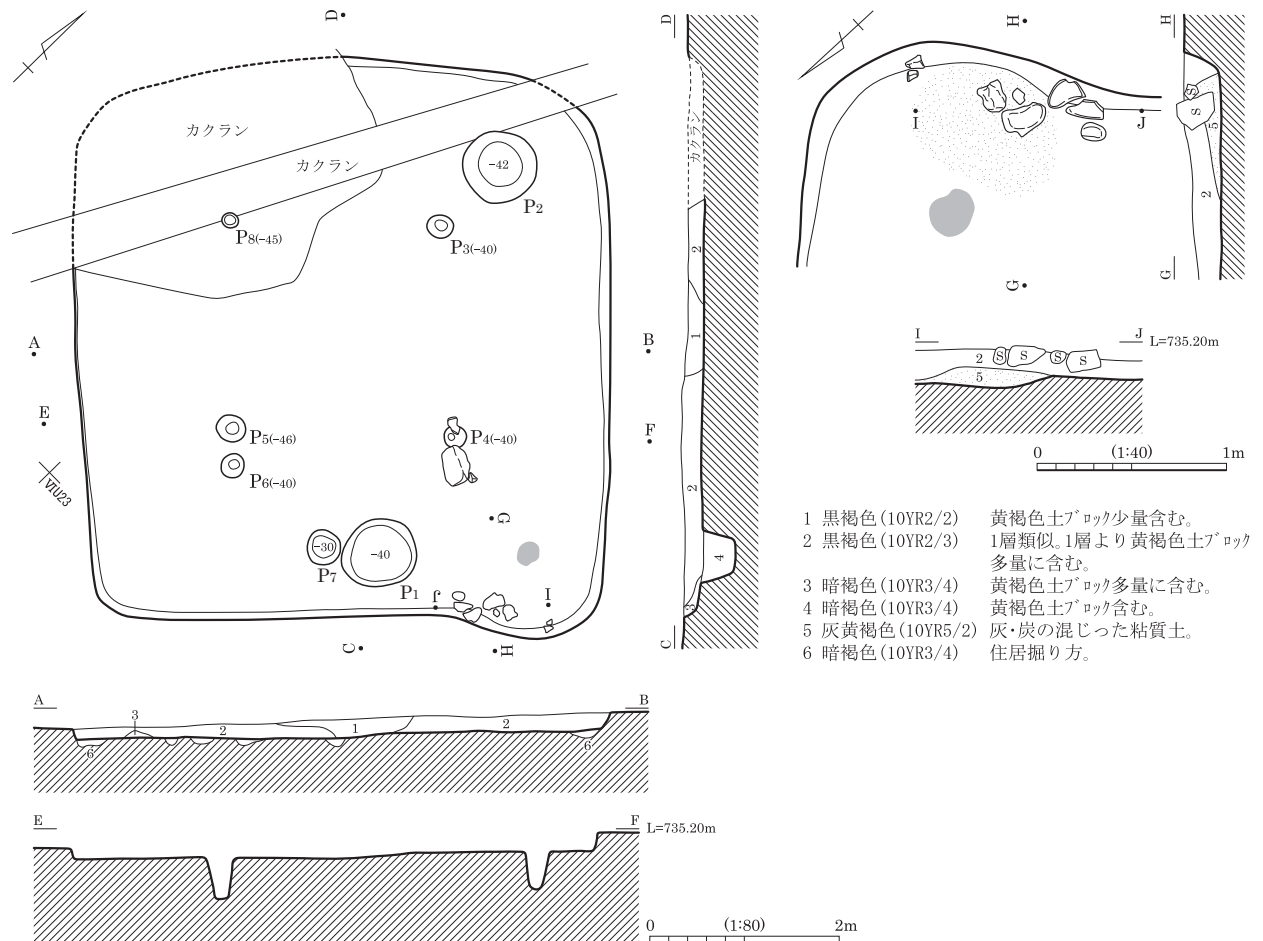
SB13 [第28図 PL 4]

位置：3区南西部、VIU 17・18・23グリッド。

検出：他の2軒と同様にトレンチによる確認調査で住居北東部を確認し、周辺を拡張してⅢ層浅間第一軽石流上面で検出した。北西部は造成や伐痕などにより攪乱を受けている。

埋土：地山の軽石流起源の黄褐色土ブロックを多く含む黒褐色土を主体とし、中央部は黒褐色土となる。

構造：南北5.76m、東西5.52mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN47°Wを測り、東側40m程に位置するSB11と類似する。壁高は20cm程度と浅い。床面は後世の耕作などの影響を受けた部分が多いがカマド前面は硬化している。ピットは6基検出され、P3・4・5・6・8が柱穴と考えられるが、いずれも床面精査段階では明確でなく床下調査段階で確認された。P1は貯蔵穴か。P2には拳大から人頭大の角礫



第28図 SB13 遺構図

器種	坏			碗			蓋	高坏	甕		羽釜	瓶	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	6		2							1							
重量(g)	31		19							75							

第20表 SB13 出土土器集計表

が25個投入されていた。被熱したものが多く、廃棄されたカマド構築材の可能性はある。

**カマド**：南東隅に痕跡として確認された。カマド構造は不明だが、人頭大程度の礫が周辺に散在したことから、他の住居と同様に礫を構築材としたものと考えられる。赤化した火床と炭・灰層の広がり確認できた。

**遺物分布**：極わずかな土器片が埋土中から出土したのみ。

**出土遺物**：出土土器は少量の土師器坏片などで図化できる資料はない。

**時期**：わずかな出土遺物からは時期決定できないが、住居形態の類似性などから他の2軒と同時期と想定される。

## 2. 土坑

土坑はほとんど出土遺物がなく、構築時期やその用途など不明なものが大半である。ここでは、各土坑の形状により記載していく。

### SK05 [第29図 PL 4]

**位置**：1区南東部、ⅢM 19グリッド。SK07がすぐ北側に近接する。

**形状・構造**：長径148cm、短径129cmの円形を呈する。断面形は逆台形で上部がやや広がる。底面は中央部がやや凹むがほぼ平坦となる。検出面からの深さは108cmを測る。埋土は上部が黒色土で、下部や壁際は地山の軽石流起源のブロックを含む褐色土となる。底面直上には夾雑物の少ない黒色土が薄く堆積している。坑底に杭設置痕などの施設はないものの、掘り込みが深く上方が開く形状や埋土の状況が近津遺跡群の陥し穴と類似することなどから陥し穴の可能性が考えられる。

**時期**：遺物出土がなく時期は決定できない。縄文時代の陥し穴と想定する。

### SK07 [第29図 PL 4]

**位置**：1区南東部、ⅢM 19・20グリッド。SK05がすぐ南側に近接する。

**形状・構造**：長径104cm、短径95cmの円形を呈する。断面形は逆台形で上部がやや広がる。底面は中央部がやや凹むがほぼ平坦となる。検出面からの深さは53cmでSK05と比較すると浅い。埋土は壁際に崩落土と考えられる暗褐色土、他が黒色土堆積となる。形状や埋土の状況が近接するSK05と類似しており、坑底施設はないものの陥し穴の可能性が考えられる。この場合、陥し穴が2基並列して構築されていたとも考えられる。

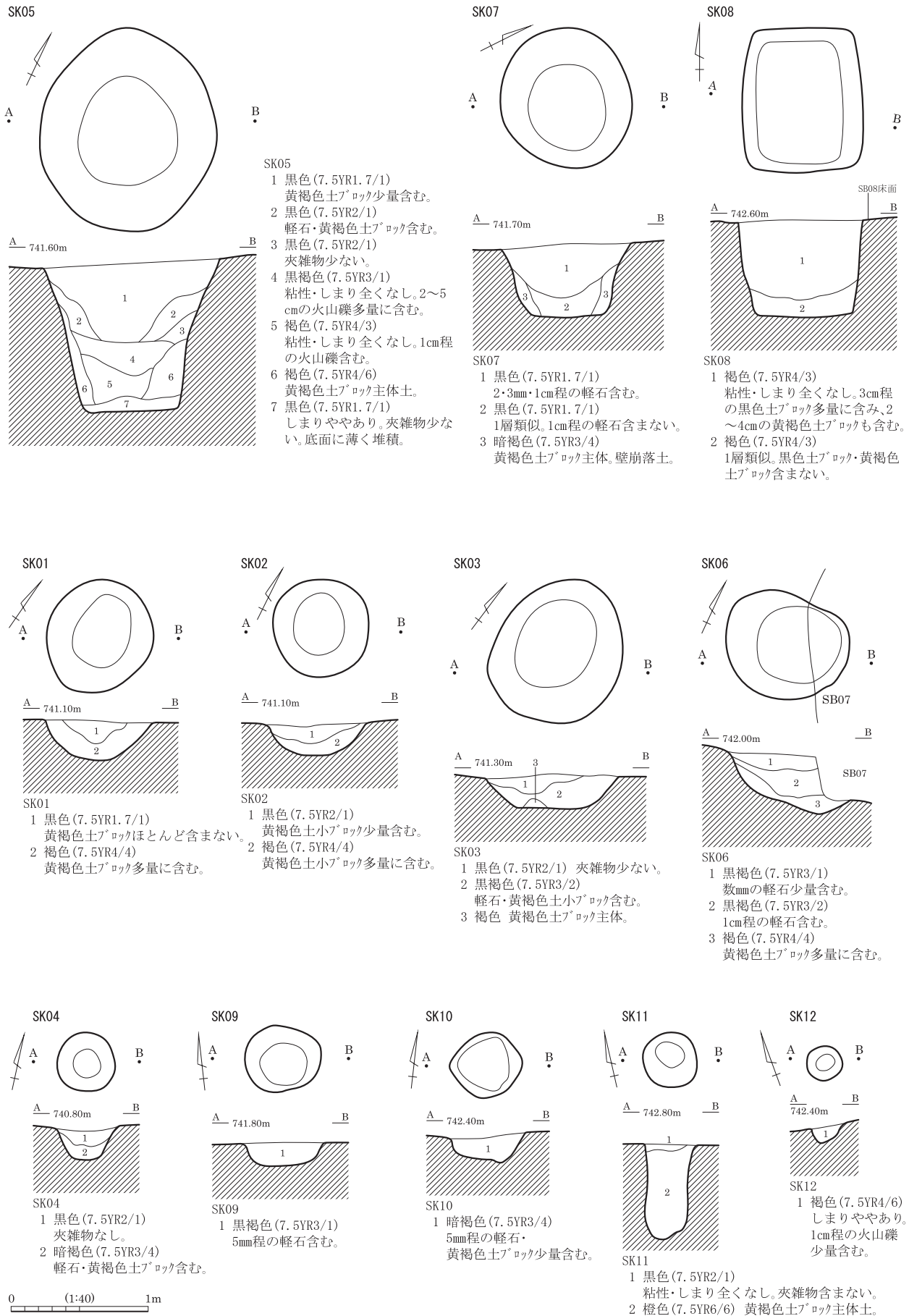
**時期**：出土遺物がなく時期決定は出来ない。SK05同様に縄文時代の陥し穴と想定する。

### SK08 [第29図 PL 4]

**位置**：1区中央部東側、ⅢI 25グリッド。SB08を切って構築されている。

**形状・構造**：長軸106cm、短軸88cmの長方形を呈する。断面形は逆台形で壁が垂直に近く立ち上がる。底面は平坦となる。埋土は黒色土ブロックを含む褐色土である。検出面からの掘り込みは67cmを測る。

**時期**：出土遺物がなく時期決定は出来ないが、古墳時代前期のSB08を切っていることからそれ以降である。



第29図 SK 遺構図



SK01 [第29図]

位置：1区南東部、ⅢR 08 グリッド。

形状・構造：長径86cm、短径77cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さが28cm。埋土は中央上部が黒色土、それ以外が軽石流起源のブロックを含む褐色土となる。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK02 [第29図]

位置：1区南東部、ⅢR 02 グリッド。

形状・構造：長径75cm、短径72cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さ23cm。埋土は上部が黒色土、下部が軽石流起源のブロックを多く含む褐色土。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK03 [第29図]

位置：1区南東部、ⅢR 09 グリッド。

形状・構造：長径109cm、短径93cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは23cm。埋土は黒色土・黒褐色土で、底面に褐色の軽石流起源のブロックが見られる。

時期：出土遺物なく、時期決定できない。

SK06 [第29図]

位置：1区中央部、ⅢM 10 グリッド。SB07に切られている。

形状・構造：長径92cm、短径72cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは41cm。埋土は上部が黒褐色土で、下部が軽石や軽石流起源のブロックを含む褐色土である。

時期：土坑内からは遺物の出土がなく、時期決定はできないが、古墳時代前期のSB07に切られているのでそれ以前の時期となる。鎌田原遺跡1区で、明確な縄文時代の遺構は確認されなかったが、本土坑に近接するSB06・07から縄文時代の土器片が出土しており、縄文時代の可能性も考えられる。

SK04 [第29図]

位置：1区南西部、ⅢL 20 グリッド。他に遺構はなく単独で存在。

形状・構造：直径43cm程の円形を呈する。断面形は鍋状で、検出面からの深さが23cm。埋土は上部が黒色土、下部が軽石などを含む暗褐色土となる。

時期：遺物の出土がなく、時期決定できない。

SK09 [第29図]

位置：1区中央部東側、ⅢN 16 グリッド。

形状・構造：長径56cm、短径49cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さが18cmと浅い。埋土は黒褐色土の単層。

時期：遺物の出土がなく、時期決定できない。

## SK10 [第29図]

**位置：**1区中央部北側、ⅢI 08グリッド。

**形状・構造：**長径52cm、短径48cmの不整円形を呈し、断面形も不整な鍋状となる。検出面からの深さは21cm。埋土は暗褐色土の単層

**時期：**遺物の出土がなく、時期決定できない。

## SK11 [第29図]

**位置：**1区中央部北側、ⅢI 04グリッド。

**形状・構造：**直径40cm程の小規模な円形を呈する。検出面からの深さは70cmと深く、断面が柱穴状となる。埋土は上部に薄く黒色土が堆積し、以下が軽石流起源のブロックが主体となる橙色土となる。

**時期：**遺物の出土がなく、時期決定できない。

## SK12 [第29・30図 PL 8]

**位置：**1区中央部北側、ⅢI 02グリッド。

**形状・構造：**直径25cm程度の小規模な円形で、断面は皿状となる。検出面からの深さは12cmと浅い。埋土は褐色土の単層。

**出土遺物：**1はRLとLRによる羽状縄文が施文される。内面は平滑に仕上げられている。縄文時代中期から後期にかけてのものと考えられる。

**時期：**出土遺物から縄文時代の土坑の可能性はあるが、性格などは不明である。

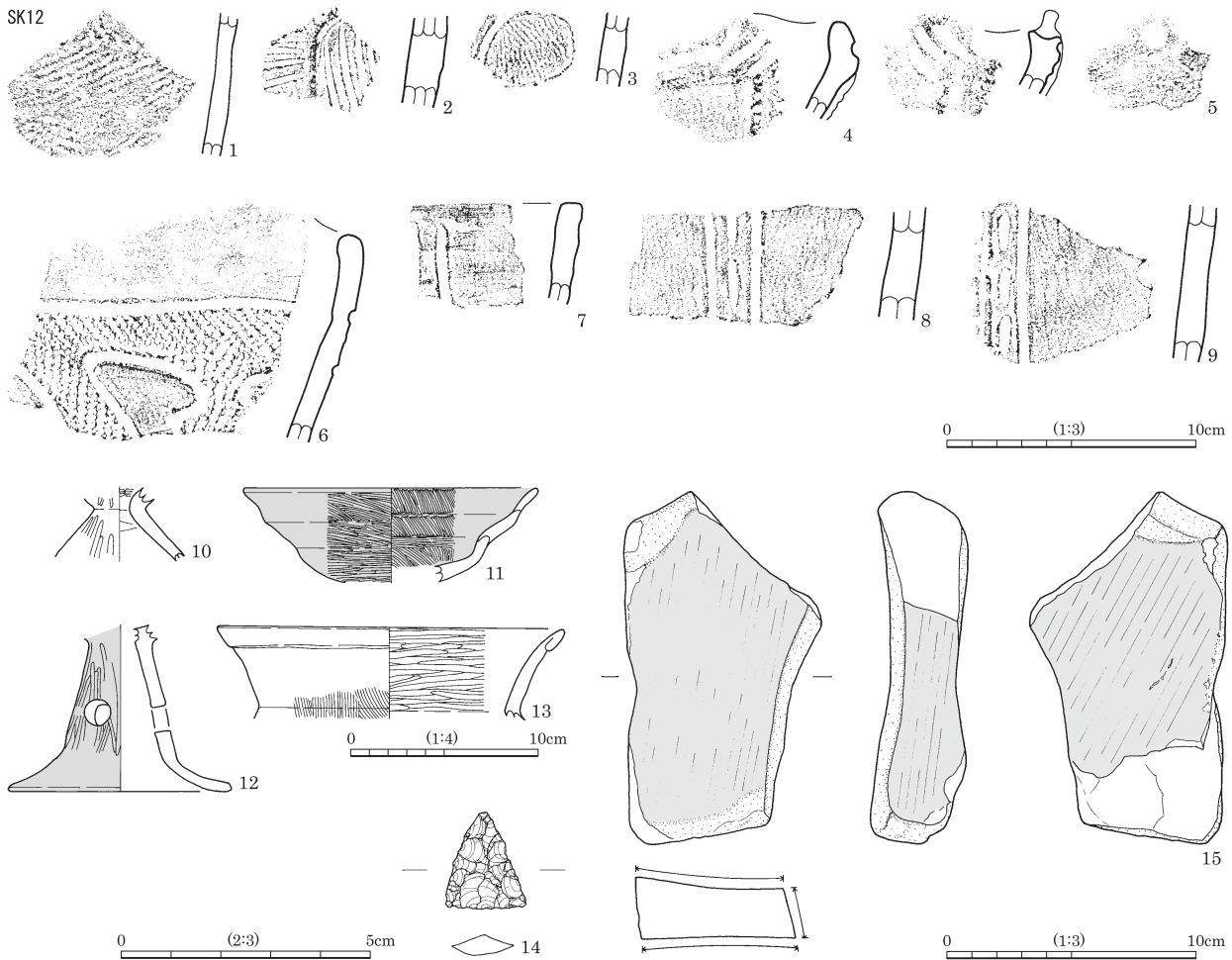
## 3. 遺構外出土の遺物

鎌田原遺跡は全体に出土遺物が少なく、ほとんどは遺構に伴って出土している。遺構外出土の遺物は非常に少ない。なお、竪穴住居跡から出土した縄文時代の土器は遺構に伴うものでないためここで扱う。

2～9は縄文土器である。2は垂下する隆帯の脇に沈線を施文する。中期後半。3は円形の区画の中に細かい縄文が施文される。後期初頭頃か。4・5はSB06埋土出土。同一個体で、突起状の波状口縁で、波状部から刻みを加えた隆帯が垂下する。突起部も刻むように沈線を施す。後期前半。6～9はSB07埋土出土。6は緩やかな波状口縁で、口縁下に沈線でX字状と考えられるモチーフを描き、モチーフ外を複節縄文で充填している。後期初頭。7～9は2本の沈線文間に刺突文を施している。後期前半。

10は小型器台の脚上部から受部接合部で脚は大きく開く。11は赤彩の有段口縁鉢か。12は柱状の脚で裾で屈折して広がる。13は折り返し口縁の壺口縁部。

14は黒曜石製の石鏃。15は砂岩製の砥石で、上下・両側面とも使用している。砥面はやや湾曲する。



第30図 SK・遺構外 遺物図

### 第3節 小結

鎌田原遺跡では今までわずかな調査や試掘調査が行われてきただけで、遺構の検出もなく、遺跡の状況はほとんど不明の状況であった。今回の調査により、二つの離れた調査地区で、古墳時代前期と平安時代後期の時期を異にする竪穴住居跡が検出されたことから、鎌田原遺跡の一端が明らかにされた。

古墳時代は、1区で前期後半の竪穴住居跡が8軒検出された。住居跡は台地縁辺部から30～40m内側に入ったところに重複することなく散在する。その範囲は南北100m程で、東西は調査区東側へ広がりを持ちそうであるが、概して小規模な集落といえよう。

住居形態は隅丸方形を主体とし、規模は一辺3.5～4.5mの比較的小型のものと5～7mのやや大型のものとの二者がある。住居構造は住居南東部に貯蔵穴を持ち、中央部奥側に浅い掘り込みの地床炉を持つなどの共通性が認められるものが多い。柱穴は4本柱が明確なものと、不明なものがある。住居跡の分布状況を見ると、南東部のSB01・03、中央部のSB05・06・07、北部のSB08・09・10の3ヶ所にまとまりがみられ、5～20m程の間隔を持って並ぶように構築されている。南東部ではSB01・03の2軒が近接して存在し、規模はSB01がやや大きく、SB03がやや小型となる。主軸方向や南東部に貯蔵穴を有するなど住居構造も類似する。中央部では鎌田原遺跡で最も大型のSB07と小型のSB06の2軒が主軸方向を同じにして並列する。この2軒の住居跡では管玉がSB07で3本、SB06で1本出土している。近接する

SB05はこの2軒とは主軸方向や長軸が東西に長いなどの点で異なる。この住居からも管玉1本と白玉1個が出土している。北部ではやや大型のSB09とやや小型のSB10が東西に並ぶ。主軸方向や長軸が東西に長いことなど類似する点が多い。2軒からやや離れたSB08は非常に小型の住居で、主軸方向も他の2軒とは異なる。このように鎌田原遺跡の古墳時代前期後半の集落は2軒が1単位で構成されるようである。その場合、SB05・08は東側調査区外に単位となる住居の存在が想定される。

出土土器については、各住居跡の遺物量が少なく土器組成を把握できる状況ではないが、全体の様相は類似する。甕は弥生時代からの箱清水系櫛描文施文の甕は存在せず、ハケ調整甕を主体とする。壺は、箱清水系の壺がわずかに残存するが、胴部が球胴化し胴下半部の括れが不明瞭となり、頸部文様帯を消失するなど変化している。二重口縁壺は頸部が開き気味に立ち上がり、口縁部も外反する。器台はSB05・06・09にあり、受部が有段の塊状のものや浅い皿状のものがある。小型丸底土器・有段口縁鉢はSB01・03・05・07・09にあり、小型丸底土器は体部が小さく口縁部が長く開く。高坏は柱状の脚となるものがSB01・05～07・09にあり主体となる。こうした土器様相から鎌田原遺跡出土土器は古墳時代前期後半に位置付けられるものと考えられる。

以上の遺構と出土遺物の状況からすれば、鎌田原遺跡の古墳時代前期集落は前期後半期の短期間に営まれた小規模集落と言える。

平安時代は、3区で3軒の竪穴住居跡が検出された。南東隅で住居外に張り出してカマドを構築するなど住居構造は類似し、出土土器も類似した形態の羽釜を主体とするなど、3軒の住居跡は同時存在した可能性がある。1区と3区の間は小諸市教委の試掘調査で遺構が存在しないとされたが、3区の状況も非常に散漫な遺構分布を示しており、この間にも遺構が存在した可能性は否定できない。一方で、近津遺跡群1区北側で湧玉川の田切り谷から分岐した谷が1区と3区の間まで延びていたと考えられる状況が地形図にみられる。こうしたことから鎌田原遺跡で検出された平安時代後期の集落は西側の近津遺跡群から広がった集落の東端を示すものと考えられる。概期の住居跡は近津遺跡群1区に1軒、鎌田原遺跡との間の国道141バイパスの近津遺跡群上宮原遺跡にも同様な住居構造のものが検出されている。各遺構の間隔は40m程で、鎌田原遺跡の3軒の間隔とも類似する。散漫な遺構分布を示す集落跡の状況がみえてくる。

最後に鎌田原遺跡における遺跡形成の消長を簡単にまとめる。鎌田原遺跡での人の活動は縄文時代に始まる。陥し穴と考えられる2基の土坑があり、円形のものや佐久市木戸上遺跡や佐久町（現佐久穂町）後平遺跡などに類似があり、隣接する近津遺跡群でも検出されている。当時、鎌田原遺跡や近津遺跡群などの台地上は狩猟などの場となっていたと考えられる。土器は中期後半から後期前半のものが少量出土しているが、遺構がこの時期のものかは判断できない。その後、古墳時代前期まで遺跡は空白期となる。佐久平北部では、古墳時代前期に入るとそれまでの広い台地上に形成された大規模集落が解体し、今まで利用されてこなかった台地縁辺部や低位段丘面などに新たな小規模集落が出現するようになるが、鎌田原遺跡の古墳時代前期集落もこうした一連の動きの中に位置付けられよう。その後、鎌田原遺跡は再び空白期となる。浅い谷を挟んだ南東側の中原遺跡群では、古墳時代後期から平安時代前半にかけての大規模集落が形成されているが南側の田切り谷側に寄っていて、北側の鎌田原遺跡には広がってきていないようである。

再び鎌田原遺跡の場所が活用されるようになるのは平安時代後期になってからである。西側の近津遺跡群から広がる集落の東端とみることができる。

以上、今回の調査では古墳時代前期と平安時代後期を主体とした小規模集落の状況が明らかにされた。佐久平における概期の様相を解明していくうえで新たな資料を提示したといえよう。

第4章 鎌田原遺跡

図No.	遺構	時期	位置		形状・規模				炉(カマド)			その他		
			地区	グリッド	平面形	主軸方向	規模		床面積 ㎡	深さ cm	位置		形態	構築材
							南北×東西m							
11	SB01	古墳前期	1区	III R08・12・13	隅丸長方形	N39°W	5.70×4.48	25.5	22	中央北	地床炉		南東隅に貯蔵穴、中央に被熱部	
22	SB02	古墳後期 ～	1区	III R02・07・08	隅丸長方形	N38°W	4.54×3.72	16.9	15	北壁中央	壁下に燃焼部	粘土	中央に被熱部	
12	SB03	古墳前期	1区	III R03・04・08・09	隅丸方形	N31°W	4.10×4.10	16.8	23	中央北	地床炉		南東隅に貯蔵穴	
23	SB04	古墳後期 ～	1区	III M25, R05	隅丸方形	N28°W	1.64×1.68	2.8	5	北壁中央	燃焼部張り出し、煙道長く伸びる			
13	SB05	古墳前期	1区	III M20・25, N16・21	隅丸方形	N18°W	4.22×4.80	20.3	32	中央北	土器埋設、重複あり			
15	SB06	古墳前期	1区	III N11・12・16・17	隅丸方形	N29°W	3.86×3.48	13.4	27	中央北	地床炉			
16	SB07	古墳前期	1区	III M10・15, N06・11	隅丸方形	N30°W	7.00×6.40	44.8	41	中央北	地床炉			
18	SB08	古墳前期	1区	III I24・25	隅丸方形	N6°E	3.00×3.08	9.2	16					
19	SB09	古墳前期	1区	III I08・13	隅丸方形	N6°W	4.78×5.04	24.1	34	中央北	地床炉		ペット状施設あり	
21	SB10	古墳前期	1区	III I10・15, J06・11	長方形	N7°W	3.76×4.72	17.7	7	中央北	地床炉		南東隅に貯蔵穴	
24	SB11	平安	3区	VI Q22, V02・03	隅丸方形	N40°W	4.32×3.94	17.0	44	南東隅	燃焼・煙道部が張り出す	礫		
26	SB12	平安	3区	VI P14・15	隅丸方形	N23°W	4.72×4.66	22.0	29	南東隅	燃焼・煙道部が張り出す。煙道石組み。	礫		
28	SB13	平安	3区	VI U17・18・23	隅丸方形	N47°W	5.76×5.52	31.8	20	南東隅	燃焼部張り出す	礫		

第21表 住居跡一覧

図No.	遺構	時期	位置		形状		規模		遺物	その他
			地区	グリッド	平面形	断面形	規模			
							長軸×短軸 cm	深さ cm		
29	SK01	?	1区	III R08	円形	皿状	86×77	28		
29	SK02	?	1区	III R02	円形	皿状	75×72	23		
29	SK03	?	1区	III R09	円形	皿状	109×93	23		
29	SK04	?	1区	III L20	円形	鍋状	44×43	23		
29	SK05	(縄文)	1区	III M19	円形	逆台形	148×129	108		陥し穴?
29	SK06	?	1区	III M10	円形	皿状	92×72	41		
29	SK07	(縄文)	1区	III M19・20	円形	逆台形	104×95	53		陥し穴?
29	SK08	?	1区	III I25	長方形	逆台形	106×88	67		
29	SK09	?	1区	III N16	円形	皿状	56×49	18		
29	SK10	?	1区	III I08	不整円形	鍋状	52×48	21		
29	SK11	?	1区	III I04	円形	柱穴状	41×40	70		
29	SK12	?	1区	III I02	円形	皿状	26×25	12	縄文土器1	

第22表 土坑一覧

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かつこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
11	1	5	1	SB01	土師器	高坏	50	(17.4)	—	(5.5)	10YR7/6 橙	ミカキ	ミカキ	
11	2			SB01	土師器	高坏	10	(15.5)	—	(5.6)	10YR7/6 橙	ミカキ	ミカキ	
11	3	5	2	SB01	土師器	高坏	5	—	—	(6.5)	10YR7/4 にぶい黄橙	ミカキ	クスリ	
11	4	5	3	SB01	土師器	高坏	5	—	—	(8.2)	5YR6/6 橙	クスリ、ミカキ	クスリ	
11	5	5	4	SB01	土師器	小型丸底	50	(10.2)	(6.9)	(5.4)	10YR7/4 にぶい黄橙	ナテ、ミカキ	ナテ	
11	6			SB01	土師器	鉢	5	(21.8)	—	(3.0)	7.5YR6/8 橙	ナテ、ミカキ	ナテ	
11	7			SB01	土師器	ミチュア壺	30	—	3.0	(3.8)	5YR7/8 橙	ナテ、下端クスリ	ナテ	
11	8			SB01	土師器	甕	5	(12.4)	—	(3.9)	7.5YR7/8 黄橙	ナテ、クスリ	ナテ	
11	9	5	6	SB01	土師器	甕	20	—	—	(15.5)	10YR7/4 にぶい黄橙	ハツ調整後ミカキ	ハツ調整後ミカキ	
11	10	5	5	SB01	土師器	壺	20	—	3.7	(20.0)	7.5YR7/8 黄橙	ハツ調整後ミカキ	ハツ目	
12	1	5	8	SB03	土師器	小型丸底	50	(12.8)	2.6	6.9	10R4/6 赤	ミカキ	ミカキ	
12	2	5	9	SB03	土師器	小型丸底	30	(15.8)	(3.0)	5.6	2.5Y7/4 浅黄	ミカキ 肩部ハツ目	ミカキ	
12	3	5	7	SB03	土師器	鉢	50	(14.3)	(3.0)	5.2	2.5YR5/8 明赤褐	クスリ 口縁ナテ、ミカキ	ミカキ	
12	4	5	10	SB03	土師器	鉢	100	9.1	3.4	5.3	2.5Y7/4 浅黄	クスリ	ナテ	
14	1	5	11	SB05	土師器	高坏	50	(10.1)	—	(12.1)	7.5YR7/6 橙	坏部ナテ後下部クスリ 脚部クスリ後ミカキ	ナテ、脚部クスリ	
14	2			SB05	土師器	高坏	30	12.1	—	(5.5)	2.5YR4/6 赤褐	ナテ、ミカキ	ナテ	
14	3			SB05	土師器	高坏	5	—	—	(6.0)	7.5YR7/6 橙	クスリ後ミカキ	クスリ、一部ハツ	
14	4	5	12	SB05	土師器	高坏	40	—	—	(5.6)	10YR7/6 明黄褐	クスリ後ミカキ	坏部ミカキ 脚部クスリ	
14	5	5	13	SB05	土師器	高坏	10	—	—	(6.9)	5YR6/6 橙	ミカキ	ナテ	
14	6	5	14	SB05	土師器	高坏	10	—	—	(8.3)	10YR7/4 にぶい黄橙	クスリ後ミカキ	ナテ	
14	7	5	16	SB05	土師器	器台	50	—	14.2	(7.0)	10R4/6 赤	ミカキ	クスリ後ハツ	
14	8	5	15	SB05	土師器	器台	5	—	—	(4.6)	2.5YR5/6 明赤褐	クスリ後ミカキ	台部ミカキ 脚部ナテ	
14	9			SB05	土師器	鉢	30	(8.2)	—	(3.6)	10YR7/4 にぶい黄橙	ナテ、下部クスリ	ナテ	
14	10	5	17	SB05	土師器	小型丸底	100	10.6	1.5	5.9	2.5Y7/4 浅黄	ナテ、クスリ	ナテ、下半ミカキ	
14	11	5	18	SB05	土師器	小型丸底	60	—	2.6	(3.3)	2.5Y8/4 淡黄	クスリ	ナテ	
14	12			SB05	土師器	壺	5	(15.7)	—	(5.8)	7.5YR7/8 黄橙	ナテ、下部ミカキ	ナテ、下部ハツ	
14	13	5	19	SB05	土師器	壺	70	(25.4)	15.9	57.1	7.5YR7/8 黄橙	ミカキ	口縁ミカキ、胴部ナテ 底部ハツ	
14	14			SB05	土師器	壺	5	—	—	(11.5)	7.5YR7/6 橙	ナテ後ミカキ	ナテ	
14	15			SB05	土師器	壺	10	—	6.6	(12.0)	7.5YR7/4 にぶい橙	ミカキ	ミカキ	
14	16			SB05	土師器	甌	5	—	(3.2)	(3.7)	5YR5/6 明赤褐	クスリ	ナテ後ミカキ	
15	1	5	20	SB06	土師器	高坏	30	—	—	(7.7)	2.5YR5/8 明赤褐	クスリ、ミカキ	ナテ 坏部ミカキ	
15	2	5	21	SB06	土師器	高坏	20	—	(10.1)	(9.0)	7.5YR7/8 黄橙	ミカキ	クスリ	坏部との接合部に小孔あり
15	3	5	22	SB06	土師器	器台	70	(6.8)	(10.6)	9.0	10YR7/4 にぶい黄橙	ナテ 脚部ナテ後ミカキ	ナテ、一部ミカキ 脚部クスリ	
15	4	5	23	SB06	土師器	小型丸底	70	(7.1)	(2.3)	6.1	7.5YR7/6 橙	ナテ、一部クスリ ハツ底クスリ	ナテ後ハツ	
15	5			SB06	土師器	壺	30	(16.1)	—	(6.7)	2.5Y8/4 淡黄	ナテ	ナテ後ミカキ	
15	6	5	24	SB06	土師器	甕	30	(13.8)	—	(12.5)	5YR7/8 橙	ナテ、ハツ、一部クスリ	ナテ、押え、下部ハツ	
15	7			SB06	土師器	甕	5	—	—	(13.3)	10YR7/6 明黄褐	ハツ	ナテ	
15	8	6	1	SB06	土師器	壺	30	—	6.7	(34.5)	10R4/6 赤	ミカキ、下部クスリ	口縁ミカキ、ハツ	
17	1	6	5	SB07	土師器	高坏	20	—	—	(9.8)	5YR7/8 橙	クスリ後ミカキ	ナテ	
17	2			SB07	土師器	鉢	30	(13.1)	3.4	4.3	10YR8/4 浅黄橙	ナテ後ハツ、下部クスリ 後ハツ底クスリ	ナテ後ミカキ	
17	3	6	2	SB07	土師器	鉢	50	(11.6)	3.0	4.8	5YR6/8 橙	クスリ後ミカキ 底クスリ	ナテ	

第23表 土器観察表 (1)

第4章 鎌田原遺跡

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かつこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
17	4			SB07	土師器	甔	5	—	(3.1)	(4.5)	10YR7/4 にぶい黄橙	ナ、下端ナリ	ナ	
17	5	6	4	SB07	土師器	甔	50	(15.3)	4.5	7.6	2.5YR5/6 明赤褐	ナ、ナリ	ナ	
17	6	6	3	SB07	土師器	小型丸底	70	—	1.7	(3.1)	7.5YR7/6 橙	ナ、ナリ 肩部ハ	ナ	
17	7	6	6	SB07	土師器	壺	70	—	3.8	(9.0)	7.5R4/6 赤	ナ、 下部ナリ後ナ	上部ヨコハ、下部ハナ	
17	8	6	7	SB07	土師器	壺	40	—	4.9	(13.0)	7.5R4/6 赤	ナ	ナ、頸部押え	
20	1	6	8	SB09	土師器	高坏	90	(13.9)	(10.3)	10.3	10YR8/6 黄橙	ナリ後ナ	ナ後ナ 底部ナ	
20	2	6	9	SB09	土師器	高坏	20	—	—	(9.6)	7.5YR8/4 浅黄橙	ナリ後ナ	ナ	
20	3	6	10	SB09	土師器	器台	30	(8.8)	—	(6.3)	7.5YR7/6 橙	台部ナ、ナ 脚部ナリ後ナ	ナ、一部ナ	
20	4	6	13	SB09	土師器	鉢	80	(16.0)	2.9	6.6	10R4/8 赤	ナ後ナ 底面ナ	ナ後ナ	
20	5	6	11	SB09	土師器	甕	80	(15.4)	—	(24.0)	2.5YR6/6 橙	ナ、ハ、一部ナ 胴部ナリ、一部ナ	ナ後ナ	
20	6	6	12	SB09	土師器	壺	30	—	(4.3)	(20.2)	2.5YR6/8 橙	ナ、下端ナリ 底面ナ	ナ 肩部押え	
20	7			SB09	土師器	壺	5	(16.0)	—	(7.5)	7.5YR7/8 黄橙	ナ後ナ	ナ後ナ	
21	1	6	14	SB10	土師器	S字甕	30	(12.2)	—	(9.0)	2.5Y7/4 浅黄	ナ、ハ	ナ、ハ	
21	2			SB10	土師器	壺	5	(18.9)	—	(6.3)	5YR7/6 橙	ナ、ナリ	ナ、下半ハ	
21	3	6	15	SB10	土師器	小型丸底	70	(9.9)	3.2	9.1	10YR8/4 浅黄橙	ナ後ナ 下端ナ	ナ後ナ	
23	1			SB04	土師器	甕	5	—	2.5	(1.0)	7.5YR6/8 橙	ナ	ナ	
25	1	7	1	SB11	土師器	羽釜	50	(28.2)	(17.6)	(27.0)	2.5YR4/6 赤褐	ナ後下部ナ	ナ	
25	2			SB11	土師器	羽釜	5	(29.6)	—	(20.7)	2.5YR5/8 明赤褐	ナ	ナ	
25	3	7	3	SB11	土師器	羽釜	20	(29.0)	—	(14.6)	2.5YR5/8 明赤褐	ナ	ナ	
25	4			SB11	土師器	羽釜	20	(25.0)	—	(13.1)	10R4/8 赤	ナ	ナ	
25	5	7	2	SB11	土師器	羽釜	20	(20.6)	(15.6)	(27.6)	2.5Y7/4 浅黄	ナ後下部ナ	ナ	
27	1	7	5	SB12	土師器	羽釜	20	(31.4)	—	(18.6)	2.5YR5/6 明赤褐	ナ	ナ	
27	2・3			SB12	土師器	羽釜	10	(32.0)	—	—	5YR5/6 明赤褐	ナ後下部ナ	ナ	
27	4	7	4	SB12	土師器	羽釜	10	(24.4)	—	(26.5)	7.5R3/4 暗赤	ナ、ナリ	ナ	
27	5	7	6	SB12	土師器	羽釜	50	(14.7)	(7.2)	4.6	2.5Y7/4 浅黄	ナ、下部ナ 底面糸切り	ナ	
27	6			SB12	須恵器	坏	20	(11.8)	(6.0)	3.3	2.5Y6/2 灰黄	ナ、ナリ	ナ	
27	7			SB12	須恵器	壺	5	—	—	(7.7)	5Y7/3 浅黄	ナ	ナ	
30	1	8	1	SK12	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR6/6 明黄褐	羽状縄文		中期末～ 後期前半
30	2	8	2	1区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR4/6 赤褐	隆帯で区画、沈線		中期後半
30	3	8	3	1区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/6 明赤褐	沈線で区画、縄文		後期初頭
30	4	8	4	遺構外 (SB06)	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR5/6 明褐	口縁突起、垂下隆帯		後期前半 5と同一
30	5	8	5	遺構外 (SB06)	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR5/6 明褐	口縁突起、垂下隆帯		後期前半 4と同一
30	6	8	6	遺構外 (SB07)	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/6 明黄褐	沈線区画、縄文		後期初頭
30	7	8	7	遺構外 (SB07)	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/6 明赤褐	沈線区画		後期前半
30	8	8	8	遺構外 (SB07)	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/6 明赤褐	沈線区画、刺突文		後期前半
30	9	8	9	遺構外 (SB07)	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/6 明赤褐	沈線区画、刺突文		後期前半
30	10			1区	土師器	器台	5	—	—	(3.5)	2.5YR6/6 橙	ナ	ナ	
30	11			1区	土師器	高坏	10	(13.8)	—	(4.5)	2.5YR4/8 赤褐	ナ後ナ	ナ後ナ	
30	12	7	7	1区	土師器	高坏	40	—	(10.3)	(7.9)	10R4/6 赤	ナ後上部ナ	ナ	
30	13			1区	土師器	壺	5	(16.1)	—	(4.3)	7.5YR7/6 橙	ナ、ハ	ナ後ナ	

第24表 土器観察表 (2)

図版No.		写真図版No.		出土地点	器種	材質	状態	法量			重さ(g)	備考
図	番号	PL	番号					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
11	11	8	10	SB01	磨石	安山岩		8.3	5.9	4.3	342	
14	17	8	27	SB05	白玉	珪質砂岩		0.2	0.6	0.6	0.08	
14	18	8	25	SB05	管玉	緑色凝灰岩		1.5	0.3	0.3	0.2	
14	19	8	11	SB05	磨石	深成岩		17.1	7.7	3.8	782	
15	9	8	26	SB06	管玉	石英質砂岩		1.9	0.5	0.5	0.02	
15	10	8	12	SB06	砥石	凝灰岩	砥面湾曲	3.9	1.7	2.0	9	2分割
17	9	8	24	SB07	管玉	緑色凝灰岩	縦半裁	2.5	0.6	0.6	1.1	
17	10	8	23	SB07	管玉	緑色凝灰岩	縦半裁	2.7	0.9	0.9	1.05	
17	11	8	22	SB07	管玉	緑色凝灰岩		4.2	1.0	1.0	3.27	
17	12	8	13	SB07	砥石	凝灰岩	砥面湾曲	6.8	2.5	1.8	31	
17	13	8	14	SB07	凹石	安山岩		9.1	7.0	4.6	445	
17	14	8	15	SB07	磨石	安山岩		14.0	8.6	6.2	1,010	
17	15	8	16	SB07	台石	安山岩		38.2	25.6	9.4	12,550	
20	8	8	18	SB09	磨石	変成岩		7.1	6.1	5.5	380	
20	9	8	17	SB09	砥石	安山岩		14.5	7.5	4.0	900	
23	2	8	19	SB04	台石	安山岩		16.1	12.9	7.8	2,810	
30	14	8	21	1区	石鏃	黒曜石		1.9	1.6	0.4	1.0	
30	15	8	20	1区	砥石	砂岩		14.2	7.9	2.5	425	

第25表 石器観察表



小諸市美南ヶ丘小学校 遺跡見学



遺跡見学会

調査風景

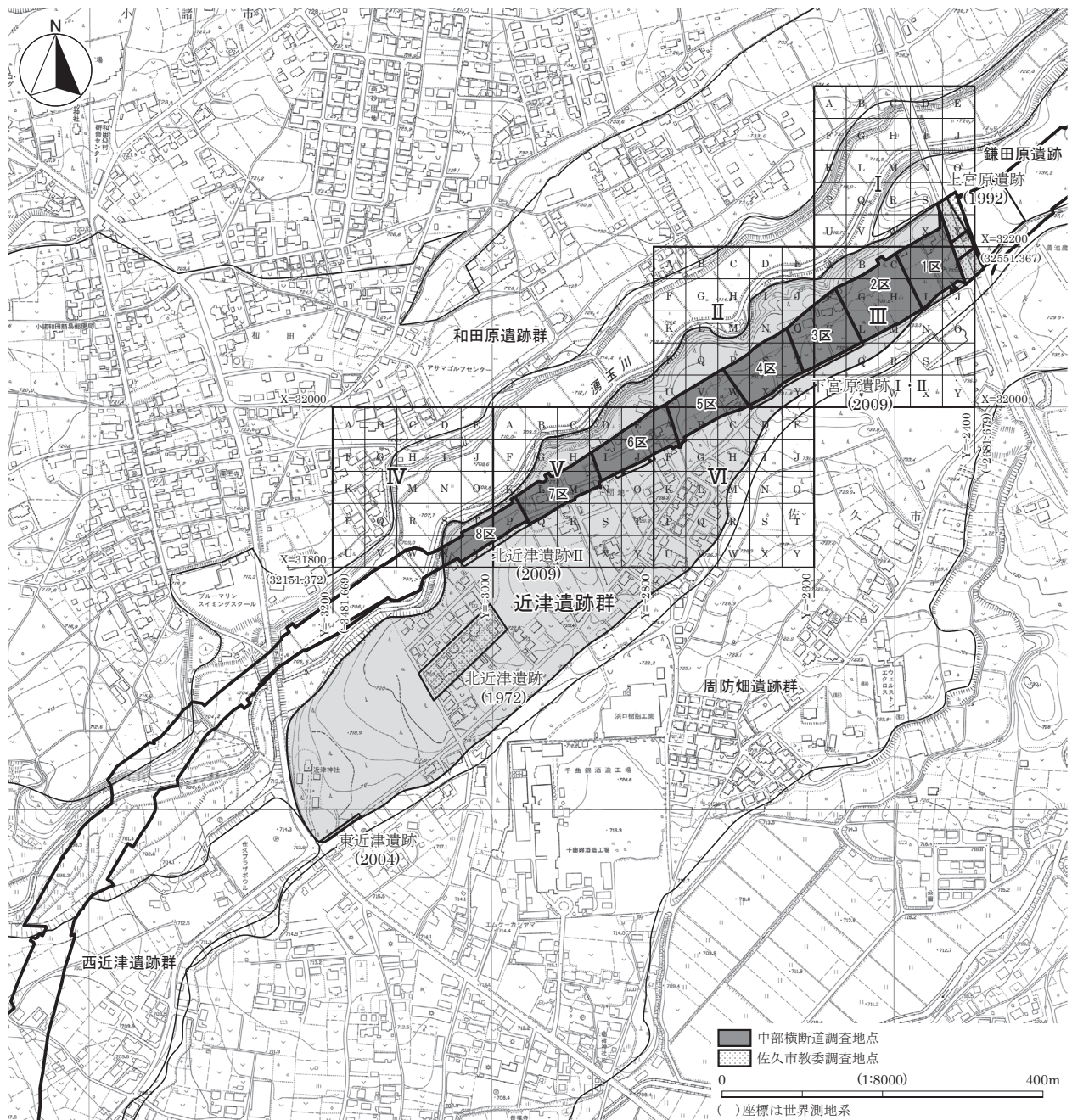


# 第5章 近津遺跡群

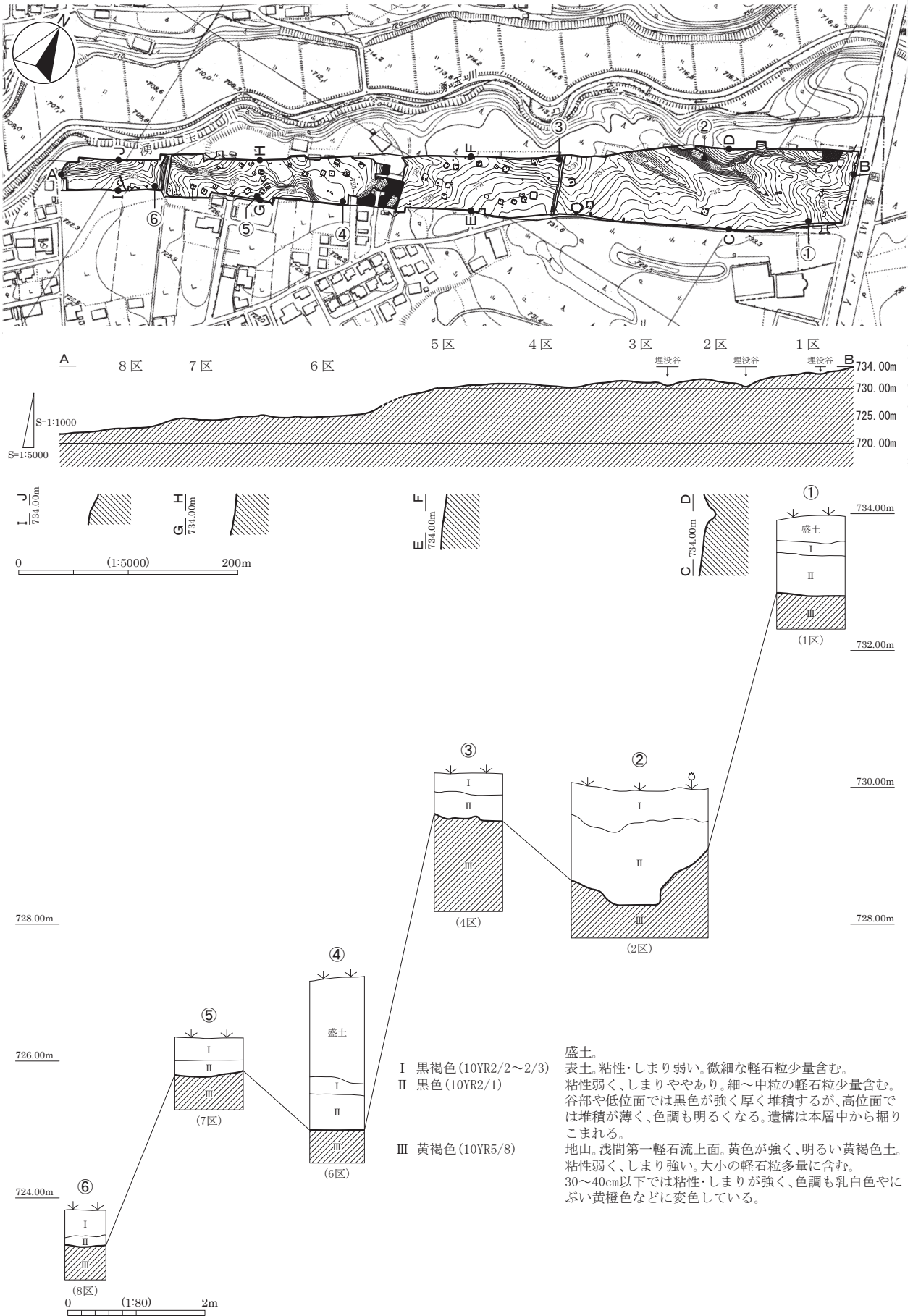
## 第1節 遺跡の概観と調査の概要

### 1. 遺跡の概観

近津遺跡群は小諸市と境を接する佐久市北西部の長土呂地区に所在する。この地域は浅間山麓の裾野に厚く堆積した浅間第一軽石流により形成された台地の末端付近にあたる。緩やかに南西方向に傾斜する台地は表面起伏が少ない平坦な地形となり、大小の河川が台地を浸食することにより「田切り地形」と呼ばれる特有な地形が発達する。台地末端に近い遺跡周辺では「田切り地形」が特に顕著にみられ、田切りに



第31図 近津遺跡群 遺跡範囲図と地区設定図



第32図 地形図・基本層序

よる谷が傾斜方向に合わせて南西から北東方向に樹枝状に広がっている。

近津遺跡群の立地する台地もこうした田切り谷に画された台地の一つで、北東から南西に細長く延びる。幅は狭いところでは70 m程度で、南西に向かって広がり200 m程度となり、広がったところでは台地中央部がやや高まり南北両側の田切りに向かい下がっていく低い尾根状となる。

台地の北側を画する湧玉川の田切り谷は幅30～50 mで、台地と谷底との比高差が15 m以上あり、垂直又は内側にえぐられた急崖で弱く蛇行している。一方、南側の田切りは幅も20 m程と狭く、深さも5～6 mと浅く不明瞭な凹みとなり、鎌田原遺跡付近ではほとんど判然としない状態となる。

近津遺跡群の遺跡範囲はこの両谷に挟まれた細長い台地の中程、旧国道141号から国道141号バイパスまでの間である。台地東側は小諸市鎌田原遺跡で、西側は西近津遺跡群となる。中部横断自動車道に伴う調査地点は佐久市長土呂字下宮原1061ほかで、遺跡を縦断するように北端の崖線に沿った延長700 m程の長さで、標高は722～734 m。調査面積は38,300㎡となる（第31図）。

近津遺跡群の調査地点は、現状で南西方向に緩やかに下がっていく地形となっている。調査の結果、表土下の旧地形は、現在確認されない埋没谷などにより起伏に富んだ地形となっていることが明らかとなった（第32図）。

調査地点の地形は大きく東側と西側で異なる。東側の1～5区では高位平坦面が広がり、そこを幅の狭い埋没谷が浸食している。西側の6～8区では、6区が低位平坦面となり、7・8区が湧玉川の田切り谷に向かう緩斜面となっている。

**東側調査区** 調査区東側の1～5区が該当し、近津遺跡群の立地する台地では幅の狭い部分にあたる。大略としては北側の湧玉川と西側に緩く傾斜する比較的平坦な高位面が連なり、それを狭い埋没谷が浸食している。埋没谷は調査地内では2本が確認され、北側の湧玉川田切り谷に合流するように南東から北西方向に台地を刻んでいる。

1本の埋没谷は1区北側と2区中央部に谷頭があり、2区北側で合わさり、深さを増し上面幅10 m・深さ2 m程度の規模となり湧玉川の田切り谷に向かう。他の1本は、上記埋没谷の西側に並行するようであり、2・3区境中央部の谷頭から北西方向に延びるやや浅い埋没谷である。この2本の埋没谷の間は痩せ尾根状の狭い平坦面となる。埋没谷の西側にあたる4区から5区にかけては調査区内で最も平坦面が広がる範囲となり、そこから急激に6区の低位面へと移行する。この高位面の西端あたりは地元で“長土呂の峰”と呼ばれていた。

**西側調査区** 調査区西側では幅を広げた台地が調査区外の南側に広がっていて、調査範囲が低位平坦面と、台地中央部から湧玉川の田切り谷に向かって傾斜する緩斜面が組み合わさる地形となる。

低位平坦面は6区から7区にかけて一部重なるように2ヶ所存在する。6区の低位平坦面は5区の高位平坦面から4 m以上の比高差を持って急激に移行する。この低位平坦面は北側の湧玉川田切りに開放し、南側は調査区外側で収まると考えられる。規模は東西50 m程で南北も同程度と想定され、比較的平坦な面となる。地山となる浅間第一軽石流の黄褐色土上面には、東側高位平坦面で明瞭でない黒色土が堆積する。

6区の低位平坦面に一部重なるように認められる7区の低位平坦面も、北側の湧玉川の田切り谷方向から調査区内に延び、調査区中程で収束し、南側の台地中央部に向かい傾斜する。規模は東西20 m程、南北は不明であるが6区のものより狭い。両低位平坦面は調査区中央部で狭く繋がり、南北両側が半島状にやや高まる。

この6・7区の低位平坦面は、2・3区の埋没谷の狭い谷状浸食とは異なり、広い平坦面を形成しており、その成因は更に検討する必要がある。但し、確認された埋没谷や低位平坦面は、その表層部が黄褐色

で砂質の浅間第一軽石流で覆われている。これは東側の高位面の表層部と同じで、浅間第一軽石流上部が削平された状況ではない。もし軽石流堆積後の浸食で形成されたとすれば、軽石流の表層部から30～40cm以下に認められるにぶい黄褐色やにぶい橙色でしまりの強い粘性のある土層が表面に現れるはずであるがそれがなく、高位面と同じ表層の土層が表面に認められることから、埋没谷や低位面は浅間第一軽石流が堆積する段階で形成されていることが分かる。

7区の低位面から西側は、調査区南側が高位面の端にあたり、そこから北側の湧玉川田切り谷に向かい傾斜している。7区では比較的緩斜面で、尾根状に張り出したようになっている。高位平坦面は調査区外の台地頂部にかけて広がる。

近津遺跡群内では今回の中部横断自動車道建設事業に伴う調査以前にも、佐久市教委による数回の調査が実施されている。昭和47年、宅地造成に伴う北近津遺跡の調査では堅穴住居跡13軒を確認し、その内4軒（古墳時代中期から後期）を調査し、近津古墳のものと思われる溝も確認されている（佐久市教委1972）。平成2年実施の国道141号バイパス建設に伴う上宮原遺跡は当事業1区東側にあたり、南東隅にカマドを持つ平安時代の堅穴住居跡が1軒検出された（佐久市教委1992）。平成15年、遺跡西端近津神社南側の市道拡幅に伴う東近津遺跡の調査では、時期不詳の掘立柱建物跡1棟と土坑や溝が検出されている（佐久市教委2004）。平成18・19年には当事業に伴う市道新設や拡幅の調査が実施され、当事業8区の南側隣接地にあたる北近津Ⅱ遺跡では、古墳時代前期などの堅穴住居跡3軒と溝跡2条などを検出している（佐久市教委2009）。3・4区南側隣接地の下宮原Ⅰ・Ⅱ遺跡では南東隅にカマド持つ平安時代の堅穴住居跡1軒と縄文時代と考えられる堅穴住居跡1軒などが調査されている（佐久市教委2009）。

近津遺跡群を含む火砕流台地の末端付近となる佐久市北部の台地上には弥生時代後期、古墳時代後期～平安時代の遺跡が多数分布する。近津遺跡群西側の広い台地末端部は西近津遺跡群で、当事業による調査で弥生時代後期の超大型住居跡などを含む集落跡、古墳時代後期から平安時代にかけては多数の堅穴住居跡や掘立柱建物跡等から、硯・篋描や墨書土器・石製品・銅印など多彩な遺物が出土している。他には中世の溝跡なども検出されている（整理作業中）。また、市教委による調査も随所で行われており、弥生時代から平安時代にかけての密集する集落の状況が明らかにされている（佐久市教委1989・2009他）。近年、同遺跡群内で縄文時代中期から後期にかけての集落跡の一端が確認され、縄文時代の遺跡が少ない佐久平において貴重な調査例となった。一方、東側は小諸市鎌田原遺跡となり、第4章で報告したように古墳時代前期と平安時代後期の集落跡が検出されている。

近津遺跡群が立地する台地の南側田切り台地から濁川氾濫低地には周防畑遺跡群が広がり、弥生時代後期の集落跡や円形周溝墓などの墓域が検出されている（林1982、佐久市教委2001・2008・2010他）。また、当事業に伴う調査でも弥生時代後期の堅穴住居跡や周溝墓、平安時代の堅穴住居跡などが調査されている（整理作業中）。周防畑遺跡群と同じ台地上の東側小諸市分は中原遺跡群となり、上信越自動車道に伴う調査で古墳時代後期から平安時代の大規模な集落跡が調査されている（埋文センター1999）。

## 2. 調査の概要

近津遺跡群の調査は平成19年度から21年度の3ヶ年にわたって実施した。調査にあたっては、対象地が全長700mと長いため、便宜上東側から1区～8区に地区割りした。

平成19年度は、9月から調査に入り、調査対象地両端の1区と8区の6,600㎡を調査した。古墳時代や平安時代などの遺構が散漫に分布する状況が把握され、3・4区の確認トレンチ調査でも同様な遺構の様子がみられた。また、翌2月から3月にかけては翌年度の調査効率を上げるため7区の表土剥ぎも行った。

平成20年度は、5月後半からの調査となった。用地買収が終了したところから調査に着手したが、家

屋の撤去・移転の遅れ、現況道路の確保などのため、各地区とも分割調査を余儀なくされた。調査は1区から8区全ての地区で行った。東側の1～4区では古墳時代や平安時代の竪穴住居跡が散漫に分布するという想定された状況であったが、西側の6・7区では当初遺構は存在しないのではないかとされた低位面や緩斜面下部からも古墳時代の遺構が検出され、地形面を違えて同時期の集落が形成される状況がみえてきた。また、埋没谷や厚い盛土層に覆われた低位面など現地表面下に隠された旧地形も明らかとなった。

この年度の調査により、3・5・6・7区の一部を除き調査対象地の大半部が調査終了となり、道路建設工事が調査と並行して開始された。調査面積は23,160㎡。なお、当年度の調査では、道路に隣接し場所によっては2m以上の掘削となったことから、調査区周辺に単管パイプによる防護柵やネットフェンス設置等の安全対策を施して調査を実施した。更に用地内に設置してきた調査用プレハブ施設は、年度途中から調査や着工された工事に支障となるため、用地外を借地して移転設置した。

平成21年度は残った4地区が調査対象とされた。5区の調査では伐採した立木の根が多量に残されていたため、表土掘削に合わせて除去を行った。調査では古墳時代前期の竪穴住居跡が多く検出され、特に6・7区の緩斜面部では本遺跡の調査区内で最もまとまった遺構の分布状況となった。調査途中、未収去物件の処理を待つ間に、周防畑遺跡群の調査と、鎌田原遺跡3区の調査も合せて近津遺跡群班で対応して調査を実施した。最後に残された調査部分も11月から調査に入り、12月下旬に近津遺跡群全ての調査を終了した。21年度の調査面積は8,540㎡。

なお、8月29日、古墳時代の竪穴住居跡がまとめて検出された6・7区で現地説明会を開催し、地元住民の方を中心に95名の参加者があった。また、借地していた調査用プレハブ施設用地の復旧作業は平成22年1月に実施し、返却を行った。

近津遺跡群では、3ヶ年にわたる調査により、竪穴住居跡・竪穴状遺構47軒、円形周溝墓2基、土坑37基、溝跡3条、焼土跡8基、小穴群1基、不明遺構2基が検出された。

### 3. 基本層序

近津遺跡群の土層堆積は埋没谷など起伏にとんだ地形状況により異なる（第32図）。1～5区の高位面や7・8区の緩斜面上部などでは表土層下にⅡ層の暗褐色や黒色土層が薄く10～30cm程度堆積し、漸移層をへて地山となるⅢ層浅間第一軽石流上面の黄褐色土層となる。

一方埋没谷や低位平坦面などでは表土層下に厚いⅡ層黒色土層が堆積する。基本的な土質は高位面のⅡ層と同質であるが、黒色が強い。埋没谷部では1m程の堆積を示す。6・7区の低位面なども本来は厚い堆積状況であったと考えられるが、盛土造成時に削平されてしまいⅢ層直上まで盛土層となる部分も多い。

なお、Ⅲ層の浅間第一軽石流は表層では砂質の明るい黄褐色土となっているが、30cm程度下部になると上部に比べ白っぽい乳白色やにぶい黄橙色土・にぶい橙色土に変性し、しまりが強く粘性の強い土層となる。



## 第2節 遺構と遺物

近津遺跡群で検出された遺構は、竪穴住居跡・竪穴状遺構 47 軒、円形周溝墓 2 基、土坑 37 基、焼土跡 8 基、溝跡 3 条、小穴群 1 基、不明遺構 2 基を数える。竪穴住居跡は古墳時代前期 30 軒、同中期 3 軒、同後期 2 軒、平安時代後期 10 軒、時期不明 2 軒で古墳時代前期と平安時代後期を主体とする。円形周溝墓は土器が伴わず時期決定に苦慮するが、1 基の主体部から鉄鏃等が副葬されて出土した。土坑は遺物を伴うものが少なく時期や性格を把握できないものが多いが、縄文時代の陥し穴、古墳時代の小土坑、平安時代の墓坑など多様なものがある。溝跡も遺物が伴わず時期決定ができないが、類似した 2 条の溝跡が台地を横断し区切るように存在する。これらの遺構は前節の遺跡の概観で触れたように、高位や低位平坦面、田切り谷に向かう緩斜面といった地形面に広がって構築されている。以下、遺構ごとに記載していく。

### 1. 竪穴住居跡・竪穴状遺構

SB4002 [第 34・35 図 PL10・22・37]

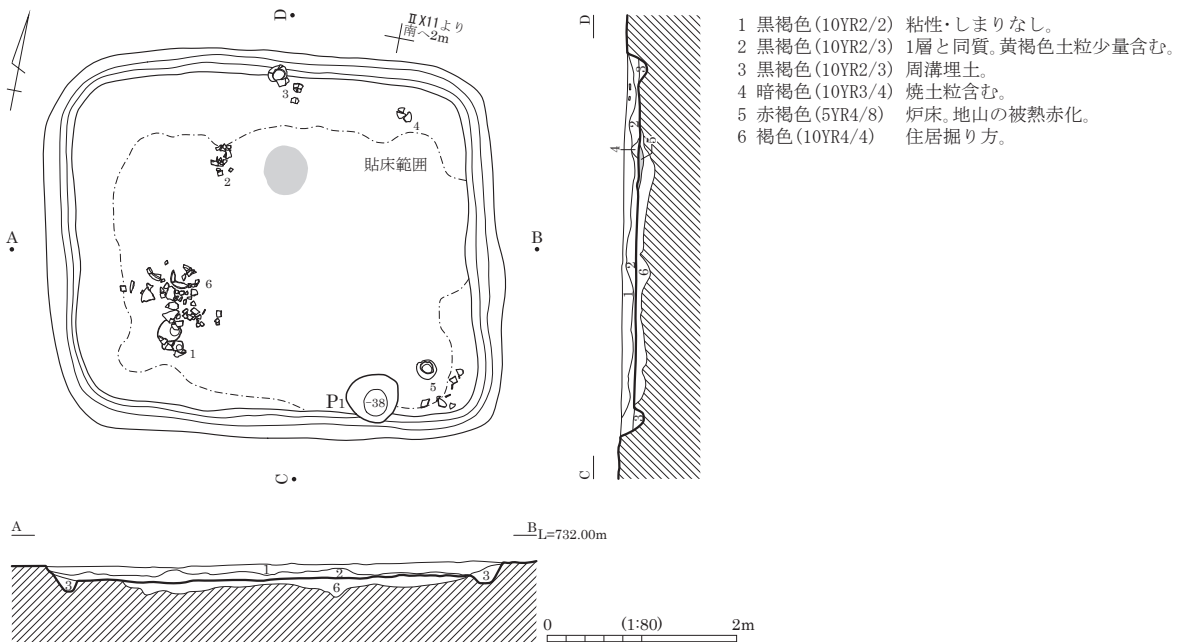
位置：4 区の高位平坦面、II W 15, X 11 グリッド。SB4003 が北東 5 m に近接する。

検出：表土層直下のⅢ層浅間第一軽石流で黒褐色土の落ち込みとして検出。

埋土：地山の軽石流を起源とする黄褐色土粒を含む黒褐色土。上部は表土層に近い。自然堆積と考えられる。壁際を除き全体に浅い掘り方を持つ。自然埋没。

構造：南北 3.53 m、東西 4.14 m の東西にやや長い隅丸方形を呈する。主軸は N 10° W で、近接する SB4003 と類似する。検出面からの掘り込みは浅く、壁高は最大で 16cm、床面はやや凹凸がみられ堅固ではない。柱穴は確認されず、南東壁下の P 1 は貯蔵穴と考えられる。壁下を周溝が全周する。

炉：中央やや北側にあり、地床炉。浅い掘り込みで埋土にはわずかに焼土粒が含まれる。

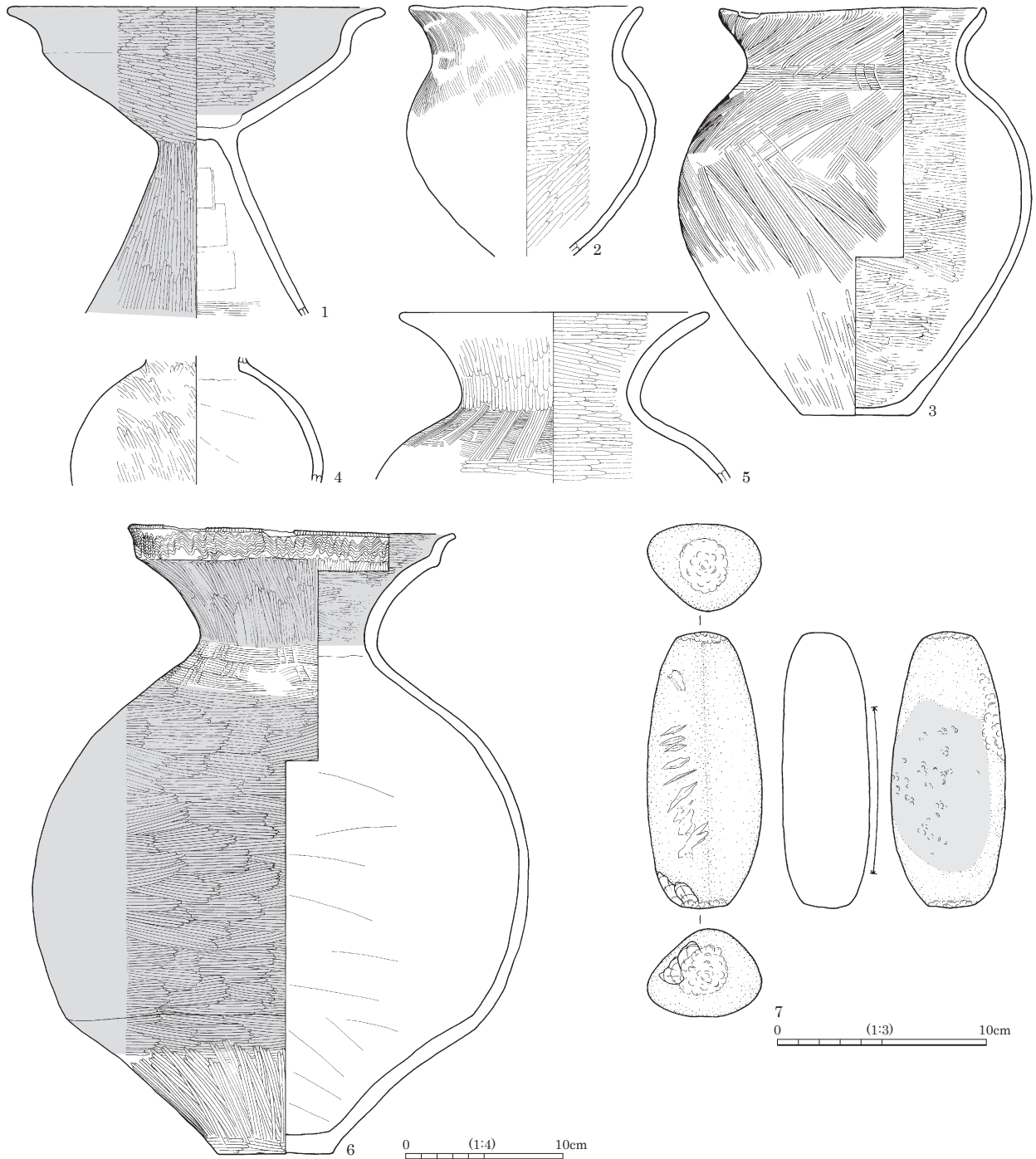


第34図 SB4002 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甗	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハ甕	その他	箱清水系	その他					カメ・フナノ類	カサ・ハネ類				
種類	1	1		2	1	1					13				
重量(g)	810	450		4435	260	900					70			18	

第26表 SB4002 出土土器集計表





第35図 SB4002 遺物図

**遺物分布：**床面直上から比較的大形破片が出土し、特に南西部では壺（6）や高坏（1）が潰れた状態でまとまって出土した。

**出土遺物：**3は口縁部の外反が強く、口縁部に斜状、胴部に羽状の櫛描文が施される。2は粗いハケ調整の甕。6は赤彩の大型壺。口縁部が短く立ち上がり受口状となり櫛描波状文が施文される。頸部には3段の簾状文。胴部は球胴化し、胴下半の括れは弱い。5は口縁部が大きく開く。4は球状の胴部で、口縁部は直立すると考えられる。1は赤彩の大型高坏。坏部は有段で、脚は長く直線的に開く。7は砂岩の棒状礫を素材とした敲石・磨石で両端は敲打痕があり、表面には細い筋状の凹みが斜めに走る。裏面は全体に磨られ一部光沢をもつ。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

SB4003 [第36図 PL11・23]

位置：4区の高位平坦面。II W 10, X 06 グリッドで、SB4002の北東に位置する。

検出：表土層直下のⅢ層浅間第一軽石流上面で検出。南東隅をSB4005に切られる。

埋土：軽石粒や黄褐色土ブロックを含む黒褐色や暗褐色土。自然堆積と考えられる。全体に浅い掘り方を持つ。

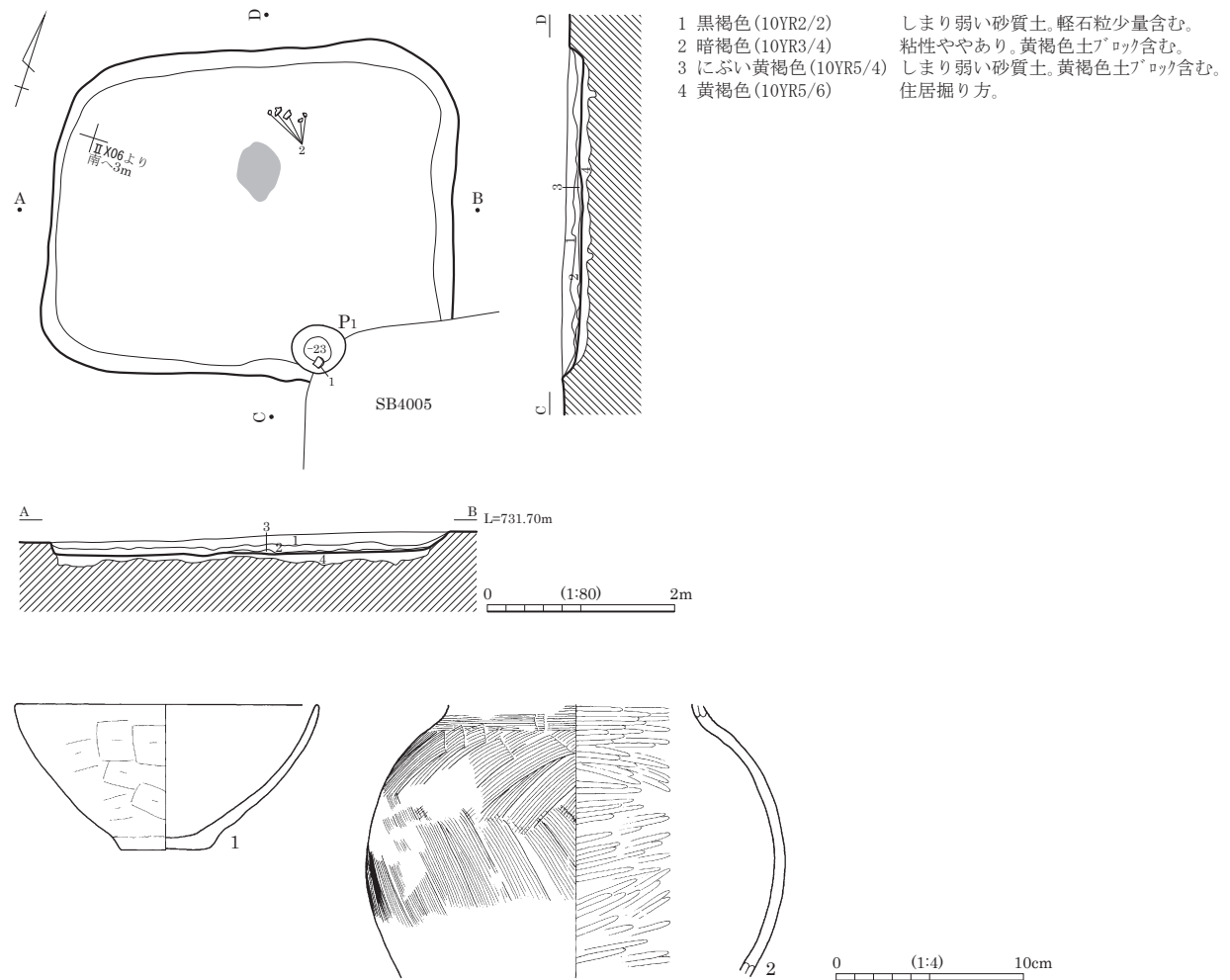
構造：南北3.12m、東西4.04mの東西にやや長い隅丸方形を呈する。主軸はN 17° Wで、近接するSB4002に類似する。掘り込みは浅く、壁高は20cm弱。柱穴は確認されず、南東壁下のP1は貯蔵穴と考えられる。周溝は認められなかった。住居構造は近接するSB4002と類似する。

炉：中央部やや北側の床面に焼土が広がるが、明確な掘り込みはない。

遺物分布：P1内から1の鉢が出土。埋土からの出土は非常に少ない。

出土遺物：2は球胴の甕で、胴部に羽状櫛描文、頸部に簾状文。1は碗状に開く鉢。

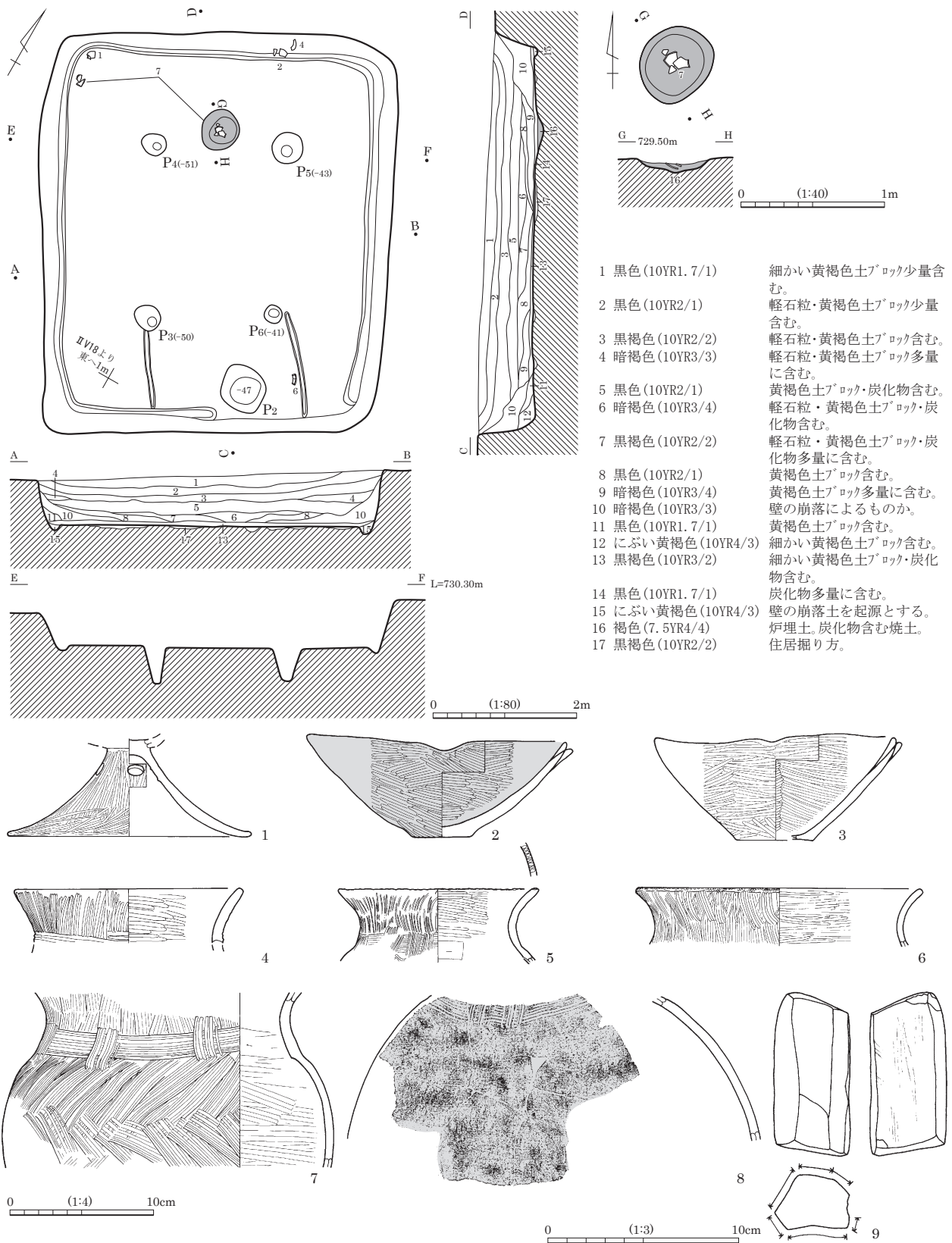
時期：出土遺物から古墳時代前期前半。



第36図 SB4003 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱溝水系	ハ甕	その他	箱溝水系	その他					カメ・フタ類	カサ・ハシ類				
種類															
個体数	1			2			1								
重量(g)	175			10			200								

第27表 SB4003 出土土器集計表



第37図 SB5003 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系	その他					カマ・ハツ類	カマ・ハツ類				
個体	4	68		1	32	1	22	2			83	56	2		
重量(g)	1049			600		340	433				800	200	52		

第28表 SB5003 出土土器集計表

## SB5003 [第37図 PL11・23・37]

**位置：**5区の高位平坦面から6区低位面への斜面に移行する付近。ⅡV 12・13・18グリッド。西側にSB5004が近接する。

**検出：**西側の低位面からのびる浅い谷状の黒色中で土質のやや異なる広がりとして確認できたが、平面プランなどが不明瞭のためⅢ層の浅間第一軽石流上面まで掘り下げて検出した。

**埋土：**壁際には壁崩落土がみられ、床面直上には浅く炭化物を含む黒褐色土が堆積する。その上部は軽石粒や黄褐色土ブロックなどを含む暗褐色や黒褐色土がレンズ状に堆積する。最上部は基本土層Ⅱ層に近い黒色土となる。自然堆積と考えられる。

**構造：**南北4.88 m、東西4.18 mの隅丸方形を呈する。主軸はN 29° W。検出面からの掘り込みは深く、壁高は70cm弱を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。地山の浅間第一軽石流を床面とするが黒褐色土の貼床となる部分も認められた。柱穴はP 3～P 6の4本で、住居床面から40～50cmの深さがある。周溝は南東部を除いて廻り、周溝が切れる部分には貯蔵穴が穿たれている。南壁から柱穴に向かい並行して2本の細い溝があり、住居間仕切りに関係するものであろう。

**炉：**中央北側の柱穴間にあり、地床炉。炭化物を含む焼土が堆積し、埋土中から甕(7)が出土。

**遺物分布：**2・4は埋土中程から出土。他の土器は床面直上から出土。

**出土遺物：**4～7は櫛描文の施された甕。口縁部では縦位、胴部では羽状となる。8は赤彩の壺。胴部は丸みをもった球胴となる。1は大きく開脚する高坏脚で、円形透かしを持つ。2・3は片口の鉢で、2は赤彩される。9は砂岩製の砥石で、角柱状の多面体で全面を使用しており、砥面は中央部が凹み気味に湾曲する面もある。他に砂岩製の磨石がある。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

## SB5004 [第38図 PL12・23]

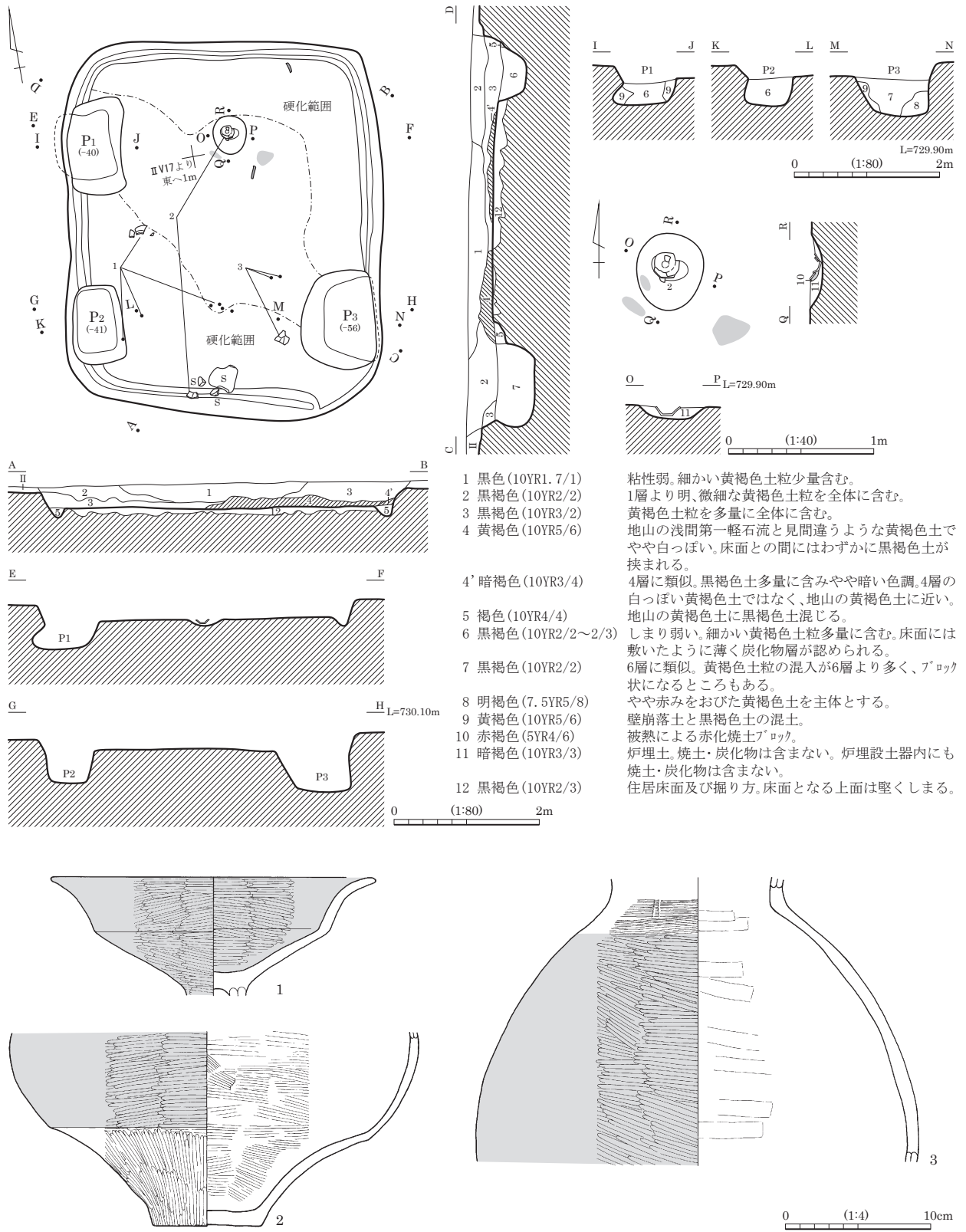
**位置：**5区の高位平坦面から6区低位面への斜面に移行する付近。ⅡV 11・12・16・17グリッド。西側にSB5003が近接する。

**検出：**西側の6区低位面からのびてくる浅い谷状の黒色土中で土質の違う広がりが確認された。しかし、平面プランが不明瞭のため、浅間第一軽石流漸移層まで掘り下げながら精査を行ったが検出は困難であった。同時に想定される平面形に合わせてトレンチで埋土や床面を確認した。そのため、結果的にセクションベルトが住居に対角することとなった。

**埋土：**上部は黄褐色土粒を含む黒・黒褐色土層で、北東部や西壁付近・北東隅付近では床面との間に薄い黒褐色土を挟んで最大20cm程の厚みで黄褐色土ブロック(セクション図4層)が堆積している。人為的埋戻しの可能性がある。なお、この黄褐色土ブロックは住居隅付近に掘り込まれる大形のP 1～P 3上にはない。

**構造：**南北4.52 m、東西3.78 mのやや南北に長い隅丸方形を呈する。主軸はN 11° Eで東側に位置するSB5009に類似し、周辺の同時期住居と軸を異にする。壁高は25cm程度で、壁面は上部が崩落によりやや広がっている。床面は周縁部1 m程度の幅で堅緻な黒褐色土の貼床となる。中央部は地山に近い黄褐色土で堅くない。柱穴は検出されず、北西・南西・南東の隅付近に大形の方形ピットが掘り込まれている。長軸1.4 m、短軸80cm程の大きさで、床面から40～55cm程を測る。住居外側の壁はオーバーハングする。P 1やP 2では床面に炭化物が認められた。南東隅を除いて周溝が廻る。

**炉：**中央部北側に土器埋設炉がある。炉の南東や南側の床面に焼土ブロックが認められたが、炉内には焼土や炭化物は含まない。壺底部(2)が埋設される。



第38図 SB5004 遺構図・遺物図

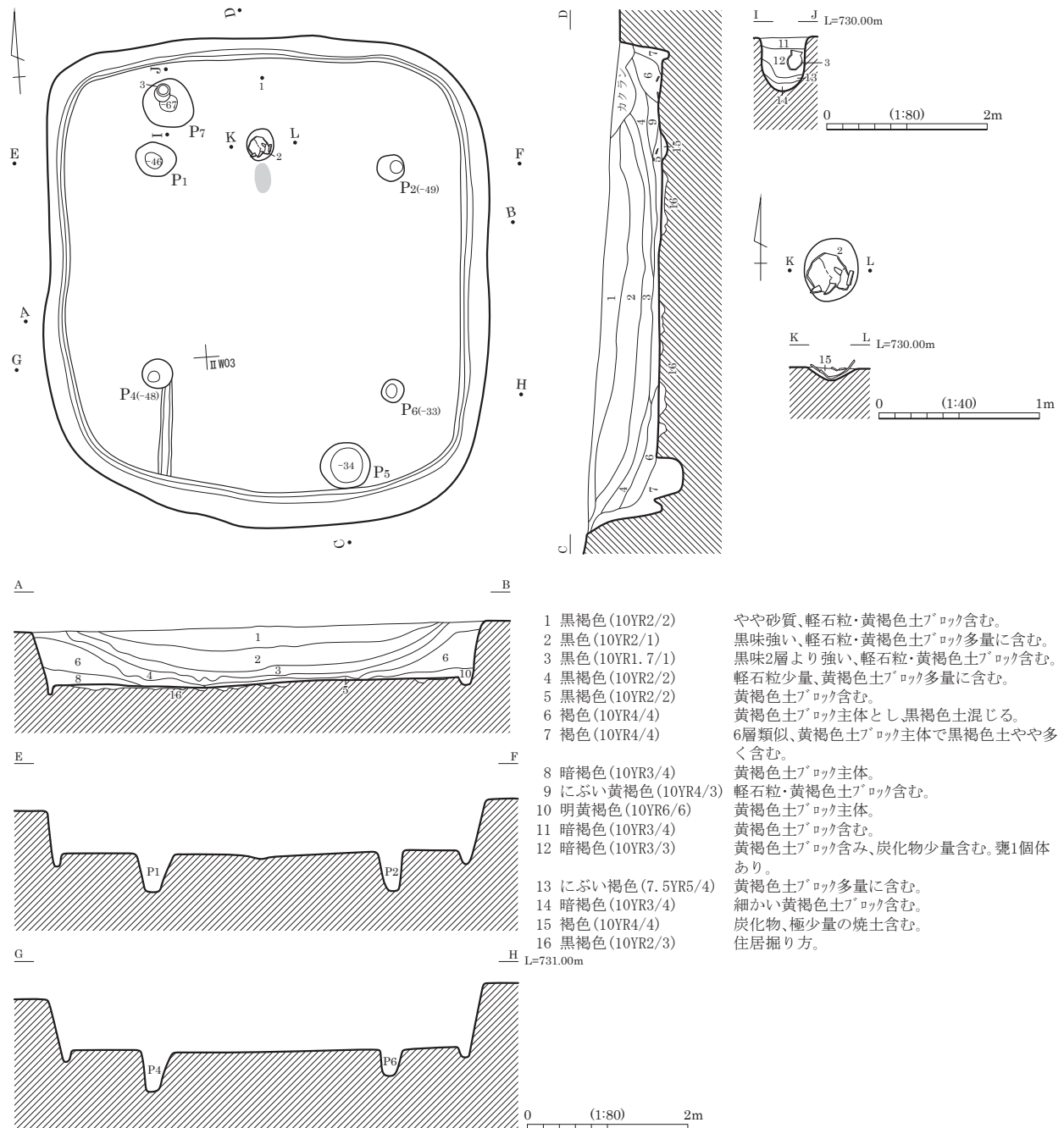
器種	甕			壺		高杯	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系	その他					カ・タノ類	カノ・ハノ類				
個体 点数	27			2	29	1	1				13				
重量(g)	181			1845		500	7				87			75	

第29表 SB5004 出土土器集計表

遺物分布：出土遺物は少なく、埋土中や床面直上から高坏（1）や壺（3）などが出土。また、南壁下に一辺30～40cmの平たい大形の礫が出土した。

出土遺物：2・3は赤彩の壺。2は胴下半が括れ稜を持つ。3は頸部に簾状文を施し、胴部は丸みを帯びた球胴となる。1は赤彩の有段坏部の高坏。

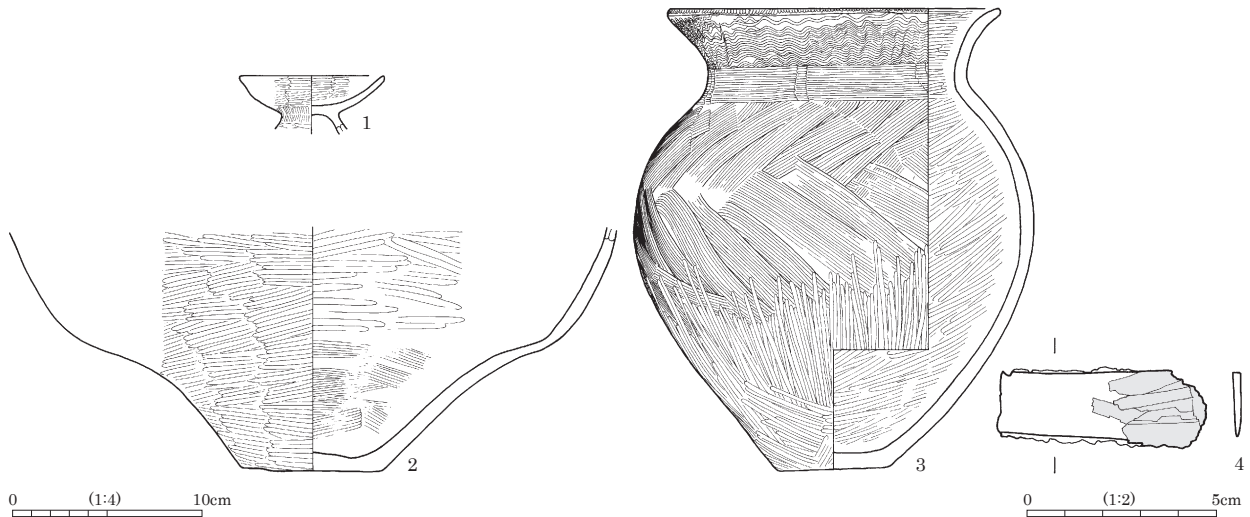
時期：出土遺物から古墳時代前期前半。



第39図 SB5009 遺構図

器種	甕				壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱溝水系	ハ壺	その他	箱溝水系	その他	カメ・フタ類					カサ・ハ類					
種類	1	14	27	1	12			1			59	9		1		
個体	1	14	27	1	12			1			59	9		1		
重量(g)	1764	235		904				39			413	79		6		

第30表 SB5009 出土土器集計表



第40図 SB5009 遺物図

**SB5009** [第 39・40 図 PL12・23・24・40]

**位置：**5区の高位平坦面。Ⅱ R 22・23, W 02・03 グリッド。西側に SB5010 が近接する。

**検出：**Ⅲ層の浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**壁の崩落土等を起源とする褐色土が壁際に堆積し、住居中央部は軽石粒や黄褐色土粒・ブロックを含む黒・黒褐色土がレンズ状に堆積している。部分的に浅い掘り方を持つ。自然堆積と考えられる。

**構造：**南北 5.42 m、東西 4.88 m のやや南北に細長い隅丸方形を呈する。主軸は N 3° E で、西側に位置する SB5010 や SB5004 と類似する。掘り込みは深く壁高は最大 75cm を測り、壁面は垂直に近い立ち上がりとなる。床面は地山の黄褐色土で貼り床はない。P 1・P 2・P 4・P 6 の 4 本が柱穴で、直径は 30cm 程と細いが床面から 30～50cm 程と深い。南東隅の P 5、北西隅の P 7 は貯蔵穴であろう。壁下を周溝が全周する。南壁下から南西柱穴に向かい細い溝があり、住居間仕切りに関係するものであろう。

**炉：**中央部北側の柱穴間より若干奥にあり、土器埋設地床炉である。浅い掘りこみの底面に壺底部（2）を設置している。炉埋土内には極微量の焼土を含むのみである。また、炉南側に焼土ブロックが認められた。

**遺物分布：**埋土や床面からの出土遺物は少量。P 7 の埋土中程から完形の甕（3）が出土した。1 の小型器台（1）は炉北側の床面から出土。4 の鉄製品は埋土中位出土。

**出土遺物：**3 は櫛描文の甕で、外反が強い口縁部には波状文、胴部には羽状櫛描文が施されている。口唇部は刻まれる。2 は壺底部で胴下半は括れるが稜は不明瞭となる。1 は小型器台の受部。浅い皿状で、脚部との間に貫通孔はない。4 の鉄製品は薄手品で、詳細不明。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

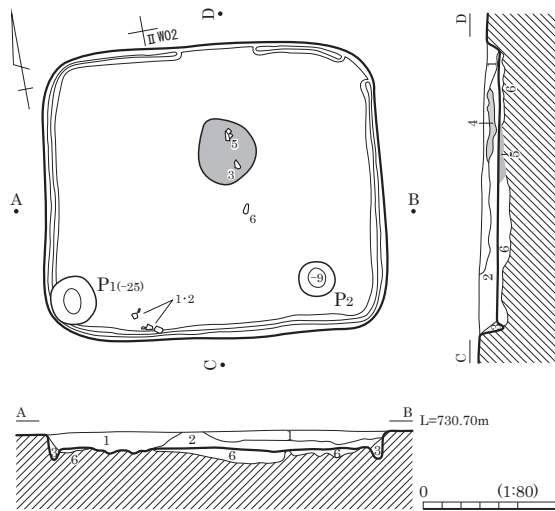
**SB5010** [第 41 図 PL13・24]

**位置：**5区の高位面平坦面。Ⅱ W 01・02 グリッド。東側に SB5009、西側に SB5011 が近接する。

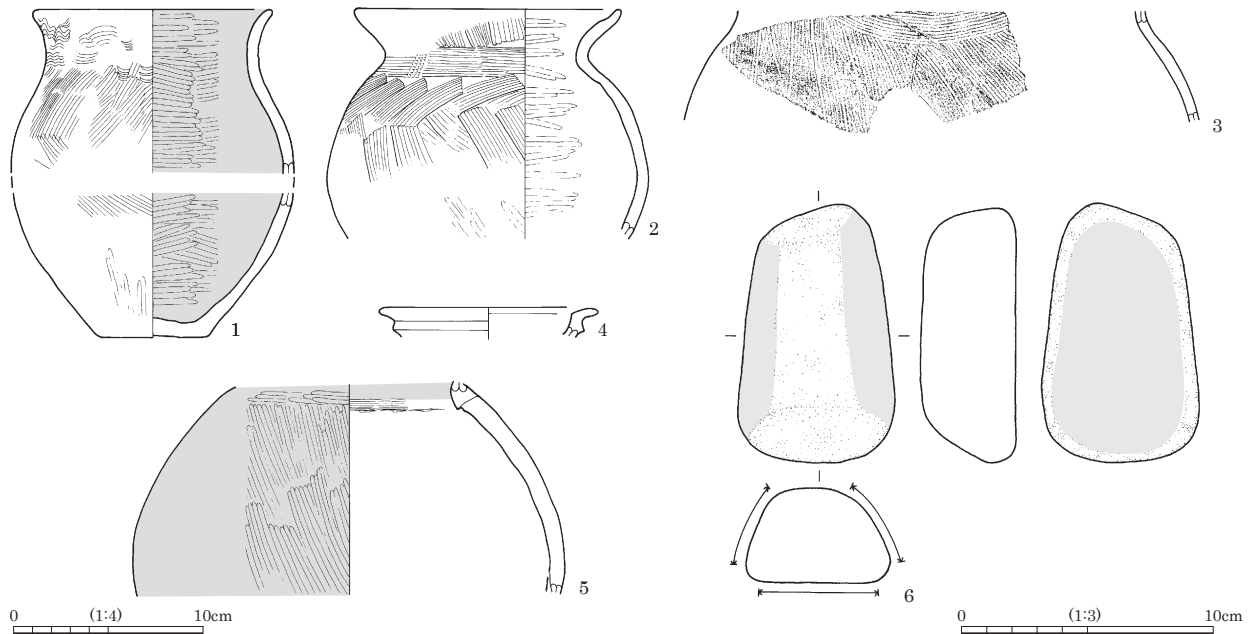
**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で検出されたが、耕作などの影響で不鮮明の部分もある。

**埋土：**軽石粒・黄褐色土ブロックを含む黒褐色土で、埋土中位に焼土を主体とした層が挟まれる。なお、上部や一部床面まで現代の耕作が及んでいる。全体に 20cm 程度の掘り方を持つ。

**構造：**南北 2.90m、東西 3.30 m の隅丸方形を呈し、近津遺跡群検出の該期住居跡で最も小型である。主軸は N 8° E で、東側に位置する SB5009 と類似する。壁高は 23cm 程と浅い。床面は堅緻でない。ピットは 2 基検出され、P 2 は浅いが柱穴に関係するものか。P 1 は貯蔵穴か。



- 1 黒褐色(10YR2/3) 耕作土。
- 2 黒褐色(10YR2/3) 軽石粒・黄褐色土<sup>+</sup>ロク少量含む。
- 3 暗褐色(10YR3/3) 2層に類似、黄褐色土<sup>+</sup>ロク多量に含む。
- 4 赤褐色(5YR4/6) 焼土を主体とする。
- 5 赤褐色(5YR4/8) 炉床、地山の被熱赤化。
- 6 暗褐色(10YR3/4) 住居掘り方。



第41図 SB5010 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハ	ノ	箱清水系	その他					カ	ハ				
種類	箱清水系	ハ	ノ	箱清水系	その他					カ	ハ				
個体	4	25	1	1	18	6				62	3				
重量(g)	705	367	5	358		34				630	33				

第31表 SB5010 出土土器集計表

炉：中央北側にあり、浅い掘りこみの地床炉。底面が被熱赤化する。

遺物分布：埋土内の出土遺物は少ない。南壁下で甕片がややまとまって出土した(1・2)。3は炉内出土片とSB5011のP1・P7出土片が接合している。他にハケ調整甕片でもSB5011出土片との接合例がある。

出土遺物：1～3は櫛描文の甕。1は口縁部外反が弱い。内面全面が赤彩される。2は口縁部の外反が強く胴部は球胴状となる。4はS字状口縁甕片で、口唇部で屈曲外反する。ナデ調整されるがわずかにハケ調整が残る部分もみられる。5は赤彩壺の頸部から胴上半部で球胴となる。6は砂岩の台形状礫を素材とした磨石。下面の平坦面が磨られ、側面にも磨痕がみられる。

時期：出土遺物から古墳時代前期前半。



SB5011 [第42・43図 PL13・24・37]

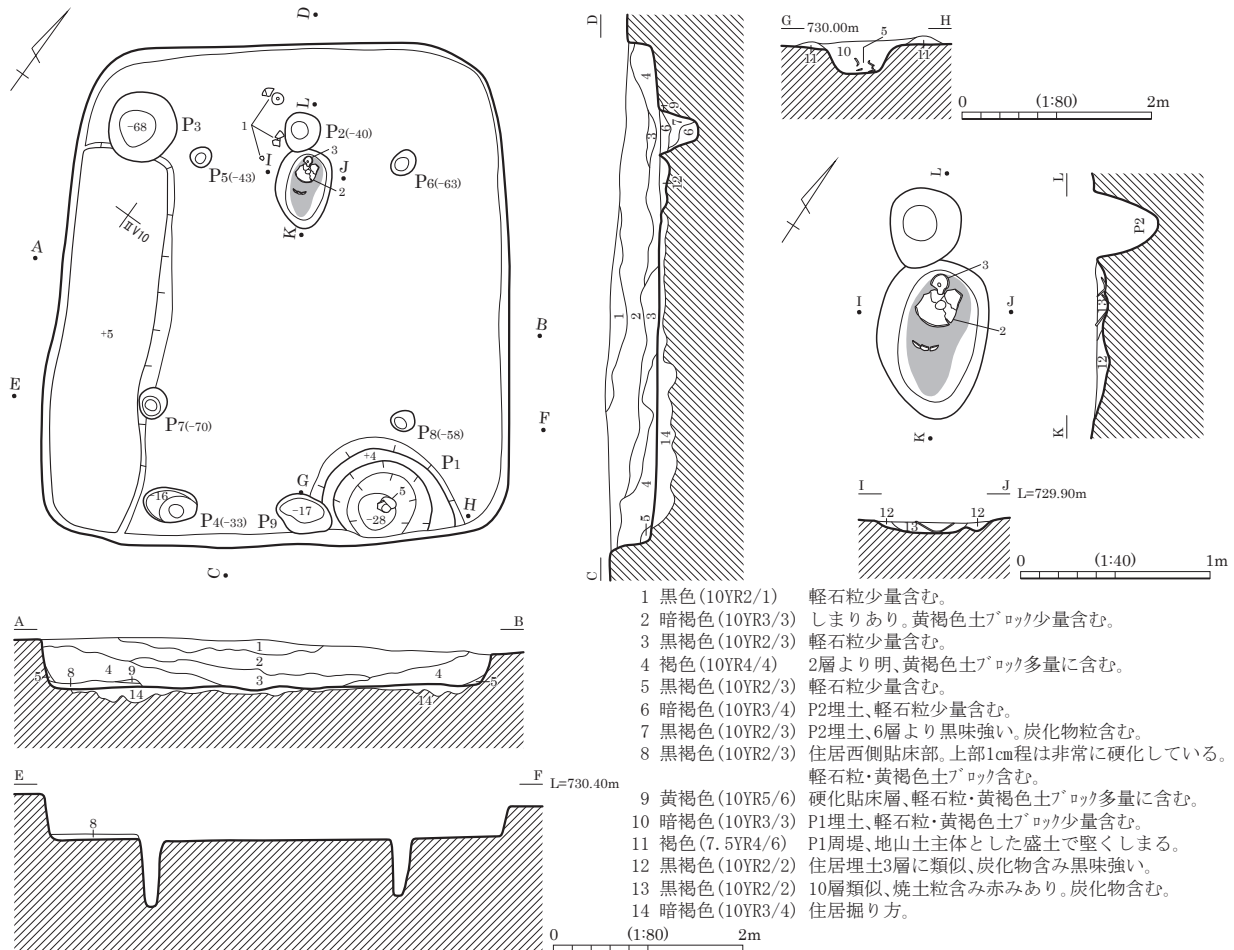
位置：5区の高位面平坦面。ⅡV 04・05・09・10グリッド。東側にSB5009・5010が、西側にSB5003・5004があり、60m程の範囲に同時期の遺構がまとまる。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。部分的に耕作や攪乱を受けている。

埋土：壁際に厚く地山の軽石流を起源とするブロックを多く含む褐色土が堆積し、中央部から上部は黒・黒褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没と考えられる。住居掘り方は、壁際では10～20cmと深く、中央部は浅くなっている。

構造：南北5.14m、東西4.46mの南北にやや長い隅丸方形を呈する。主軸はN36°Wで、西側に位置するSB5003に近い。壁高は35～45cmを測り深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は掘り方上面を堅緻に踏み固めている。西壁沿いに幅1m程のベッド状施設を持つ。施設は床面より5cm程高く貼ったもので、上面は床面同様に堅緻になっている。P5～P8の4本が支柱穴。南壁近くのP4・P9は入口施設に関係するものか。南東隅付近に周堤を伴う貯蔵穴が掘り込まれている。周堤は貯蔵穴の周りを4cm程盛り、堅くしまっている。

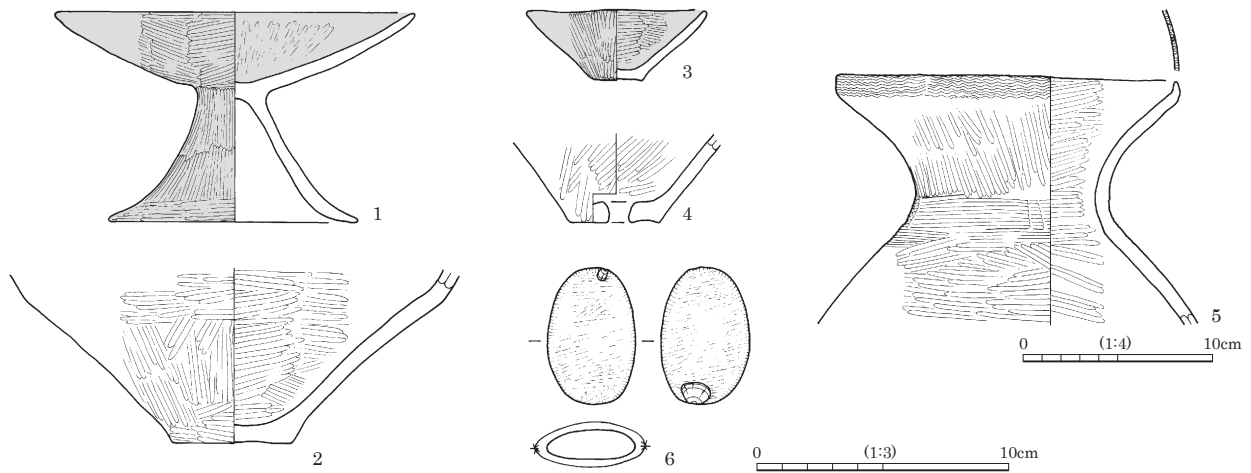
炉：中央北側の柱穴間にあり、土器埋設炉。炉北側に壺底部(2)と鉢(3)を設置している。炉底面は



第42図 SB5011 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハコ	その他	箱清水系	その他					カ・フホノ類	カサ・フホノ類				
個体	16	37		2	20		1		1		48	10			
重量(g)	166	380		1347			460		62		656	55			

第32表 SB5011 出土土器集計表

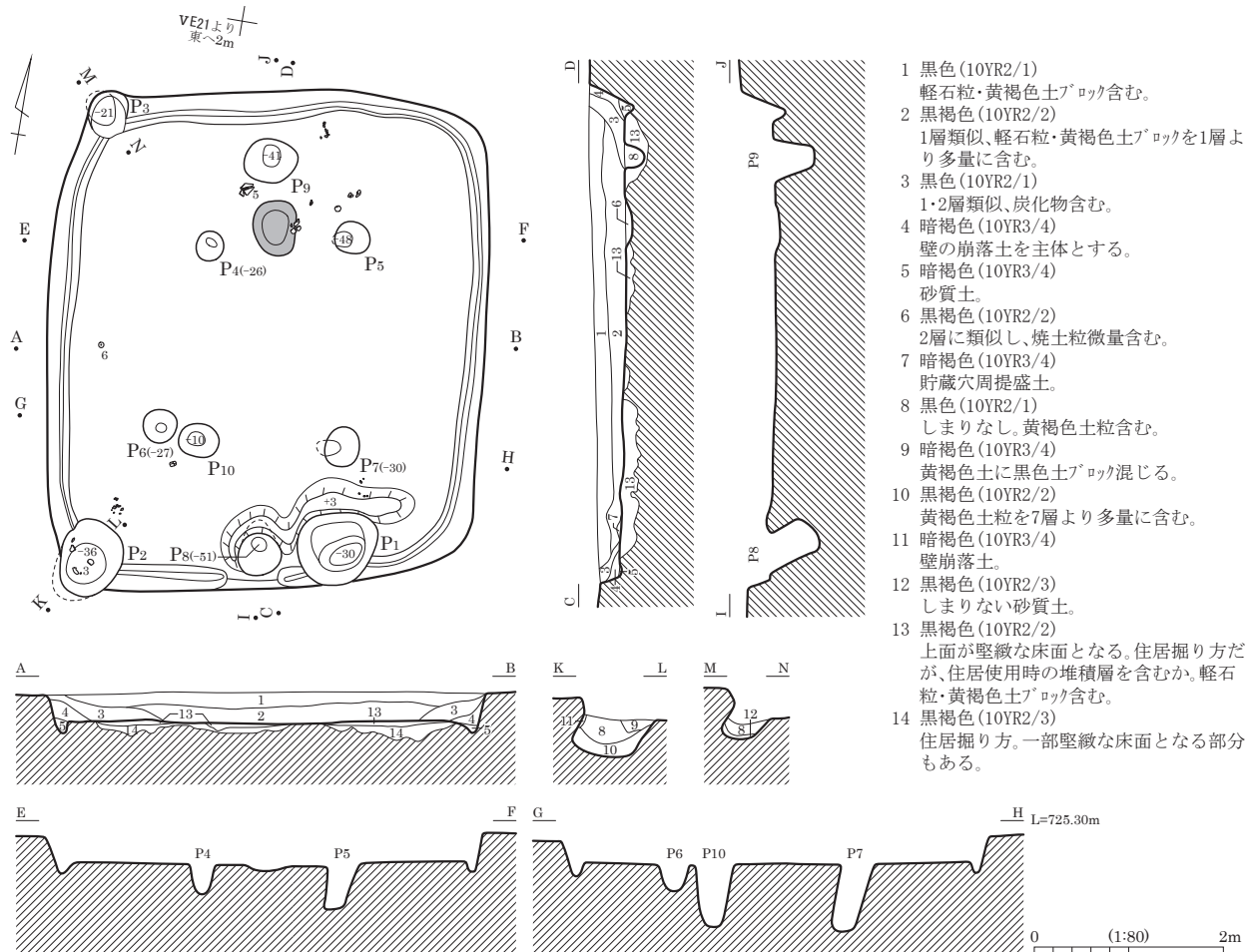


第43図 SB5011 遺物図

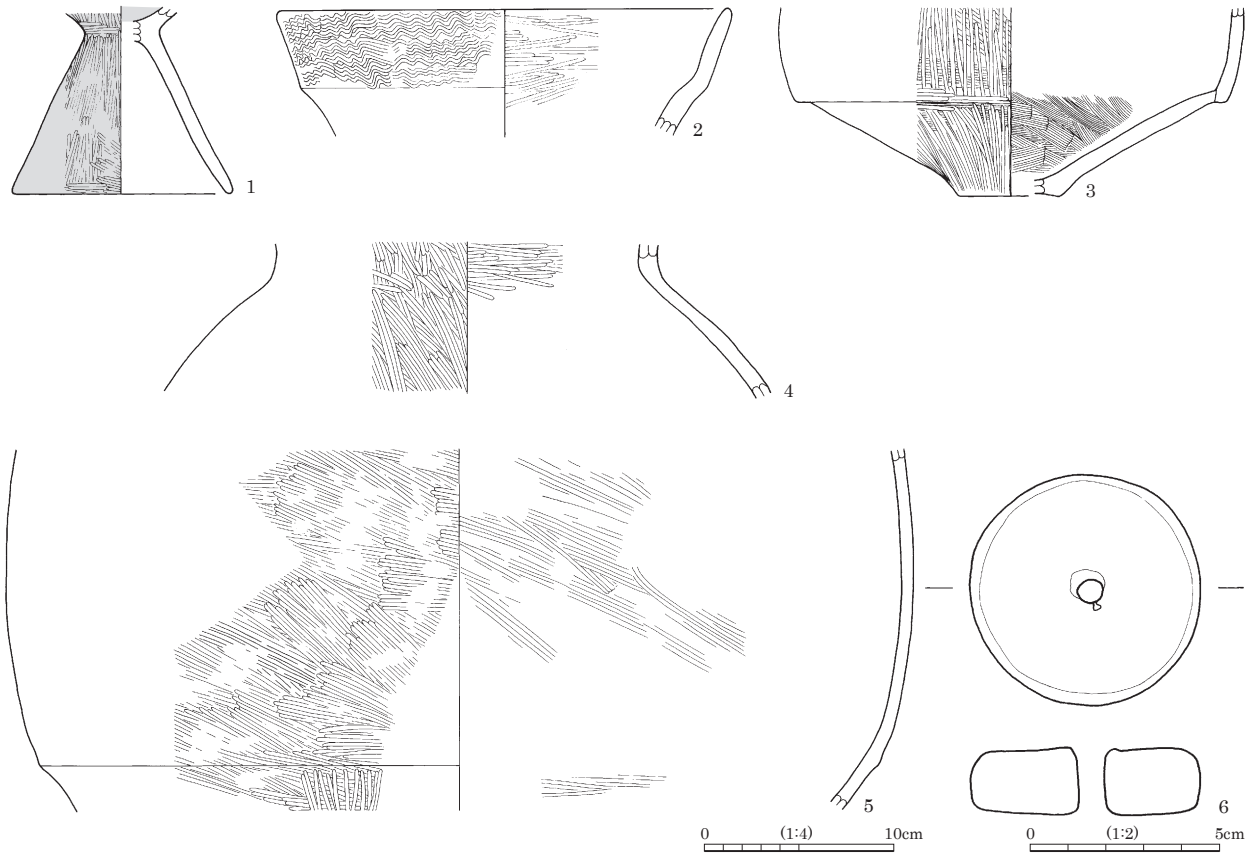
被熱赤化するが、埋土には焼土粒や炭化物を含む程度。

**遺物分布：**貯蔵穴底面付近から出土した壺口縁部（5）はSB5009埋土出土片と接合している、炉北側床面直上からは高坏（1）が出土。

**出土遺物：**5は無彩の壺。口縁部は受口状となり、口唇部に刺突が加えられる。SB5009の埋土出土片が接合した。1は赤彩の高坏。脚部は浅く直線的に開く。3は赤彩の小型鉢。4は甑で底面に単孔が開く。6は頁岩の扁平小形礫の全面が磨られている。短軸と平行するような線状痕が認められ、側面は稜をもつ



第44図 SB6001 遺構図



第45図 SB6001 遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系	その他					カガ・ホノ類	カガ・ホノ類				
個体	15	1	3	3	82	1	1	39			13				
重量(g)	149	136		1769	186	504					75			10	紡錘車1(66g)

第33表 SB6001 出土土器集計表

部分もある。土器製作時のミガキ用の石か。

時期：出土遺物から古墳時代前期前半。

SB6001 [第44・45図 PL13・37]

位置：6区の低位平坦面。V E 21 グリッド。周辺の低位面にはSB6002～6007の同時期住居跡が50m程の範囲にまとまって構築されている。

検出：6区では現地表面下に1m以上の厚さで盛土がなされており、先ず重機により盛土及び旧表土を除去した。旧表土下にはⅢ層浅間第一軽石流上面に30cm程の層厚で黒色土が堆積しており、黒色土中での遺構検出は困難で、漸移層上面で周辺が黄褐色土の混じった土層に対して黒色土の落ち込みとして検出された。

埋土：壁際には壁の崩落による暗褐色土がみられる他は黒・黒褐色土となる。自然堆積と考えられる。全体に掘り方もち、周縁部が深く中央部は浅くなっている。

構造：南北4.86m、東西4.20mの隅丸方形を呈する。主軸はN 8°Wで、近接するSB6002やSB6004に類似する。壁高は30～35cm程度。床面は黒褐色土の掘り方上面で堅緻になっている。P 4～P 7の4本が柱穴で、炉北側のP 9と南壁下のP 8は棟持ち柱に関係するものか。P 8は外側に斜めに傾く。また、P 2とP 3はいずれも住居西側隅で内側に傾くように斜めに掘り込まれている。南東隅付近のP 1は貯

蔵穴で、周りを床面より3cm程高く盛り上げた周堤をもつ。南壁の一部を除き周溝が壁下を廻る。

炉：中央北側の柱穴間にあり、地床炉。底面は被熱赤化する。

遺物分布：西壁近くの床上10cmから土製紡錘車（6）が出土。土器類の出土は少量で、破片が多い。

出土遺物：甕は薄手のハケ調整甕片が出土しているが図化できなかつた。2は口縁部に波状文を施した壺。3は底部に胴部を重ね成形していて、接合部が段状となる。5では胴下半部の括れが不明瞭となっている。4は広口の壺で、胴部は球胴状となる。全面ミガキ。6は直径約6cmの土製紡錘車。中央に孔が開き、扁平で上面は平滑に仕上げられている。

時期：出土遺物から古墳時代前期前半。

SB6002 [第46図 PL13]

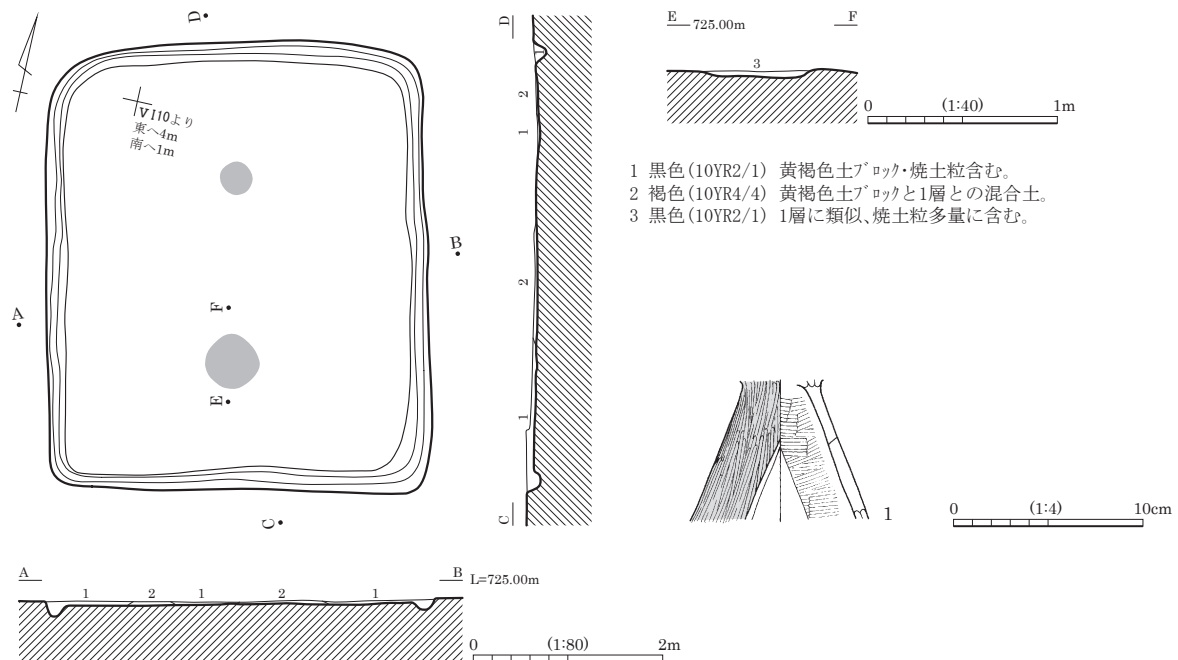
位置：6区の低位平坦面。V I 10グリッド。周囲の低位面にはSB6001・SB6003～6007の同時期住居跡が近接し、すぐ東側にSB7003が位置する。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流への掘り込みがほとんどなく、漸移層上面でほぼ床面が露出した状況で検出された。

埋土：残存した埋土は床面直上の極わずかで、黄褐色土ブロックや焼土粒を含む黒色土となる。

構造：南北4.30m、東西3.64mの隅丸方形を呈する。主軸はN13°Wで、近接するSB6001・SB6004に近い。漸移層下部からⅢ層浅間第一軽石流上面を床面としていて、壁高は5cm未満で床面も堅緻ではない。周溝が全周するが、柱穴などは確認されなかつた。

炉：中央北側と南側の2ヶ所で検出された。北側の炉は床面に焼土が広がるのみで掘り方はない。一方南側の炉は浅い掘り込みが確認され、底面の被熱赤化も北側より強い。



第46図 SB6002 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カメ・ツボ類	カケ・ハケ類				
個体	1	5								16		2			
重量(g)		175								205		9			

第34表 SB6002 出土土器集計表

**遺物分布：**土器小片がわずかに出土したのみ。

**出土遺物：**1は赤彩の高坏脚部。直線的に開き、三角透かしを持つ。

**時期：**出土遺物が非常に少ないが、わずかな出土土器及び周囲の状況から古墳時代前期初頭と考える。

**SB6003** [第47図 PL14]

**位置：**6区の低位平坦面。V J 01・06 グリッド。周囲にはSB6001～6007の同時期住居跡がまとまる。

**検出：**SB6002同様の状況で、黒色土中での遺構確認が困難で、漸移層上面でほぼ床面が露出した状況で検出し、炉も確認され、住居跡と判断した。

**埋土：**床面直上にわずかな黒色土が確認されたのみである。

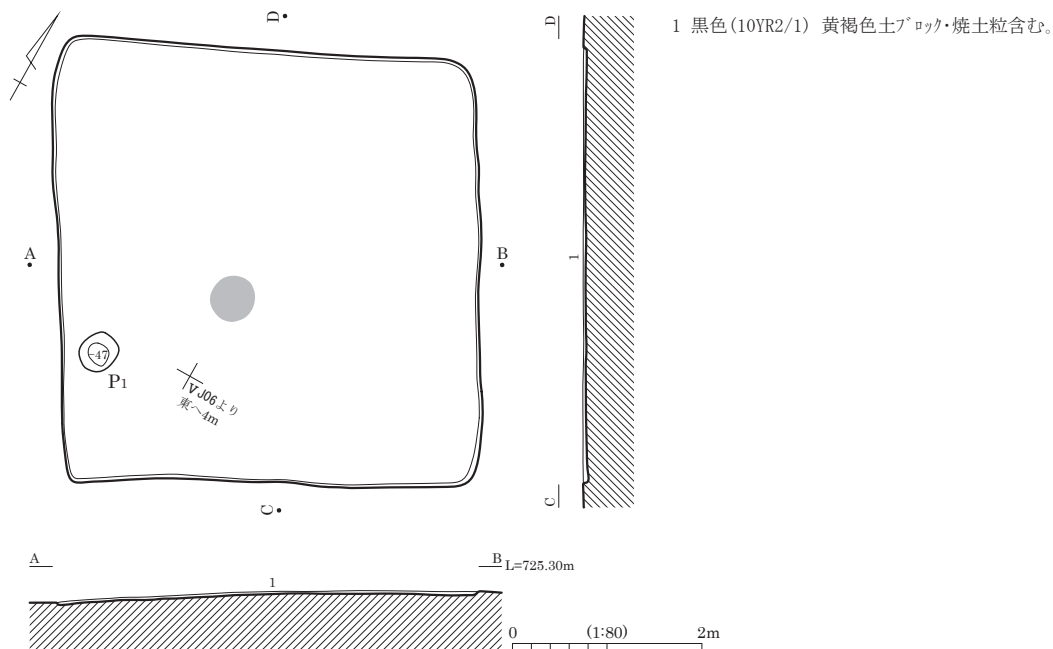
**構造：**南北4.50m、東西4.40mの隅丸方形を呈する。主軸はN 31° W。床面もSB6002と同様に漸移層下部で地山となる浅間第一軽石流への掘り込みはほとんどない。南西壁際にピットが1基検出され、貯蔵穴と考えられる。柱穴などは確認されなかった。

**炉：**ほぼ住居中央部にあり、炉床のみが遺存していたが、被熱は弱い。

**遺物分布：**P 1 から甕の小片が出土したのみ。

**出土遺物：**図化可能な遺物はない。

**時期：**わずかな出土土器と住居形態や周辺の状況から古墳時代前期前半と考えられる。



第47図 SB6003 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	瓶	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ甕	その他	箱清水系	その他					カマ・フタ類	カサネ・フタ類				
個体	点数									1					
重量(g)										9					

第35表 SB6003 出土土器集計表

## SB6004 [第48・49図 PL14・24・25・37]

**位置：**6区の低位平坦面。VE 22・23, J 02・03グリッド。周囲にはSB6001～6007の同時期住居跡がまとまる。

**検出：**本遺構は用地内の住宅への進入路確保のため2回に分けて調査を行った。当初、6区北側の調査の際大きな攪乱部と調査残部との間に黒色土の落ち込みとして確認され、南西部の一部のみを調査した。後に道路部分の調査で、残りの部分を検出し全体が明らかとなった。住居北西部は大きな攪乱により床面以下まで壊されている。

**埋土：**壁際には軽石流を起源とする黄褐色ブロックや軽石粒などを多く含む土層が堆積し、住居中央部では黒・黒褐色土がレンズ状に堆積している。自然堆積と考えられる。なお、後半の調査では住居掘り込みが深いことから、住居を掘り下げた排土が住居周堤として確認できるのではないかと考え、旧表土以下を詳細に精査しながら掘り下げ、Ⅱ層中からの掘り込みは確認されたが、住居埋土最上部は旧表土により攪乱を受けていて周堤の確認はできなかった。東壁際には縦方向の堆積がみられ、壁面保護のために土留めなどの施設があった可能性が考えられる。

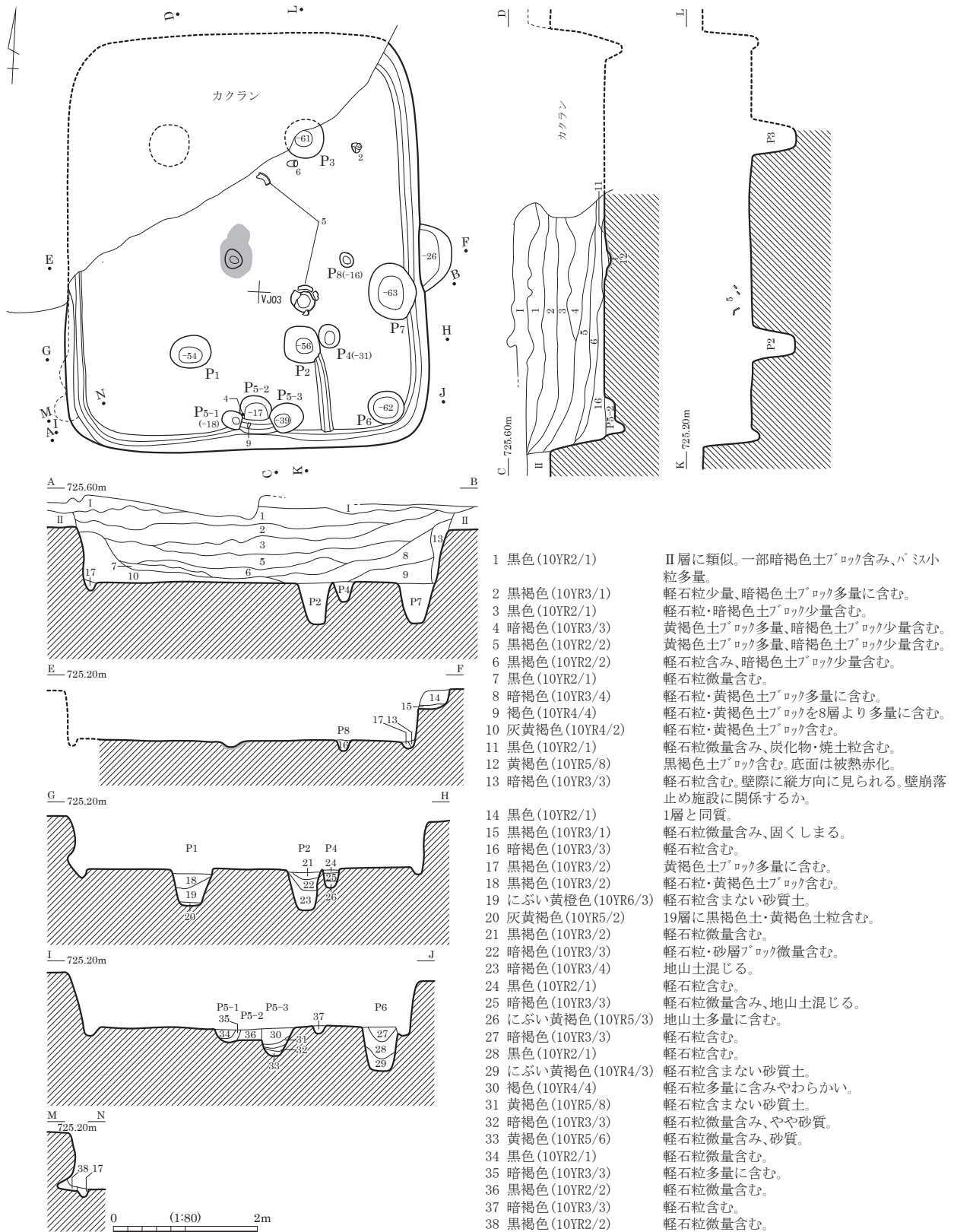
**構造：**南北推定5.2m程、東西4.56mの南北にやや長い隅丸方形を呈する。北西部を大きく攪乱されている。主軸はN4°Wで、北西に位置するSB6001や西側のSB6002に類似する。掘り込みは深く最大76cmを測り、ほとんど浅間第一軽石流を掘り込まないSB6002やSB6003とは対照的である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。但し、南西部の床面直上は西側に10～30cm程オーバーハングしたようになっている。床面は浅間第一軽石流の地山層で、南東部では堅くしまっている。P1～P3が支柱穴で、北西部は攪乱範囲にあたる。南壁中央のP5は入口施設に関係するピットと考えられる。また、東壁中央部では階段状の掘り込みがあり、入口部を変更したものかもしれない。P6・P7は貯蔵穴か。周溝は検出範囲では壁下を全周する。また、南壁下から南東部柱穴に向い、間仕切り状の細い溝が掘られている。

**炉：**住居中央部に位置する。小規模な被熱部が南北に重なっていて、南側は浅い掘り込みを持つ。つくり替えたものと思われる。

**遺物分布：**埋土下層から小型甕(6)、大形の甕胴上半部(5)が出土。また、P5中よりミニチュアの鉢(4)と磨石(9)が出土している。

**出土遺物：**5は大形の甕胴上半部で、口縁部は折り返される。口縁部から胴部にかけて櫛描波状文、頸部には簾状文が施文される。6は無文の小型甕。厚手で、ハケ調整後ミガキを施す。7は小型壺で、小さな底部から丸みのある胴部となる。薄手で赤彩される。8は球胴状の胴部から頸部ですぼまり口縁部は外側に開く。ハケ調整後ミガキ。1は大きく開く高坏脚部で、円形透かしを持つ。2は赤彩の鉢で、小さな底部から直線的に開く。4はミニチュアの鉢。直径4cm、器高2cm程度の小型品で、全面赤彩されミガキも丁寧である。10は安山岩の不整形の礫を用いた砥石で、平坦面を砥面とし筋状の凹みもみられる。9は頁岩の小形扁平で撥状の礫の周縁部や表面が磨れている。11・12は安山岩の礫を素材とした敲石・磨石で、先端部に敲打痕を持つ。11は礫面がわずかに磨れている。12は拳大で両端に敲打痕を持つ。13は砂岩の大形礫を分割したものを素材とし、先端と表面に敲打痕を持つ。

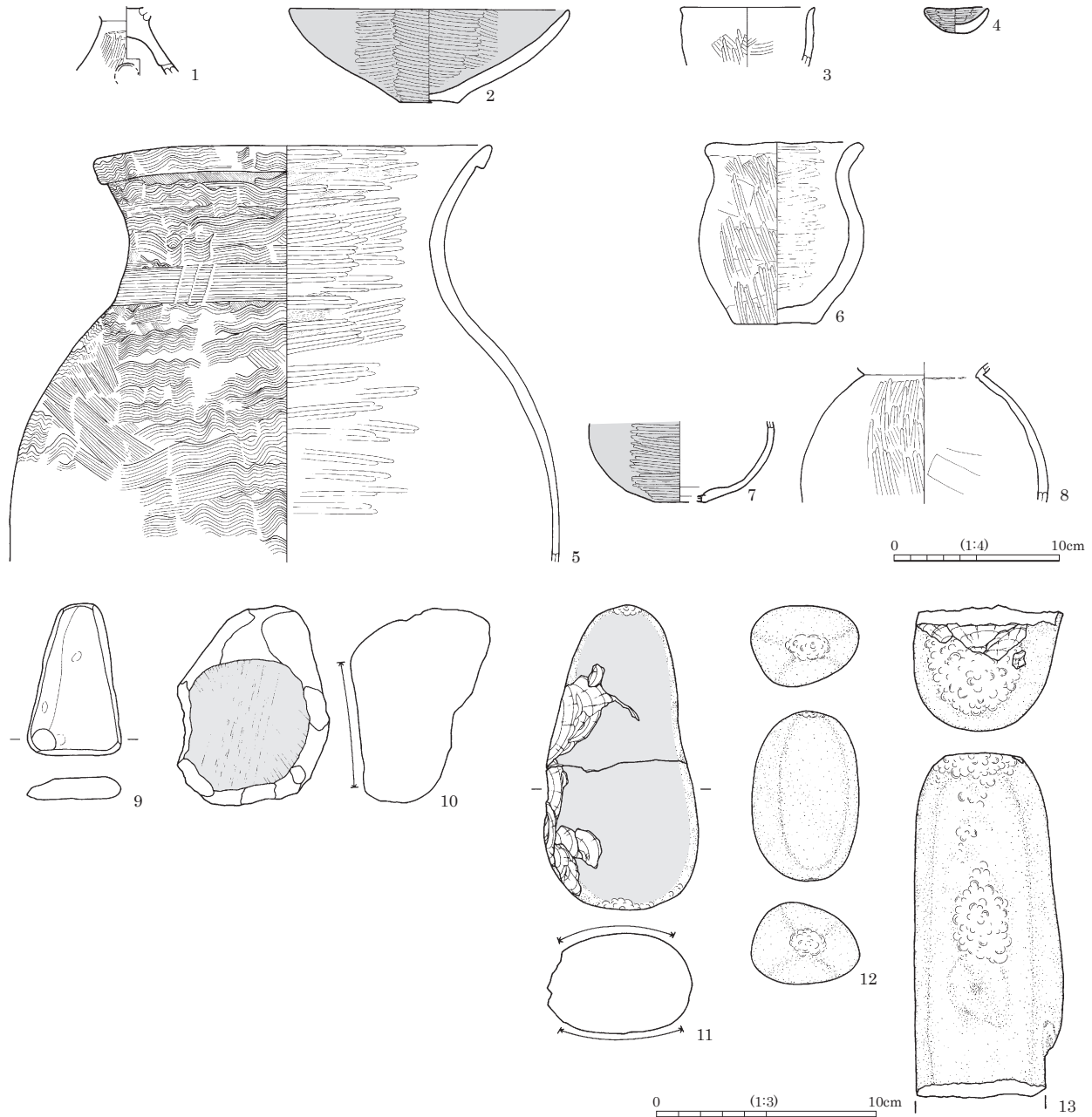
**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。



- 1 黒色 (10YR2/1) II層に類似。一部暗褐色土ﾌﾞロック含み、ﾊﾞﾐｽ小粒多量。
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 軽石粒少量、暗褐色土ﾌﾞロック多量に含む。
- 3 黒色 (10YR2/1) 軽石粒・暗褐色土ﾌﾞロック少量含む。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土ﾌﾞロック多量、暗褐色土ﾌﾞロック少量含む。
- 5 黒褐色 (10YR2/2) 黄褐色土ﾌﾞロック多量、暗褐色土ﾌﾞロック少量含む。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 軽石粒含み、暗褐色土ﾌﾞロック少量含む。
- 7 黒色 (10YR2/1) 軽石粒微量含む。
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 軽石粒・黄褐色土ﾌﾞロック多量に含む。
- 9 褐色 (10YR4/4) 軽石粒・黄褐色土ﾌﾞロックを8層より多量に含む。
- 10 灰黄褐色 (10YR4/2) 軽石粒・黄褐色土ﾌﾞロック含む。
- 11 黒色 (10YR2/1) 軽石粒微量含み、炭化物・焼土粒含む。
- 12 黄褐色 (10YR5/8) 黒褐色土ﾌﾞロック含む。底面は被熱赤化。
- 13 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒含む。壁際に縦方向に見られる。壁崩落止め施設に関係するか。
- 14 黒色 (10YR2/1) I層と同質。
- 15 黒褐色 (10YR3/1) 軽石粒微量含み、固くしまる。
- 16 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒含む。
- 17 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色土ﾌﾞロック多量に含む。
- 18 黒褐色 (10YR3/2) 軽石粒・黄褐色土ﾌﾞロック含む。
- 19 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 軽石粒含まない砂質土。
- 20 灰黄褐色 (10YR5/2) 19層に黒褐色土・黄褐色土粒含む。
- 21 黒褐色 (10YR3/2) 軽石粒微量含む。
- 22 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒・砂層ﾌﾞロック微量含む。
- 23 暗褐色 (10YR3/4) 地山土混じる。
- 24 黒色 (10YR2/1) 軽石粒含む。
- 25 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒微量含み、地山土混じる。
- 26 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山土多量に含む。
- 27 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒含む。
- 28 黒色 (10YR2/1) 軽石粒含む。
- 29 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 軽石粒含まない砂質土。
- 30 褐色 (10YR4/4) 軽石粒多量に含みやわらかい。
- 31 黄褐色 (10YR5/8) 軽石粒含まない砂質土。
- 32 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒微量含み、やや砂質。
- 33 黄褐色 (10YR5/6) 軽石粒微量含み、砂質。
- 34 黒色 (10YR2/1) 軽石粒微量含む。
- 35 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒多量に含む。
- 36 黒褐色 (10YR2/2) 軽石粒微量含む。
- 37 暗褐色 (10YR3/3) 軽石粒含む。
- 38 黒褐色 (10YR2/2) 軽石粒微量含む。

器種	甕			壺		高杯	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ゆ甕	その他	箱清水系	その他					かまづね類	たかねゆ類				
種類	3	16		56	2	1	24	2			15				
個体	3	16		56	2	1	24	2			15				
重量(g)	2165			713	123	194	237				131			255	24

第36表 SB6004 出土土器集計表



第49図 SB6004 遺物図

SB6005 [第50図 PL14・25・37]

**位置：**6区の低位平坦面。VE 13・14・18・19グリッド。6区低位面でまとまる住居群の中では最も東側で、東側の高位面への斜面に近い場所となる。

**検出：**盛土・旧表土下の黒色土中に大きく掘られた攪乱部を除去中に断面にかかり遺構の存在を確認。平面的には漸移層上面で、黒色土の落ち込みとして検出された。

**埋土：**黒色土・黒褐色土がレンズ状に堆積する。自然堆積と考えられる。

**構造：**推定南北3.3m、東西4.4m程の隅丸長方形を呈する。南東部を大きく攪乱により壊されている。主軸はN79°Wで、周辺の住居跡とは方向を異にする。壁高は50cm程で、上部が崩落して広がる部分もあるがほぼ垂直に立ち上がる。西壁の中央に壁を切るように棟持柱穴が設けられている。これ以外検出範囲内にはピットは検出されなかった。棟持柱穴は柱痕と充填土が確認された。周溝は検出範囲内で全周する。

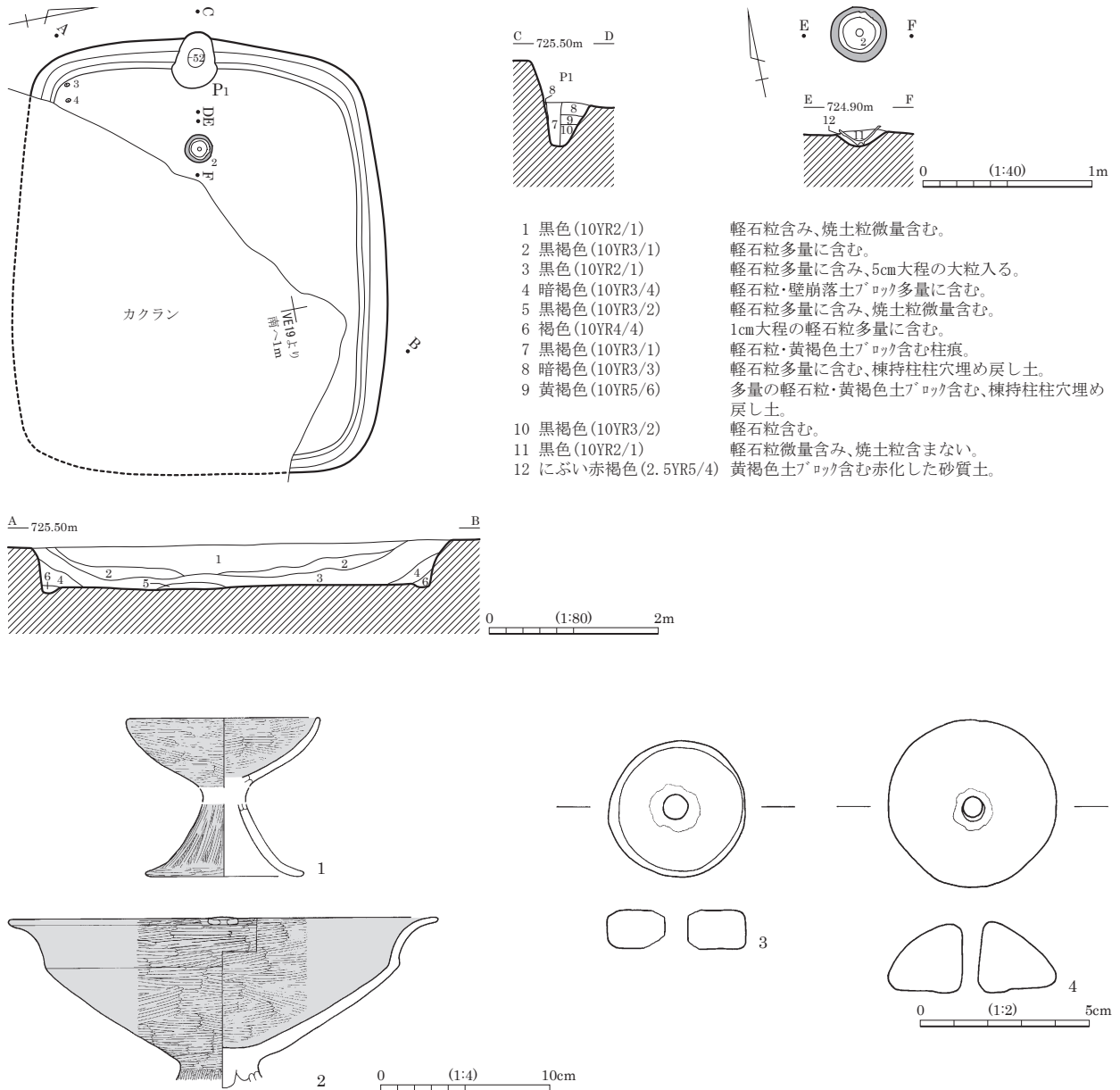
**炉：**主軸線上奥側に位置し、土器埋設炉。浅い掘り込みの中に高坏の坏部(2)を埋設している。



**遺物分布：**南西隅床面から土製紡錘車2点、炉埋設土器以外に出土遺物は非常に少ない。

**出土遺物：**1は赤彩の小型高坏で、坏部は碗状で脚は短く開脚する。2は赤彩の大型高坏坏部で、途中に段を持つ。3・4は土製紡錘車で、3は直径4cm、高さ1cm程の扁平で、中央に直径7mmの大きめの孔が開き、孔端が剥落する。4は直径5cm、高さ2cm程で中央部が高い山なりで、中央に直径5mmの孔が開く。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。



第50図 SB6005 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系	その他					カマ・味類	カサネ・サネ				
個体	1	1	1	7	2	2	1					1			
重量(g)				74		803	18					19			紡錘車2(64g)

第37表 SB6005 出土土器集計表

SB6006 [第51図 PL14・37]

**位置：**6区の低位平坦面の西側でわずかに高まった部分に位置する。VI 11・12グリッド。東側の低位面には同時期住居跡がまとまり、西側の7区緩斜面にも同時期の住居跡が多数まとまる。

**検出：**盛土を除去時には盛土下に旧表土と黒色土が堆積しているものと考えていたが、盛土層下は直接浅間第一軽石流の黄褐色土層となり、調査区中央部が凹み南北が半島状に高まる起伏のある地形となることが判明した。本遺構はこの黄褐色土層上面で検出された。盛土造成時に地山まで攪乱が及んでおり遺存状態は悪い。

**埋土：**床面直上のわずかな黒褐色埋土が残るだけである。

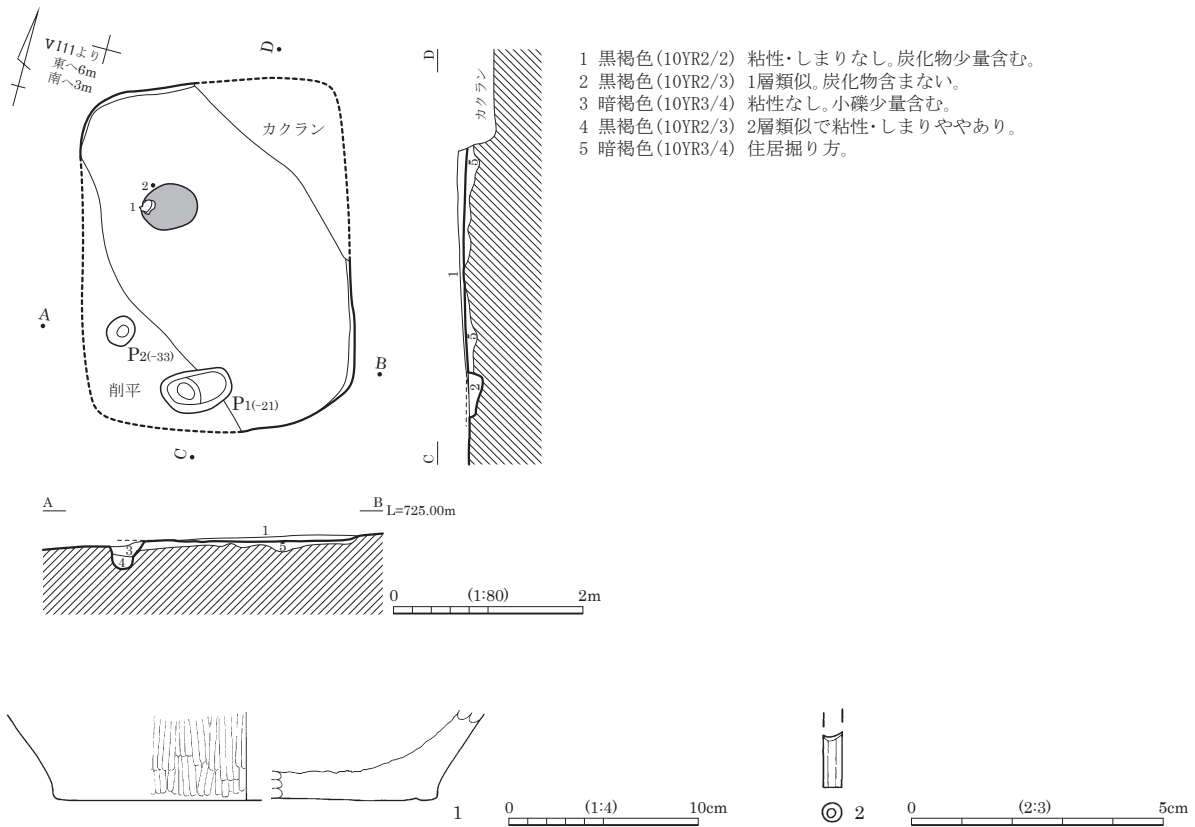
**構造：**北西から南東に対角線上に細長く遺存し、推定南北3.6m、東西2.8m程の隅丸長方形を呈する。主軸はN 19° W程度。壁高は最大で6cmと浅い。ピット2基は南西の削平部にかかって検出された。炉周辺は堅緻な床面となる。

**炉：**中央部やや西側寄りにあり、小規模な地床炉で底面は被熱赤化する。

**遺物分布：**炉上面から壺底部(1)、炉の脇から管玉(2)が1点出土。

**出土遺物：**1は厚手の壺底部で縦方向のミガキあり。2は緑色凝灰岩の管玉。上部は欠損し、直径4mmと細い。

**時期：**わずかな出土土器と住居形態や周辺の状態から古墳時代前期前半と考えられる。



第51図 SB6006 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甗	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱溝水系	ハズ	その他	箱溝水系	その他					カメ・ツボ類	カサ・ハシ類				
種類															
個体	5			1	4					22					
重量(g)	26			477						205					

第38表 SB6006 出土土器集計表

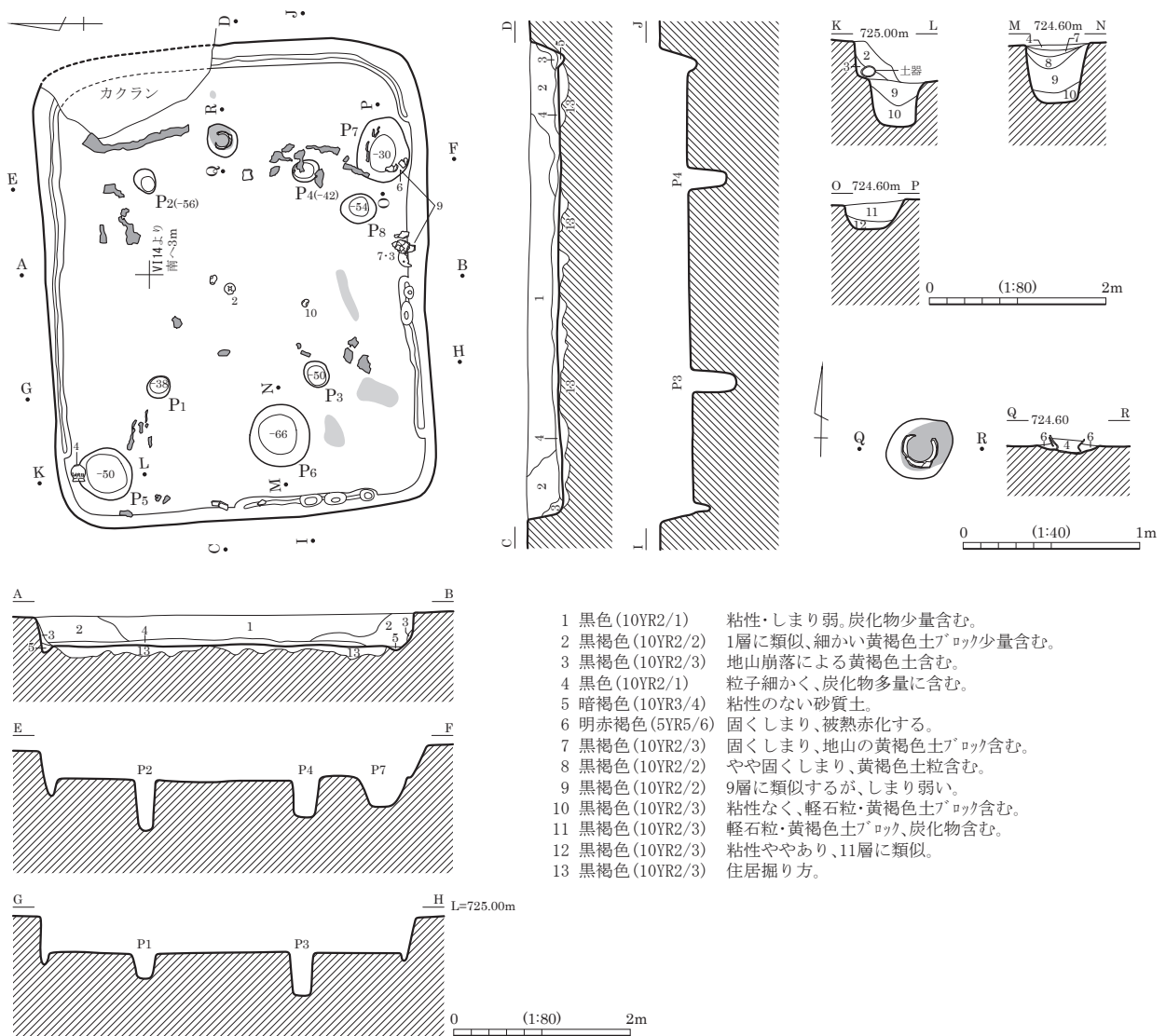
SB6007 [第52・53図 PL14・25・26・37]

位置：6区の低位面と7区の低位面をつなぐ谷状に狭くなる部分にあたる。V I 13・14グリッド。東側低位面、西側の7区緩斜面には同時期の住居跡がまとまって存在する。

検出：低位面に堆積した黒色土下の漸移層上面で黒色土の落ち込みとして検出され、北西部の攪乱部の断面で住居床面を確認し住居跡と判断した。

埋土：黒・黒褐色土層で、床面直上では炭化物を多く含む。自然堆積と考えられる。

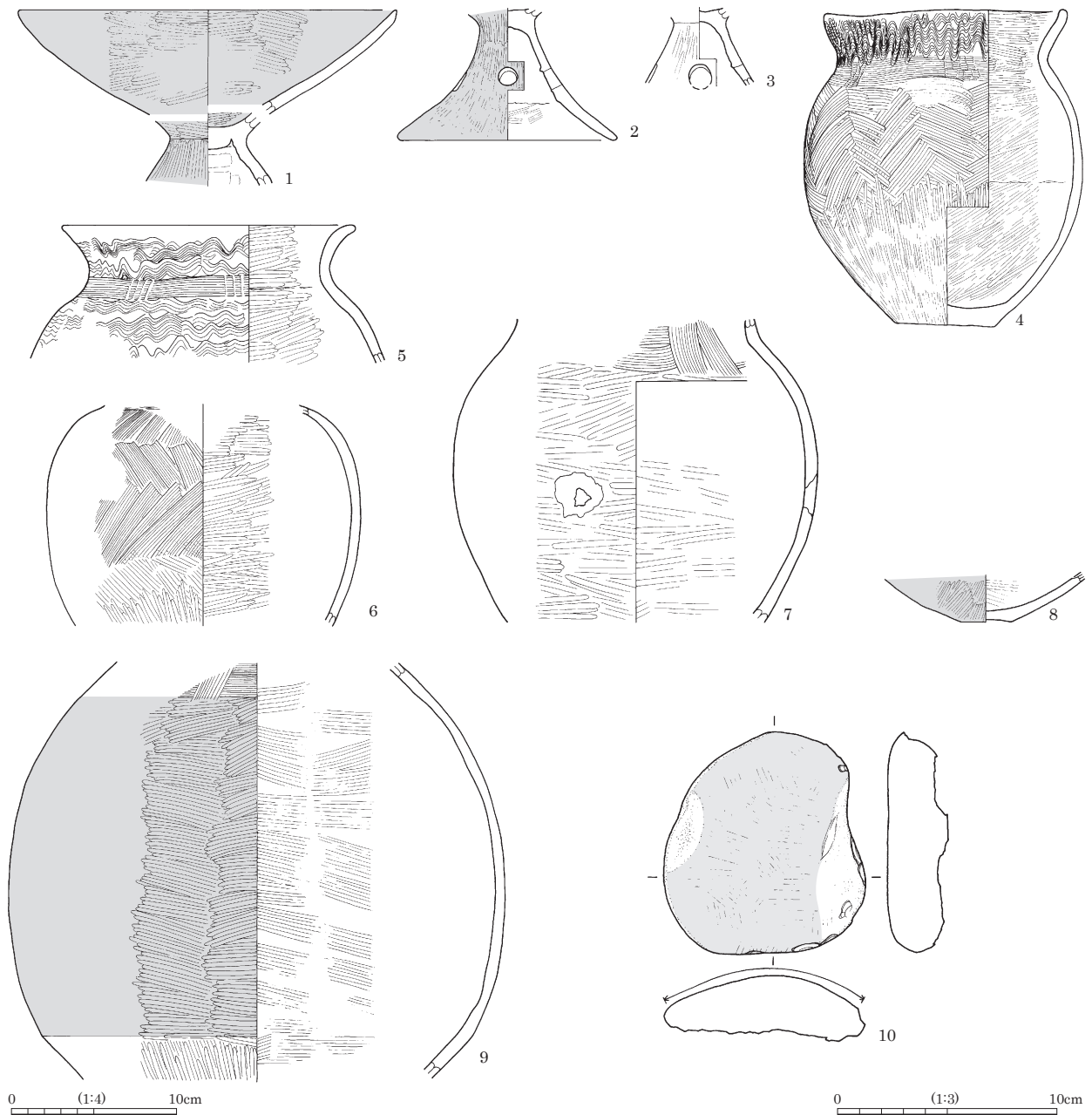
構造：南北3.96m、東西4.90mの東西に長い隅丸長方形を呈する。主軸はN 86° Eで6区低位面の他住居跡とは軸を異にする。壁高は40cm程でほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体に堅緻に踏み固められる。床面上には炭化材が多く認められ、焼失住居の可能性はある。柱穴はP1～P4の4本。南東部のP7は貯蔵穴と考えられ、周囲が床面よりやや高まり堅緻にしまる。この他にも西壁寄りに大形のピットが2基ある。周溝が一部を除き廻る。



第52図 SB6007 遺構図

器種	甕			壺		高杯	鉢	器台	瓶	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハコ甕	その他	箱清水系	その他					カマ・カ	カマ・カ				
個体	4	16	15	2	26	1	3	10	12						
重量(g)	2128	125		1298	54		517	97			1182	31		12	

第39表 SB6007 出土土器集計表



第53図 SB6007 遺物図

**炉：**主軸線上奥側の支柱穴間にあり、土器埋設炉。浅い掘り込みの中に甕（5）を逆位に設置している。周囲は被熱赤化する。

**遺物分布：**床面直上から比較的多くの土器が出土した。4の甕はP5脇の壁直下の床面から完形で出土。南壁直下では6・7の甕や3の高坏が出土。2の高坏は住居中央の床面上出土。

**出土遺物：**4～7は櫛描文の施される甕で、口縁部には波状文、胴部には波状文や羽状文となる。7の胴部には内側からの打撃による穴が開く。9は赤彩の壺で球胴となり胴下半部の括れも不明瞭となる。8は小型の底部から広がる壺で赤彩される。1～3は高坏。1は坏部が直線的に開く。2は円形透かしを持つ脚で、裾でやや内湾気味となる。3も円形透かしを持つ脚部。10は砂岩の扁平な礫を素材とし、上面全体が磨れ一部光沢をもつ部分もある。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

SB7001 [第54図 PL14・26]

位置：7区の緩斜面上部。V L 20・25, M 16・21 グリッド。西側にSB7003・7004が近接する。

検出：表土下のⅢ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

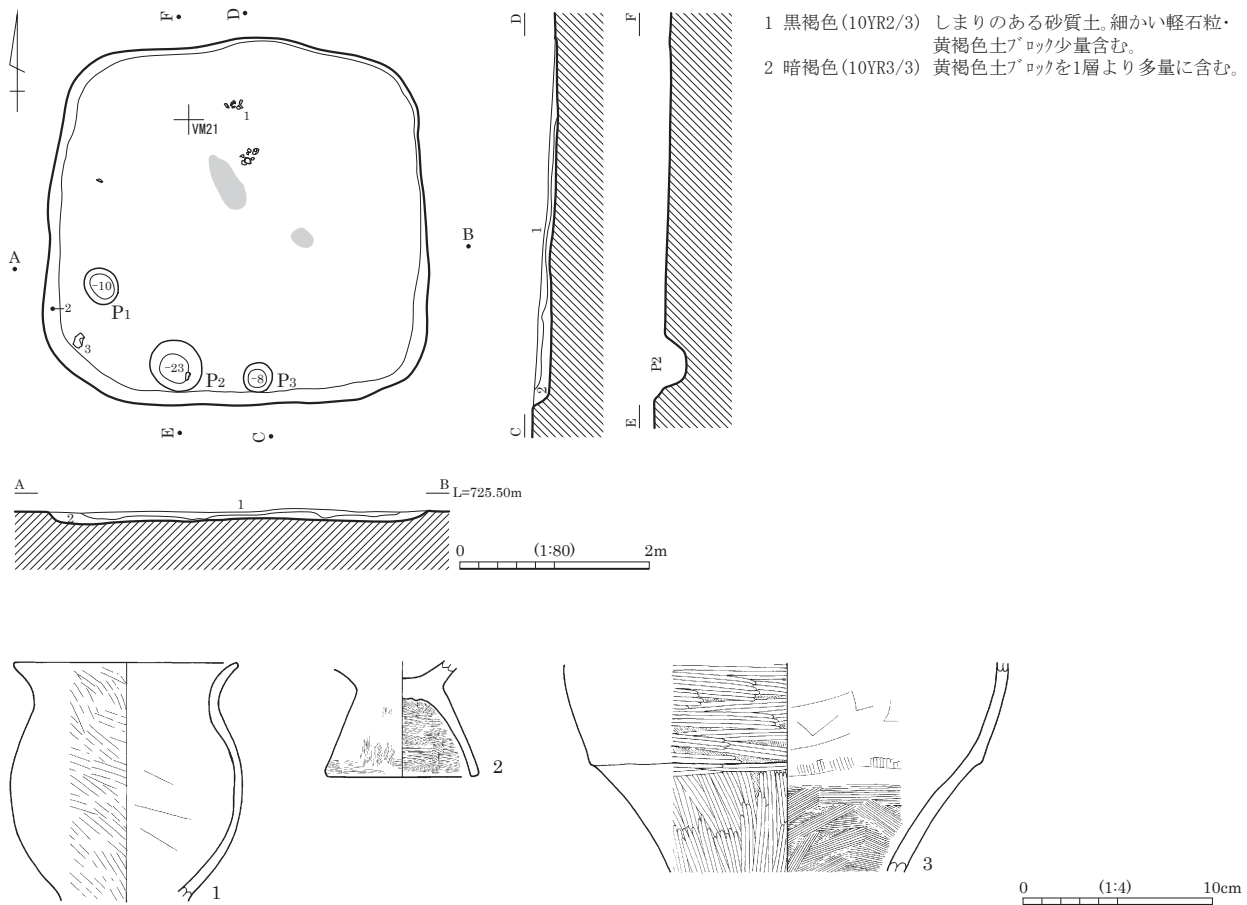
埋土：床面付近のみ残存。上下に分層され、いずれも細かい軽石粒や黄褐色土粒を含む。

構造：南北3.68 m、東西3.81 mの隅丸方形を呈する。主軸はN 1° Wで西側に近接するSB7003と同じ。壁高は南壁で最大17cmを測るが、北側の斜面部ではわずかに残るのみとなっている。地山の黄褐色土を床面とし、貼床はない。ピットは3基確認され、P2は貯蔵穴か。他は非常に浅く柱穴とは認定できない。炉：中央部やや北側の床面に焼土が広がるが明確な掘り込みはない。この南東部にも焼土ブロックが見られる。

遺物分布：埋土及び床面からの出土遺物は少量。

出土遺物：1は薄手の小型甕で、粗いハケ目が残る。2は台付甕の脚部で、細かいハケ調整が一部観察できる。3は無彩の壺胴下半部。胴下半部に括れを持つ。

時期：出土遺物から古墳時代前期前半。



第54図 SB7001 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甔	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ甕	その他	箱清水系	その他					カマ・埴類	カネ・埴類				
個体		1	18	1							11		1		
重量(g)		282	118	603		18					56		2		

第40表 SB7001 出土土器集計表

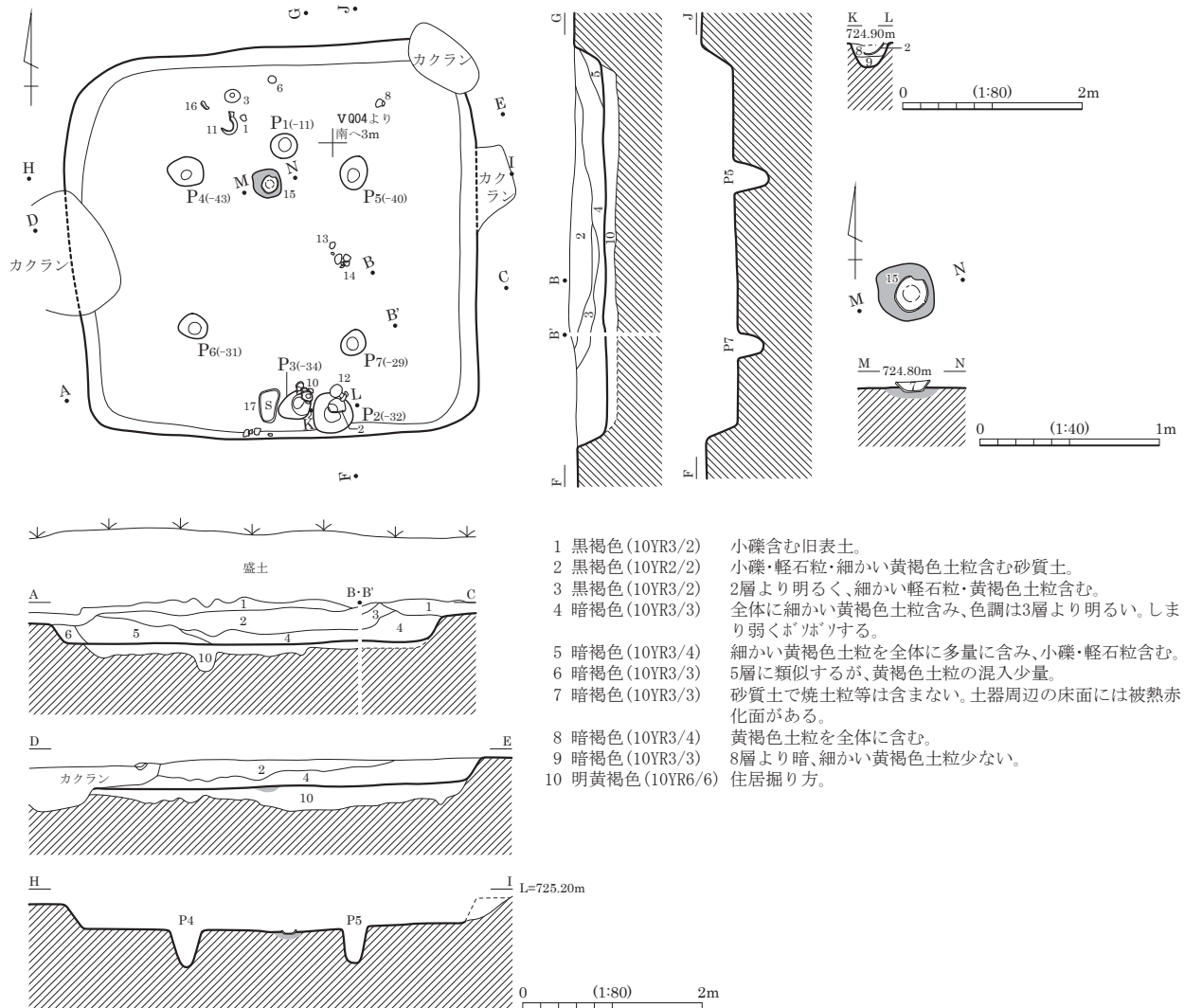
SB7003 [第55・56図 PL15・26・27・37]

位置：7区の緩斜面上部。VQ 03・04 グリッド。7区緩斜面に立地する住居跡では最も西側に位置する。

検出：本遺構は北側と南側の市道部の二分割で調査。当初北側の調査で盛土を除去したところ暗褐色土の広がりが見られた。遺構の可能性を考えたがプランは不明確で、調査区境をトレンチで掘り下げた。その結果、暗褐色土は旧表土でその下に黒褐色の埋土が確認されたため住居跡と判断し、周囲をⅢ層浅間第一軽石流上面まで掘り下げて検出。

埋土：旧表土上部に造成による盛土がある。住居埋土は黒褐色土を主体とし、壁際に黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積する。

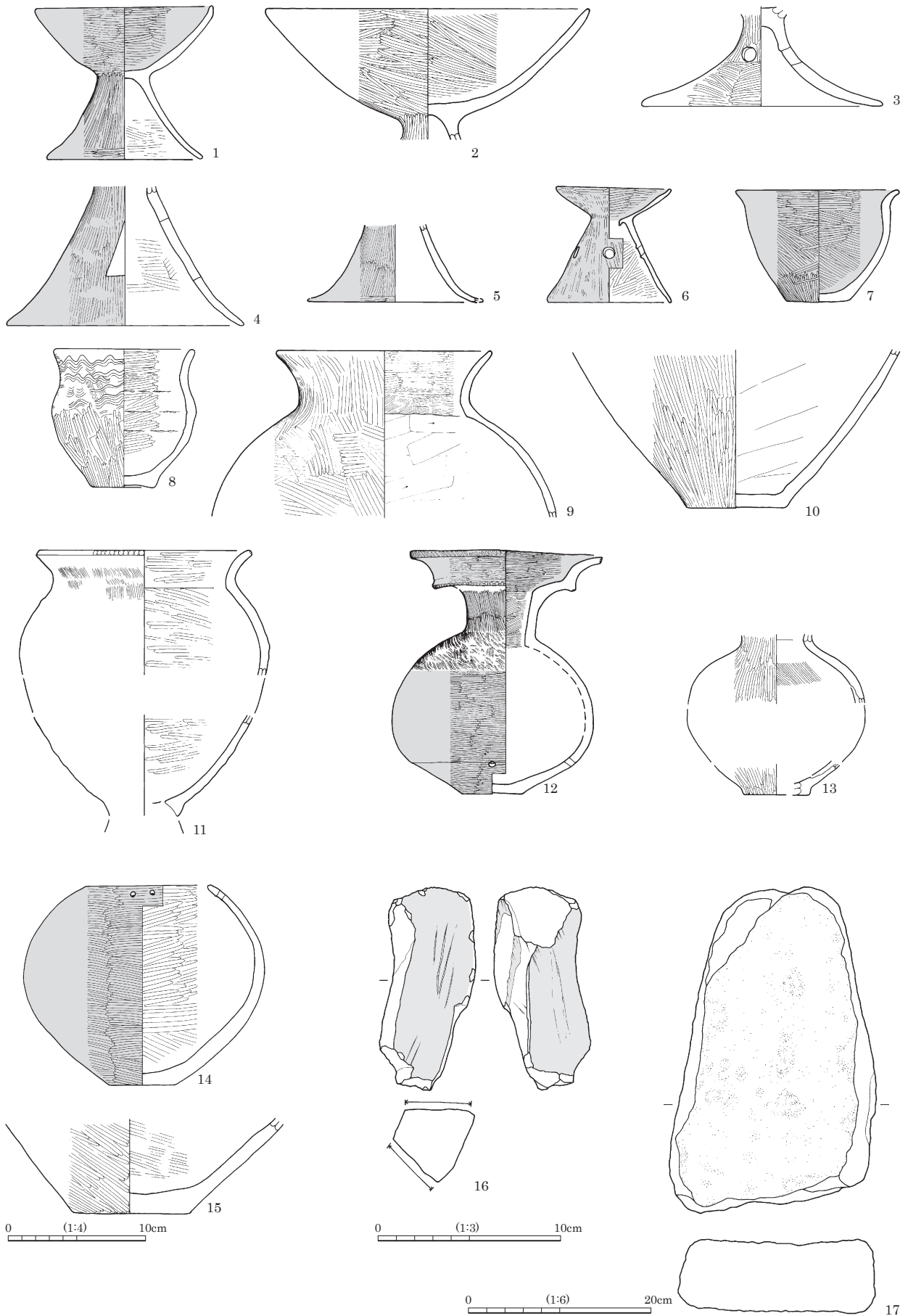
構造：一辺4.1m程の隅丸方形を呈する。北東隅と西壁の一部は攪乱を受ける。主軸はN1°Wで東側に近接するSB7001と同じ。壁面は北側では垂直に近い30cm以上の壁高を測るが、南側ではやや不明確となる。地山の黄褐色土を床面とし、貼床はない。柱穴は床面精査段階では不明であったが、床下調査によりP4～P7の4本が確認され、配置から柱穴と考えられる。P2は貯蔵穴に関係すると思われる。



第55図 SB7003 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハコ	その他	箱清水系	その他					カマ・ツボ類	カサ・ハコ類				
個体	1	14	2	1	1	5	3	1	1	56	2		9		
重量(g)	328	773	500	887	1410	1501	200	126		680	8		93	46	

第41表 SB7003 出土土器集計表



第56図 SB7003 遺物図

**炉:**中央部やや北側の柱穴間に位置し、壺の底部（15）を埋設している。土器内には焼土は含まれないが、埋設土器下部から周辺には直径30cmほどの範囲に焼土が広がる。

**遺物分布:**床面直上から比較的多くの土器が出土し、住居北側の炉周辺と南側入り口部にまとまる。北側炉周辺では高坏（1・3）、器台（6）、台付甕（11）等があり、南側入り口部では二重口縁壺（12）がP2脇の床面直上から、高坏（2）がP2内から出土。また、壁下には台石（17）が置かれる。

**出土遺物:**8は櫛描文の小型甕で、口縁部から胴上半にかけて波状文が施文される。9は全体に粗いハケ目が残る。11は台付甕で、口縁は外反し胴部はやや長めの球胴状と考えられる。器外面は全体にハケ調整されるが剥落が著しい。口唇部には刻みが加えられる。12は二重口縁壺で口縁部の一部を欠損するのみのほぼ完形。球胴状の胴部から頸部が直立気味に立ち上がり、やや垂下する段を形成し二次口縁は外反する。口唇部、段端部には刻みが加えられる。赤彩が内面を含む有段口縁部及び頸部・胴中位以下に施され、赤彩されない胴上部には無節の細かい縄文が施文される。また、胴下部の湾曲する部分に焼成前の穿孔が1孔穿たれている。赤彩部は丁寧なミガキ調整が施される。13は球状の胴部から頸部ですぼまる壺で全面ミガキ。14は外面赤彩の無頸壺で、球状の胴部から内湾して口縁部に至る。口縁下に2孔一対の穿孔が2ヶ所あり。1は赤彩の小型高坏で、坏部は塊状で、脚は「ハ」の字状に開く。2は大きく広がる塊状の坏部で無彩。3は裾が大きく広がる脚部で、円形透かしを持つ。4・5は直線的に開く赤彩の高坏脚部で、4は三角透かしを持つ。6は小型器台。受部は小さく直線的に開く。脚部は長く、「ハ」の字状に開く。円形透かしを持つ。7は口縁下で短く外反する鉢で、口径より器高がやや小さい。内外面とも赤彩。16は砂岩製の砥石。不整形の礫を素材とし、多面体の広い二面全体を砥面とする。砥面には幅1・2mmの細い筋状の凹みが数条みられる。17は安山岩の大形の扁平礫を利用した台石で、平坦面に磨り面はみられない。

**時期:**出土遺物から古墳時代前期前半。

#### SB7004 [第57図 PL15・27・38・40]

**位置:**7区の緩斜面上部。VQ 04・05グリッド。SB7001・7003が近接する。

**検出:**本遺構も北側と南側の市道部の二分割で調査。北側の調査段階では盛土の影響で遺構確認が難しく、攪乱断面に見られた黒色土から遺構を想定した。想定される遺構範囲にトレンチを設定して確認したところ黒色土は盛土の残りで、その下部に黒色土の落ち込みがあることが判明した。地山の黄褐色土層上部に残った盛土・攪乱を除去して本遺構を検出した。

**埋土:**検出面より上部は盛土。埋土は細かい黄褐色土粒を含む黒褐色土。自然堆積か。

**構造:**南北4.50m、東西4.80mのほぼ方形を呈し、北西隅は攪乱を受ける。主軸はN10°W。壁面は北から北東部にかけてが明瞭で20cm弱の壁高を測る。南側は不明確となる。地山の黄褐色土を床面とするが、北側中央部は不明瞭となる。柱穴は床面調査段階で不明で、床下調査によりP3～P6の4本が確認され、配置から判断した。

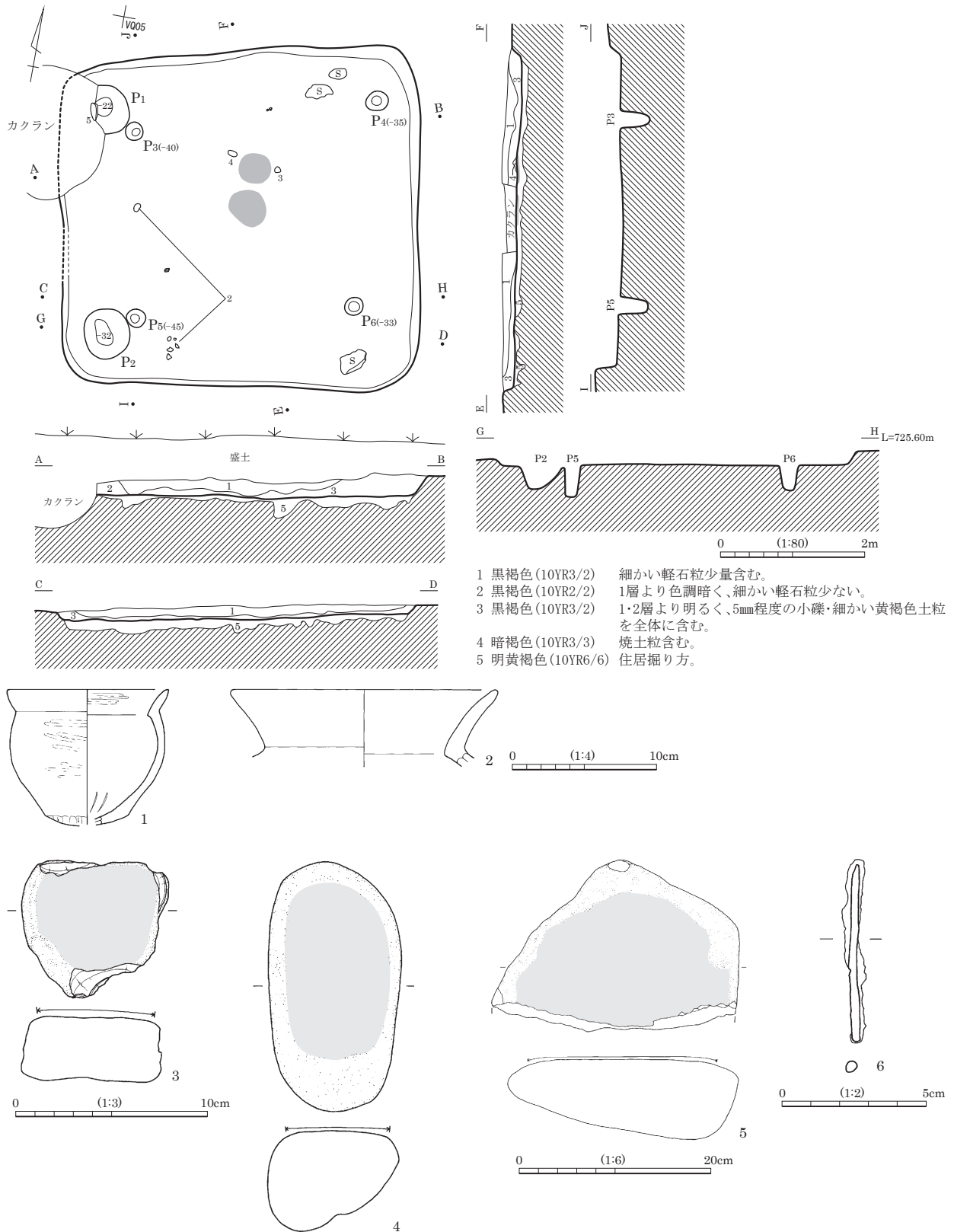
**炉:**中央部やや北側で2ヶ所の焼土範囲を確認した。床面に焼土が広がり、掘り込みは認められない。

**遺物分布:**埋土及び床面からの出土遺物は少量。北東・南東隅付近の床面から大きい自然礫が出土。

**出土遺物:**1は小型甕で、口縁部は短く外反する。胴上部は粗いミガキ、胴下半はケズリ。2は口縁部が「く」の字に屈曲外反し、口唇部は面取りされる。厚手。3・4は磨石で、安山岩の礫や河原石を素材とし、平坦面が磨れている。5は安山岩の大形礫を用いた台石で、上面の平坦面が磨れている。6は鉄製品で長さ6cm程の軸状のもので詳細は不明。

**時期:**出土遺物から古墳時代前期前半。





第57図 SB7004 遺構図・遺物図

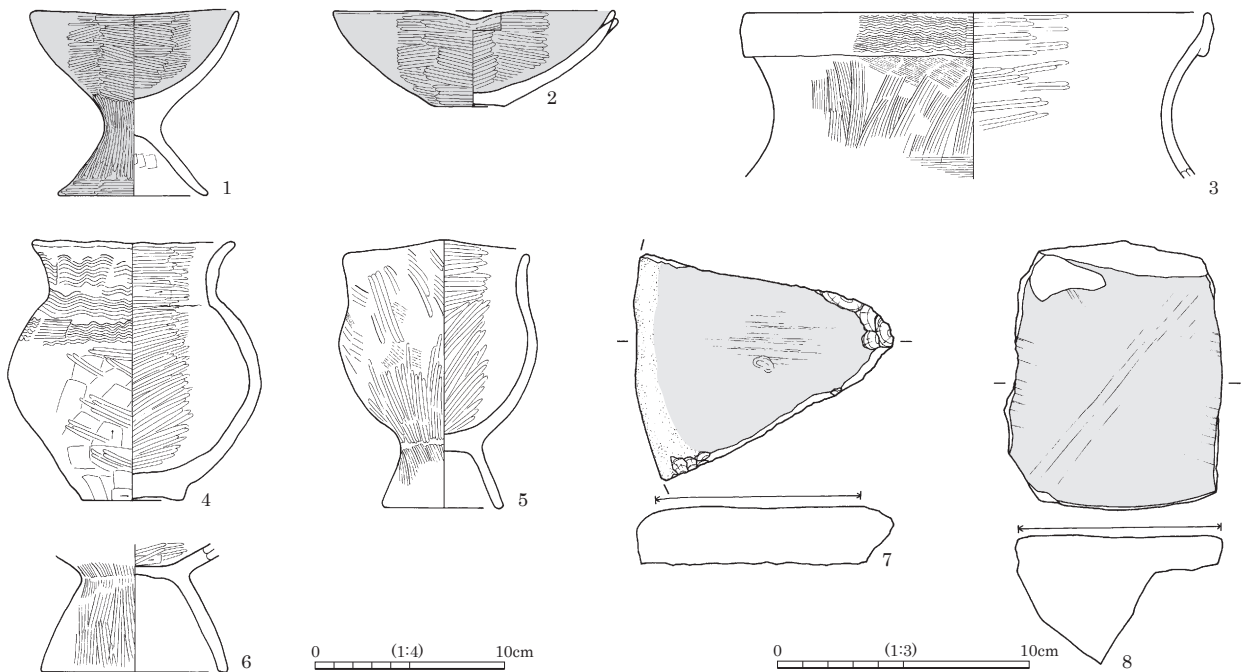
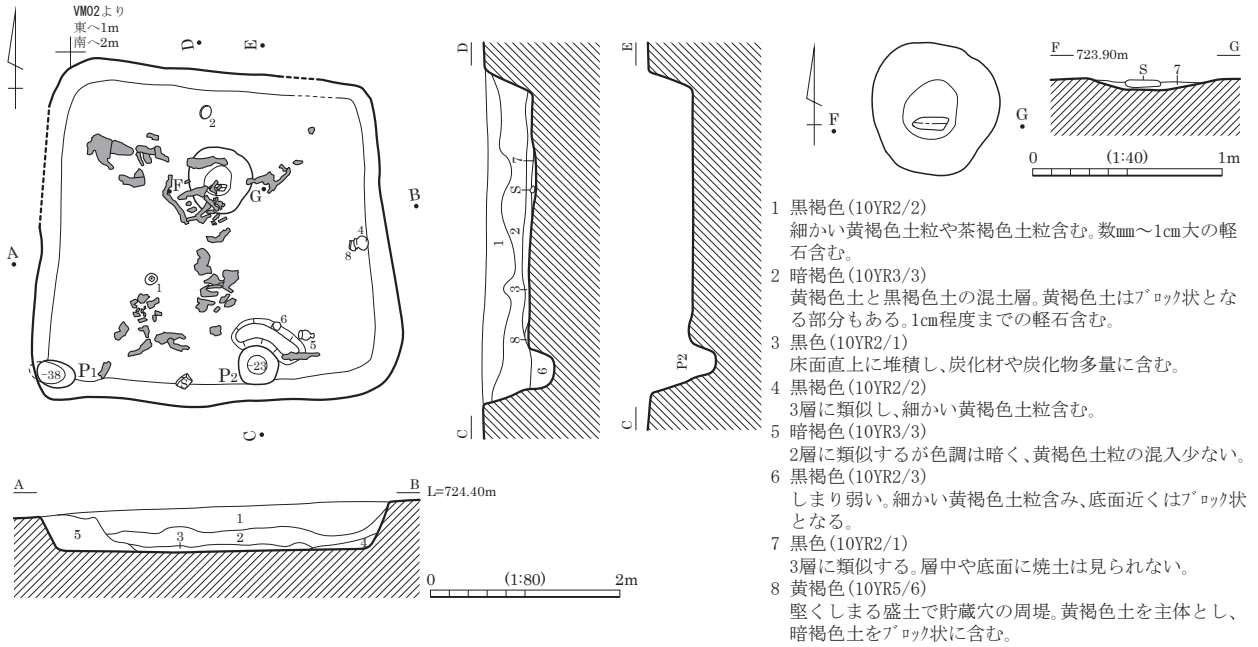
器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カマツボ類	カクネ・ハケ類				
種類			1	9	1 1		3			47			11		
個体															
重量(g)			141	75	342		19			489			81	25	

第42表 SB7004 出土土器集計表

SB7005 [第58図 PL15・27・38]

位置：7区の緩斜面下部。VM02グリッド。東側にはSB7006が近接し、緩斜面上部側には同時期の住居跡がまとまる。

検出：緩斜面下部で本来黒色土層が厚く堆積する場所であるが、造成時に黒色土まで削平されている。そ



第58図 SB7005 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハ甕	その他	箱清水系	その他					カメ・ツボ類	カサ・ハケ類				
個体	2	10	2	1		2	1	1	2		12	8			
重量(g)	675	77	459	19		323		255			177	118			

第43表 SB7005 出土土器集計表

のため盛土層下は直接Ⅲ層浅間第一軽石流上面となり、この面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**大きくは3層に分けられ、上部は黒褐色土、中層は黄褐色土粒やブロックを多く含む土層となり、床面直上の下層部は炭化材や炭化物を多く含む黒色土となる。

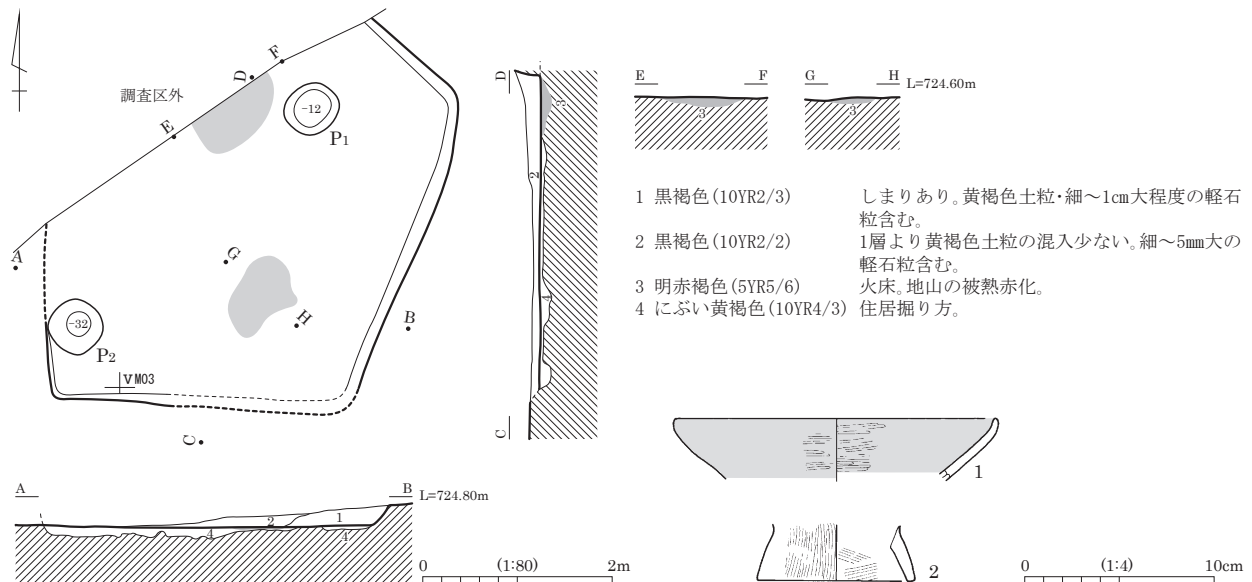
**構造：**南北3.10 m、東西3.24 mの小形の隅丸方形を呈し、西壁・北壁の一部が攪乱を受ける。主軸はN 0°Wで、緩斜面上部のSB7001・7003やSB7013と類似する。壁は上部が崩落して広がる部分もあるがほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cm程度と掘り込みは深い。床面は踏み固められ全体に堅緻となる。床面上には炭化物が広がり、炭化材も認められた。炭化材は炉の周辺を中心に全体に遺存するが、住居の上屋構造の崩壊を示すような配置状況ではなく、床面や壁に被熱痕はみられない。このことから焼失住居というより、住居廃絶時の火入れ等によるものではないかと推測される。柱穴は判然としないが、南東隅のP1は外側に傾く。また、南壁直下のP2は直径40cm程度の貯蔵穴で、北側は周囲の床面より3・4cm程周堤状に盛り上がり堅緻となる。

**炉：**中央部北側に浅い地床炉がある。炉埋土は炭化物を含む黒色土で焼土が認められず、底面に一部焼土が残る。

**遺物分布：**床面直上の炭化材等を含む黒色土より上部の埋土中層から小型甕(4)・台付甕(5)・高坏(1)・片口鉢(2)のほぼ完形個体が出土したが、埋土全体では出土量は少ない。

**出土遺物：**3・4は櫛描文の甕。3は折返し口縁で、口縁部には波状文を施す。4は小型甕の完形品で、口縁部から胴上部にかけて波状文を施文する。5・6は台付甕で、5は完形品で、頸部が弱く括れる甕に台が付く。器面はハケ調整されるが、粗い工具と細かい工具の複数が使用されている。1は赤彩の小型高坏の完形品で、坏部は塊状となり脚は短く開く。2は赤彩の片口鉢の完形品。7・8は扁平磔を素材とした磨石で、平坦面が磨られている。7は一部光沢を持つ部分もあり。安山岩製。8は使用により平坦面中央部がやや凹むようになり、筋状の凹みや細い線状の傷も見られる。砂岩製。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。



第59図 SB7006 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	瓶	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カマ・笥類	カマ・笥類				
個体	1	5	1	7		1	3								
重量(g)	19	24	18	119		24									

第44表 SB7006 出土土器集計表

SB7006 [第59図 PL15]

位置：7区の緩斜面下部。V H 22・23, M 02・03 グリッド。北側は調査区外へ広がり、西側にSB7005が近接する。

検出：盛土層下のⅢ層浅間第一軽石流上面で一部床面が露出した状態で検出。

埋土：東側の床面直上が浅く残るのみで、斜面下側となる西側では床面が露出し埋土は残っていない。壁際に黄褐色土粒を含む部分が認められるが、中央部は黒褐色土層となる。

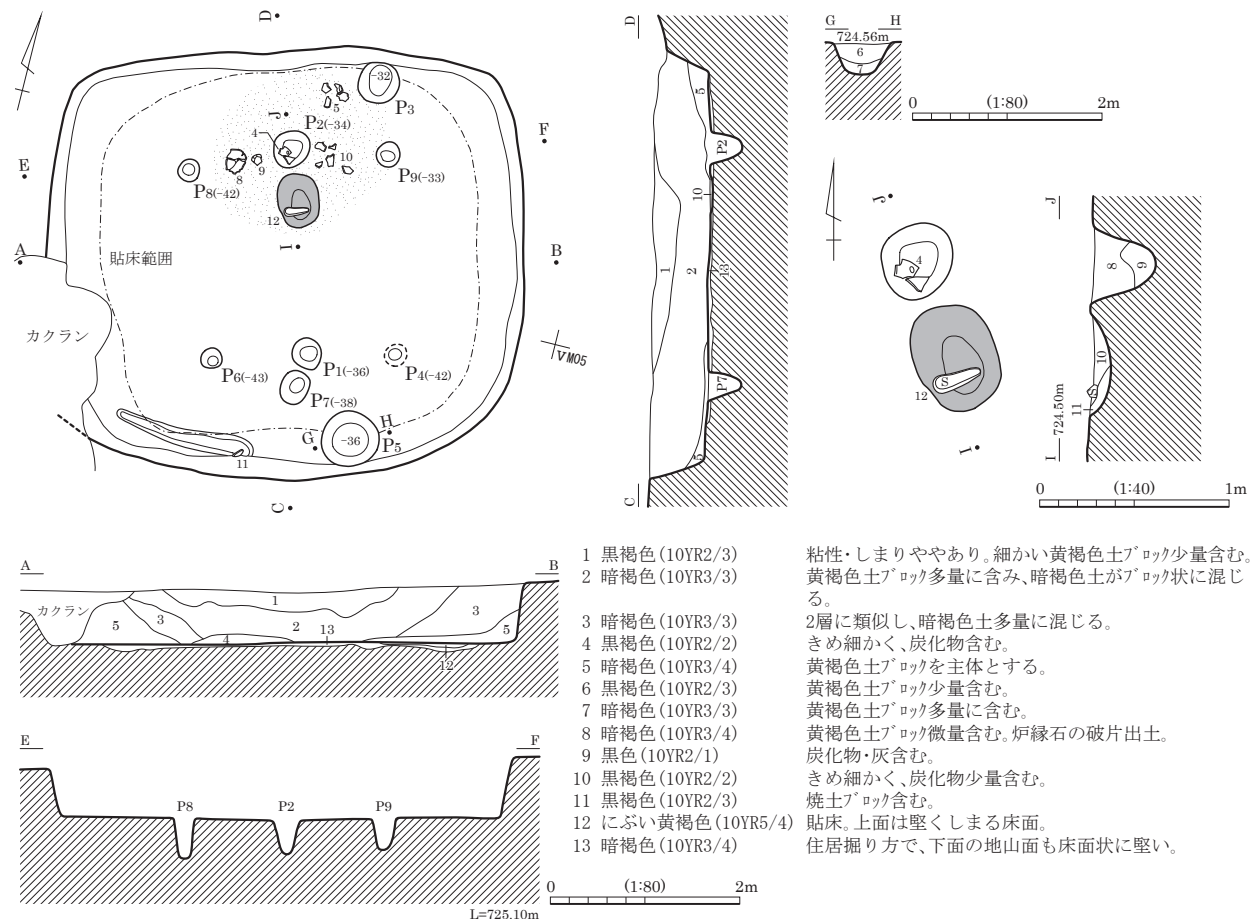
構造：南北4 m程、東西3.5 m程の歪な方形プランを呈する。これは南東部や北東部で立ち上がりが不明瞭であることや遺存しないことなどによる。主軸方向は不明。壁高は東壁で20cm程度を測る。ピットは2基検出されたが、柱穴となるか判然としない。床面は地山の黄褐色土で踏み固めにより堅緻となり、埋土の黒色土が剥がれるように取れて床面が露出する。

炉：住居中央部と調査区北壁にかかり地床炉が検出された。いずれも地山の黄褐色土が数cm被熱赤化する。

遺物分布：埋土中からの遺物出土は少ない。

出土遺物：1は赤彩の高坏坏部。口縁部でやや内湾気味となる。2は台付甕の短い脚部で、ハケ調整される。

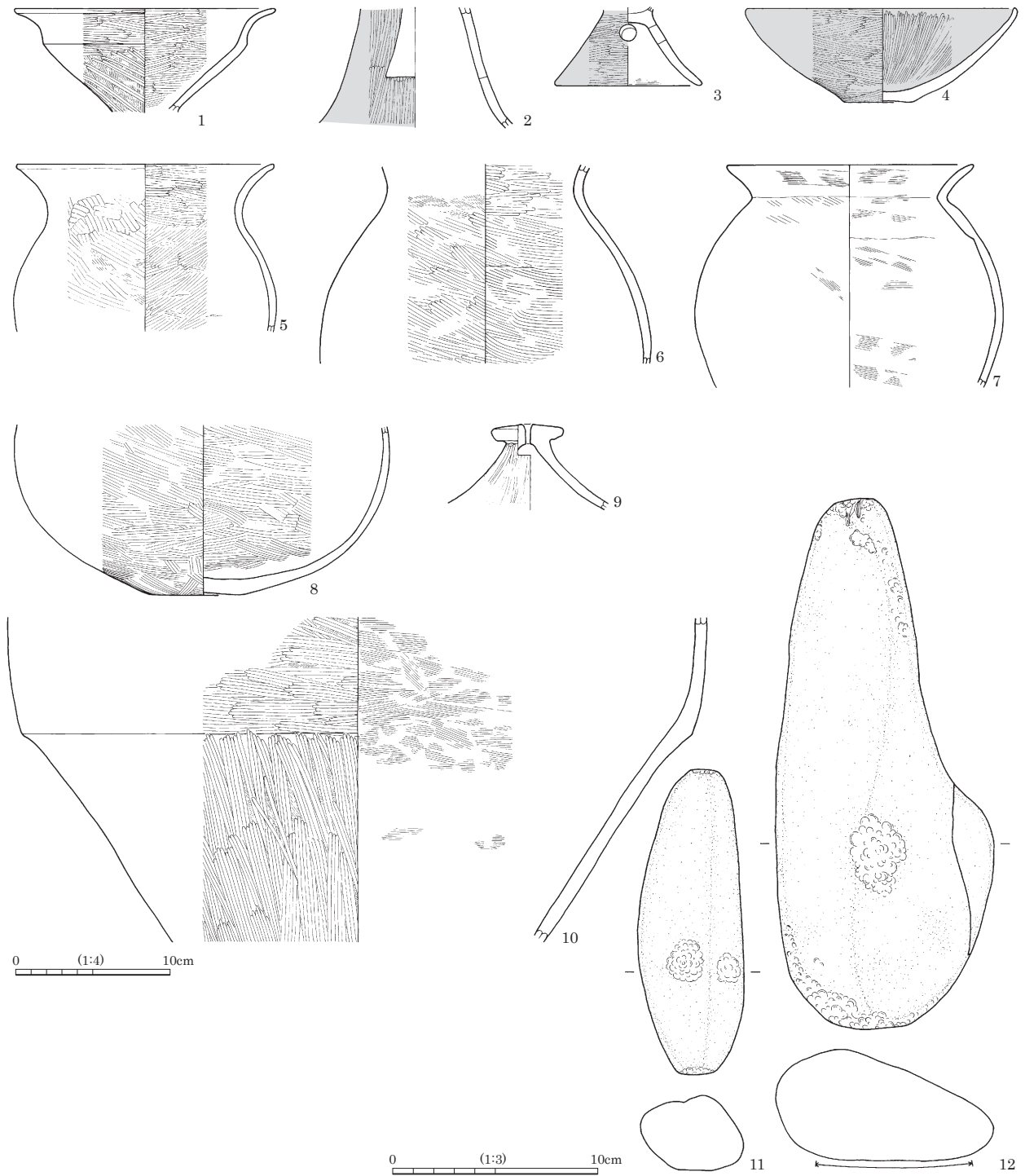
時期：出土遺物から古墳時代前期前半。



第60図 SB7007 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ゆ甕	その他	箱清水系	その他					カマ・ツボ類	タガツボ・ツボ類				
種類	箱清水系	ゆ甕	その他	箱清水系	その他	高坏	鉢	器台	甌	カマ・ツボ類	タガツボ・ツボ類	縄文	古代	不明	その他
個体	6	4	21	1	14	3	26	1	8	72			1		
重量(g)	54	1295		1181		419	276			518			101		

第45表 SB7007 出土土器集計表



第61図 SB7007 遺物図

SB7007 [第60・61図 PL15・27・38]

位置：7区の緩斜面下部。V H 24, M 04 グリッド。南西・南東2 m程にSB7009・7010が近接し、緩斜面上部側には同時期の住居がまとまる。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土から暗褐色土の落ち込みとして検出されたが、西側から南側にかけてはやや不明確であった。南東隅は攪乱を受ける。

埋土：上部の中央部は黒褐色土となり、以下が地山起源の黄褐色土粒を含む暗褐色土が主体となる。人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

構造：南北4.12 m、東西4.76 mの隅丸方形を呈し、南壁はやや弧状を描く。主軸はN 14° W。検出面か

らの掘り込みは深く壁高は55～65cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は全面に堅緻に踏み固められる。柱穴はP4・6・8・9の4本で、P4は風倒木と思われる攪乱と重なり掘り過ぎている。P1とP2は棟持柱、南壁直下のP5は貯蔵穴か。壁際の周縁部を除き浅い掘り方を持ち、掘り方下面も床面状に堅くなっている。

**炉：**中央やや北寄りにあり炉縁石をもつ地床炉で、炉北側には炭が広がる。炉縁石(12)は棒状の磨石で、剥がれた破片がP2の底から出土。

**遺物分布：**炉周辺の床面直上から甕(5・8)や壺(10)、蓋(9)などが出土。4の鉢はP2内出土。

**出土遺物：**5～8はハケ調整の甕。5は口縁部が外反し、頸部から下に粗いハケ目が残る。6は胴部が球状となり、頸部にわずかにハケ目がみられ胴部はミガキ。7は口縁部が「く」の字に屈曲し、細かいハケ調整がわずかに残る。9の蓋のつまみ部は平坦で、中央部に孔を持つ。10は無彩の壺胴下半部。外面は二次焼成により黒色化し、内面が剥落する。1～3は高坏で、1は途中に段を持ち口縁が外反する坏部。2は直線的に開く脚部で三角透かしを持つ。赤彩。3は短く「ハ」の字に開脚し、円形透かしを持つ。4は赤彩の鉢で、口縁部がわずかに内湾気味となる。11・12は砂岩製の敲石・磨石。11は棒状礫を素材とし、両端と長軸面に敲打痕がみられ、礫面が磨れている。12は不整形の長い棒状礫を用い、両端及び平坦面に敲打痕が認められる。また、平坦面などは全体に磨れている。

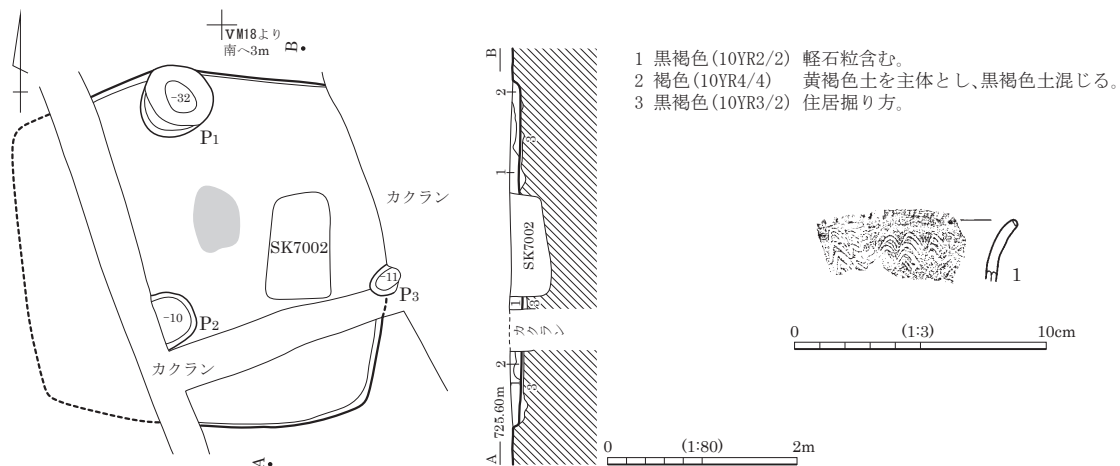
**時期：**出土遺物から古墳時代前期初頭。

SB7008 [第62図 PL15]

**位置：**7区の緩斜面上部。VM17・18グリッド。西側の緩斜面上部、東側の緩斜面には同時期の住居跡がまとまる。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で上部は検出されたが、現道下のため検出面まで採石等となり、側溝や埋設物による攪乱も受けている。土坑SK7002が住居を切っている。住居跡と土坑の切り合いは住居土層断面での埋土観察により判断された。

**埋土：**道路造成の影響により埋土の遺存状態は悪く、転圧により非常に堅くしまった黒褐色土となる。



第62図 SB7008 遺構図・遺物図

器種	甕				壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他	カメ・ツボ類					カサ・ハケ類					
個体	1	3			3			2			5					
重量(g)	34				132			16			32					

第46表 SB7008 出土土器集計表

**構造：**南北 3.68 m、東西推定 3.8 m 程の不整形を呈し、検出されたのは北壁部と南壁東側のみである。主軸方向は不明。壁高は 10cm 弱と浅く、立ち上がりも明瞭とはいえない。床面は堅緻となるが上部の転圧の影響が考えられ、床面に埋土の黒色土が入り込む状況がみられた。3 基のピットが検出されたが、柱穴とは判断できない。

**炉：**住居中央部に地床炉があり、被熱により床面が赤化している。

**遺物分布：**遺存状態が悪く、埋土からの遺物は非常に少ない。

**出土遺物：**1 は櫛描波状文を施した甕口縁部片で、口唇部に刻みあり。他の出土土器もいずれも小片であるが、櫛描文系の甕や壺片などである。

**時期：**出土遺物はわずかであるが古墳時代前期前半といえよう。

**SB7009** [第 63 図 PL16]

**位置：**7 区の緩斜面下部。VM 03・04 グリッド。北東 2 m 程に SB7007 が近接し、周辺の緩斜面には同時期の住居跡がまとまる。

**検出：**北西方向へ下がる斜面下部にあたり、表土剥ぎの段階では周囲より暗い部分の広がりとししか確認できなかったため、平面的な精査と合わせ想定される範囲に先行トレンチを掘削し、床面と立ち上がりを検出し住居跡と判断した。

**埋土：**黒褐色土を主体とし、中央部はややボソボソした土層となる。

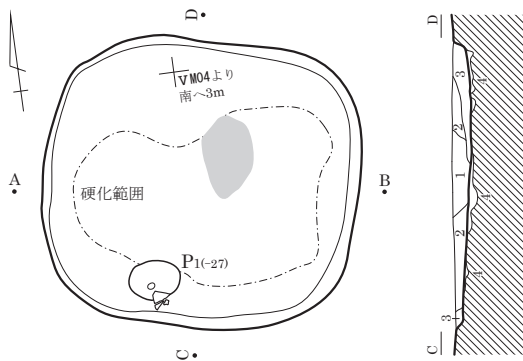
**構造：**南北 2.82 m、東西 3.12m の小形の隅丸方形を呈する。主軸は N 16° E で、斜面上方の SB7011 と類似する。壁高は 10 ~ 25cm 弱と浅く、壁面は不明瞭な部分が多い。床面は壁際を除き、黒褐色土を含んだカリカリの堅い床面となる。南壁付近でピットが 1 基検出されたが、柱穴などは確認されなかった。

**炉：**住居中央部やや北側にあり、ほとんど掘り込みを持たない地床炉。被熱による赤化面を検出した。

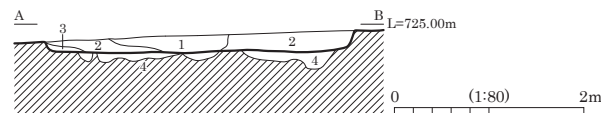
**遺物分布：**埋土出土遺物は非常に少なく、P 1 脇の床面直上から、壺の大形片が出土した。

**出土遺物：**図化できなかったが、床面直上出土土器は箱清水系の無彩の大型壺片である。

**時期：**わずかではあるが出土遺物から古墳時代前期前半。



- 1 黒褐色(10YR3/2) しまり弱くややボソボソする。軽石粒・黄褐色土粒含む。
- 2 黒褐色(10YR2/2) しまりあり。細かい軽石粒・黄褐色土粒少量含む。
- 3 暗褐色(10YR3/3) 1層より明るく、細かい黄褐色土粒多量に含む。
- 4 暗褐色(10YR3/4) 住居掘り方で、上面は堅い床面となる。



第63図 SB7009 遺構図

器種	甕			壺		高杯	鉢	器台	瓶	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ甕	その他	箱清水系	その他					カ・ハ類	カケ・ハ類				
個体	6			1		1				3					
重量(g)	90			297		19				33					

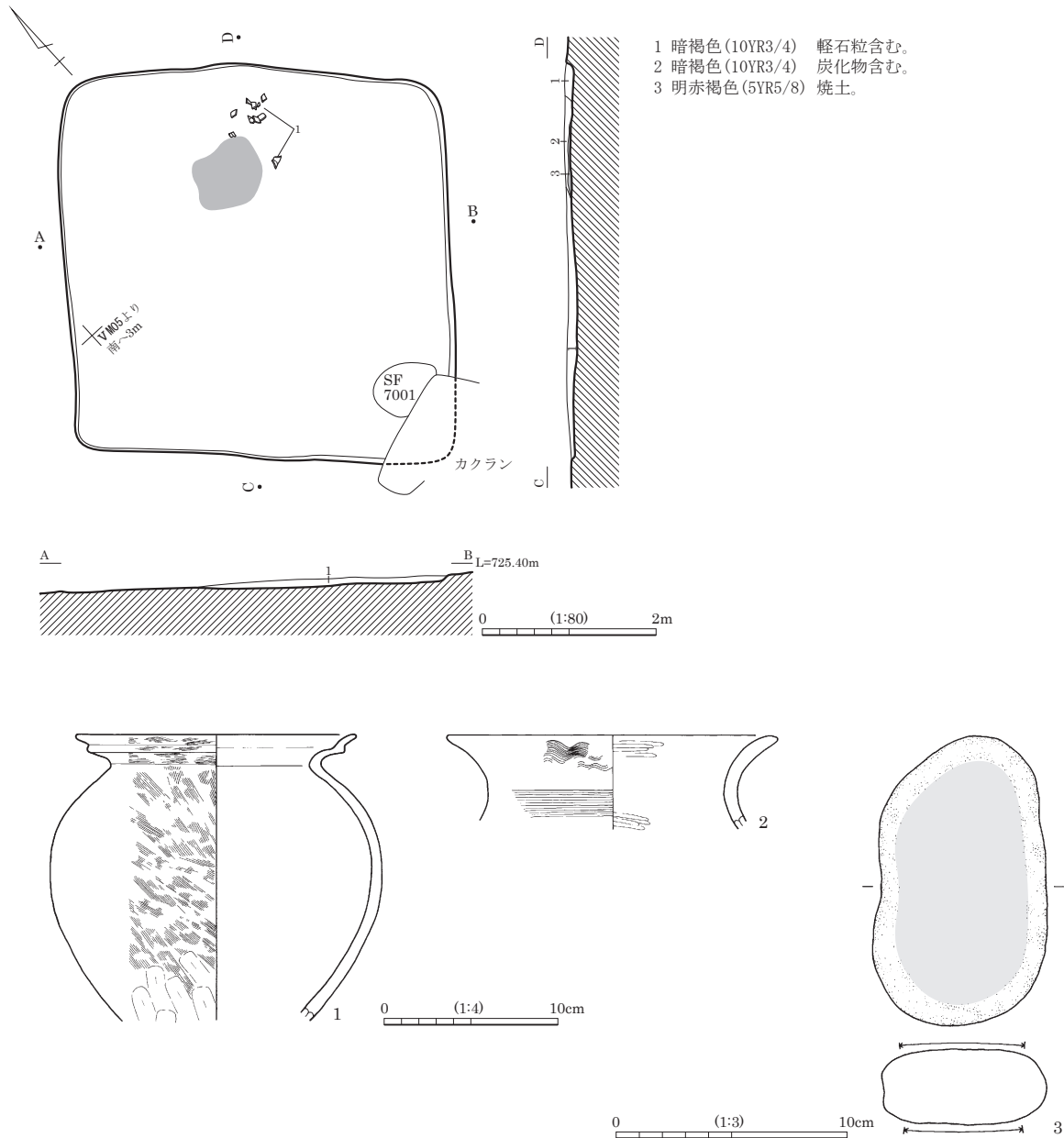
第47表 SB7009 出土土器集計表

SB7010 [第64図 PL16・27]

位置：7区の緩斜面中程。VM04・05グリッド。北西2m程にSB7007が位置し、周囲の緩斜面には同時期の住居跡がまとまる。

検出：表土を剥いだⅢ層浅間第一軽石流上面で暗褐色土の広がりと共に炉と思われる焼土も確認されたことから床面直上まで露出した住居跡と判断した。南東隅付近にSF7001焼土跡が重なり、住居埋土中に検出されたことから住居跡より新しいものである。また、住居北東隅近くに縄文時代の陥し穴SK7005が床面で確認された。

埋土：残った埋土は床面直上の極わずかで、軽石粒や炭化物を含む暗褐色土である。



第64図 SB7010 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ゆ甕	その他	箱清水系	その他					カメ・フホ類	タガツキ・フホ類				
種類	1		1		2						17				
個体数	1		1		2						17				
重量(g)	197		613		16						159				

第48表 SB7010 出土土器集計表



**構造：**南北 4.26 m、東西 4.50 mの隅丸方形を呈する。主軸はN 40° Eで、近接する住居とは方向を異にし、緩斜面上方のSB7012と方向が似る。ほぼ床面が露出した状況のため壁高は5 cm弱で、立ち上がりも不明瞭となる。床面も地山の黄褐色土をそのまま床面としており全体に不明瞭である。柱穴や貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

**炉：**中央北側に位置し、ほとんど掘り方を持たない地床炉で底面が被熱赤化する。

**遺物分布：**埋土は浅く、出土遺物は非常に少なく、炉周辺から甕（1）が出土した。

**出土遺物：**1はS字口縁甕。薄手で口縁部が屈曲し有段となる。器面は全体に摩耗するが、細かいハケ調整痕がみえる。胎土は他の在地の土器と同じである。2は櫛描文系の甕で口縁部に波状文、頸部に直線文が施文される。3は安山岩の扁平礫を用いた磨石で、平坦な両面が磨れている。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

**SB7011** [第 65 図 PL16・27]

**位置：**7区の緩斜面上部。VM 05・10, N 01・06 グリッド。北側・南側 2～3 mの位置にSB7010・SB7013が近接する。また、西側の緩斜面部には同時期の住居跡がまとまる。

**検出：**検出面となるⅢ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして確認されたが、攪乱の影響などもありプランは不明瞭であった。そこで平面的な精査と共に想定される範囲にトレンチを設定し床面や立ち上がりを確認し住居跡と判断した。そのためセクションベルトが住居の軸からずれることとなった。南西隅に重なるSK7003を切る。

**埋土：**壁際は地山起源の黄褐色土粒を多く含む褐色や暗褐色土が堆積し、住居中央部では床面まで黒褐色土となる。なお、東壁中央部から炉付近の床面直上には地山と同質の黄褐色土（セクション図5層）が10～20cm程の厚さで堆積し、床面との間には薄く黒色土が存在する。人為的に流入させた可能性もある。

**構造：**南北 4.13 m、東西 4.56 m程の隅丸方形を呈し、北・西側は攪乱を受ける。主軸はN 114° Eで、周辺の同時期住居とは軸を異にする。壁高は40～50cm前後と掘り込みが深く、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体に堅緻となる。柱穴はP 1～P 4の4本で、北東隅のP 5は貯蔵穴と考えられる。

**炉：**主軸奥側の柱穴間にあり地床炉。底面の被熱赤化面が2ヶ所あり、西側から東側につくり替えたものと考えられる。炉内から無彩壺片が出土し、本来土器埋設炉の可能性もある。炉周辺の床面には薄く炭層が広がる。

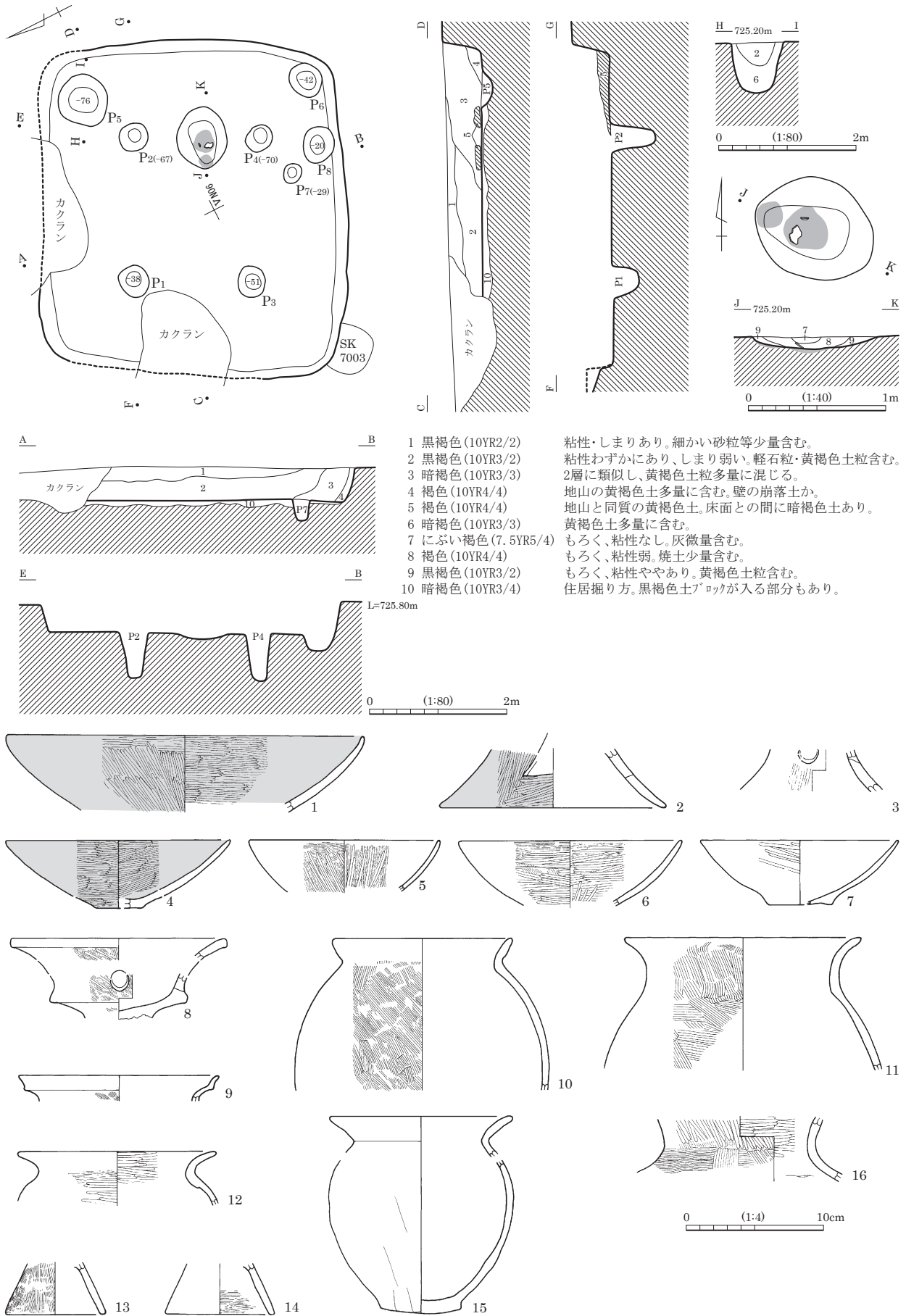
**遺物分布：**埋土からは多様な土器が出土したが、小片が多い。

**出土遺物：**10～12はハケ調整の甕。10は口縁部が短く外反し、胴部は丸みを持つ。11は粗いハケ目となる。12は口縁部が強く屈曲外反する。13・14は台付甕の脚部。15は口縁部が「く」の字に外反する。9はS字口縁甕の口縁部片。薄手で、口縁下で屈曲し外反する。16は無彩の壺頸部で、頸部にT字文を施す。1は赤彩の大型高坏の坏部、口縁部がやや内湾する。2は直線的に開く脚で、三角透かしを持つ。赤彩。3の脚には円形透かしがみられる。4～7は鉢で赤彩と無彩がある。8は器台。脚との接合部から大きく横に広がり、稜をもって立ち上がる受部になると想定される。受部に円形透かしを持つ。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カマ・ツボ類	カマ・ハケ類				
個体 点数	16	3 38	4	1 49	1	3 52	4	1			85		1		
重量(g)	205	573	310	783	51	483	131	63			773		17	105	

第49表 SB7011 出土土器集計表



第65図 SB7011 遺構図・遺物図

SB7012 [第66・67図 PL16・28・38]

位置：7区の緩斜面上部。VM14グリッド。東側の緩斜面に同時期の住居跡がまとまる。

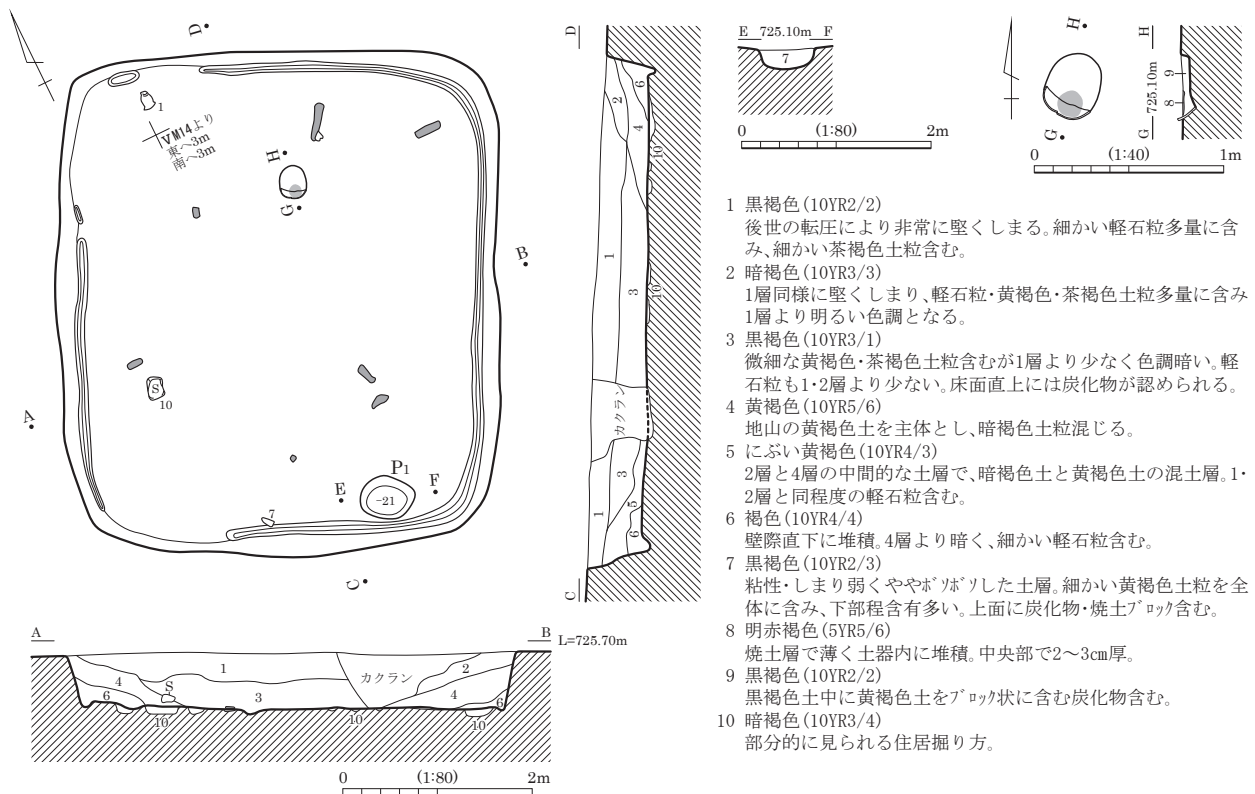
検出：宅地造成時に浅間第一軽石流上面まで削平され、黄褐色土の盛土で造成されている。検出面では暗褐色から黒褐色土の落ち込みとして検出されたが、プランは不明確。トレンチの掘り下げにより床面と立ち上がりを確認し住居跡と判断した。

埋土：6層に分けられたが、大きくは上層・下層・壁際の土層からなる。上層は造成時の転圧の影響を受け非常に堅く締まった黒褐色・暗褐色土。下層は黒色土で床面直上では炭化物を含む。壁際は黄褐色土の流入土となる。自然堆積と考えられる。

構造：南北4.80m、東西4.10mの隅丸方形を呈する。主軸はN 27° Eで、緩斜面下部のSB7010と方向が似る。検出面からの掘り込みは深く壁高は50～60cm程度を測り、立ち上がりも垂直に近い。床面は地山の黄褐色土で堅緻とはなっていない。床面直上には全体に炭化物が遺存し、特に住居中央部に多く、床面もやや暗くなる。柱穴は検出されなかった。南東隅付近に貯蔵穴が掘り込まれる。北西・南西隅部を除いて細い周溝が巡る。

炉：中央部北側に土器を伴う地床炉がある。上面に薄く焼土層が見られるが、下部は黒褐色土となる。炉に埋設された土器は箱清水系の無彩壺胴部。

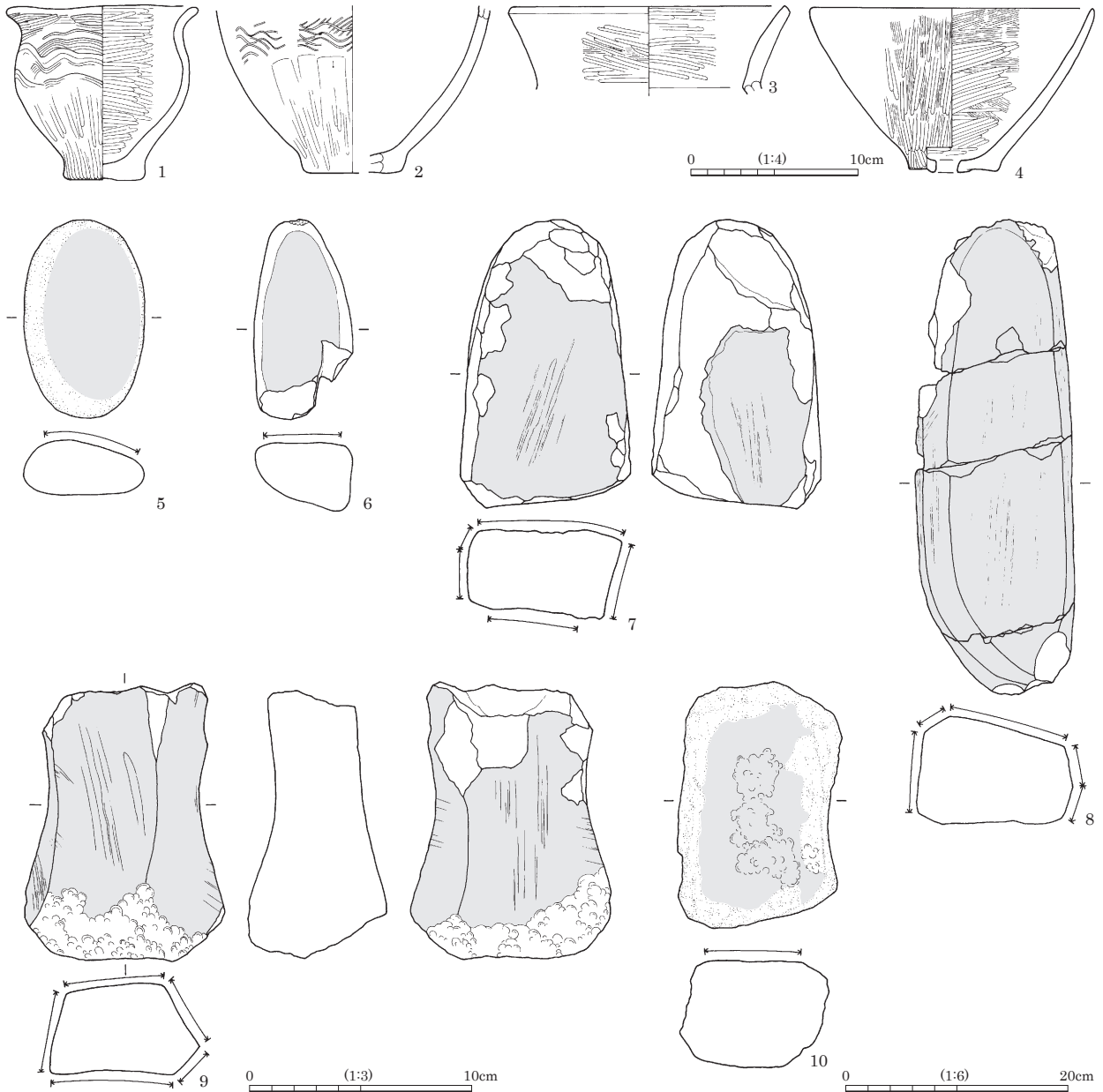
遺物分布：北西隅付近の床面直上から小型甕（1）が出土。床面直上には砥石（7）と方形の台石（10）が認められた。また、検出面でも砥石が1点出土している。



第66図 SB7012 遺構図

器種	甕		壺		高杯	鉢	器台	瓶	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系					その他	カ・ハ類				
個体	2	4	7	1	1			1		17				
重量(g)	377	49	133	307		46	27		186	153				

第50表 SB7012 出土土器集計表



第67図 SB7012 遺物図

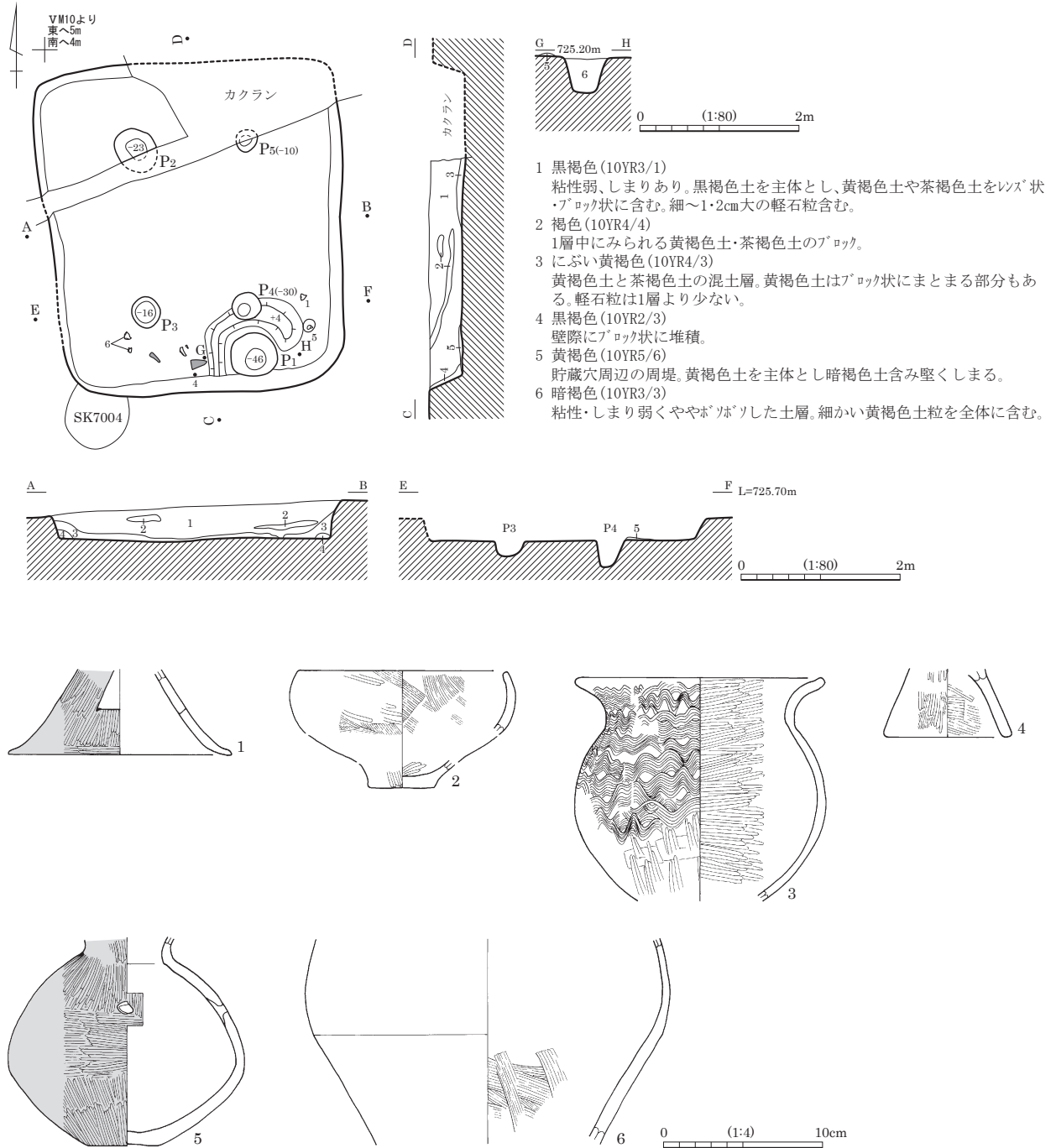
**出土遺物：**1は櫛描文施文の小型甕。口縁から胴上部にかけて崩れた波状文が施される。2の甕も同様な波状文が胴部に施文される。3は厚手の甕で、全体にミガキが加えられ口唇部は面取りされている。4は底部から直線的に開く鉢状となる甕。底部中央に単孔。壺は図化できなかったが、炉に埋設された無彩の壺胴部片がある。5・6は磨石。平坦面が磨れている。5は砂岩、6は安山岩。7～9は砥石。7は流紋岩製で、長方体のほとんどの面を砥面として使用している。上下の広い平坦面には筋状の凹みが長軸方向に入る。8は非常にもろく風化した石材不明の棒状礫を素材とし、3分割している。平坦面や側面を砥面とし、各面界は稜を持つ。9は砂岩製の長方体で、平坦面全てを砥面として使用していて、各面界は稜を持つ。砥面は中央部が凹むように湾曲する。下端には敲打痕と思われる潰れがある。10は安山岩製の長方体礫を用いた台石。上面の平坦面が弱く磨れている。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

SB7013 [第68図 PL16・28]

位置：7区の緩斜面上部。VM10・15, N06・11グリッド。北側や西側に同時期の住居跡がまとまり、SB7011が北東2m程に近接する。

検出：表土下のⅢ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。南西隅にSK7004が重なる。住居調査後に確認したため切り合いは明確でないが、住居が切っていると考えられる。北東部と西壁の一



第68図 SB7013 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高杯	鉢	器台	瓶	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他	
	箱清水系	ゆ甕	その他	箱清水系	その他					か・つば類	たがき・け類					
個体	1	10		1	3	1	1	9	1							
重量(g)	401		50	188	456	111	63									235

第51表 SB7013 出土土器集計表

部が攪乱を受ける。

**埋土：**壁際から床面上にかけてにぶい黄褐色土が堆積し、上部はほとんどは黒褐色土で埋没している。黒褐色土中には黄褐色土や茶褐色土がブロック状に含まれる。人為的埋め戻しの可能性がある。

**構造：**南北 3.87 m、東西 3.64 m の隅丸方形を呈する。主軸は N 2° W で、西側の SB7004 や北側の緩斜面面下部の SB7005 と類似する。掘り込みは 50cm 程度と深く、立ち上がりは垂直に近く明瞭である。床面は地山の黄褐色土でさほど堅緻でなく、炭化物も少量検出された。柱穴は床面精査段階では北西部の P 2 のみが確認され、掘り方調査で P 3～P 5 が検出され 4 本で柱穴となると考えられる。南東隅付近に貯蔵穴が穿たれている。貯蔵穴の周囲は黄褐色土が盛られ、周堤状に床面より 4 cm 程高まり堅緻になっている。

**炉：**確認されなかった。

**遺物分布：**埋土中の遺物は小破片で量も少ない。貯蔵穴周辺から壺（5・6）や高坏片（1）が出土した。

**出土遺物：**3 は口縁部の外反が強く、胴部は球胴となり、口縁部から胴部にかけて櫛描波状文が施される。5 は赤彩の壺で、胴部がややつぶれた球状となる。胴上部に外側からの打撃による穴が開く。6 は無彩の壺胴下半部で、括れは不明瞭となる。1 は赤彩の高坏脚で、直線的に開き三角透かしを持つ。有段の坏部片もある。2 は口縁部が内湾する鉢。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

**SB7015** [第 69 図 PL16]

**位置：**7 区の緩斜面下部で 6 区からつながる低位面に位置する。V H 19・20 グリッド。遺構の大半は北側の調査区外に延びる。

**検出：**盛土を除去した後、低位面に堆積した黒色土層の状況を確認するため調査区境に設定したトレンチを掘削中に黒褐色土の落ち込みを確認。当初、埋没した谷部の低位面に堆積した黒色土の広がりと思われたが、地山の黄褐色土面を平面的に精査したところ、住居南東隅部分が検出され住居跡と判断した。

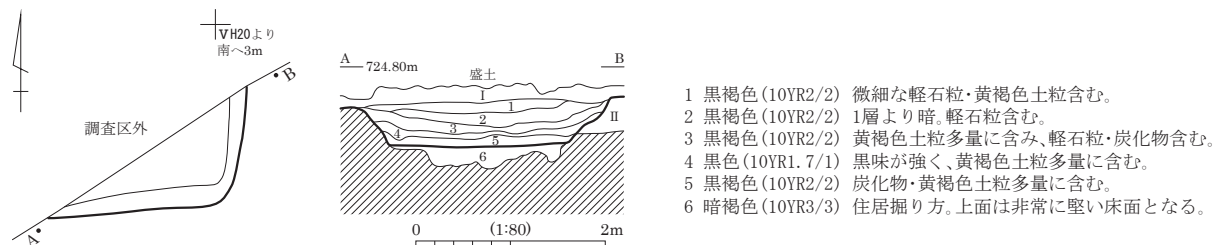
**埋土：**黄褐色土粒を含む黒褐色・黒色土で覆われ、床面直上では炭化物も含まれる。

**構造：**南東隅のみの検出で全体像は明らかでないが、隅丸方形のプランを呈すると考えられる。規模は不明。壁高は 25～30cm 程度で、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面は堅くしまった暗褐色土の貼床となっている。ピットなどは検出されなかった。

**炉：**調査範囲内には存在しない。

**遺物分布：**甕の小片が 1 点床面から出土したのみ。

**時期：**床面出土の土器片及び周囲の遺構の状況から古墳時代前期前半と想定される。



第69図 SB7015 遺構図

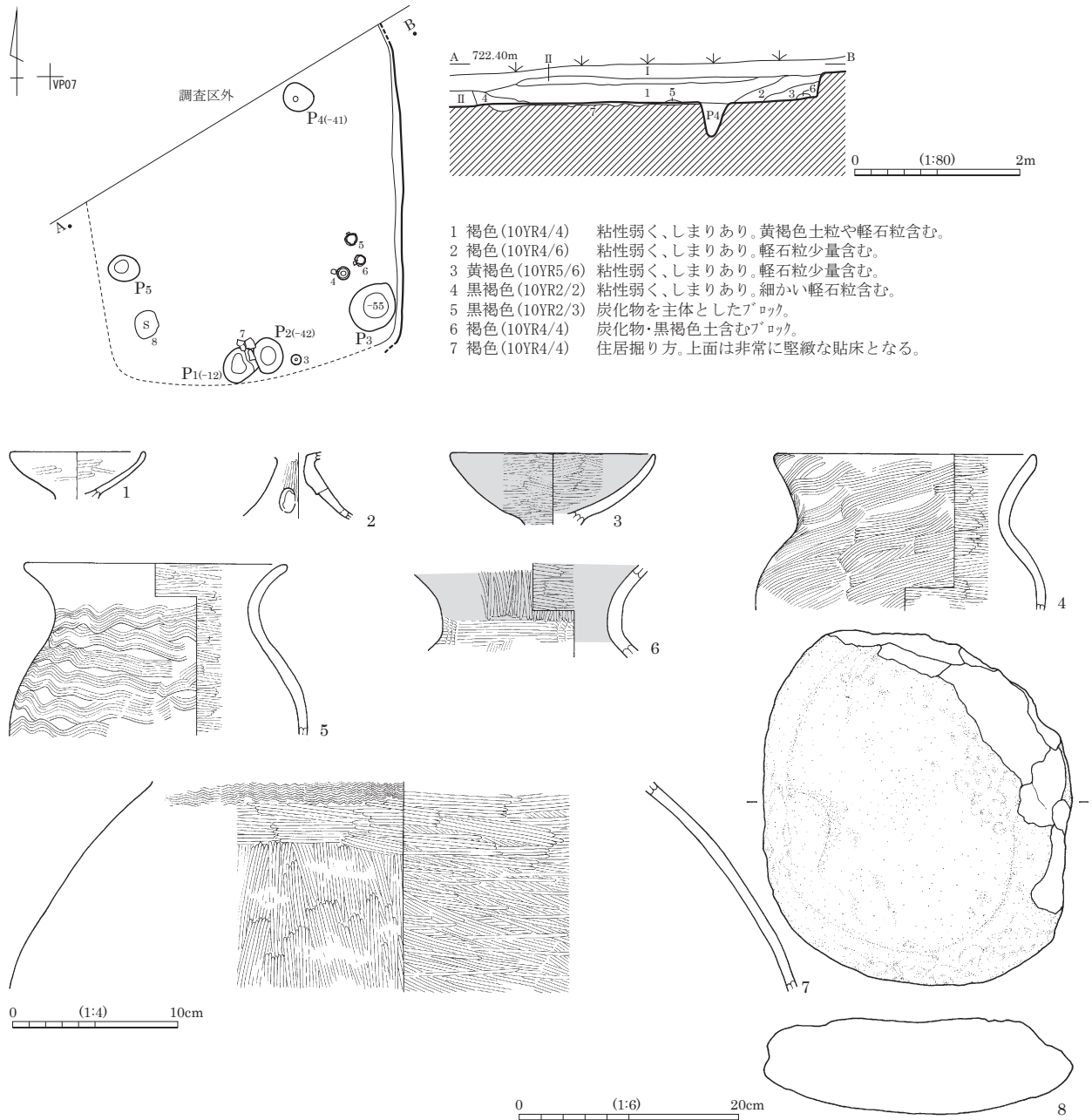
器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ゆ甕	その他	箱清水系	その他					カメ・ツボ類	タガネ・付類				
個体										1					
重量 (g)										3					

第52表 SB7015 出土土器集計表

SB8004 [第70図 PL17・28・38]

**位置：**8区の緩斜面下部。VP 02・07グリッド。北西部は調査区外へ広がり、東側7m程にSB8005が隣接する。また、緩斜面上部の平坦面の本線脇の市道部分にも同時期の住居跡が2軒存在する（佐久市教委 2009）。

**検出：**調査区北側から延びる浅い谷状部に堆積した黒色土を掘り下げていたところ堅緻な床面が確認されたことから住居跡を想定。谷部の黒色土を取り除き浅間第一軽石流上面の黄褐色土上面で東壁部を確認し住居跡と判断した。北西部は調査区外へ広がる。



第70図 SB8004 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハツ	その他	箱清水系	その他					カマ・ツボ類	カサネ・ハケ類				
個体	2			2		1		2		3					
重量(g)	835			791		132		66		26					

第53表 SB8004 出土土器集計表

**埋土：**褐色土を主体とした埋土で、特に東壁際は地山の黄褐色土と区別しにくい。床面直上に炭化物ブロックが認められた。自然埋没と考えられる。

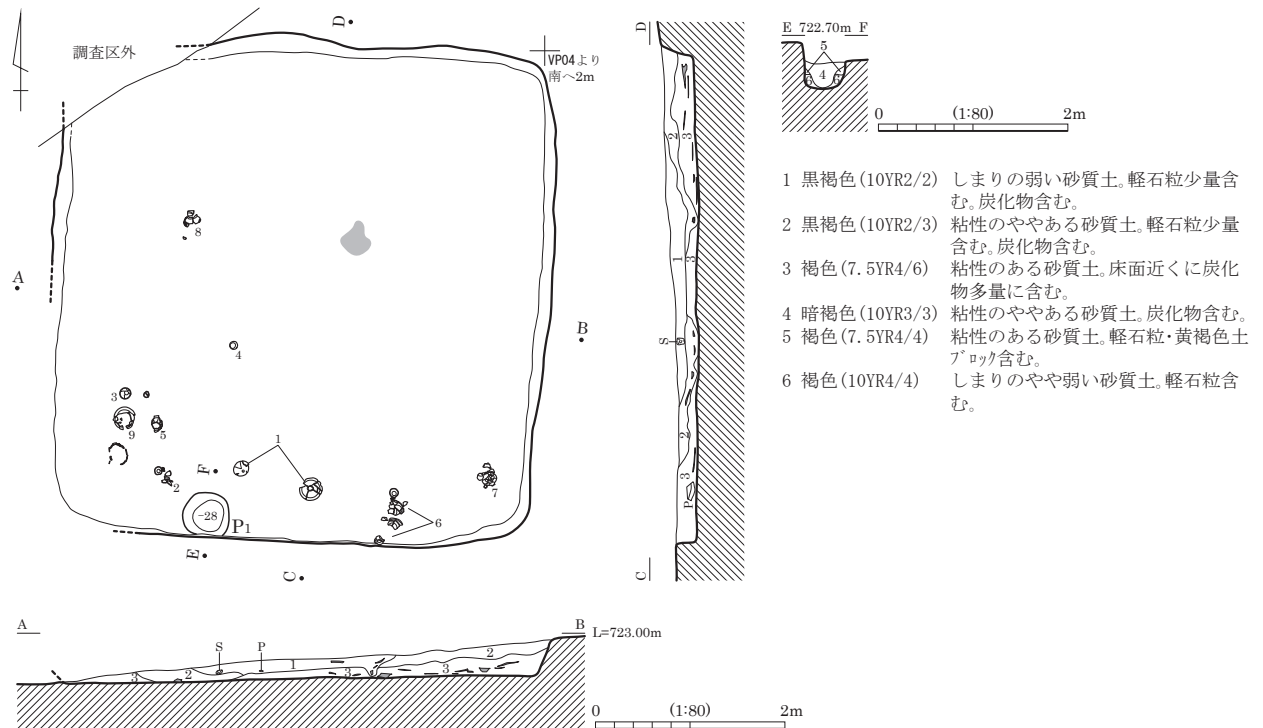
**構造：**推定南北4m、東西3.6m程の南北に長い隅丸方形を呈すると考えられる。西壁から南壁部は谷状地形と重なり立ち上がりが確認されなかったため、堅緻な床面範囲から住居規模を想定した。主軸はN0°W程度で、隣接するSB8005と類似する。確認できた東壁部では20cm弱の壁高を測る。地山の黄褐色土を床面とし、全体に堅緻に踏み固められている。ピットは5基確認されたが、柱穴は不明。P1・2は入口部に関係し、南東隅のP3は貯蔵穴と考えられる。P5は床下で確認。

**炉：**調査範囲内では確認されなかった。

**遺物分布：**貯蔵穴北側の床面で、甕（4・5）や壺（6）、入口部のP2脇から高坏（3）が出土した。また、南西隅付近の床面に扁平な大形礫（8）が置かれていた。

**出土遺物：**4・5は櫛描文の甕。4は外反する口縁部から胴部にかけて櫛描斜状文が粗く施文される。5は頸部から胴部にかけて大きく緩やかな波状文を施す。6は壺の頸部で、頸部を除き内外面赤彩され、頸部には簾状文を施文。7は無彩の壺片で、頸部には波状文が施される。1・2は器台で、1は小さい塊状の受部。2は「ハ」の字に開く脚部で、大きさの異なる円形透かしが3孔穿たれる。受部には貫通する。8は安山岩の扁平な大形礫で、上面の平坦面が弱く磨れている。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

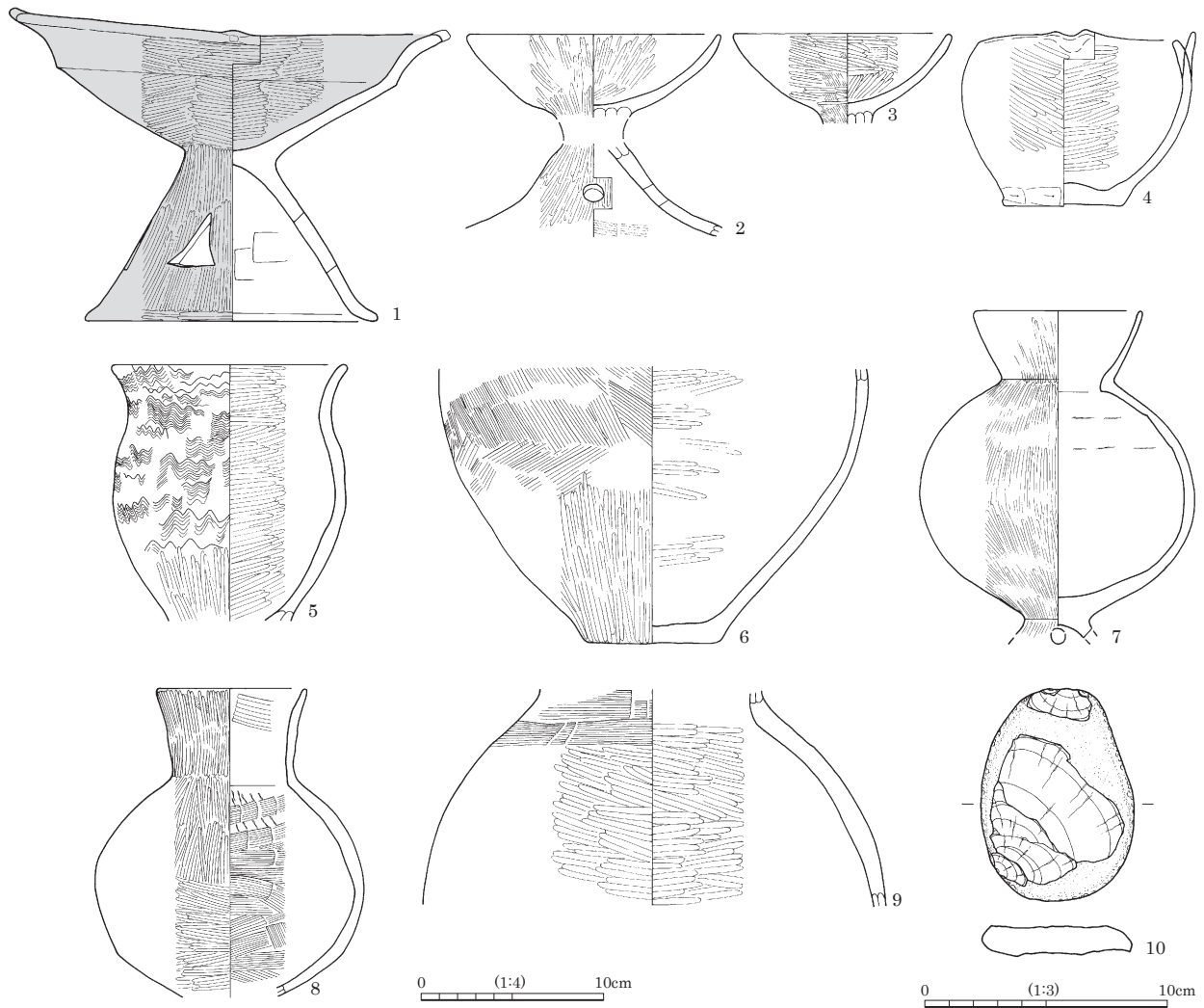


第71図 SB8005 遺構図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱溝水系	ハ甕	その他	箱溝水系	その他					カメ・ツボ類	カサ・ハサ類				
種類	2	1	2	1	2	3	8	1		39		2			
個体	2	1	2	1	2	3	8	1		39		2			
重量(g)	469	610	269	928	1089	1253	293			127		14			

第54表 SB8005 出土土器集計表





第72図 SB8005 遺物図

SB8005 [第71・72図 PL17・28・29]

**位置：**8区の緩斜面下部。V P 03 グリッド。北西隅は調査区外に及び、西側にSB7004が隣接する。緩斜面上部の市道部分にも同時期の住居跡が2軒ある。

**検出：**表土層直下が浅間第一軽石流上面の黄褐色土となり、その面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**上部は黒褐色土を主体とし、下部は炭化物を多く含む褐色土となる。炭化物は壁際に多く認められた。自然堆積と考えられる。

**構造：**南北5.16 m、東西5.06 mの隅丸方形を呈する。主軸はN 3° Eで、西側に隣接するSB8004と類似する。東辺から北辺にかけては40cm程の壁高をもつが、南西隅付近は地形傾斜のため遺存していない。黄褐色土の地山を床面とし、貼床は認められない。ピットは南西隅付近に1基検出されたのみで、柱穴は不明。

**炉：**中央部やや北側に直径30cm程度の焼土が確認され、炉の痕跡と考えられる。

**遺物分布：**南壁際の床面直上から比較的まとまって出土。

**出土遺物：**5は櫛描波状文の施された甕。6は胴部が粗いハケ調整され、底部付近はミガキ。7は球状の胴部に外傾する口縁部をもち、小さな台が付く。台には円形透かしが3孔穿たれ、脚端部は欠損する。胴部にはハケ調整痕がわずかに残り全体にミガキ。8も胴部球状で直口する口縁部となる。ハケ調整後ミガキ。9は箱清水系の無彩壺で、胴部は球胴状となり頸部に簾状文を施す。1は赤彩の大型高坏で、有段坏

部に三角透かしを持つ脚が付く。2は塊状の坏部で脚は大きく開き円形透かしを持つ。3も塊状の坏部。4は口縁部が内湾する深い片口鉢。10は頁岩の扁平河原礫を素材とし、先端と側面に剥離が認められる。敲打によるものか。

時期：出土遺物から古墳時代前期前半。

SX5002 [第73・74図 PL17・29・30]

位置：5区の高位平坦面。II W 17・18グリッド。同時期の住居跡は東側や北側に20m離れて存在し、本遺構周辺はやや開いた空間となる。

検出：宅地跡の基礎や施設を取り除きながら表土剥ぎを行ったところ、壺や甕が埋められたような状況で確認された。当初は掘り込みが明瞭に確認できなかったため不明遺構としたが、住宅施設による攪乱部の断面観察、平面的な精査により小規模な黒褐色土の落ち込み範囲が検出された。住宅基礎等により遺構内が大きく壊されている。

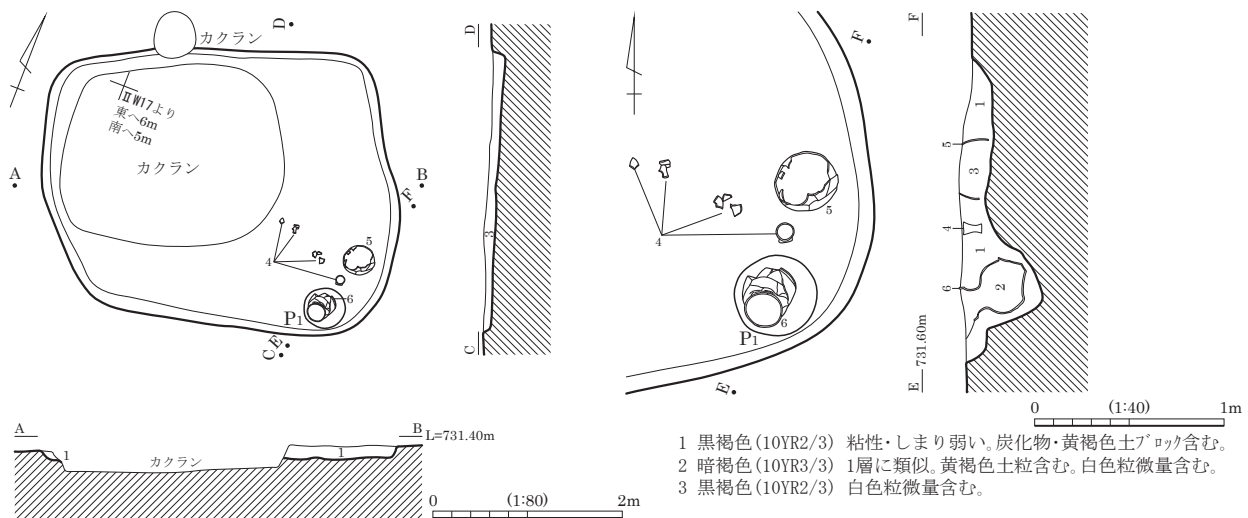
埋土：埋土の遺存は悪く、底面近くがわずかに残るのみで、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土となる。土器内や周辺には骨粉らしき細かい白色粒がわずかに含まれる。

構造：南北2.74m、東西3.56mの不整形を呈する。主軸はN 21° W。検出面からの掘り込みは10cm程と浅く、壁面や床面も明瞭ではない。南東隅の床上やピット内に土器が置かれたような状態で出土。遺構内に他の施設はない。

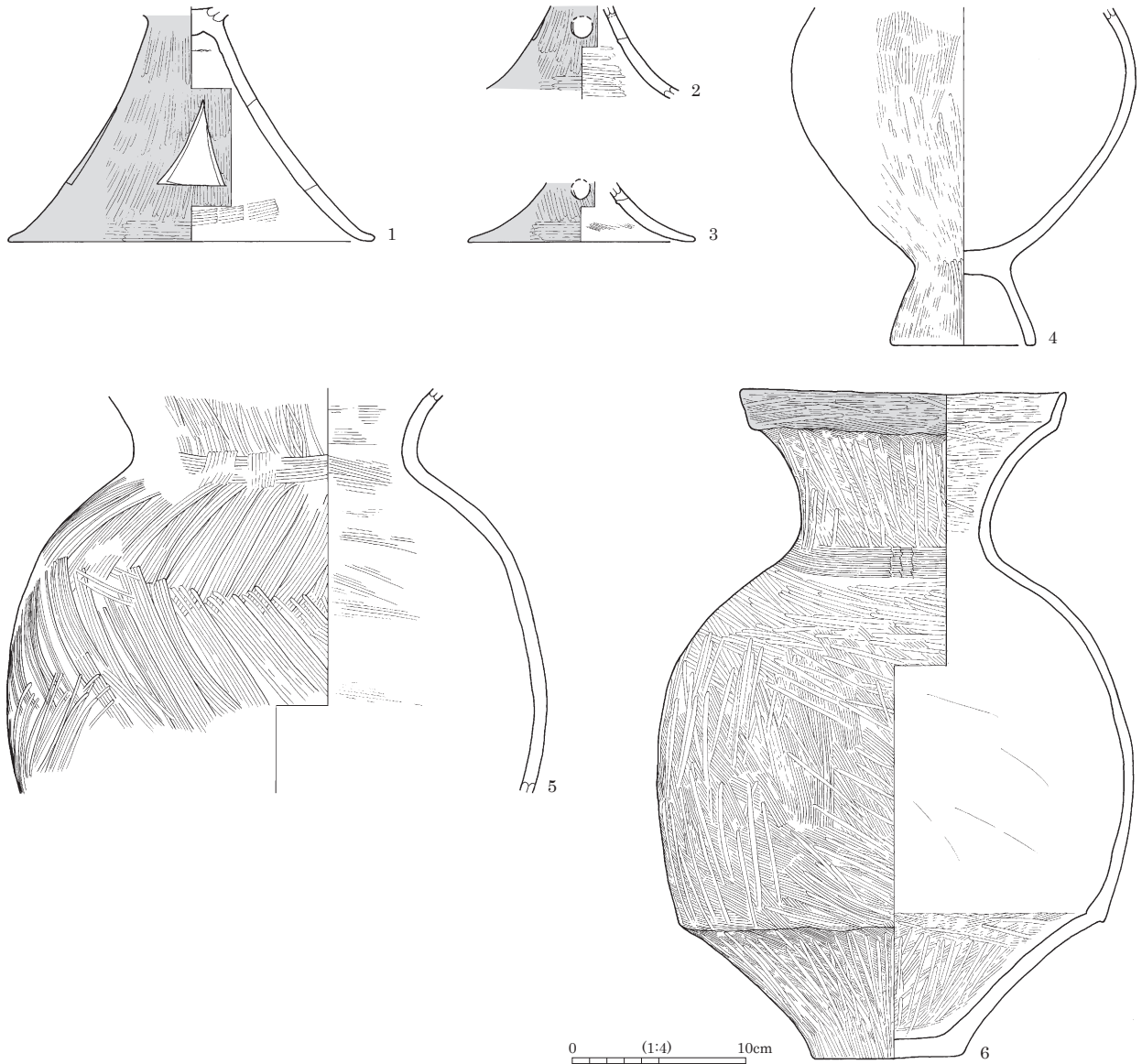
遺物分布：完形の壺(6)は土器に合わせたようなピット内に収まり、甕(5)は床面におかれたような状態で出土。台付甕(4)は脚部が壺と甕の間の埋土下部から出土し、胴部片は検出面にも広がる。高坏(1)は検出段階で埋土上面から出土。

出土遺物：5は櫛描文の甕で、口縁部と胴部には櫛描斜状文が施され胴部では羽状となる。最大径は胴上半にあり球胴状となり口縁部は外反が強い。4は台付甕の胴部から脚部で、最大径は胴上半にある。胴上半はハケ調整され、下半はミガキ。6は完形の壺。口縁部が立ち上がり受口状となり、胴部は丸みをおび胴下半で稜を持って屈折する。頸部に簾状文を施し、受口状の口縁部のみ赤彩される。全体に丁寧なミガキ。1は赤彩の大型高坏の脚で、直線的に開き三角透かしを持つ。2・3は小型高坏の脚で赤彩され、円形透かしを持つ。

時期：出土遺物から古墳時代前期前半。



第73図 SX5002 遺構図



第74図 SX5002 遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハケ	その他	箱清水系	その他					カマド類	カマド類				
種類	1		1	1		3	22								
個体点数	1		1	1		3	22								
重量(g)	1800		390	3400		823									

第55表 SX5002 出土土器集計表

SB2001 [第75・76図 PL10・31・32・38・40]

位置：2区の高位平坦面。ⅢL 09・10・14・15グリッド。周辺に遺構はなく、同時期のSB3001は埋没田切りの谷部を挟んだ北側に位置する。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面の黄褐色土層で黒褐色土の落ち込みとして検出。

埋土：黒褐色土を主体とし、壁際には壁面崩落によると思われる黄褐色土ブロックが多く含まれる。

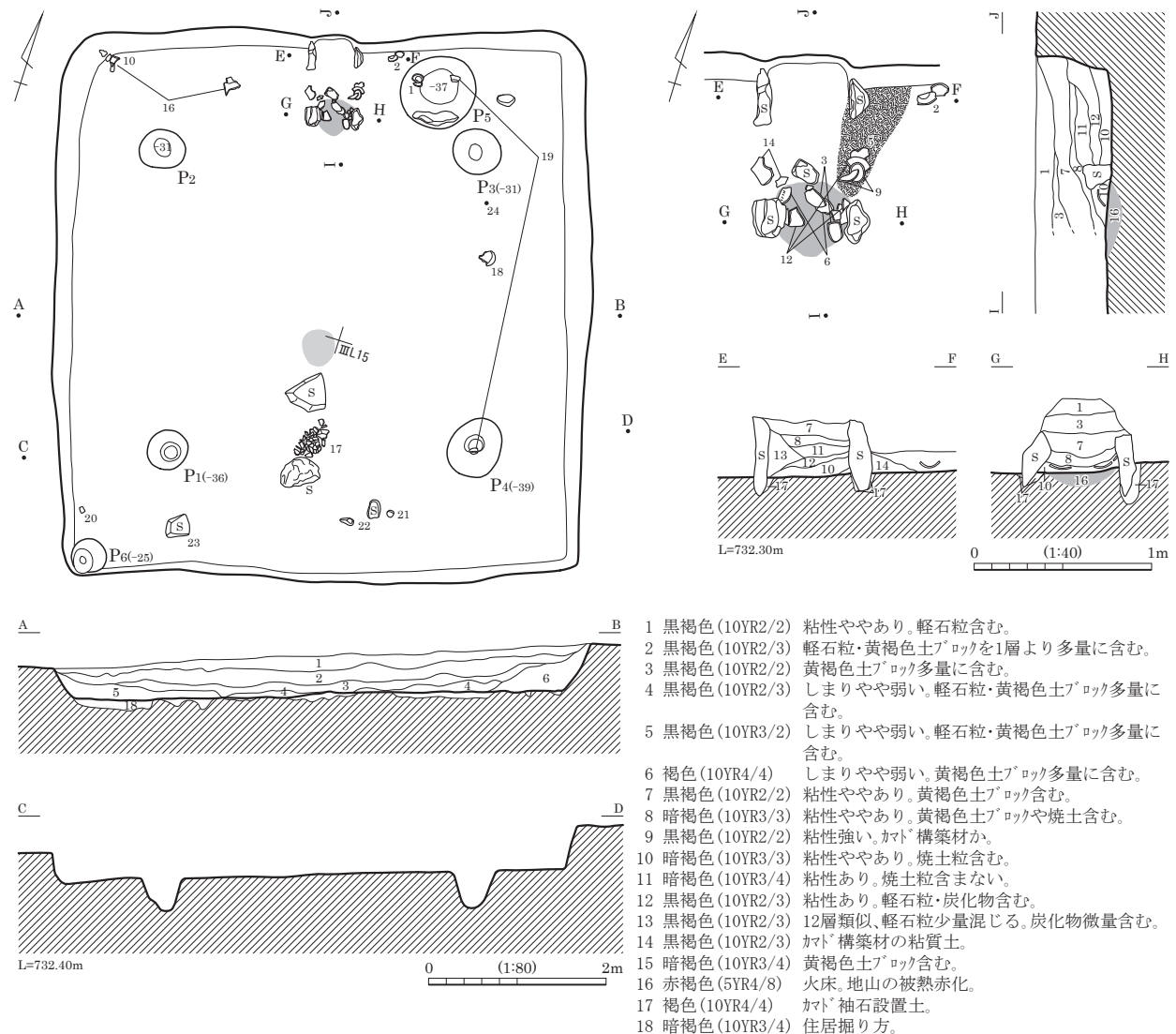
構造：南北5.90m、東西5.60mの方形を呈する。主軸はN 17°Wで、同時期のSB3001と似る。検出面からの掘り込みは比較的深く壁高は40～50cm程度を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。地山の黄褐色土を床面とし、部分的浅い掘り方を持つ。P1～P4の4本が柱穴で、カマド横のP5は貯蔵穴。

カマド：北壁中央に位置する。大形の礫で構築され、煙道部の張り出しはほとんどない。袖石は左右とも奥壁側と手前側が残るが、中央部は抜かれている。この抜けた部分にちょうど収まる礫が南側の床面に、

天井石がカマド脇の貯蔵穴に捨てられていて、住居廃絶時にカマドを部分的に解体している。支脚石はカマド中央に残り、その手前側の底面が被熱赤化する。

**遺物分布：**カマド内や周辺から坏が多く出土し、17の甕は南側の床面で潰れた状態で出土。18の甕はほぼ完形で床面直上から出土。24の鉄製品は床面より20cm程上部の埋土中から出土。

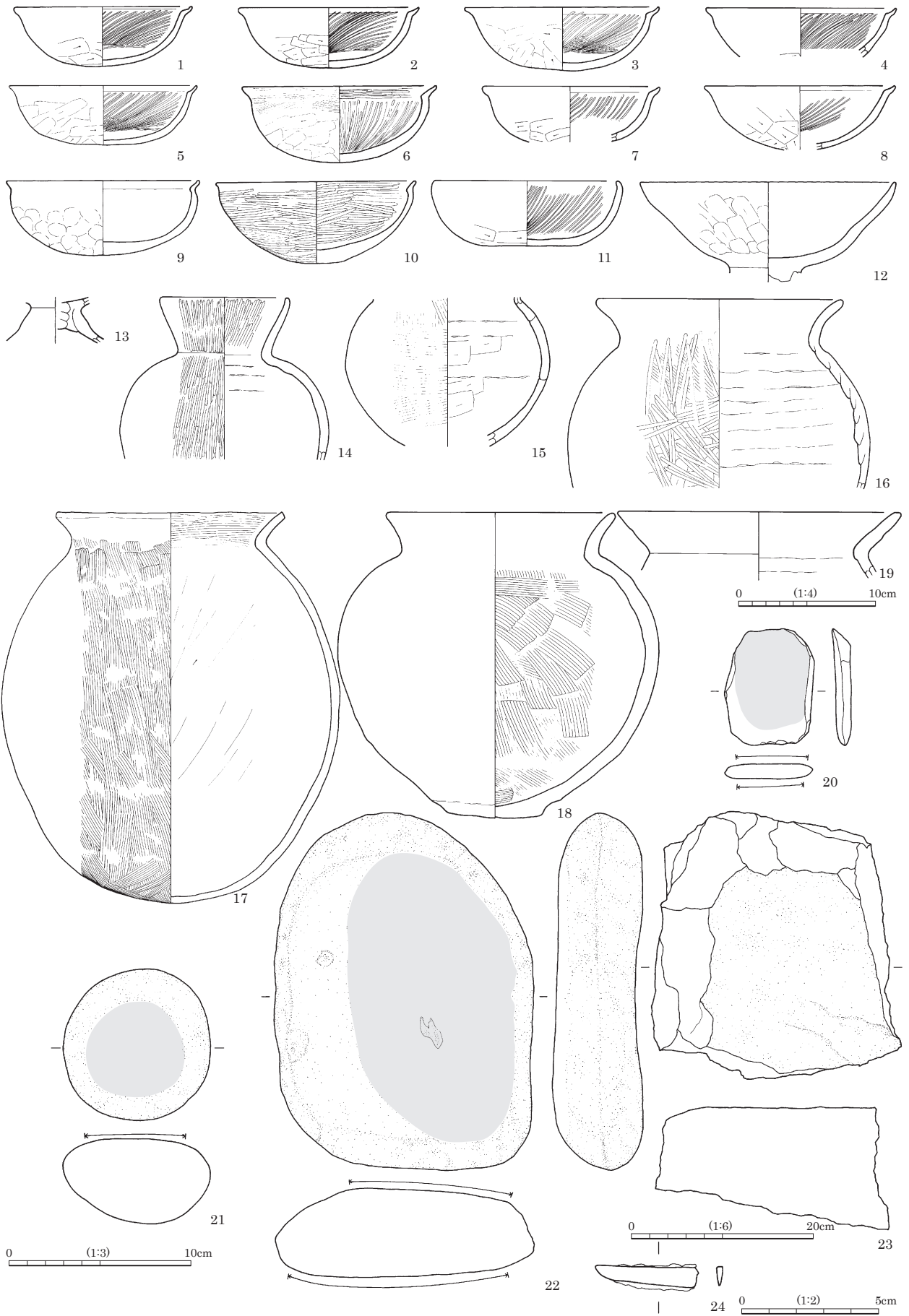
**出土遺物：**1～8は口縁内面に稜を持ち口縁が短く外反する坏で、底面は丸底で内面に放射状のミガキを持つ。法量も類似する。9・10も類似した器形の坏だが、法量が大きい。9は内面がナデ、10は内外面とも一定方向のミガキ。11は口縁部がやや内湾する坏で、底面平底。12は大きく開く高坏坏部。14は胴部が球状となり、頸部で括れ口縁部が直立する。15も類似した器形と考えられ、ハケ調整される。16は厚手で口縁部が外反し胴部は球胴状となる。内面に粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。18も同様な甕で内面にハケ調整が残る。17は口縁が「く」の字に屈曲し、口唇部は面取りされる。底部は丸底で全体にハケ調整される。胎土が白色で他の土器とは異なる。19も口縁が「く」の字に屈曲する。20は絹雲母片岩



第75図 SB2001 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体数	11	73	8					2	4	58			2	21			
重量(g)	1553	50						503	5740				639			10	

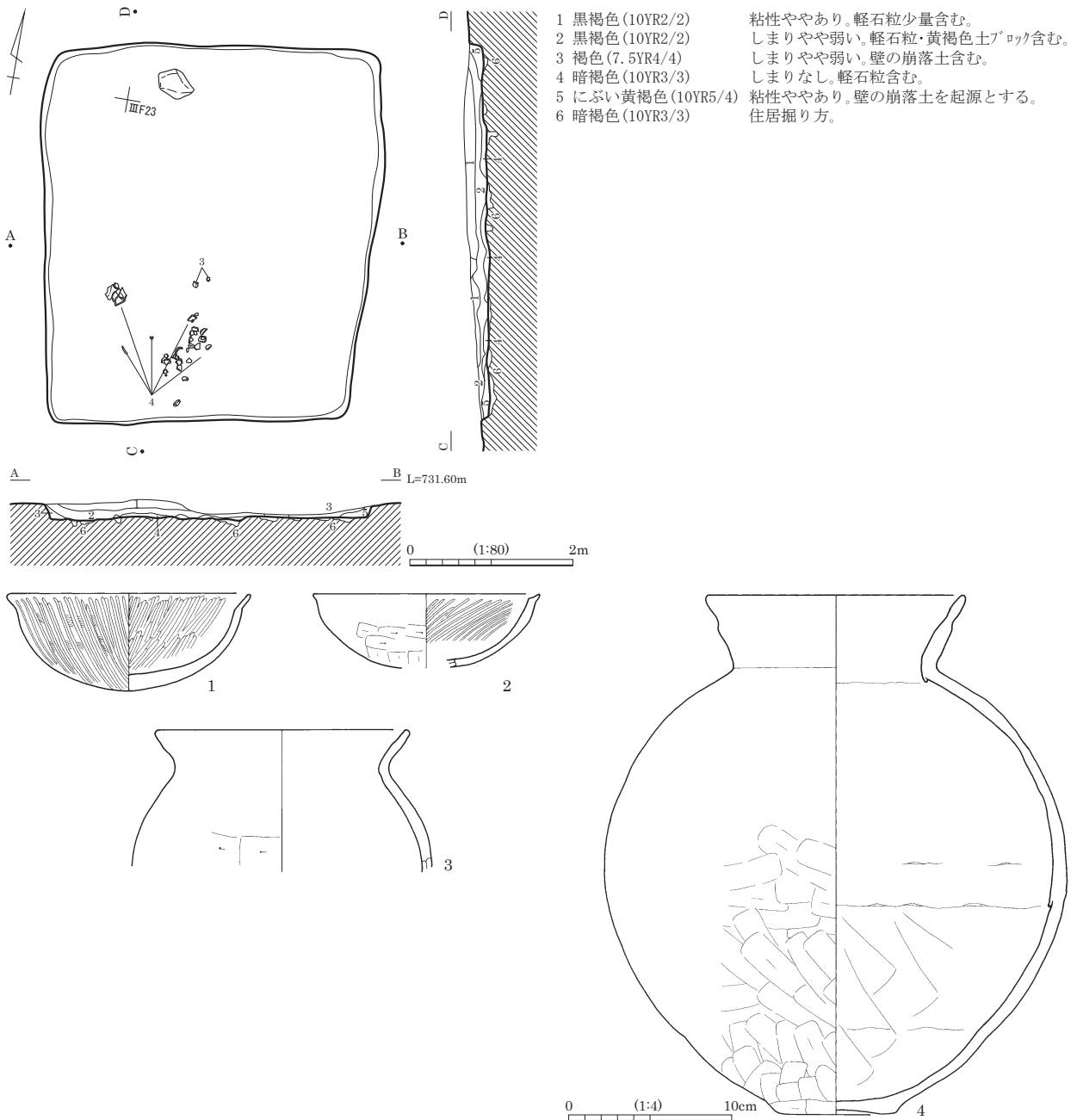
第56表 SB2001 出土土器集計表



第76図 SB2001 遺物図

の扁平礫を用いた磨石で平坦面が磨れている。21は深成岩の拳大円礫で礫面が弱く磨れている。22は安山岩の大形扁平礫の平坦面を磨っている。23は安山岩の大形割礫。上面の平坦部は弱く磨れているように見える。24は鉄製品で、刀子の先端状のもの。

時期：出土遺物から古墳時代中期後半。



第77図 SB3001 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	4	9							1	12			1				
重量(g)	200								181				2160				

第57表 SB3001 出土土器集計表

SB3001 [第77図 PL10・32]

**位置：**3区の高位平坦面。南北を埋没谷に挟まれた狭い平坦面に位置する。ⅢF 17・18・22・23 グリッド。狭い平坦面には他に遺構はなく、同時期のSB2001は谷部南側の平坦面にあり50m程離れる。

**検出：**住宅の下に当たり、表土層は浅く、表土直下がⅢ層浅間第一軽石流上面となる。遺構はこの黄褐色土層上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**住宅造成時に埋土上部を削平されていて、遺存状態は良くない。壁際や床面直上には黄褐色土粒を多く含む土層が堆積し、上部は黒褐色土となる。

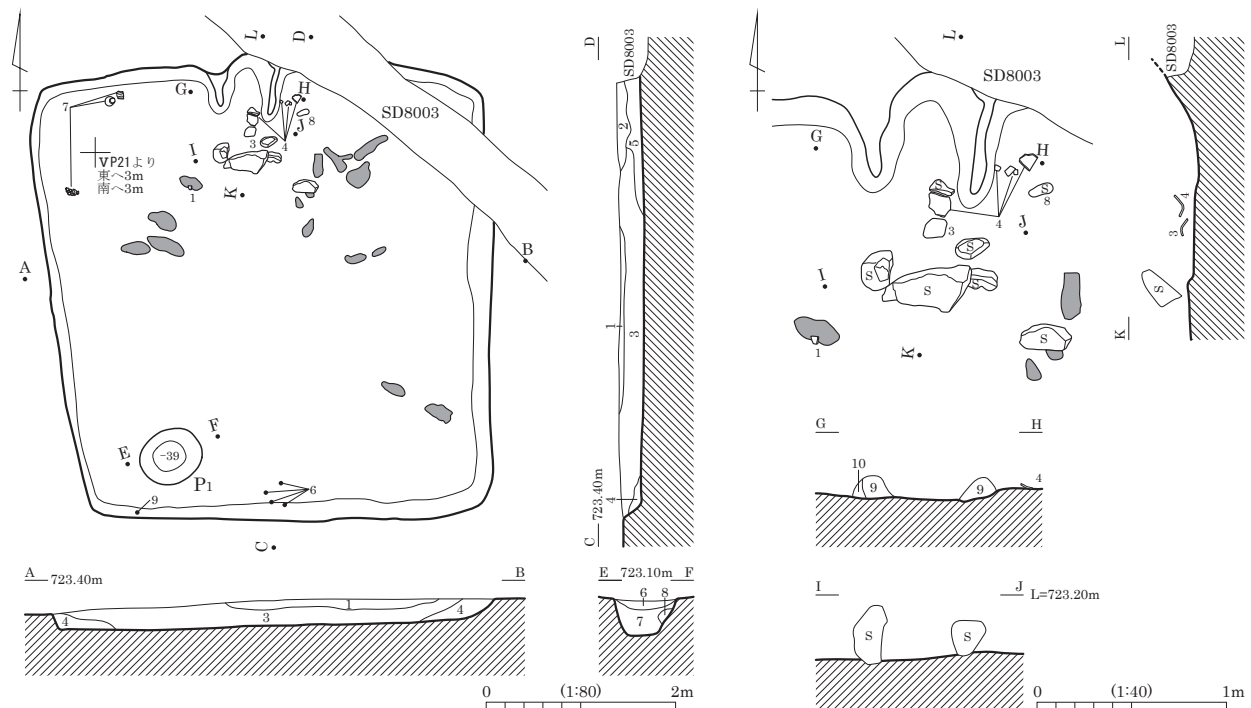
**構造：**南北4.50m、東西3.88mと南北に細長い方形を呈し、南辺が北辺よりもやや短い。主軸はN10°Wで、SB2001に似る。上部削平により検出面からの掘り込みはやや浅く、壁高は最大20cm弱。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部は崩落によりやや外側に開き気味となる。床面は浅い掘り方を埋め戻した黄褐色土で堅緻ではない。柱穴などは確認されなかった。

**炉・カマド：**北壁中央付近で大形の礫が出土したことから、北壁にカマドが構築されていたのではないかと想定したが袖石の抜き取り痕や火床なども確認されなかった。また、北東隅付近の床面に炭化物がやや多くみられたが、構築材の遺存や被熱火床などもなくカマドではない。なお、住宅の基礎や埋設管が床面直上まで及んでいるため住居中央部に小規模な炉があった可能性は否定できない。

**遺物分布：**4の壺は埋土下部や床面から潰れた状態で出土。

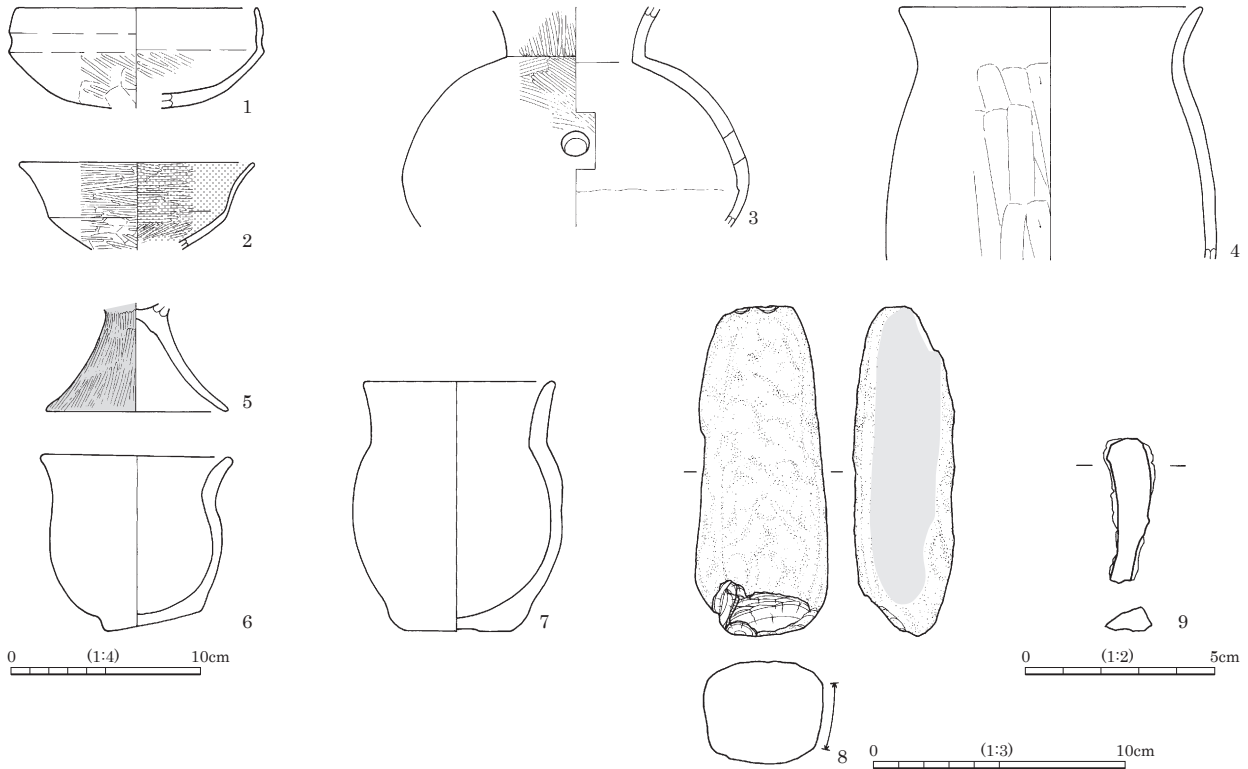
**出土遺物：**1・2は口縁内面に稜を持ち口縁が外反する坏で底部は丸底。他に同類の破片が2個体ある。4は胴部が球状となり、口縁部は「く」の字に屈曲する。厚手で、胴下半はケズリ。3も同様な器形となる。

**時期：**出土遺物から古墳時代中期後半。



- |  |   |
|--|---|
| 1 にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘性あり、しまりの強い砂質土。          | 5 明褐色(7.5YR5/6) 粘性強く、しまりのある砂質土。暗褐色土混じる。カマド埋土の一部か。 |
| 2 暗褐色(10YR3/4) 粘性ややあり、しまりの弱い砂質土。木の根の影響か。   | 6 黒褐色(10YR2/2) 粘性弱く、炭化物・軽石粒含む。                    |
| 3 黒褐色(10YR3/2) 粘性ややあり、しまりのある砂質土。炭化物・軽石粒含む。 | 7 暗褐色(10YR3/3) 粘性弱く、しまりなくボロボロした土層。2~3cm大の炭化物含む。   |
| 4 褐色(10YR4/4) 粘性・しまりの弱い砂質土。黄褐色土粒多量に含む。     | 8 黄褐色(10YR5/6) 黄褐色土ブロックで暗褐色土混じる。                  |
|  | 9 明黄褐色(10YR6/6) しまりの強いシルト~粘土層。                    |
|  | 10 褐色(10YR4/4) 粘性・しまりの弱い砂質土。                      |

第78図 SB3001 遺構図



第79図 SB8001 遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	2	12	1	1				1	5	1							
点数	12							5			61				41		
重量(g)	182	7	3					132	470		397		20		785		隠1(213g)

第58表 SB8001 出土土器集計表

**SB8001** [第78・79図 PL16・32・33・38・40]

**位置：**8区の緩斜面上部。V P 21 グリッド。緩斜面上部の平坦面から北側の低位面に下がっていく地形変換点付近に位置する。東側5m程に並列するようにSB8003が位置する

**検出：**調査地点は伐木の切り株が多くあり、遺構検出作業は困難であった。表土剥ぎが終了した段階の漸移層上面で、地山に近いにぶい黄褐色土の落ち込みが存在するようにみえたが、プランが不明確であった。精査を重ねてようやく西辺から南辺のプランが確認でき住居跡と判断した。なお、本遺構の調査を進める中でSD8003が住居北東部に重複することが確認された。SD8003と重なる部分では床面や住居立ち上がり確認できないことから、SD8003がSB8001を切ると判断した。

**埋土：**上部は地山に近いにぶい黄褐色土で、床面近くは黒褐色土となる。壁際には褐色の三角堆積が見られる。

**構造：**南北3.62m、東西3.34mの方形を呈する。主軸はN1°Wで、隣接するSB8003と類似する。検出面からの掘り込みは浅く、20cm程の壁高を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は地山の黄褐色土で、ほぼ平坦となり、住居中央部のみ硬化面が認められた。また、床面上には炭化材が見られた。柱穴は検出されず、南西隅付近のP1は貯蔵穴と考えられる。

**カマド：**カマドは北壁の中央部に構築される。大形の礫を芯材とし周囲を粘質土で覆った構造で、両袖の芯材の一部が残り、周辺に構築材と思われる礫が散乱している。

**遺物分布：**カマド内及びその周辺から甕(4)や甌(3)・坏(1)などが出土している。6・7の甕は住居南壁や北東隅付近の検出面に近いレベルで出土しており、住居廃絶後に周辺から混入したものか。



**出土遺物：**1は須恵器模倣坏。底部は丸底気味、坏身中程で凹線状に凹み稜を持って内湾気味に口縁部が立ち上がる。2は坏身中程で稜を持ちそこから外反しながら広がる。内面黒色処理されるが一部黒色化されない部分もある。3は甗。球状の胴部から頸部ですぼまり、口縁部は直立する。胴部中程に焼成前の穿孔がある。非常に焼成が良く、硬質の焼きとなっている。4は口縁下で緩く外反し、胴部は長胴型となる。胴部はケズリ。5は赤彩の高坏脚部。6・7は無文の小型甕で、器形は櫛描文系の甕と類似する。厚手で、器面全体ナデ。6は底部が大きく歪む。8は石英片岩の棒状礫を素材とし、側面の一面が他に比べ平坦で滑らかとなっている。9は不明鉄製品。

**時期：**出土遺物から古墳時代後期。東側に隣接するSB8003は本住居よりやや小型であるが、主軸方向が同じで住居構造や出土遺物が類似しており、同時存在の可能性はある。

### SB8003 [第80図 PL17・33]

**位置：**8区の緩斜面上部平坦面。V P 22・23グリッド。南西隅は佐久市教委が市道部分として調査（佐久市教委 2009）。西側5m程に同時期のSB8001が隣接し、すぐ東側にSB8002が近接する。

**検出：**表土下の検出段階では中央部分が黒色土の落ち込みとして確認されたが、壁際が不明確であった。想定される遺構部のトレンチ調査により、床面と立ち上がりが確認され平面的な精査でも方形のプランが検出され住居跡と判断した。

**埋土：**埋土上部から中位にかけては黒褐色土やにぶい黄褐色土がレンズ状に堆積し、床面直上は地山の黄褐色土を多く含む褐色土となる。自然堆積と考えられる。

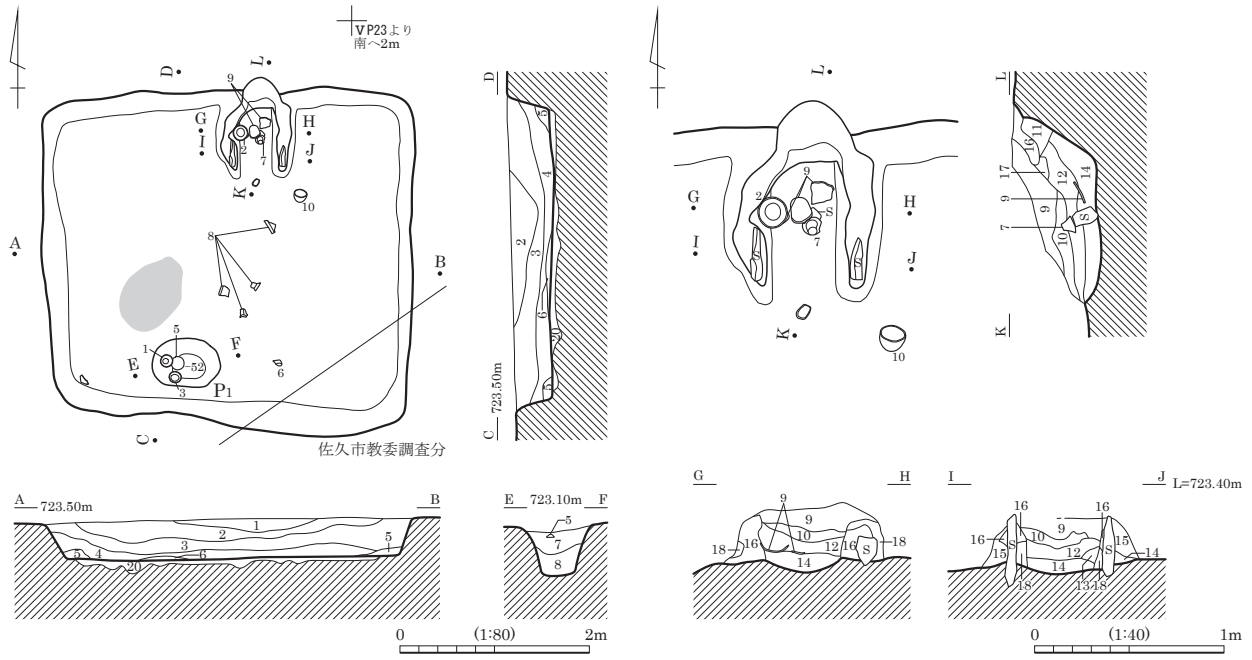
**構造：**南北3.12m、東西3.50mの方形を呈する。主軸はN0°Wで、西側に隣接するSB8001と近似する。検出面から40～50cm弱の掘り込みを持ち、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、所々に炭化物が認められ、南西部には炭化物を含む焼土層のブロックがあり、それ以外にも炭化物が所々に認められた。柱穴はなく、南西隅近くのピットP1は貯蔵穴と考えられる。

**カマド：**カマドは北壁のほぼ中央部に構築される。礫を芯材とし粘土で覆った構造で、袖及び天井部が一部遺存する。天井部の粘土が若干住居外に張出す程度で、燃焼部はほぼ住居内に収まり煙道は短く住居外に出る。袖や天井を覆う粘土は、浅間第一軽石流の表層下にみられる粘性が強く赤化変性した部分を用いたものと思われる。支脚石がカマド中央部に残る。カマド内には灰層や焼土層が堆積するが、火床の被熱は弱い。

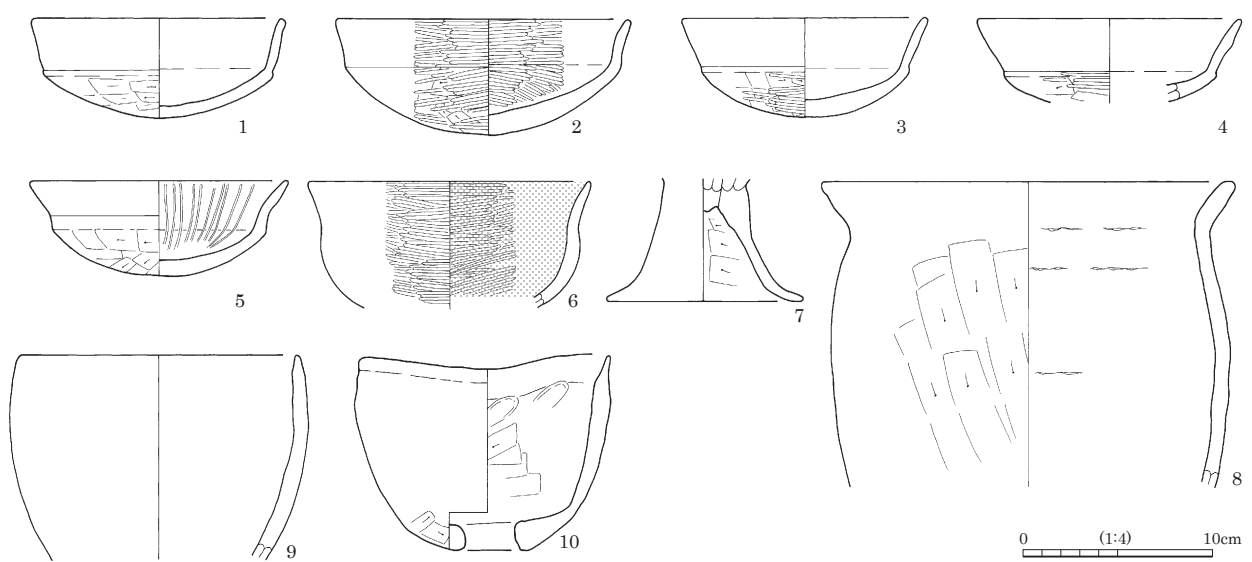
**遺物分布：**カマド内から坏（4）・甗（9）や高坏（7）などが出土。7の高坏は支脚石に乗るように出土したが、被熱などはなく他の土器と同様に廃棄されたものと言えよう。10の甗はカマド横の床面出土。また、貯蔵穴の上面及び埋土上部から坏（1・3・5）が出土。

**出土遺物：**1・2は坏身中程に稜を持ち、口縁部が直線的に立ち上がる坏。底部は丸底気味となる。2は胎土が白色で他の坏と異なり、大型品で内外面ミガキ。3～5は坏身中程の稜から口縁部が外反気味に開く。5は内面に放射状のミガキがみられる。6は深い坏身で、中程でやや括れ口縁部が弱く外反する。ミガキが顕著で、内面黒色処理。7は太く短い高坏脚で裾が広がる。8は口縁下で短く外反する長胴甕。胴部はケズリ。9・10は甗。内湾・直立する深い鉢状で、口縁部がやや薄手となる。底面に大きな穿孔を持つ。胎土・焼成がやや粗い。

**時期：**出土遺物から古墳時代後期。西に隣接するSB8001と住居構造・出土遺物が類似しており同時存在の可能性はある。



- 1 黒色 (10YR2/1) 粘性・しまりのある砂質土。黄褐色土粒含む。
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) しまりのある砂質土。黄褐色土粒多量に混じる。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘性強く、しまりの弱い砂質土。黄褐色土をブロック状に含む。
- 4 褐色 (10YR4/4) 粘性あり、しまりの弱い砂質土。黄褐色土粒多量に混じる。
- 5 暗褐色 (10YR3/3) 粘性ややあり、しまりの弱い砂質土。
- 6 赤褐色 焼土層で炭層をブロック状に含む。
- 7 褐色 (10YR4/4) 粘性弱く、しまりも非常に弱い砂質土。上面及び層中より土器出土。
- 8 暗褐色 (10YR3/3) しまりの非常に弱い砂質土。
- 9 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘性・しまりの強い砂質土。天井部の崩落土含む。
- 10 暗褐色 (10YR3/3) 粘性・しまりのある砂質土。軽石粒含む。
- 11 黒褐色 (10YR3/2) しまりの強い砂質土。焼土粒・軽石粒含む。
- 12 明赤褐色 (5YR5/6) 焼土層。
- 13 暗褐色 (10YR3/3) しまりの弱い砂質土。軽石粒含む。
- 14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性強く、しまりの弱い灰層。
- 15 にぶい黄褐色 (10YR6/4) しまりの強いシルト～粘土。
- 16 橙色 (5YR6/8) しまりの強いシルト～粘土。被熱で焼けている。
- 17 明赤褐色 (5YR5/6) しまりの強いシルト～粘土。天井部の崩落土か。
- 18 暗褐色 (10YR3/3) 粘性・しまりの弱い砂質土。
- 19 明赤褐色 (5YR5/6) しまりの非常に強い砂質シルト。
- 20 暗褐色 (10YR3/3) 住居掘り方。



第80図 SB8003 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他	
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器								
個体	6	2						1	7	1	26		2		1	1		
重量(g)	1128								225	1173			737		6	32		

第59表 SB8003 出土土器集計表

SB8002 [第81・82図 PL16]

**位置：**8区の緩斜面上部平坦面。V P 18・23グリッド。北西部1/4程度が中部横断自動車道用地にかかり、主要部は南側の市道部分となり、佐久市教委が調査している（佐久市教委 2009）。本報告では佐久市教委の報告書より一部転載して、遺構図面や出土遺物を掲載した。

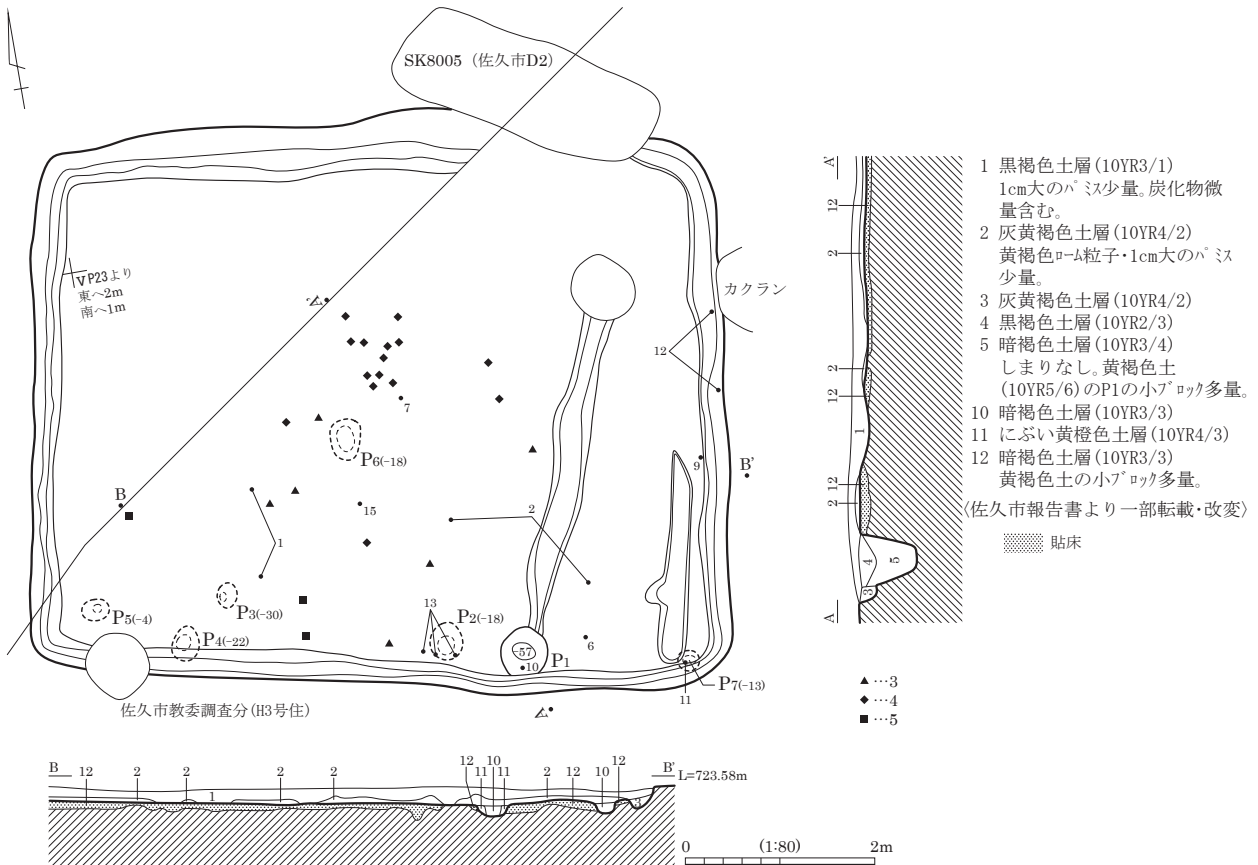
**検出：**本線の調査に先立った市道部の調査で本線部分も含めて遺構全体を調査（佐久市教委報告のH3号住居址）していたため、本線部の調査では埋め戻された状況を確認した。北東部がSK8005（佐久市教委報告のD2土坑）と重複する。佐久市教委の報告によると、埋土出土の遺物から土坑が住居跡より新しいとするが、土坑は形態から縄文時代の陥穴土坑と考えられるため、切り合い関係は逆転すると思われる。

**埋土：**佐久市教委の報告によるとほとんど黒褐色土の単層で、床面直上は灰黄褐色土となる。

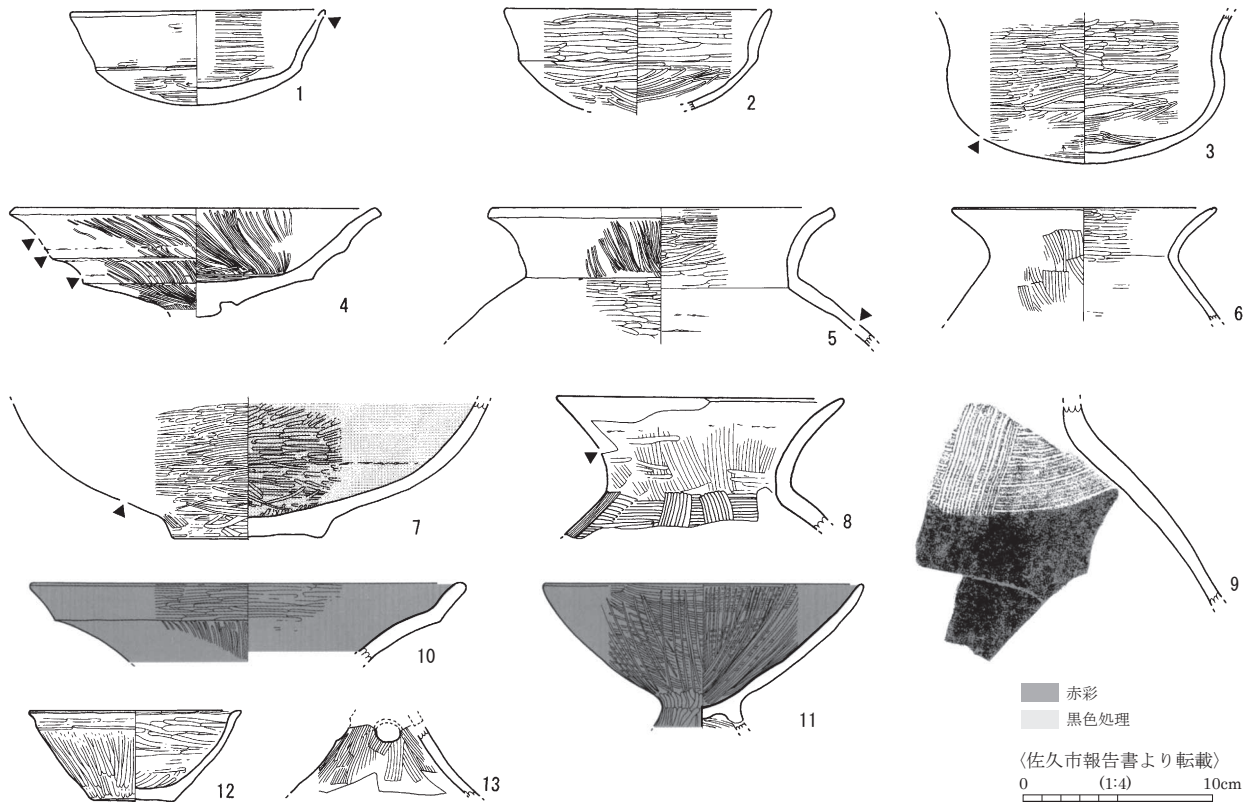
**構造：**市教委調査分を合わせた全体では南北5.20m、東西6.78mの東西に長い長方形を呈する。主軸はN10°E。本線部では壁高20～30cm弱で床面は暗褐色土の軟らかい貼床。ピットは確認されず壁下に周溝が廻る。ピットは佐久市教委分で掘り方での検出も含め7基検出されたが、柱穴配置などは不明。周溝は全体として壁下を全周するが、住居東側では内側で方向のずれた周溝も検出されている。本線部分で確認された周溝は北壁東側ではやや内側に向いており、市教委調査の内側の周溝につながるようにもみえる。遺物の分布状況も合わせると、本遺構は南北をほぼ同一にして東西に2軒の住居跡が重複していた可能性も考えられるが確証はない。

**炉・カマド：**佐久市教委調査分も含めて炉やカマドは検出されていない。

**遺物分布：**佐久市教委の報告によると、弥生時代終末の遺物は住居東側にまとまり、一部床下検出のピットから出土している。古墳時代中期の遺物はほとんどが内側周溝の西側に広がっている。古墳時代後期の遺物も内側周溝の西側に広がるが、住居にカマドが存在しないことや、すぐ西側に古墳時代後期の住居跡



第81図 SB8002 遺構図



第82図 SB8002 遺物図

が存在することから、その後に周辺から流入した可能性が考えられる。

**出土遺物：**佐久市教委の報告では弥生時代終末（8～13）、古墳時代中期（4～7）、古墳時代後期（1～3）の3時期の遺物が掲載され、住居の時期決定は保留している。

**時期：**佐久市教委報告のとおり時期決定は難しいが、出土遺物の分布状況から弥生時代終末と古墳時代中期の2時期の住居跡が重なっていた可能性も考えられる。

#### SB1002 [第83図 PL10・40]

**位置：**1区の高位平坦面。ⅢD 14・15・19・20グリッド。南東15m程に時期不詳のSB1001がある。東側に隣接する鎌田原遺跡のSB13とは約70mの距離があるが、間の国道141BP地点（佐久市教委 1992）でも同時期の住居跡が検出されており、40m程の間隔で住居跡が存在することとなる。

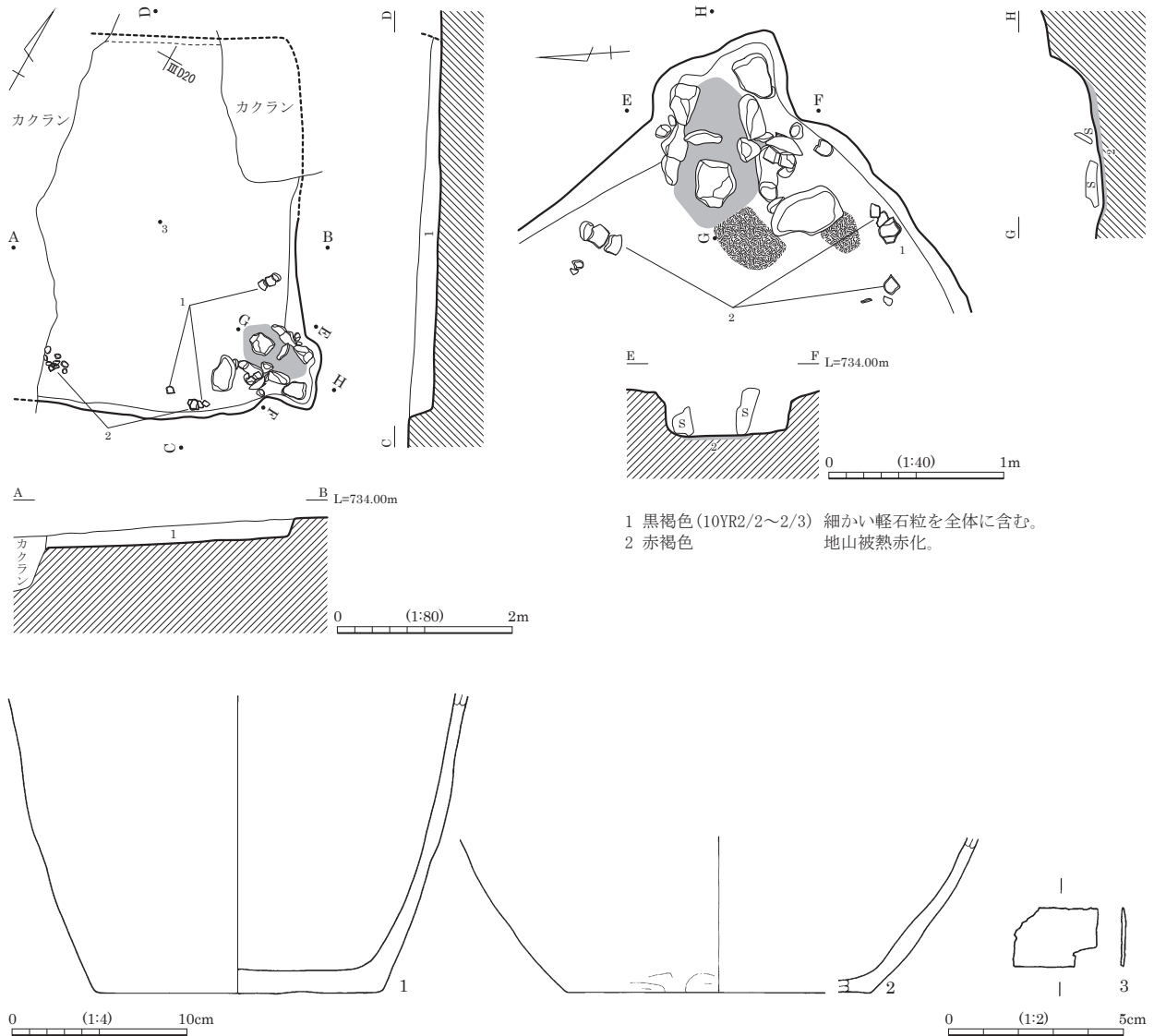
**検出：**調査地区は現代の攪乱が著しく、表土剥ぎの後、攪乱部を取り除きながら遺構検出を進めたところ黒褐色土の広がり確認され、南東隅に焼土やカマド構築材と思われる礫が認められたことから、住居跡と判断した。西側や北側は大きく攪乱される。

**埋土：**床面付近のみ残存し、黒褐色土の単層。

**構造：**攪乱により全体の形状や規模は不明だが、一辺4m程の方形を呈すると考えられる。主軸はN 24° W程度。立ち上がりは南東部のみが確認され、壁高はカマド付近で32cmを測るが他では浅く壁も不明瞭となる。地山の黄褐色土を床面とし、軟弱で凹凸が認められる。検出範囲内ではピットは認められない。

**カマド：**南東隅あり、住居外に張り出す石組みのカマド。袖石の一部が旧状を残すが、他の構築材はカマド内や周辺に散在する。住居廃絶時にカマドも破棄したものと思われる。カマド底面は被熱赤化し、前面には炭層がブロック状に認められた。

**遺物分布：**カマド周辺の床面から土師器羽釜が散漫に出土。鉄製品もカマド手前の床面直上出土。



第83図 SB1002 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	1								2	11							
重量(g)	4									1600							

第60表 SB1002 出土土器集計表

**出土遺物：**1・2とも羽釜の底部で、厚手で非ロクロ成形。3は薄い板状の不明鉄製品。

**時期：**出土遺物や住居形態から平安時代後期 11 世紀後半から 12 世紀前半。

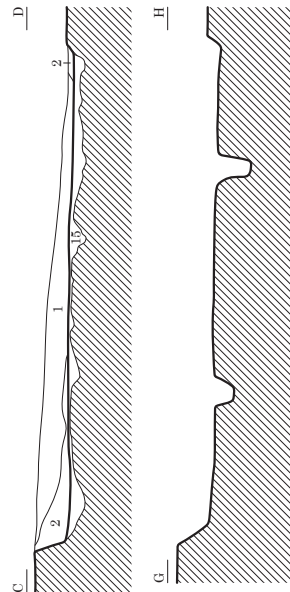
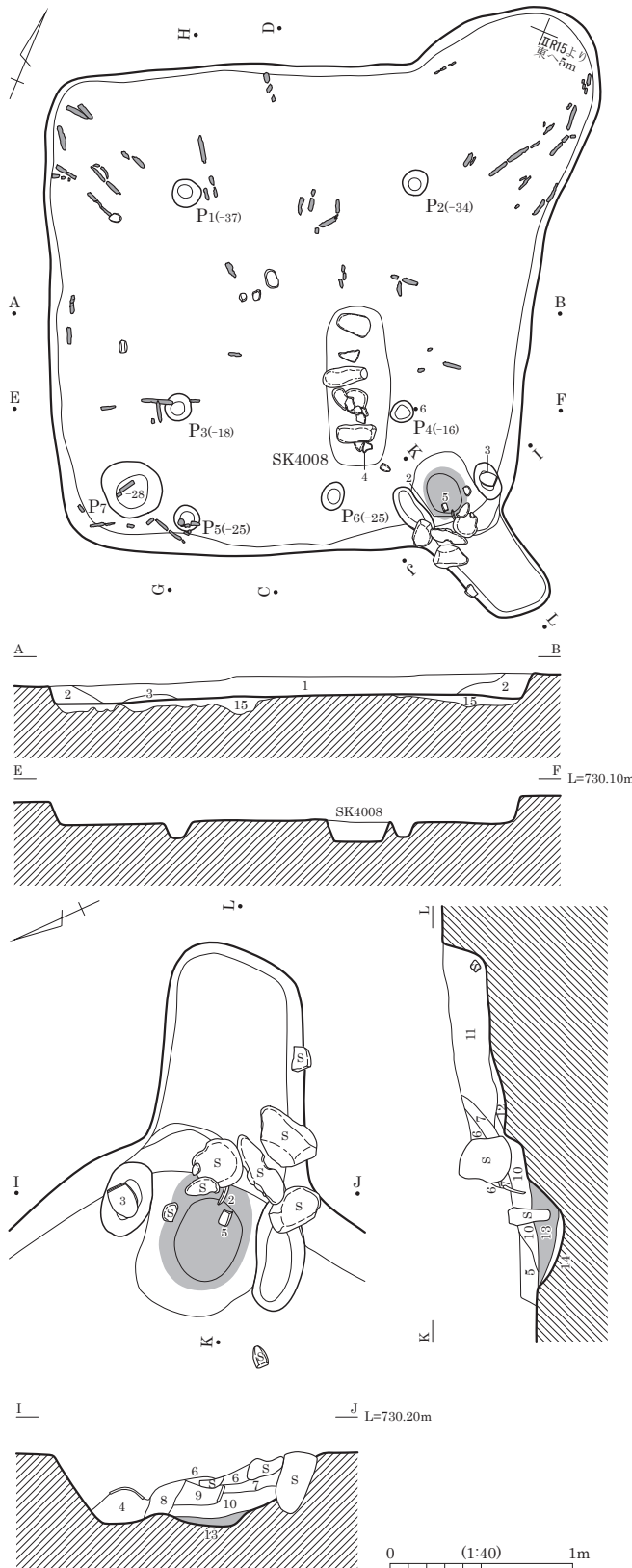
**SB4001** [第 84・85 図 PL10・38]

**位置：**4 区の高位平坦面。II R 10・15 グリッド。周囲に同時期の住居跡は少なく、30～60 m 程離れて散在する状況を示す。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面の黄褐色土層で黒色土の落ち込みとして検出。住居内に SK4008 が重なる。土坑上面は住居床面と同一レベルで、カマド構築材と思われる同質で被熱した大形礫で覆われていることから住居廃絶時または直後に構築されたものと考えられる。

**埋土：**壁際は周囲からの流入と考えられる暗褐色土となるが、中央部は黒色土となる。自然堆積。

**構造：**南北 5.16 m、東西 5.14 m の方形を呈し、北東隅に楕円形の土坑状張り出し部を持つ。東壁は張り

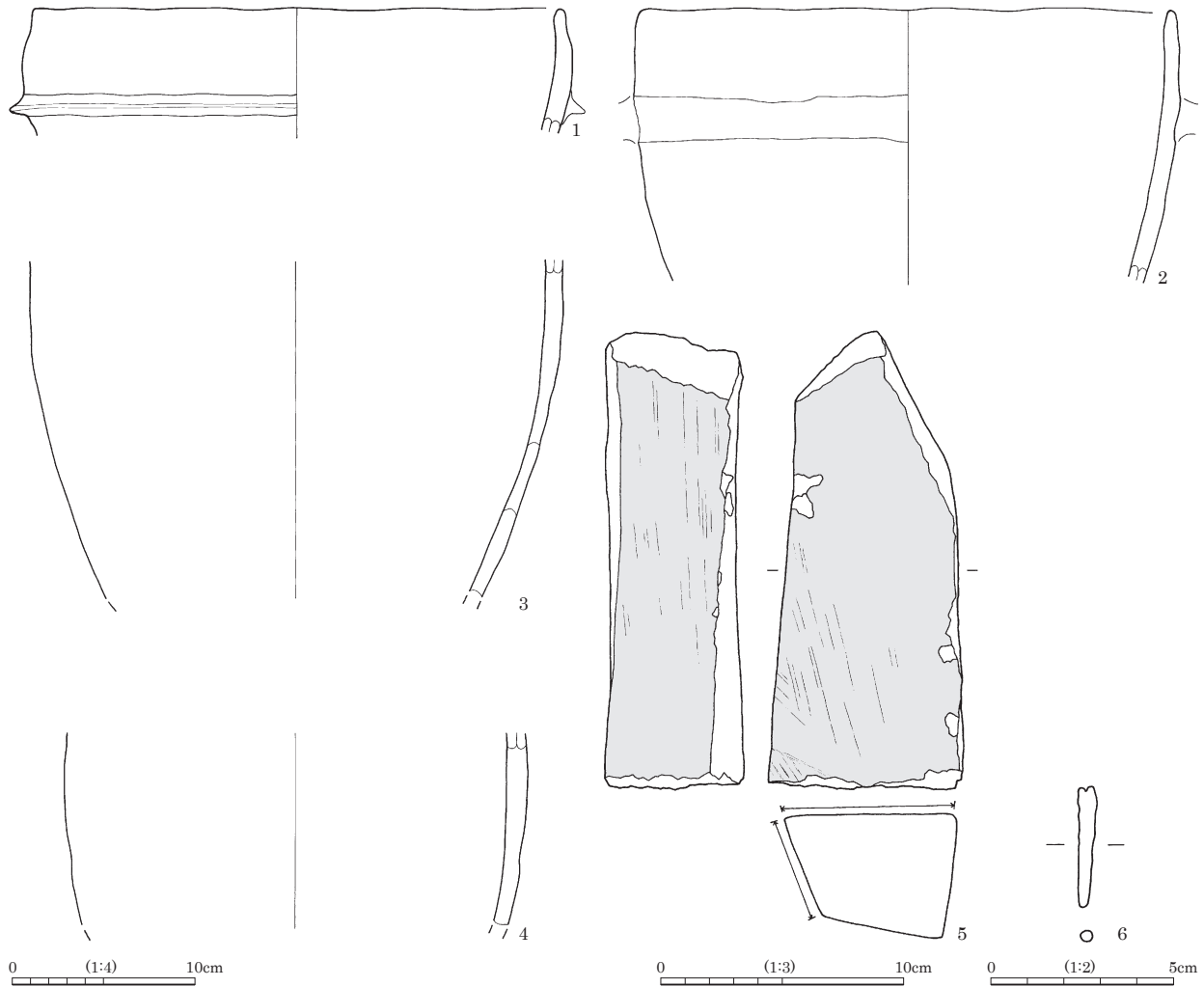


- 1 黒色 (10YR2/1) 軽石含む。焼土粒微量含む。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) しまりややあり。軽石含む、焼土粒含まない。
- 3 黄褐色 (10YR5/6) 黄褐色土ブロック含む。軽石多量。
- 4 黒色 (10YR2/1) 1層と同質。炭化物粒含む。カマド廃絶後の堆積土。
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 赤化粘土粒・ブロック含む。カマド廃絶後の堆積土。
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 赤化した軽石粒多量に含む。
- 7 にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 赤化した天井崩落土ブロック含む、6層との混土层。
- 8 橙色 (2.5YR6/6) 粘土層。袖構築土が崩落した土層と考えられる。
- 9 明赤褐色 (2.5YR5/8) カマド天井部の崩落土。赤化。
- 10 黒褐色 (10YR3/1) 赤化粘土粒・軽石粒多量に含む。天井崩落前の流入土。
- 11 黒色 (10YR2/1) 黄褐色土ブロック含む、赤化軽石粒は微量。煙道からの流入土。
- 12 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土ブロック多量に含む。
- 13 明赤褐色 (2.5YR5/8) 均質で軽石粒などをほとんど含まない焼土層。
- 14 淡橙色 (5YR8/4) 乳白色粘土と焼土の混土层。カマド燃焼部に盛り上がるように堆積。カマド構築時の埋め戻し土か。
- 15 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土ブロック多量に含む。住居掘り方、貼床層。

第84図 SB4001 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	10						1		3	5	4	28			1		
重量(g)	80						16		49	206	1863				44	35	

第61表 SB4001 出土土器集計表



第85図 SB4001 遺物図

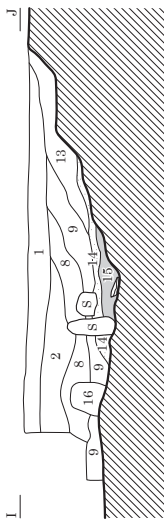
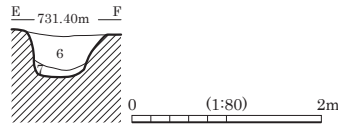
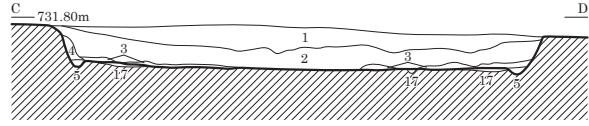
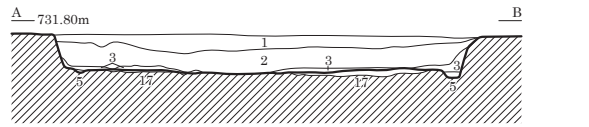
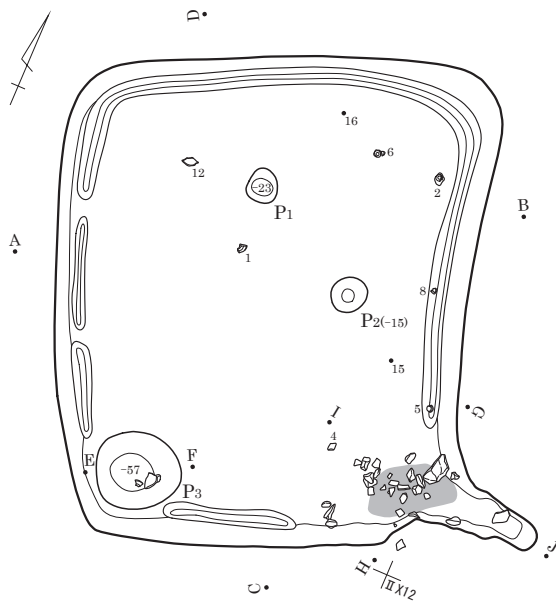
出し部に向かい開き気味となる。主軸はN 25° Wで周辺の同時期の住居跡と類似する。壁高は20～30cm程度でほぼ垂直に立ち上がる。床面に明瞭な硬化部分はなく、北東部の張り出し部も同じレベルとなる。床面上には細長い炭化材が遺存し、住居中央部に向かう方向のものが多し。なお、北東隅の土坑状張り出し部にも住居内からつながる炭化材があり、張り出しが住居に伴う施設であることが理解できる。柱穴はP 1～P 4の4本で北側の2本が南側より深く掘られている。南西隅付近のP 7は貯蔵穴で、南壁近くのP 5・P 6は入口施設に関するものと思われる。

**カマド：**南東隅で煙道部が住居外に大きく張り出して構築される。大形の礫を芯材とし粘土で覆った構造と考えられる。袖石は右袖の1個が残るのみであるが、石の抜き取り痕から数個の礫で構成されたものと推測される。カマド内や周辺には同質の大形礫が散在し、燃焼部上部には構築粘土材の崩落土がみられた。燃焼部は被熱赤化し、支脚石は右側に寄っている。煙道は燃焼部より一段高く、幅広く住居外に延びる。

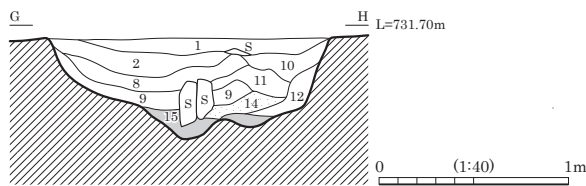
**遺物分布：**カマド周辺から羽釜片が多く出土。砥石（5）を支脚として立てている。カマド前面の埋土上部から鉄製品が1点出土。

**出土遺物：**土器で図化可能なものは羽釜のみである。1・2は口縁部が直立し、鏝が口縁下を全周するもので、2は鏝が剥落している。羽釜はいずれも非ロクロ成形で、4の下端は粘土帯で割れ偽口縁となっている。5は安山岩の砥石で、四角柱の広い平坦面と側面を砥面として使用しており、光沢を持つ部分もある。全体に弱く被熱する。6は釘と思われる鉄製品。

**時期：**出土遺物から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。

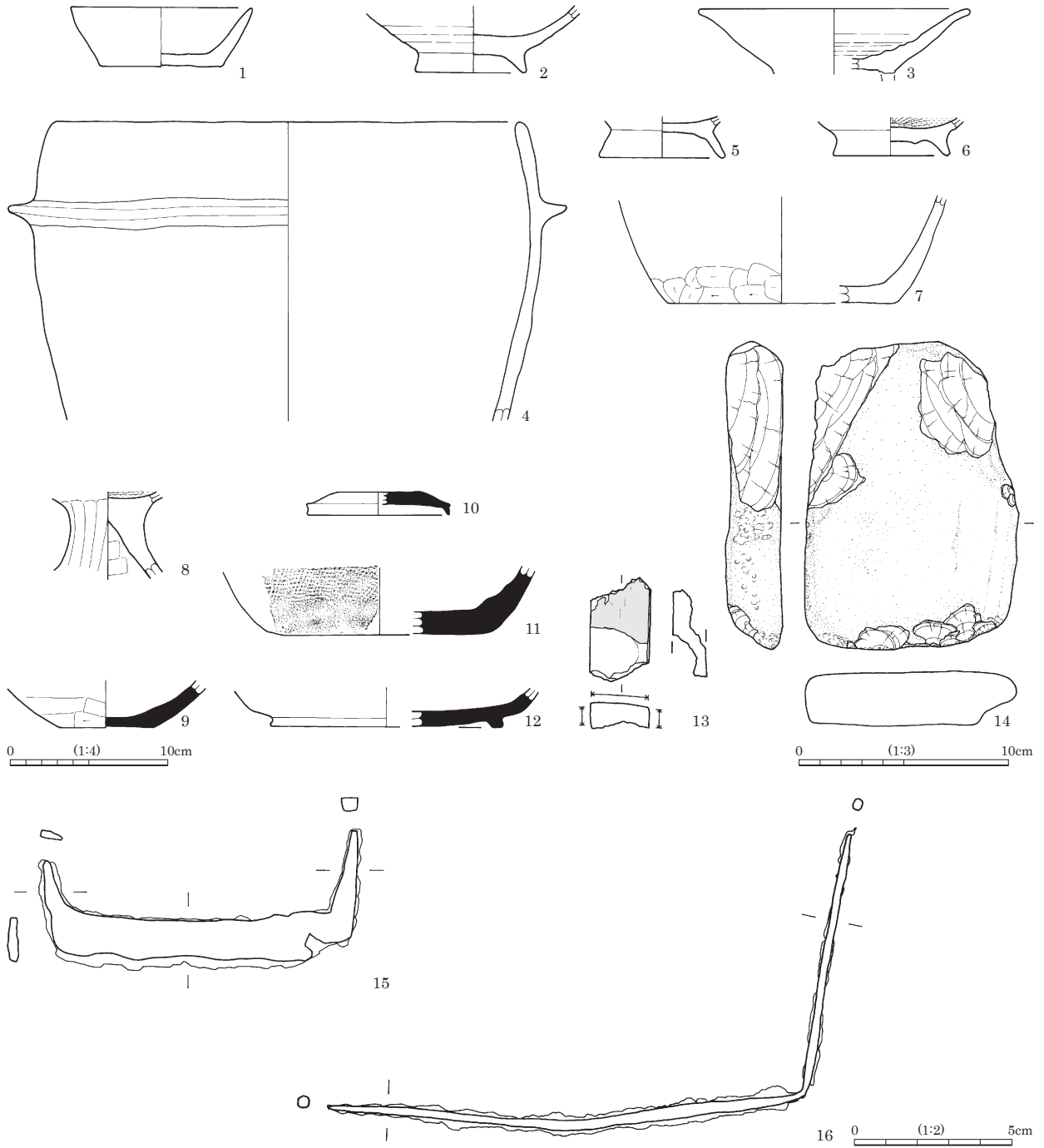


- |                     |                                  |
|---------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 (10YR2/2)     | 粘性強。黄褐色土粒少量含む。                   |
| 2 暗褐色 (10YR3/3)     | 上部は粘性ややあり、下部は弱。軽石粒・黄褐色土ブロック少量含む。 |
| 3 黒褐色 (10YR2/2)     | しまり弱い。黄褐色土ブロック含む。                |
| 4 黄褐色 (10YR5/8)     | しまりやや弱い。壁の崩落土か。                  |
| 5 暗褐色 (10YR3/3)     | しまり弱い。周溝埋土。                      |
| 6 黒褐色 (10YR2/3)     | 炭化物多量に含む。                        |
| 7 褐色 (10YR4/4)      | 黄褐色土ブロック含む。                      |
| 8 黒褐色 (10YR3/2)     | 粘性ややあり。軽石粒・黄褐色土ブロック、炭化物粒少量含む。    |
| 9 黒褐色 (10YR2/2)     | 粘性ややあり。軽石粒・黄褐色土ブロック含む。           |
| 10 黒褐色 (10YR2/2)    | 粘性あり。炭化物含む。カマド構築材の一部か。           |
| 11 暗褐色 (7.5YR3/4)   | 粘性あり。黄褐色土ブロック含む。                 |
| 12 明褐色 (7.5YR5/6)   | 焼土含む。カマド構築材の崩れか。                 |
| 13 暗褐色 (10YR3/3)    | しまり弱い。黄褐色土ブロック含む。                |
| 14 にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 粘性ある灰層。                          |
| 15 明褐色 (7.5YR5/8)   | 焼土。                              |
| 16 明褐色 (7.5YR5/8)   | 粘性ややあり。カマド構築材の崩れか。               |
| 17 黒褐色 (10YR2/3)    | 住居掘り方。                           |



第86図 SB4005 遺構図





第87図 SB4005 遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他		
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器									
個体	2	12	1	1		3	3		1		7	2	8	2	66			3	
重量(g)	276	60				28	329	85			27	117	48	979	3030			141	8

第62表 SB4005 出土土器集計表

## SB4005 [第86・87図 PL11・33・34・39・40]

**位置：**4区の高位平坦面。ⅡX 06・07・11 グリッド。同時期の住居跡は散在的で、西側15m程にSB5013が北側30m程にSB4001がある。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色の落ち込みとして検出。北西隅がSB4003と重なり、本住居跡が切っている。

**埋土：**大きく上下に分けられ、上部は黒褐色土、下部は暗褐色土となる。床面直上には黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が部分的にみられ、壁際には壁の崩落土と考えられる黄褐色土が堆積する。

**構造：**南北4.50m、東西3.62mの南北に長い長方形を呈し、隅がやや丸まる。主軸はN 24°Wで周辺の同時期住居跡と類似する。壁高は30cm前後で、壁上部は崩落によりやや広がっている。地山の黄褐色土を床面とするが、部分的に浅い掘り方を持つ。ピットは3基確認され、南西隅のP 3は貯蔵穴で、P 1・P 2は柱穴かどうか判断できない。一部途切れるが壁下を周溝が廻る。

**カマド：**住居南東隅に煙道部を大きく住居外へ張り出して構築される。大形の礫を芯材として構築するが、原位置を保つものは一部のみで、カマド周辺に構築材と思われる大形礫が散在する。右袖には構築材の粘土もみられる。火床は被熱赤化し、上面から煙道部には灰層が広がる。煙道は細長く、階段状となる。カマド右側の壁面が南側に短く張り出して被熱することが掘り方調査で確認され、カマドのつくり替えを行った可能性がある。

**遺物分布：**カマド周辺に散在する構築礫と共に羽釜片が散らばって出土。他の凶化遺物は埋土上部からの出土が多い。2点の鉄製品は床面直上出土。

**出土遺物：**1は土師器坏で底部から直線的に開く。底部は糸切りで、その後削っている。2・3・5は高台の付く土師器碗で、3は外側に大きく開く。6は黒色土器の碗。4・7は羽釜で、4はやや内湾する口縁下に鏝が廻る。非ロクロ成形。8は土師器高坏脚部で内面黒色処理される。10は須恵器の小型蓋片で、硯に転用されている。9・11・12は須恵器の甕や壺の底部片。13は流紋岩の砥石で、長方体の各面を使用している。14は安山岩の大形扁平礫を素材とした磨石で、平坦面が弱く磨れている。15は芋引き金具。16は紡錘車の軸で、途中で角に曲がる。

**時期：**出土遺物1～7と住居形態から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半と考えられる。8～12の土師器・須恵器はこれらより古い所産で、後の混入と考えたい。

## SB4007 [第88・89図 PL11・34・40]

**位置：**4区の高位平坦面。ⅡT 13・17・18 グリッド。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面の黄褐色土層で暗褐色土の落ち込みとして検出。同時期のSB4001やSB5013は本住居から50m程離れていて散漫な遺構分布を示す。

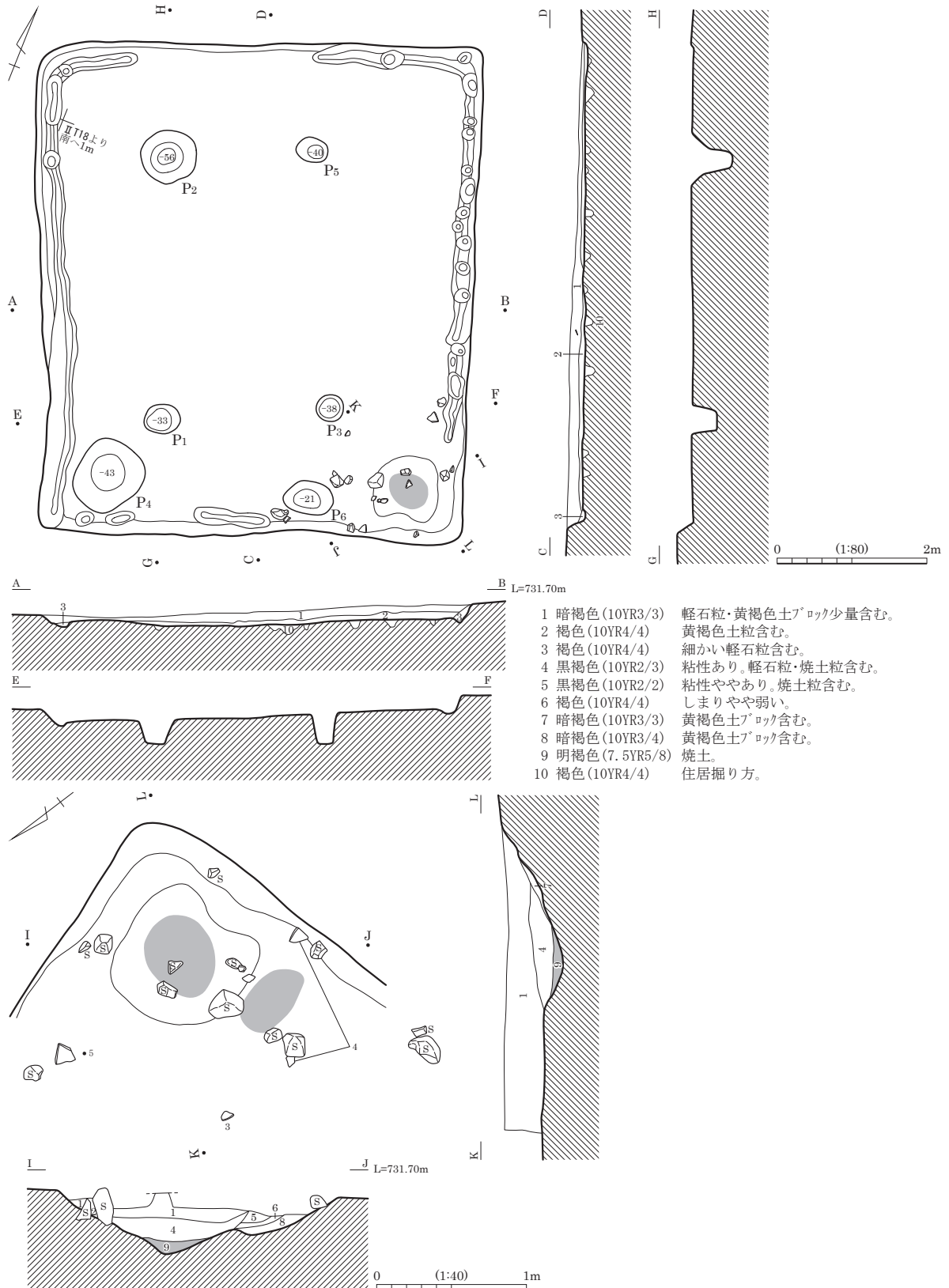
**埋土：**床面上部が浅く残るのみで、軽石粒や黄褐色土粒を含む暗褐色土や褐色土となる。

**構造：**南北6.18m、東西5.14mの南北に長い長方形を呈する。主軸はN 21°Wで周辺の同時期住居跡と類似する。東壁から南壁では20cm弱の壁高を測るが、北西部は削平により数cm程しか残っていない。黄褐色土を床面とし、貼り床は確認できなかった。壁下に周溝が廻り、西辺および北辺では緩やかなU字状であるのに対し、東辺の周溝内には小さなピットが連なるように認められ、住居の壁構造に関係するものか。P 1～P 3・P 5の4本が柱穴で、P 2は上部が広がっている。南西隅のP 4は貯蔵穴。P 6は入口部に関係するものか。

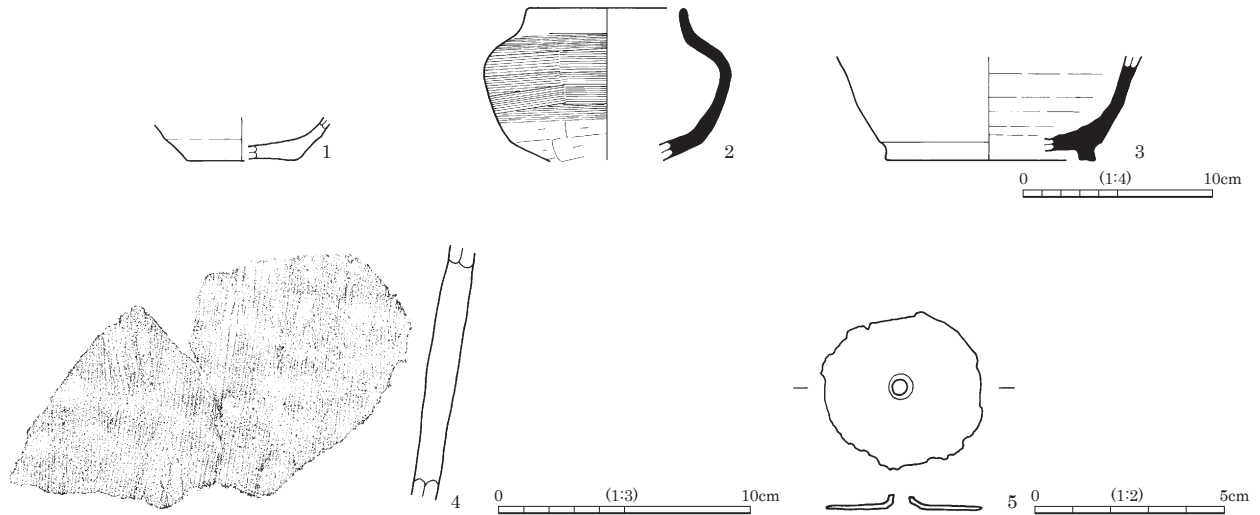
**カマド：**住居南東隅に構築される。カマド内や周辺には礫が散らばっていて、本来は礫を構築材として用いたカマドと考えられるが、壊されていて遺存状態は悪い。火床は被熱赤化し、煙道部はほとんど住居外

に張り出さない。カマド手前右側の住居南壁に寄った部分にも火床が認められたことから、カマドのつくり替えを行ったものと思われる。

**遺物分布：**埋土の残りも悪く、出土遺物は少ない。カマド周辺から羽釜片（4）が出土している。5の紡錘車はカマド北側の床面直上から出土。



第88図 SB4007 遺構図



第89図 SB4007 遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甔	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	1	12					1			9	1	15			4		
重量(g)	64		4				9			1150	530		197		50		

第63表 SB4007 出土土器集計表

**出土遺物：**1は土師器坏で、底部は回転糸切り。4は羽釜片でハケ調整痕がみられる。2は須恵器短頸壺で胴上半はカキ目。3は高台の付く壺底部片。5は鉄製紡錘車で、直径4.5cm程。

**時期：**カマド周辺から出土した羽釜や住居形態などから平安時代後期11世紀後半から12世紀前半と想定する。2・3の須恵器は7～8世紀頃のもので後の混入と考えたい。

**SB5001** [第90・91図 PL11・34・39・40]

**位置：**5区の高位平坦面。VI B 03・04・08・09グリッド。平安時代の住居跡は散在的な分布なのだが、本住居跡周辺では北側6m程にSB5006、北西20m程にSB5008があり、ややまとまった分布状況となる。

**検出：**平成20年度に工事用進入路として用地南端部分を調査した際、南東隅のカマド部が検出された。工事用道路は住居を避けて造成し、翌平成21年度の調査で全体を調査した。立木の根や攪乱の影響で平面プランの確認は難しかった。

**埋土：**埋土上部は木の根や耕作の影響を受けている。以下は黒色土や黒褐色土がレンズ状に堆積する。自然堆積と考えられる。全体に掘り方を持つ。

**構造：**南北4.44m、東西4.28mの方形を呈する。主軸はN19°Wで、周辺の同時期住居跡と類似する。壁高は10～15cmと浅く、壁面も不明瞭。カマド周辺の床面は堅緻に締まっているが、他は不明瞭で北西部は地山の浅間第一軽石流が赤化した粘質土に変性している。南西隅のP1は貯蔵穴。北西部のP3は柱穴と考えられるが、他の配置が不明。カマド手前のP2には炭片を含む粘質土が入る。

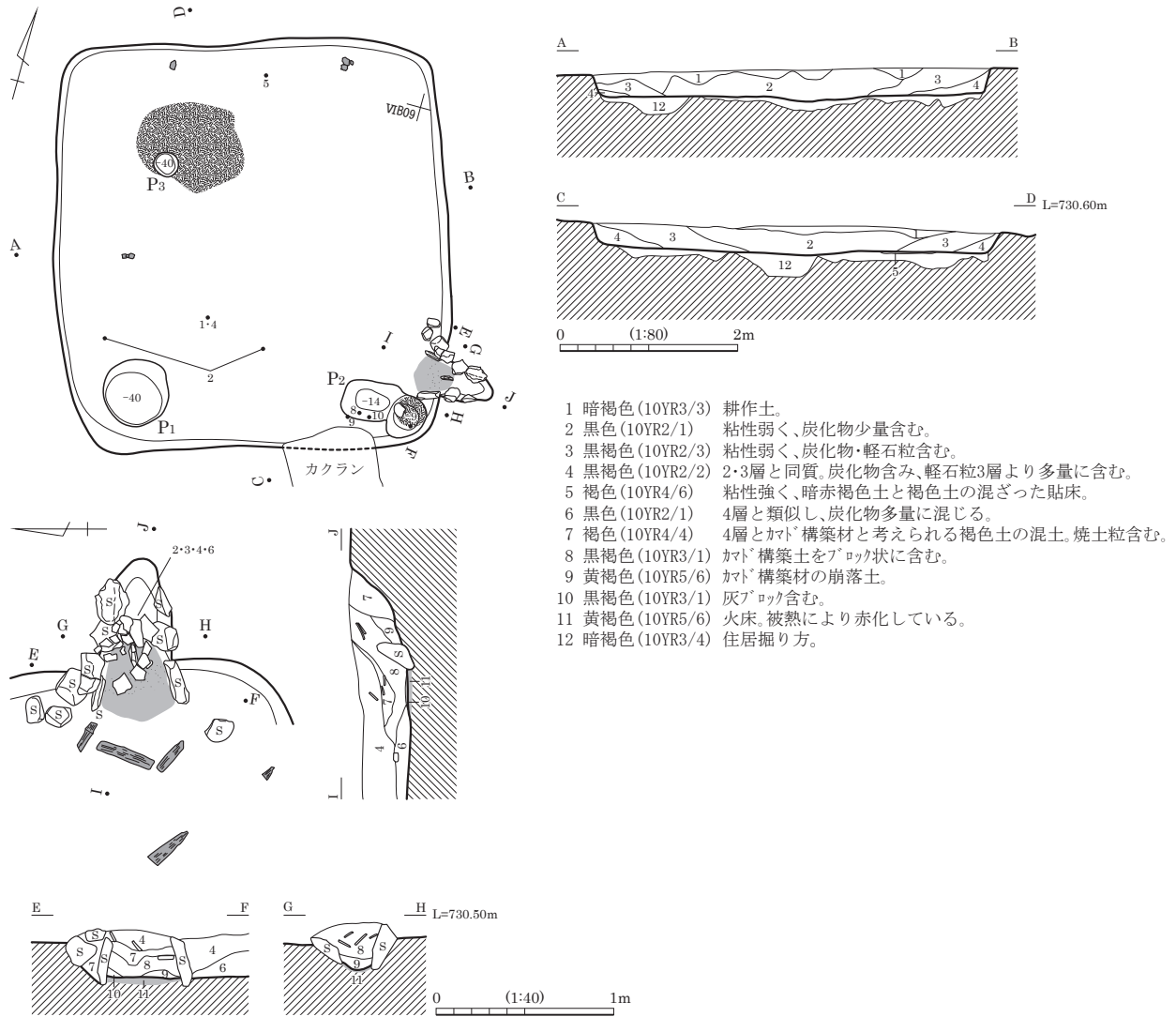
**カマド：**南東隅近くの東壁に構築され、煙道部は住居外に張り出す。天井石ははずされているが、袖石や支脚石などの石組が残り、比較的遺存状態が良い。火床は被熱赤化し、カマド周辺の床面には炭化材散在する。

**遺物分布：**羽釜(2・3)や甕(4)は割られて廃棄された状態でカマド内からまともに出土。5の壺は住居北側の埋土上部の出土。鉄製品7は北東部埋土中、8～10はカマド手前の床面直上の出土。

**出土遺物：**1は黒色土器埴。2・3は羽釜。やや内湾気味の口縁下に鑊が廻る。非ロクロ成形。4は羽釜

と同じ胎土の甕で、胴上部に最大径を持ち口縁部は短く外反する。厚手。5は湾曲外反する口縁部と底部片で、口縁部は赤彩されていたかもしれない。6は安山岩の扁平礫を用いた磨石で、中央部が凹み状となる。7は筒状の鉄製品で鉄鐸か。板状の鉄をまるめて仕上げている。8は細長い角柱の軸状鉄製品で鉄鐸の舌の可能性もあるが確定できない。9は丸い軸状の鉄製品。10は下端に木質の固定痕が残る鉄製品で鉄鎌の頸部か。

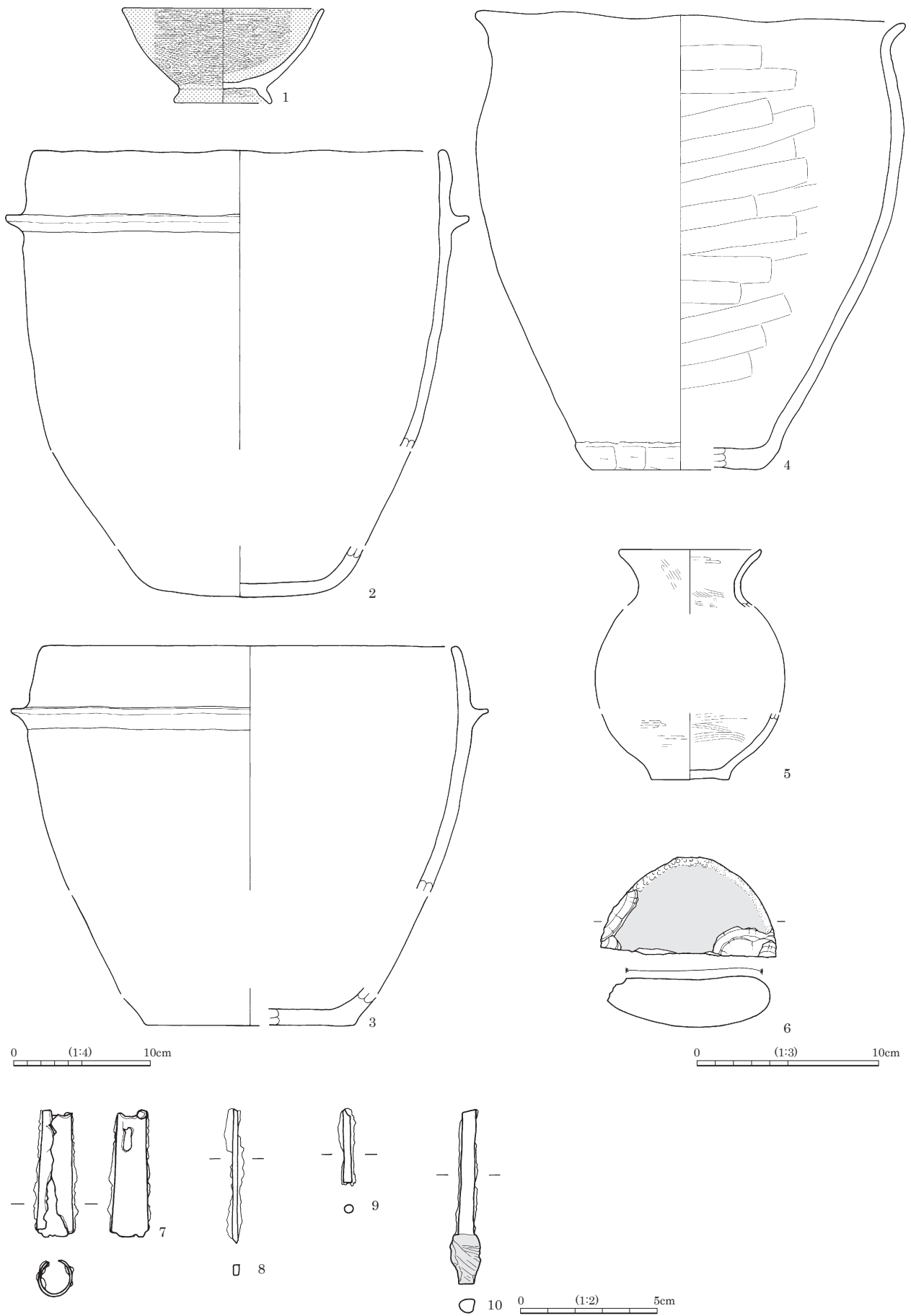
時期：出土遺物から平安時代後期 11 世紀後半から 12 世紀前半。5 は後の混入と考えられる。



第90図 SB5001 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他	
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器								
個体					1				1	25		2	16				20	
重量(g)					145				3207		2420						220	

第64表 SB5001 出土土器集計表



第91図 SB5001 遺物図

SB5006 [第92・93図 PL12・35・40]

**位置：**5区の高位平坦面で、6区低位面から伸びる浅い谷斜面に移行していく付近にあたる。ⅡV 23, VI B 03 グリッド。南側6m程にSB5001、西側20m程にSB5008があり、散漫な分布状態を示す平安時代の住居跡の中では比較的近接した状況を示す。

**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流の黄褐色土上面で黒褐色土の落ち込みとして検出したが、立木の根や西側から延びる浅い谷状地形の黒色土部分に重なるため、北辺から西辺を除き不明瞭である。

**埋土：**2層に分けられるがいずれも黒褐色土層で、下部や壁際では黄褐色土粒の混入が多い。北東隅の張り出し部も住居埋土と同一。全体に掘り方を持つ。

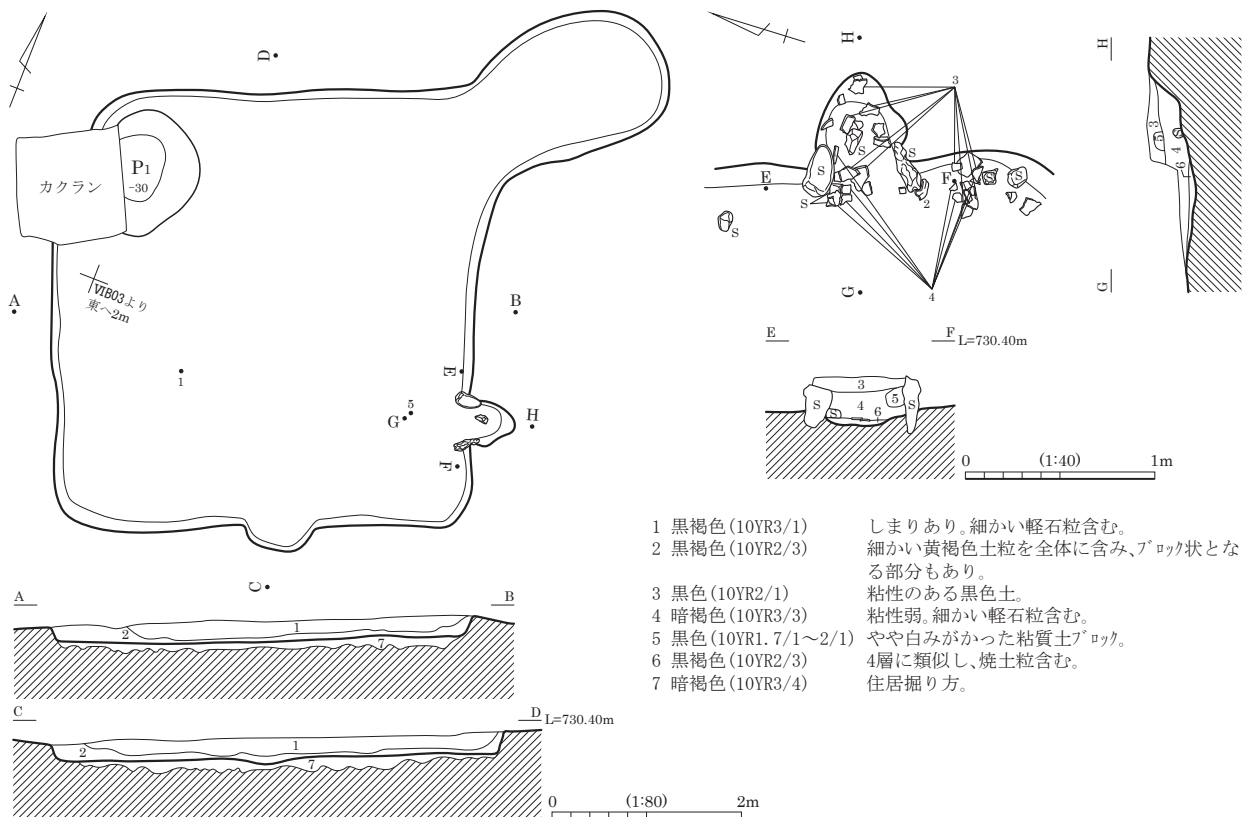
**構造：**南北4.40m、東西4.30mの方形を呈し、北東隅に楕円形の土坑状張り出し部を持つ。主軸はN 22° Wで周辺の同時期住居跡と類似する。検出面からの掘り込みは浅く10～20cm程度で、壁面も全体に不明瞭となる。床面は掘り方を埋め戻した暗褐色土で、堅く踏み固められた状況ではない。北東部張り出し部も住居床面と同一レベル。柱穴は確認されず、北西隅に大形のピットが1基検出された。

**カマド：**南東隅近くの東壁に石組みで構築される。住居の壁部に大形礫を用いた袖石があり、礫の脇には粘質土もブロック状に遺存している。支脚石は住居壁よりやや張り出す位置に残る。壁下の火床面の被熱赤化は弱く、カマド埋土にも焼土や灰層などは認められない。

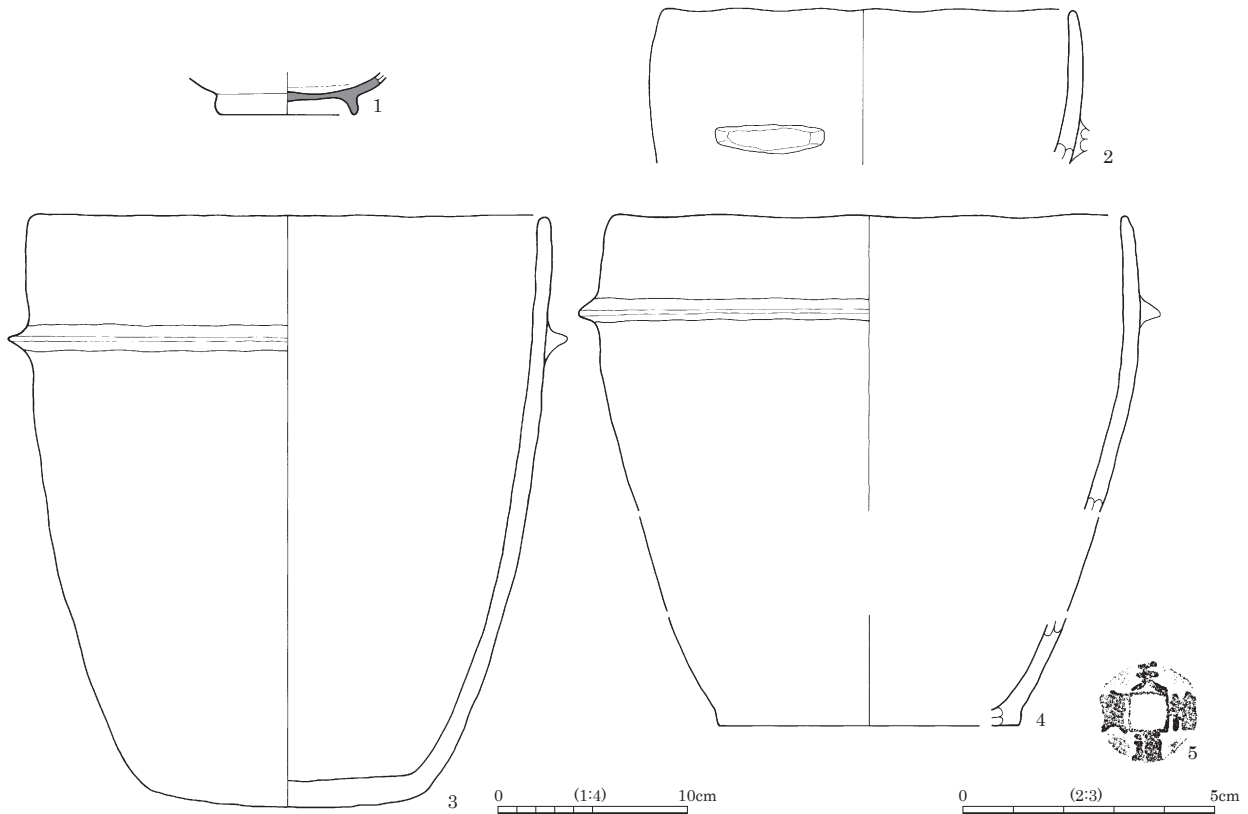
**遺物分布：**出土遺物は少ない。羽釜(2～4)はカマド内や周辺に散在して出土。灰釉陶器(1)は中央部、銭貨(5)はカマド手前の埋土から出土。

**出土遺物：**1は灰釉陶器の高台付碗で、光ヶ丘窯式。2～4は羽釜。2はやや内湾する口縁で、短い鏝が把手状に付く。3は直立、4はやや内湾する口縁下に鏝が全周する。5は北宋銭の天禧通宝で、初鑄は1017年。

**時期：**2～4の出土遺物や銭貨の時期、住居形態から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。1の灰釉陶器は後の混入と考えられる。



第92図 SB5006 遺構図



第93図 SB5006 遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体			9	1		1					3	32			8	143	
重量(g)			37	24		16					2982			110	1118		

第65表 SB5006 出土土器集計表

SB5008 [第94図 PL12・35・40]

**位置：**5区の高位平坦面で、6区低位面から伸びる浅い谷斜面に移行していく付近にあたる。VI A 05, B 01 グリッド。東側 20 m程に同時期のSB5001とSB5006がある。

**検出：**表土を剥いだ状況では谷部に堆積する黒色土と重なり分かり難かったが、地形に合わせて浅間第一軽石流上面の黄褐色土まで下げた段階で、黒褐色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**壁際に黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土、中央部は黒褐色土の自然堆積。

**構造：**南北 5.64 m、東西 4.56 mの南北に長い長方形を呈する。主軸はN 9° Wで、周辺の同時期住居とやや方向が異なる。壁は北壁から東壁が明瞭で壁高も 30cm程を測るが、南壁や西壁が谷部側にあたり遺存が悪い。床面は堅緻ではない。P 1は床面精査時に確認、他は床下調査で検出された。

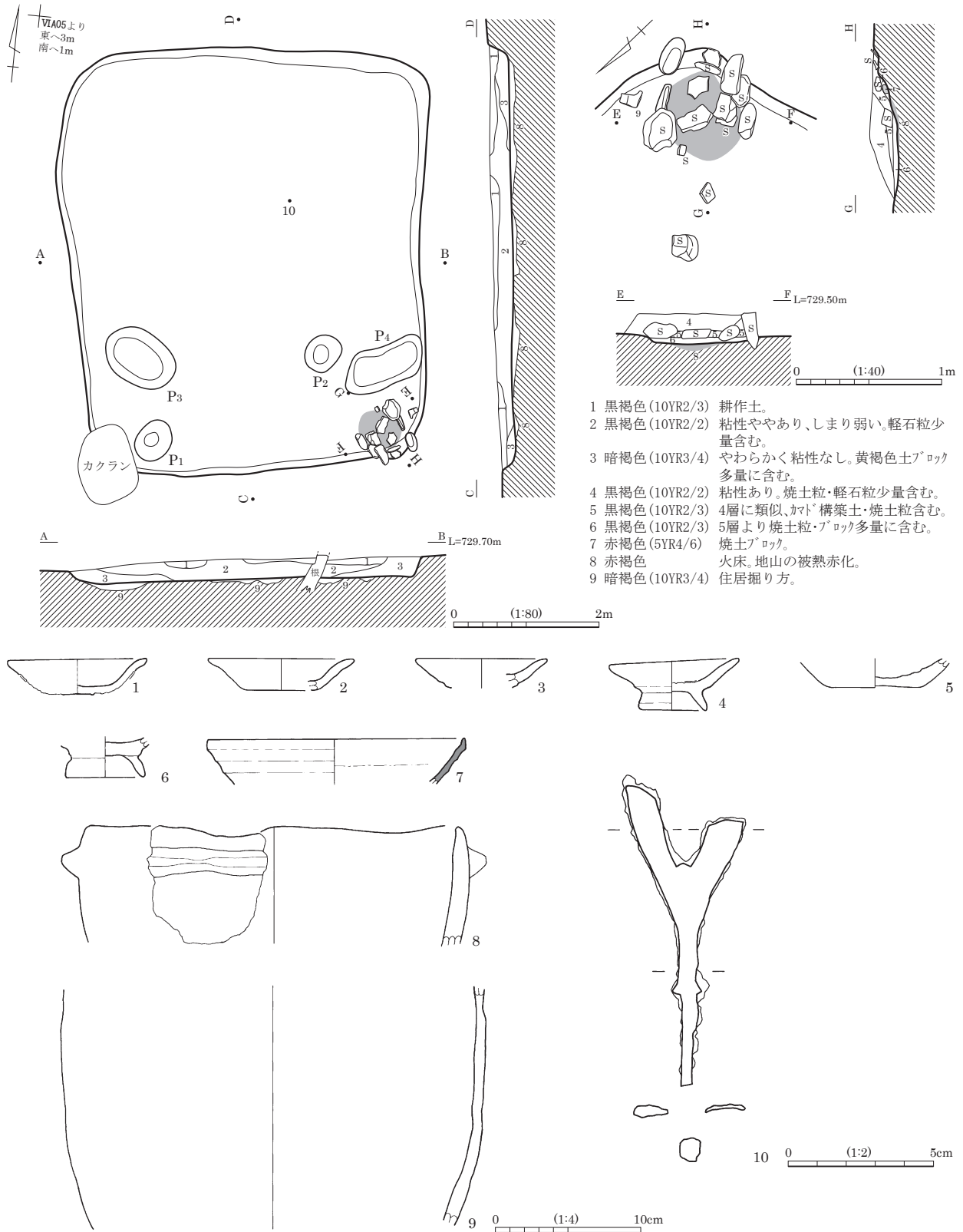
**カマド：**南東隅にあり、大形礫を用いて構築している。右側の袖石は原位置を保つが、他はカマド内や周辺に散らばる。壁下の火床は被熱赤化する。

**遺物分布：**出土遺物は小片が多い。10の鉄鏃は住居中央部床面直上出土。

**出土遺物：**1～4は小型で浅い皿状の坏。4は高台が付く。5は坏底部で、底部糸切り。6は高台の付く埴か。7は灰釉陶器碗で、白磁玉縁碗の模倣。8の羽釜は先細りとなる口縁下に鏝が付く。9は羽釜胴部片。いずれも非ロクロ成形。10は雁股鏃の頭部で先端は欠損する。

**時期：**出土遺物や住居形態から平安時代後期 11世紀後半から 12世紀前半。





第94図 SB5008 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体	5	17		1	1				15	7	3	58			6	2	
重量(g)	296			82		6			94	295	1839			41	16		平安以降1(3g)

第66表 SB5008 出土土器集計表

SB5012 [第95図 PL13]

位置：5区の高位平坦面。ⅡV 03・04・08・09 グリッド。同時期の住居跡とは30～40 m程離れる。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で暗褐色土の落ち込みとして検出。北半は調査区外に広がる。

埋土：表土層下の埋土は薄く、軽石粒や黄褐色土ブロックなどを含む暗褐色土となる。

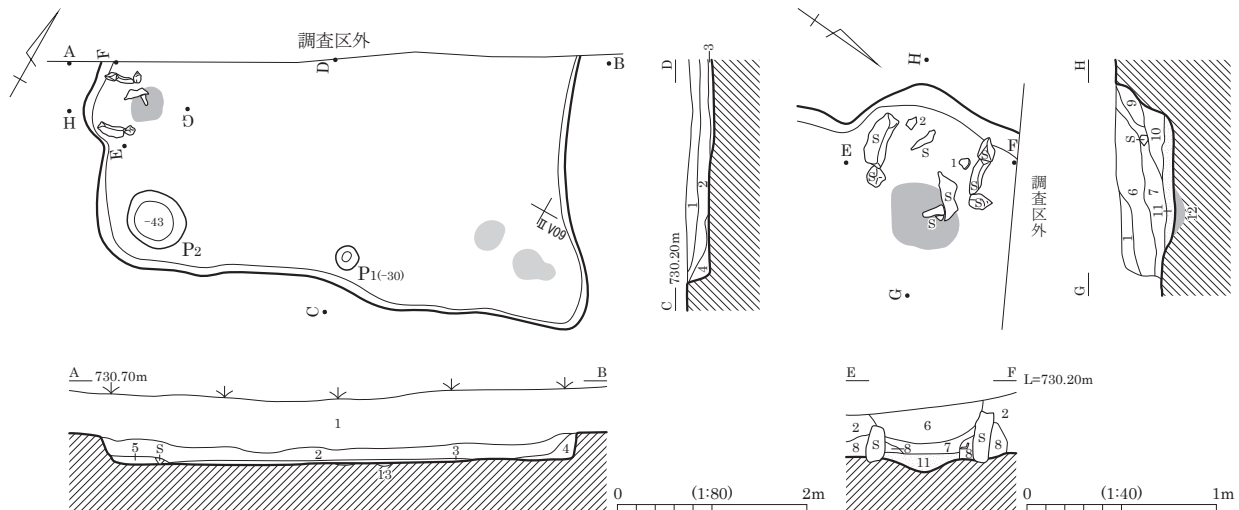
構造：方形を呈すると考えられ、東西4.82 mを測る。主軸はN 27° Wで周辺の同時期住居跡と類似する。壁高は25cm程度で、ほぼ垂直に立ち上がる。地山の黄褐色土を床面とする。ピットは2基確認され、南西隅のP2は貯蔵穴か。

カマド：西壁中央付近にあり、住居外にわずかに張り出す。両袖は扁平な礫を立て粘質土で覆っている。煙道部は燃焼部より一段高くなり、短い。火床上部には灰層が広がる。また、住居南東隅付近の床面にも焼土が検出され、住居のプランも外側に張り出していることから、この部分にもカマドが構築されていた可能性が考えられる。

遺物分布：埋土からの遺物出土は少なく、カマドの周囲からの出土が多い。

出土遺物：1・2は羽釜底部。2は鈍角に開き、厚手。他に鏝片がある。

時期：わずかな出土遺物から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。



- 1 黒褐色(10YR2/2) 微細な軽石粒含む、表土。
- 2 暗褐色(10YR3/3) 軽石粒・ブロック、炭化物含む。
- 3 黒褐色(10YR2/3) 小黄褐色土ブロック含む。
- 4 黄褐色(10YR5/6) 中小の黄褐色土ブロック含む。
- 5 褐色(7.5YR4/4) 中小の黄褐色土ブロック含む。
- 6 褐色(10YR4/4) 中小の黄褐色土ブロック多量に含む。
- 7 黒褐色(10YR2/2) やや砂質が強い、黄褐色土ブロック・炭化物含む。
- 8 暗褐色(10YR3/4) 礫や細かい黄褐色土ブロック多量に含む、カマド構築材の一部か。
- 9 褐色(10YR4/6) 中小の黄褐色土ブロック含む。
- 10 褐色(10YR4/4) 小黄褐色土ブロック含む。
- 11 にぶい黄橙色(10YR6/3) 灰層。
- 12 赤褐色(5YR4/8) 火床。地山の被熱赤化。
- 13 暗褐色(10YR3/4) 住居掘り方。



第95図 SB5012 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体			2						6		3	21					
重量(g)			40						40			628					87

第67表 SB5012 出土土器集計表

SB5013 [第96・97図 PL13・35・39]

位置：5区の高位平坦面。II W 19 グリッド。東側15 m程にSB4005があり、西側のSB5001などの同一時期住居跡とは40 m以上離れている。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面で黒褐色土の落ち込みとして検出。

埋土：壁際や床面近くは黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土で、上部は黒褐色土となる。自然堆積と考えられる。

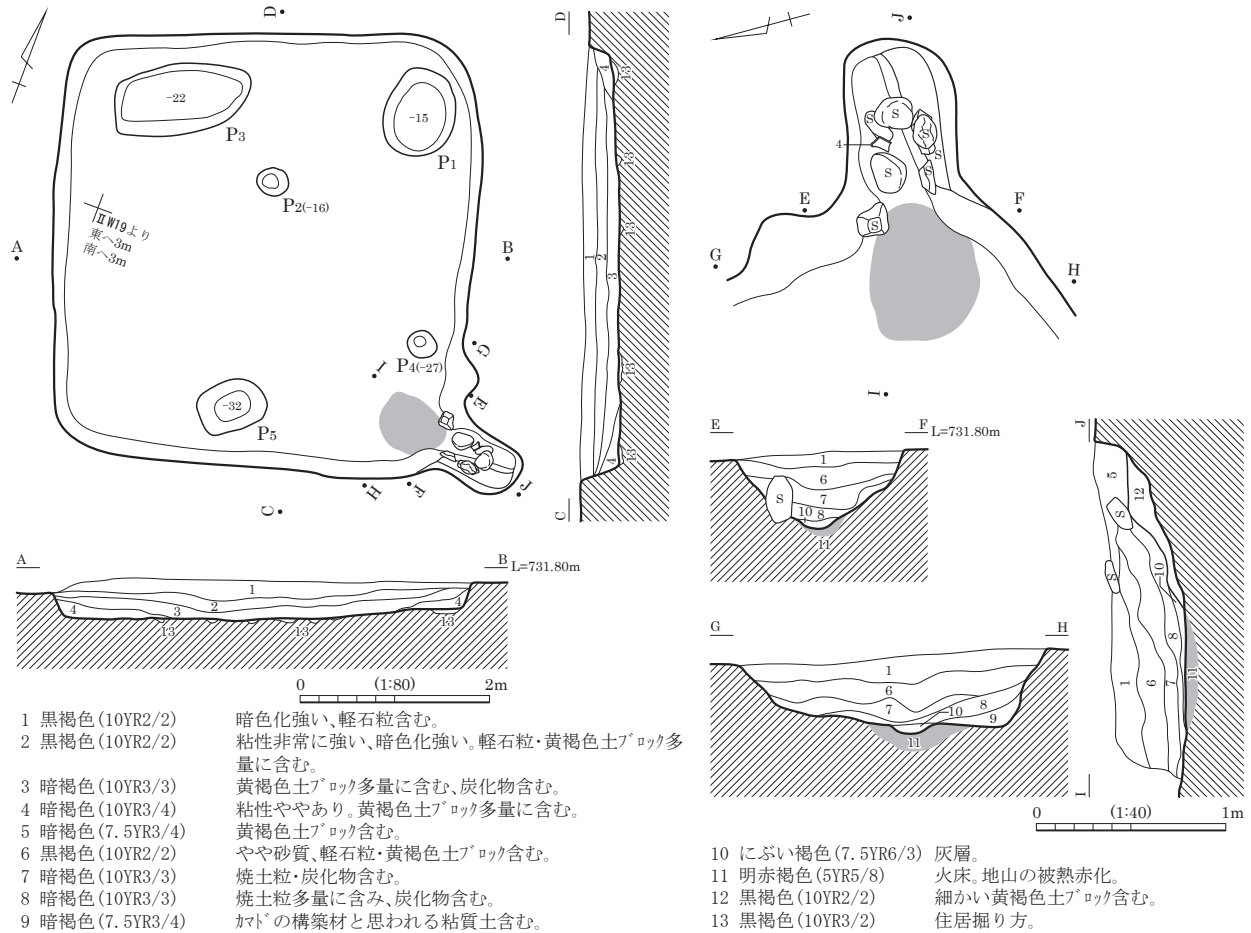
構造：南北4.34 m、東西4.16 mの方形を呈する。主軸はN 18° Wで、周辺の同時期住居跡と類似する。壁高は35cm程度で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。地山の黄褐色土を床面とし、貼り床はない。ピットは5基確認され、南西のP 5は貯蔵穴か。P 4は床下で確認。

カマド：南東隅で煙道部を住居外に大きく張り出して構築されている。燃焼部左奥側の袖石と右側煙道部に据えられた大形礫は原位置を保つ。これ以外は抜き取られ、カマド内や住居中央部に散在する。火床上部には灰層が広がる。

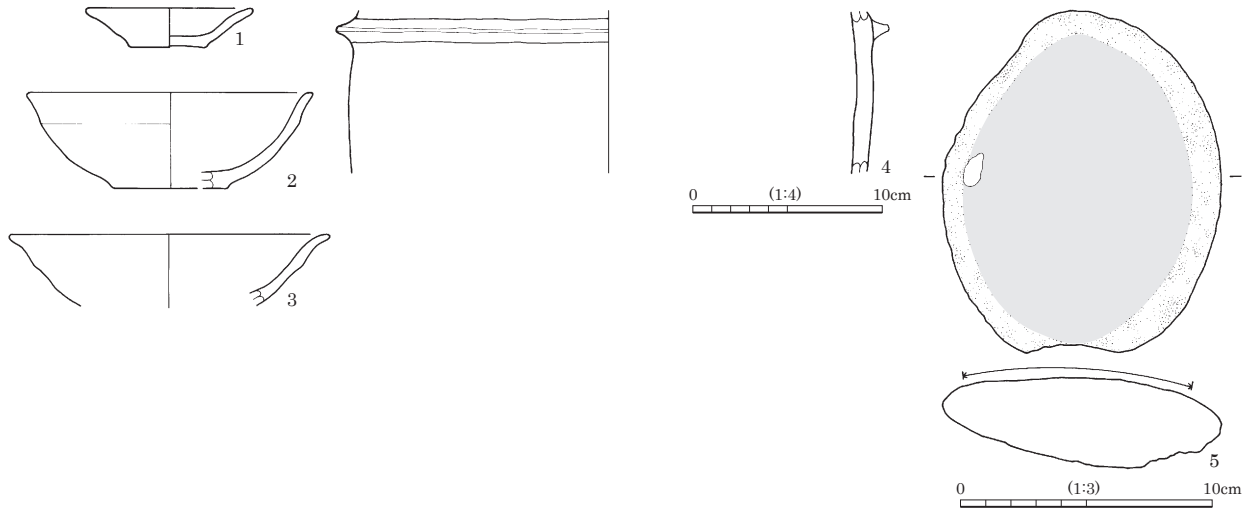
遺物分布：床面直上やカマド周辺から羽釜や坏片などが出土。カマド周辺にやや多い。

出土遺物：1～3は坏。1は小型で浅い皿状。底部糸切り。2・3は大型品。4は羽釜胴部片で、破片上部に鋳が付く。5は安山岩の扁平礫で、平坦面が磨れている。

時期：出土遺物から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。



第96図 SB5013 遺構図



第97図 SB5013 遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
種類	3	1	2				1		9	3	1	30				19	
個体 点数	3	1	2				1		9	3	1	30				19	
重量(g)	135	4					21		60	239	1067				73	14	

第68表 SB5013 出土土器集計表

SB7002 [第98図 PL14・35]

**位置：**7区の緩斜面下部。V L 09・10・14・15 グリッド。6区の低位面より西側の調査区には同時期の住居跡がなく、単独に近い状況で存在する。

**検出：**調査地点は2m程の盛土造成されており、盛土下には黒色土が堆積する。黒色土中では遺構が確認できず、地山の浅間第一軽石流の黄褐色土上面でほとんど床面が露出した状況で検出された。

**埋土：**床面直上のごくわずかが残存するのみで、黒褐色土。

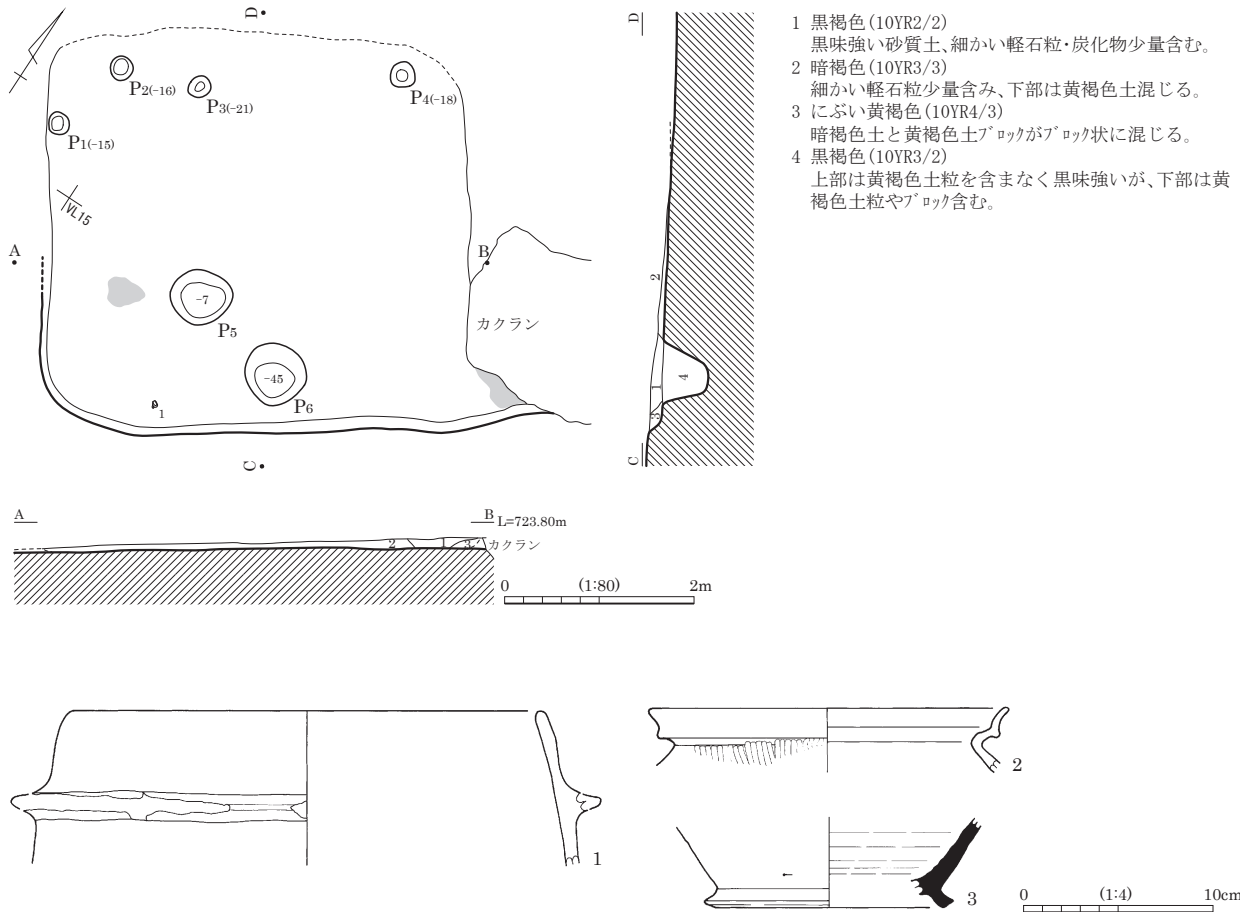
**構造：**南辺から西辺の一部を検出。他の部分は床面の状況から住居範囲を推定した。一辺4.4m程の方形を呈すると考えられ、確認できた南西隅はやや丸みをおびる。主軸はN 34° W程度。残存する南壁でも壁高は15cm程度しかない。床面は地山の黄褐色土で、北半部は不明瞭となる。住居中央部のP 5周辺のみ比較的堅く締まっている。南壁よりのP 6は直径50cm、深さ50cmほどで貯蔵穴か。

**カマド：**南東隅で一部外側に張出すように焼土の広がりが見られ、カマドの残存と判断した。カマドの構造は不明。また、中央やや西側床面にも焼土ブロックが見られる。

**遺物分布：**埋土からの出土遺物は極少量。

**出土遺物：**1はやや内湾する口縁下に鏝が付く羽釜。非ロクロ成形。2はS字口縁甕。胎土が白っぽく在地の土器と異なる。口縁内面の稜も明瞭。3は須恵器壺底部片。

**時期：**1の出土遺物と南東隅にカマドを持つという住居形態から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半。なお、2のS字口縁甕は本住居に伴うものでなく、同時に調査していたSB7003の遺物取り上げ時に遺構番号を間違えた可能性が考えられる。



第98図 SB7002 遺構図・遺物図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
個体			5						1		1	2			35		
重量(g)			34						12		422			50	235	70	

第69表 SB7002 出土土器集計表

SB1001 [第99図 PL10]

位置：1区の高位平坦面。ⅢE 21, J 01 グリッド。北側 15 m程に平安時代のSB1002があるが、周辺には他に遺構はない。

検出：調査地区は現代の攪乱が多く、表土を剥いだ段階で多くの攪乱と共に黒褐色土の落ち込みがみられた。東壁部が平面的に認められ、攪乱部断面で床面も確認されたことから住居跡と判断した。西側は大きく攪乱を受けている。

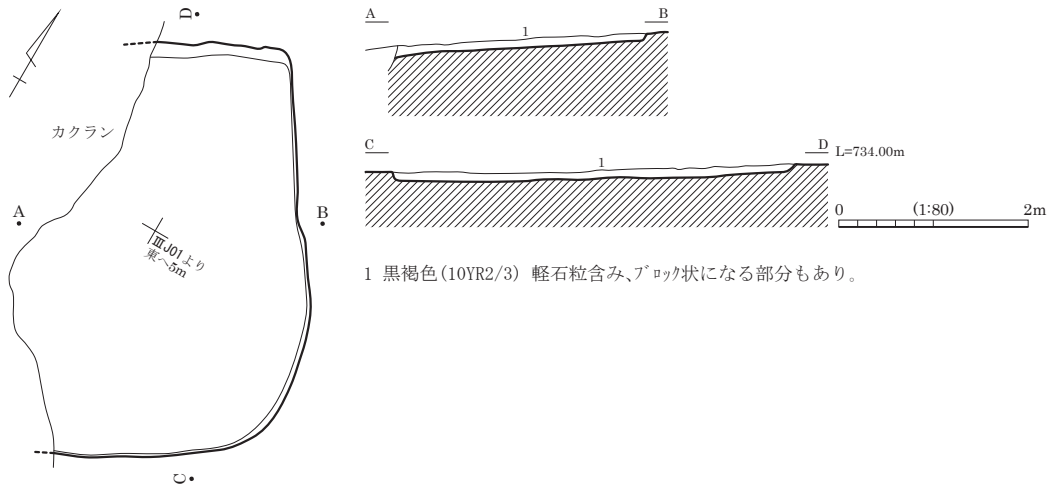
埋土：床面付近のみ残存し、黒褐色土の単層。

構造：攪乱により全体規模や形状は不明確だが、一辺 4.2 m程の方形を呈すると考えられる。主軸はN 31° Wで、北側に位置する平安時代のSB1002に似る。遺存が悪く 10 ~ 15cm程の掘り込みを持つが壁面は不明瞭となる。地山の黄褐色土を床面とし、貼床はない。柱穴などは検出範囲内ではみられなかった。

炉・カマド：検出範囲内には炉・カマドなどは確認されなかった。

遺物：遺構内から遺物は出土しなかった。

時期：出土遺物がなく時期決定は出来ないが、周辺の遺構の状況から古代以降のものか。



1 黒褐色(10YR2/3) 軽石粒含み、ブロック状になる部分もあり。

第99図 SB1001 遺構図

**SB5002** [第100図 PL11]

**位置：**5区の高位平坦面。VI A 20・25, B 21 グリッド。

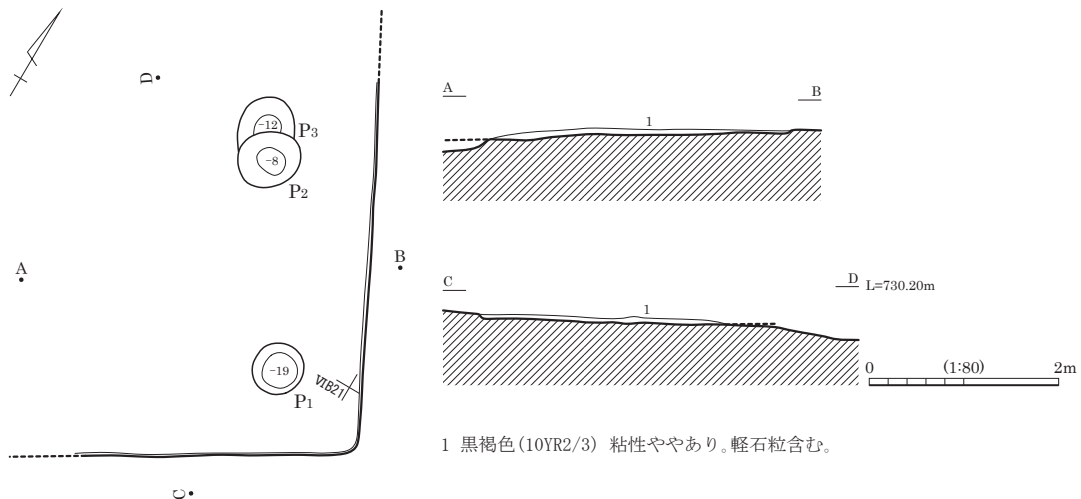
**検出：**Ⅲ層浅間第一軽石流上面で、周辺よりやや暗い土層の広がりとして確認。北側・西側は削平され、プランなどは不明瞭。

**埋土：**わずかに床面直上が残存するのみで、埋土は黒褐色土の単層。

**構造：**方形を呈するが、規模などは不明。掘り込みはごく浅く、依存する部分でも壁高は5cm未満。地山の黄褐色土を床面とし、貼り床はない。ピットは3基確認されたが、柱穴かどうかは判断できない。認定することは難しい。炉・カマドなどの施設は確認されなかった。

**遺物：**遺物の出土はない。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できない。



1 黒褐色(10YR2/3) 粘性ややあり。軽石粒含む。

第100図 SB5002 遺構図

## 2. 円形周溝墓

SM4001 [第101図 PL17]

**位置:** 4区の高位平坦面。ⅡT 16・17・21・22グリッド。北西15m程に同形態のSM4002が構築される。

**検出:** Ⅲ層浅間第一軽石流の黄褐色土上面で黒色土の落ち込みとして検出。

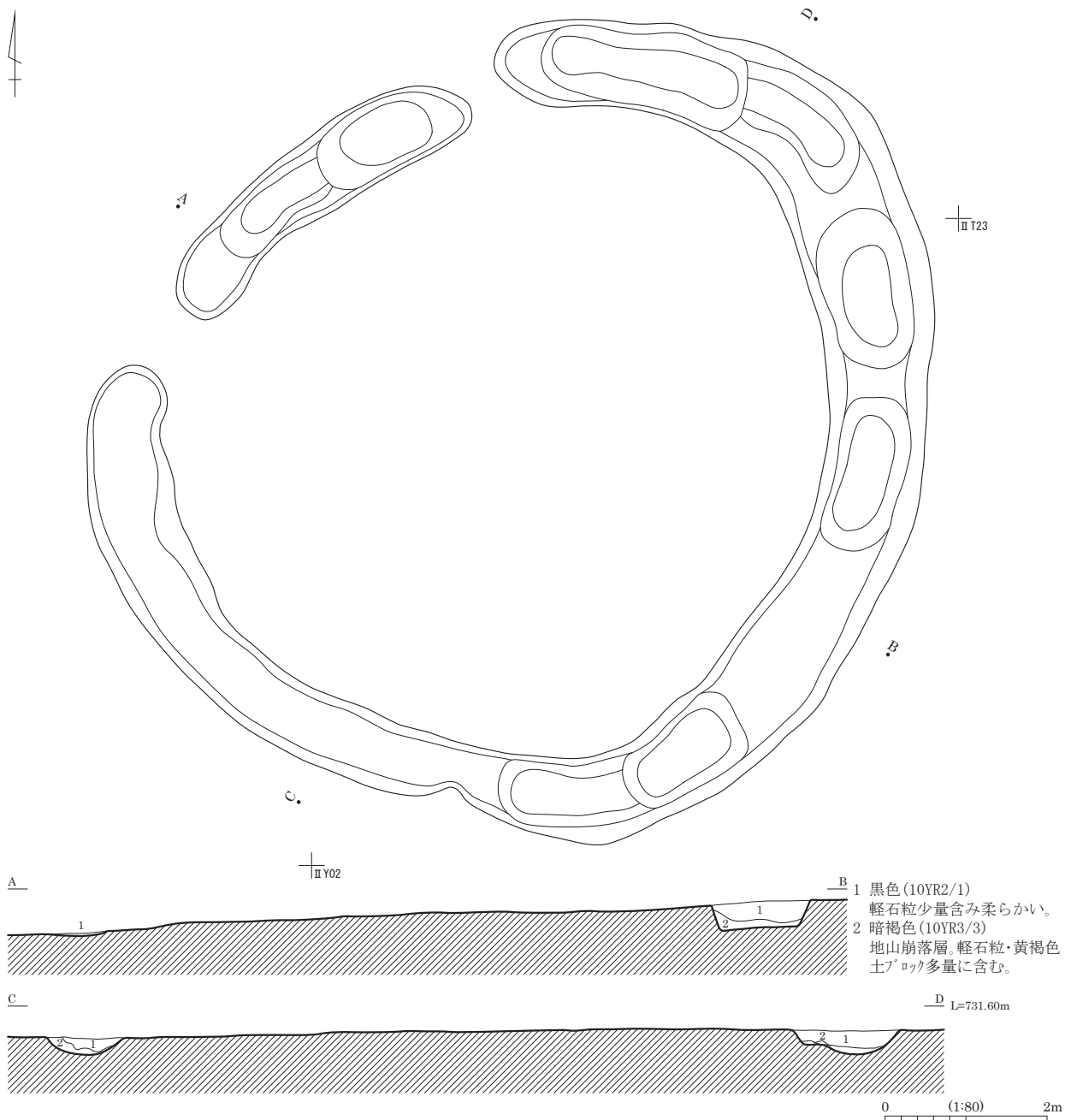
**埋土:** 表土層直下が遺構検出面の黄褐色土となり、周溝内側に盛土は確認されなかった。周溝埋土は黒色土で下部の暗褐色土には地山の崩落土や黄褐色土ブロックを多く含む。自然堆積と考えられる。

**構造:** 直径9.5～10.5mを測るほぼ円形で、幅1.2m程の周溝が廻り、北西部が2ヶ所で途切れる。周溝は検出面から10～20cm程度の浅い部分と、溝底が土坑状に深く掘り込まれた部分とがある。

**遺物分布:** 周溝内からは土師器小片がわずかに出土したのみ。

**出土遺物:** 図化可能な遺物はない。

**時期:** 出土遺物がなく、時期決定はできない。

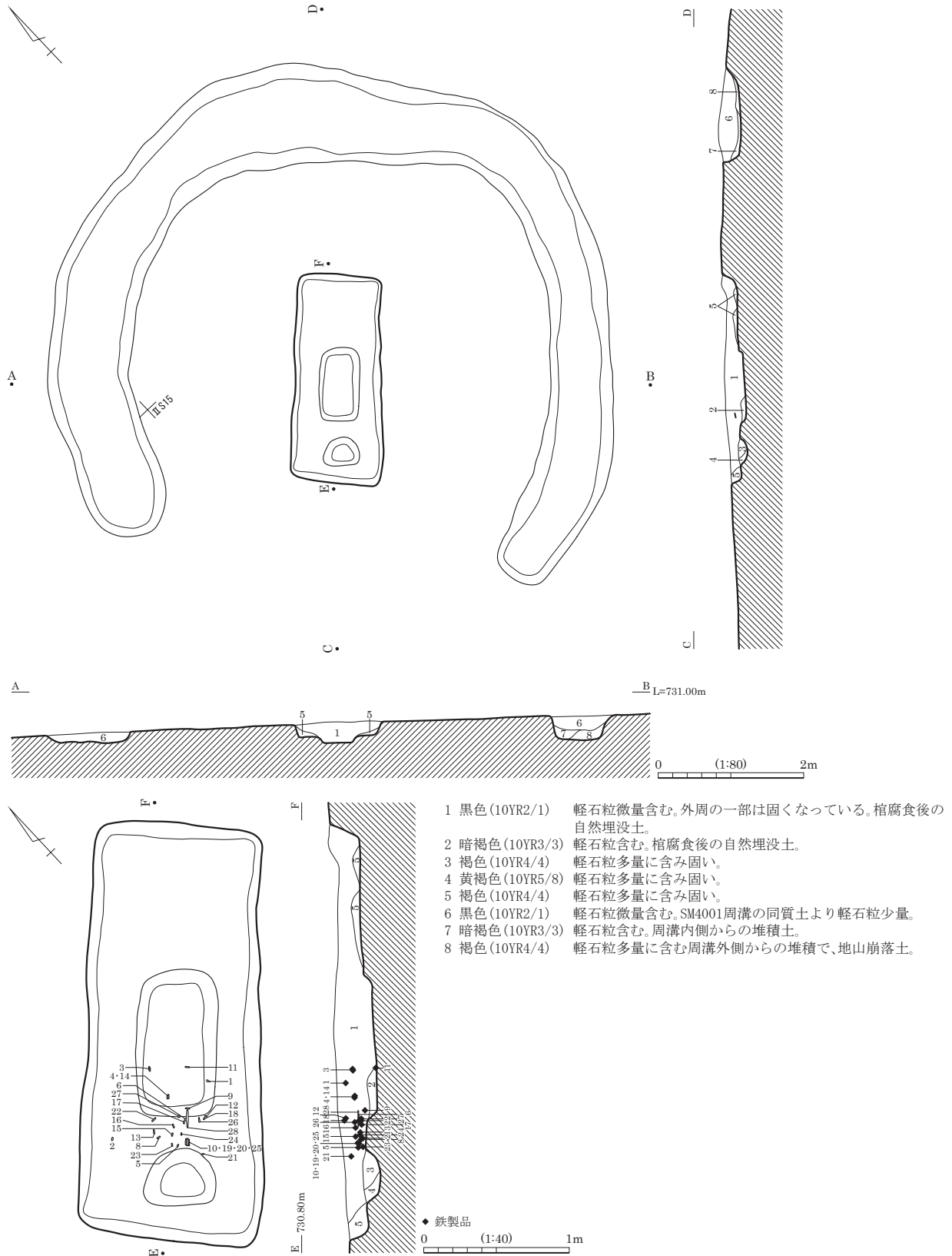


第101図 SM4001 遺構図

SM4002 [第102・103図 PL17・18・40]

位置：4区の高位平坦面。II S 09・10・14・15グリッド。SM4001の北西に位置し、2基が並列するように構築されている。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流の黄褐色土上面で黑色土の落ち込みとして検出。



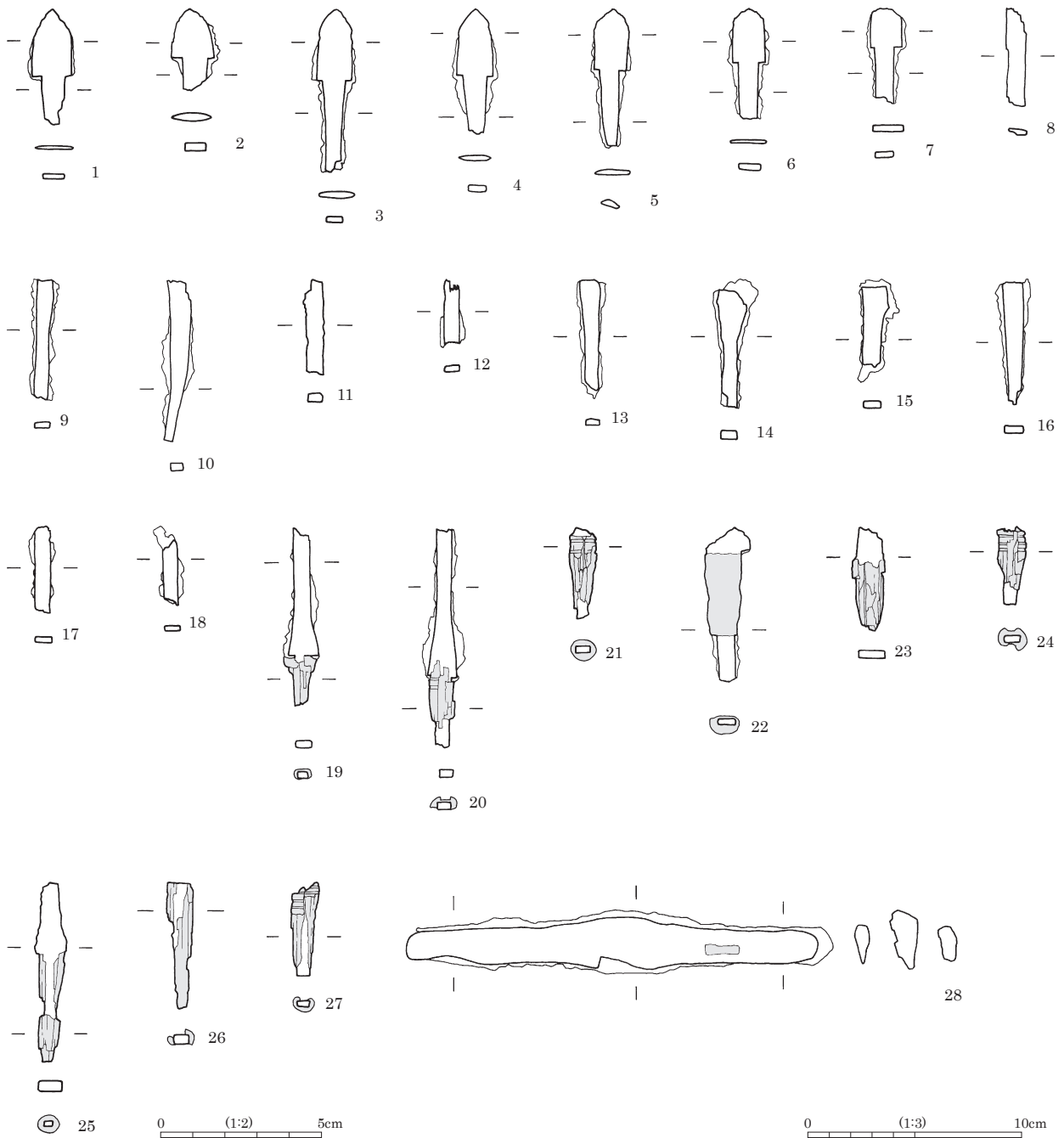
第102図 SM4002 遺構図



**埋土：**周溝は下部に周溝内側からと外側からの流入土が入り、上部が黒色土となる自然堆積。中央の主体部は棺腐食後の流入土である黒色土がほとんどで、底面付近には固くしまった黄褐色土もみられるが、棺設置に伴うものか判然としない。

**構造：**南西側が広く途切れる直径7.8 m前後のほぼ円形で、幅0.8～1.2 m程の周溝が廻る。周溝内側は比較的直線的で、丸みをおびたコの字状にも見える。検出面から10～30cm程の深さで、SM4001のような凹凸は認められない。溝で囲まれた内側中央部に長方形の主体部が遺存している。

**主体部：**主体部は開口部と直交し、両側の周溝と平行するように掘り込まれる。規模は長軸2.88 m、短軸1.2 m、深さ20cm程を測る。更に底面には主体部長軸線上に1.0 m×0.55 mの浅い方形の掘り込みと、不整形形の浅い凹みがある。但し、不整形形のものとは地山のしみ状の凹みかもしれない。いずれにしても明確な棺設置痕は確認できなかった。



第103図 SM4002 遺物図

**遺物分布：**周溝内から遺物は出土せず、周溝内側の表土からは土師器小片が2点の他、縄文土器片55点が出土した。これに対し、主体部では、刀子1点、鉄鏃27点がまとまって出土している。これらは、主体部内の方形の掘り込みと不整形の凹み間に集中し、10cm程のレベル差があり、主体部底面よりやや浮いた状態のものが多い。このことから、本来は棺上に置かれていたものが落ち込んだものと考えられる。また、主体部南西隅部近くでは、赤色の粉末が点々と確認できた。

**出土遺物：**28点の鉄製品が出土し、28の刀子を除き、残りの27点は鉄鏃である。28の刀子は全長14cmで、刃部・柄部はそれぞれ9cm、5cmとなる。刃部先端は折れている。柄部には一部木質が確認できる。明確な関・目釘穴も見られない。1～7は鏃の頭部で、確認できるものの形状は長三角形をしており、断面は平造りで厚さは薄い。頸部の断面は方形を呈する。重量平均は1～3g、最大で5gである。9～18は鏃の頸部である。10・16などは関の張り出しがない茎部も含むものとする。断面は方形である。19～27は鏃の頸部・茎部で、特に木質部を残存したものである。関が確認できるものの形状は台形である。頭部や関の形状から古墳時代中期頃と考えられるが（杉山 1988）、時期の決定までには至らない。出土した鉄鏃は頭部の形状が単一であることや重量が実用品としては軽いという点から、副葬品として製作されたものが一括埋葬されたとも考えられる。

**時期：**土器の出土がなく時期決定には苦慮するが、鉄鏃の形態から古墳時代中期頃の可能性が考えられる。

### 3. 土坑

調査では37基の土坑を検出した。遺物を伴うものが少なく時期決定が難しいが、縄文時代から平安時代まで各時代のものがあり、形状も多様である。ここでは形状や出土遺物などにより記載していく。

#### SK1003 [第104図 PL18]

**位置：**1区の高位面で、北西から入り込む埋没谷の北東谷頭に位置する。南西20m程に同形状・構造のSK1004があり、同じ埋没谷の南斜面にあたる。I X 25グリッド。

**形状・構造：**上面では長軸208cm、短軸115cmの長楕円形を呈し、底面では長軸155cm、短軸50cm程の隅丸長方形となる。断面形は逆台形で、下半部はほぼ垂直に立ち上がり、上部で広がる。検出面からの掘り込みは90cmを測る。埋土は土坑下部や壁際が黄褐色土粒やブロックを多く含む崩落土で、上部は黄褐色土粒をほとんど含まない黒色土となる。底面直上には黒色土が薄く堆積する。自然堆積。底面に長軸に沿って3ヶ所の杭設置痕が検出され、直径15cm、深さ30cm程の設置穴に1本の杭を埋め込み、埋め戻している。土坑長軸は埋没谷に直交する。

**時期：**出土遺物はないが、形状などから縄文時代の陥し穴で、規模や形状などが類似するSK1004と対で存在したものと考えられる。

#### SK1004 [第104図 PL18]

**位置：**1区の高位面で、SK1003と同じ埋没谷の谷頭近くの南斜面に位置する。ⅢD 08グリッド。

**形状・構造：**全体にSK1003と類似する。上面では長軸220cm、短軸106cmの長楕円形を呈し、底面では長軸170cm、短軸40cm程の隅丸長方形となる。断面形は逆台形で、SK1003ほどではないが下半部ではほぼ垂直に立ち上がり、上部で広がる。検出面からの掘り込みは84cmで、埋土もSK1003と同じ。底面には長軸に沿って3ヶ所の杭設置痕が検出され、直径15cm、深さ40cm程の設置穴に杭を埋め込み、埋め戻している。杭は中央では2本で他は1本である。土坑長軸は埋没谷に直交する。

**時期：**出土遺物はないが、形状などから縄文時代の陥し穴と考えられ、谷頭を挟んで構築されたSK1003と対になると思われる。

**SK2001** [第104図 PL19]

**位置：**2区の高位面で、北西から入り込む埋没谷が南側に分岐した谷頭に位置する。北側15m程に同形状・構造のSK2003がある。また、西側5m程に円形の陥し穴SK2002がある。SK1003・1004は北側の分岐谷になる。ⅢH 09グリッド。

**形状・構造：**全体にSK1003・1004と類似し、規模がやや大きい。上面では長軸297cm、短軸150cmの長楕円形、底面では長軸225cm、短軸50cm程の隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形で、下部はほぼ垂直に立ち上がり、上部で広がる。検出面からの掘り込みは75cm。埋土もSK1003などと類似し、下部や壁際に崩落土がみられ、上部は黄褐色土粒の混入の少ない黒色土となる。自然堆積。底面には長軸に沿って2ヶ所の杭設置痕が検出され、直径25cm、深さ40cm程の設置穴にそれぞれ3本の杭を埋め込み埋め戻している。なお、断面図は杭痕を投影して示している。土坑長軸は埋没谷に直交する。

**時期：**出土遺物はないが、形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。

**SK2003** [第104図 PL19]

**位置：**2区の高位面で、SK2001と同じ埋没谷の北斜面に位置する。ⅢC 23グリッド。

**形状・構造：**SK2001に類似する。上面では長軸264cm、短軸152cmの長楕円形で、底面では長軸200cm、短軸60cm程の隅丸長方形を呈する。断面形は逆台形で、下部では急傾斜で立ち上がり、上部で広がる。検出面からの掘り込みは82cmを測る。埋土もSK2001と類似し、土坑下部に崩落による黄褐色土、上部は黄褐色土粒の混入の少ない黒色土となる。自然堆積。底面には長軸に沿って3ヶ所の杭設置痕が検出され、直径20cm、深さ40cm程の設置穴に、各1本の杭を埋め込み、埋め戻している。土坑長軸は埋没谷に平行する向きとなる。

**時期：**出土遺物はないが、形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。

**SK1005** [第105・109図 PL18・35]

**位置：**1区の高位面で、埋没谷の谷頭に近い平坦面に位置する。北側16m程の谷頭斜面にSK1004がある。ⅢD 15グリッド。

**形状・構造：**周囲は攪乱が著しく遺存状態はあまり良くない。平面形は上面では長軸196cm、短軸125cmの長楕円形で、底面で長軸155cm、短軸80cm程の隅丸の歪んだ長方形を呈する。断面形は逆台形で、底面から直線的に開く。検出面からの掘り込みは60cm。埋土は底面上に黄褐色土粒を多く含む土層、上部が黒色土となる点はSK1003などの陥し穴と同じであるが、本土坑では上部の黒色土に黄褐色土粒やブロックが含まれる。坑底施設は認められなかった。

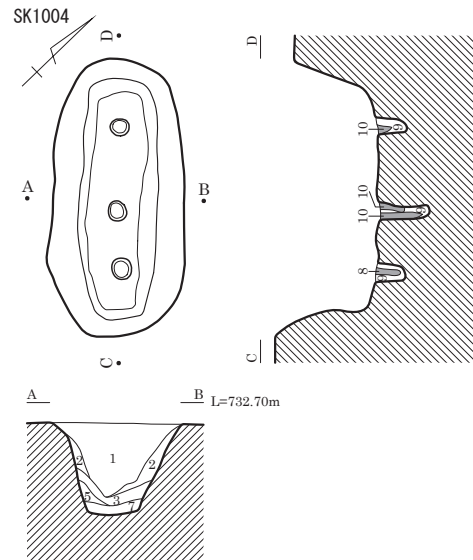
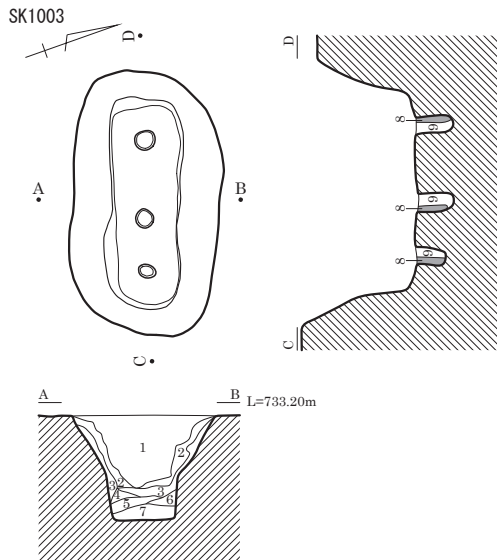
**出土遺物：**検出面北西隅で縄文土器が1点（第109図1）出土した。無文で縄文時代後期頃のものか。

**時期：**土器は検出面からの出土で時期決定は難しいが、形状などから縄文時代の陥し穴といえよう。

**SK8005** [第105図 PL20]

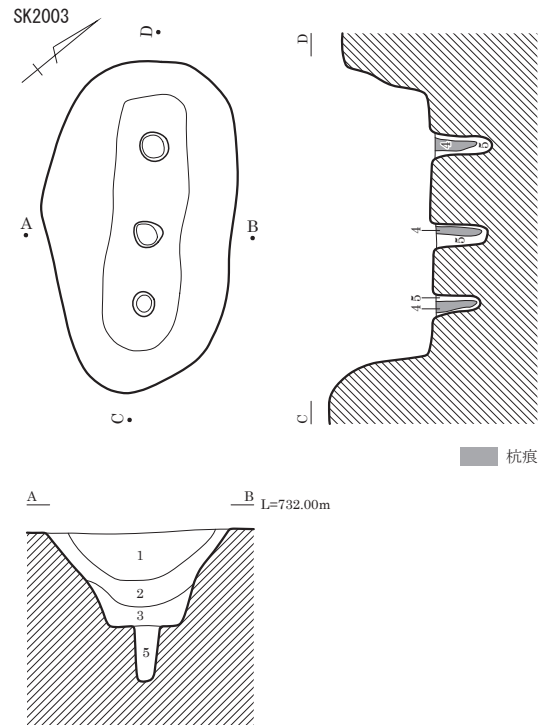
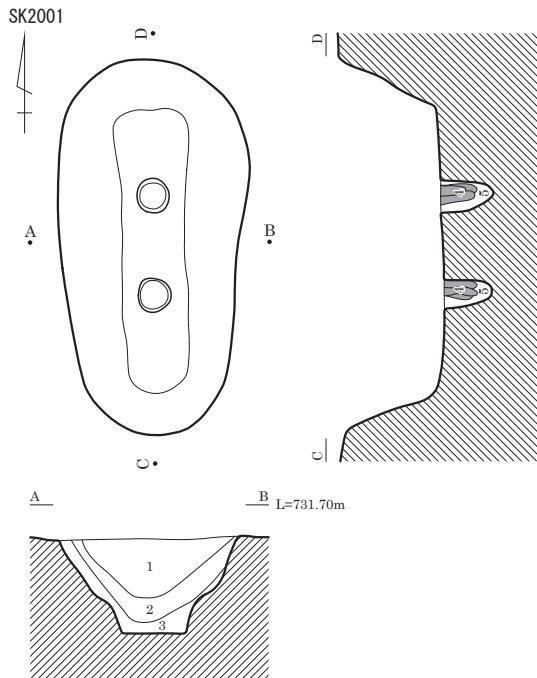
**位置：**8区の緩斜面上部平坦面。南半部は調査区外となるが、市道部分として佐久市教委が調査を行っている（佐久市教委 2009）。本報告では佐久市教委の報告書より一部転載して、遺構全体図を示した。SB8002と一部重複する。VP 18・23グリッド。

**形状・構造：**上面で長軸276cm、短軸105cm、底面で長軸225cm、短軸50cm程の隅丸の長方形を呈する。断面形は逆台形で、底面から直線的に開く。検出面からの掘り込みは70cm。埋土は市教委の報告によると下部は地山の黄褐色土ブロックを多く含む土層で、上部は暗褐色土となり、自然堆積と考えられる。坑



SK1003・1004

- |   |   |
|---|---|
| 1 黒色(10YR1.7/1) 粒子の細かい均一な土層。軽石粒微量含む。        | 7 黒褐色(10YR3/2) 粘性ややあり、しまりあり。粒子の細かい砂質土。黄褐色土微量含む。 |
| 2 黒褐色(10YR3/2) 粒子の細かい砂質土。地山の黄褐色土ブロック多量に含む。  | 8 にぶい黄褐色(10YR4/3) しまりの弱い砂質土。部分的ににぶい橙色土混じる。杭痕。   |
| 3 黄褐色(10YR5/6) 地山の黄褐色土が主体となり、黒褐色土ブロック混じる。   | 9 にぶい橙色(7.5YR7/4) しまりの弱い砂質土。地山黄褐色土の杭埋め戻し土。      |
| 4 黒褐色(10YR2/2) 粒子の細かい砂質土。黄褐色土含まない。          | 10 黒褐色(10YR2/2) しまりの弱い砂質土。軽石粒含む。杭痕。             |
| 5 暗褐色(10YR3/3) 粒子の粗い砂質土。黄褐色土ブロック含む。         |   |
| 6 暗褐色(10YR3/4) 軽石の細かい砂質土。黄褐色土ブロックを下部程多量に含む。 |   |



- |                                     |
|-------------------------------------|
| 1 黒色(10YR2/1) 軽石粒微量含む、暗褐色土ブロック含む。   |
| 2 黒色(10YR2/1) 1層に類似し、暗褐色土ブロック多量に含む。 |
| 3 暗褐色(10YR3/3) 軽石粒多量に含む、黒色土ブロック含む。  |
| 4 黒色(10YR2/1) やわらかく、地山の黄褐色土粒少量含む杭痕。 |
| 5 褐色(10YR4/4) 地山の褐色土を主体とする杭埋め戻し土。   |

- |                                       |                       |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1 黒色(10YR2/1) 軽石粒少量含む、暗褐色土ブロック含む。     | 軽石粒・地山の黄褐色土ブロック多量に含む。 |
| 2 黒色(10YR2/1) 軽石粒・地山の黄褐色土ブロック多量に含む。   |                       |
| 3 褐色(10YR4/4) 軽石粒・黄褐色土ブロック多量に含む。      |                       |
| 4 褐色(7.5YR4/3) やわらかく、黄褐色土ブロック少量含む杭痕。  |                       |
| 5 にぶい褐色(7.5YR5/4) 地山の褐色土を主体とした杭埋め戻し土。 |                       |

0 (1:60) 2m

第104図 SK1003・1004・2001・2003 遺構図

底施設は認められなかった。

**出土遺物**：市教委の報告によると古墳時代の壺や坏片と縄文土器片が出土している。古墳時代の土器はSB8002（佐久市教委H3住居跡）と接合関係がある。

**時期**：土坑の形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。市教委報告の古墳時代の遺物は重複するSB8002に属するものといえよう。

#### SK2002 [第105図 PL19]

**位置**：2区の高位面で、北西から入り込む埋没谷が南側に分岐した谷頭付近に位置する。長楕円形の陥し穴SK2001が5m程西の谷頭にある。ⅢH09グリッド。

**形状・構造**：直径150～160cm程の円形を呈する。底面も円形で平坦となる。断面形は逆台形で上部は崩落により広がっている。検出面からの掘り込みは105cmを測り深い。埋土は下部や壁際に崩落による黄褐色土ブロックを多く含む褐色・暗褐色土で、上部は黄褐色土ブロックを含む黒色土となる。自然堆積。坑底施設はない。

**時期**：出土遺物がなく時期決定はできないが、形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。

#### SK3001 [第105・109図 PL19・35]

**位置**：3区の高位面で、北西から入り込む埋没谷から15m程離れた平坦面に位置する。ⅢK14・19グリッド。

**形状・構造**：直径120cm程の円形を呈する。底面も円形で平坦となる。断面形は逆台形だが、ほぼ垂直に近い立ち上がりとなる。検出面からの掘り込みは118cmと深い。埋土は下半部に黄褐色土ブロックを主体とした土層が厚く堆積し、上部は黄褐色土粒を含む黒色・黒褐色土となる。自然堆積。坑底施設はない。

**出土遺物**：埋土中から縄文土器片が1点（第109図2）が出土。口縁下に低い隆帯を持ち、以下はLRの回転縄文を施文する。縄文時代後期前半。

**時期**：出土土器が1点のみで時期決定は難しいが、形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。

#### SK7005 [第105図 PL20]

**位置**：7区の緩斜面中位。SB7010の住居内にあり、床面精査で検出された。VM05グリッド。

**形状・構造**：直径120～130cm程の円形を呈する。底面も円形で平坦。断面形は筒状でほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの掘り込みは98cmと深い。埋土は下部に暗褐色土、上部に黒色・黒褐色土でSK3001に類似する。

**時期**：出土遺物はないが、形状などから縄文時代の陥し穴と考えられる。

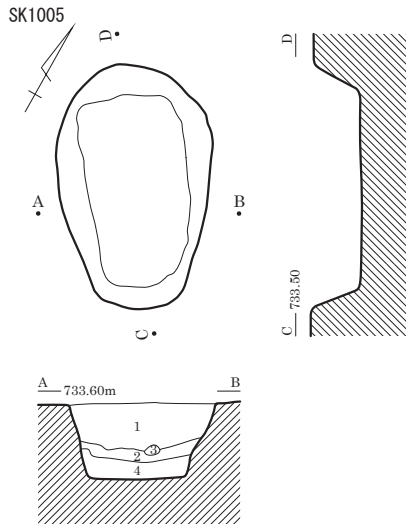
#### SK5001 [第106・109図 PL35]

**位置**：5区の高位平坦面。ⅡV12グリッド。

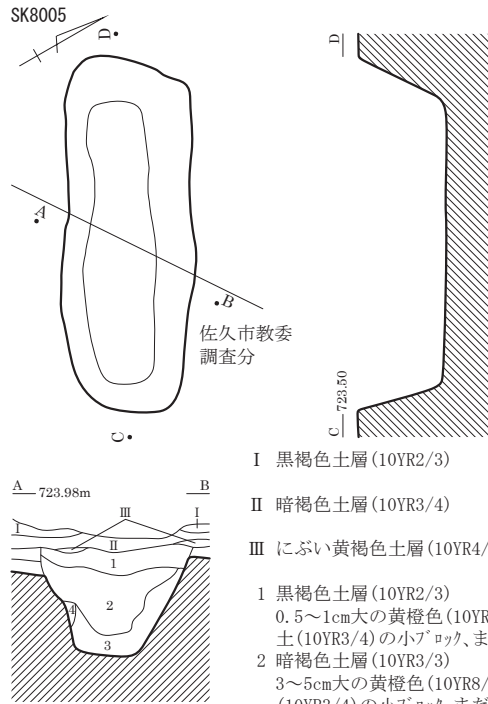
**形状・構造**：長径96cm、短径88cmの円形を呈する。断面形は鍋状で、検出面からの深さは25cmを測る。埋土は黄褐色土粒を含む土層で、下部は暗褐色土、上部は黒褐色土となる。

**出土遺物**：埋土上面から縄文土器が1点（第109図3）出土した。複数の沈線で弧状の文様を描くようである。縄文時代後期前半と考えられる。

**時期**：出土遺物が1点のみで時期決定は難しいが、縄文時代後期の可能性がある。



- 1 黒褐色 (10YR3/2)  
しまりあり、粒子の細かい砂質土。黄褐色土ブロック含む。
- 2 黒色 (10YR2/1)  
粘性ややあり、しまり弱い。粒子の微細な砂質土。
- 3 褐色 (10YR4/4)  
褐色土に黒色土が混じったブロック。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3)  
しまり弱く、粒子の微細な砂質土。黄褐色土粒が全体に混じる。

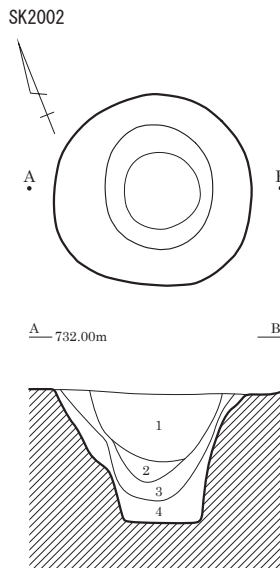


佐久市教委  
調査分

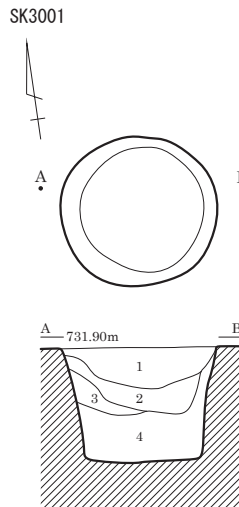
- I 黒褐色土層 (10YR2/3) 表土。フカカしている。葉多量。
- II 暗褐色土層 (10YR3/4) 砂質土。しまりない。土器片含む。
- III にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 砂質土。

- 1 黒褐色土層 (10YR2/3)  
0.5~1cm大の黄橙色 (10YR8/6) 軽石を少量。暗褐色土 (10YR3/4) の小ブロック、まだら状に多量。
- 2 暗褐色土層 (10YR3/3)  
3~5cm大の黄橙色 (10YR8/6) 軽石を少量。暗褐色土 (10YR3/4) の小ブロック、まだら状に多量。炭・土器片出土。
- 3 暗褐色土層 (10YR3/4)  
黄褐色土 (10YR5/6) P1のブロック多量。
- 4 褐色土層 (10YR4/6)  
明黄褐色土 (10YR6/8) のP1が主。

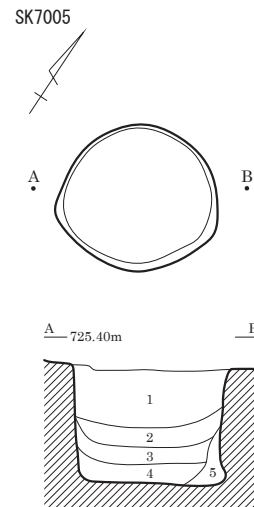
(佐久市報告書より転載)



- 1 黒色 (10YR2/1)  
軽石粒含む、黄褐色土ブロックが点在する。
- 2 黒色 (10YR2/1)  
軽石粒・黄褐色土粒多量に含む。
- 3 暗褐色 (10YR3/3)  
軽石粒・黄褐色土ブロック含む。
- 4 褐色 (10YR4/6)  
軽石粒・黄褐色土ブロック多量に含む、黒色土ブロック含む。



- 1 黒褐色 (10YR2/2)  
細かい黄褐色土粒を全体に含む。
- 2 黒色 (10YR2/1)  
微細な黄褐色土粒少量含む。
- 3 黒褐色 (10YR2/2)  
2層類似し、黄褐色土粒の混入多い。
- 4 暗褐色 (10YR3/4)  
よごれた黄褐色土を主体とし、黒色土混じる。



- 1 黒褐色 (10YR2/3)  
軽石粒少量、黄褐色土粒多量に含む。
- 2 黒色 (10YR2/1)  
粘性やや強く、軽石粒・黄褐色土粒少量含む。炭化物含む。
- 3 黒褐色 (10YR2/2)  
砂質がやや強く、黄褐色土粒・炭化物含む。
- 4 暗褐色 (10YR3/3)  
軽石粒・黄褐色土粒少量含む。
- 5 暗褐色 (10YR3/4)  
炭化物・黄褐色土粒含む。

0 (1:60) 2m

第105図 SK1005・2002・3001・7005・8005 遺構図

**SK4001** [第106・109図 PL19・35]

**位置：**4区の高位平坦面で、4区から5区の高位平坦面に広がる古墳時代前期前半の集落域の北東隅に位置する。同時期の遺物が出土しているSK4002・4003とは10～13m離れるが土坑群としてまとまりを示す。ⅡS16グリッド。

**形状・構造：**長径72cm、短径50cmの楕円形を呈する。断面形は鍋状で、底面はほぼ平坦。検出面からの掘り込みは19cmを測る。埋土は2層に分けられ、黒褐色土。

**出土遺物：**検出面から埋土上部から高坏が1点（第109図4）出土した。坏部は塊状に開き、脚部は短く「ハ」の字に開脚する。赤彩され、脚部には円形透かしが開けられる。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

**SK4002** [第106・109図 PL19・35]

**位置：**4区の高位平坦面。古墳時代前期前半のSB5009より10m程東側に位置する。ⅡR19グリッド。

**形状・構造：**長径105cm、短径85cmの円形を呈する。断面形は鍋状で、小さな底面から直線的に広がる。検出面からの掘り込みは40cmを測る。埋土は3層に分けられ、下部は黄褐色土粒を多く含む褐色土で、上部は黄褐色土粒の混入の少ない黒褐色土・暗褐色土となる。

**出土遺物：**埋土上層からほぼ完形の広口壺（第109図7）が横向き状態で出土した。口縁部が強く外反し、胴部は球胴で最大径が胴中位にあり短い台が付く。頸部の簾状文部分を除いた外面全面と口縁内面が赤彩される。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

**SK4003** [第106・109図 PL20]

**位置：**4区の高位平坦面で、SK4001・4002の北東側に位置する。ⅡR15、S11グリッド。

**形状・構造：**長軸90cm、短軸76cmの円形を呈する。断面形は鍋状で、ほぼ平坦な底面から急傾斜で立ち上がる。検出面からの掘り込みは31cmを測る。埋土は2層に分けられるがいずれも黒褐色土。

**出土遺物：**土坑底面付近と埋土中から甕片（第109図5）が出土。甕の胴下半部で、胴部はハケ調整、下半部は縦のミガキ。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

**SK6007** [第106・109図 PL20]

**位置：**6区の低位平坦面。同面の古墳時代初頭前半の東側に位置し、6m程北に同規模のSK6008がある。VE24グリッド。

**形状・構造：**直径65cm程の円形を呈する。断面形は鍋状で、ほぼ平坦な底面からなだらかに立ち上がる。検出面からの掘り込みは19cmで、埋土は黒色土の単層。

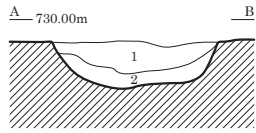
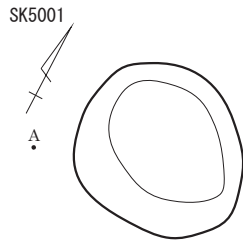
**出土遺物：**埋土下層から鉢片（第109図6）が出土。口縁端がやや内湾する鉢で内外面赤彩される。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。近接するSK6008と同時期の小土坑。

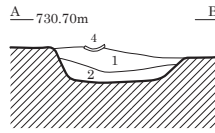
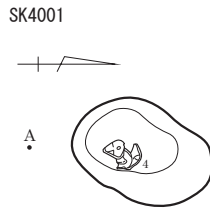
**SK6008** [第106・109図 PL20]

**位置：**6区の低位平坦面で、同規模のSK6007が南側に近接する。VJ04グリッド。

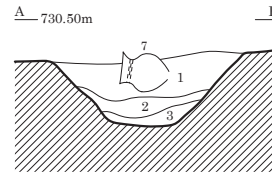
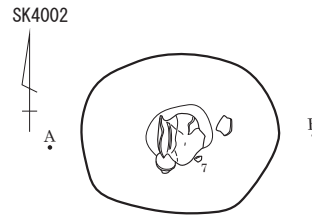
**形状・構造：**長径72cm、短径67cmの円形を呈する。断面は皿状で、検出面からの掘り込みは9cmと浅い。埋土はSK6007と同様な黒色土の単層。



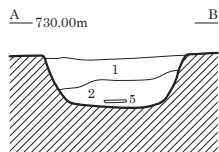
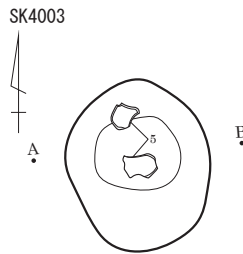
- SK5001
- 1 黒褐色 (10YR2/3)  
粘性弱い。微細な黄褐色土粒を全体に含み、不明瞭なブロック状となる部分もある。軽石粒少量含む。
  - 2 暗褐色 (10YR3/3)  
1層に類似。細かい黄褐色土粒多量に含み、軽石粒少量含む。



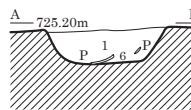
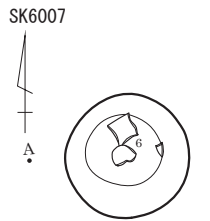
- SK4001
- 1 黒褐色 (10YR2/2)  
粘性のある砂質土。上面で土器出土。
  - 2 黒褐色 (10YR2/3)  
しまりの弱い砂質土。



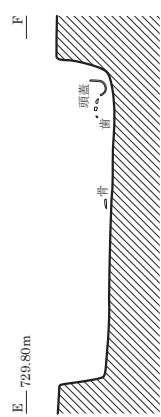
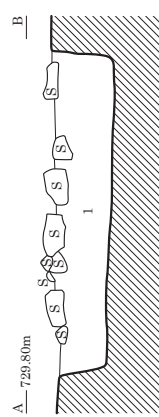
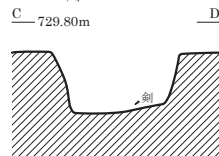
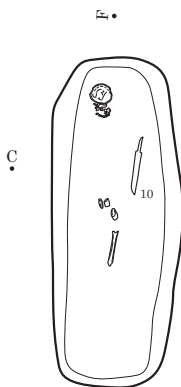
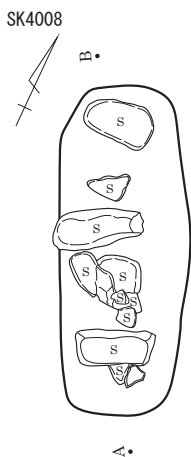
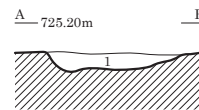
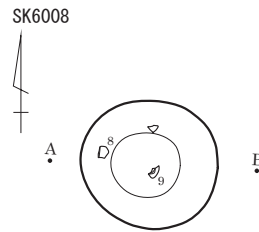
- SK4002
- 1 暗褐色 (10YR3/3)  
粘性のややある砂質土。上面で略完形土器出土。
  - 2 黒褐色 (10YR2/3)  
しまりの弱い砂質土。
  - 3 褐色 (10YR4/4)  
しまりの弱い砂質土。黄褐色土粒や軽石含む。



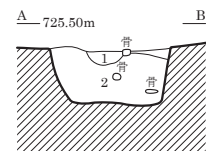
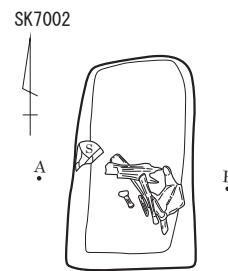
- SK4003
- 1 黒褐色 (10YR2/2)  
粘性のややある砂質土。土器含む。
  - 2 黒褐色 (10YR2/3)  
しまりの弱い砂質土。土器含む。



- SK6007・6008
- 1 黒色 (10YR2/1) 軽石・黄褐色土粒微量に含む。



- SK4008
- 1 褐色 (10YR4/6)  
地山の黄褐色土ブロック含む埋め戻し土。ブロックは上部に特に多い。1~2cmの炭化物少量含む。
  - 2 暗褐色 (10YR3/4)  
黄褐色土粒多量に含む埋め戻し土。数mm大程度の軽石粒多量に含む。



- SK7002
- 1 黒褐色 (10YR2/3)  
黄褐色土粒や茶褐色土粒をブロック状に含み、軽石粒多量に含む。
  - 2 暗褐色 (10YR3/4)  
黄褐色土粒多量に含む埋め戻し土。数mm大程度の軽石粒多量に含む。

0 (1:40) 1m

第106図 SK4001~4003・4008・5001・6007・6008・7002 遺構図



**出土遺物：**埋土上層から高坏片（第109図8）と甕片（第109図9）が出土した。高坏は浅く大きく開く坏部で、内外面赤彩される。甕は小型甕の底部と思われ、ハケ調整される。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

**SK4008** [第106・109図 PL20・40]

**位置：**4区高位平坦面。平安時代後期の住居跡SB4001内に構築される。ⅡR15グリッド。

**形状・構造：**SB4001の床面精査時に礫を床面に並べたような石列が確認され、石列下で土坑を検出した。石列は住居床面と同一レベルで、カマド袖石と同質で被熱した礫でカマド構築材を用いたものと考えられる。土坑を掘り下げ中に人骨が検出され、墓坑と判断した。土坑上面の石列は両端と中央部に土坑短軸に直交するように大形で長い礫を置き、その間に不整形の大形礫を配置して土坑上面を塞いでいる。墓坑は長軸175cm、短軸70cmの長方形を呈し、住居床面からほぼ垂直に掘り込まれ、深さは31cmを測る。地山の黄褐色土ブロックを含む褐色土で埋め戻されている。カマド構築材を用い、上面を塞ぐ石列が住居床面レベルと同じことから、住居廃絶時または直後に構築された墓坑と言えよう。

**出土遺物：**墓坑床面から人骨と鉄製品1点が出土した。なお、人骨については茂原信生京都大学名誉教授に鑑定・所見をいただいた。人骨は頭を北にして埋葬されていて、遺存状況は悪いが、頭蓋骨並びに四肢骨片が伸展で埋葬されていたものと思われる位置を保っている。四肢骨片は表面が荒れていて部位の同定は難しいが、大腿骨あるいは脛骨片がある。成人であるが性別は不明である。

頭蓋骨は頭蓋冠が浸食されているが部分的に残っていて、左右の側頭骨とその錐体部、大後頭孔部の後頭骨がみられる。下顎体の形は確認でき、左右の第2大臼歯までは植立している。また、頸椎と思われる椎骨片が残っている。

上顎歯は、第3大臼歯と思われるものが出土しているので、成人には達していたと思われる。大臼歯はやや摩耗しているが、上顎小臼歯や大臼歯には象牙質の露出はない。さほど高齢ではなからう。

下顎歯は、切歯の切縁に象牙質が露出している。犬歯や小臼歯の咬頭の先端にも小さな象牙質の露出がある。左第3大臼歯は生前に脱落していたものと思われる。右第3大臼歯は植立している。右側の第1大臼歯と第2大臼歯にも小さな象牙質の露出がみられるが、咬耗はさほど進んでいない。第3大臼歯と思われるもの（176p写真のA）の咬合面は咬耗でやや平坦化しているが、象牙質の露出はない。左側の臼歯咬合面は右よりやや咬耗が進んでおり、象牙質の露出がみられる。他に、下顎右第2小臼歯様の臼傍歯のような歯が1本ある（176p写真のB）。歯種は不明である。歯の計測値は第87表のとおりである。

鉄製品（第109図10）は土坑中程の東側から出土し、遺体を伸展葬されたとすれば胸の横にあたる位置か。長さ30.2cm、幅3.1cmを測る大型の刀子で、柄には目釘穴が1つある。

**時期：**SB4001との関係から平安時代後期11世紀後半から12世紀前半と推定する。

**SK7002** [第106図 PL20]

**位置：**7区の緩斜面上部。古墳時代前期のSB7008内に構築されている。VM18グリッド。

**形状・構造：**SB7008の床面を精査していたところ骨片の出土がみられ、暗褐色土の落ち込みが確認された。当初は住居に伴う施設とも思われたが、住居の土層断面を観察したところ土坑上部が住居埋土を切っていることから住居後の土坑と判明した。長軸113cm、短軸63cmの長方形を呈する。住居床面からは30cmの深さを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は上部が黒褐色土で、住居床面より下部は黄褐色土粒を含む暗褐色の埋め戻し土となる。

**出土遺物：**土坑からは動物骨と人骨が出土した。出土骨については茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美

総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄独協医科大学技術員に鑑定・所見をいただいた。動物骨は埋土上層下部で出土し、ウマの右肩甲骨で肩甲棘の近位部から骨幹部にかけての部位である。発達した棘をもつが個体の持つ特徴であろう。

人骨は埋土下層から出土し、屈葬で脊柱が壁によっているので側臥位であろう。大腿骨と寛骨、仙骨と腰椎部が出土しており、上半身は消失している。四肢骨の化骨の状況から成人であろうが、残存部に加齢変化はない。

寛骨の大坐骨切痕がかなり大きく直角に近いこと、および耳状面もやや高くなっていることから考えて、女性の可能性が高い。大腿骨は遠位部骨端が欠損している。後面の粗線はさほど発達していない。大腿骨最大長の推定値は390mmから400mmの間で、藤井式的女性式による推定身長は148.4～150.6cmとなる。

土坑から土器の出土はない。なお、上部から出土したウマの骨は埋土上部にあり、何らかの要因で後に入り込んだ可能性がある。

**時期：**古墳時代前期の住居を切っており、それ以降のものである。調査区内の遺構の状況から平安時代頃と推定する。

#### SK6001 [第107図]

**位置：**6区の低位平坦面。古墳時代前期の住居群の南側にあたり、平坦面中央部に単独で存在する。V J 12グリッド。

**形状・構造：**長軸117cm、短軸73cmの長方形を呈する。断面形は逆台形で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは31cm。埋土は壁際以外黄褐色土粒をほとんど含まない黒色土の単層で、6区低位平坦面に存在する古墳時代前期住居跡の埋土と類似する。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できないが、周辺の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

#### SK6002 [第107図]

**位置：**6区の低位平坦面。古墳時代前期の住居跡SB6001の南側に位置し、SK6003～6006が近接する。V E 21グリッド。

**形状・構造：**長径48cm、短径46cmの円形で、断面形は鍋状を呈する。検出面からの深さは17cm。埋土は底面付近に黄褐色土粒を含む暗褐色土が薄くあり、上部は黄褐色土粒を少量含むみの黒褐色土。6区低位平坦面に存在する古墳時代前期住居跡の埋土と類似する。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できないが、周辺の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

#### SK6003 [第107図]

**位置：**6区の低位平坦面。古墳時代前期の住居跡SB6001の南側に位置し、SK6002・6004～6006が近接する。V E 21グリッド。

**形状・構造：**長径34cm、短径32cmの円形で、断面形は鍋状を呈する。検出面からの深さは21cm。埋土はSK6002と同一。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できないが、周辺の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SK6004** [第 107 図]

**位置：**6区の低位平坦面。古墳時代前期の住居跡 SB6001 の南側に位置し、SK6002～6003・6005～6006 が近接する。V E 21 グリッド。

**形状・構造：**長径 55cm、短径 44cmの円形で、断面形は鍋状を呈する。検出面からの深さは 20cm。埋土は SK6002 と同一。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できないが、周辺の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SK6005** [第 107 図]

**位置：**6区の低位平坦面。古墳時代前期の住居跡 SB6001 の南側に位置し、SK6002～6004・6006 が近接する。V E 21 グリッド。

**形状・構造：**長径 41cm、短径 27cmの楕円形で、断面形は鍋状を呈する。検出面からの深さは 16cm。埋土は SK6002 と同一。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できないが、周辺の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SK6006** [第 107 図]

**位置：**6区の低位平坦面。古墳時代前期の住居跡 SB6001 の南側に位置し、SK6002～6005 が近接する。V E 21 グリッド。

**形状・構造：**長径 48cm、短径 42cmの円形で、断面形は鍋状を呈する。検出面からの深さは 20cm。埋土は SK6002 と同一。

**時期：**出土遺物がなく時期決定できないが、周辺の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SK4004** [第 107 図]

**位置：**4区の高位平坦面。古墳時代前期の土器を伴った SK4003 の東側に近接する。II S 06・11 グリッド。

**形状・構造：**長径 70cm、短径 63cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 16cm。埋土は 3層に分けられたがいずれも黄褐色土粒を含む土層で、土器が出土した土坑とは異なる。

**時期：**出土遺物がなく、時期決定できない。

**SK4006** [第 107 図]

**位置：**4区の高位平坦面。古墳時代前期の土器を伴った SK4001 の南東 10 m程に位置する。II S 17 グリッド。

**形状・構造：**長径 69cm、短径 60cmの円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは 17cm。埋土は黄褐色土粒を含む黒褐色土。

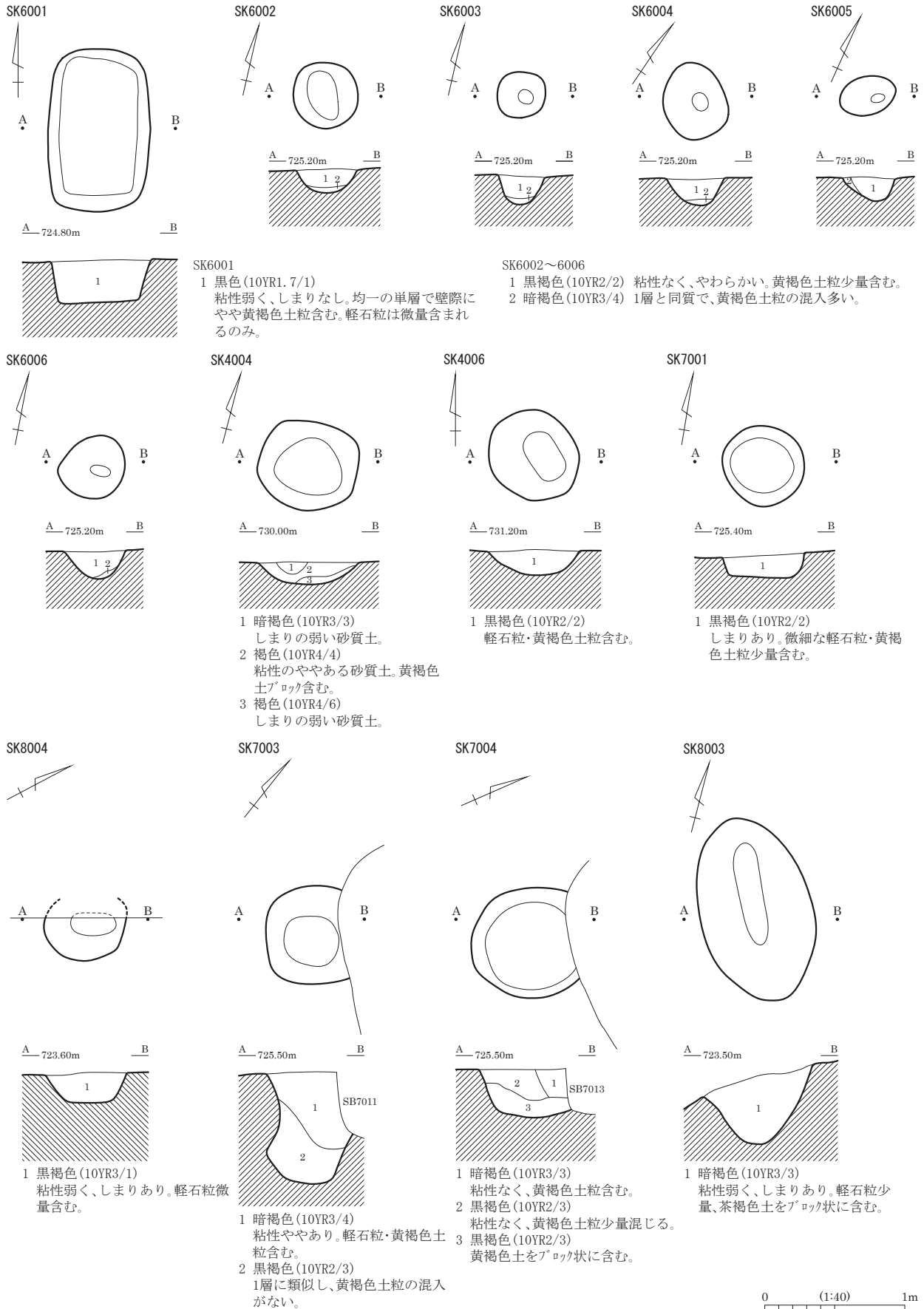
**時期：**出土遺物がなく、時期決定できない。

**SK7001** [第 107 図]

**位置：**7区の緩斜面上部。古墳時代前期の SB7002 の北西にある。V M 17 グリッド。

**形状・構造：**長径 60cm、短径 57cmの円形を呈する。断面形は鍋状で、検出面からの深さは 20cm。埋土は黒褐色土の単層。

**時期：**出土遺物がなく、時期決定できない。



第107図 SK4004・4006・6001～6006・7001・7003・7004・8003・8004 遺構図

SK8004 [第107図]

位置：8区の緩斜面上部平坦面。VP 15グリッド。

形状・構造：直径56cm程の円形を呈し、東半は道路により壊される。断面形は鍋状で、検出面からの深さは22cm。埋土は黒褐色土の単層。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK7003 [第107図]

位置：7区の緩斜面上部。VM 10グリッド。

形状・構造：直径70cm程の円形で、東半がSB7011と重なる。切り合い関係は不明。断面形は袋状で検出面からの深さは80cm。埋土は2分層され、下部は黒褐色土、上部は暗褐色土。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK7004 [第107図]

位置：7区の緩斜面上部。VM 15グリッド。

形状・構造：直径80cm程の円形で、SB7013と重なる。切り合い関係は不明。断面形は鍋状で、埋土は黒褐色土を主体とする。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK8003 [第107図]

位置：8区の緩斜面上部平坦面。VP 15グリッド。

形状・構造：長径134cm、短径80cmの楕円形を呈する。断面形は袋状で、埋土は暗褐色土の単層。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK1006 [第108図]

位置：1区の高位平坦面。III E 17グリッド。

形状・構造：長径122cm、短径115cmの円形を呈する。断面形は逆台形で、検出面からの深さは61cm。埋土は黒褐色土の単層。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK4005 [第108図]

位置：4区高位平坦面。II R 25グリッド。

形状・構造：長径170cm、短径135cmの円形を呈する。断面形は鍋状で、中央部に段を持って深くなる。検出面からの深さは63cm。埋土は暗褐色・褐色土が主体で、中央部に黒褐色土がみられる。

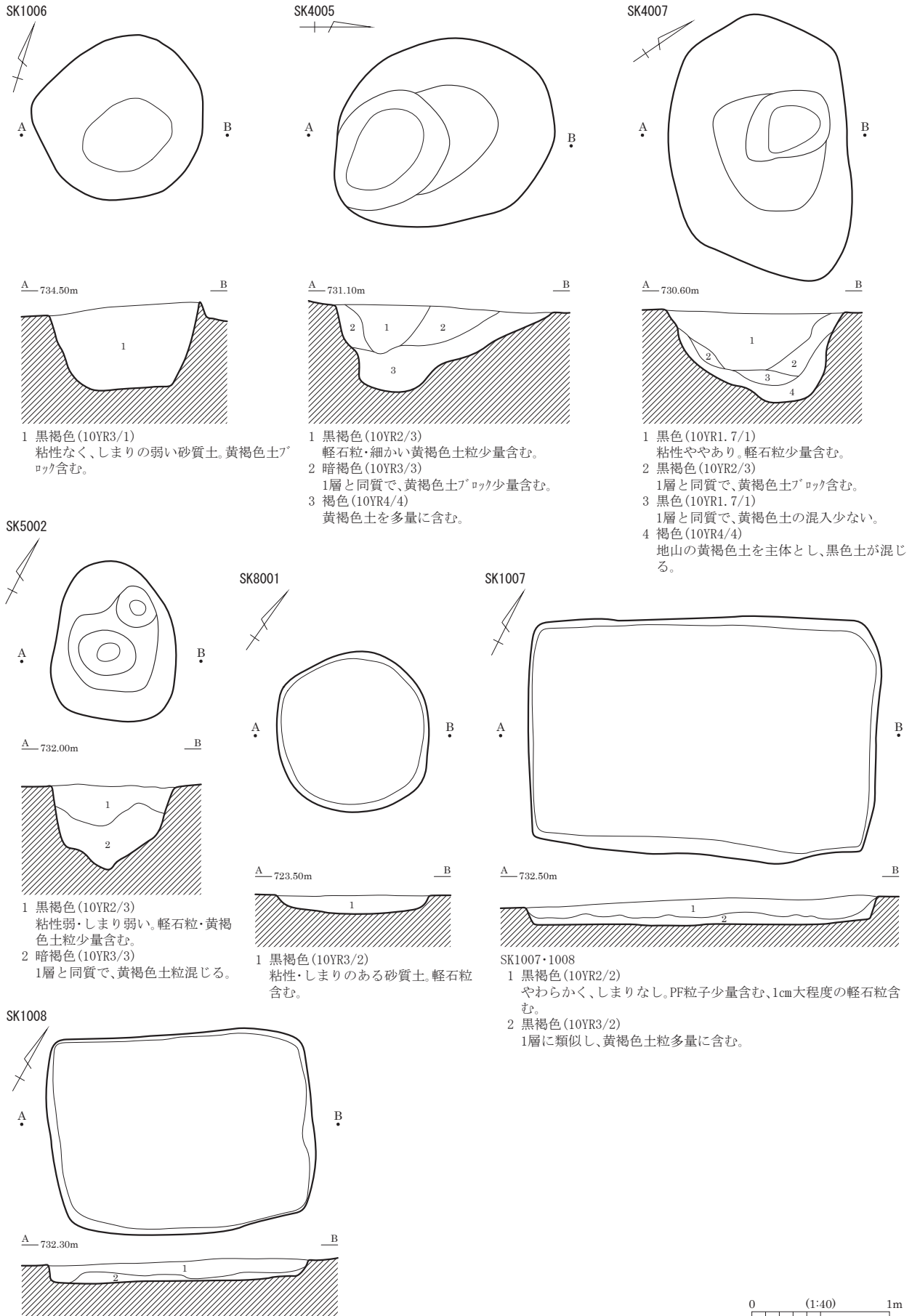
時期：出土遺物がなく、時期決定できない。

SK4007 [第108図]

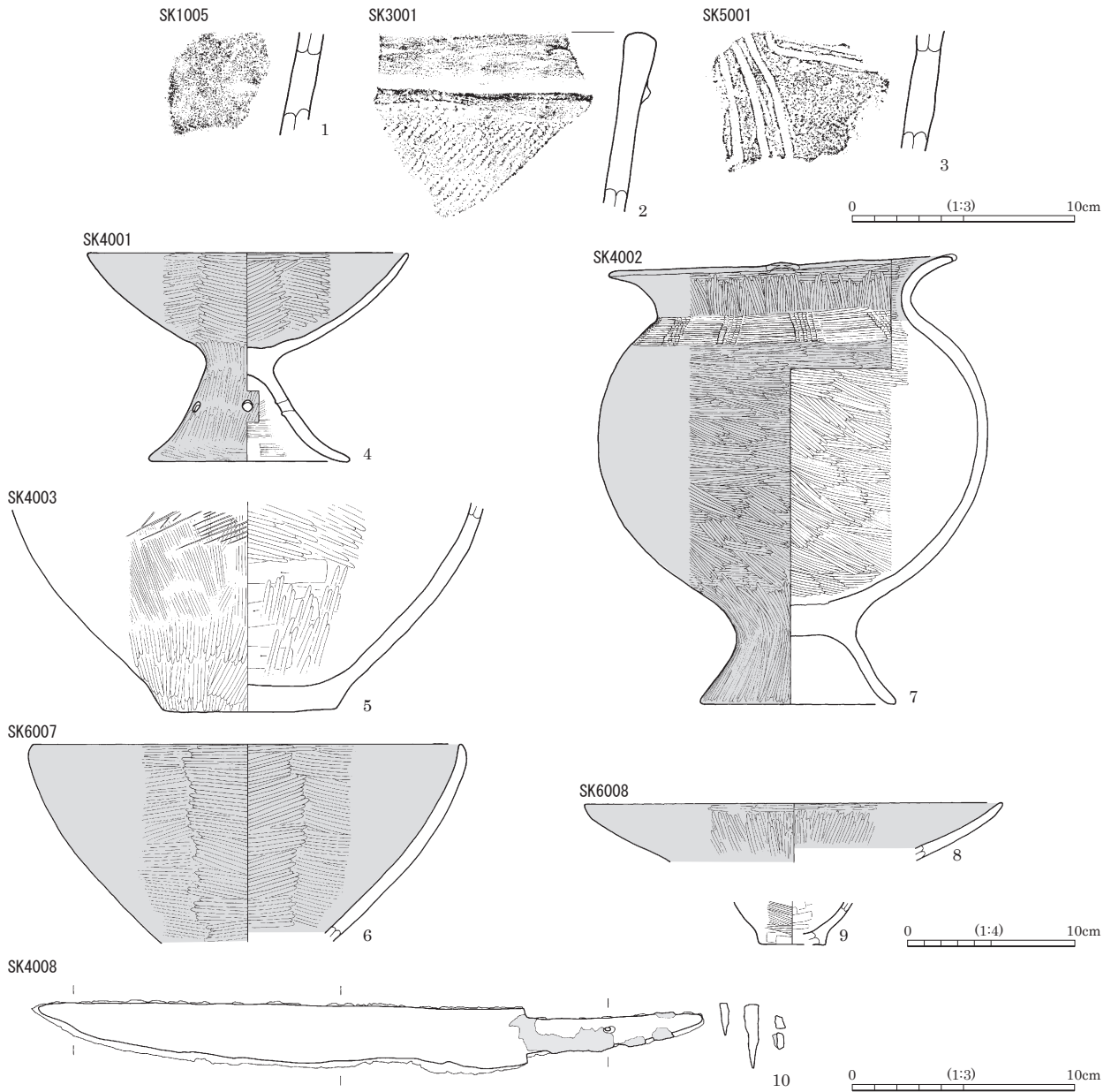
位置：4区の高位面。II S 17グリッド。

形状・構造：長径180cm、短径130cmの不整形円形を呈する。断面形は不整な鍋状で、検出面からの深さは74cm。埋土は土坑下部に褐色土が堆積し、上部は黒色・黒褐色土となる。

時期：出土遺物がなく、時期決定できない。



第108図 SK1006~1008・4005・4007・5002・8001 遺構図



第109図 SK 遺物図

**SK5002** [第108図]

**位置**：5区の高位平坦面。II W 20 グリッド。

**形状・構造**：長径 116cm、短径 90cmの不整円形を呈する。断面形は袋状で、底面が2ヶ所凹む。検出面からの深さは 60cmで、埋土は上部が黒褐色土、下部が暗褐色土。

**時期**：出土遺物がなく、時期決定できない。

**SK8001** [第109図]

**位置**：8区の緩斜面上部。V P 19 グリッド。

**形状・構造**：長径 116cm、短径 110cmの円形を呈する。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは 14cm。埋土は黒褐色土の単層。

**時期**：出土遺物がなく、時期決定できない。

**SK1007** [第108図]

**位置**：1区の高位平坦面。ⅢH 05, I 01 グリッド。同形態のSK1008が西側に近接する。

**形状・構造**：長軸253cm、短軸180cmの長方形を呈する。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは21cm。埋土は2分層されるが黒褐色土。

**時期**：出土遺物がなく、時期決定できない。

**SK1008** [第108図]

**位置**：1区の高位平坦面。ⅢH 05 グリッド。東側にSK1007が近接する。

**形状・構造**：SK1007と類似する。長軸192cm、短軸146cmの長方形でSK1007よりやや小形。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは16cm。埋土はSK1007と同じ。

**時期**：出土遺物がなく、時期決定できない。

## 4. 焼土跡

調査では8基の焼土跡を検出した。周辺も含めて精査したが、住居跡などの施設ではなく、単独で構築された焼土跡と判断した。

**SF6001** [第110図]

**位置**：6区の低位平坦面。古墳時代前期のSB6002の南側に位置し、南西1m程に同様な焼土跡SF6002がある。V I 10 グリッド。

**形状・構造**：低位面に厚く堆積するⅡ層黒色土層下部でSB6002などと同じく検出された。直径50～60cmの円形で浅く皿状に凹み、火床は明瞭に被熱する。

**時期**：出土遺物がなく時期決定できないが、周囲の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SF6002** [第110図]

**位置**：6区の低位平坦面。古墳時代前期のSB6002の南側に位置する。V I 10 グリッド。

**形状・構造**：検出状況はSF6001と同様で、検出レベルはSF6001よりわずかに高い。当時の地表面がⅡ層黒色土中にあったと考えれば、掘り込みの深さの差と言えようか。直径30cm程度の小規模で円形。SF6001同様浅い皿状の凹みで、火床は明瞭に被熱する。

**時期**：出土遺物がなく時期決定できないが、周囲の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SF6003** [第110図]

**位置**：6区の低位面と7区の底面をつなぐ谷状に狭くなる西側に位置する。V I 17・18 グリッド。

**形状・構造**：SF6001などと同様Ⅱ層黒色土層下部で、ほとんど火床が露出した状況で検出。直径40～60cmの不整形で、浅い皿状の底面が被熱する。

**時期**：出土遺物がなく時期決定できないが、周囲の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SF6004** [第110図]

**位置**：6区の低位面西端で7区の低位面につながる谷状に狭くなる部分にあたり、古墳時代前期の住居SB6007の東側に位置する。V I 14 グリッド。

**形状・構造**：検出状況はSF6003と同様。直径40cm程の円形に被熱する。

**時期**：出土遺物がなく時期決定できないが、周囲の遺構の状況から古墳時代前期の可能性が考えられる。



SF7001 [第110図]

位置：7区の高位面中位。VM 05 グリッド。4～5 m程東側にSF7002・7003があり、周囲を古墳時代前期の住居跡に囲まれるような場所に焼土跡がまとまって位置する。

形状・構造：古墳時代前期のSB7010 調査時に住居埋土中で検出。検出状況からSF7001はSB7010より新しい。直径60～70cm程の円形で、皿状に凹み被熱する。

時期：出土遺物がないが、周囲の遺構の状況から住居より新しい古墳時代前期の可能性が考えられる。

SF7002 [第110図]

位置：7区の緩斜面中位。VM 09 グリッド。

形状・構造：直径35cm程の円形で浅い皿状に被熱する。

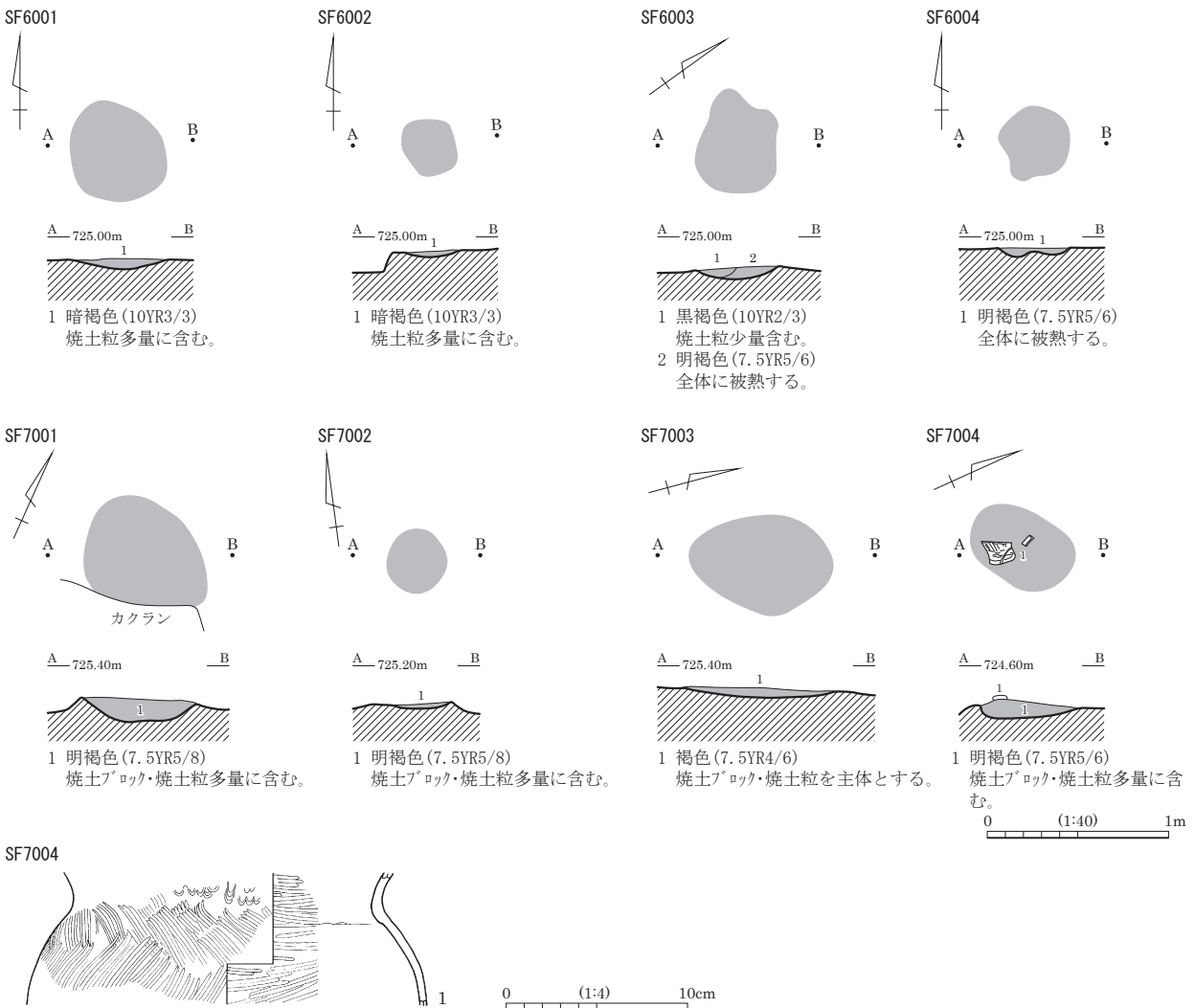
時期：出土遺物がなく時期決定できないが、周囲の遺構の状況から古墳時代前期の可能性はある。

SF7003 [第110図]

位置：7区の緩斜面中位で。VM 09・10 グリッド。

形状・構造：長径80cm、短径55cm程の楕円形で、浅い皿状に凹んで被熱する。

時期：出土遺物がなく時期決定できないが、周囲の遺構の状況から古墳時代前期の可能性はある。



第110図 SF 遺構図・遺物図

## SF7004 [第110図]

**位置：**7区の低位平坦面。V H 20, I 16 グリッド。

**形状・構造：**長径60cm、短径40cmの楕円形で、浅く凹み被熱している。

**出土遺物：**焼土上面から甕（第110図1）が出土。櫛描文の甕で、頸部に波状文、胴部には羽状文を施文している。

**時期：**出土遺物から古墳時代前期前半。

## 5. 溝跡

## SD4001 [第111図 PL21]

**位置：**4区の高位平坦面。II S 02・03・08・13・14・19・24・25, X 04・05・09・10 グリッド。

**形状・構造：**4区高位面の中程で北側から入り込む浅い谷状の凹みに沿うように調査区を横断し、遺跡の南側を区切る田切りから北側の湧玉川田切りを直線的に結ぶ。調査区南側の市道拡幅に伴う市教委の調査でも本溝が確認されており、南側の田切りまで続いていることは明らかである（佐久市教委 2009）。上面幅約3m、底面幅1.4～1.6m、検出面からの深さは50～70cmを測る。底面レベルは北側が約2m低くなるが、これは調査面での比高差と同じで地形に合わせてほぼ同じ深さに掘削している。調査区端に近い南側では3m程の長さで底面が10cm程高まる。断面形は逆台形で、底面から30cm程は急傾斜で立ち上がりそこから緩やかな傾斜で開く。西側に浅い溝が沿うが北側では不明瞭となる。埋土は底面付近に崩落による黄褐色土ブロックを多く含む黄褐色・暗褐色土が堆積するが、上部はほとんどが暗褐色土となる。自然堆積。底面に流水による砂粒などは見られない。田切りに直行する方向性や形状・構造などが350m西側のSD8002と類似する。

**遺物：**縄文時代から平安時代にかけての土器片が少量出土している。出土量は古墳時代前期の土器片が最も多いが、土師器や須恵器の坏、須恵器甕なども含まれる。中世以降の遺物は含まれない。

**時期：**出土遺物が少なく時期決定が難しいが、古代の遺物が含まれることから古代以降の遺構と考えられる。本溝は田切り間の台地を横断しており、何らかの区画溝であるが性格は明らかでない。

## SD8002 [第111図 PL21]

**位置：**8区の東端の平坦面。V K 24, P 04・05・09・10・15 グリッド。

**形状・構造：**7区から伸びる緩斜面下部で、北西側から入り込む浅い谷との間の平坦部に掘られる。調査区を直線的に横断して北側の湧玉川の田切りに達しており、田切りの崖面にU字状の窪んだ溝が確認できる。上面幅2～3m、底面幅1～1.5m、検出面からの深さ50～80cmを測る。底面レベルは北側の湧玉川田切り寄り40cm程低いが、地形に合わせた同程度の掘削深度である。断面形は逆台形で、上部は傾斜が緩やかになり開く。西側に浅い溝が沿う。埋土は暗褐色土を主体とし、下部は黄褐色土のブロックを多く含む。途中で黒褐色土をレンズ状に含むところもある。流水による砂粒などは認められない。溝の状況は東側のSD4001とよく類似する。

**遺物：**SD4001同様に縄文時代から平安時代にかけての土器片が少量出土したのみ。中世以降の遺物は含まれない。

**時期：**出土遺物が少なく時期決定は難しい。SD4001と対になる区画溝か。



遺構	器種 種類	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳 前期	不明	その他
		土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器							
SD4001	個体 点数	2	1	2						1	3				1	82		
	重量(g)	20	5	46						8	339				20	803	96	
SD8002	個体 点数	8								14	2				2	62		
	重量(g)	54								223	34				20	505	29	
SD8003	個体 点数	1														6		
	重量(g)	3														61		

第70表 SD 出土土器集計表

## SD8003 [第111図 PL21]

**位置：**8区の緩斜面上部。V P 16・21・22グリッド。SB8001を切る。

**形状・構造：**緩斜面上部の平坦部から緩斜面下方に向かい北西方向に伸びる。当初、遺構検出段階では確認できず、SB8001を調査中に重複する溝跡として検出した。溝の部分では住居の壁や貼床が確認できないことから溝が住居を切ると判断した。溝は上面幅60～80cm、底面幅40cm前後で、検出面からの掘り込みは最大で20cm程度で斜面下方の北側に向かい浅くなり調査区中ほどで消える。埋土は黒褐色土の単層。

**遺物：**土師器の小片がわずかに出土したのみ。

**時期：**出土遺物が少なく時期決定は困難であるが、SB8001を切ることから古墳時代後期以降といえる。

## 6. 小穴群

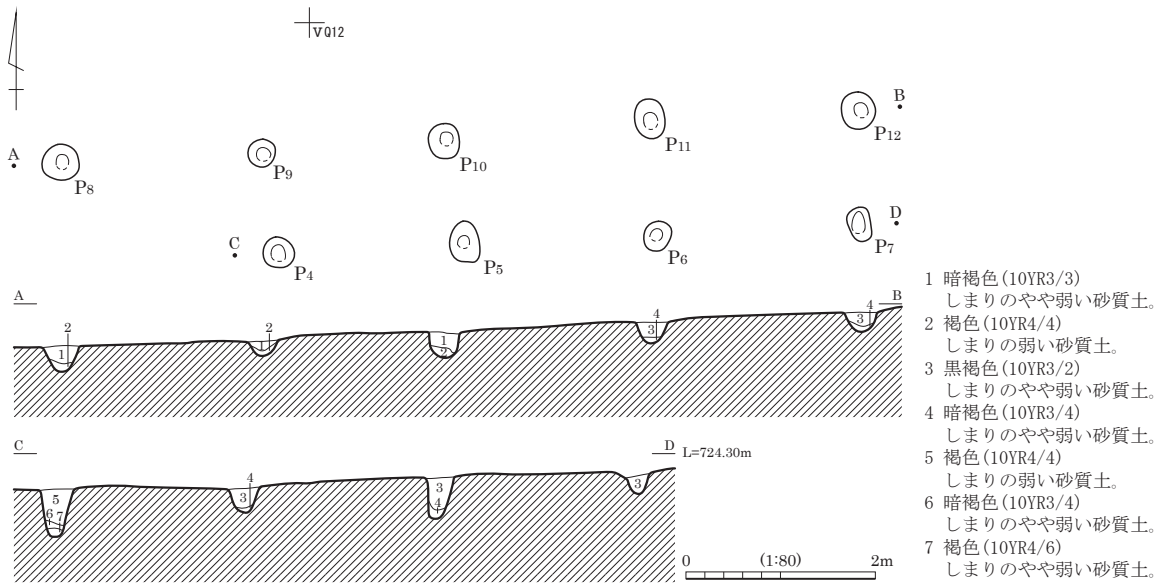
## ST7001 [第112図 PL21]

**位置：**7区の緩斜面下部。V Q 11・12グリッド。

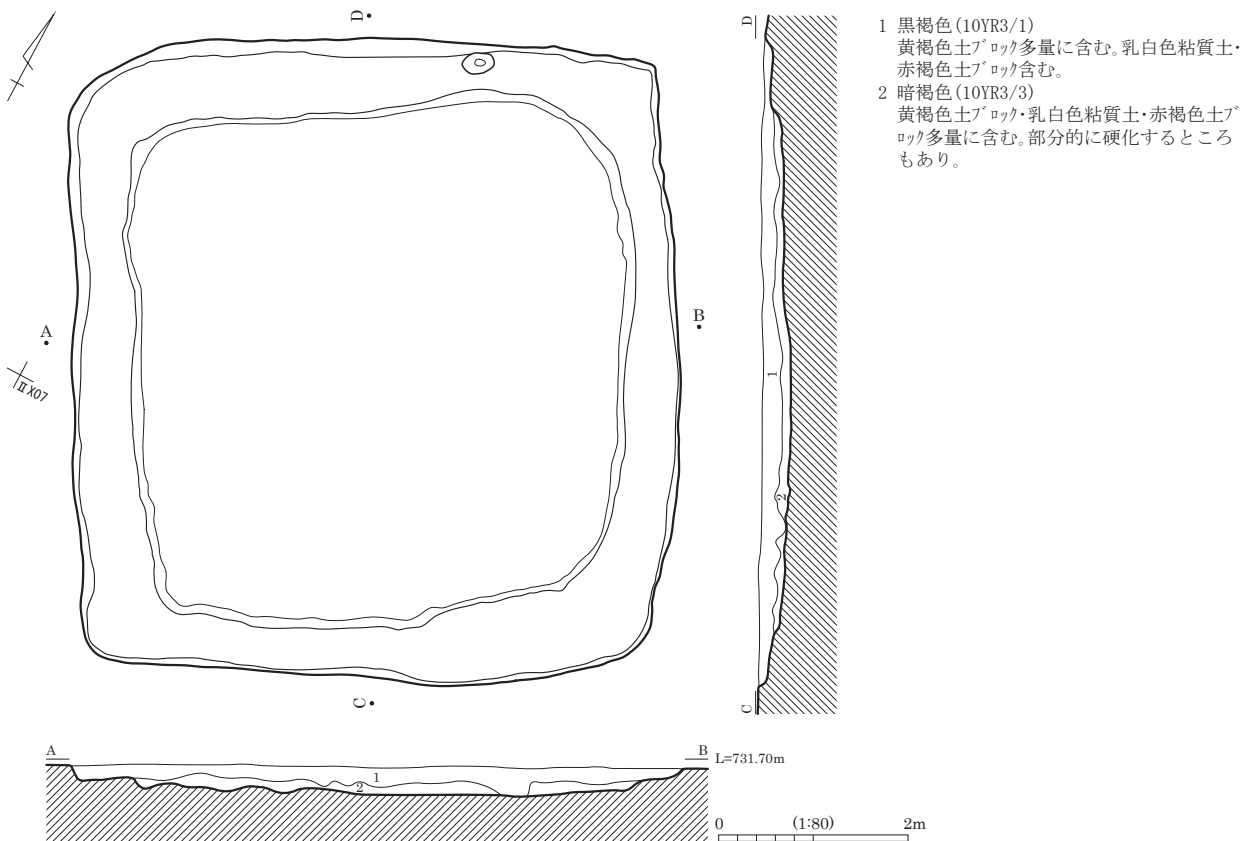
**検出：**7区の緩斜面上部から西側に下がった平坦部で盛土・表土を除去したところ、Ⅲ層浅間第一軽石流上面で、小規模なピット群が確認された。規模等は不明だが掘立柱建物跡を想定した。周辺を含め精査したところ約30基のピットとなり、上面形を図化した後断ち割り断面観察を行った。その結果、多くのものは数cm程度と浅かったり、断面形が整っていなかったりしてピットとは認定できないものであった。残った人為的に掘られたと判断したピットは結果的に9基となった。配置状況から掘立柱建物跡とは認めにくいためここでは小穴群として報告する。

**構造：**9基のピットはほぼ東西方向に北側で5本、南側で4本の2列の配置をなす。各ピットの間隔は中芯で東西方向では205～225cm、南北方向では105～120cmとなる。各々のピットは直径25～40cm程の円形で、検出面からの深さは20～50cm程を測る。埋土には黒褐色土を基調としたもの（P 5・6・7・11・12）と暗褐色・褐色土を基調としたもの（P 4・8・9・10）の二者がある。掘立柱建物跡というより、柵列などが想定されようか。

**時期：**出土遺物がなく、時期決定できない。



第112図 ST7001 遺構図



第113図 SX4001 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰軸陶器			土師器	須恵器							
種類																	
個体	1									1							
重量(g)	3									13							

第71表 SX4001 出土土器集計表

7. 不明遺構

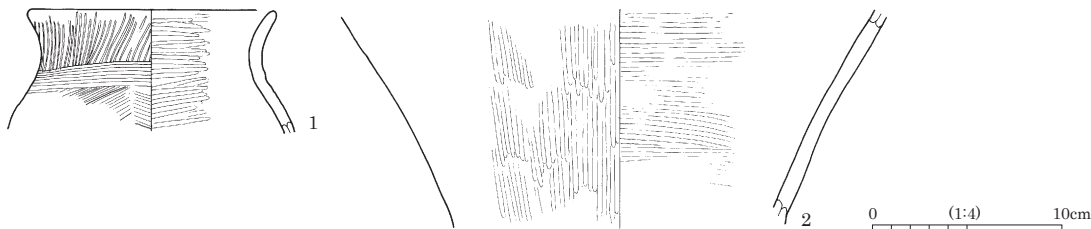
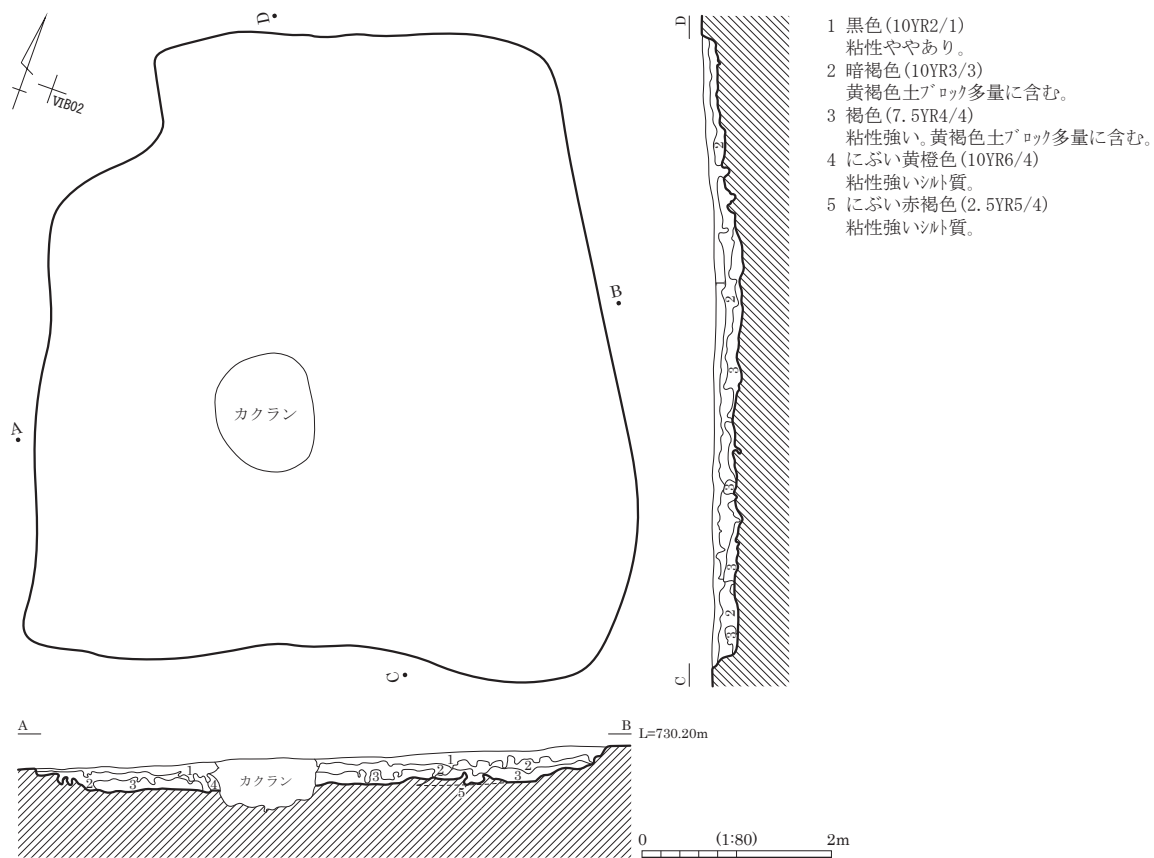
SX4001 [第113図 PL21]

位置：4区の高位平坦面。ⅡX 01・02・07 グリッド。

検出：Ⅲ層浅間第一軽石流上面の黄褐色土層で、平安時代竪穴住居跡の埋土と共通する黒褐色土が方形状に見えたため、この期の住居跡と判断して着手した。しかし、埋土確認用にトレンチを掘削したところ、明確な床面がなく、埋土も住居跡と異なることから不明遺構とした。

埋土：黒褐色土や暗褐色土で、乳白色粘質土や赤褐色土ブロックを含む。この粘質土やブロックは地山の浅間第一軽石流が変性した部分に認められるものである。

構造：南北6.60m、東西6.40mの方形を呈する。主軸はN 28° W。掘り上がりは二段構造の方形堅穴の



第114図 SX5001 遺構図・遺物図

器種	甕			壺		高坏	鉢	器台	甌	詳細分類不可		縄文	古代	不明	その他
	箱清水系	ハコ	その他	箱清水系	その他					カメ・ツボ類	カガク・ハケ類				
種類	1	5		1	20					67	14				
個体	1	5		1	20					67	14				
重量(g)	155			579						1261	94			24	

第72表 SX5001 出土土器集計表

ように図化した。明確な床面はなく、起伏が著しい。他にピットや炉・カマドなどの施設は全く認められない。規模は住居跡と同程度であるが、床面やその他施設がないことから住居跡ではない。また、変性した軽石流の粘質土を採取したような凹みもなく採掘坑ともいえない。あたかも住居を構築しようと掘り始めたところ、地山が乾燥した軽石流でなく変性した粘質土であったため住居構築をやめたかのようであるが根拠もなく遺構の性格は不明。

**出土遺物：**土師器坏片と須恵器甕片が各1点出土したのみ。

**時期：**出土遺物が少なく、時期決定はできない。

#### SX5001 [第114図 PL21]

**位置：**5区の高位平坦面で、6区低位面から伸びる浅い谷斜面に移行していく付近にあたる。ⅡV 22, VI B 02 グリッド。周辺には平安時代のSB5001・5006・5008が近接する。

**検出：**谷地形に合わせて黒色土を浅間第一軽石流上面の黄褐色土まで下げて、黒味の強い広がりとして確認。住居跡を想定してトレンチを掘り下げたところ4区 SX4001と同様な状況が確認されたため、不明遺構とした。

**埋土：**上部は黒色土や暗褐色土、下部は褐色土で、地山の浅間第一軽石流は赤褐色や乳白色の粘質土に変性している。

**構造：**6～6.5 m程の不整形を呈する。主軸はN 30° W程度。明確な床面はなく、変性した地山面が凹凸をもった状況で確認された。ピットや炉・カマドなどの施設は確認されなかった。遺構の状況は4区 SX4001と類似する。遺構の性格などは不明。

**遺物分布：**検出面段階で古墳時代前期の土器が出土。

**出土遺物：**1は口縁部・胴部に櫛描斜状文、頸部に直線文を施した甕。2は無彩の壺胴部。

**時期：**出土遺物は古墳時代前期前半の土器であるが、検出面での出土であり時期決定は保留する。

## 8. 遺構外出土の遺物

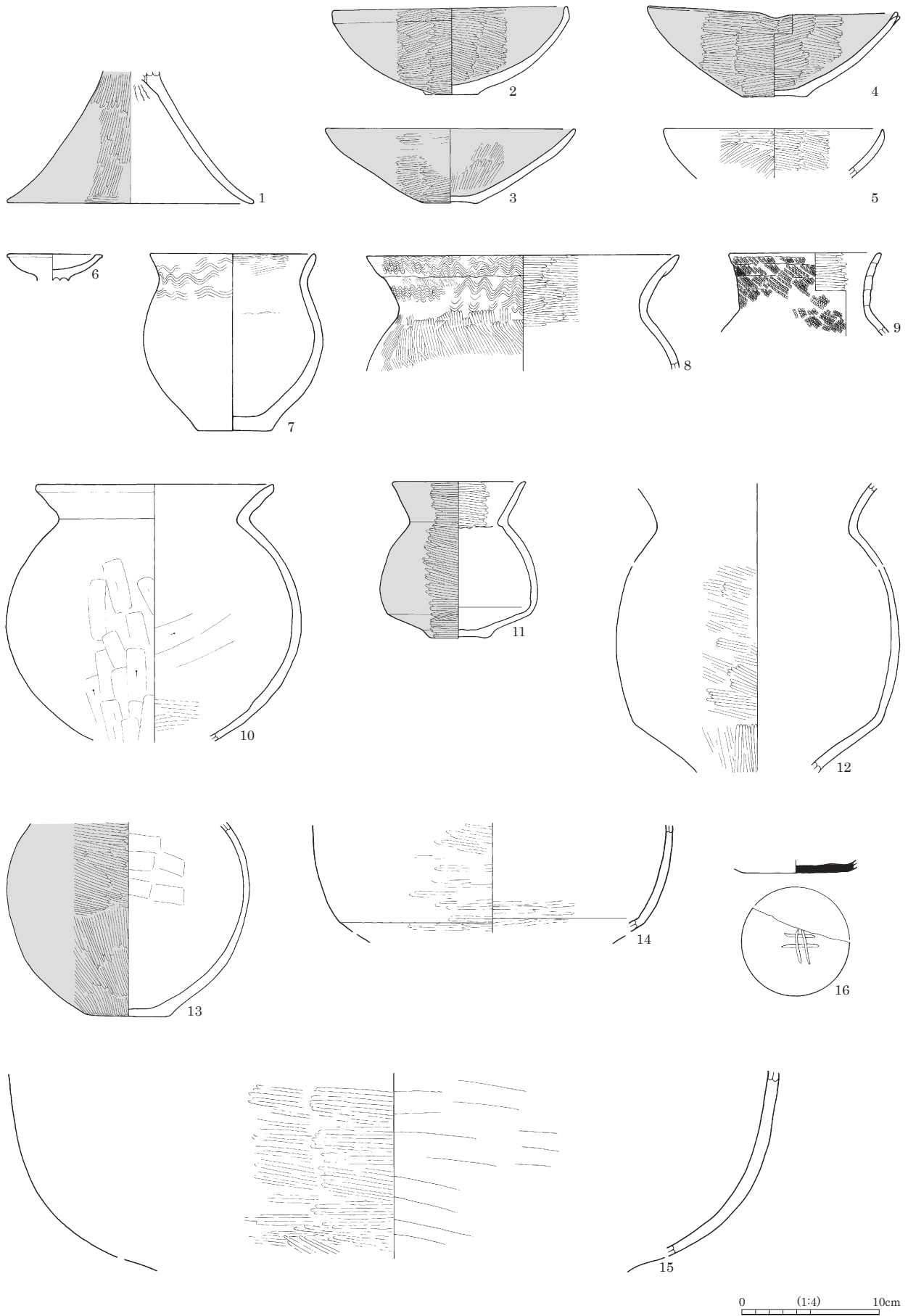
近津遺跡群の出土遺物はほとんどが遺構内から出土したもので、遺構外出土遺物は少ない。耕作や盛土造成時の削平などにより遺物包含層の遺存状態が悪いことが影響しているが、もともと遺構が形成された時期以外には遺跡内での活動が低かったものといえよう。なお、明らかに遺構に伴わない縄文時代の遺物などもここで扱う。以下時代順に記載していく。

第115図は縄文土器。1～11は早期押型土器で細久保段階のもの。1～10は楕円押型土器で、横位密接施文される。8・9はやや大粒の楕円文。1は無文部を残す。11は柵状の押型文と思われ、施文方向は不規則で原体を押し引いたような長い線状となる部分もある。12は撚糸文が施文されたもので、比較的薄手。押型土器に伴うものか。13・14は早期沈線文系土器。細い沈線で幾何学的に区画する。13は沈線間に貝殻腹縁文を加える。15は無文土器。胎土に細かい砂礫や雲母を含む。16は前期後半の結束縄文が施文された土器。胎土に繊維は含まない。17～19は縄文施文の土器。中期後半頃から後期前半頃か。19は湾曲する胴上部片で細い区画線内に無節縄文を施文。20～41は後期前半。20～23はSM4002の検出時出土。粗い縄文を地文とし細い沈線で区画する。内面はミガキが顕著。24～27も細い沈線文を施す。28・29は口縁下に横位の沈線を廻らせ、以下は沈線による縦区画内に雨だれ状の刺突文を加える。30・31は同一個体で、頸部以上無文の鉢形土器で、頸部を横沈線で区画し以下に弧状の文様を描く。32・33も同様。34～37も同一個体で、細かい縄文を地文とし沈線で弧状や横U字状の区画文を描く。38は沈線を沿えた隆帯の区画内に縄文を施文する。39・40は同一個体で、口縁下に太い沈線が引かれ、胴部も太

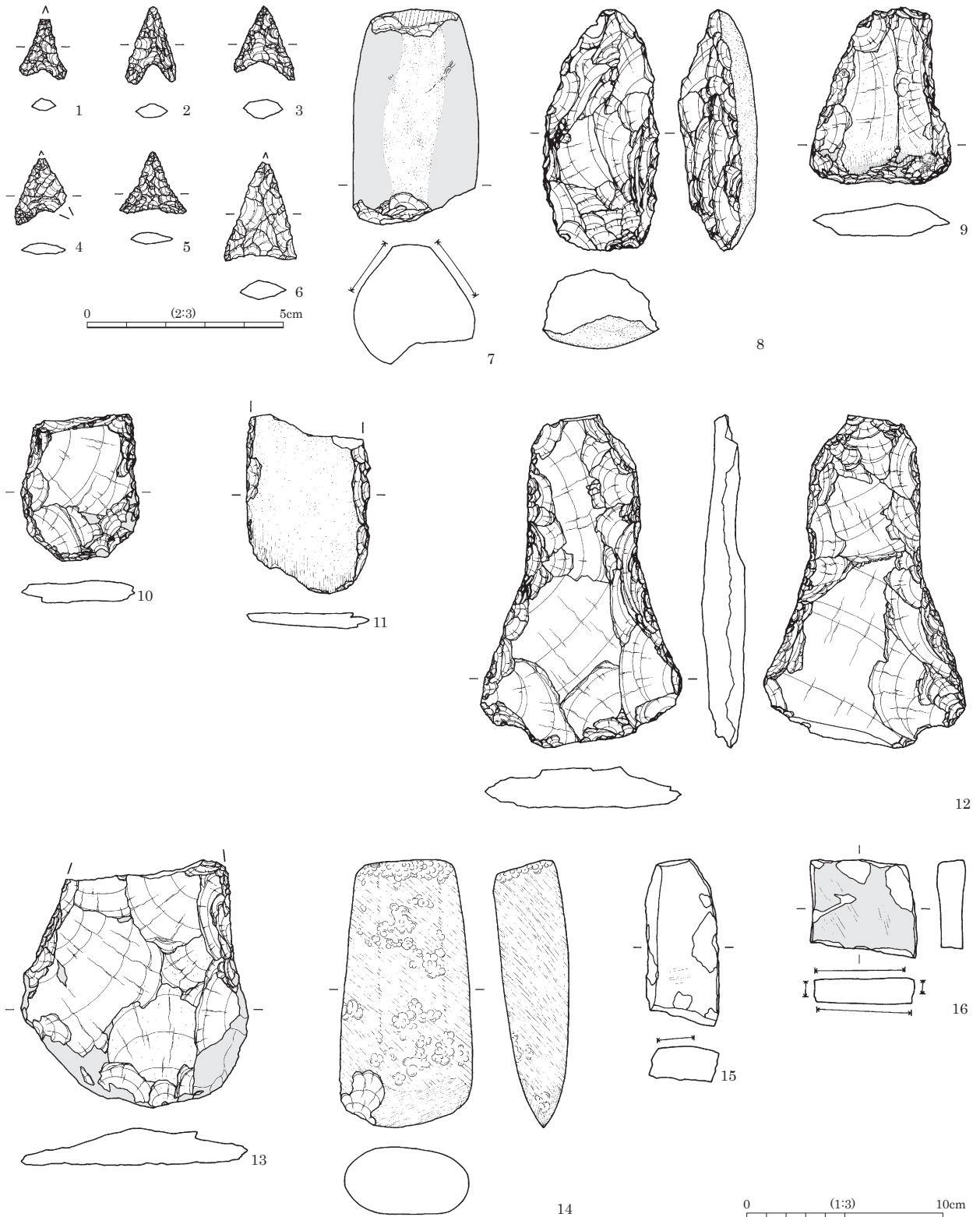


第115図 遺構外 遺物図 (1)





第116図 遺構外 遺物図 (2)



第117図 遺構外 遺物図 (3)

い沈線で区画し中を細かい縄文で充填する。円形の刺突文も加える。器面は磨かれ平滑に仕上げられる。41は刻みを加えた低い隆帯の下を沈線で区画し、区画内は細かい縄文を充填する。

第116図1～15は古墳時代前期前半の土器。1は赤彩の大型高坏の脚部。2～5は鉢。底部から直線的に開く形態が多く、2は口縁端でやや内湾する。4は片口鉢。5を除き赤彩される。6は小型器台の浅い皿状受部で、脚部への貫通孔はない。7・8は櫛描文施文の甕。8は折り返し口縁。口縁部には櫛描波

状文が施文される。9は埼玉比企地方の吉ヶ谷式系の甕。薄手で、器表面に輪積み痕を残すようにRLの縄文が施文される。10は口縁部が「く」の字に短く外反し、球胴となる。11は赤彩の薄手広口の壺で、胴下半部が潰れたような器形となる。底部は小さく、胴下半に屈曲を持つ。12・14・15は無彩の壺。胴下半に弱い屈曲を持つ。13は赤彩壺で胴下半の屈曲はなく球胴状となる。無頸壺か。16は須恵器坏底部で、底面に「井」の刻書がある。3区の検出面出土。

第117図は遺構外出土の石器。1～6は石鏃で、6は黒色安山岩で、他は黒曜石製。7は磨石。砂岩の棒状を素材とし、断面三角形の側面が磨られ、稜線部も2～3cm幅で磨られて平坦となる。長軸端部は欠損するが、敲打によるものか。いわゆる特殊磨石（穀磨石）。8はホルンフェルス製の礫器。厚手で斧状となる。7・8は早期押型文土器が比較的多く出土した5区の遺構外出土で、押型文土器に伴うものと考えられる。9～13は打製石斧。9～11は凝灰岩製で、扁平で板状となり基部欠損。12・13は黒色安山岩製の打製石斧。刃部が広がり、13は刃部が磨滅する。14は変輝緑岩製の磨製石斧。基部に敲打痕がある。15・16は流紋岩製の砥石。長方体で、多面を砥面として使用している。

### 第3節 小結

近津遺跡群の調査は、湧玉川の田切り谷に沿った台地縁辺部の延長700m、38,300㎡が調査された。この調査と佐久市教委による周辺部の調査などから、近津遺跡群は縄文時代から平安時代にかけての比較的小規模な集落跡であることが明らかとなった。ここでは、近津遺跡群の遺跡形成の消長を中心に整理していきたい（第118図）。

近津遺跡群で遺跡形成が始まるのは縄文時代である。陥し穴は埋没谷の谷頭付近や湧玉川の田切り谷に向かう斜面などで9基が検出されている。調査部東側の1～3区では、幅の狭まる台地をさらに刻む埋没谷の谷頭周辺に土坑が穿たれている。長楕円の形態をとるSK1003と1004、SK2001と2003は埋没谷の谷頭を挟んで15～20m程離れて等高線に直交するように設置されている。2基は規模や底面施設を持つ点など類似性が認められ、組み合わせられて設置されていた可能性がある。8区の長楕円形を呈するSK8005はやや小規模で底面施設がなく、緩斜面上部に単独で設置されている。一方、円形の陥し穴は、埋没谷の谷頭や湧玉川の田切り谷に開放する低位面に向かう斜面に単独で設置されている。円形の陥し穴は隣接する鎌田原遺跡にもあり、形態などが類似する。遺物はSK3001の埋土から縄文時代後期前半の土器片が1点出土したのみで、他から遺物の出土がなく、時期決定が難しい。陥し穴の形態差は、構築された時期や狩猟対象・狩猟方法などが関係していると考えられる。しかしながら、今回の調査例だけでは不明といわざるを得ない。

今回、陥し穴以外の遺構は検出されなかったが、4区から5区にかけて縄文時代後期前半頃の土器片が140点程と比較的多く出土している。また、3区南側に隣接する近津遺跡群下宮原遺跡で縄文時代中期後半の土器片が出土した小規模な竪穴住居跡が検出されている（佐久市教委 2009）。このことから、調査区周辺には散発的に当該期の遺構が存在する可能性がある。ただし、縄文時代の近津遺跡群ではまとまって住居を構えるような状況はなく、鎌田原遺跡同様に狩猟などの場となっていたと考えられよう。

近津遺跡群を含む佐久市北部の浅間山火砕流台地縁辺から湯川周辺では、弥生時代中期後半に大規模な集落が形成され始め、後期になるとさらに遺跡数や集落規模が増大する。しかし近津遺跡群ではこの時期の集落が存在せず、弥生時代後期の多数の住居跡や墓跡などが発見されている当遺跡南西の西近津遺跡群や周防畑遺跡群の状況とは明らかに異なっている。拡大した弥生時代後期集落は古墳時代に入ると、分散小規模化して田切りに面した台地縁辺部や河川の低位段丘面などに新たに集落を展開するようになる。近

津遺跡群の古墳時代集落もこうした状況を示すものである。

古墳時代前期の遺構には竪穴住居跡・竪穴状遺構 30 軒と土坑 5 基がある。住居跡は 4 区から 5 区の高位平坦面、6 区の低位平坦面、7・8 区の緩斜面と各地形面にわたって認められ、土坑は 4 区の高位平坦面と 6 区の低位平坦面の 2ヶ所でまとまって検出された。

住居形態は鎌田原遺跡と同様に隅丸方形を基調とし、規模が一辺 3～4.5 m 以内の比較的小型と、それよりやや大きい 5 m 前後とがある。住居構造は住居南東部に貯蔵穴を有し、中央部北側に地床炉を持つなど鎌田原遺跡の住居跡とも共通する点が多い。主軸方向は、やや西を向くものとやや東を向くものの二者がある。また、住居床面直上に炭化物の遺存している住居跡が多いこともこの時期の特徴である。住居跡の分布状況は、地形面でまとめ、その中での主軸方向や住居跡の位置関係などから、さらに小単位に分けられる可能性がある。

4 区から 5 区の高位平坦面では 8 軒の竪穴住居跡・竪穴状遺構と 3 基の土坑が検出された。住居跡は調査区内で重複することなく散漫に分布する。SB4002・4003、5003・5011 は主軸方向がやや西を向き、互いに住居規模なども類似する。SB4002 と 4003 は長軸が東西方向となり、掘り込みが浅い点なども類似し近接して構築される。SB5003 と 5011 は両者とも比較的大型で掘り込みが深い。SB5004・5009・5010 は主軸方向がやや東を向き、大型で深い掘り込みの SB5009 と小型で浅い掘り込みの SB5010 がある。土坑は 3 基とも住居跡のまとまりの外側にあたる北東部に位置し、直径 1 m 程の円形や楕円形を呈し、SK4002 で完形の広口壺が出土している。墓坑とするには規模が小さく性格が不明である。

6 区の低位平坦面では 7 軒の竪穴住居跡と 3 基の土坑が検出された。住居跡は調査区北側に寄って分布する。SB6001・6002・6004 の 3 軒は主軸方向がやや西を向く。SB6003 のみ他とは主軸がややずれるが他の 3 軒は主軸方向が類似し、10～15 m 程の間隔を持って構築されている。SB6001・6004 は大型で掘り込みが深く、SB6002 は小型で掘り込みが浅い。SB6005 と SB6007 は長軸が東西に長く、主軸方向も他の住居跡と大きく異なる。土坑は住居跡群の外側の南西部にあり、直径 60～70cm の円形で鉢や高坏片が出土している。状況が 4 区のものと同様のもので、性格は明らかでない。

7 区から 8 区の湧玉川の田切りに向う緩斜面では、7 区の緩斜面で 13 軒、8 区の田切り崖際の緩斜面下部で 2 軒の住居跡が検出されている。7 区は古墳時代前期の住居跡が最も集中する地区で、緩斜面上部から下部まで全域に分布する。主軸方向がほぼ北を向く SB7001・7003・7005・7013・8004・8005 と、やや西を向く SB7004・7007、主軸方向が東を向く SB7009・7010・7011・7012 がある。主軸方向がほぼ北を向く住居跡の SB7001 と 7003、SB8004 と 8005 は 2 軒が 7～15 m 程の間隔を持って並行するように構築されている。主軸方向がやや東を向く SB7011 は他の 3 軒とは異なり大きく東を向く。他の地区と同様に大型と小型の住居跡、掘り込みも深いものと浅いものの両者がある。

以上のように、古墳時代前期の住居群は地形面を主な区分として分かれ、さらにその中が主軸方向の向きなどにより細分される可能性が考えられ、4～5 軒程度の小規模な集落が隣接して存在した景観が想定できる。なお、近津遺跡群の古墳時代前期集落はその分布状況から、台地の中央部というより湧玉川の田切りや田切りに向う低位面・緩斜面を指向した占地意識がうかがえる。

出土土器については、鎌田原遺跡同様に各住居跡出土の遺物量が少なく、土器組成を把握できる状況ではない。全体的には各住居跡とも弥生時代後期の箱清水系譜の甕や壺・高坏を主体として、ハケ調整甕や小型高坏、小型器台なども組成するという類似した様相を示しており、住居跡間で明確な時間差がみいだせない状況といえる。甕は弥生時代後期の箱清水系の櫛描文を施したものが残存すると共に、ハケ調整甕も一定量認められる。櫛描文系の甕は頸部の屈曲が強く、文様も波状文が粗く乱れるなどの変化がみとれる。S 字口縁甕は SB5010・7010 にあり、胎土が在地の土器と同一で、在地化した土器といえよう。壺

も同様に箱清水系の壺が残存し、赤彩を施さないものが多く、胴部は球状となるなどの変化が生じている。SB7003 出土の口唇部や段部に刺突文を持つ二重口縁壺は特異な形態で、近隣の周防畑遺跡群辻の前遺跡に類例がみられる（佐久市教委 2001）。胴下半部に焼成前の穿孔が認められ、土器の機能を失わせて特別に用いられた土器か。高坏は箱清水系譜のものが多く、東海地方の影響を受けたと考えられる小型で脚部が開き、円形透かしをもつものがSB5003・6005・6007・8005などに認められる。小型器台はSB5009・7003・7011・8004で出土し、SB7011の器台は北陸地方の影響を受けたものと思われる。なお、小型丸底土器は組成していない。こうした土器の様相から近津遺跡群出土土器は古墳時代前期前半に位置付けられる。近津遺跡群の古墳時代前期集落は、前期前半の短期間に営まれた集落といえる。

古墳時代中期から後期にかけて、遺構は激減する。中期では2区と3区で各1軒の竪穴住居跡がある。出土土器が類似するものの、住居構造にはカマドの有無による差があり、若干の時間差が考えられる。4区で検出された2基の円形周溝墓は土器を伴わないため時期決定が難しいが、SM4002出土の鉄鎌が長三角形の長頸鎌で、頸部が台形闊となるなどの点から古墳時代中期頃と想定した（杉山 1988）。なお、佐久地域で主体部が残る周溝墓は少なく、鉄鎌を副葬したものが存在しない。古墳時代ものとしては、近隣の北西久保遺跡で古墳時代中期の円形周溝が検出されている（佐久市教委 1987）。主体部は削平されて残っていないが形状や規模が類似する。岩村田遺跡群西一本柳遺跡（佐久市 1997）や枇杷坂遺跡群円正坊遺跡（佐久市 2002）でも古墳時代中期から後期の同様な周溝が検出されており、低墳丘の墳墓は古墳時代中期頃まで存在したものと思われる。ただし、近津遺跡群において古墳時代中期の遺構は住居跡が2軒のみで、周溝墓と集落の関係について課題が残る。

古墳時代後期も8区の緩斜面上部に構築される2軒の竪穴住居跡のみで、2軒が近接し、規模や主軸方向などは類似する。また、今回の調査区の南西側に位置する近津遺跡群北近津遺跡（佐久市教委 1972）では古墳時代中期から後期の竪穴住居跡が13軒確認されている。8区の古墳時代後期住居跡はこの集落の広がりとも考えられる。

古墳時代後期以降、近津遺跡群に奈良時代から平安時代前半の遺構は存在しない。再び、近津遺跡群に遺構が残されるのは平安時代後期になってからである。検出遺構は竪穴住居跡10軒である。このうち8軒は、4区から5区にかけての近津遺跡群で最も広い高位平坦面となる部分に、30～50m程の間隔を持って散在している。なお、3区の南側に隣接する近津遺跡群下宮原遺跡（佐久市教委 2009）でも同時期の竪穴住居跡が1軒検出されており、合計では9軒となる。さらに東側では、1区で1軒、その東側国道141号バイパス地点の近津遺跡群上宮原遺跡（佐久市教委 1992）で1軒、バイパス東側の小諸市鎌田原遺跡（第4章）で3軒と、この東側範囲でも5軒が40～50m程の間隔で散在する。一方、調査区西側7区の湧玉川の田切り崖際に近い斜面下部でも1軒の該期住居跡が検出されている。竪穴住居跡はほとんどが南東隅に石組みカマドを持つもので、構造や主軸方向などが類似する。なお、住居北東隅が土坑状に張出す形態のSB4001・5006は、曾根新城遺跡（佐久市教委 1995）、長土呂遺跡群聖原遺跡（佐久市教委 2005）などに類例が認められるものの、用途などは不明である。

竪穴住居跡からの出土遺物は非常に少ない。出土土器には羽釜が目立ち、非ロクロ成形で鐙が全周するものと部分的に貼付されるものがある。他の食器類は非常に少なく、坏が小型で皿状と大型のものがある。また、SB5006で北宋銭（天禧通宝）1枚が出土しており、初鑄年は1017年で11世紀後半から12世紀前半とした住居跡時期と符合する。

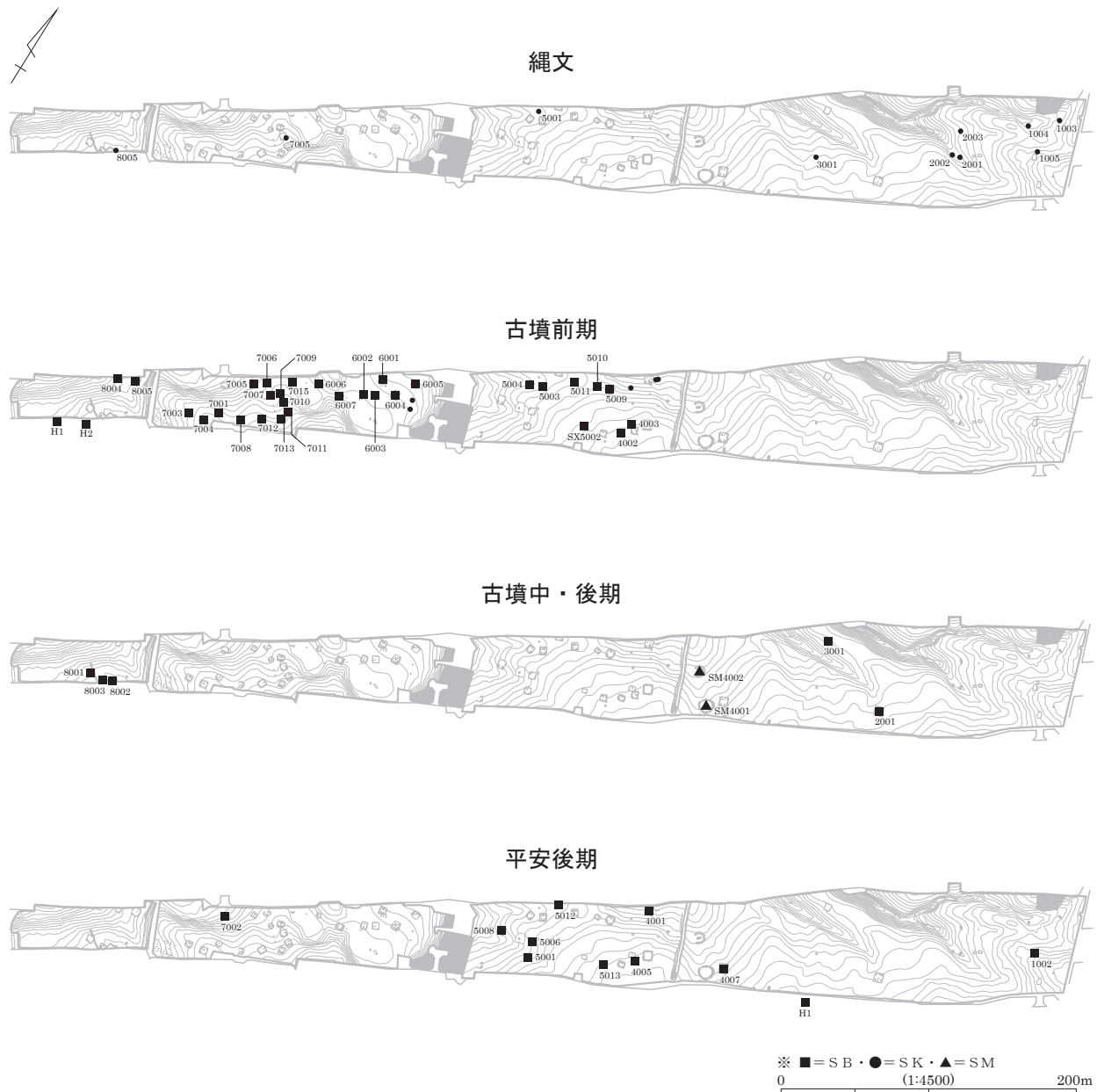
住居跡以外では、SB4001内に構築された墓坑SK4008がある。住居内床面を穿った方形の墓坑で、上面はカマド構築礫で塞いでいる。内部からは頭部を北に向けた人骨と刀子1本が出土している。住居廃絶時にカマド構築礫で塞いでいることから住居跡に関係する人物の可能性が考えられる。7区の斜面上部で

SB7008 を切って確認された土坑 SK7002 も大腿骨や寛骨などの人骨が出土している。時期は不明であるがSK4008 などと類似するものかもしれない。

いずれにしても、近津遺跡群の平安時代後期集落は小規模で散在的な在り方である。

なお、4区と8区で検出された溝跡は、田切りを分割するように遺跡南側の浅い田切りから北側の湧玉川の田切りまで直線的に結んでいる。4区のSD4001は近津遺跡群の南側を画する浅い田切りから直線的に湧玉川田切り崖方向に掘り込まれている。また、8区のSD8002は北側の湧玉川の田切り崖にU字状の落ち込みとして露出している(PL21)。台地を横断する状況から何らかの区画溝で、規模からみて掘削土量はかなりになり、周囲に盛れば大規模な区画となったと思われる。溝からは時期を決定できる遺物の出土がなく、明確な陶磁器類の出土もないため、中世以降に位置づける根拠もない。

以上のことから、近津遺跡群は古墳前期前半と平安時代後期を中心に形成された小規模集落と位置づけられる。



第118図 時代別遺構分布図

第5章 近津遺跡群

図No.	遺構	時期	位置		形状・規模（かつこ内は推定長）				炉(カマド)			その他	
			地区	グリッド	平面形	主軸方向	規模	床面積 ㎡	深さ cm	位置	形態		構築材
							南北×東西m						
99	SB1001	?	1区	III E21, J01	方形	N31°W	4.20×		15				
83	SB1002	平安	1区	III D14・15・19・20	方形	N24°W	(4.22)×		32	南東隅	燃焼部が張り出す	礫	
75	SB2001	古墳中期	2区	III L09・10・14・15	方形	N17°W	5.90×5.60	33.0	52	北壁中央	壁下内側に燃焼部	礫	
77	SB3001	古墳中期	3区	III F17・18・22・23	方形	N10°W	4.50×3.88	17.5	18				
84	SB4001	平安	4区	II R10・15	方形	N25°W	5.16×5.14	26.5	32	南東隅	壁下に燃焼部。煙道部大きく張り出す。	礫・粘土	北東隅張り出しあり
34	SB4002	古墳前期	4区	II W15, X11	隅丸方形	N10°W	3.53×4.14	14.6	16	中央北	地床炉		
36	SB4003	古墳前期	4区	II W10, X06	隅丸方形	N17°W	3.12×4.04	12.6	17	中央北	地床炉		
86	SB4005	平安	4区	II X06・07・11	長方形	N24°W	4.50×3.62	16.3	35	南東隅	煙道長く張り出す。旧カマドあり。	礫・粘土	
88	SB4007	平安	4区	II T13・17・18	長方形	N21°W	6.18×5.14	31.8	18	南東隅	壁下内側に燃焼部	礫・粘土?	
90	SB5001	平安	5区	VIB03・04・08・09	方形	N19°W	4.44×4.28	19.0	15	南東隅付近	燃焼部・煙道張り出す	礫・粘土	
100	SB5002	?	5区	VIA20・25, B21	方形	N30°W			3				
37	SB5003	古墳前期	5区	II V12・13・18	隅丸方形	N29°W	4.88×4.18	20.4	67	中央北	地床炉		
38	SB5004	古墳前期	5区	II V11・12・16・17	隅丸方形	N11°E	4.52×3.78	17.1	26	中央北	土器埋設		
92	SB5006	平安	5区	II V23, VIB03	方形	N22°W	4.40×4.30	18.9	23	東壁南より	煙道部張り出す	礫・粘土	
94	SB5008	平安	5区	VIA05, B01	長方形	N9°W	5.64×4.56	25.7	30	南東隅	壁下に燃焼部	礫・粘土	
39	SB5009	古墳前期	5区	II R22・23, W02・03	隅丸方形	N3°E	5.42×4.88	26.4	75	中央北	土器埋設		
41	SB5010	古墳前期	5区	II W01・02	隅丸方形	N8°E	2.90×3.30	9.6	23	中央北	地床炉		
42	SB5011	古墳前期	5区	II V04・05・09・10	隅丸方形	N36°W	5.14×4.46	22.9	45	中央北	土器埋設		ベッド状施設あり
95	SB5012	平安	5区	II V03・04・08・09	方形	N27°W	×4.82		26	西壁(南東隅)	壁下に燃焼部	礫・粘土	
96	SB5013	平安	5区	II W19	方形	N18°W	4.34×4.16	18.1	34	南東隅	煙道部張り出す	礫・粘土	
44	SB6001	古墳前期	6区	VE21	隅丸方形	N8°W	4.86×4.20	20.4	34	中央北	地床炉		
46	SB6002	古墳前期	6区	V I10	隅丸方形	N13°W	4.30×3.64	15.7	5	中央北・南	地床炉		
47	SB6003	古墳前期	6区	V J01・06	隅丸方形	N31°W	4.50×4.40	19.8	3	中央やや西	地床炉		
48	SB6004	古墳前期	6区	VE22・23, J02・03	隅丸方形	N4°W	(5.20)×(4.56)		76	中央	地床炉		
50	SB6005	古墳前期	6区	VE13・14・18・19	隅丸長方形	N79°W	(3.3)×(4.4)		50	中央西	土器埋設		
51	SB6006	古墳前期	6区	V I11・12	隅丸長方形	N19°W	(3.6)×(2.8)		6	中央やや西北	地床炉		
52	SB6007	古墳前期	6区	V I13・14	隅丸長方形	N86°E	3.96×4.90	19.4	43	中央東	土器埋設		
54	SB7001	古墳前期	7区	VL20・25, M16・21	隅丸方形	N1°W	3.68×3.81	14.0	17	中央北	地床炉		
98	SB7002	平安	7区	VL09・10・14・15	方形	N34°W			17	南東隅	燃焼部張り出す		
55	SB7003	古墳前期	7区	V Q03・04	隅丸方形	N1°W	4.08×(4.05)	16.5	34	中央北	土器埋設		
57	SB7004	古墳前期	7区	V Q04・05	方形	N10°W	4.50×4.80	21.6	20	中央	地床炉		
58	SB7005	古墳前期	7区	VM02	隅丸方形	N0°W	3.10×3.24	10.0	54	中央北	炉縁石		
59	SB7006	古墳前期	7区	V H22・23, M02・03	不整形				20	中央北・南	地床炉		
60	SB7007	古墳前期	7区	V H24, M04	隅丸方形	N14°W	4.12×4.76	19.6	65	中央北	炉縁石		
62	SB7008	古墳前期	7区	VM17・18	不整形		3.68×(3.8)		8	中央北	地床炉		
63	SB7009	古墳前期	7区	VM03・04	隅丸方形	N16°E	2.82×3.12	8.8	24	中央北	地床炉		
64	SB7010	古墳前期	7区	VM04・05	隅丸方形	N40°E	4.26×4.50	19.2	5	中央東	地床炉		
65	SB7011	古墳前期	7区	VM05・10, N01・06	隅丸方形	N114°E	4.13×4.56	18.8	52	中央東	地床炉		
66	SB7012	古墳前期	7区	VM14	隅丸方形	N27°E	4.80×4.10	19.7	63	中央北	土器埋設		
68	SB7013	古墳前期	7区	VM10・15, N06・11	隅丸方形	N2°W	3.87×3.64	14.1	50				
69	SB7015	古墳前期?	7区	V H19・20	隅丸方形?				32				
78	SB8001	古墳後期	8区	VP21	方形	N1°W	3.62×3.34	12.1	21	北壁中央	壁下内側に燃焼部	礫	
81	SB8002	古墳前・中期	8区	VP18・23	長方形	N10°E	5.20×6.78		28				
80	SB8003	古墳後期	8区	VP22・23	方形	N0°W	3.12×3.50	10.9	43	北壁中央	壁下内側に燃焼部	礫・粘土	
70	SB8004	古墳前期	8区	VP02・07	隅丸方形	N0°W	×(3.6)		19				
71	SB8005	古墳前期	8区	VP03	隅丸方形	N3°E	5.16×5.06	26.1	46	中央やや北	地床炉		
74	SX5002	古墳前期	5区	II W17・18	不整形	N21°W	2.74×3.56	9.8	9				

第73表 住居跡一覧

図No.	遺構	時期	位置		形状		規模		遺物	その他
			地区	グリッド	平面形	断面形	長軸×短軸	深さ		
							cm	cm		
104	SK1003	(縄文)	1区	I X25	長楕円形	逆台形	208×115	90		陥し穴
104	SK1004	(縄文)	1区	III D08	長楕円形	逆台形	220×106	84		陥し穴
105	SK1005	(縄文)	1区	III D15	長楕円形	逆台形	196×125	60		陥し穴?
108	SK1006	?	1区	III E17	円形	逆台形	122×115	61		
108	SK1007	?	1区	III H05, I01	長方形	皿状	253×180	21		
108	SK1008	?	1区	III H05	長方形	皿状	192×146	16		
104	SK2001	(縄文)	2区	III H09	長楕円形	逆台形	297×150	75		陥し穴
105	SK2002	(縄文)	2区	III H09	円形	逆台形	157×151	105		陥し穴
104	SK2003	(縄文)	2区	III C23	長楕円形	逆台形	264×152	82		陥し穴
105	SK3001	縄文	3区	III K14・19	円形	逆台形	123×118	118	縄文土器1	陥し穴
106	SK4001	古墳前期	4区	II S16	楕円形	鍋状	72×50	19	高坏	
106	SK4002	古墳前期	4区	II R19	円形	鍋状	105×85	40	広口壺	
106	SK4003	古墳前期	4区	II R15, S11	円形	鍋状	90×76	31	甕	
107	SK4004	?	4区	II S06・11	円形	皿状	70×63	16		
108	SK4005	?	4区	II R25	円形	鍋状	170×135	63		
107	SK4006	?	4区	II S17	円形	皿状	69×60	17		
108	SK4007	?	4区	II S17	不整円形	鍋状	180×130	74		
106	SK4008	平安	4区	II R15	長方形	鍋状	175×70	31	人骨・刀子	SB4001内
106	SK5001	縄文	5区	II V12	円形	鍋状	96×88	25	縄文土器1	
108	SK5002	?	5区	II W20	不整円形	袋状	116×90	60		
107	SK6001	?	6区	V J12	長方形	逆台形	117×73	31		
107	SK6002	?	6区	V E21	円形	鍋状	48×46	17		
107	SK6003	?	6区	V E21	円形	鍋状	34×32	21		
107	SK6004	?	6区	V E21	円形	鍋状	55×44	20		
107	SK6005	?	6区	V E21	楕円形	鍋状	41×27	16		
107	SK6006	?	6区	V E21	円形	鍋状	48×42	20		
106	SK6007	古墳前期	6区	V E24	円形	鍋状	65×64	19		
106	SK6008	古墳前期	6区	V J04	円形	皿状	72×67	9		
107	SK7001	?	7区	V M17	円形	鍋状	60×57	20		
106	SK7002	?	7区	V M18	長方形	鍋状	113×63	30	人骨・動物骨	SB7008を切る
107	SK7003	?	7区	V M10	円形	袋状	70×	80		SB7011と切り合う
107	SK7004	?	7区	V M15	円形	鍋状	80×	34		SB7013と切り合う
105	SK7005	(縄文)	7区	V M05	円形	筒状	128×116	98		陥し穴
108	SK8001	?	8区	V P19	円形	皿状	116×110	14		
107	SK8003	?	8区	V P15	楕円形	袋状	134×80	58		
107	SK8004	?	8区	V P15	円形	鍋状	56×	22		
105	SK8005	(縄文)	8区	V P18・23	長方形	逆台形	276×105	70		陥し穴

第74表 土坑一覧



第5章 近津遺跡群

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かつこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考	
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)					
35	1	22	1	SB4002	土師器	高坏	40	23.2	—	(19.5)	7.5R4/6 赤	シガキ	シガキ、脚テ 脚下半ハ	赤彩	
35	2	22	2	SB4002	土師器	甕	40	14.6	—	(15.5)	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁~胴ハ、胴下半 にぶい黄橙	シガキ		
35	3	22	3	SB4002	土師器	甕	30	16.4	6.6	25.6	7.5YR5/6 明褐	口縁~胴櫛描羽状 文	シガキ		
35	4	22	4	SB4002	土師器	壺	40	—	—	(8.1)	7.5YR7/6 橙	シガキ	テ		
35	5	22	5	SB4002	土師器	壺	20	19.2	—	(10.7)	5YR6/6 橙	テ後シガキ、胴ハズリ 後シガキ、肩櫛描籬状 文	テ後シガキ		
35	6	22	6	SB4002	土師器	壺	80	20.6	7.0	39.5	7.5R4/6 赤	シガキ、肩櫛描籬状 文	テ		赤彩
36	1	23	1	SB4003	土師器	鉢	60	(16.0)	4.8	7.8	5YR6/6 橙	ハズリ	テ後一部シガキ		
36	2	23	2	SB4003	土師器	甕	30	—	—	(14.5)	7.5YR7/6 橙	頸櫛描籬状文、胴櫛 描コ羽状文、胴下半 摩耗不明	シガキ		
37	1	23	3	SB5003	土師器	高坏	40	—	(16.8)	(6.7)	10YR7/4 にぶい黄橙	シガキ	テ		円形透かし
37	2	23	4	SB5003	土師器	鉢	80	18.0	4.0	6.5	10R4/6 赤	シガキ	シガキ		赤彩、片口
37	3	23	5	SB5003	土師器	鉢	35	(16.6)	(5.4)	(7.0)	10YR7/6 明黄褐	シガキ、胴下部ハズリ後 シガキ、底ハズリ	シガキ		片口
37	4			SB5003	土師器	甕	10	(15.6)	—	(3.7)	7.5YR6/6 橙	櫛描文	シガキ		
37	5	23	6	SB5003	土師器	甕	20	(13.8)	—	(5.1)	7.5YR6/4 にぶい橙	櫛描文、口唇部刺突 文、頸部籬状文	口縁テ後シガキ 頸部ハズリ後シガキ		
37	6			SB5003	土師器	甕	5	(19.6)	—	—	5YR5/2 灰褐	櫛描文、口唇サミ	シガキ		
37	7	23	7	SB5003	土師器	甕	25	—	—	—	10YR7/6 明黄褐	櫛描文、胴波状文	ハズリ後テ、ハ		
37	8			SB5003	土師器	壺	10	—	—	(10.0)	10R3/6 暗赤	シガキ	テ		赤彩
38	1	23	8	SB5004	土師器	高坏	50	21.6	—	(8.1)	10R4/6 赤	シガキ	シガキ		赤彩
38	2			SB5004	土師器	壺	25	—	7.5	13.4	2.5YR4/6 赤褐	シガキ、底ハズリ	ハ		赤彩
38	3			SB5004	土師器	壺	10	—	—	(19.8)	2.5YR6/6 橙	肩籬状文、シガキ	テ		赤彩
40	1	23	9	SB5009	土師器	器台	40	7.6	—	(3.0)	7.5YR7/6 橙	シガキ	坏シガキ、脚テ		
40	2	23	10	SB5009	土師器	壺	30	—	7.4	(12.8)	10YR7/4 にぶい黄橙	シガキ	胴シガキ、胴下半ハ		
40	3	24	1	SB5009	土師器	甕	100	17.4	5.8	24.3	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁波状文、頸籬状 文、胴上半羽状文 胴下半テシガキ、底テ	シガキ		
41	1			SB5010	土師器	甕	15	(12.4)	5.7	(17.2)	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁波状文、胴上半 羽状文、胴下半シガキ	シガキ		内面赤彩
41	2			SB5010	土師器	甕	20	(13.8)	—	(12.0)	5YR6/6 橙	櫛描文、頸部籬状文 胴部羽状文、胴下 シガキ	ハズリ後シガキ		
41	3	24	2	SB5010+ 5011	土師器	甕	10	—	—	(5.8)	7.5YR6/6 橙	頸~胴櫛描文	ハ後シガキ		
41	4	24	3	SB5010	土師器	S字甕	5	(10.8)	—	(1.5)	5YR5/6 明赤褐	テ	テ		
41	5			SB5010	土師器	壺	10	—	—	(11.0)	7.5R4/6 赤	シガキ	テ		赤彩
43	1	24	5	SB5011	土師器	高坏	90	18.8	12.8	11.0	10R4/6 赤	坏部コシガキ、脚部テ シガキ、脚下部コシガキ	シガキ		赤彩
43	2			SB5011	土師器	壺	20	—	6.2	(9.1)	7.5YR7/6 橙	シガキ	ハ後シガキ		
43	3	24	4	SB5011	土師器	鉢	90	9.4	2.5	3.2	10R4/6 赤	シガキ	シガキ		赤彩
43	4	24	6	SB5011	土師器	甕	10	—	4.7	(4.6)	10YR7/4 にぶい黄橙	シガキ	シガキ		底部に単孔
43	5	24	7	SB5011+ 5009	土師器	壺	20	17.8	—	(13.0)	7.5YR6/6 橙	口唇刺突文、口縁波 状文、頸籬状文 ハズリ後シガキ	コシガキ		
45	1			SB6001	土師器	高坏	10	—	(11.2)	(9.8)	2.5YR4/8 赤褐	シガキ	坏シガキ、脚テ		赤彩
45	2			SB6001	土師器	壺	5	23.8	—	(6.7)	10YR6/4 にぶい黄橙	波状文、シガキ	シガキ		
45	3			SB6001	土師器	壺	10	—	(5.4)	(10.0)	5YR5/6 明赤褐	ハ	テ、胴下半ハ		
45	4			SB6001	土師器	壺	5	—	—	(8.1)	7.5YR6/6 橙	シガキ	テ		
45	5			SB6001	土師器	壺	5	—	—	(19.0)	7.5YR4/3 褐	シガキ	ハ後テ		
45	6	37	9	SB6001	土製品	紡錘車	100	6.1	—	(厚) 1.8	10YR6/3 にぶい黄橙	—	—		

第75表 土器観察表 (1)

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かっこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
46	1			SB6002	土師器	高坏	10	—	—	(7.3)	10R4/6 赤	ミガキ	脚ハ	赤彩三角透かし
49	1			SB6004	土師器	高坏	10	—	—	(4.1)	10YR6/4 にぶい黄橙	ミガキ	坏ミガキ、脚テ	円形透かし
49	2	24	8	SB6004	土師器	鉢	40	(16.8)	3.7	5.6	10R4/6 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
49	3			SB6004	土師器	鉢	5	(8.0)	—	(3.4)	5YR6/6 橙	口縁テ 胴ハ後ミガキ	口縁テ、胴ハ	
49	4	24	9	SB6004	土師器	ミニチュア	100	3.3	1.3	1.5	7.5YR4/6 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
49	5	25	1	SB6004	土師器	甕	50	(23.8)	—	(25.0)	7.5YR6/6 橙	櫛描文	ハ後ミガキ	
49	6	24	10	SB6004	土師器	甕	100	9.2	5.0	11.0	10YR6/4 にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	
49	7	24	11	SB6004	土師器	壺	10	—	(3.0)	(4.9)	10R4/6 赤	ミガキ	テ	赤彩
49	8			SB6004	土師器	壺	5	—	—	(8.4)	5YR6/6 橙	ハ後ミガキ	テ	
50	1			SB6005	土師器	高坏	50	11.0	(9.2)	(9.3)	2.5YR5/6 明赤褐	坏ミガキ、脚ハ後ミガキ	坏ミガキ、脚テ	赤彩
50	2	25	2	SB6005	土師器	高坏	50	25.4	—	(10.0)	10R3/6 暗赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
50	3	37	10	SB6005	土製品	紡錘車	100	4.1	—	1.1	5YR6/6 橙			
50	4	37	11	SB6005	土製品	紡錘車	100	5.0	—	2.1	5YR6/8 橙			
51	1			SB6006	土師器	壺	5	—	(20.2)	(4.7)	7.5YR7/6 橙	ミガキ		全面剥離
53	1			SB6007	土師器	高坏	15	(22.8)	—	(10.5)	7.5YR4/6 赤	ミガキ	坏ミガキ、脚テ	赤彩
53	2	25	3	SB6007	土師器	高坏	40	—	13.2	(7.8)	10R4/6 赤	ミガキ	坏ミガキ、脚ハ後テ	赤彩、円形透かし
53	3	25	4	SB6007	土師器	高坏	20	—	—	(4.8)	10YR6/4 にぶい黄橙	ミガキ	脚テ、坏ミガキ	円形透かし
53	4	25	5	SB6007	土師器	甕	100	14.3	5.8	19.0	5YR5/4 にぶい赤褐	櫛描文、胴下半ミガキ		
53	5	25	6	SB6007	土師器	甕	25	17.6	—	(8.3)	7.5YR6/6 橙	櫛描文	ミガキ	
53	6			SB6007	土師器	甕	10	—	—	(13.0)	5YR6/6 橙	櫛描文、胴下半ハ後ミガキ	ミガキ	
53	7			SB6007	土師器	甕	20	—	—	(17.9)	2.5YR6/6 橙	櫛描文、胴下半ミガキ	テ	胴部に焼成後の孔
53	8			SB6007	土師器	壺	10	—	3.0	(2.8)	10R4/6 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
53	9	26	1	SB6007	土師器	壺	20	—	—	(25.0)	7.5YR4/6 赤	頸櫛描文、ミガキ	ハ	赤彩
54	1			SB7001	土師器	甕	10	(11.8)	—	(12.5)	7.5YR4/2 灰褐	ハ後テ	テ	
54	2	26	2	SB7001	土師器	台付甕	10	—	8.0	(6.0)	2.5YR6/6 橙	ハ後テ	テ、脚ハ	
54	3			SB7001	土師器	壺	10	—	—	(10.8)	10YR7/4 にぶい黄橙	ハ後ミガキ	ハ後一部テ	
56	1	26	3	SB7003	土師器	高坏	80	12.7	11.0	11.1	10R4/6 赤	ミガキ	坏ミガキ、脚ハ後テ	赤彩
56	2	26	4	SB7003	土師器	高坏	70	23.5	—	(9.4)	10YR7/4 にぶい黄褐	坏上半ハ後ミガキ 坏下半クズリ後ミガキ	ミガキ	
56	3	26	5	SB7003	土師器	高坏	50	—	17.4	(7.1)	10YR7/3 にぶい黄橙	ミガキ	坏ミガキ 脚テ一部ハ	
56	4			SB7003	土師器	高坏	20	—	(17.0)	(10.0)	10R4/6 赤	ミガキ	テ一部ハ	赤彩、三角透かし
56	5			SB7003	土師器	高坏	20	—	(12.0)	(5.5)	10R4/6 赤	ミガキ	テ	赤彩
56	6	26	6	SB7003	土師器	器台	100	8.2	8.9	8.4	10R5/6 赤	ハ後ミガキ	受ミガキ、脚ハ	赤彩、円形透かし
56	7	26	7	SB7003	土師器	鉢	70	11.6	4.6	8.1	10R4/4 赤褐	ミガキ 胴下半クズリ後ミガキ	ミガキ	赤彩
56	8	26	8	SB7003	土師器	壺	60	(10.0)	4.5	10.0	10YR6/2 灰黄褐	口縁～胴上半櫛描文 胴下半クズリ後ミガキ	ハ後ミガキ	
56	9			SB7003	土師器	甕	20	(15.4)	—	(11.9)	10YR6/4 にぶい黄橙	ハ	口縁テ、クズリ後テ	
56	10			SB7003	土師器	甕	20	—	7.0	(11.4)	2.5YR5/6 明赤褐	ハ、胴下半ハ後ミガキ	テ	
56	11	26	9	SB7003	土師器	台付甕	50	15.3	—	(21.0)	5YR5/6 明赤褐	頸ハ、胴剥離	ミガキ	口縁刺突文
56	12	27	1	SB7003	土師器	壺	90	13.8	4.2	17.7	10R5/6 赤	ミガキ、口縁刺突 肩縄文	頸ハ、他不明	赤彩、焼成前穿孔
56	13	26	10	SB7003	土師器	壺	30	—	4.8	(11.5)	5YR5/6 明赤褐	ミガキ	頸テ、胴ハ	
56	14	26	11	SB7003	土師器	壺	80	8.8	4.7	14.5	10R4/6 赤	ミガキ	テ	赤彩
56	15			SB7003	土師器	壺	10	—	8.4	(6.8)	2.5YR5/6 明赤褐	ミガキ	ハ	

第76表 土器観察表 (2)

第5章 近津遺跡群

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かつこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
57	1			SB7004	土師器	甕	30	(10.8)	(5.6)	(9.3)	7.5YR5/3 にぶい褐	シガキ 胴下端〜底カスリ	テ	
57	2	27	2	SB7004	土師器	甕	10	(18.0)	—	(5.2)	5YR6/6 橙	テ	テ	
58	1	27	3	SB7005	土師器	高坏	90	10.8	7.6	9.4	7.5R4/6 赤	シガキ	坏カスリ、脚テ	赤彩
58	2	27	4	SB7005	土師器	鉢	100	(14.6)	3.6	5.0	7.5R4/6 赤	シガキ	シガキ	赤彩、片口
58	3			SB7005	土師器	甕	10	(24.4)	—	(8.7)	7.5YR6/6 橙	口縁櫛波状文 頭カ	テ後シガキ	
58	4	27	5	SB7005	土師器	甕	100	10.4	5.4	13.5	10YR6/3 にぶい黄橙	胴上半櫛波状文 胴下半カスリ後シガキ	カスリ後シガキ	内面赤色付着
58	5	27	6	SB7005	土師器	台付甕	100	9.6	(6.4)	14.1	10YR7/4 にぶい黄橙	胴上半カ、胴下半カ 後シガキ、脚カ後テ	胴シガキ、脚テ	
58	6			SB7005	土師器	台付甕	10	—	(9.8)	(6.7)	10YR6/4 にぶい黄橙	カ	胴カスリ後シガキ、脚テ	
59	1			SB7006	土師器	高坏	5	(17.1)	—	(3.2)	2.5YR5/6 明赤褐	シガキ	シガキ	赤彩
59	2			SB7006	土師器	台付甕	5	—	8.4	(2.9)	7.5YR5/4 にぶい褐	カスリ後シガキ	カ後テ	
61	1			SB7007	土師器	高坏	20	(16.8)	—	(6.6)	5YR6/6 橙	シガキ	カ後シガキ	
61	2			SB7007	土師器	高坏	20	—	—	(7.2)	10R5/6 赤	シガキ	テ	赤彩三角透かし
61	3	27	7	SB7007	土師器	高坏	20	—	9.3	(5.1)	7.5R4/6 赤	シガキ	テ	赤彩、円形透かし
61	4	27	9	SB7007	土師器	鉢	50	(17.3)	4.2	6.0	2.5YR5/6 明赤褐	シガキ	シガキ	赤彩
61	5			SB7007	土師器	甕	30	(16.4)	—	(10.7)	5YR6/4 にぶい橙	カ	一部カ後シガキ	
61	6			SB7007	土師器	甕	10	—	—	(12.9)	5YR6/6 橙	シガキ	口縁シガキ、胴カ	
61	7			SB7007	土師器	甕	20	(15.8)	—	(14.5)	10YR4/3 褐	胴上半カ後テ 胴下半カスリ後テ	カ後テ	
61	8	27	10	SB7007	土師器	甕	20	—	5.8	(10.8)	7.5YR7/6 橙	カ	カ	
61	9	27	8	SB7007	土師器	蓋	70	4.7	—	(5.5)	7.5YR6/4 にぶい橙	テ後シガキ	テ	つまみ部に単孔
61	10			SB7007	土師器	壺	10	—	—	(21.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	シガキ	摩耗	
62	1			SB7008	土師器	甕	5	—	—	—	5YR5/3 にぶい赤褐	櫛波状文	シガキ	
64	1	27	11	SB7010	土師器	S字甕	40	(15.8)	—	(16.4)	5YR6/4 にぶい橙	カ	テ	
64	2			SB7010	土師器	甕	10	(18.4)	—	(5.4)	10YR7/4 にぶい黄橙	櫛波文、口縁波状文 頭簾状文	シガキ	
65	1			SB7011	土師器	高坏	10	(25.8)	—	(5.5)	2.5YR5/6 明赤褐	シガキ	シガキ	赤彩
65	2			SB7011	土師器	高坏	20	—	(16.2)	(4.2)	10R5/6 赤	シガキ	テ	赤彩三角透かし
65	3			SB7011	土師器	高坏	5	—	—	(3.0)	5YR6/6 橙	カシガキ	テ	円形透かし
65	4			SB7011	土師器	鉢	10	(16.2)	(3.4)	4.9	10R4/8 赤	シガキ	シガキ	赤彩
65	5			SB7011	土師器	鉢	10	(14.0)	—	(3.6)	7.5YR7/6 橙	カ後シガキ	カ後シガキ	
65	6			SB7011	土師器	鉢	20	(16.2)	—	(4.7)	7.5YR6/6 橙	カ後シガキ	カ後シガキ	
65	7			SB7011	土師器	鉢	20	(14.2)	(4.6)	4.6	5YR6/6 橙	シガキ	シガキ	
65	8	27	12	SB7011	土師器	器台	10	(15.6)	—	(5.8)	7.5YR5/4 にぶい褐	カ後シガキ	シガキ	受部に 円形透かし
65	9			SB7011	土師器	S字甕	5	(14.4)	—	(1.8)	7.5YR6/6 橙	テ	テ	
65	10	27	13	SB7011	土師器	甕	10	(12.8)	—	(11.0)	7.5YR6/4 にぶい橙	カ	テ	
65	11			SB7011	土師器	甕	20	(17.0)	—	(9.5)	7.5YR5/4 にぶい褐	カ	テ	
65	12			SB7011	土師器	甕	5	(14.4)	—	(3.9)	7.5YR6/6 橙	カ後シガキ	シガキ	
65	13			SB7011	土師器	台付甕	5	—	(7.4)	(3.8)	7.5YR5/6 明褐	カ	テ	
65	14			SB7011	土師器	台付甕	5	—	(7.8)	(3.6)	2.5YR4/3 にぶい赤褐	テ	テ	
65	15	27	14	SB7011	土師器	甕	40	(13.2)	5.5	(14.4)	5YR6/4 にぶい橙	テ	テ	
65	16			SB7011	土師器	壺	5	—	—	(4.7)	7.5YR7/6 橙	口縁シガキ、頭櫛波文	シガキ	
67	1	28	1	SB7012	土師器	甕	90	11.0	4.8	10.3	5YR6/6 橙	胴上半櫛波文 胴下半シガキ	シガキ	内面赤色付着
67	2	28	2	SB7012	土師器	甕	20	—	(5.8)	(10.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	胴上半櫛波状文 胴下半カスリ後シガキ	摩耗	

第77表 土器観察表 (3)

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かっこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
67	3			SB7012	土師器	甕	5	(16.4)	—	(5.2)	7.5YR6/4 にぶい橙	ハ後ミガキ	ミガキ	
67	4	28	3	SB7012	土師器	甕	30	(16.6)	5.4	9.8	10YR7/4 にぶい黄橙	ハ後ミガキ	ハ後ミガキ	
68	1			SB7013	土師器	高坏	10	—	(14.0)	(5.2)	7.5R4/6 赤	ミガキ	テ	赤彩、三角透かし
68	2			SB7013	土師器	鉢	5	(13.0)	4.2	7.3	7.5YR6/3 にぶい橙	ハ後ミガキ	胴ハ、底ミガキ	
68	3	28	4	SB7013	土師器	甕	30	(15.0)	—	(13.9)	5YR6/6 橙	口縁～胴上半櫛描 波状文、胴下半ケスリ 後ミガキ	ミガキ	
68	4			SB7013	土師器	台付甕	10	—	(7.6)	(4.3)	10YR6/4 にぶい黄橙	ハ後ミガキ	ハ	
68	5	28	5	SB7013	土師器	壺	80	—	4.3	(13.0)	2.5YR4/6 赤褐	ミガキ	摩耗、不明	赤彩
68	6			SB7013	土師器	壺	10	—	—	(12.9)	7.5YR5/3 にぶい褐	摩耗、不明	胴上半テ 胴下半ハ	
70	1	28	6	SB8004	土師器	器台	30	(8.0)	—	(2.8)	7.5YR6/4 にぶい橙	ミガキ	ミガキ	
70	2	28	7	SB8004	土師器	器台	30	—	—	(4.0)	5YR6/6 橙	ミガキ	テ	円形透かし
70	3	28	8	SB8004	土師器	高坏	40	12.1	—	(4.3)	10R4/8 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
70	4	28	9	SB8004	土師器	壺	40	15.5	—	(9.3)	5YR5/4 にぶい赤褐	ハ	ミガキ	
70	5	28	10	SB8004	土師器	甕	40	15.8	—	(10.3)	2.5YR5/4 にぶい赤褐	櫛描波状文	ミガキ	
70	6			SB8004	土師器	壺	10	—	—	(5.5)	10R4/6 赤	ミガキ、頸籬状文	ミガキ	赤彩
70	7			SB8004	土師器	壺	10	—	—	(12.4)	10YR7/4 にぶい黄橙	頸櫛描波状文、ミガキ	ハ後ミガキ	
72	1	28	11	SB8005	土師器	高坏	90	(22.8)	15.8	15.9	10R4/6 赤	ミガキ	坏ミガキ、脚テ	赤彩、三角透かし
72	2	28	12	SB8005	土師器	高坏	50	13.8	—	(11.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	ミガキ	坏ミガキ、脚テ	円形透かし
72	3	28	13	SB8005	土師器	高坏	50	11.8	—	(5.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	ハ後ミガキ	ハ後ミガキ	
72	4	29	1	SB8005	土師器	鉢	80	(10.2)	6.5	9.5	5YR6/6 橙	ハ後ミガキ 胴下端ケスリ	ミガキ	
72	5	29	2	SB8005	土師器	甕	30	(12.6)	—	(14.0)	10YR6/4 にぶい黄橙	口縁～胴上半櫛描 波状文、胴下半ケスリ 後ミガキ	ミガキ	
72	6	29	3	SB8005	土師器	甕	30	—	7.3	(15.0)	7.5YR6/6 橙	胴上半ハ 胴下半ケスリ後ミガキ	ミガキ	
72	7	29	4	SB8005	土師器	壺	80	(9.1)	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	ミガキ	テ	脚部に円形透かし
72	8	29	5	SB8005	土師器	壺	70	8.0	—	16.8	5YR4/6 赤褐	ハ後ミガキ	ハ	
72	9	29	6	SB8005	土師器	壺	20	—	—	(11.8)	10YR6/3 にぶい黄橙	ミガキ、頸櫛描籬状文	ミガキ	
74	1	30	1	SX5002	土師器	高坏	30	—	(20.8)	(13.5)	10R4/6 赤	ミガキ	ハ後テ	赤彩、三角透かし
74	2	30	2	SX5002	土師器	高坏	30	—	—	(5.4)	7.5R4/6 赤	ミガキ	テ一部ミガキ	赤彩、円形透かし
74	3			SX5002	土師器	高坏	20	—	(13.0)	(3.4)	7.5R4/6 赤	ミガキ	ハ後テ	赤彩、円形透かし
74	4	30	3	SX5002	土師器	台付甕	30	—	8.0	(19.3)	10YR4/2 灰黄褐	ハ後ミガキ	テ	
74	5	30	4	SX5002	土師器	甕	60	—	—	(23.0)	7.5YR7/8 黄橙	櫛描文、胴羽状文	坏ミガキ、胴ハ後テ?	
74	6	30	5	SX5002	土師器	壺	100	18.4	8.4	38.4	7.5YR6/6 橙	ハ後ミガキ、頸籬状文 胴テ後ミガキ	ハ後ミガキ 胴テ後ミガキ	口縁外面赤彩
76	1	31	2	SB2001	土師器	坏	100	12.9	—	4.3	2.5YR5/6 橙	テ、胴～底ケスリ後 一部テ	胴上半放射状ミガキ テ	
76	2	31	3	SB2001	土師器	坏	90	13.0	—	4.3	2.5YR5/6 橙	テ、胴～底ケスリ後 一部テ	胴上半放射状ミガキ	
76	3	31	4	SB2001	土師器	坏	90	14.1	—	4.6	5YR6/6 橙	口縁テ 胴～底ケスリ後テ	テ後ミガキ	
76	4			SB2001	土師器	坏	20	(14.0)	—	(3.5)	5YR6/8 橙	テ後胴下半ケスリ	放射状ミガキ テ後ミガキ	
76	5	31	5	SB2001	土師器	坏	60	(13.6)	—	4.3	5YR5/4 にぶい赤褐	口縁テ 胴～底ケスリ後テ	テ後ミガキ	
76	6	31	6	SB2001	土師器	坏	80	13.9	—	5.4	5YR6/3 にぶい橙	口縁～胴上半ハ 胴～底ケスリ	テ後ミガキ 放射状ミガキ	
76	7			SB2001	土師器	坏	20	(12.6)	—	(4.0)	5YR6/6 橙	テ後胴下半ケスリ	放射状ミガキ テ後ミガキ	
76	8			SB2001	土師器	坏	40	(13.8)	—	(4.5)	5YR6/6 橙	ケスリ後テ	放射状ミガキ、テ	
76	9	31	7	SB2001	土師器	坏	100	13.8	—	5.5	2.5YR5/4 にぶい赤褐	口縁テ 胴～底ケスリ後テ	テ	
76	10	31	8	SB2001	土師器	坏	50	(14.4)	—	5.9	10YR7/4 にぶい黄橙	口縁テ 胴～底ケスリ後ミガキ	ミガキ	

第78表 土器観察表 (4)

第5章 近津遺跡群

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かっこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
76	11	31	9	SB2001	土師器	坏	40	(13.2)	(6.8)	4.7	2.5YR4/6 赤褐	テ° 胴~底スリ後シキ	シキ	
76	12	31	10	SB2001	土師器	高坏	60	18.5	—	(7.3)	5YR4/3 にぶい赤褐	口縁・坏下半テ° 坏スリ	テ°	
76	13			SB2001	土師器	高坏	20	—	—	(3.4)	7.5YR6/4 にぶい橙	テ°後一部スリ	坏底シキ脚上半テ°	
76	14	31	11	SB2001	土師器	壺	50	(9.2)	—	(11.7)	2.5YR5/8 明赤褐	テ°スリ	口縁テ°スリ、胴テ°	
76	15			SB2001	土師器	壺	30	—	—	(9.8)	2.5YR4/4 にぶい赤褐	頸スリ、胴ハ	肩テ°、胴スリ	
76	16			SB2001	土師器	甕	20	(17.4)	—	(13.7)	2.5YR6/4 にぶい黄	テ°、胴スリ後シキ	テ° 肩~胴輪積み痕	
76	17	32	1	SB2001	土師器	甕	80	16.3	—	28.5	10YR8/2 灰白	テ°、頸~底ハ	口縁ヨウ胴上半スリ 後テ°、胴下半テ°	
76	18	31	12	SB2001	土師器	甕	95	16.5	7.0	22.4	10YR7/6 明黄褐	摩耗、不明	口縁テ° 肩~底スリ後ハ	
76	19			SB2001	土師器	甕	5	(20.0)	—	(4.3)	10YR6/4 にぶい黄橙	テ°	テ°	
77	1	32	3	SB3001	土師器	坏	30	(14.8)	—	5.9	10YR7/4 にぶい黄橙	ハ後シキ	シキ	
77	2			SB3001	土師器	坏	10	(13.8)	—	(4.5)	2.5YR5/6 明赤褐	テ°、底スリ	シキ	
77	3			SB3001	土師器	甕	10	(15.2)	—	(8.3)	5YR6/6 橙	テ°、一部スリ	摩耗、不明	
77	4	32	2	SB3001	土師器	壺	70	(15.7)	(7.2)	(31.8)	7.5YR6/3 にぶい褐	テ°、胴下半スリ	胴上半テ° 胴下半ハ	
79	1	32	4	SB8001	土師器	坏	30	(12.8)	—	(5.2)	5YR6/6 橙	シキ	シキ	
79	2			SB8001	土師器	坏	20	(12.4)	—	(4.6)	10YR7/4 にぶい黄橙	シキ	シキ	内面黒色処理
79	3	32	5	SB8001	土師器	甕	30	—	—	(11.5)	7.5YR7/4 にぶい橙	シキ	テ°	胴上部に穿孔
79	4	33	1	SB8001	土師器	甕	40	(15.8)	—	(13.2)	7.5YR6/4 にぶい橙	スリ	テ°	
79	5			SB8001	土師器	高坏	20	—	(9.7)	(5.7)	2.5YR5/6 明赤褐	シキ	テ°	赤彩
79	6	33	2	SB8001	土師器	甕	80	9.8	5.1	9.0	5YR5/4 にぶい赤褐	口縁~頸テ° 胴スリ後一部シキ	テ°	
79	7	33	3	SB8001	土師器	甕	70	(9.9)	5.3	13.0	2.5YR3/3 暗赤褐	テ°	テ°	
80	1	33	4	SB8003	土師器	坏	100	13.2	—	5.2	5YR6/6 橙	口縁テ° 底スリ後シキ	シキ	
80	2	33	5	SB8003	土師器	坏	100	15.4	—	6.1	2.5YR8/4 淡黄	口縁テ°後シキ 底スリ後シキ	シキ	
80	3	33	6	SB8003	土師器	坏	90	12.8	—	5.2	2.5YR6/6 橙	口縁テ° 底スリ後シキ	テ°	
80	4			SB8003	土師器	坏	20	(13.8)	—	(4.4)	2.5YR5/6 明赤褐	口縁テ° 底スリ後シキ	テ°	
80	5	33	7	SB8003	土師器	坏	90	13.6	—	5.0	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁テ°、底スリ	放射状シキ	
80	6			SB8003	土師器	坏	20	(14.8)	—	(6.6)	2.5YR4/4 にぶい赤褐	シキ	シキ	内面黒色処理
80	7	33	8	SB8003	土師器	高坏	40	—	10.0	(6.4)	7.5YR7/4 にぶい橙	スリ後テ°	スリ	
80	8	33	10	SB8003	土師器	甕	30	21.4	—	(16.0)	7.5YR7/4 にぶい橙	スリ	テ°	
80	9			SB8003	土師器	甕	10	(14.6)	—	(10.8)	10R5/6 赤	テ°	テ°	
80	10	33	9	SB8003	土師器	甕	90	13.0	3.6	9.5	10YR6/4 にぶい黄橙	テ°、胴下端スリ	胴上半テ° 胴下半スリ	底部に単孔
83	1			SB1002	土師器	羽釜	20	—	(16.2)	(16.8)	5YR5/4 にぶい赤褐	テ°	テ°	
83	2			SB1002	土師器	羽釜	10	—	(17.3)	(8.8)	2.5YR5/6 明赤褐	テ° 胴下端~底スリ	テ°	
85	1			SB4001	土師器	羽釜	5	(28.8)	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	テ°	テ°	
85	2			SB4001	土師器	羽釜	10	(29.0)	—	—	2.5YR5/6 明赤褐	テ°	テ°	
85	3			SB4001	土師器	羽釜	20	—	—	(18.5)	5YR6/6 橙	テ°	テ°	
85	4			SB4001	土師器	羽釜	5	—	—	(10.5)	2.5YR5/6 明赤褐	テ°	テ°	
87	1	33	11	SB4005	土師器	坏	70	11.4	7.7	3.8	10YR7/4 にぶい黄橙	テ°、回転ハ切り	テ°	
87	2	33	12	SB4005	土師器	埴	40	—	6.8	(4.2)	2.5YR6/8 橙	テ°	テ°	
87	3	33	13	SB4005	土師器	埴	30	(17.0)	—	(4.0)	10YR6/3 にぶい黄橙	テ°	テ°	
87	4	33	14	SB4005	土師器	羽釜	20	29.6	—	(19.0)	2.5YR5/6 明赤褐	テ°	テ°	
87	5			SB4005	土師器	埴	20	—	(7.6)	(2.6)	2.5Y6/4 にぶい黄	テ°	テ°	

第79表 土器観察表 (5)

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かっこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
87	6			SB4005	黒色土器	埴	30	—	7.3	(2.4)	10YR6/3 にぶい黄橙	ナテ、回転糸切り	ミガキ	
87	7			SB4005	土師器	羽釜	5	—	(13.8)	(6.7)	10YR5/3 にぶい黄褐	ナテ、胴下半ケスリ	ナテ、胴下半ハク	
87	8			SB4005	土師器	高坏	20	—	—	(5.4)	10YR7/4 にぶい黄橙	ケスリ	坏ミガキ、ナテ	内面黒色処理
87	9			SB4005	須恵器	甕	20	—	6.0	(3.0)	2.5Y6/1 黄灰	ケスリ	ナテ	
87	10	34	1	SB4005	須恵器	蓋	20	(9.0)	—	(1.4)	5Y7/1 灰白	ナテ、ヘテ切り、自然釉	ナテ	転用硯
87	11			SB4005	須恵器	甕	1	—	(14.4)	(4.2)	5Y5/1 灰	胴格子状タテ 底自然釉	自然釉	
87	12			SB4005	須恵器	壺?	20	—	(14.8)	(2.5)	5Y7/1 灰白	ナテ、回転ヘテ切り	ナテ	
89	1			SB4007	土師器	坏	5	—	(5.8)	—	7.5YR6/4 にぶい橙	ナテ	ナテ	
89	2	34	2	SB4007	須恵器	短頸壺	40	(8.0)	—	(8.0)	5Y4/1 灰	口縁ナテ、胴カキ目 胴下半ケスリ	ナテ	
89	3			SB4007	須恵器	壺	5	—	(11.0)	(5.4)	5Y6/1 灰	ナテ	ナテ	
89	4	34	6	SB4007	土師器	羽釜	5	—	—	—	7.5YR5/3 にぶい褐	ハク	ナテ	
91	1	34	3	SB5001	黒色土器	埴	40	(14.6)	(7.2)	(6.9)	5YR5/6 明赤褐	ケスリ後ミガキ	ミガキ	
91	2	34	4	SB5001	土師器	羽釜	20	(30.2)	(13.0)	(32.0)	10R5/6 赤	ナテ	ナテ	
91	3	34	5	SB5001	土師器	羽釜	15	(30.4)	(15.4)	(17.9)	5YR5/6 明赤褐	ナテ	ナテ	
91	4			SB5001	土師器	甕	60	31.0	(12.4)	33.2	7.5YR6/4 にぶい橙	ナテ、胴下端ケスリ	ナテ	
91	5			SB5001	土師器	壺	10	(10.2)	5.7	—	2.5YR5/8 明赤褐	口縁～胴ミガキ 胴下端～底ケスリ	口縁ミガキ、胴ハク 底ナテ	
93	1	35	2	SB5006	灰釉陶器	碗	10	—	7.0	(2.2)	2.5Y7/1 灰白	ナテ、釉	ナテ、釉	
93	2			SB5006	土師器	羽釜	10	(21.6)	—	(8.2)	2.5YR5/6 明赤褐	ナテ	ナテ	
93	3	35	1	SB5006	土師器	羽釜	30	(27.0)	14.5	31.2	2.5YR4/6 赤褐	ナテ	ナテ	
93	4			SB5006	土師器	羽釜	10	(27.0)	(16.0)	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	ナテ	ナテ	
94	1	35	3	SB5008	土師器	坏(皿)	40	(9.4)	—	(2.3)	10YR7/4 にぶい黄橙	ナテ	ナテ	
94	2			SB5008	土師器	坏	20	(9.6)	(5.0)	2.1	2.5YR7/6 橙	ナテ	ナテ	
94	3			SB5008	土師器	坏	20	(8.8)	—	1.9	5YR6/4 にぶい橙	ナテ	ナテ	
94	4	35	4	SB5008	土師器	坏(皿)	70	8.8	(4.7)	3.3	5YR7/6 橙	ナテ	ナテ	
94	5	35	5	SB5008	土師器	坏	5	—	(6.2)	(2.0)	7.5YR7/3 にぶい橙	ナテ、回転糸切り	ナテ	
94	6			SB5008	土師器	埴	20	—	(5.2)	(2.8)	5YR6/6 橙	ナテ	ナテ	
94	7	35	6	SB5008	灰釉陶器	碗	5	(18.6)	—	(2.6)	2.5Y7/1 灰白	ナテ	ナテ	
94	8			SB5008	土師器	羽釜	5	(25.4)	—	(8.1)	10YR6/4 にぶい黄褐	ナテ	ナテ	
94	9			SB5008	土師器	羽釜	5	—	—	(16.4)	2.5YR4/6 赤褐	ナテ	ナテ	
95	1			SB5012	土師器	羽釜	5	—	(15.6)	(4.0)	7.5YR5/4 にぶい褐	ナテ	ナテ	
95	2			SB5012	土師器	羽釜	5	—	(17.6)	(6.5)	5YR5/4 にぶい赤褐	ナテ	ナテ	
97	1	35	7	SB5013	土師器	坏	20	(8.4)	(4.0)	2.0	7.5YR6/6 橙	ナテ、糸切り	ナテ	
97	2			SB5013	土師器	坏	20	(14.8)	(6.0)	(5.0)	10YR8/3 浅黄橙	ナテ、糸切り	ナテ	
97	3			SB5013	土師器	坏	20	(16.6)	—	(3.7)	10YR8/4 浅黄橙	ナテ	ナテ	
97	4			SB5013	土師器	羽釜	10	—	—	(8.5)	5YR5/4 にぶい赤褐	ナテ	ナテ	
98	1	35	9	SB7002	土師器	羽釜	10	(24.8)	—	(8.2)	5YR6/6 橙	ナテ	ナテ	
98	2	35	8	SB7002	土師器	S字甕	5	(18.8)	—	(3.3)	10YR8/4 浅黄橙	ナテ、頸ハク	ナテ	
98	3			SB7002	須恵器	壺	5	—	(12.0)	(4.7)	5Y3/1 オリーブ黒	ケスリ	ナテ	
109	1	35	11	SK1005	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR5/6 明褐	無文		後期
109	2	35	12	SK3001	縄文土器	深鉢	—	—	—	(8.0)	7.5YR5/6 明褐	口縁下隆帯、LR縄文		後期
109	3	35	13	SK5001	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR6/6 明黄褐	沈線		後期

第80表 土器観察表 (6)

第5章 近津遺跡群

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かっこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
109	4	35	10	SK4001	土師器	高坏	80	(19.0)	(11.8)	12.4	7.5YR4/6 赤	込 <sup>キ</sup>	坏 <sup>キ</sup> 、脚 <sup>キ</sup>	赤彩、円形透かし
109	5			SK4003	土師器	甕	20	—	10.4	12.5	5YR6/6 橙	少、胴下半 <sup>キ</sup> 底 <sup>キ</sup>	ケリ後 <sup>キ</sup>	
109	6			SK6007	土師器	鉢	30	(25.4)	—	(11.7)	10R4/6 赤	込 <sup>キ</sup>	込 <sup>キ</sup>	赤彩
109	7	35	14	SK4002	土師器	壺	95	20.6	11.5	26.3	7.5YR4/6 赤	込 <sup>キ</sup> 、肩櫛描簾状文	口縁~胴 <sup>キ</sup> 台 <sup>キ</sup>	赤彩
109	8			SK6008	土師器	高坏	10	(25.0)	—	(3.4)	7.5R4/6 赤	込 <sup>キ</sup>	込 <sup>キ</sup>	赤彩
109	9			SK6008	土師器	甕	5	—	(4.0)	(2.5)	7.5YR6/6 橙	胴下半 <sup>キ</sup>	テ <sup>キ</sup>	
110	1			SF7004	土師器	甕	10	—	—	(7.3)	7.5YR6/4 にぶい橙	櫛描羽状文	込 <sup>キ</sup>	
114	1			SX5001	土師器	甕	5	(12.8)	—	(6.5)	7.5YR6/4 にぶい褐	櫛描文、頸簾状文 胴斜状文	込 <sup>キ</sup>	
114	2			SX5001	土師器	壺	10	—	—	(11.3)	10YR7/4 にぶい黄橙	込 <sup>キ</sup>	少 <sup>キ</sup>	
115	1	36	1	8区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	2	36	2	6区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	3	36	3	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	4~6	36	4~6	6区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	7	36	7	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	8	36	8	8区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	9	36	9	SB6005	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	10	36	10	6区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	2.5YR4/4 にぶい赤褐	楕円押型文		早期
115	11	36	11	8区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/6 明赤褐	棚状押型文		早期
115	12	36	12	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	捺糸文		早期
115	13	36	13	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR4/4 にぶい赤褐	貝殻沈線文		早期
115	14	36	14	6区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	沈線文		早期
115	15	36	15	8区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR4/6 赤褐	無文		早期
115	16	36	16	8区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	5YR4/4 にぶい赤褐	LR+RL結束縄文		前期
115	17	36	17	2区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR5/6 明褐	RL縄文		中期
115	18	36	18	4区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	RL縄文		後期
115	19	36	19	4区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	沈線区画、L縄文		後期
115	20	36	20	SM4002	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙	LR縄文地文 沈線区画		後期
115	21	36	21	SM4002	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙	LR縄文地文 沈線区画		後期
115	22	36	22	SM4002	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙	LR縄文地文 沈線区画		後期
115	23	36	23	SM4002	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR6/6 明黄褐	LR縄文地文 沈線区画		後期
115	24	36	24	SM4002	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙	LR縄文地文 沈線区画		後期
115	25	36	25	4区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/6 明黄褐	細沈線区画		後期
115	26	36	26	4区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR6/2 灰黄褐	細沈線区画		後期
115	27	36	27	4区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/6 明黄褐	細沈線区画		後期
115	28・29	36	28・29	SB7005	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR7/6 橙	沈線区画、刺突文		後期
115	30・31	36	30・31	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	横沈線、弧状区画		後期
115	32・33	36	32・33	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	横沈線、弧状区画		後期
115	34~37	36	34~37	SB6004	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	沈線区画、LR縄文		後期
115	38	36	38	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR6/6 橙	隆帯区画 区画内LR縄文		後期
115	39・40	36	39・40	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	沈線区画、RL縄文 刺突文		後期
115	41	36	41	5区	縄文土器	深鉢	—	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	横隆帯、LR縄文		後期

第81表 土器観察表 (7)

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かっこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
116	1			7区	土師器	高坏	30	—	(17.8)	(9.5)	7.5R4/6 赤	ミガキ	ナテ	赤彩
116	2	37	1	7区	土師器	鉢	80	16.8	(3.8)	6.2	7.5R4/6 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
116	3			7区	土師器	鉢	10	(18.0)	(4.0)	5.4	10R4/6 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩
116	4	37	2	6区	土師器	鉢	90	18.0	4.7	5.9	7.5YR4/6 赤	ミガキ	ミガキ	赤彩、片口
116	5			7区	土師器	鉢	10	(15.8)	—	(3.5)	7.5YR5/6 明褐	ミガキ	ミガキ	
116	6	37	3	7区	土師器	器台	30	6.7	—	(1.8)	10YR6/4 にぶい黄橙	ナテ	ミガキ	
116	7	37	6	7区	土師器	甕	40	(11.8)	5.1	12.9	7.5YR5/3 にぶい褐	口縁～頸部描波状文	ナテ一部ハケ	
116	8			7区	土師器	甕	10	(22.4)	—	(8.4)	10YR6/4 にぶい黄橙	櫛描文、口縁波状文 頸斜状文	ミガキ	
116	9	37	4	7区	土師器	甕	5	(10.6)	—	(6.0)	7.5YR6/6 橙	輪積痕あり、縄文	ミガキ	吉ヶ谷式系
116	10			7区	土師器	甕	30	(17.0)	—	(18.6)	7.5YR5/4 にぶい褐	胴上半ナテ 胴下半ケスリ	ナテ後胴下半ハケ	
116	11	37	5	7区	土師器	壺	30	(9.6)	4.3	(11.4)	7.5R4/6 赤	ミガキ	ナテ	赤彩
116	12			遺構外 (SX7001)	土師器	壺	10	—	—	(21.0)	7.5YR7/6 橙	ナテ	ミガキ	
116	13	37	7	7区	土師器	壺	50	—	6.0	(14.0)	7.5R4/6 赤	ミガキ	ナテ	赤彩
116	14			5区	土師器	壺	5	—	—	(8.3)	7.5YR7/6 橙	ミガキ	ミガキ	
116	15			5区	土師器	壺	10	—	—	(13.4)	7.5YR6/4 にぶい橙	ミガキ	ナテ	
116	16	37	8	3区	須恵器	坏	10	—	(7.7)	—	5Y5/1 灰	底ケスリ	ナテ	

第82表 土器観察表 (8)

図版No.		写真図版No.		出土地点	器種	材質	状態	法量(かっこ内は現存・推定長)			重さ(g)	備考
図	番号	PL	番号					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
35	7	37	12	SB4002	敲石・磨石	砂岩	一部光沢あり	13.2	5.4	4.2	420	
37	9	37	13	SB5003	砥石	砂岩	砥面湾曲	8.5	4.0	3.2	147	
41	6			SB5010	磨石	砂岩		10.2	6.2	3.9	420	
43	6	37	14	SB5011	磨石	頁岩	線条痕	5.4	3.5	1.2	35	
49	9	37	15	SB6004	磨石	頁岩		6.9	4.3	1.0	53	
49	10			SB6004	砥石	安山岩	筋状の凹みあり	9.0	6.9	6.6	450	
49	11			SB6004	敲石・磨石	安山岩		13.9	7.0	4.9	660	
49	12	37	16	SB6004	敲石・磨石	安山岩		7.7	4.9	3.7	216	
49	13	37	17	SB6004	敲石・磨石	砂岩	欠損	(15.7)	6.7	5.7	950	
51	2	37	21	SB6006	管玉	緑色凝灰岩	上部欠損	(1.1)	0.4	0.4	0.19	
53	10	37	20	SB6007	磨石	砂岩	一部光沢あり	10.1	9.1	27.5	350	
56	16	37	18	SB7003	砥石	砂岩	筋状の凹みあり	11.1	5.3	5.1	269	
56	17	37	19	SB7003	台石	安山岩		36.0	22.8	8.1	8,650	
57	3			SB7004	磨石	安山岩		7.1	7.6	3.5	290	
57	4	38	1	SB7004	磨石	安山岩		13.0	6.4	5.9	750	
57	5	38	2	SB7004	台石	安山岩		(17.7)	25.5	8.4	5,100	
58	7			SB7005	磨石	安山岩	一部光沢あり	10.2	8.9	(2.6)	317	
58	8	38	3	SB7005	砥石	砂岩	筋状の凹みあり	10.7	9.6	5.5	445	
61	11	38	4	SB7007	敲石・磨石	砂岩		14.8	5.3	4.2	430	
61	12	38	5	SB7007	敲石・磨石	砂岩		25.8	11.6	5.7	1,930	
64	3			SB7010	磨石	安山岩		12.5	7.5	4.1	590	

第83表 石器観察表 (1)



第5章 近津遺跡群

図版No.		写真図版No.		出土地点	器種	材質	状態	法量(かっこ内は現存・推定長)			重さ(g)	備考
図	番号	PL	番号					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
67	5			SB7012	磨石	砂岩		7.9	5.4	2.4	169	
67	6			SB7012	磨石	安山岩		8.9	4.5	3.1	167	
67	7	38	7	SB7012	砥石	流紋岩	筋状の凹みあり	13.0	7.6	5.0	493	
67	8	38	6	SB7012	砥石	不明		21.3	7.1	5.0	500	
67	9	38	8	SB7012	砥石	砂岩	砥面湾曲	12.5	9.0	6.7	810	
67	10			SB7012	台石	安山岩		22.3	14.5	9.6	5,300	
70	8	38	9	SB8004	台石	安山岩		32.8	28.3	8.8	12,200	
72	10			SB8005	敲石?	頁岩		8.8	6.2	1.8	122	
76	20	38	12	SB2001	磨石	絹雲母片岩		6.4	4.9	1.0	38	
76	21	38	10	SB2001	磨石	深成岩		8.3	8.0	4.8	450	
76	22	38	11	SB2001	磨石	安山岩		19.6	14.3	5.0	2,300	
76	23			SB2001	台石	安山岩		29.7	27.3	13.6	18,000	
79	8	38	13	SB8001	磨石?	石英片岩		13.0	5.2	4.0	440	
85	5	38	14	SB4001	砥石	安山岩	一部光沢あり	18.8	8.0	5.7	336	
87	13	39	2	SB4005	砥石	流紋岩		4.9	2.9	1.6	25	
87	14	39	1	SB4005	磨石	安山岩		14.7	10.0	2.8	690	
91	6	39	3	SB5001	磨石	安山岩		5.5	9.5	3.2	204	
97	5	39	4	SB5013	磨石	安山岩		13.6	11.0	3.8	620	
117	1	39	5	遺構外 (SM4002)	石鏃	黒曜石		1.5	1.2	0.3	0.3	
117	2	39	6	6区	石鏃	黒曜石		2.0	1.2	0.4	0.43	
117	3	39	7	4区	石鏃	黒曜石		1.9	1.5	0.5	0.6	
117	4	39	8	遺構外 (SB6007)	石鏃	黒曜石		1.7	1.3	0.3	0.37	
117	5	39	9	7区	石鏃	黒曜石		1.6	1.7	0.3	0.32	
117	6	39	10	遺構外 (SB5009)	石鏃	黒色安山岩		2.5	1.8	0.5	1.4	
117	7	39	11	5区	磨石	砂岩	穀磨石	11.0	6.4	6.7	660	
117	8	39	12	5区	礫器	ホルンフェルス		12.3	5.4	4.0	330	
117	9	39	15	7区	石斧	凝灰岩	基部欠損	(9.0)	7.1	2.1	127	
117	10	39	13	6区	打製石斧	凝灰岩	基部欠損	(7.5)	6.0	1.2	70	
117	11	39	14	6区	打製石斧	凝灰岩	基部欠損	(9.2)	6.2	0.8	62	
117	12	39	17	5区	打製石斧	黒色安山岩		17.0	10.1	2.2	330	
117	13	39	16	6区	打製石斧	黒色安山岩	基部欠損	(12.6)	11.5	2.6	340	
117	14	39	18	6区	磨製石斧	変輝緑岩		13.6	6.8	3.4	575	
117	15	39	20	遺構外 (SB5005)	砥石	流紋岩		8.5	3.7	2.5	110	
117	16	39	19	4区	砥石	流紋岩		5.0	5.0	1.7	61	

第84表 石器観察表 (2)

図版No.		写真図版No.		出土地点	材質	品名	法量			重さ(g)	備考
図	番号	PL	番号				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
40	4	40	2	SB5009	鉄	刀子?	5.5	2.2	0.5	7.29	
57	6	40	1	SB7004	鉄	軸?	6.5	0.7	0.4	3.37	
76	24	40	3	SB2001	鉄	刀子	3.7	1.0	0.3	2.10	
79	9	40	4	SB8001	鉄	?	3.9	1.3	0.7	8.00	
83	3	40	13	SB1002	鉄	?	2.4	2.7	0.1	0.79	
85	6	40	14	SB4001	鉄	釘?	3.4	0.5	0.3	1.00	
87	15	40	9	SB4005	鉄	芋引金具	10.3	4.5	0.5	18.22	
87	16	40	10	SB4005	鉄	紡錘車軸	23.7	0.8	0.4	17.11	
89	5	40	11	SB4007	鉄	紡錘車	4.3	4.3	0.6	7.01	
91	7	40	5	SB5001	鉄	鉄鐸?	4.7	1.2	0.3	7.29	
91	8	40	6	SB5001	鉄	釘?	4.9	0.7	0.6	2.52	
91	9	40	7	SB5001	鉄	?	3.8	0.7	0.3	0.93	
91	10	40	8	SB5001	鉄	軸?	6.4	1.1	0.6	6.23	
93	5	40	15	SB5006	銅	天禧通宝	2.0	2.0	0.1	1.50	北宋銭、初铸1,017年
94	10	40	12	SB5008	鉄	鉄鏃	10.8	4.2	0.8	14.83	
103	1	40	18	SM4002	鉄	鉄鏃	3.6	2.0	0.4	1.52	
103	2	40	19	SM4002	鉄	鉄鏃	2.6	1.5	0.7	1.48	
103	3	40	20	SM4002	鉄	鉄鏃	5.0	1.4	1.3	2.81	
103	4	40	21	SM4002	鉄	鉄鏃	4.9	1.4	0.3	2.87	
103	5	40	22	SM4002	鉄	鉄鏃	4.3	1.3	0.4	2.22	
103	6	40	23	SM4002	鉄	鉄鏃	3.4	2.8	0.3	2.18	
103	7	40	24	SM4002	鉄	鉄鏃	2.9	1.2	0.3	1.54	
103	8	40	25	SM4002	鉄	鉄鏃	3.1	0.6	0.3	1.12	
103	9	40	26	SM4002	鉄	鉄鏃	3.8	0.9	0.3	1.64	
103	10	40	27	SM4002	鉄	鉄鏃	5.0	0.9	0.6	3.87	
103	11	40	28	SM4002	鉄	鉄鏃	3.0	0.7	0.4	1.28	
103	12	40	29	SM4002	鉄	鉄鏃	2.1	0.9	0.2	0.54	
103	13	40	30	SM4002	鉄	鉄鏃	3.7	0.9	0.2	1.08	
103	14	40	31	SM4002	鉄	鉄鏃	4.0	1.9	0.3	2.91	
103	15	40	32	SM4002	鉄	鉄鏃	3.1	1.3	0.5	1.70	
103	16	40	33	SM4002	鉄	鉄鏃	3.8	1.2	0.5	1.80	
103	17	40	34	SM4002	鉄	鉄鏃	2.7	0.8	0.3	0.73	
103	18	40	35	SM4002	鉄	鉄鏃?	2.4	0.7	0.4	0.57	
103	19	40	36	SM4002	鉄	鉄鏃	5.6	1.1	0.4	3.60	
103	20	40	37	SM4002	鉄	鉄鏃	6.8	1.4	0.4	4.12	
103	21	40	38	SM4002	鉄	鉄鏃	2.8	0.9	0.7	1.31	
103	22	40	39	SM4002	鉄	刀子	4.8	1.4	0.6	3.40	
103	23	40	40	SM4002	鉄	鉄鏃	3.3	1.1	0.3	1.79	
103	24	40	41	SM4002	鉄	鉄鏃	2.5	1.9	0.7	1.00	
103	25	40	42	SM4002	鉄	鉄鏃	5.5	1.1	0.6	2.86	
103	26	40	43	SM4002	鉄	鉄鏃	3.9	0.9	0.5	1.19	

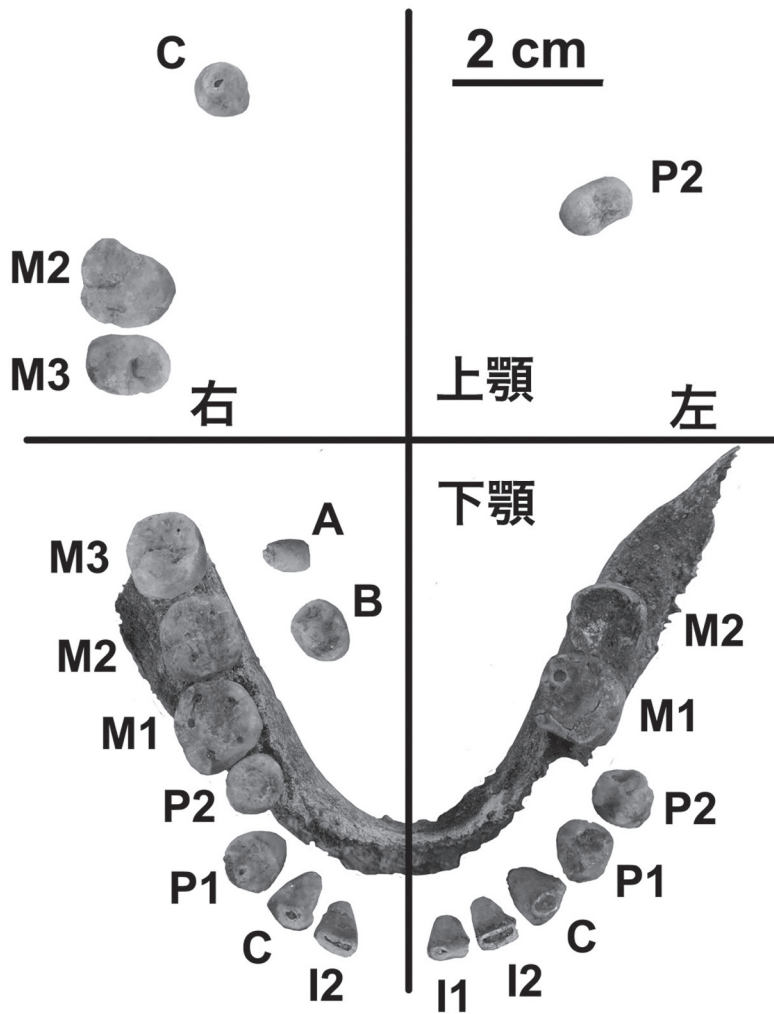
第85表 金属製品観察表 (1)

図版No.		写真図版No.		出土地点	材質	品名	法量			重さ(g)	備考
図	番号	PL	番号				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
103	27	40	44	SM4002	鉄	鉄鏃	2.9	0.9	0.5	1.34	
103	28	40	17	SM4002	鉄	刀子?	13.4	2.0	0.9	26.04	
109	10	40	16	SK4008	鉄	刀子	30.2	3.1	0.7	130.71	

第86表 金属製品観察表 (2)

上顎歯				I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
遺跡名	PL	番号	側	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
近津遺跡	SK4008		右	—	—	—	—	7.0	7.3	—	—	—	—	—	—	10.1	12.5	7.8	11.1
			左	—	—	—	—	—	—	—	—	6.2	9.0	11.1	12.4	10.2	12.1	—	—
現代日本人 (権田, 1959)			現代 男	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
			現代 女	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50
下顎歯				I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3	
遺跡名	PL	番号	側	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
近津遺跡	SK4008		右	—	—	5.8	6.1	6.4	6.8	7.0	8.1	7.4	8.1	—	11.6	11.2	10.7	10.8	9.7
			左	5.3	—	5.7	5.7	6.2	7.2	7.5	8.2	7.1	8.0	—	—	11.7	11.4	—	10.4
現代日本人 (権田, 1959)			現代 男	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
			現代 女	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02

第87表 近津遺跡群出土人骨の歯の計測値 (m-d: 近遠心径、b-l: 頬舌径)



## 第6章 和田原遺跡群

### 第1節 遺跡の概観と調査の概要

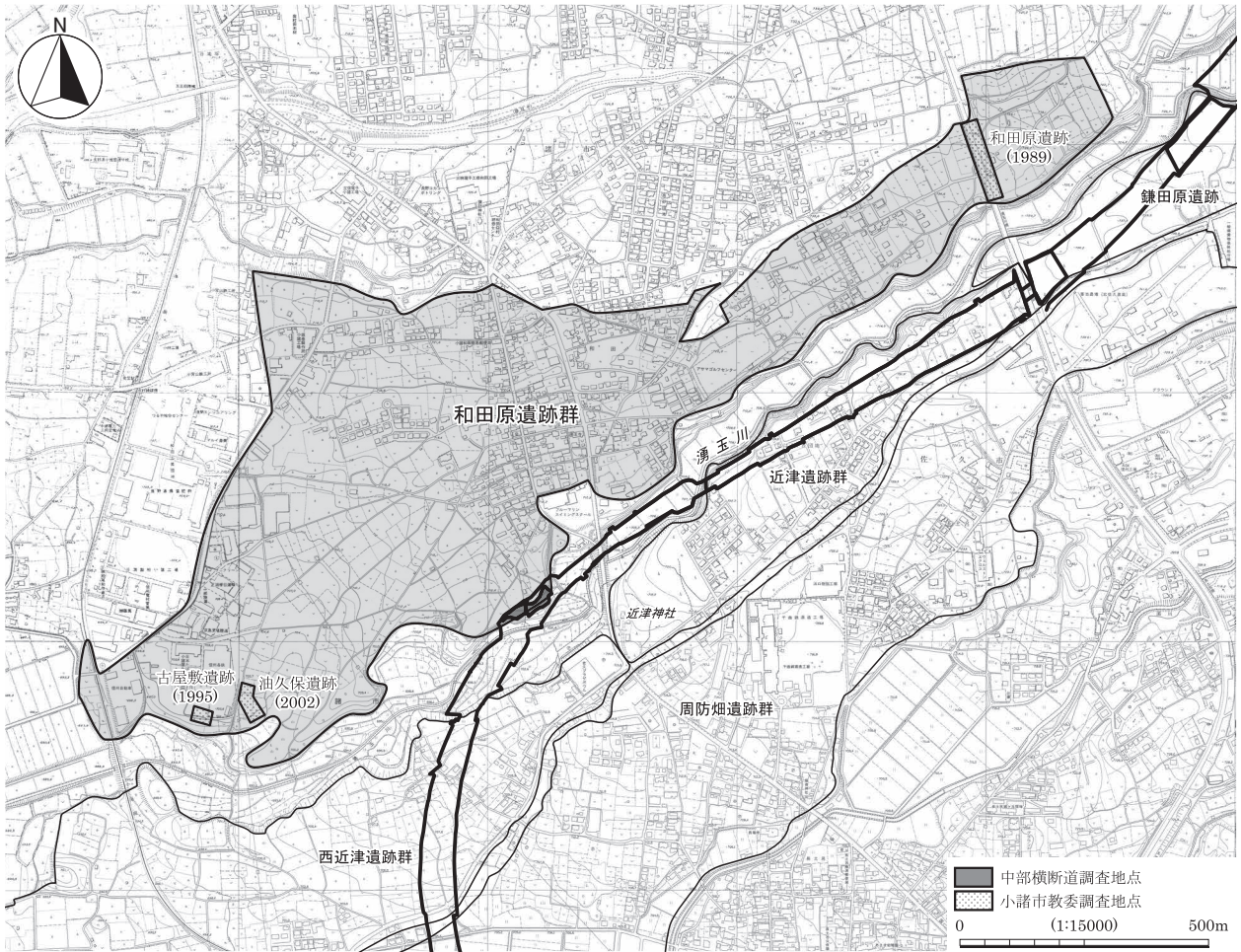
#### 1. 遺跡の概観

和田原遺跡群は小諸市の南西部和田に所在し、最大幅で南北約1km、東西約2kmの広大な範囲を有する。和田原遺跡群は浅間山麓に厚く堆積した浅間第一軽石流により形成された台地上に広がっており、台地は、北東から南西に向い緩やかに傾斜する。遺跡群の北側、南側はともに佐久地方特有の田切り地形により画されている。北側の田切り谷は、基盤整備による地形の改変により一部確認できない部分がある。南側は佐久市との境となる湧玉川により形成された田切り谷が現在も確認できる。

調査地点は小諸市和田字権現堂288ほかで、和田原遺跡群の中で中央やや西より南端の台地縁辺部に位置する(第119図)。南側は湧玉川が形成する田切り谷の崖となり、東西両側はノッチ状に凹んでおり、調査地点は南東方向に張り出し舌状を呈している。湧玉川を挟んだ対岸台地には古社「近津神社」が鎮座しており、周辺には本事業に関連する発掘調査が行われた近津遺跡群(第5章)や西近津遺跡群、さらに北には鎌田原遺跡(第4章)が広がる。田切り谷の崖面はほぼ垂直でその比高差は約15mを測り、一部上部が張り出している。調査地点での標高は710～716mを測る。

和田原遺跡群では今回の発掘調査以前に1988年・1994年・2000年の三度、小諸市教育委員会により発掘調査がおこなわれている。1988年の遺跡範囲北東部、和田原遺跡の調査では、焼失住居1軒を含む古墳時代前期の竪穴住居跡が5軒、同後期の竪穴住居跡1軒などが検出された。古墳時代前期の竪穴住居跡は重複することなく散漫に分布する(小諸市教委1989)。1994年調査の古屋敷遺跡と2000年調査の油久保遺跡は和田原遺跡群の中で南西部に位置している。古屋敷遺跡では古墳時代後期2軒、平安時代前期の竪穴住居跡1軒と222基のピットの他に調査区東側を中心に分布する土坑約70基が検出されている。検出された土坑の約半数にあたる35基について報告書では「中世以降と考えられる」としている。(小諸市教委1995)。油久保遺跡では古墳時代前期1軒、同後期17軒、奈良時代2軒、平安時代1軒の竪穴住居跡などが検出されている。また調査区の南側を中心に約100基の土坑が検出されており、その大半が中世に帰属するとしている(小諸市教委2002)。

和田原遺跡群は広大な遺跡範囲を有するが発掘調査された部分が少なく、検出された遺構が少ないため各時代における景観は不明な部分もあるが、集落の形成は古墳時代前期から確認できる。古墳時代前期には数軒程度の集落を形成していたようであるが、後期になると遺構間の切り合いも見られ、中・長期的な集落の運営がおこなわれていたようである。奈良時代・平安時代の遺構については、田切り谷をのぞむ縁辺部近くが調査地点であることも関係すると思われるが、現在までの発掘調査で検出されている遺構数が少ないため、和田原遺跡群としての体系的な動向は不明である。和田原遺跡群周辺の中原遺跡・宮ノ反A遺跡群の発掘調査結果での遺跡数のピークは古墳時代前期と平安時代を示しており、和田原遺跡群の様相もこの結果を外れないものとする。中世になると古屋敷遺跡、油久保遺跡の南西、田切り谷にのぞむ縁辺には地域の土豪・地土が築城したと考えられている東城跡、北西には地域の本城と考えられる耳取城跡が築城されている。古屋敷遺跡、油久保遺跡で検出された中世の遺構と周辺の城跡から、「城」と「ムラ」という中世の景観も考えることができる。



第119図 和田原遺跡群 遺跡範囲図



第120図 トレンチ配置図・基本層序



第121図 全体図

## 2. 調査の概要

和田原遺跡群の発掘調査範囲は1,935㎡。調査は平成18年度に実施した。当初、4月から調査を開始する予定であったが、8月からの着手となった。調査区の中央には用水路が走っており、これを境に東側を1区、西側を2区として調査を行った。遺構数も少なく、調査面積も狭いことから当遺跡では基準線の設定は行っていない。

1区には幅1mのトレンチを9本設定し、重機による掘削を行い遺構や遺物の状況を確認した（第120図）。その結果、表土層直下で地山である浅間第一軽石流上面や、表層が削平された状況が確認できた。また、一部トレンチでは溝状や土坑状の落ち込みが確認されたため、遺構の存在が想定される調査区東の高台部分を中心に面的な調査を行った。なお、1区北側で検出された土坑と考えられたものの大半は出土した人骨などから近世以降の土葬墓であることが判明し、事業者・旧地権者との協議により後日出土人骨を旧地権者に引き渡した。1区西側の調査前に墓地となっていた範囲については、トレンチ調査の結果や地山が露出している状況から、遺構が広がる可能性がないと判断し調査範囲から除外した。2区は調査区北側にトレンチを1本掘削した結果、土坑等の遺構が確認されたことから、全体を面調査することとした。

調査の結果、検出遺構は竪穴住居跡1軒、土坑3基、溝跡4条が台地際に散在する状況が判明した。9月21日に全ての調査を終了した。

## 3. 基本層序

調査区は南にある田切り谷に向い表土であるI層が徐々に厚くなる。II層である浅間第一軽石流上面までの深さは20～40cmである（第120図）。調査以前の調査区内は耕作地として利用されていた。このため1区南東部や2区西側では耕地造成などに伴う削平が行われた状況が見られた。このような部分は浅間第一軽石流が露出している。

## 第2節 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑3基、溝跡4条である。遺構の分布状態は非常に散漫で遺構の重複関係も見られなかった。溝1跡条を除き、調査区西側の2区で検出された(第121図)。竪穴住居跡は台地縁辺より15m程内側に入った場所に占地しており、出土遺物などから奈良時代の遺構と考えられる。溝跡は1区の北東端で等高線に並行する形で1条、2区中央で等高線と直行する形で2条、2区西端で1条検出されている。4本ともに底部に砂の堆積は見られなく、流水がなかったものとする。土坑は1区で24基、2区で3基を検出した。1区で検出したSK1～SK24については、1区調査区外の北側に広がる墓地と同様に近世以降の墓坑であると判断し、遺構としての登録から除外した。2区で検出した3基については中央西側で比較的近接して検出されているが、柱穴状・不整形のものである。SK25・26は遺物の出土がないので確定はできないが、埋土の観察などから竪穴住居跡と同時期とも考えられる。

### 1. 竪穴住居跡

SB01 [第122・123図 PL42・44・45]

**位置：**2区中央北端。田切り谷縁辺より北に15mほど内側に位置する。

**検出：**Ⅱ層浅間第一軽石流上面で軽石を含む褐色土の落ち込みとして検出。

**埋土：**遺構上層は耕作により攪乱されている。下層は灰黄褐色土と一次堆積の黒褐色土に2分される。自然埋没と考えられる。

**構造：**南北4.92m、東西5.48mの方形を呈し、主軸はN9°W。南壁中央が半円形状に30cmほど張り出ししており、入口と考えられる。壁は最大高で54cmを測り、傾斜がきつく直線的に立ち上がる。東・南壁下には最大で幅20cm、深さ4cmの周溝が巡っている。しかし南東部分は攪乱により壊されているため周溝がL字に繋がっているのかは不明である。床面は全面に貼り床が確認されている。支柱穴は4本検出した。攪乱に壊されているP4以外の3本での平均深度は61cmである。

**カマド：**北壁中央に構築されている。煙道部分の削り出しはわずかで、袖部分の構築材に礫と粘土が使用されている。カマド手前底面には地山被熱の火床を確認した。袖石の大部分と北壁寄りに支柱石が残存していたが、天井は崩壊しており残存していない。カマド構築材と考えられる粘土がカマドの南側に堆積していた。

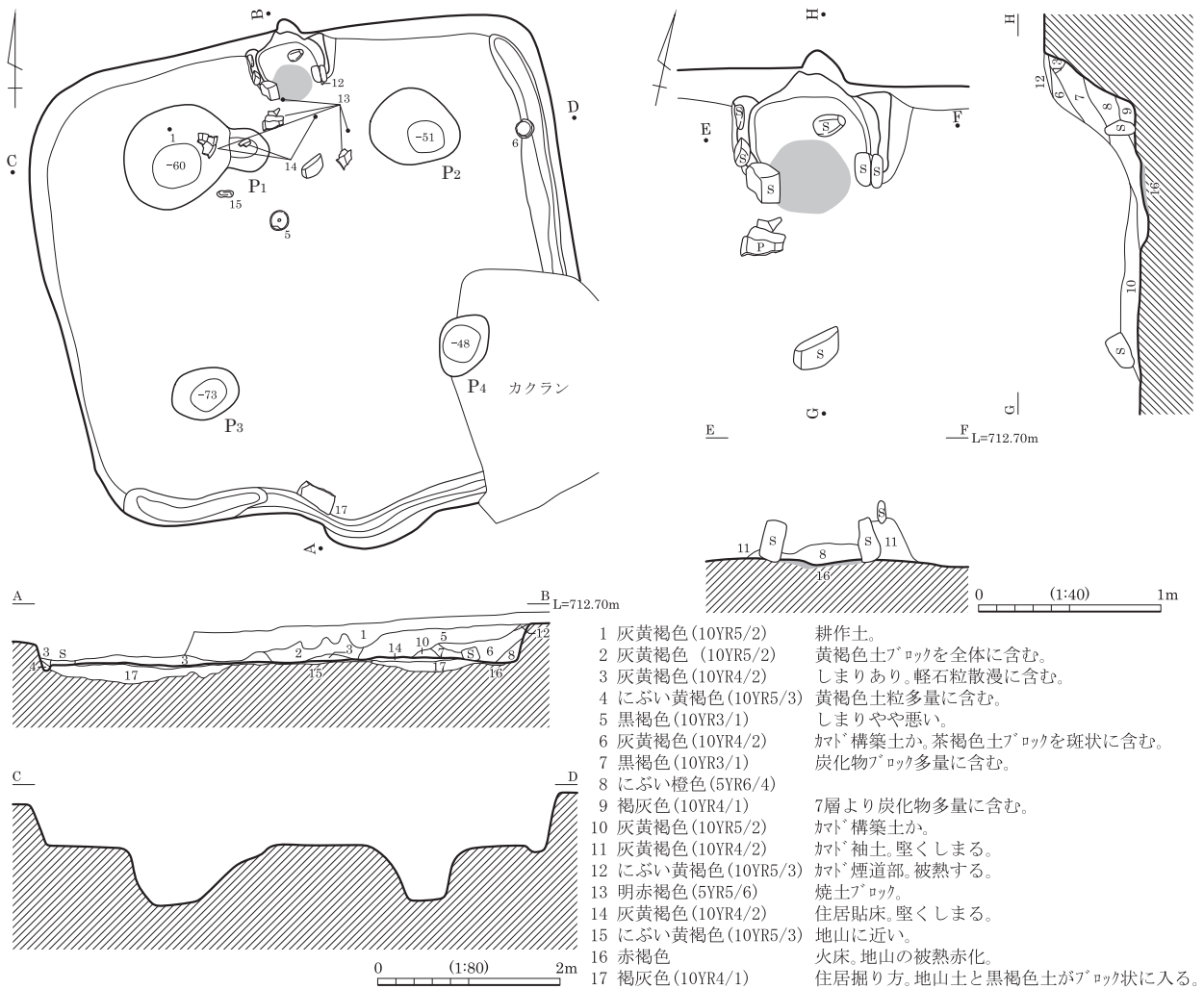
**遺物分布：**カマド南側の半径80cm以内に集中して出土している。13・14はP1内出土の土器と接合した。17の台石は住居南、入口と想定した付近で出土。

**出土遺物：**土器は14点、石器は3点を図化している。1は須恵器の高台付坏である。口縁は直線的に立ち上がり、高台は「ハの字」に開いている。2～3は須恵器の坏、4は土師器の坏で、底部は3点ともにヘラ切りである。5は須恵器の蓋で、潰れた宝珠のつまみを持ち、直径は21.2cmある。6は須恵器の甕で、胴中部から底にかけてタタキ痕がみられる。12～14は長胴のケズリ甕で、口縁断面の形状は「く」の字をしており、確認できるものは最大径が口縁部となる。

石器は15・16が磨石、17が台石で、全て安山岩製である。

鉄製品は18の1点のみ。長さ3cm、幅5mm。詳細不明。

**時期：**出土遺物から奈良時代前半。



第122図 SB01 遺構図

器種	坏			埴			蓋	高坏	甕		羽釜	瓶	壺	縄文	古墳前期	不明	その他	
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰釉陶器			土師器	須恵器								
個体数	1	6	4	3	11		1	6	9	206	1	4			4		11	
重量(g)	220	38	538				592		5407	900				78		54		

第88表 SB01 出土土器集計表

## 2. 土坑

SK25 [第124図 PL43]

位置：2区の中央部に位置し、SK26・27が東側に近接する。

形状・構造：長軸24cm、短軸22cmの円形を呈する。断面は柱穴状をしており、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は上部が褐灰色土、下部が灰黄褐色土となる。人為的埋没と考えられる。

時期：出土遺物がなく不明。

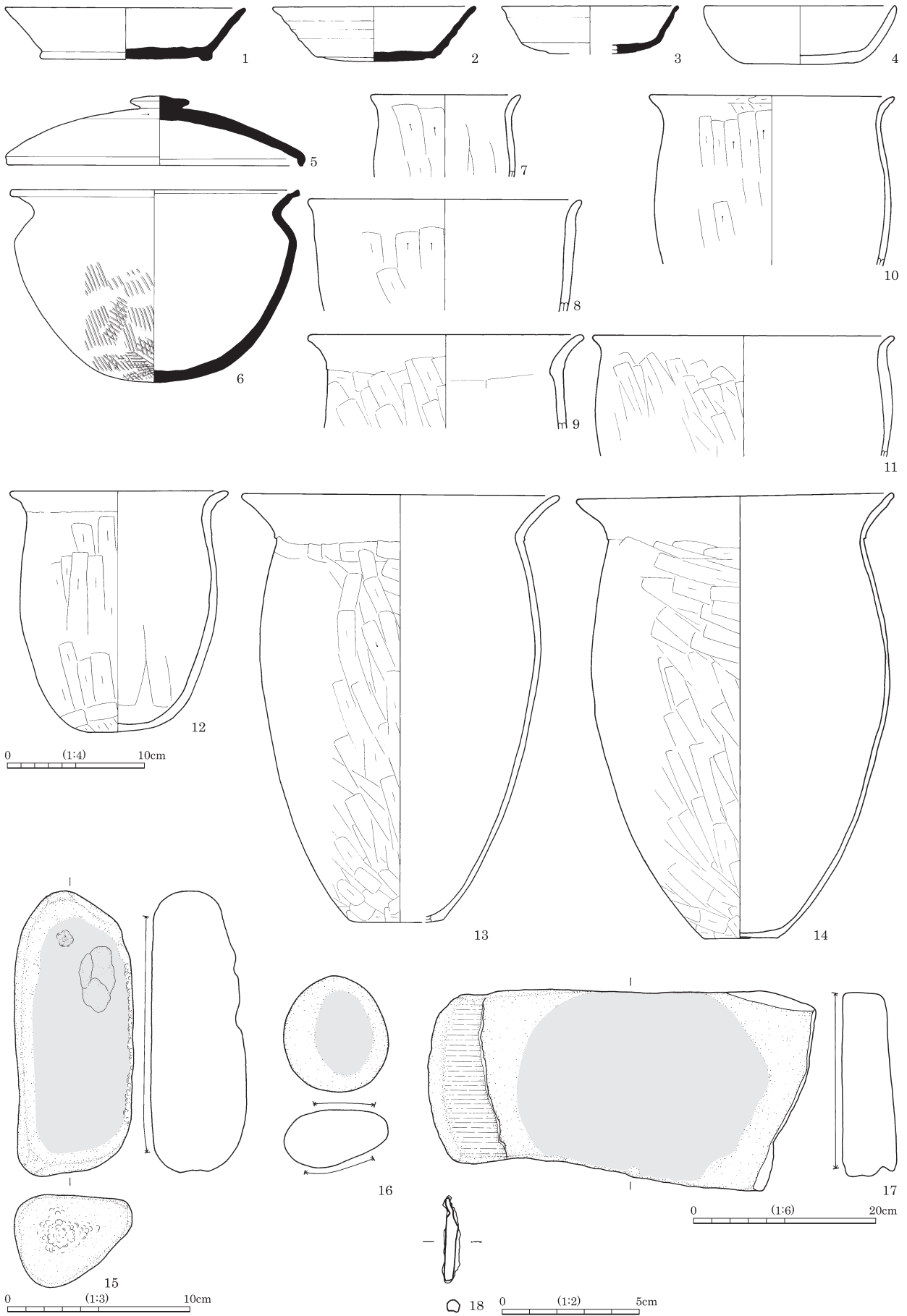
SK26 [第124図 PL43]

位置：SB1から南東に約10m。

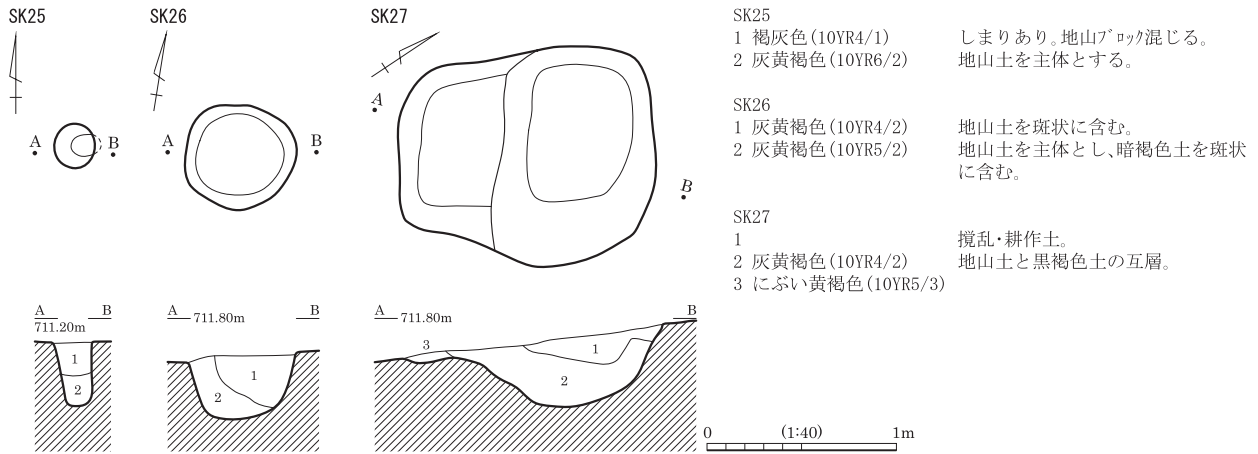
形状・構造：長軸59cm、短軸56cmの円形を呈する。断面は鍋状をしており、検出面からの深さは33cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、両層とも地山を主体とした灰黄褐色土である。自然埋没と考えられる。

時期：出土遺物がなく不明。





第123図 SB01 遺物図



第124図 SK 遺構図

**SK27** [第124図 PL43]

**位置**：SK26 から南西に約2 m。

**形状・構造**：長軸136cm、短軸116cmの不整形を呈する。断面は皿状を呈しており、検出面からの深さは36cmを測る。埋土は大きく上下2層に分かれる。上層は耕作土、下層が地山を含む黒褐色土の互層となる。埋土の状況から攪乱の可能性も考えられる。

**時期**：出土遺物がなく不明。

3. 溝跡

**SD01** [第125図 PL43]

**位置**：1区北東端。

**形状・構造**：調査区を北西から南東に横断するように、ほぼ直線で長さ約11 m、最大幅約1.1 m。検出面からの深さは20cm程度。北側は調査区外に延びている。埋土は、表土類似層の下に黄褐色土層が堆積している。西壁際には軽石流を多く含む黄褐色土が見られた。底面は所々深い部分が見られるが、底部に砂層の検出はなく、水は流れていなかったと考える。自然埋没と考えられる。

**時期**：出土遺物がなく不明。

**SD02** [第125図 PL43]

**位置**：2区中央南端。

**形状・構造**：等高線に直行し田切り谷に流れ込むような形で、直線的に長さ約10 m、最大幅80cmを測る。深さは検出面から約10cm。底面はほぼ平らである。埋土は上層では黒褐色土で、底部と壁際は黄褐色土である。自然埋没と考えられる。

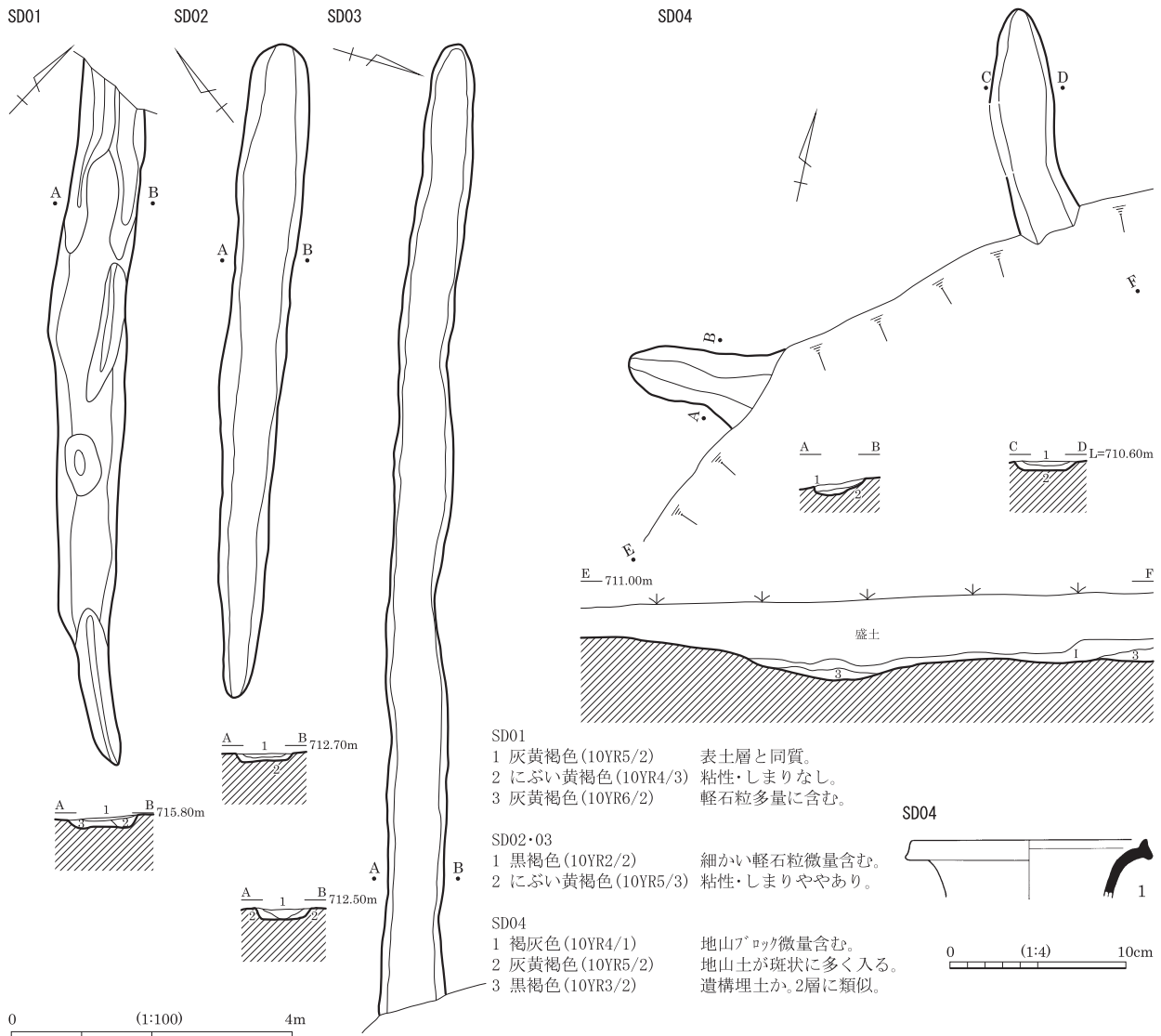
**時期**：出土遺物がなく不明。

**SD03** [第125図 PL43]

**位置**：SB01 から南に約8 m。

**形状・構造**：SD02 同様に等高線に直行するように検出。残存部分は東西にほぼ直線で約13 m、最大幅は約1 mを測る。東端は攪乱により壊されている。底部はほぼ平坦。埋土は黒褐色土を主体とし、両方の壁際に黄褐色土の一次堆積が見られる。自然埋没と考えられる。

**時期**：出土遺物がなく不明。



第125図 SD01～04 遺構図・遺物図

器種	杯			碗			蓋	高杯	甕		羽釜	甌	壺	縄文	古墳前期	不明	その他
	土師器	黒色土器	須恵器	土師器	黒色土器	灰軸陶器			土師器	須恵器							
個体			1						1	5							
重量(g)			3							337							

第89表 SD04 出土土器集計表

SD04 [第125図 PL43]

位置：2区東端。

形状・構造：検出した西側の溝は長さ約2メートル、最大幅約1.3m。検出面からの深さ約30cm。北側の溝跡は長さ約3m、最大幅約90cm。検出面からの深さ約20cm。土層観察から両者がL字に連結する一体の遺構であると考えたが、連結部分が調査区外であることから確定には至らず、別遺構である可能性も考えられる。埋土は褐灰色土の上層の下に黄褐色土が堆積し、北側の溝跡では底面と壁際に黄褐色土が堆積している。自然堆積と考える。調査区境の壁からもSD04と思われる土層（3層）が確認されている。2層と色調は異なるが、土質が類似している。

遺物：須恵器甕の口縁部が出土。詳細時期は不明。

時期：出土遺物などから奈良時代以降。

### 第3節 小結

今回の発掘調査で検出した遺構としては竪穴住居跡1軒、土坑3基、溝跡4条があり、各遺構が切り合いもなく散在する状況であった。遺構に伴う遺物が出土したのは住居跡（SB01）が1軒と溝跡（SD04）が1条のみである。住居跡は出土した土器から奈良時代と考えられるが、溝跡は土器の破片が1点のみということもあり奈良時代以降ということで時期の特定はできなかった。住居跡を検出した場所は調査区の北端であり、南に16mほど進むと田切り谷が開いている。このような状況から今回調査した住居跡が集落の南端に位置し、調査区北側に向い集落が展開していた可能性は否定できない。

和田原遺跡群は過去に小諸市教育委員会が3回調査を行っている。このうち、奈良時代に該当する遺構としては、2000年に発掘調査された油久保遺跡で奈良時代の住居跡が2軒検出されている（小諸市教委2002）。この住居跡は南北に約20m、東西に約7.5mある調査区の北西端で切り合った状態で検出されている。遺跡の南には田切り谷が開いているが住居跡からは約300mの距離があり、近隣の住居跡とは距離があったと考えられる。

和田原遺跡群の南側田切り谷の対岸に位置する鎌田原遺跡（第4章）・近津遺跡群（第5章）・西近津遺跡群（整理作業中）では、当事業に伴う発掘作業が行われている。田切り谷を挟んだすぐ対岸の近津遺跡群・鎌田原遺跡では、奈良時代に該当する遺構は検出されていない。さらに西に進んだ田切り地形の端部に位置する西近津遺跡群では、奈良時代の住居・掘立柱建物がまとまって検出されている。

和田原遺跡群における奈良時代集落の景観は従来考えられている通り、住居が間隔をあけて点在する状況であると考えられる。今回の調査結果ではその一端がみられた。



現在の和田原遺跡群

第6章 和田原遺跡群

図No.	遺構	時期	位置		形状・規模				炉(カマド)			その他		
			地区	グリッド	平面形	主軸方向	規模		床面積 ㎡	深さ cm	位置		形態	構築材
							南北×東西m							
122	SB01	奈良	2区		方形	N9°W	4.92×5.48	27.0	54	北壁・中央	壁下に燃焼部	礫		

第90表 住居跡一覧

図No.	遺構	時期	位置		形状		規模		遺物	その他
			地区	グリッド	平面形	断面形	規模			
							長軸×短軸 cm	深さ cm		
124	SK25	?	2区		円形	柱穴状	24×22	34		
124	SK26	?	2区		円形	鍋状	59×56	33		
124	SK27	?	2区		不整形	皿状	136×116	36		

第91表 土坑一覧

図版No.		写真図版No.		出土地点	種類	器種	残存率	法量(かつこ内は現存・推定長)			色調	外面調整	内面調整	備考
図	番号	PL	番号					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)				
123	1	43	2	SB01	須恵器	坏	40	(17.2)	12.4	3.7	10R4/2 灰赤	回転テ、底ケスリ	回転テ	
123	2	43	3	SB01	須恵器	坏	60	14.5	7.0	3.9	10YR5/1 褐灰	テ、底へ切り	テ	
123	3			SB01	須恵器	坏	30	(12.6)	(7.2)	(3.4)	5Y5/1 灰	テ、底へ切り	テ	
123	4	43	4	SB01	土師器	坏	30	(13.8)	8.2	4.3	10YR7/4 にぶい黄橙	回転テ、底へ切り テ	回転テ、底テ	
123	5	43	5	SB01	須恵器	蓋	100	21.2	—	5.1	5GY5/1 オリーブ灰	ケミ部テ、上部ケスリ 下部回転テ	回転テ	
123	6	43	6	SB01	須恵器	甕	95	(20.8)	—	14.0	2.5Y7/2 灰黄	口縁テ、胴部へ 底ケスリ後平行ケスリ	テ	
123	7			SB01	土師器	甕	5	(10.8)	—	(6.0)	10YR7/4 にぶい黄橙	胴部ケスリ	胴部工具によるテ	
123	8			SB01	土師器	甕	5	(19.6)	—	(8.1)	10YR6/4 にぶい黄橙	胴部ケスリ	口縁～胴部テ	
123	9			SB01	土師器	甕	5	(19.6)	—	(6.8)	7.5YR7/6 橙	口縁テ、胴部ケスリ (一部コ)	口縁テ、胴部工具 によるテ	
123	10			SB01	土師器	甕	10	(17.6)	—	(12.3)	7.5YR6/6 橙	口縁～胴部ケスリ	口縁～胴部テ	
123	11			SB01	土師器	甕	5	(21.8)	—	(8.7)	10YR5/2 灰黄褐	口縁テ、胴ケスリ	テ	
123	12	43	7	SB01	土師器	甕	30	(15.4)	—	17.5	7.5YR6/6 橙	胴部～底ケスリ後 コ?	胴部～底工具によ るテ	
123	13	44	1	SB01	土師器	甕	75	23.2	(7.0)	(32.0)	5YR6/4 にぶい橙	口縁テ、胴上部コ 方向のケスリ、胴部コ のケスリ、底部コ方向 のケスリ、底ケスリ	テ	
123	14	44	2	SB01	土師器	甕	90	22.3	5.7	31.5	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁テ、胴部コか らケスリ方向のケスリ 底ケスリ	テ	
125	1			SD04	須恵器	壺	5	(13.3)	—	(3.2)	5Y6/1 灰	口縁コテ、自然釉	口縁コテ、自然釉	

第92表 土器観察表

図版No.		写真図版No.		出土地点	器種	材質	状態	法量			重さ(g)	備考
図	番号	PL	番号					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
123	15	44	3	SB01	磨石	安山岩		15.6	6.5	5.1	863	
123	16	44	4	SB01	磨石	安山岩		6.4	5.6	3.2	172	
123	17	44	5	SB01	台石	安山岩		43.1	21.6	6.0	11,000	

第93表 石器観察表

## 第7章 科学分析

### 1. 放射性炭素年代測定（分析委託：株式会社 加速器分析研究所）

#### (1) 分析目的

近津遺跡群では、古墳時代前期前半の竪穴住居跡が多数検出された。この住居跡群は住居同士の重複関係がないことから、同時期もしくは短期間に形成された可能性が高い。また、住居跡の多くから炭化材が出土している。そこで、各住居跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行うことにより、住居群の存続期間の推定と、現在学界でも重要な研究課題の一つである弥生時代と古墳時代の境界の数値年代データを得るために実施した。

#### (2) 分析試料・結果概要

近津遺跡群検出の古墳時代前期前半の住居跡の中で、床面直上などの試料を中心に10点の年代測定をAMS法で実施した。その試料内容と測定結果は以下のとおりである。尚、分析内容の詳細については別添のDVDに収録した報告を参照されたい。

測定した試料の $^{14}\text{C}$ 年代（ $\sigma$   $^{13}\text{C}$ 補正あり）は、SB7010埋土出土の試料DCT07が $1,920 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB7012床面直上出土の試料DCT09が $1,920 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB6001壁際の床15cm上出土の試料DCT03が $1,900 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB7003出土土器（第56図12）の土器内採取の試料DCT11が $1,890 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB5009のP7埋土中の試料DCT02が $1,860 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB8005のP1埋土中の試料DCT10が $1,850 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB5004床面直上出土の試料DCT01が $1,830 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB6007床面直上出土の試料DCT04が $1,770 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB7005床面直上出土の試料DCT05が $1,770 \pm 30\text{yrBP}$ 、SB7004床面直上出土の試料DCT12はModernと測定された。

この測定値の内ModernとされたDCT12を除く9点の歴年較正年代（ $1\sigma$ ）は、最も古いDCT07が1世紀後半頃、DCT09・03・11が1世紀後半から2世紀前半頃、DCT02・10・01が2世紀前半から3世紀前半頃、最も新しいDCT04・05は3世紀後半から4世紀前半頃の範囲で示されることとなる。

測定値には年代差が認められるが、概ね弥生時代後期から古墳時代前期の年代幅に収まると言えよう。年代測定を実施した遺構の出土土器には時間差を認めにくく、ここでは古墳時代前期前半の測定値として提示する。今後、弥生時代後期から古墳時代を含んだ測定資料の増加により、更に検討が加えられていくことが望まれる。

## 第8章 総括

本報告書は中部横断自動車道建設に伴って実施した小諸市鎌田原遺跡、佐久市近津遺跡群、小諸市和田原遺跡群の調査成果である。ここでは、各遺跡の調査成果を周辺遺跡の状況も含めて簡潔に整理して総括としたい。

本報告の鎌田原遺跡、近津遺跡群、和田原遺跡群は、約13,000年前頃の浅間山大爆発により発生した浅間第一軽石流に厚く覆われた台地の末端付近に所在する遺跡である。佐久平北部に広がるこの台地は、軽石流が河川の浸食を受けて、深い谷がつくられるという、この地域に特徴的な「田切り地形」を発達させている。特に台地末端付近では田切り谷が樹枝状に入り細長い台地を形成していて、今回調査対象とされた3遺跡も湧玉川の田切り谷を挟んだ細長い台地上に広がる遺跡である。

この田切り台地上には弥生時代、古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡が多数立地していることが今までの調査によって知られていた。今回調査対象とされた3遺跡は数回の調査履歴があるものの、大規模な調査が実施されていない。このため、遺跡の実態が明確ではなかった。調査は湧玉川の田切り谷に沿って台地の縁を延長1km以上にわたってトレンチを入れたように実施され、周辺の大規模集落遺跡とは趣を異にする小規模集落の様子が明らかとなった。

3遺跡ではじめて人の活動痕跡が認められるのは縄文時代である。縄文時代早期や中期後半から後期前半の土器が鎌田原遺跡・近津遺跡群で出土した。遺構は陥し穴が鎌田原遺跡で2基、近津遺跡群で9基が検出された。陥し穴は台地縁辺部や埋没谷の谷頭などに構築され、複数基が1組となって構成されていた可能性が考えられる。この陥し穴は、佐久市長土呂遺跡群聖原遺跡、曾根新城遺跡、深堀遺跡群深堀遺跡などの周辺遺跡においても検出されている。このうち深堀遺跡では旧河川の周辺に構築され、近津遺跡群のあり方とも類似している。配置からみて、火砕流台地末端部の田切り地形の谷底の水を求めて集まる動物を狩猟することを目的として構築されたものであろう。

ところで、この陥し穴を構えた人びとはどこに集落を営んでいたのであろうか。今回の調査では竪穴住居跡が検出されなかったものの、近津遺跡群の調査地点に隣接する近津遺跡群下宮原遺跡で縄文中期と考えられる竪穴住居跡が1軒検出され、近津遺跡群と同じ台地の南西部にあたる西近津遺跡群でも中部横断自動車道に伴う調査で縄文時代中期の住居跡が2軒検出されている。最近、佐久市教委による西近津遺跡群の調査で縄文時代中期から後期の集落の一端が確認された。詳細な報告はこれからだが、数少ない佐久平での縄文集落であり、今後の成果が期待される。こうした集落の人びとが、集落からやや離れた鎌田原遺跡や近津遺跡群などの場所を狩猟活動の場所として利用していたのであろうか。

佐久平北部の田切り台地が本格的に利用されるようになるのは弥生時代中期以降である。佐久市北西久保遺跡、鳴澤遺跡群五里田遺跡、岩村田遺跡群西一本柳遺跡など、濁川の氾濫低地に接した台地部に弥生時代中期の大規模な集落が形成される。そして、弥生時代後期になるとさらに遺跡は増加し、濁川の氾濫低地を囲むように田切り台地上には大規模な集落遺跡が数多く営まれる。中部横断自動車道に伴う調査で整理作業中の西近津遺跡群では、一辺18mを越す超大形の竪穴住居跡をはじめ、数十軒以上からなる集落跡が調査されている。同じく、周防畑遺跡群でも弥生時代後期の集落域と、周溝墓からなる墓域とが調査され、整理作業が実施されている。これ以外にも、周辺では西近津遺跡群西近津遺跡・森下遺跡、周防畑遺跡群大豆田遺跡・辻の前遺跡、長土呂遺跡群下伯母塚遺跡、枇杷坂遺跡群清水田遺跡・円正坊遺跡・直路遺跡、北西久保遺跡、岩村田遺跡群西一本柳遺跡・北一本柳遺跡、西一里塚遺跡群など、現在の佐久

平駅周辺の台地上は弥生時代後期の集落が連綿と広がっている状況である（第126図）。こうした集落を支えた生産域は、今のところ明確な水田遺構は検出されていないものの、濁川の氾濫低地であろう。河川改修が行われる前の濁川は数十年に一度程度の割合で氾濫を起こしていたと地元の方からお聞きした。度重なる氾濫により新たな堆積が行われ、肥沃な生産域として利用されたのであろう。

なお、この弥生時代の集落遺跡は火砕流台地の末端付近の標高720 m程まで広がるが、それ以上標高の高い台地には広がっていない。今回調査した鎌田原遺跡や近津遺跡群も標高が730～740 m程で弥生時代後期集落が集中する地域よりやや高い地点となっていて、該期の遺構が検出されなかったのもこうした点も関係しているのかもしれない。ちなみに、標高がより高い小諸市内の田切り台地には弥生時代後期の集落はみられない。水田経営の技術的な限界を示しているのかもしれない。ただし、御代田町細田遺跡や下荒田遺跡はこれより100 m以上高地の浅間山麓の細い尾根上に立地し、弥生時代後期の10軒と5軒の竪穴住居跡からなる集落が検出されている。これは現在でも優良な水田地帯の基となっている浅間山の豊富な伏流水を用いた生産域をもった集落と想定されている。

このように田切り台地末端付近の大規模な弥生時代後期の集落は古墳時代前期に継続されず、古墳時代前期になると小規模・分散化していく。遺跡立地も弥生時代後期の広い台地上ではなく、今までほとんど利用されてこなかった田切り台地の縁辺部や、河川の低位段丘面に新たな集落を形成していくようになる（第126図）。今回調査した3遺跡はまさにこうした集落遺跡で、鎌田原遺跡8軒、近津遺跡群30軒の竪穴住居跡が検出された。和田原遺跡群では、今回の調査で当該期の遺構は検出されなかったものの、過去の市教委による調査で和田原遺跡や油久保遺跡に小規模な集落が発見されている。湧玉川の南側台地縁辺に鎌田原遺跡、近津遺跡群が並び、その対岸が和田原遺跡群となり、さらに、和田原遺跡群の東側には中部横断自動車道佐久小諸JCT部分に所在する野火附遺跡があり、同時期の集落が検出されている。まさに田切り谷に沿って小規模な集落が隣接する状況を示している。

弥生時代には集落がつくられなかった小諸市内の田切り台地上にも、三子塚遺跡群大下原遺跡、宮ノ反A遺跡群竹花遺跡、大塚原遺跡などで小規模な集落が形成されている。いずれも田切りに面した台地縁辺部に竪穴住居跡が数軒程度で散在する状況である。濁川氾濫低地周辺では、周防畑遺跡群辻の前遺跡、岩村田遺跡群松の木遺跡・西八日町遺跡などがある。弥生時代から続く遺跡もあるが、集落規模は小さくなる。集落占地場所も弥生時代とは異なり、周囲に低湿地が広がる微高地となっている。前田遺跡も浅間第一軽石流の堆積末端部で前面が低湿地となる。湯川沿いでは、湯川右岸に栗毛坂遺跡群、左岸に腰巻遺跡、下小平遺跡がいずれも湯川に面した低位段丘面に営まれている。低位段丘面では前面や背面を崖に囲まれた、狭く孤立した空間を集落域としている。湯川下流域では大和田遺跡群川原端遺跡、猫田遺跡群大ふけ遺跡、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、白山遺跡群下原遺跡などで、単独または小規模な集落が発見されている。さらに、千曲川沿いでは旧浅科村（現佐久市）砂原遺跡、海戸田A遺跡、中平・田中島遺跡などが兩岸に立地する。一方、佐久平東側の関東山地寄りの山麓地域にも丸山Ⅱ遺跡、筒畑遺跡群池畑遺跡、宿上屋敷遺跡、権現平遺跡、池端遺跡などが河川を見下ろす山麓などに形成されている。また、御代田町の浅間山麓では、弥生時代後期の細田遺跡や下荒田遺跡から尾根をやや下った塚田遺跡に占地をかえて古墳時代前期の集落がつくられている他、小諸市石神遺跡のように弥生時代には遺跡が存在しなかった浅間山麓にも小規模な集落がつくられるようになる。

このように、古墳時代前期には弥生時代後期の集落とは異なる場所に集落を形成するようになり、しかも、その規模は10軒弱程度の小規模のものへと変化している。今回の調査でも鎌田原遺跡では8軒の住居跡が散在し、近津遺跡群でもいくつかの地形面ごとに10軒程の集落が隣接している状況を示している。東信地域の東御市や北信地域の中野市などでも、古墳時代前期には似たような立地の小規模集落の存在が確



認されている。こうした遺跡立地の変化がどのような要因で起こったかは明らかでないが、自然環境の変化や東海・北陸地方など他地方からの影響など、当時の社会情勢が関わっているのかもしれない。

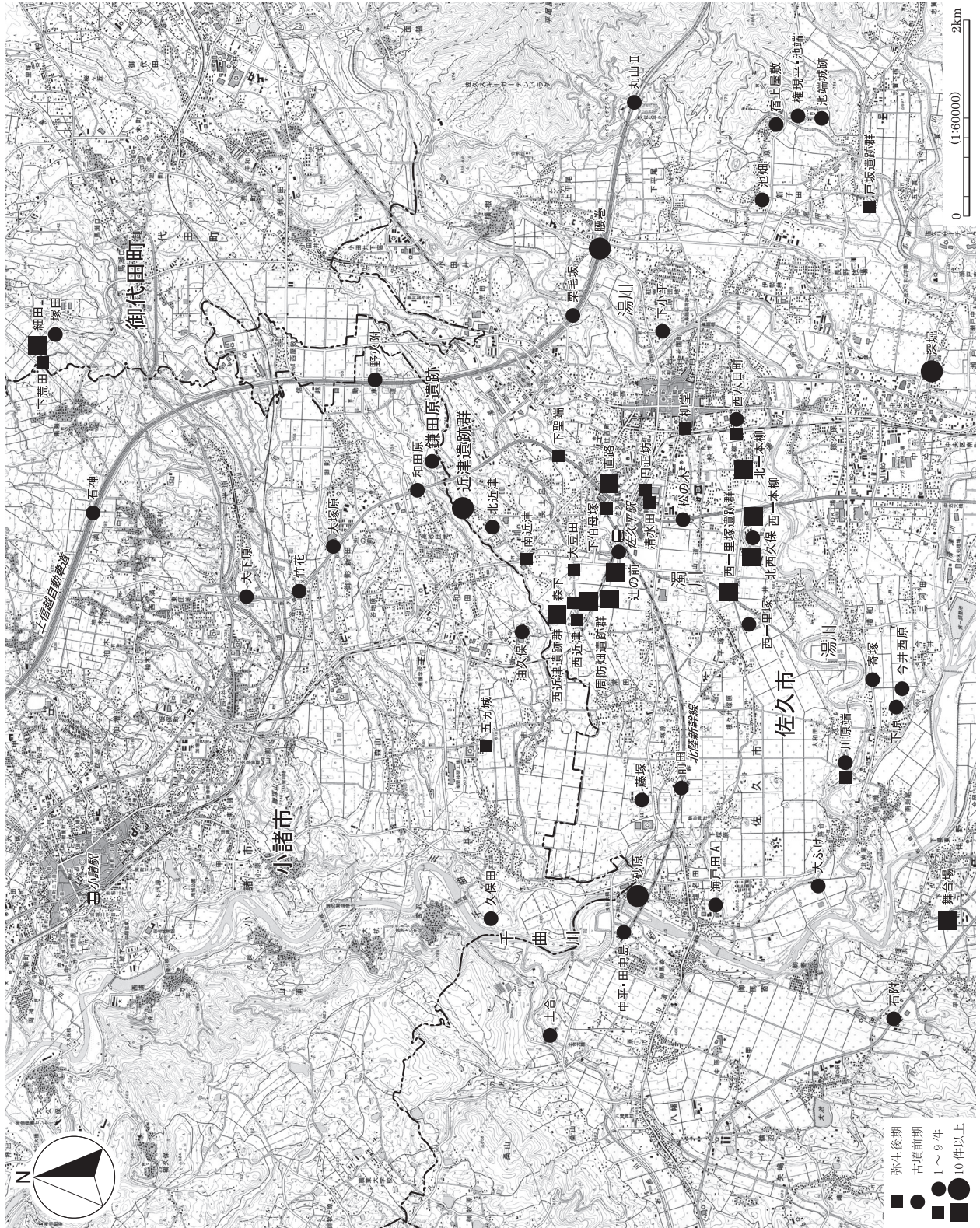
古墳時代前期集落出土の土器を概観すると、弥生時代の箱清水系譜の在来系土器群に小型器台や小型高坏などの外来系土器群を伴う遺跡と、在来系土器群がほとんど消失し小型丸底土器を伴うようになる遺跡とがある。前者には、近津遺跡群が該当し、御代田町塚田遺跡、小諸市宮ノ反A遺跡群竹花遺跡、大塚原遺跡、和田原遺跡群和田原遺跡、佐久市では周防畑遺跡群辻の前遺跡、岩村田遺跡群松の木遺跡、下小平遺跡、海戸田A遺跡、砂原遺跡、中平・田中島遺跡などがある。また、後者の遺跡には鎌田原遺跡が該当し、小諸市野火附遺跡、栗毛坂遺跡群、藤塚遺跡、腰巻遺跡、深堀遺跡群などがある。いずれの遺跡もほとんど同時期の遺構だけで構成されていて、前期前半から後半まで継続する状況ではない。存続期間の短い小規模な集落が、場所を移動しながら形成されているのが、佐久地域における古墳時代前期集落の様相といえよう。

古墳時代中期の遺跡は佐久平北部で少なく、その実態がなかなか見えてこない。長土呂遺跡群下聖端遺跡、岩村田遺跡群西一本柳遺跡などでは集落が検出されている。北西久保遺跡では該期の集落と共に古墳群も発見されている。古墳時代前期に比べ集落規模は大きくなり、台地を広く利用するようになっていく。今回近津遺跡群では、該期の住居跡2軒と同時期と想定される2基の周溝墓が発見されたが、集落と周溝墓の関係については不明な点も多い。

古墳時代後期以降、今回報告の遺跡周辺の台地上には大規模な集落がいくつも認められるようになる。鎌田原遺跡の南東の田切り台地上に佐久市栗毛坂遺跡群、長土呂遺跡群聖原遺跡、芝宮遺跡群、小諸市中原遺跡群などがあり、北東部で佐久市・小諸市・御代田町にかけて広がる鋳師屋遺跡群の御代田町根岸遺跡、十二遺跡、佐久市前田遺跡などがある。これら遺跡では、古墳時代から平安時代前半にかけて100軒を超えるような大規模な集落が形成されている。近津遺跡群の西側に隣接する西近津遺跡群でも中部横断自動車道に伴う調査で、大規模な集落跡が検出され、銅印や各種文字資料など多彩な遺物が出土している。これに対し、本報告の3遺跡ではこの時期の集落が存在しておらず、わずかに和田原遺跡群で奈良時代の竪穴住居跡が1軒検出されたのみで、周辺の遺跡とは大きく様相を異にしている。まるで無人の空間が広がっているようである。同じ田切り台地でも、居住域とは別の使われ方をした場所もあるのであろうか。

一方、台地上に広がった平安時代前半の集落も10世紀以降、急激に集落規模を縮小していく。鎌田原遺跡群の住居跡も含めた近津遺跡群の平安時代の集落はこうした状況の中で営まれた小規模な集落といえよう。ほとんど同時期の住居跡が適当な間隔をあけて散在しているムラの様子がみえてくる。

以上、簡単に報告遺跡を含めた佐久平北部における遺跡の動きを中心に整理してきた。今回の調査成果が、佐久地域の古代史を明らかにしていくうえで活用されることを望みたい。



第126図 佐久平の弥生後期・古墳前期の遺跡

## 引用・参考文献

- 浅科村教育委員会 1993『砂原遺跡』浅科村文化財調査報告第6集  
浅科村教育委員会 2002『海戸田A遺跡』浅科村文化財調査報告第14集  
宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」長野県埋蔵文化財センター紀要2  
かみつけの里博物館 1998『人が動く・土器も動く』第2回特別展図録  
小諸市 1986『小諸市誌』自然編  
小諸市教育委員会 1984『久保田遺跡』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集  
小諸市教育委員会 1988『鋳物師屋』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集  
小諸市教育委員会 1989『和田原 鎌田原遺跡』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集  
小諸市教育委員会 1994『東下原 大下原 竹花 舟窪 大塚原』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集  
小諸市教育委員会 1994『大塚原(第二次)』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集  
小諸市教育委員会 1995『古屋敷』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集  
小諸市教育委員会 2002『油久保』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集  
小山岳夫 1994「素描 弥生社会解体に伴う集落の拡散」長野県考古学会誌74  
佐久考古学会 1990『赤い土器を追う』佐久考古6号  
佐久市 1988『佐久市志』自然編  
佐久市 1995『佐久市志』歴史編(一)原始古代  
佐久市教育委員会 1972『北近津 戸坂』郷土の文化財3  
佐久市教育委員会 1975『今井西原緊急発掘調査概要』  
佐久市教育委員会 1981『下小平遺跡』  
佐久市埋蔵文化財センター 1986『西裏 竹田峯』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第1集  
佐久市埋蔵文化財センター 1986『池畑 西御堂』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第2集  
佐久市埋蔵文化財センター 1987『宿上屋敷 下川原 光明寺』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第5集  
佐久市埋蔵文化財センター 1987『北西の久保』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第8集  
佐久市埋蔵文化財センター 1987『瀧の峯古墳群』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第14集  
佐久市教育委員会 1988『鋳師屋遺跡Ⅱ』  
佐久市教育委員会 1989『前田遺跡』  
佐久市埋蔵文化財センター 1989『腰巻 西大久保 曲尾Ⅱ』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第15集  
佐久市埋蔵文化財センター 1989『森下』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第18集  
佐久市教育委員会 1991『大ふけ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集  
佐久市教育委員会 1992『国道141号関係遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集  
佐久市教育委員会 1994『藤塚古墳群 藤塚遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集  
佐久市教育委員会 1995『曾根新城遺跡 上久保田向遺跡 西曾根遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第41集  
佐久市教育委員会 1996『権現平遺跡 池端遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集  
佐久市教育委員会 1994『池端城跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第48集  
佐久市教育委員会 1994『藤塚遺跡Ⅲ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集  
佐久市教育委員会 1997『円正坊遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第53集  
佐久市教育委員会 2001『榛名平遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第84集  
佐久市教育委員会 2001『宮添遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集  
佐久市教育委員会 2001『川原端遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第89集  
佐久市教育委員会 2001『西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ 中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ 松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第91集  
佐久市教育委員会 2001『辻の前遺跡Ⅱ 中仲田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第92集

- 佐久市教育委員会 2002『深堀遺跡Ⅵ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第101集
- 佐久市教育委員会 2002『門正坊遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第102集
- 佐久市教育委員会 2003『佐久駅周辺土地地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第110集
- 佐久市教育委員会 2004『西一本柳遺跡Ⅸ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第113集
- 佐久市教育委員会 2004『東近津遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第118集
- 佐久市教育委員会 2005『聖原遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第126集
- 佐久市教育委員会 2008『周防畑遺跡群大豆田遺跡ⅠⅡ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第156集
- 佐久市教育委員会 2008『寄塚遺跡群寄塚遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第157集
- 佐久市教育委員会 2009『森平遺跡 北近津遺跡Ⅱ 西一里塚遺跡Ⅲ 大豆田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第165集
- 佐久市教育委員会 2009『西近津遺跡群西近津遺跡Ⅶ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第162集
- 佐久市教育委員会 2009『下宮原遺跡ⅠⅡ 周防畑遺跡群』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第163集
- 佐久市教育委員会 2010『岩村田遺跡群 西八日町遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第172集
- 佐久市教育委員会 2010『岩村田遺跡群 西八日町遺跡ⅤⅥ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第173集
- 佐久市教育委員会 2010『周防畑遺跡群南近津遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第177集
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」榎原考古学研究所論集第八
- 堤 隆・藤森英二・小山岳夫・富沢一明・櫻井秀雄・森泉かよ子 2008『考古学が語る 佐久の古代史』
- 堤 隆 2012『浅間 火山と共に生きる』
- 富沢一明 2004「長野県 東信地域の古墳時代前期土器様相と外来系土器について」専修考古学第10号
- 富沢一明 1996「佐久平における古墳時代の土器編年表」長野県考古学会誌79
- 富沢一明・広田和穂 1999「長野県における古墳時代中期の土器様相」東国土器研究第5号
- 長野県教育委員会 1997『大規模開発事業内遺跡一遺跡詳細分布調査報告書一』
- 長野県教育委員会 2000『大規模開発事業内遺跡一遺跡詳細分布調査2一』
- 長野県教育委員会 2003『大規模開発事業内遺跡一遺跡詳細分布調査3一』
- 長野県教育委員会 2009『大規模開発事業内遺跡一遺跡詳細分布調査4一』
- 長野県考古学会 1999『長野県の弥生土器編年』
- 長野県考古学会 1993「科野における古墳出現期研究の現状と課題」長野県考古学会誌69・70
- 長野県埋蔵文化財センター 1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1 下茂内遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 栗毛坂遺跡ほか』
- 長野県埋蔵文化財センター 1996『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 大星山古墳・北平1号墳』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生総論6』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1 砂原遺跡ほか』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17 野火附遺跡ほか』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18 芝宮遺跡群 中原遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19 石神遺跡ほか』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009『上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 野火附遺跡ほか』
- 林 幸彦 1982「周防畑B遺跡」長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）
- 御代田町教育委員会 1987『前田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 御代田町教育委員会 1988『十二遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 御代田町教育委員会 1989『根岸遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 御代田町 1995『御代田町誌』自然編
- 御代田町 1998『御代田町誌』歴史編上
- 御代田町教育委員会 1993『細田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 御代田町教育委員会 1993『塩野西遺跡群塚田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

# 報告書抄録

ふりがな	かまたはらいせき ちかついせきぐん わだはらいせきぐん							
書名	鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群							
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 -小諸市内・佐久市内 1 -							
シリーズ名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	103							
著作者名	廣瀬 昭弘 曳地 隆元							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 Tel.026-293-5926							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かまたはらいせき 鎌田原遺跡	ながのけんこもろし 長野県小諸市 みかげしんてん 御影新田字鎌 田原214ほか	20208	235	36° 17' 43" (世界測地系) 36° 17' 31" (日本測地系)	138° 28' 29" (世界測地系) 138° 28' 40" (日本測地系)	20011203～ 20011221 20020523～ 20021205 20090930～ 20091030	14,910	中部横断自動車 道建設に伴う記 録保存調査
ちかついせきぐん 近津遺跡群	ながのけんさくし 長野県佐久市 ながとろ 長土呂字下宮 原1061ほか	20217	6	36° 17' 30" (世界測地系) 36° 17' 18" (日本測地系)	138° 28' 05" (世界測地系) 138° 28' 16" (日本測地系)	20070831～ 20071220 20080522～ 20081222 20090406～ 20091221	38,300	中部横断自動車 道建設に伴う記 録保存調査
わだはらいせきぐん 和田原遺跡群	ながのけんこもろし 長野県小諸市 わだ 和田字権現堂 288ほか	20208	230	36° 17' 15" (世界測地系) 36° 17' 04" (日本測地系)	138° 27' 30" (世界測地系) 138° 27' 42" (日本測地系)	20060821～ 20060921	1,935	中部横断自動車 道建設に伴う記 録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鎌田原遺跡	集落	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡13 土坑12	土師器 磨石、砥石 管玉、白玉				
近津遺跡群	集落 墓	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡47 円形周溝墓2 土坑37、焼土跡8 溝跡3	土師器 磨石、敲石、砥石 管玉 鉄製品(鉄鏃、紡錘車)、銭貨		円形周溝墓から鉄鏃が出土。 平安時代の墓坑から人骨・ 刀子が出土。		
和田原遺跡群	集落	奈良時代	竪穴住居跡1 土坑3 溝跡4	土師器、須恵器 磨石				
要約	<p>浅間山麓の佐久平北部では、厚く堆積した軽石流により形成された台地を、河川の浸食により深い谷が刻む「田切り地形」と呼ばれる独特の地形がみられる。本書掲載の3遺跡はこうした田切りの一つである湧玉川の田切り谷に面した台地縁辺部に立地する。</p> <p>鎌田原遺跡では、古墳時代前期と平安時代後期の集落が検出された。古墳時代前期の集落は小規模で、竪穴住居跡が散在する。出土土器は弥生時代の箱清水式系譜の土器が消失し、新たに小型丸底土器や柱状脚高杯を組成し、近津遺跡群より新しい様相を示す。平安時代後期の集落は、西側に隣接する近津遺跡群の該期集落と一体のもので、集落の東端部といえる。</p> <p>近津遺跡群でも、古墳時代前期と平安時代の集落が検出された。古墳時代前期集落は、高位平坦面・低位平坦面・緩斜面といった地形面ごとにまとまる。出土土器は箱清水式系譜の土器を主体に小型器台などを組成し、古墳時代前半の様相を示し、鎌田原遺跡の集落に先行する。両遺跡の調査で古墳時代前期集落が時期により占地を変化させている状況が明らかにされた。平安時代の集落は、11世紀後半から12世紀前半にかけての一時期の集落で、住居構造等が類似した竪穴住居跡が散在している。</p> <p>和田原遺跡群では、奈良時代の竪穴住居跡1軒が検出された。遺跡内でも当該期の遺構は少なく、古墳時代から中世にかけての遺跡の内容に新たな所見が得られた。</p>							

平成25 (2013) 年 3 月 22 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 103

**鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群**

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

－小諸市内・佐久市内 1－

発行者 国土交通省 関東地方整備局  
(財)長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 西沢印刷株式会社  
〒380-0904 長野県長野市七瀬中町1048  
Tel 026-226-6071 Fax 026-226-6049

# 写真図版



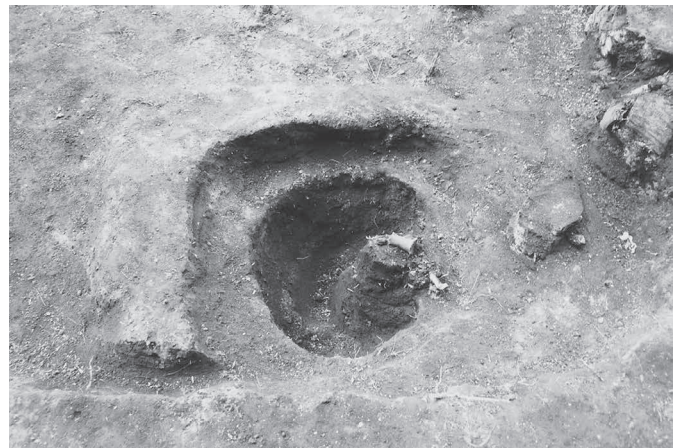




1区全景



SB01 (西より)



SB01 P1 (南東より)

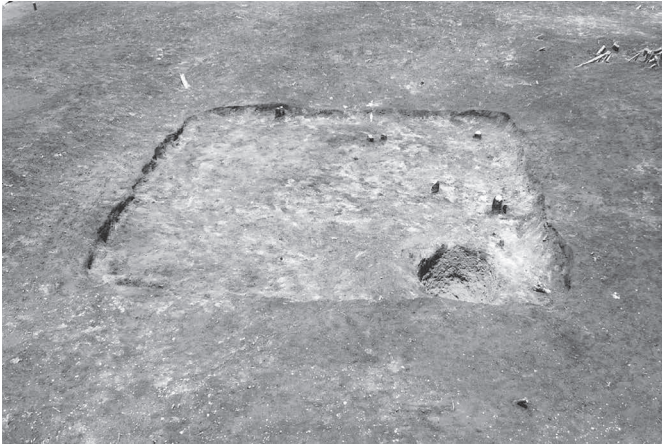


SB02 (南より)



SB02 カマド (南より)

PL 2 鎌田原遺跡



SB03 (南より)



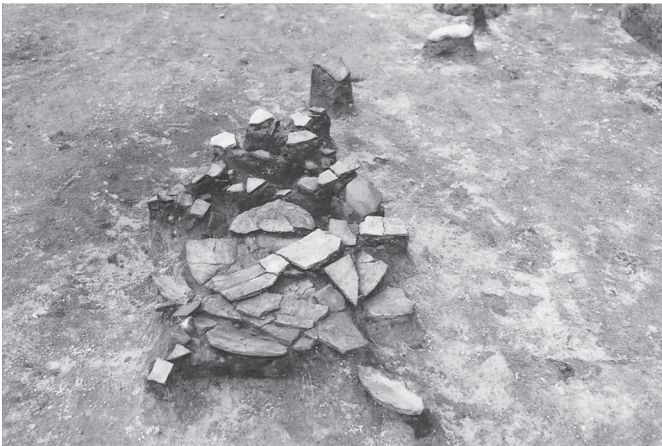
SB03 遺物出土状況 (南より)



SB04 (南東より)



SB05 (西より)



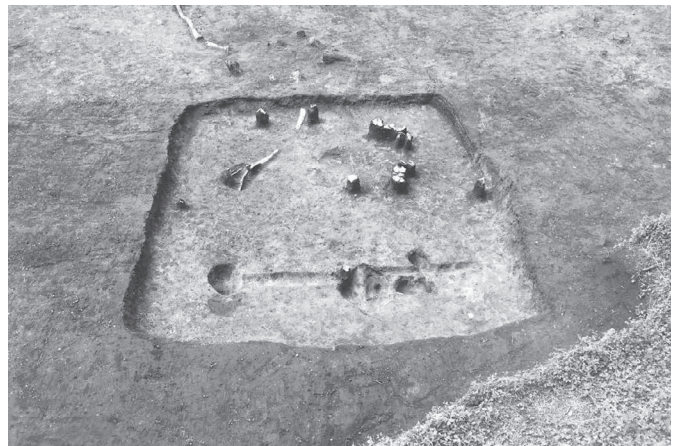
SB05 遺物出土状況 (西より)



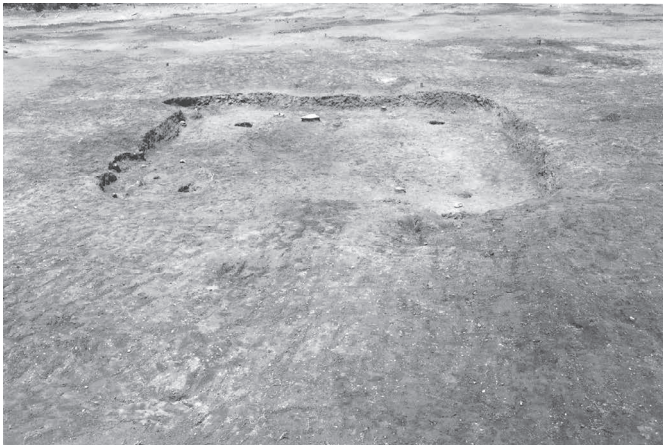
SB05 遺物出土状況 (南西より)



SB05 P1遺物出土状況 (南西より)



SB06 (南より)



SB07 (南より)



SB07 管玉出土状況 (北より)



SB07 遺物出土状況 (南より)



SB08 (南より)



SB09 (南より)



SB09 遺物出土状況 (東より)

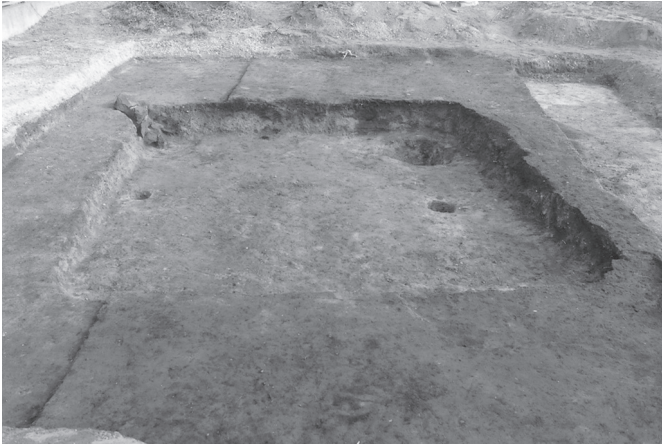


SB10 (南より)



SB10 P1 (南より)

PL 4 鎌田原遺跡



SB11 (北より)



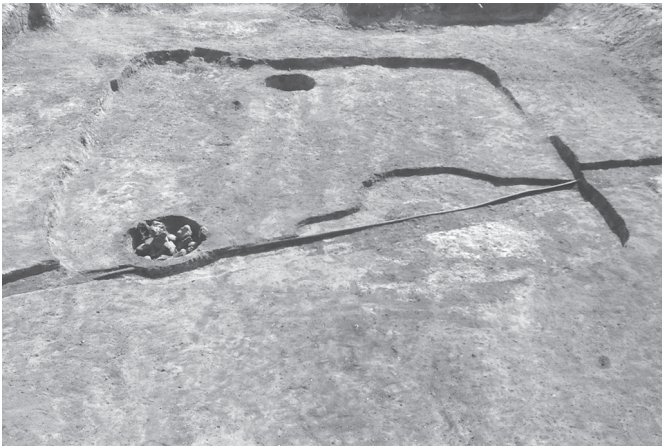
SB11 カマド (南東より)



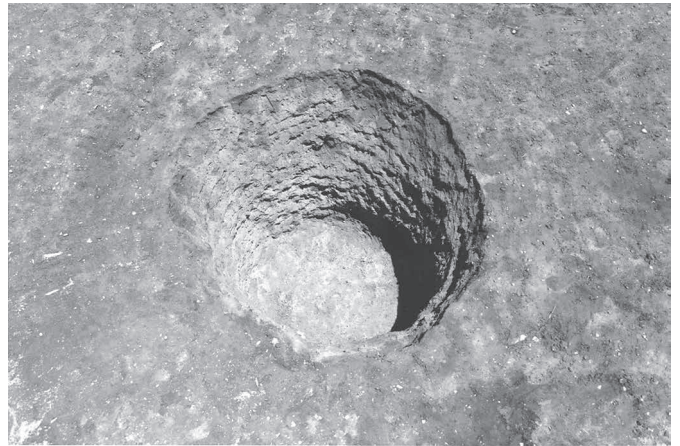
SB12 (北より)



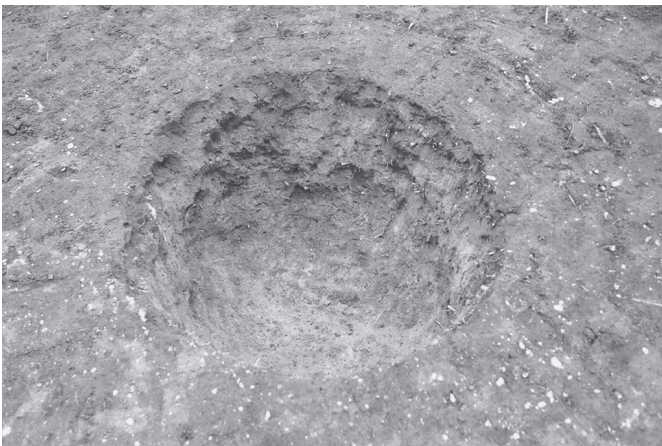
SB12 カマド (北より)



SB13 (北西より)



SK05 (北西より)



SK07 (北西より)



SK08 (南より)

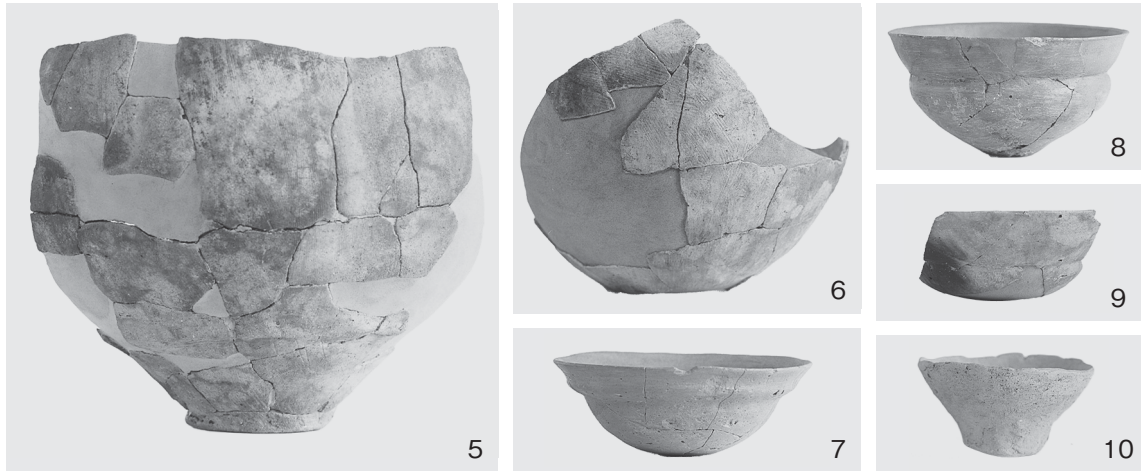
SB01

- 1. 11-1
- 2. 11-3
- 3. 11-4
- 4. 11-5
- 5. 11-10
- 6. 11-9



SB03

- 7. 12-3
- 8. 12-1
- 9. 12-2
- 10. 12-4



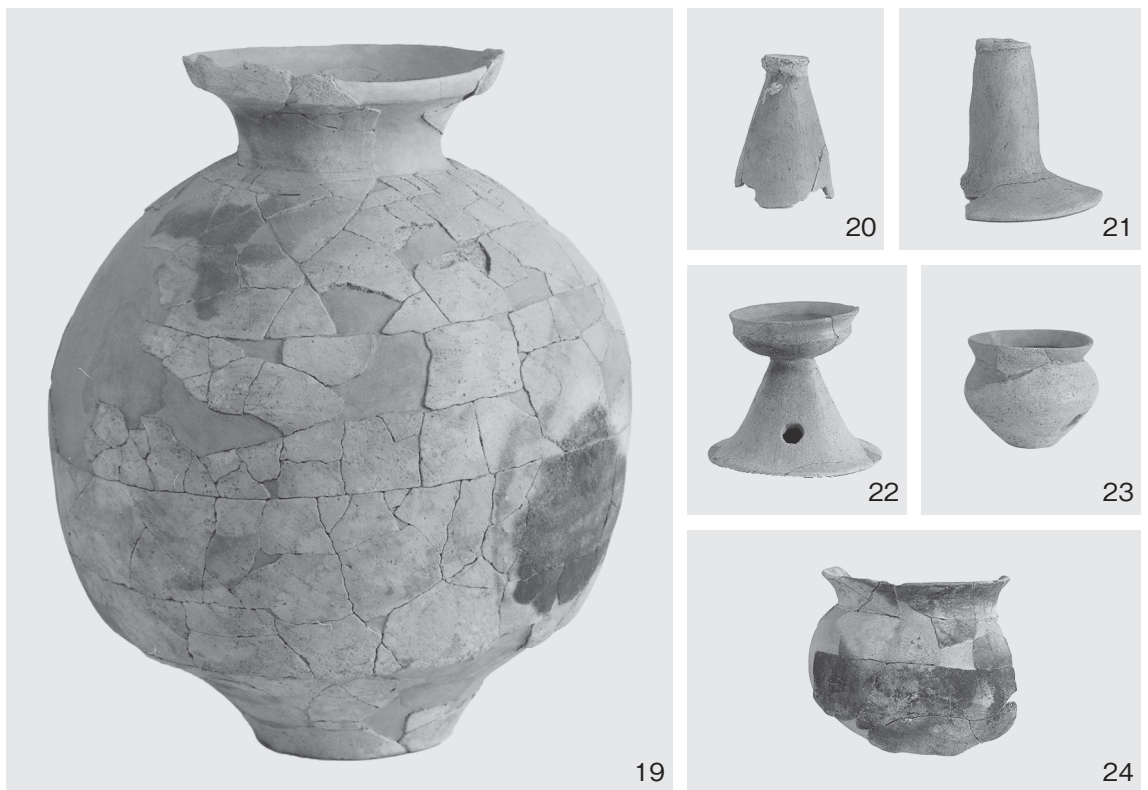
SB05

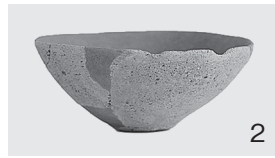
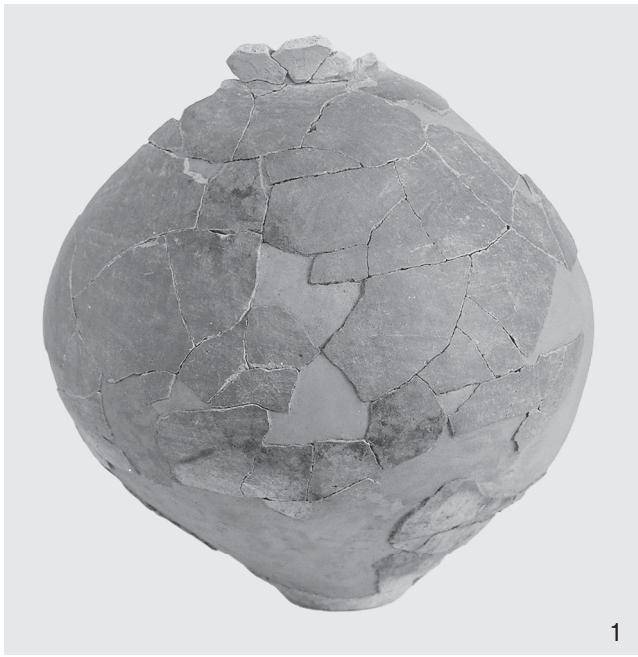
- 11. 14-1
- 12. 14-4
- 13. 14-5
- 14. 14-6
- 15. 14-8
- 16. 14-7
- 17. 14-10
- 18. 14-11
- 19. 14-13



SB06

- 20. 15-1
- 21. 15-2
- 22. 15-3
- 23. 15-4
- 24. 15-6





SB06

1. 15-8

SB07

2. 17-3

3. 17-6

4. 17-5

5. 17-1

6. 17-7

7. 17-8

SB09

8. 20-1

9. 20-2

10. 20-3

11. 20-5

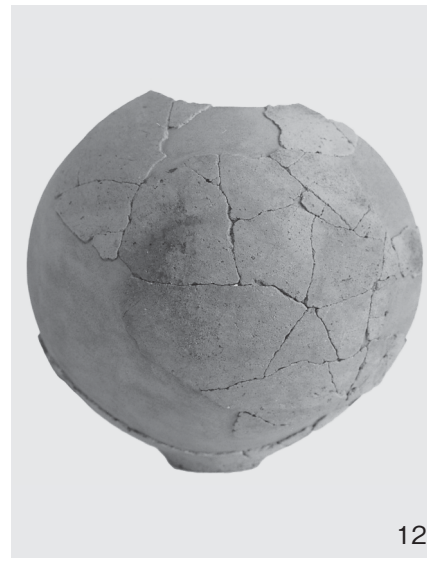
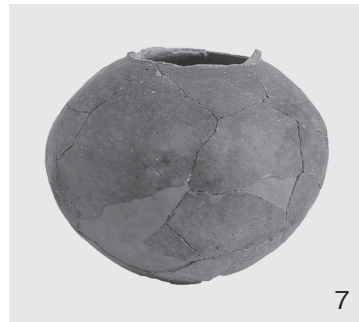
12. 20-6

13. 20-4

SB10

14. 21-1

15. 21-3



SB11

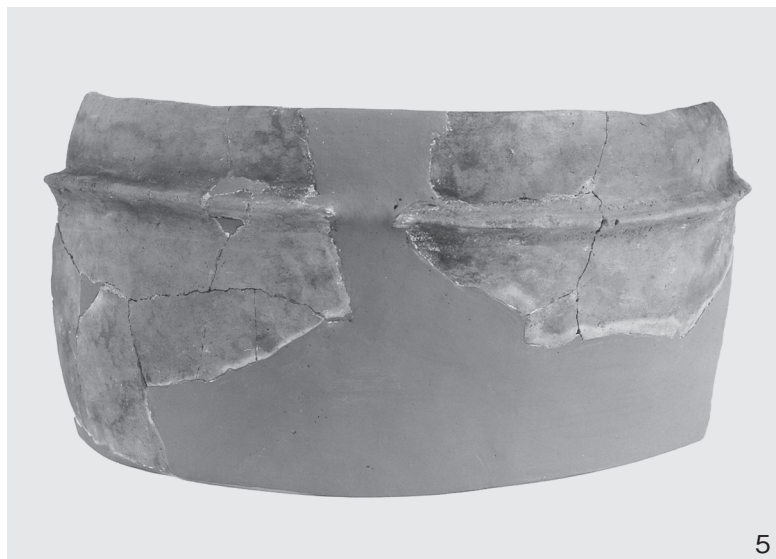
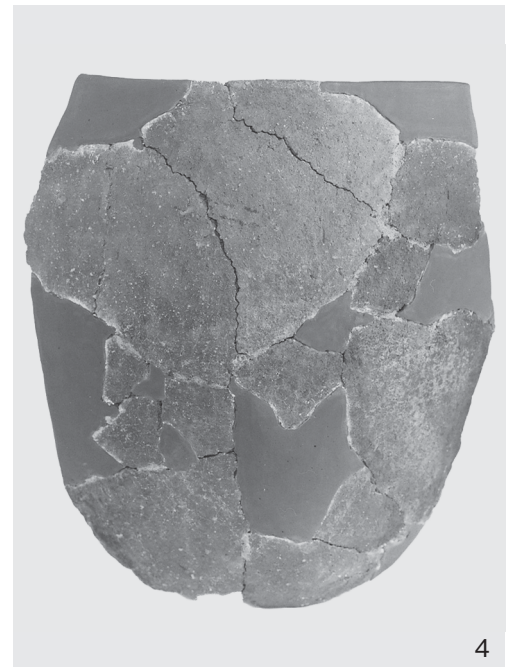
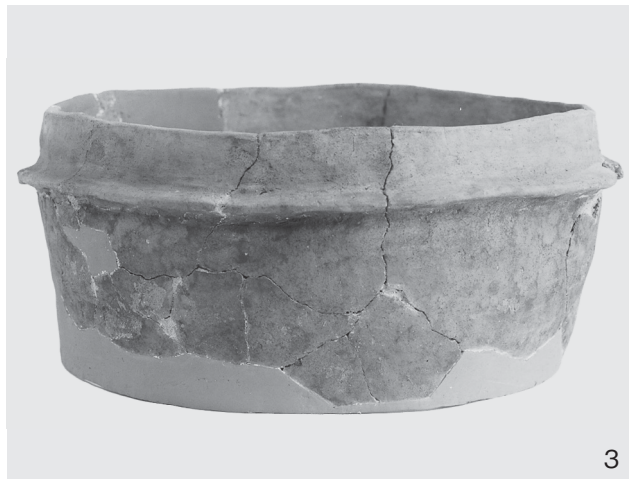
- 1. 25-1
- 2. 25-5
- 3. 25-3

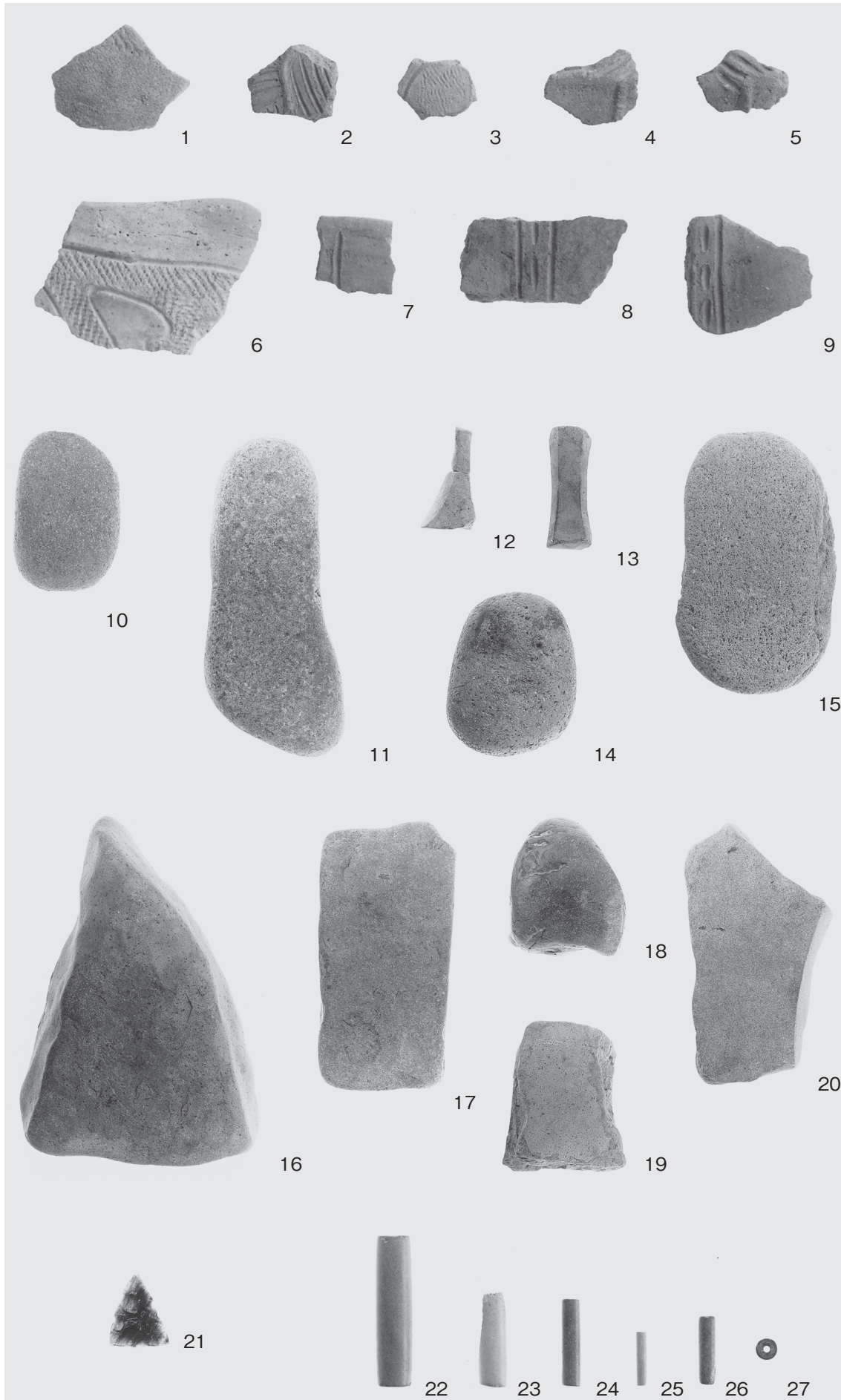
SB12

- 4. 27-4
- 5. 27-1
- 6. 27-5

遺構外

- 7. 30-12





SK12

1. 30-1

遺構外

2. 30-2

3. 30-3

4. 30-4

5. 30-5

6. 30-6

7. 30-7

8. 30-8

9. 30-9

SB01

10. 11-11

SB05

11. 14-19

SB06

12. 15-10

SB07

13. 17-12

14. 17-13

15. 17-14

16. 17-15

SB09

17. 20-9

18. 20-8

SB04

19. 23-2

遺構外

20. 30-15

21. 30-14

SB07

22. 17-11

23. 17-10

24. 17-9

SB05

25. 14-18

SB06

26. 15-9

SB05

27. 14-17

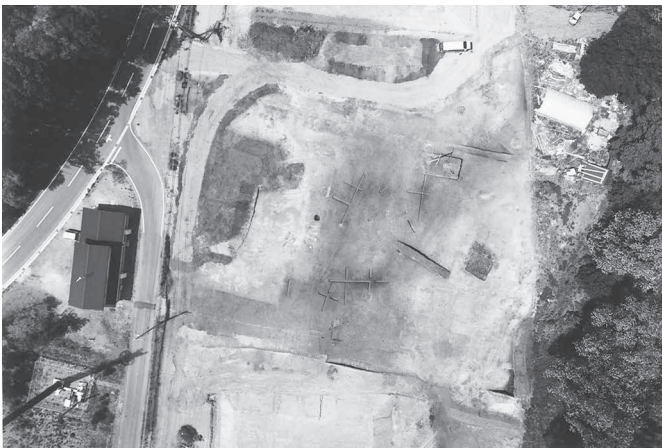




1区全景 (西より)



2区全景 (東より)



3区全景 (上空より)



4区全景 (東より)



5区全景 (東より)



6区全景 (南より)



7区全景 (上空より)



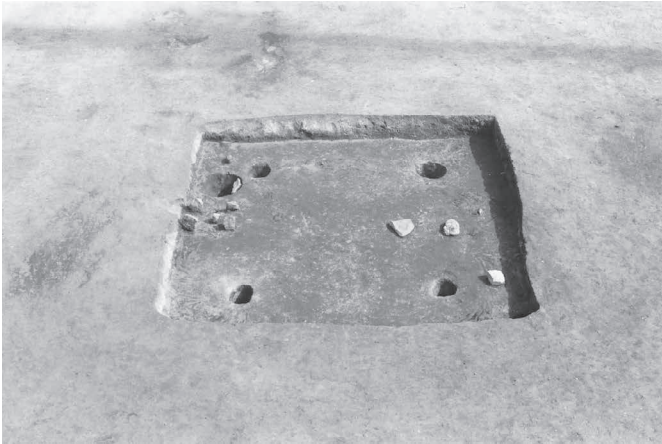
8区全景 (上空より)



SB1001 (南より)



SB1002 (北より)



SB2001 (西より)



SB2001 カマド (南より)



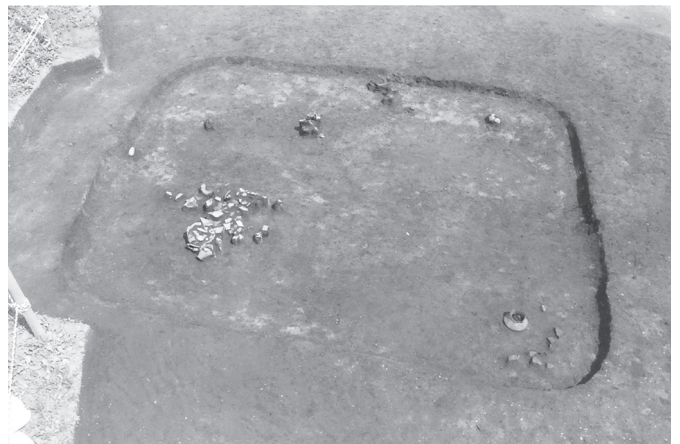
SB3001 (南より)



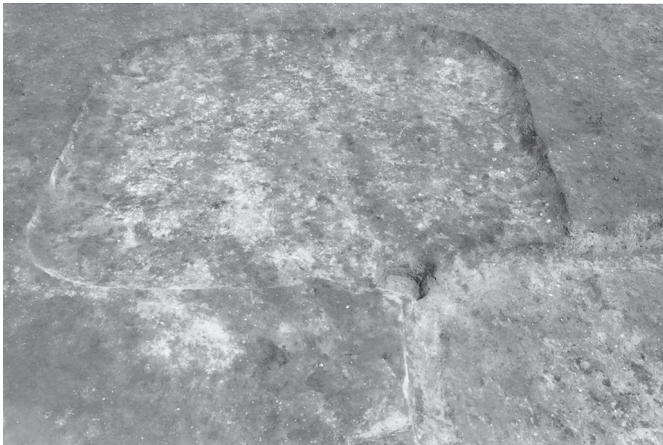
SB4001 (西より)



SB4002 (南より)



SB4002 遺物出土状況 (南より)



SB4003 (南より)



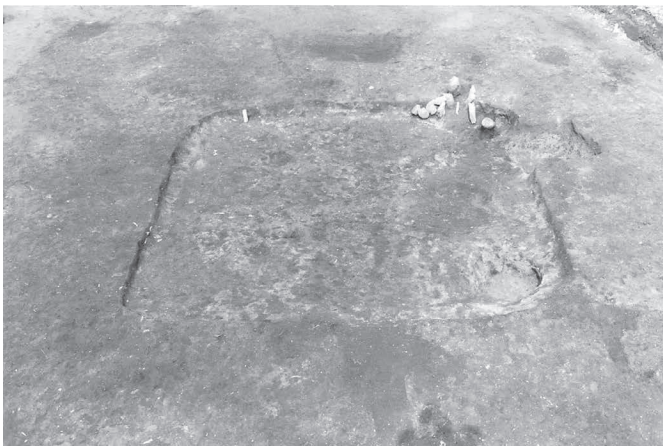
SB4005 (西より)



SB4005 カマド (西より)



SB4007 (西より)



SB5001 (西より)



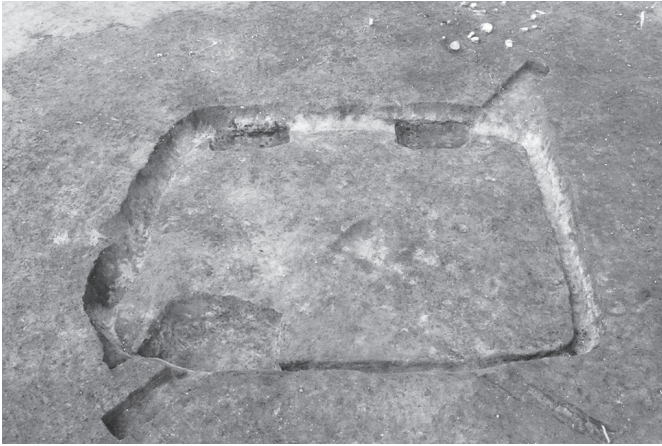
SB5001 カマド (西より)



SB5002 (北より)



SB5003 (北より)



SB5004 (東より)



SB5004 P1・P2 (北より)



SB5006 (西より)



SB5006 カマド (西より)



SB5008 (南より)



SB5008 カマド (西より)



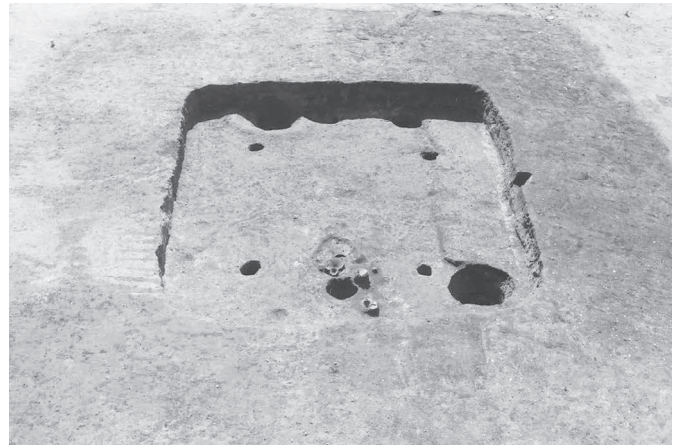
SB5009 (北東より)



SB5009 P7 遺物出土状況 (東より)



SB5010 (東より)



SB5011 (北より)



SB5012 (東より)



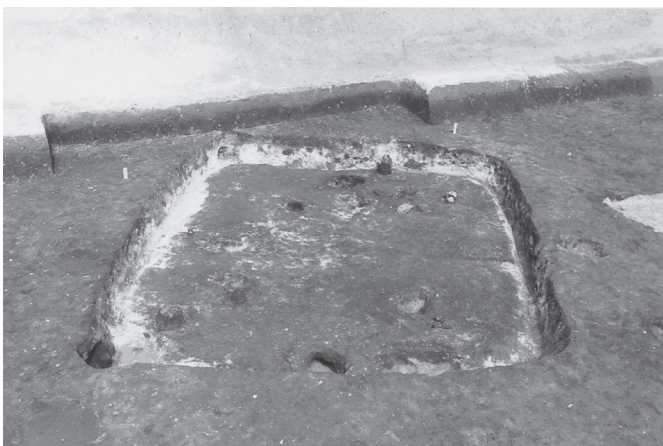
SB5012 カマド (東より)



SB5013 (西より)



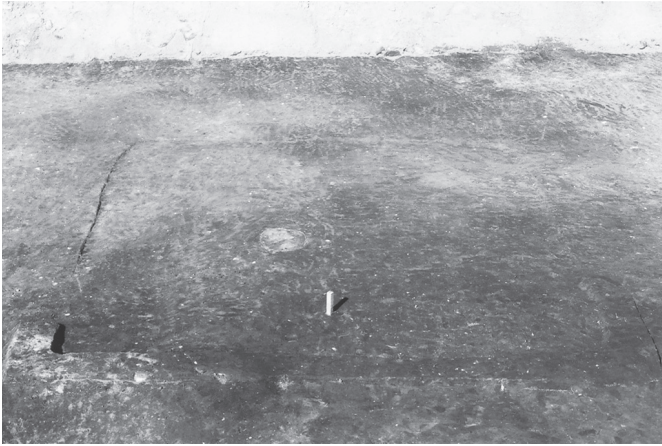
SB5013 カマド (北西より)



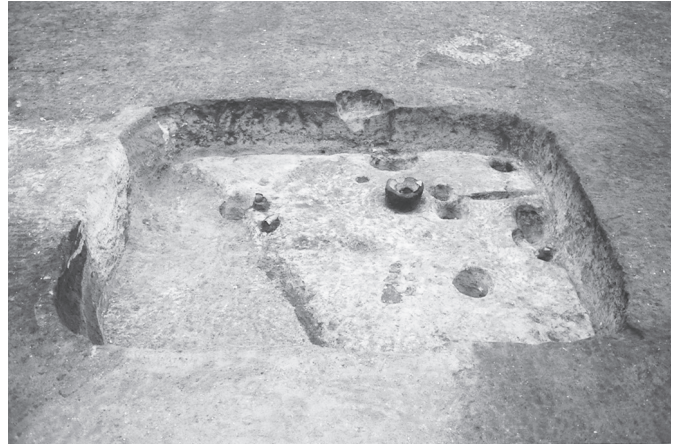
SB6001 (南より)



SB6002 (南より)



SB6003 (南より)



SB6004 (西より)



SB6005 (北より)



SB6005 炉 (南東より)



SB6006 (南より)



SB6007 (東より)



SB7001 (南より)



SB7002 (東より)



SB7003 (東より)



SB7003 遺物出土状況 (北より)



SB7004 (西より)



SB7005 (南より)



SB7005 遺物出土状況 (北より)



SB7006 (南より)



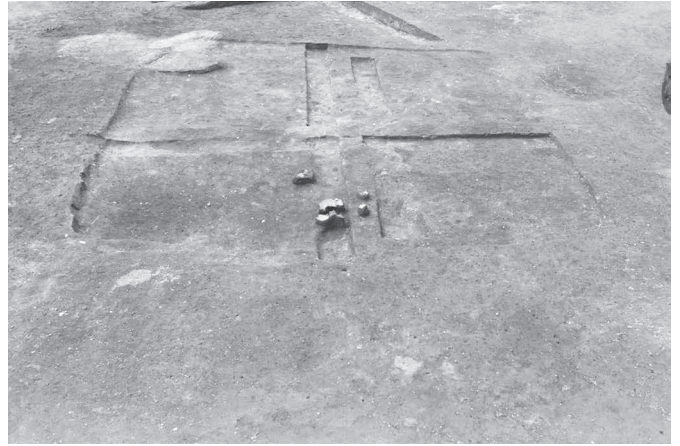
SB7007 (北より)



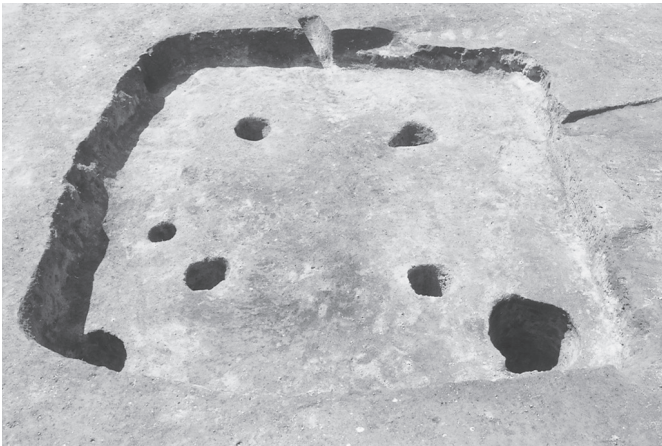
SB7008 (西より)



SB7009 (南より)



SB7010 (東より)



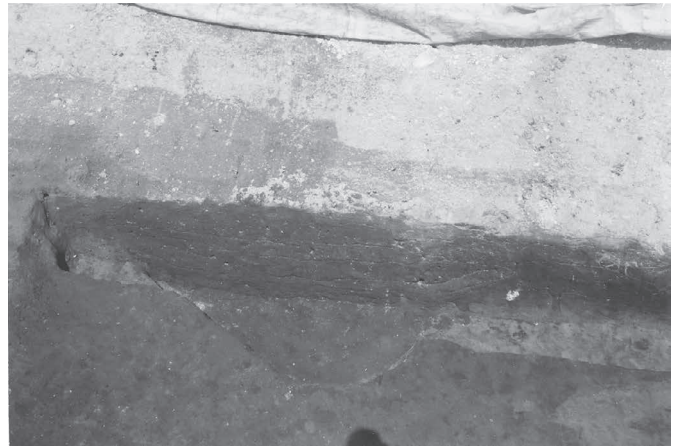
SB7011 (東より)



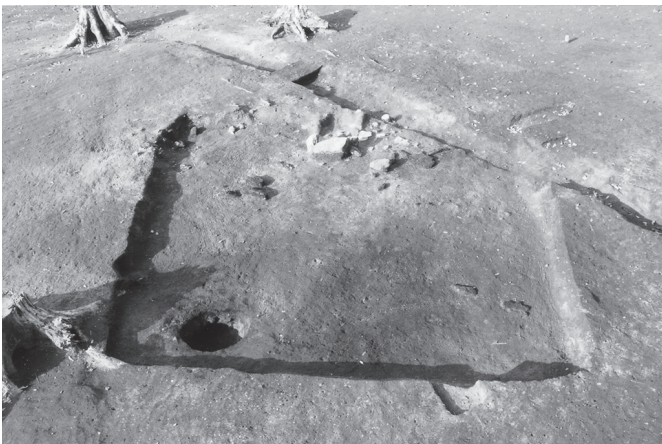
SB7012 (西より)



SB7013 (西より)



SB7015 (南より)



SB8001 (南より)



SB8002 (北より)





SB8003 (南より)



SB8003 カマド (南より)



SB8004 (西より)



SB8005 (西より)



SX5002 (南より)



SX5002 遺物出土状況 (東より)



SM4001・4002 (北より)



SM4001 (北より)



SM4002 (西より)



SM4002 遺物出土状況 (西より)



SM4002 遺物出土状況 (北より)



SK1003 (南より)



SK1003 断面 (西より)



SK1004 (南より)



SK1004 断面 (西より)



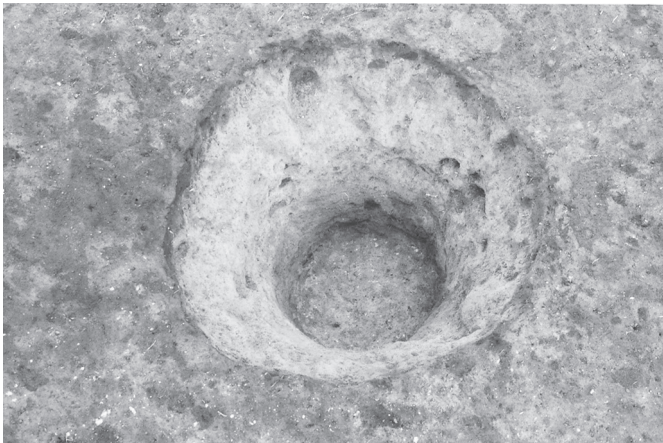
SK1005 (北より)



SK2001 (南より)



SK2001 断面 (東より)



SK2002 (西より)



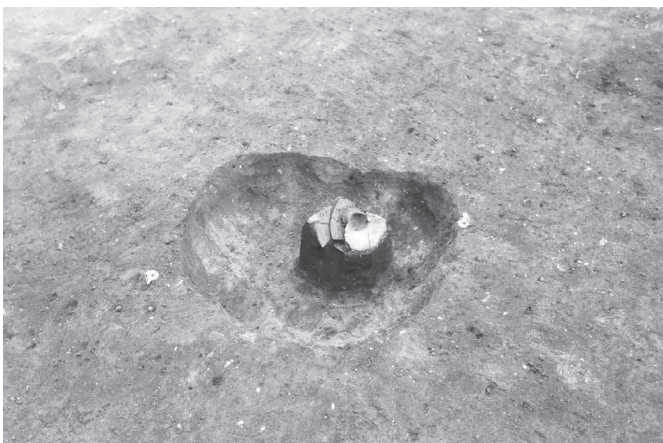
SK2003 (南より)



SK2003 断面 (西より)



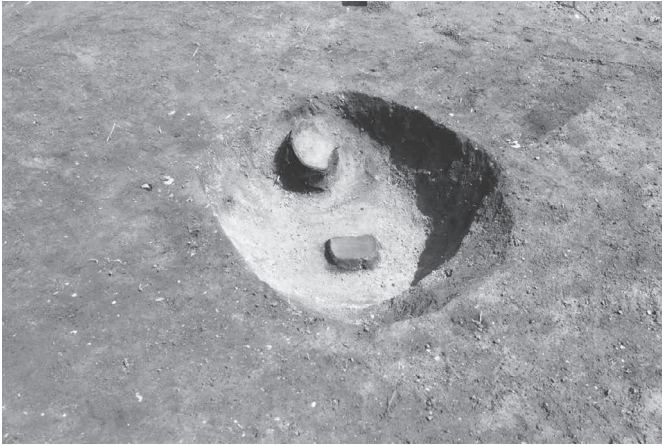
SK3001 (南より)



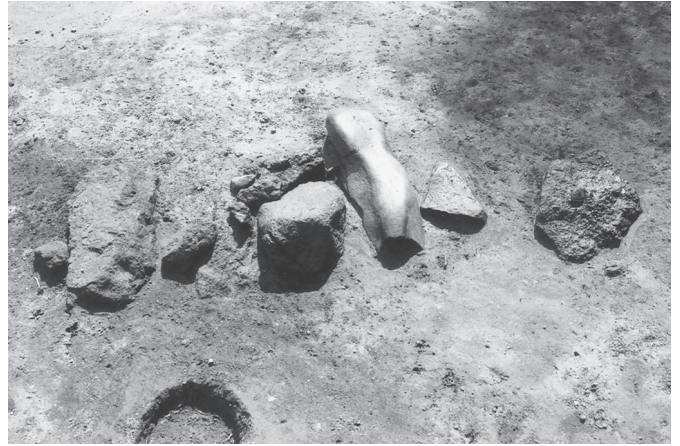
SK4001 (北西より)



SK4002 (南より)



SK4003 (南より)



SK4008 検出土状況 (西より)



SK4008 (南より)



SK6007 (南より)



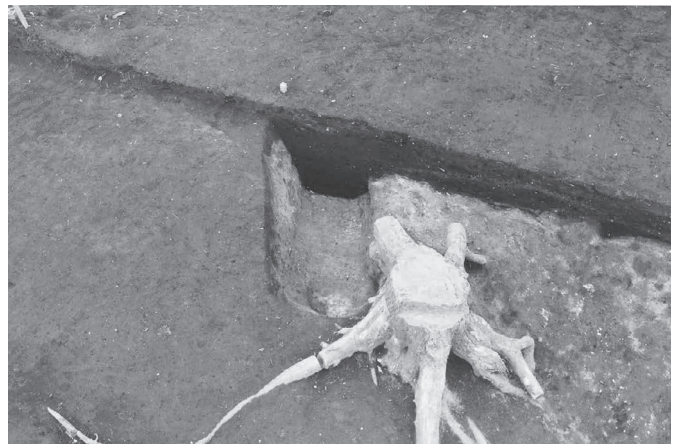
SK6008 (南より)



SK7002 (南より)



SK7005 (東より)



SK8005 (北より)



SD4001 (南より)



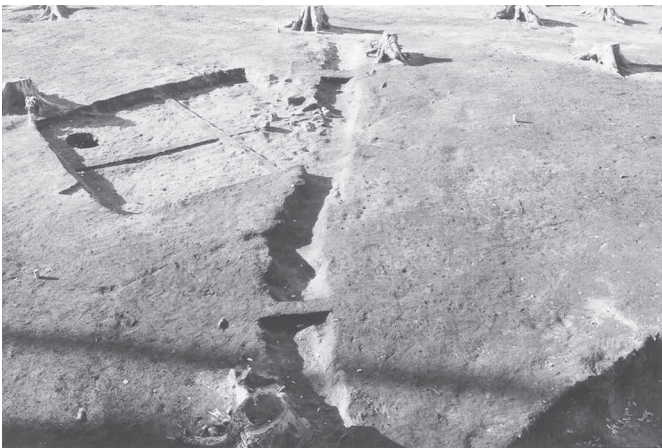
SD4001 断面 (北より)



SD8002 (南より)



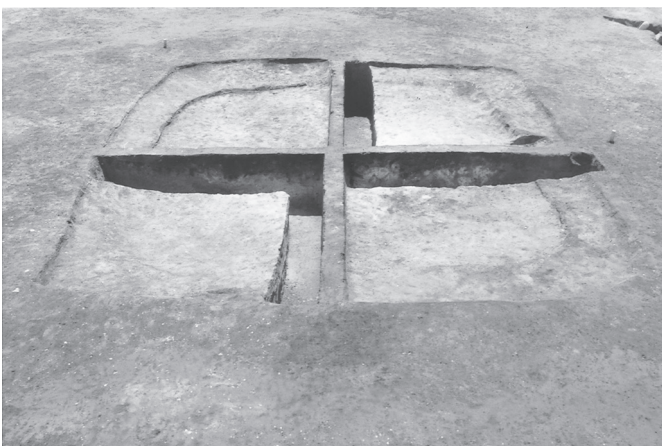
田切り崖面にみえる SD8002 (北より)



SD8003 (南より)



ST7001 (北より)



SX4001 (北より)



SX5001 (南より)



1



2



3



4



5

SB4002

1. 35-1

2. 35-2

3. 35-3

4. 35-4

5. 35-5

6. 35-6



6

SB4003

1. 36-1

2. 36-2

SB5003

3. 37-1

4. 37-2

5. 37-3

6. 37-5

7. 37-7

SB5004

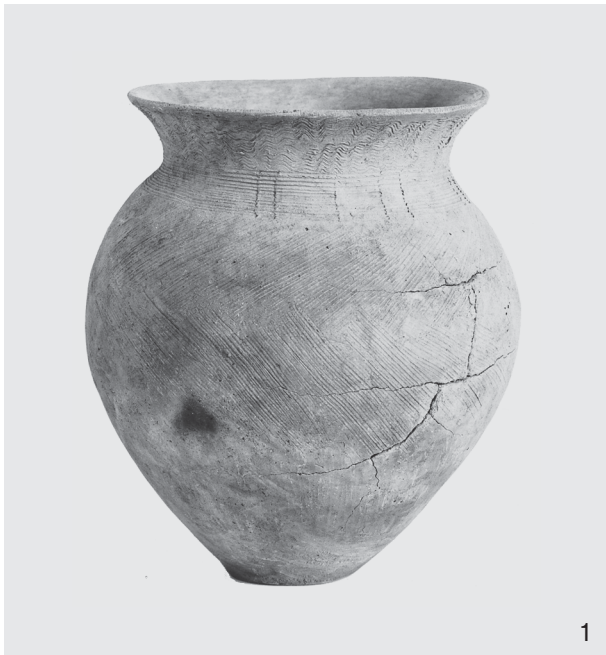
8. 38-1

SB5009

9. 40-1

10. 40-2





SB5009

1. 40-3

SB5010

2. 41-2

3. 41-4

SB5011

4. 43-3

5. 43-1

6. 43-4

7. 43-5

SB6004

8. 49-2

9. 49-4

10. 49-6

11. 49-7





SB6004

1. 49-5

SB6005

2. 50-2

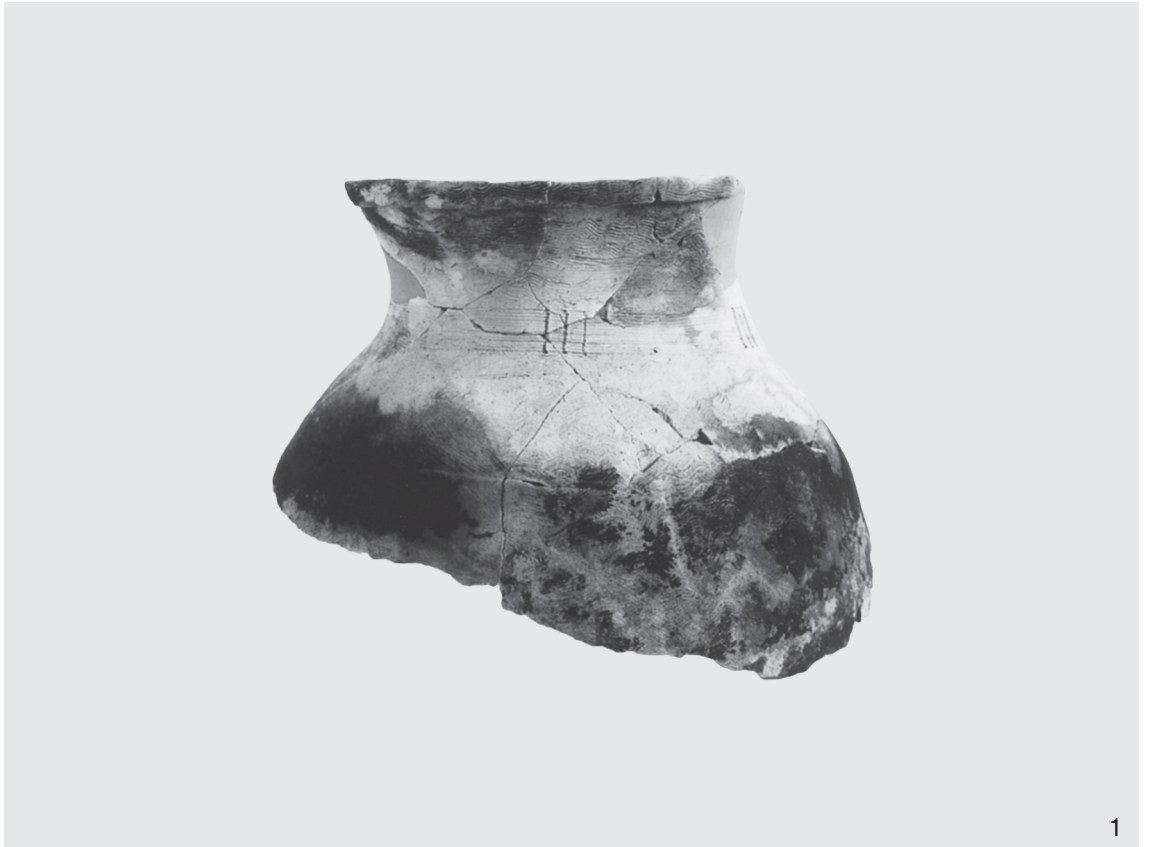
SB6007

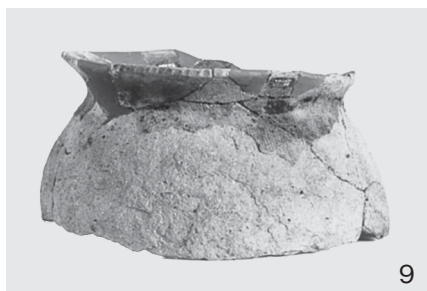
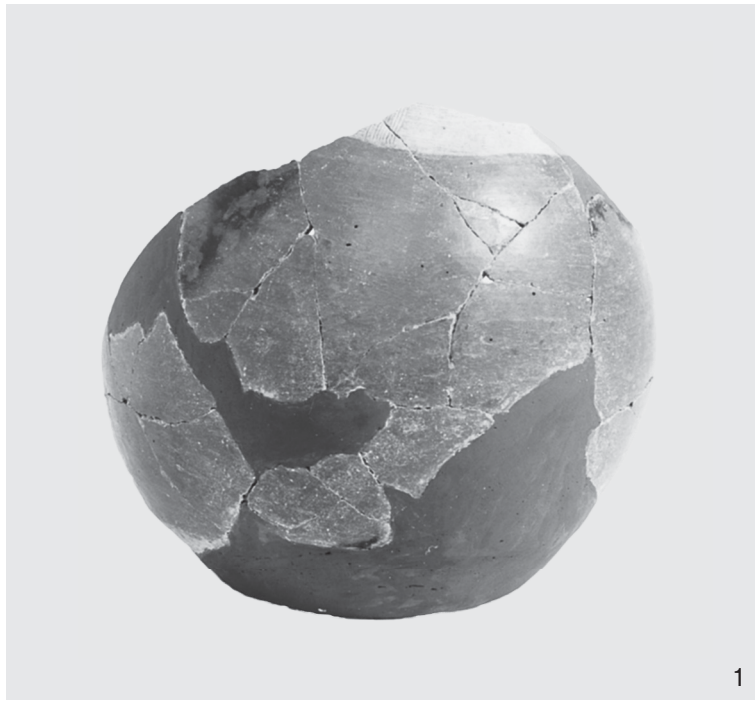
3. 53-2

4. 53-3

5. 53-4

6. 53-5





SB6007

1. 53-9

SB7001

2. 54-2

SB7003

3. 56-1

4. 56-2

5. 56-3

6. 56-6

7. 56-7

8. 56-8

9. 56-11

10. 56-13

11. 56-14

SB7003

1. 56-12

SB7004

2. 57-2

SB7005

3. 58-1

4. 58-2

5. 58-4

6. 58-5

SB7007

7. 61-3

8. 61-9

9. 61-4

10. 61-8

SB7010

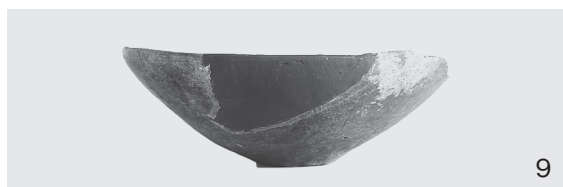
11. 64-1

SB7011

12. 65-8

13. 65-10

14. 65-15

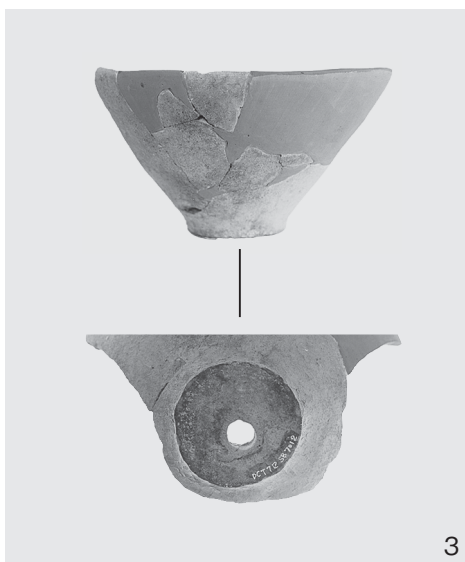




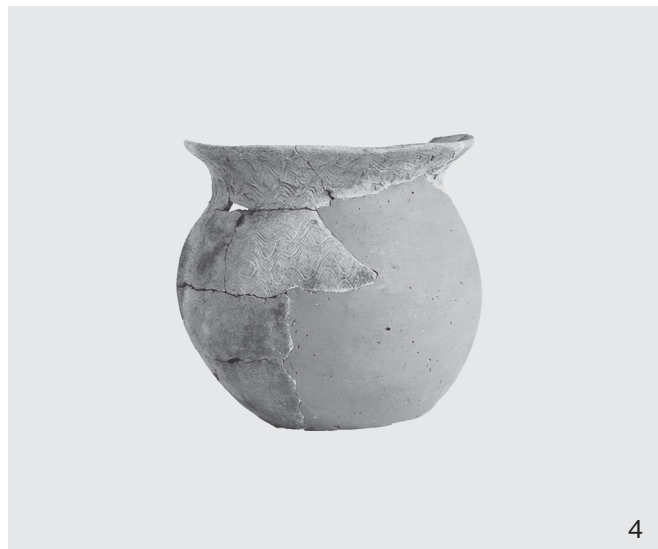
1



2



3



4



5



6



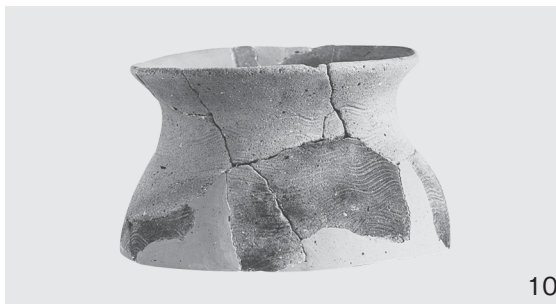
7



8



9



10



11



12



13

SB7012

1. 67-1

2. 67-2

3. 67-4

SB7013

4. 68-3

5. 68-5

SB8004

6. 70-1

7. 70-2

8. 70-3

9. 70-4

10. 70-5

SB8005

11. 72-1

12. 72-2

13. 72-3

SB8005

1. 72-4

2. 72-5

3. 72-6

4. 72-7

5. 72-8

6. 72-9

SX5002

7. 集合写真





SX5002

- 1. 74-1
- 2. 74-2
- 3. 74-4
- 4. 74-5
- 5. 74-6



SB2001

1. 集合写真

2. 76-1

3. 76-2

4. 76-3

5. 76-5

6. 76-6

7. 76-9

8. 76-10

9. 76-11

10. 76-12

11. 76-14

12. 76-18





SB2001

1. 76-17

SB3001

2. 77-4

3. 77-1

SB8001

4. 79-1

5. 79-3





SB8001

- 1. 79-4
- 2. 79-6
- 3. 79-7

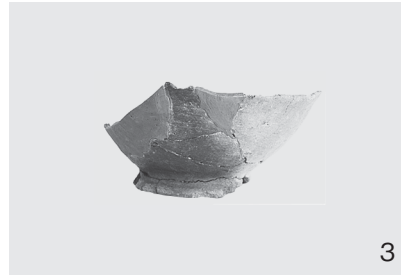
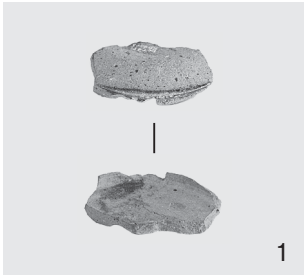
SB8003

- 4. 80-1
- 5. 80-2
- 6. 80-3
- 7. 80-5
- 8. 80-7
- 9. 80-10
- 10. 80-8

SB4005

- 11. 87-1
- 12. 87-2
- 13. 87-3
- 14. 87-4





SB4005

1. 87-10

SB4007

2. 89-2

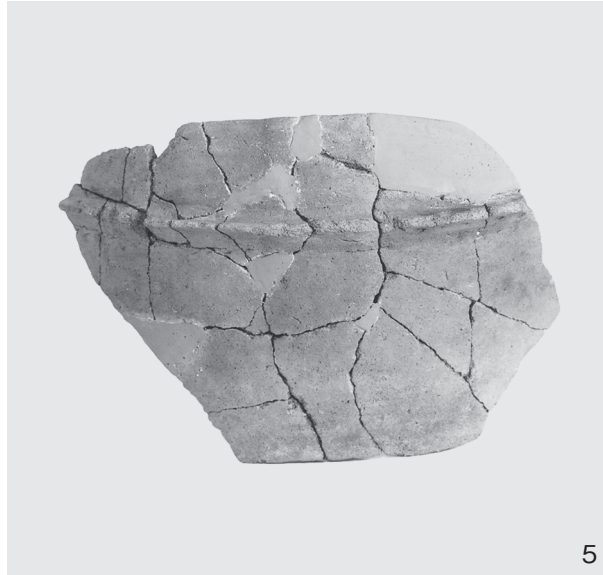
SB5001

3. 91-1

4. 91-2

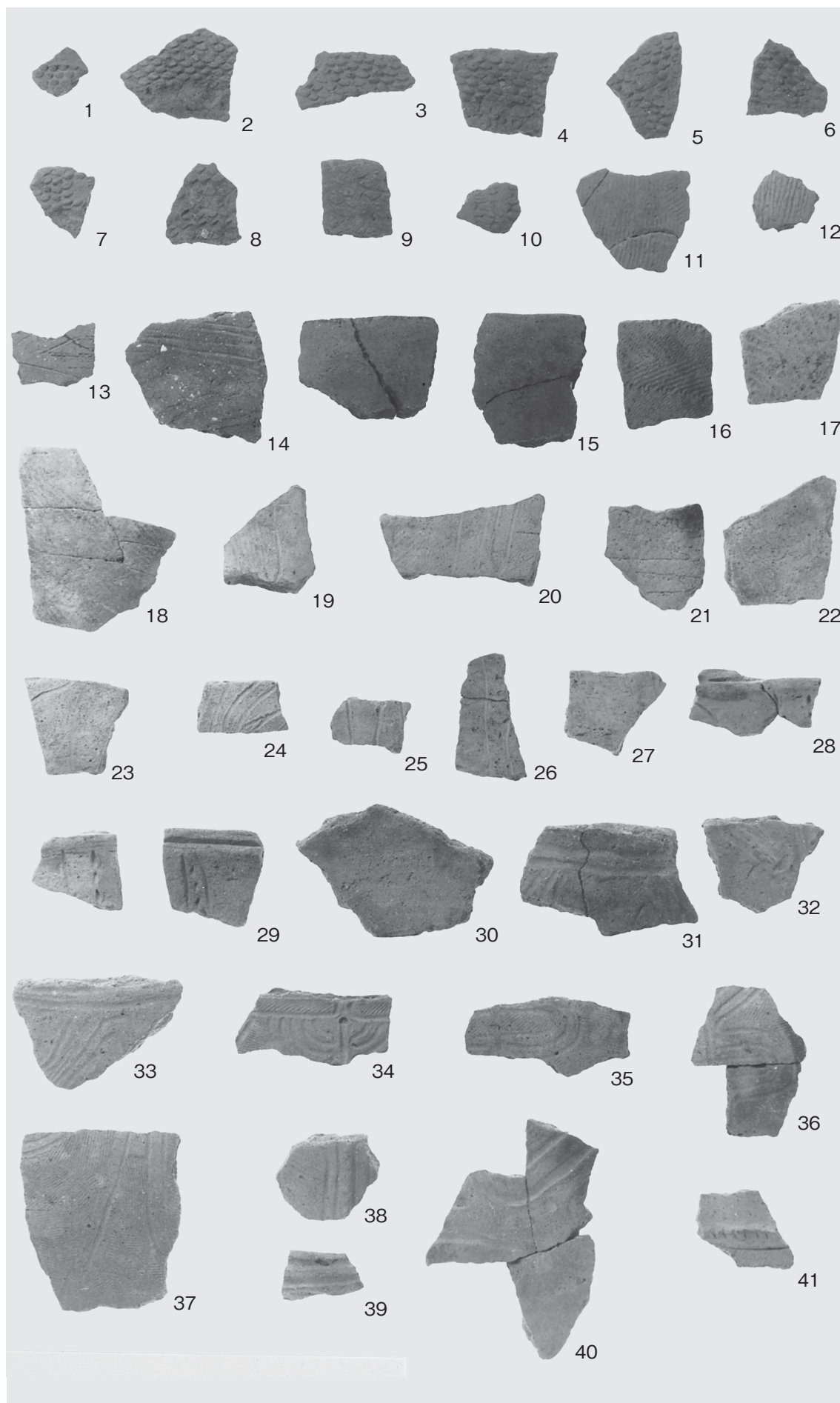
5. 91-3

6. 91-4



- SB5006
  - 1. 93-3
  - 2. 93-1
- SB5008
  - 3. 94-1
  - 4. 94-4
  - 5. 94-5
  - 6. 94-7
- SB5013
  - 7. 97-1
- SB7002
  - 8. 98-2
  - 9. 98-1
- SK4001
  - 10. 109-4
- SK1005
  - 11. 109-1
- SK3001
  - 12. 109-2
- SK5001
  - 13. 109-3
- SK4002
  - 14. 109-7



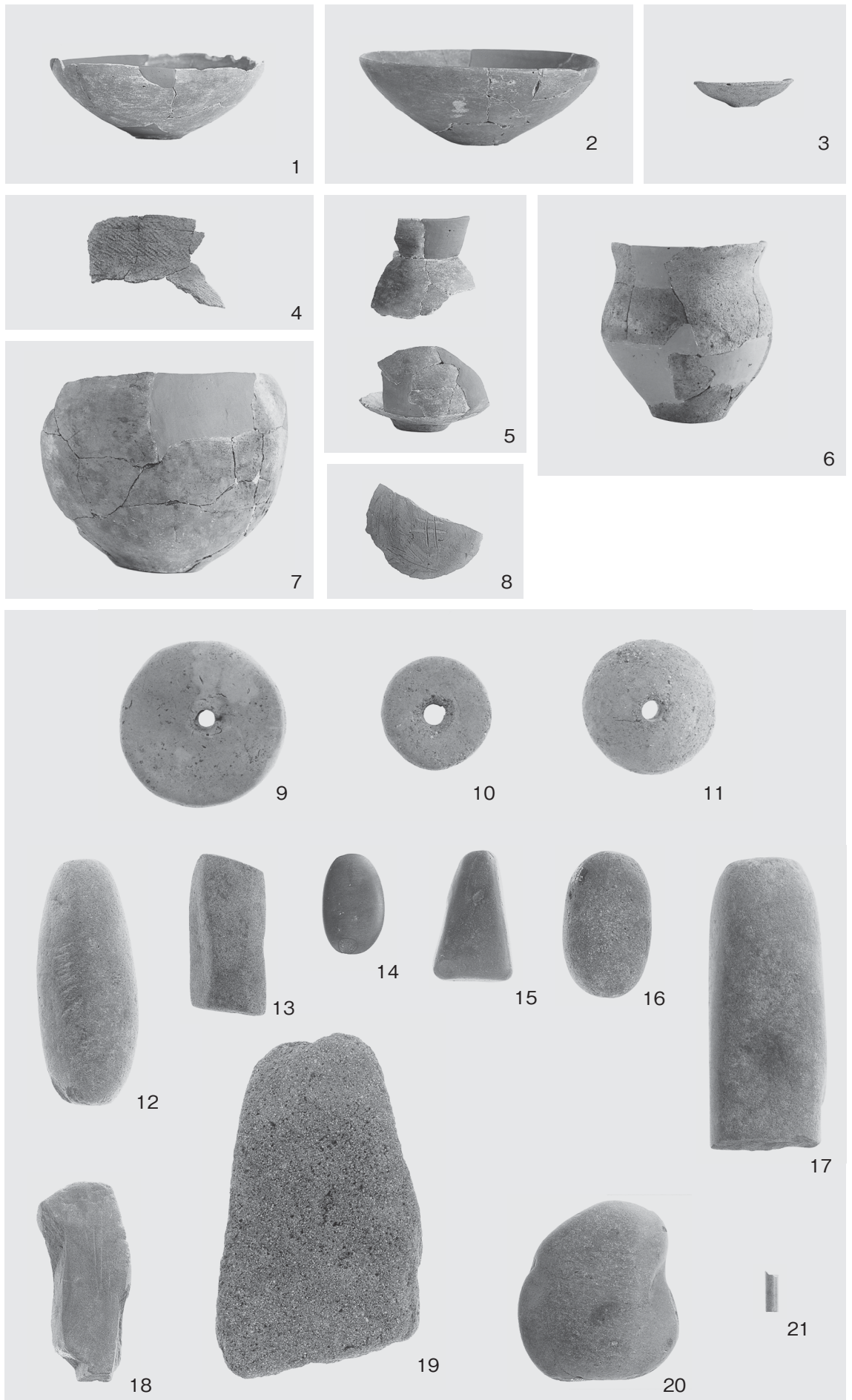


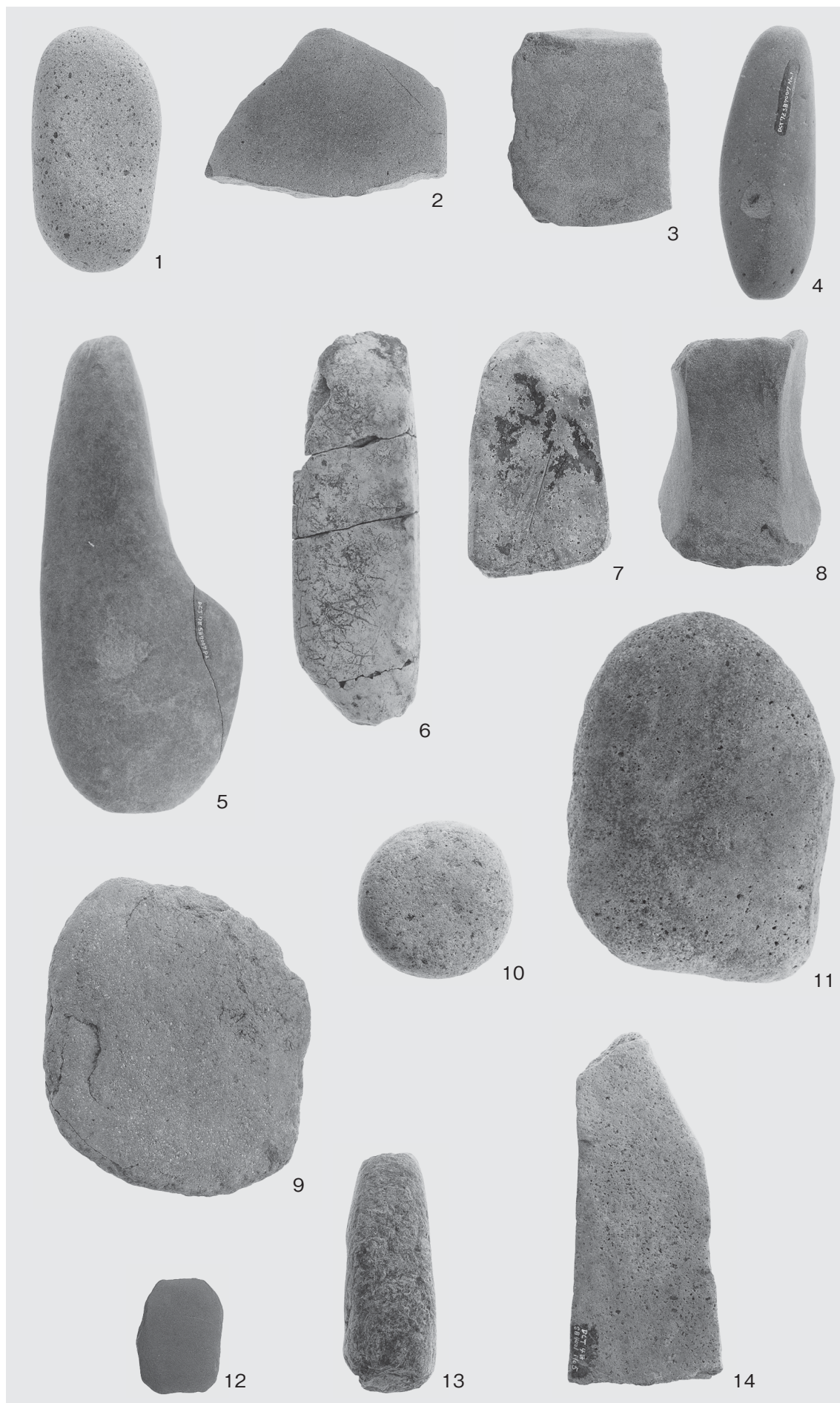
遺構外(1)

1. 115-1
2. 115-2
3. 115-3
4. 115-4
5. 115-5
6. 115-6
7. 115-7
8. 115-8
9. 115-9
10. 115-10
11. 115-11
12. 115-12
13. 115-13
14. 115-14
15. 115-15
16. 115-16
17. 115-17
18. 115-18
19. 115-19
20. 115-20
21. 115-21
22. 115-22
23. 115-23
24. 115-24
25. 115-25
26. 115-26
27. 115-27
28. 115-28
29. 115-29
30. 115-30
31. 115-31
32. 115-32
33. 115-33
34. 115-34
35. 115-35
36. 115-36
37. 115-37
38. 115-38
39. 115-39
40. 115-40
41. 115-41

遺構外(2)

- 1. 116-2
- 2. 116-4
- 3. 116-6
- 4. 116-9
- 5. 116-11
- 6. 116-7
- 7. 116-13
- 8. 116-16
- SB6001
- 9. 45-6
- SB6005
- 10. 50-3
- 11. 50-4
- SB4002
- 12. 35-7
- SB5003
- 13. 37-9
- SB5011
- 14. 43-6
- SB6004
- 15. 49-9
- 16. 49-12
- 17. 49-13
- SB7003
- 18. 56-16
- 19. 56-17
- SB6007
- 20. 53-10
- SB6006
- 21. 51-2





SB7004

1. 57-4

2. 57-5

SB7005

3. 58-8

SB7007

4. 61-11

5. 61-12

SB7012

6. 67-8

7. 67-7

8. 67-9

SB8004

9. 70-8

SB2001

10. 76-21

11. 76-22

12. 76-20

SB8001

13. 79-8

SB4001

14. 85-5

SB4005

1. 87-14

2. 87-13

SB5001

3. 91-6

SB5013

4. 97-5

遺構外(3)

5. 117-1

6. 117-2

7. 117-3

8. 117-4

9. 117-5

10. 117-6

11. 117-7

12. 117-8

13. 117-10

14. 117-11

15. 117-9

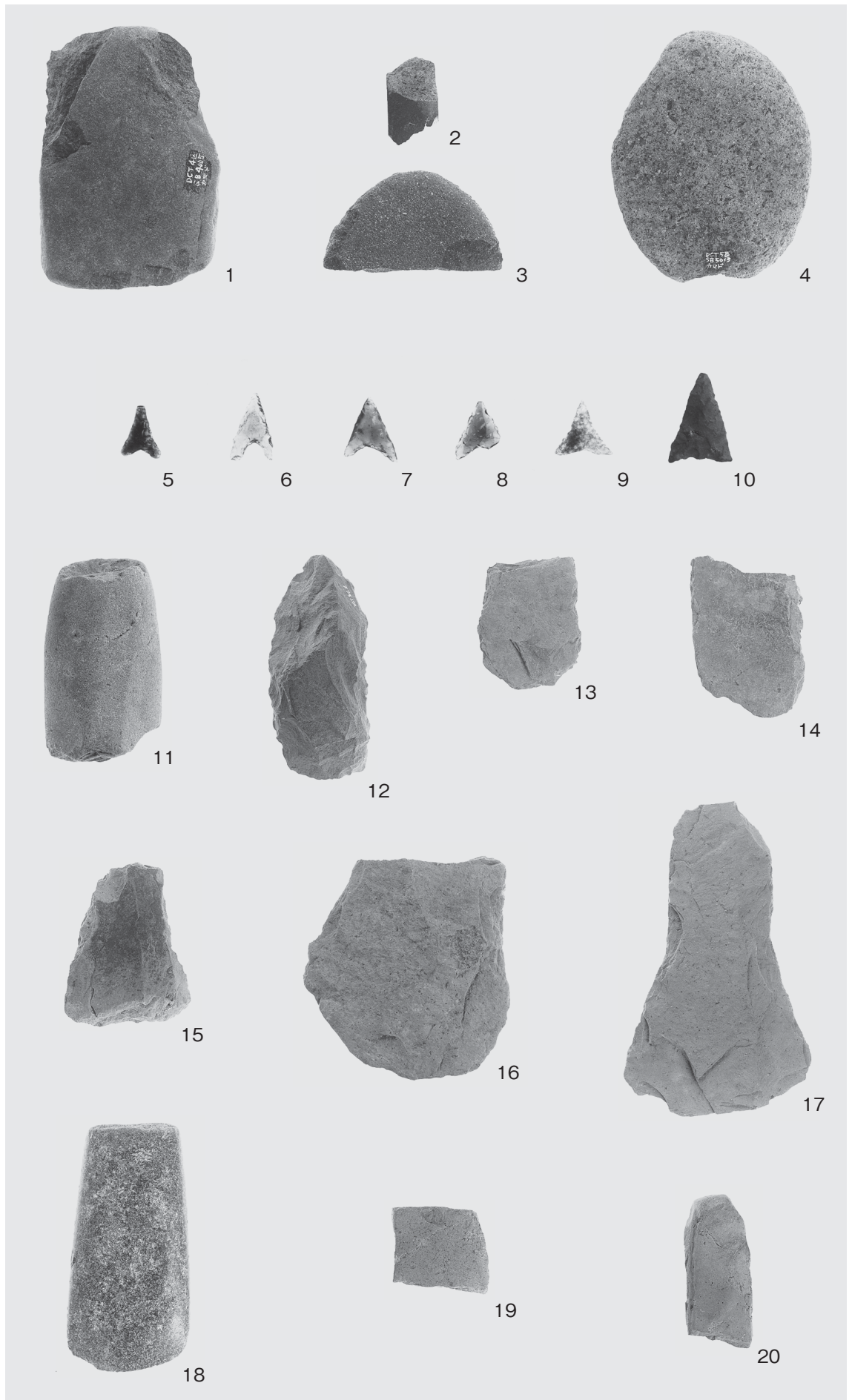
16. 117-13

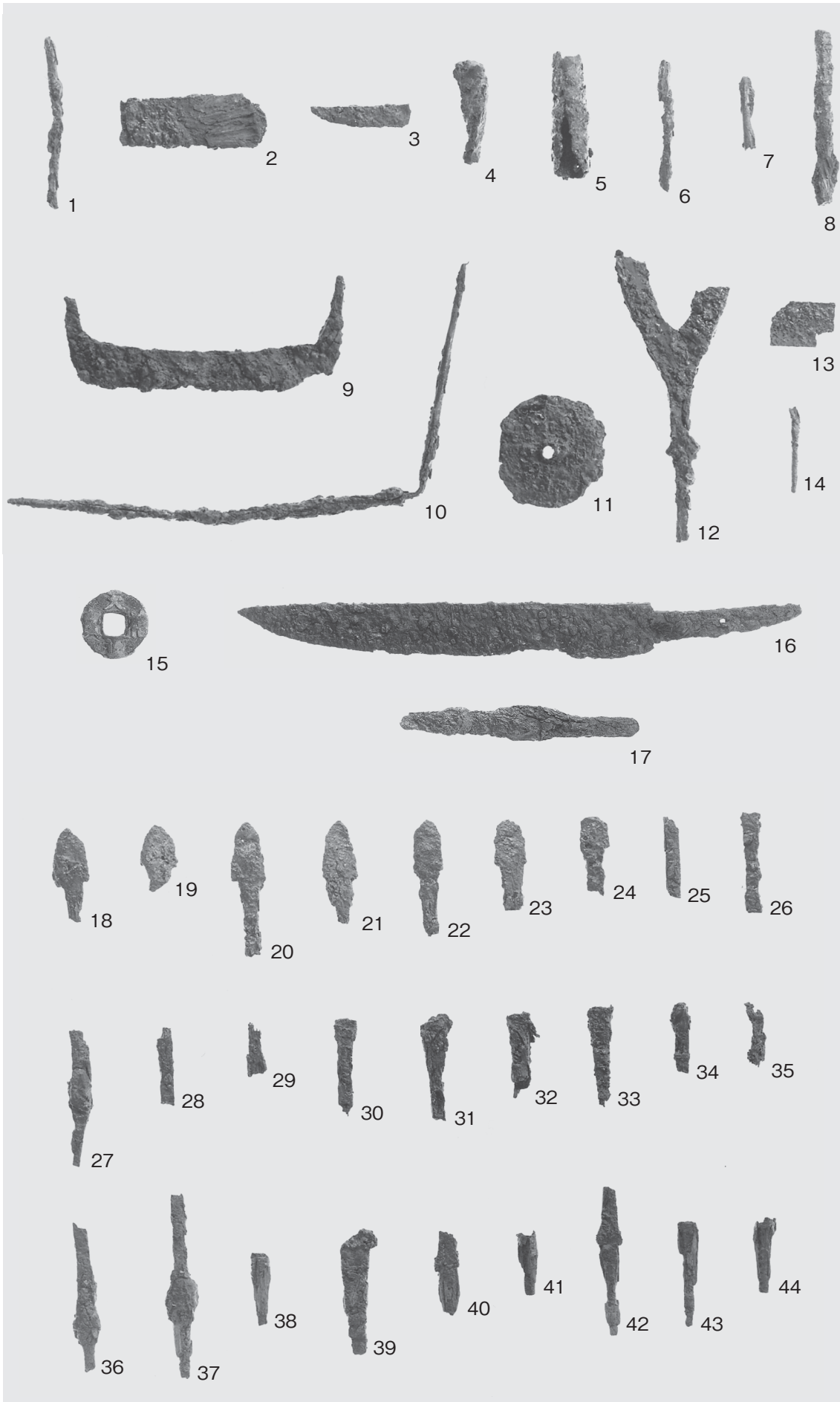
17. 117-12

18. 117-14

19. 117-16

20. 117-15



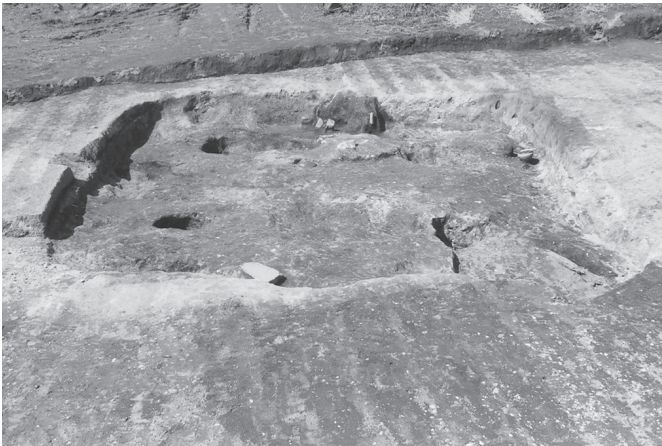


- SB7004
- 1. 57-6
- SB5009
- 2. 40-4
- SB2001
- 3. 42-24
- SB8001
- 4. 79-9
- SB5001
- 5. 91-7
- 6. 91-8
- 7. 91-9
- 8. 91-10
- SB4005
- 9. 87-15
- 10. 87-16
- SB4007
- 11. 89-5
- SB5008
- 12. 94-10
- SB1002
- 13. 83-3
- SB4001
- 14. 85-6
- SB5006
- 15. 93-5
- SK4008
- 16. 109-10
- SM4002
- 17. 103-28
- 18. 103-1
- 19. 103-2
- 20. 103-3
- 21. 103-4
- 22. 103-5
- 23. 103-6
- 24. 103-7
- 25. 103-8
- 26. 103-9
- 27. 103-10
- 28. 103-11
- 29. 103-12
- 30. 103-13
- 31. 103-14
- 32. 103-15
- 33. 103-16
- 34. 103-17
- 35. 103-18
- 36. 103-19
- 37. 103-20
- 38. 103-21
- 39. 103-22
- 40. 103-23
- 41. 103-24
- 42. 103-25
- 43. 103-26
- 44. 103-27





全景（南東より）



SB01（南より）



SB01 カマド（南より）



SB01 カマド 遺物出土状況（西より）



SB01 遺物出土状況（南より）



SD01 (北より)



SD02 (東より)



SD03 (東より)



SD02・03 (東より)



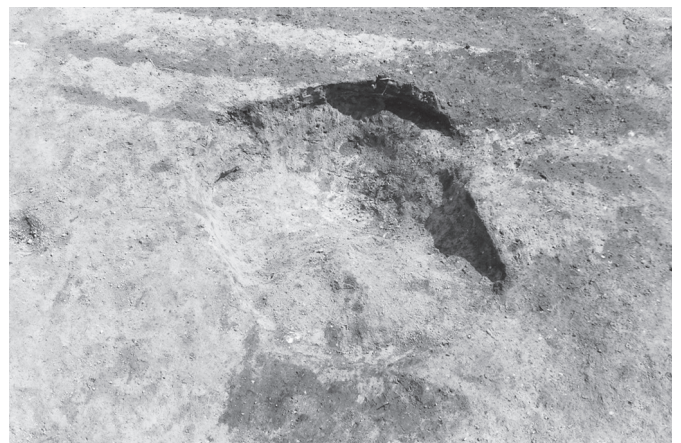
SD04 (西より)



SK25 (西より)



SK26 (西より)



SK27 (西より)

SB01

1. 集合写真
2. 123-1
3. 123-2
4. 123-4
5. 123-5
6. 123-6
7. 123-12



1



2



3



4



5



6



7



SB01

1. 123-13

2. 123-14

3. 123-15

4. 123-16

5. 123-17



# 報告書抄録

ふりがな	かまたはらいせき ちかついせきぐん わだはらいせきぐん							
書名	鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群							
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 -小諸市内・佐久市内 1 -							
シリーズ名	長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	103							
著作者名	廣瀬 昭弘 曳地 隆元							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 Tel.026-293-5926							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かまたはらいせき 鎌田原遺跡	ながのけんこもろし 長野県小諸市 みかげしんてん 御影新田字鎌 田原214ほか	20208	235	36° 17' 43" (世界測地系) 36° 17' 31" (日本測地系)	138° 28' 29" (世界測地系) 138° 28' 40" (日本測地系)	20011203～ 20011221 20020523～ 20021205 20090930～ 20091030	14,910	中部横断自動車 道建設に伴う記 録保存調査
ちかついせきぐん 近津遺跡群	ながのけんさくし 長野県佐久市 ながとろ 長土呂字下宮 原1061ほか	20217	6	36° 17' 30" (世界測地系) 36° 17' 18" (日本測地系)	138° 28' 05" (世界測地系) 138° 28' 16" (日本測地系)	20070831～ 20071220 20080522～ 20081222 20090406～ 20091221	38,300	中部横断自動車 道建設に伴う記 録保存調査
わだはらいせきぐん 和田原遺跡群	ながのけんこもろし 長野県小諸市 わだ 和田字権現堂 288ほか	20208	230	36° 17' 15" (世界測地系) 36° 17' 04" (日本測地系)	138° 27' 30" (世界測地系) 138° 27' 42" (日本測地系)	20060821～ 20060921	1,935	中部横断自動車 道建設に伴う記 録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鎌田原遺跡	集落	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡13 土坑12	土師器 磨石、砥石 管玉、白玉				
近津遺跡群	集落 墓	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡47 円形周溝墓2 土坑37、焼土跡8 溝跡3	土師器 磨石、敲石、砥石 管玉 鉄製品(鉄鏃、紡錘車)、銭貨		円形周溝墓から鉄鏃が出土。 平安時代の墓坑から人骨・ 刀子が出土。		
和田原遺跡群	集落	奈良時代	竪穴住居跡1 土坑3 溝跡4	土師器、須恵器 磨石				
要約	<p>浅間山麓の佐久平北部では、厚く堆積した軽石流により形成された台地を、河川の浸食により深い谷が刻む「田切り地形」と呼ばれる独特の地形がみられる。本書掲載の3遺跡はこうした田切りの一つである湧玉川の田切り谷に面した台地縁辺部に立地する。</p> <p>鎌田原遺跡では、古墳時代前期と平安時代後期の集落が検出された。古墳時代前期の集落は小規模で、竪穴住居跡が散在する。出土土器は弥生時代の箱清水式系譜の土器が消失し、新たに小型丸底土器や柱状脚高杯を組成し、近津遺跡群より新しい様相を示す。平安時代後期の集落は、西側に隣接する近津遺跡群の該期集落と一体のもので、集落の東端部といえる。</p> <p>近津遺跡群でも、古墳時代前期と平安時代の集落が検出された。古墳時代前期集落は、高位平坦面・低位平坦面・緩斜面といった地形面ごとにまとまる。出土土器は箱清水式系譜の土器を主体に小型器台などを組成し、古墳時代前半の様相を示し、鎌田原遺跡の集落に先行する。両遺跡の調査で古墳時代前期集落が時期により占地を変化させている状況が明らかにされた。平安時代の集落は、11世紀後半から12世紀前半にかけての一時期の集落で、住居構造等が類似した竪穴住居跡が散在している。</p> <p>和田原遺跡群では、奈良時代の竪穴住居跡1軒が検出された。遺跡内でも当該期の遺構は少なく、古墳時代から中世にかけての遺跡の内容に新たな所見が得られた。</p>							

平成25 (2013) 年 3 月 22 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 103

**鎌田原遺跡 近津遺跡群 和田原遺跡群**

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

－小諸市内・佐久市内 1－

発行者 国土交通省 関東地方整備局  
(財)長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 西沢印刷株式会社  
〒380-0904 長野県長野市七瀬中町1048  
Tel 026-226-6071 Fax 026-226-6049